大正三年四月十七日印刷
大正三年四月二十日發行

有朋堂文庫
新編水滸畫傳三
（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

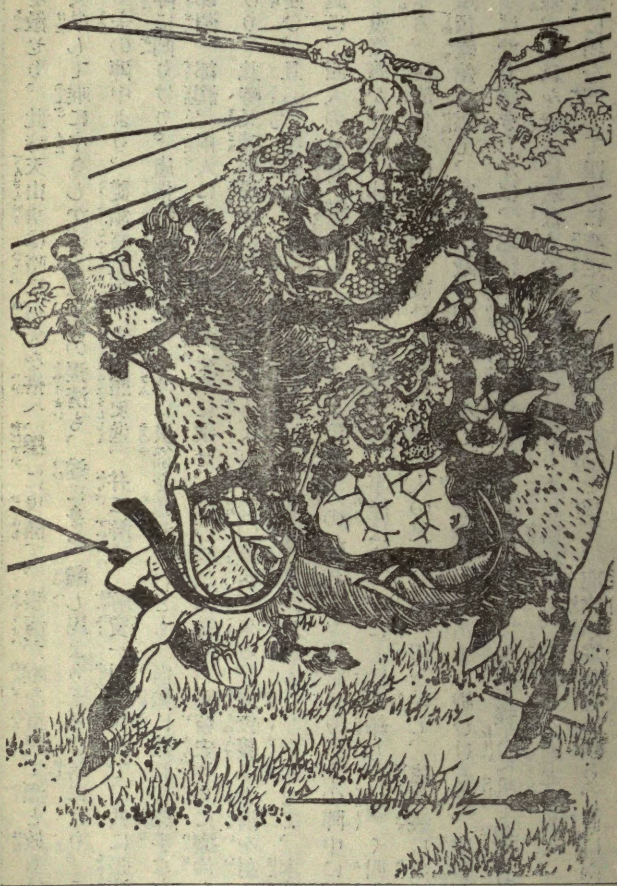
印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

たる故、此度親方打負たるは、關勝がいはく、此度親方打負たるは、宣贊、郝思文、單廷珪、魏定國等にまみえけるに、盧俊義、呼延灼、各戰の次第を語る。關勝がいはく、此度親方打負たるは、相ともに、救應をなさゞりし故なり、我只よろしく、宣贊、郝思文、單廷珪、魏定國等と倶に力をあはせ、敵軍を突抜き、漸此邊に至て、二たび一千有餘の敗軍を聚めり、然れども地理を知らざるゆゑ、猶此處に伏して、曉をまつのみなり。盧俊義これを聞て、已にかくのごとくば、いざ軍兵を一處に合せ、共に此處に在て、計を決すべしとて、暫く對談に及ける。猶此軍の次第次巻に委し。

で跑去けるに、又一簇の敵兵に行合ひ、盧俊義益勇を振て戰ひしかば、遼の兵ども、盧俊義一人に砍立られ、盡く皆散うせけり。盧俊義また三四里ばかり馳し處に、日已に晩て、はや二更の左側なりけるが、此夜は月色暗して人の面も見ず。然に人馬の聲近く聞えし故、敵ならんと窺けるに、都て宋朝の人の聲音なりしかば、盧俊義高聲に呼て問ひけるは、今此に來るは誰なるぞや。彼大將聞て、呼延灼なりと、答へしかば、盧俊義大に悅んで兵を合せけるに、呼延灼が云く、遼兵のわざに一陣を破られ、親方右往左往に亂れ立ち、盧君を救ふこと能はざりき、しかれども某敵陣をつき破て、韓滔、彭玘等とともに此處まで馳來れり、知らず諸將はいかんぞや。盧俊義が云く、我今日四人の敵將と鋒を交へて一人は討取り、三人は討漏せり、其後又一簇の敵兵に遇しかども、是又追ちらして、遂に此所に至れり、これによつていまだ諸將の死活を知らず、去來又打出て、動靜を窺んとて、兩人已に轡をならべ、南の方十四五里馳ける處に、はや一簇の軍馬來て路を攔る。呼延灼が云く、かくのごとき黑夜にいかんぞよく戰んや、曉を待て、雌雄を決せよと、呼りしかば、彼軍の大將同じく呼つて問けるは、斯云給ふは呼延灼將軍にはあらずや。呼延灼、此聲を聞に、大刀關勝なりしかば、便ち又呼て云、盧先鋒此處に居給へり、早く來てまみえ給へ。此時諸將悉く馬を下り、盧俊義

忽ち火を散せり。此時天山勇は暗に弓矢を搭へ、穏に曳滿て、張淸が喉を直視て漂と放ちけるに、其矢果して喉に中りしかば、さすがの張淸も、遂に身を飜し馬よりまろび落にけり。こゝに於て、宋の陣中より、雙鎗將董平、九紋龍史進、幷に解珍、解寶一同に突出で、共に張淸を救て本陣に回りけり。盧俊義これを見て、急に其箭を抜せけれども、血頻に流れて深手なりしかば、鄒淵、鄒潤、兩人に命じて、張淸を車に乘せ、再び檀州に送り、神醫安道全に療治をなさしめけり。此時又喊の聲大に起り、西北の方より一彪の遼兵突來る。盧俊義は張淸を射させし心中に憂ひ、且戰を止め、引退んとて圖りける。關勝等四大將も各引回して、本陣に馳入し處に、四人の番將勢に乘じ趕來る。西北の方の敵兵等も横合より、宋の陣中に突入しかば、盧俊義が長蛇の陣も已に亂れ、首尾相救ふ事能はず、竟に七段八績し、盡く四方に散て逃走る。獨盧俊義は踏止つて戰ひし處に、彼四人の兄弟、各刀を輪し、盧俊義に砍てかかる。盧俊義鎗を撚て、四人の敵を相迎へ、少しも臆せず、一時あまり戰ひけるが、盧俊義故意五六步ばかり退きしかば、耶律宗霖、刀を揮て砍入んとしけるに、盧俊義大に吼て搠ければ、耶律宗霖、これを避るに暇なく、搠れて終に馬より下に落にけり。其餘の三將是を見て、大に怕れ、急に馬を回して四方に奔走す。盧俊義自ら劍を抜て、耶律宗霖が首を剃り、直に南を望

大刀關勝
耶律宗雲と戰ふ

大音聲を揚て呼りけるは、梁山泊の草賊等いかんぞ敢て我國を犯さんとするや。盧俊義聞て左右に問けるは、誰か敢て、當先に進で敵を追散さんや。大刀關勝聞も敢ず、青龍刀を舞して一番に馳出ける。遼の軍中より弟大王の嫡男、耶律宗雲、刀を揮て切て出で、直に關勝を迎へ馬を交へ戰ひ、わづか五六合にも至らざるに、二男耶律宗霖、同じく馬を跳せ、早くも陣前に跑來て戰を助く、宋の軍中には、呼延灼是を見て、二つの鞭を擧げ、直に迎へ相戰ふ。又遼の軍中より三男耶律宗電、四男耶律宗雷、各刀を輪して、飛がごとく駈出しかば、宋の軍中より、徐寧、索超一同に軍器をあげ、遂に兩將を迎へ鋒を交へ、總て四隊の勇士、陣前に在て相戰ふ。各祕術を盡し、平生の勇を勵けるに、敵親方の三軍これを見て、誠に稀有の勇士等かなと、一同に聲を放て喝采にけり。かゝる處に、沒羽箭張清、暗に馬を躍せて、陣前に馳出しかば、檀州の敗軍、又此戰場に在て、張清を見慌忙き、弟大王に報じて云く、今又一騎陣前に進み出たる敵將こそ、よく石を飛せ、人を打賊なれ、彼かく暗に出たるは、又石を飛せんと圖るならん。天山勇と云者、此言を聞て云けるは、大王少しも憂ひ給ふこと勿れ、我一箭彼を射て、聳覽に入んとて、兩人の副將を馬前に並べ、三騎一處に陣前に馳出る。張清豫めこれを見、漸近く至りし時、張清已に石を拈て飛せけるに、眞先に進みし副將が盔の皿に中りて、

尾すべてこれを助け、かくのごとく自由自在に働かば、少しも誤有まじと、其理を盡して云ければ、盧俊義聞て、大に悦び、軍師の言我意に合へり、去來兵を進んとて、三軍を發し、忙はしく推寄けり。かゝる處に遼の大將、耶律得重、軍馬を領して、玉田縣に至り陣を嚴密に列ねける。宋の軍中には、軍師朱武、梯子に上て敵陣を望み、則下て盧俊義に告けるは、敵が布たる陣は、則是五虎靠山の陣なり、少しも恐るゝに足ず。盧俊義是を聞て、朱武と共に再び臺に上て、敵陣を見るに、敵又旗を搖動して、左に盤り右に旋り、忽ち諸軍を變化して、別にまた一陣を列ねたり。盧俊義これを見て、いまだ其陣勢を知らざりしかば、則朱武に問て云く、此陣はいかなる陣なれば此のごとく忽ち變ずるや。朱武が曰く、是則ち、鯤化爲鵬の陣なり。盧俊義が云く、鯤化爲鵬と云はいかんぞや。朱武が云く、莊子の書に、北海に魚あり、名を鯤と云ふ、能化して大鵬となり、一たび飛時は九萬里に至る、此陣遠近より見る時は、唯かくのごとき小陣に見ゆれども、若來てこれを攻る時は、忽ち變じて大陣となる、これによつて鯤化爲鵬と名附たるなり。盧俊義聞て、感歎に堪ざりし處に、敵軍の內に再三鼓を鳴し、弟大王、耶律得重自ら馬を飛せて、陣前に馳出けるに、左右には四人の男子、分れ隨ひで、一樣に披掛ける。其外許多の大將ども、後に隨て相控へ、殊更勇猛の光景なり。彼四人の小將軍、

縣口に出て戰ふことなかれ、我先軍兵を引て、玉田縣の敵を破り、勢に乘じて後へに繞り出で、又平峪縣の敵を、內外より挾包で打べき間、此時汝等、皆勇を勵て働くべしと、云合せけり。

○宋公明の兵蘇州城を打つ

斯て得重大王、覇州幽州等の地に馳て、援兵を出すべきよしを申越し、諸事全く調りしかば、得重自ら大軍を引て、四人の男子を帶し、飛がごとく玉田縣に馳來る。扨宋江、盧俊義は各一二萬の人馬を領し、二手に分て進發す。宋江が人馬は平峪縣に至て、戰をなさんとしけれ共、敵堅く縣を守て出ざりしかば、先兵を收めて、平峪縣の西に陣を列ねけり。盧俊義は又兵を進めて、玉田縣に至り、はや遼の兵を近く望みしかば、盧俊義、則軍師朱武と議しけるは、今遼の兵近々と相迎ぬるに、いかなる策を以てこれを破らんや。吳人は本、越の境を知らざる事なれば、恐くは地の利を失うて、自ら誤を取ことあらん。朱武答て云く、某愚意を以てこれを想ふに、親方の人馬、未だ敵地の案內を知らざれば、輕々しく進むべからず、且隊伍を列ね、長蛇の陣をなし、敵もし首を擊ば尾これを助け、尾を擊ば首これを助け、中を擊ば首

等は兵を分て、遼國の爲に、要害たらん州郡、悉く攻取て敵の氣を呑べしとて、早速三軍に觸て、用意をなさしめけり。時に楊雄進み出て云く、此處より蘇州へは甚だ近し、況や蘇州は大郡なれば、錢糧極て廣く、米穀豐に盈り、是れ則遼の國の命なり、若蘇州をだに攻取なば、其餘の州郡を取んこと、何の難しとするに足らん。宋江是を聞て、軍師吳用と商議せり。扨彼洞仙侍郎は、咬兒惟康と共に東に臨で走り往き、楚明玉、曹明濟等に相遇て、再び敗軍を收め、恰も網を漏たる魚のごとく、急ぎ忙き蘇州城に入て、遼王の弟の耶律得重大王に見え、合戰の次第を詳に告て云けるは、宋江が軍勢甚だ浩大にして、其内に又よく石を打猛將あり、百たび發て百たび中る、兩人の御姪、幷に阿里奇、皆石に打れて死し畢ぬ。彼が利害等閑のことにあらざる故、某等戰に打輸て、當城に落來れり。耶律大王これを聞て云けるは、旣にかくのごとくんば、今更後悔すとも益あらじ、汝等は先當城に在て、我と倶に力を合せ、宋江等を打べしと、未だ云も終らざるに、飛脚急に到來して、報じけるは、宋江が軍馬二手に分て、當城によせ來る、一手の人馬は平峪縣に攻寄せ、一手の人馬は玉田縣に發向す、尤其勢浩大にして、贏慠たる精兵共なれば、勇氣甚だ鋭して、前遭の官軍とは大に異なり。弟大王是を聞て、頗る驚き、洞仙侍郎に人馬を與へて、平峪縣の口を守らせ、則命じて云けるは、汝必ず

宋江は大軍を引て檀州城に入り、番兵共を盡く追散して、懇に百姓を撫で、秋毫も犯すことあらざりけり。宋江又三軍を賞し、諸將の功を記し、城中に藏れ居たる番官等、盡く捜し出して、再び沙漠の地に還し、其後檀州の城の庫を開き、金銀財帛殘ず捜し取り、表を修へて、東京に送りしかば、宿太尉先此消息を得て、早速天子に奏聞したりけるに、天子叡感斜ならずして、又樞密院同知、趙安撫勅命を奉て、二萬の軍馬を引て、直ちに檀州の界に至りしかば、宋江城外に出て相迎へ、直に檀州府に誘ひ入て、堂上に坐せしめける處に、諸大將皆一々相見え、恭しく禮を行ふ。抑此趙安撫は寛仁厚德にして公に事をなす故、宿太尉、此度趙安撫が廉直なるを帝に奏聞して、今日檀州に遣しけるなり。趙安撫已に檀州城に入て宋江が仁德あるを見て、心中甚だ悅で云けるは、今上皇帝、豫じめ足下等が勳功を勵ることを叡聞有て、御悅淺からず、則我を監官として此處に遣はされ、若功を立たらん人には、恩賞を行ふべきよし勅命有て、二十五車の金銀緞帛を賜れり、足下等已に敵の州郡を取給ひぬる上は、我又表を奉りて、此こと奏聞せん、諸將彌忠を盡し、力を竭し、早く大功を立給へ、然らば天子必ず官爵を加へ、重く用ひ給ふべし。宋江等拜謝して云く、願くば安撫相公、檀州を鎭守し給へ、某

事共せざりけり。鮑旭は後軍に在て、頻りに喊の聲を揚ければ、一千の兵といへ共、一萬人の勢よりも猶多く覺えたり。洞仙侍郎は、親方の人馬進難たるを見て、大に焦燥ち、又楚明玉、曹明濟等に水門を開せ、彼兵粮船を奪はしむ。此時宋江が水軍の大將は、都て船中に伏して在けるが、敵の水門已に開けたるを見て、一同に拊子を鳴して消息を相通ず。凌振は此消息を聞て、時分は好しと料知り、頓て相圖の砲を放ちければ、兩邊の兵船一度に竝び起て、敵船を相迎ふ。左の方には、李俊、張横、張順船を漕せ攻來り、右の方には、阮小二、阮小五、阮小七、船を漕せ攻來り、已に敵船の內に突入て、兩邊より嚴しく撃ければ、楚明玉、曹明濟、敵し戰ふこと能ず、急に引返さんとせし處に、宋江が水軍共、はや敵船の上に乘移り、勢に乘じて、散散に砍拂ふ。楚明玉、曹明濟、慌て忙き岸に上り逃行けり。宋江が水軍、六將の豪傑は、先水門を奪取て、敵將多く砍殺せり、凌振又色々の砲を放て、空中に響せしかば、洞仙侍郎是を聞て大に恐れ、只震ひ慄くばかりなり。李逵、樊瑞、鮑旭、項充、李衮等は兵を引て、城中に砍て入る。洞仙侍郎は咬兒惟康と共に、城内に在て、水門を奪れたるを見、遂に城を棄て、城外に走出で、わづか一二里ばかり馳ける處に、大刀關勝、豹子頭林冲路を攔て一陣を打敗りしかば、洞仙侍郎這々の體にて逃走る。關勝、林冲敢て長追せず、直に進んで、檀州城を乘取けり。

報んものをと、牙を咬齒を切つて罵りけり。晩に至て番兵共、洞仙侍郎に報じけるは、瀘水の内に五七百の敵船あり、又遙の方より一彪の軍馬馳來る。洞仙侍郎これを聞て云ひけるは、是必定敵の水軍案内を知らず、誤て兵粮船を此邊まで漕しめたるならん、又遙の方より馳來る軍馬は、兵粮船を尋る者ならん、我計をもつて此兵粮を奪はんと、楚明玉、曹明濟、咬兒惟康三人に命じけるは、敵今宵兵粮船を瀘水の内に入て、岸上にも又一彪の人馬來る、是必ず瀘水の案内を知らざる故、路に迷て、此邊まで漕入たるに疑なし、咬兒惟康は一千の軍馬を引て城外に打出で、速に岸上の敵を追拂ふべし、楚明玉、曹明齊は、水門を開きて兵船を發し、敵の兵粮船を劫ふべし、若敵の兵粮、三が二を親方に得ば、莫大の助けならん。三人の大將これを聞き、各命に從ひける。扨宋江が軍中の大將、李逵樊瑞等は、黄昏に、人馬を引て檀州の城下に至り、大に悪口し、罵りしかば、洞仙侍郎忿然として恚り、咬兒惟康に軍馬を與へ戰はしむ。咬兒惟康命を受て、軍馬を領し、竟に城戸を開て、突出んとせし處に、李逵等一千の精兵を引て、城戸の邊に押寄せ、相攔へて緊しく攻ければ、城兵共城を出兼て控たり。此時凌振は軍中に在て、砲架を設けて、專ら時刻の至るを待て、相圖の砲を放たんとこそ圖りける。城中より矢石雨のごとく放ちけれども、宋江が兵は、滾牌を持たる者どもなれば、更に

かば、只一戰に敗れて、西に亂れ東に散り、我殿れじと逃走る。宋江が軍中には、敵の兩大將、兄弟の者が首を得、其外よき馬共一千餘疋を奪取り、密雲縣に牽せしかば、宋江是を見て、大に悦び、重く三軍を賞し、又董平、張淸が功を記させける。宋江ふたゝび、吳用と議して云けるは、今宵林冲、關勝に一彪の軍馬を引しめ、西北の方より檀州を取せ、又呼延灼、董平に一簇の軍馬を引しめ、東北の方より攻め、さて盧俊義には、一群の軍馬を引しめて、西南の方より進せ、我中軍は東南の方より推寄せ、砲の響を相圖として、一同に押寄べし、又かの砲手凌振、黑旋風李逵、混世魔王樊瑞、喪門神鮑旭、幷に項充、李衮に、滾牌軍一千餘人を與へ、城下に遣し、二更の時分に相圖の砲を放たしめて、水陸より竝び進んで一度に推寄せ、諸路の軍馬、互に相助け、城を破るべし、只知ず此計はいかん。吳用聞て、此計大に可なりと同じければ、宋江卽時三軍に觸て、用意をぞなさせけり。扨檀州城の洞仙侍郎は、堅く城を守て、援兵の至るを待侘び居ける處に、耶律國珍が敗軍共命を脱れ、檀州城に逃入り、國珍、國寶の討れたる事一々語りしかば、洞仙侍郎大に怒て云く、我遼王の姪を討せ、何の面目有て、再び遼王に見えんや、我もし國珍、國寶を殺したる賊を生捕んには、身を切み骨を拔て、此仇を

双鎗将董平
耶律国珍が喉
と搠く

江等兵を引て、檀州に推寄城を重々に圍みたると聞き、兩人の姪に、一萬の兵を與へ、檀州を救はしむ。一人が名は耶律國珍、一人が名は耶律國寶と號す。此兩將は遼王の姪なりけるが、各萬夫不當の勇有て、遼國の猛將とす。已にして遼、宋の兩軍、陣勢を對しける處に、兩人の番將一同に進み出る。此兩人はもと同胞の兄弟にて一樣に粧束し、各鎗を撚て戰を挑む。宋江が陣中より、雙鎗將董平、馬を飛せ跑出で、大音聲に呼つて云けるは、汝等は定めて遼の兵ならん、急ぎ馬を下て降參せよ。耶律國珍是を聞て、怒り罵り、梁山泊の潑賊、敢て我大國を犯さんとするは、死を知らざる愚人と罵りて、馬を飛せ刀を舞し、董平に砍て蒐る。董平鎗を撚て相迎へ、各勇を奮て五十餘合戰ひしか共、雌雄未だ決せざりし處に、耶律國寶これを見て、兄が討れん事を恐れ、急に金を鳴しければ、耶律國珍是を聞て、引回さんとしけれども、董平緊しく搠入しかば、耶律國珍心あわて、刀亂れ、遂に董平に喉を搠れ、馬より眞倒に落にけり。舍弟耶律國寶、兄が落馬したるを見て、刀を輪し馬を躍せ飛が如く跑來りけるに、沒羽箭張淸、又錦袋の内に手を入石を探り取り、馬に策つて陣前に馳出で、耶律國寶を望で迎へ來りしかば、耶律國寶は唯鋒を交ふらんと思ひ、刀をあげて進みける處に、張淸早くも手中の石を飛せて、國寶が眉見を打中しかば、國寶嚮に應じて、馬より下に落にけり。關勝、林冲是

く城郭を守らせける。扨宋江は兵を引て城を取圍み、一連に四五日攻けれども、未だ城を落すこと能ざりしかば、再び兵を引て、密雲縣に屯し、諸將と共に計を商議し居ける處に、戴宗回て報じけるは、水軍の大將共、已に兵船を揃へて、潞水に至れり。宋江是を聞き、早速李俊等を陸軍に呼集め、ともに商議して云けるは、此度の合戰、梁山泊に在し時とは、大いに同じからず、先水勢の緩急深淺を探知て、其後兵を進むべし、潞水の勢甚だ急なれば、若一たび過ちあらば、再び救ふこと難からん、汝諸將、意を留て宜しく事を行ふべし、必ず怠て誤つことなかれ、只兵糧を運ぶ船の體に打立て、水軍の大將等は、各暗に軍器を帶し、船の內に伏し、船の內には又四五人の水手に櫓を押せ、直に城下に漕入て、兩岸に船を繫ぐべし、城中の兵、若我兵糧米至りしと聞ならば、必ず水門を開て兵糧を掠んと圖るならん、此時水軍の大將等、一度に突出て敵の水門を奪ひ、立處に大功を立らるべし。李俊等命を奉て、再び船中に歸りけり。かゝる處に、一人の士卒來て報じけるは、西北の方より、一萬餘騎の軍馬檀州を望で馳來る。吳用聞て、是必ず遼の國より發向したる援兵にて有らん、親方より急に勢を遣して、其人馬を打しめなば、城中に援兵を得ずして、敵いよ〳〵臆すべし。宋江此議に同じ、張淸、董平、關勝、林冲等に、五千の軍馬を與へて、敵の援兵を攔らしむ。此時遼王は、梁山泊の宋

里奇討れたると聞て、大に駭き、只城戸を閉て、出戰ふことなかりけり。又飛脚到來して、敵の水軍、若干の兵船を發し、はや城下近く到りたりと、注進したりけるに、洞仙侍郎これを聞て云く、任他水軍は未だ怕るゝに足ず、我先陸軍を見んとて、早速諸將を引て城樓に上り、遙に宋江が陣中を望見るに、許多の猛將旗を振り、喊を擧て戰を挑む。洞仙侍郎が云く、敵かくのごとく猛將なればこそ、阿里奇は討れつらん、今更いかなる計を以て、これを退んや。楚明玉進み出て云く、阿里奇將軍は萬夫不當の勇有ゆゑ、始め敵將と鋒を交へ、遂に敵將を追放ひしか共、敵軍の内より、綠色の裝束したる賊將、暗に石を飛せて、阿里奇將軍の左の眼を打しにより、忽ち馬より落ち、活捕れたり、某これを救はんと欲して、暫く相支へ戰しか共、敵軍大勢前後より夾で攻けるゆゑ、親方竟に敗北に及べり。洞仙侍郎が云く、我今彼石を打し敵將を見んとす、汝若彼を識認たらば、早速我に知らせよとて、遂に樓を下り城の女墻の邊に至り、近々と敵軍を望ける處に、張清當先に進みければ、楚明玉是を見て云く、阿里奇將軍を打し者は彼賊なりと、いまだ云も終らざるに、張清又石を飛せ急に打けるが、洞仙侍郎これを見て、早くも避けるに、其石洞仙侍郎が耳の根を擦て過しかば、洞仙侍郎大に驚き、此賊將、いかんぞかくのごとく利害なるやとて、急ぎ表を修へ、遼王に奏し、又鄰國に觸れ、堅

かれと、未だ云もをはらざるに、金鎗手徐寧、馬を躍せ、鎗を撚て陣前に跳出たりしかば、阿里奇大に罵りて云く、宋朝の運已に盡き、草賊を擧て大將とし、妄りに我大國を犯さんとするこそ愚なれ。徐寧これを聞て、大に怒り、汝番賊、何ぞ我朝を羞しむるや、速に雌雄を決せよとて、鎗を撚て拗出ければ、阿里奇軍器を擧て相迎へ、兩將已に三十餘合戰ひし處に、徐寧漸く力衰へて、番將に敵すること能はず、急に本陣を望んで逃かへる。花榮これを見て、只一箭に番將を射て落さんと圖り、遂に弓箭を取て打搭へ、番將が追來るを待蒐けける。こゝに叉沒羽箭張淸は、今日番將を打ずんば、更に何れの時をか待んとて、錦袋の内より石を探り取り、當先に馳出て、番將が追來るを相迎へ、早くも一石を飛せ打けるに、其石過ず阿里奇が左の眼に中りければ、忽ち眼眩で、馬より眞倒に落にけり。此時花榮、秦明、林冲、索超一度に跑出で、遂に阿里奇を活捉けり。遼の副將、楚明玉是を見て、急に阿里奇を救んと欲て、陣前に突出ける處に、宋江が人馬左右より夾んで攻ければ、楚明玉戰ふこと能ず、遂に密雲縣を棄て、檀州に引かへしぬ。宋江先兵を收め、長追せず、則密雲縣に屯せり。彼番將阿里奇は左の眼を打破られ、其夜の内に死し畢ぬ。此日の合戰には、張淸が功を第一と記しけり。翌日宋江三軍に號令を傳へ、密雲縣を打て出で、直に檀州を望んで寄來る。檀州の城主洞仙侍郎は、阿

宋江等を差向て、はや近く至りぬと聞しかば、早速表を以て遼王に奏し、又近隣の國、蘇州、覇州、涿州、雄州等の地に人を馳て、援兵を求め、先阿里奇、楚明玉の兩將に、三萬の兵を與へて、宋江が勢に迎せければ、兩將軍已に人馬を卒して、城外に打出ける。扨梁山泊の五虎將、大刀關勝は、前軍に在て今日の先陣たりしが、はや人馬を引て寄來り、檀州の支配下、密雲縣に至りしかば、縣官これを聞て大に驚き、飛脚を以て彼阿里奇等に報じて云く、梁山泊の宋江等、新たに宋朝に降參して、此度我國を犯さんと欲す、早く軍馬を發し追拂ひ給へと、告けるに、阿里奇聞て冷笑ひ、梁山泊の草賊等、たとひ百千萬の勢を興し來るとも、何程のことかあらん、少しも憂ることなかれとて、早速三軍に號令を傳へ、明日宋江が軍馬を迎へ、一戰を初むべしと觸にける。宋江は、又遼の勢近く打出たると聞き、卽時に諸軍に命じ、始て鋒を交へんには、互に其勢を見るなるに、殊更力を盡し、勇を現すべし。諸軍命を受て大に悅び、各華やかに披掛けり。宋江盧俊義各軍前に在て、遙に前面を望見るに、遼の兵、地を掩て馳來り、兩軍已に陣勢を對しけるところに、遼の軍中より、一人の大將かけ出る。其形甚だ猛くして、脣白く、鬚紅く、身の丈は九尺に餘り、力は萬人に敵す。旗號の上に、大遼戰將阿里奇と分明に書けり。宋江これを見て、此番將は了得の勇士と覺えたるぞ、輕々しく敵することな

て云く、遼の兵四手に分れて、我朝の州郡を犯すとなるに、我兵も又手分して、是と戰はゞ可ならんや、又彼が枝城を破ば可ならんや、只軍師の計を聞て議を定むべし。呉用が云く、若手分して、迎へ戰はゞ、地廣く勢微にして、首尾相救ふこと能まじ、如じ先數ヶ所の枝城を打破て、其後又良計を議せんには。宋江聞て可なりと同じ、則段景住に命じて云く、汝は北路の案内を知りたれば、先軍馬を引て發向すべし、知らず、此處より近き州は、いづれの州なるぞ。段景住が云く、前面は檀州なり、此處より甚近し、抑かの檀州は遼國第一の要害にして、一筋の水路あり、港極めて深うして、名を潞水と申す、此潞水は直に滑水に通じ、船なくては進み難ければ、暫く兵船の到るをまつて、其後水陸より雙び進み、一同に押寄せなば、檀州城を取んこと易かるべし。宋江此言を聞て、早速戴宗を馳て、水軍の大將李俊等を催促させ、潞水に至て會合すべきよしを云越ける。扨宋江は三軍を屯して、數日待ける處に、水軍共、はや潞水近く至れりと聞えしかば、宋江急ぎ號令を傳へ、三軍を發し、直に檀州を望で寄來る。さて檀州城を守る大將は、遼國の洞仙侍郎孛董相公と云者なり。幙下に四人の猛將あり。此國に於ては州縣に廣く知れ、一人が名は阿里奇、一人が名は咬兒惟康、一人が名は楚明玉、一人が名は曹明濟と號す。此四人は各萬夫不當の勇あるとなり。此時檀州城には、宋朝より

宋江陳橋の下に軍士を梟首す

を問せ給へ。天子のたまはく、汝等中書省院の内には、忠義ある者一人もなし、朕酒肉を以て宋江が軍士に恩賞を行せける處に、私に是を減し、恩賞を壞ひし故、自らかゝることに及べり。省院又奏して云く、御賜の酒肉誰か肯てこれを減さんや、陛下明かにこれを察し給へ。天子大に怒らせ給ひ、朕自ら人を馳て私に窺せ、先達て備細に聞けるに、汝等巧言辯舌を以て、朕を誑んと欲ふや、朕本一人の軍士に、一樽の酒と、一斤の肉とを惠せけるに、彼只半樽の酒と、半斤の肉とを以て、三軍に與へしゆゑ、彼士卒これを恨て、省院の官を殺せり、唯知らず彼士卒は、今何の處にありや。省院等奏して云く、彼士卒は宋江已に首を刎たるとなり。天子宣はく、既に此の如くんば、先此沙汰を休べし、只宋江が軍士の嚴ならざる罪は、遼を破て歸の日、其功を論じて、理會せんに、重ねて奏することなかれとて、已に勅命有しかば、省院官等は、只默々として退きけり。天子又勅命を以て、宋江等に命じ給ふは、彼軍士が首を、陳橋驛の邊に梟首し、速に進發し、急ぎ敵を亡ぼして、歸陣せよとの御事なりしかば、宋江謹で恩を謝し、頓て軍士が首を、陳橋驛の下に懸て、涙を流し、我梁山泊に上てより以來、手下の士卒を傷ひしこと、今日が初めなり、誠に憐むべし憐べしと、大に悲歎して、遂に諸將と共に三軍を引き、北を望んで進發せし處に、大遼の界にはや近かりしかば、宋江則ち呉用に問

猶彼を恐るゝに、汝いかんぞ彼を殺して、我を苦むるや、我今始て、詔を奉て遼を攻といへども、未だ彼地に至らずして、嘗て尺寸の功あらず、然るにはや是等の事を做出し、何を以てこれに當らん。彼軍士拜伏していはく、某彼を殺したることなれば、たとひ骨を拔れ身を切まるゝとも、更に怨なし、然れども萬一禍ひ、宋君に及ばゝ、某九泉の下に於て、豈よく心を安んぜんや。宋江是を聞て、覺えず涙を洒ぎ、我梁山泊に上りてより以來、法令のため言には殺さんといへ共、實にはいまだ嘗て一人の士をも罪せず、憐愍を垂しか共、今日は已に身を朝廷に事へしかば、諸事我心に任せがたし、汝向後能愼て必ず舊情を發する事なかれ。彼軍士が云く、某朝廷の官人を殺し焉ぞ能一命を脱れんや、願くは早く罪に行ひ給へ。宋江が云く、然らば我今汝を罪して、彼が命を償はんに、誤て我を怨べからずとて、飽まで酒を飲せ、終に首を刎落し、其後文書を以て、中書省院に此ことを告にけり。扨、戴宗燕青は暗に城中に入て宿太尉が家に行き、中書省院の官を殺したる所以、一々詳に訴へしかば、宿太尉即刻參內して、豫じめ此ことを天子に奏しける。翌日天子文德殿に於て、百官の朝賀を請させ給ひて後、中書省院の官等列を出て奏してけるは、梁山泊の降人、宋江が手下の士卒、ほしいまゝに劍を揮て、中書省院の官一人を殺せり、伏して願くは陛下、宋江を召囘したまひて、罪

り。官人打れて、再三罵りしかば、彼軍士刀を拔き、手に持ち、汝賊官、重ねて言はゞ我此刀必ず汝を殺さん。官人是を聞て、冷笑ひ、汝草賊刀を拔て誰を嚇さんと欲や、汝若よく我を斬ば、則是眞の豪傑ならん。彼軍士呼はつて云く、我梁山泊に在し時は、汝に百倍勝れたる勇士だにも、數千殺けるに、唯汝一人を殺さんは、何の難きことやあらんとて、遂に刀を揮て、彼官人が左の眼を剔ければ、忽ち身を飜して地上に倒れけり。諸の官軍共これを見て、一度に咄と逃走る。彼軍士又一刀官人を斬ければ、官人遂に息絶て死にける。項充、李袞は手下の士卒が、省院官を殺したると聞て大に慌て、急ぎ宋江が軍中に注進したりしかば、宋江大に驚き、則呉用に對して、此事いかゞと問けるに、呉用が云く、省院の官、原來我輩を嫌ふこと甚だ深し、然るに今かくのごときを做出したるは、彼等が機會に中る所なり、しかじ今彼軍士を殺して命を償せ、先戴宗、燕青を馳て、宿太尉に此事を訴へ、始終の委曲豫じめ、天子に奏聞あらしめば、中書省院等、たとひ讒言を加へて、我輩を害せんと計る共、更に其益あらずして、我輩全く無事を保つべし。宋江聞て此議に同じ、早速彼軍士を呼で、事の起を問ひけるに、彼軍士が云く、彼再三再四我を罵て、梁山泊の反賊よ梁山泊の潑賊と頻りに惡口しける故、我怒りに堪ずして、遂に彼を殺せり。宋江が云く、彼は朝廷の官人なれば、我

七編　巻之六十七

○陳橋驛に涙を滴て小卒を斬る

宋江已に三軍を發し、陳橋驛の大路より打出ける處に、中書省の官兩人、陳橋驛の邊に至て、御賜の御酒を三軍に分ち與ふ。此等の官人共は、都て貪欲無道にして、賄賂を求る徒なりけるが、此時御賜の酒肉を過半減じ、只半樽の酒と半片の肉とを以て、前軍より次第に分與へ、直に後軍の内に移りし處に、項充、李袞が手下なる軍士ども、半樽の酒と半斤の肉とを見て、彼官人を罵て云く、汝奸官等、妄りに利を貪て、朝廷の恩賞を壞ふは、是非道の至りなり。彼官人大に怒て云く、汝潑賊等何ゆゑ我を羞むるや。一人の軍士躍り出て云く、此度朝廷より一樽の酒一片の肉を賜ふの處、汝等私に其半を減せり、我口を貪てかく云にはあらざれども、汝等が非道をなすを見るに忍びがたき故、已に此事を現すなり。彼官人益怒て云く、汝梁山泊の反賊反性いまだ改ずして、朝廷の官人を罵るは、其罪萬死に當れり、若再び惡口せば、我決して汝を饒すまじ。彼軍士是を聞て、忽ち大に怒り、酒肉を把て官人の面上に打かけた

御心の内には、李師々が表手と云しも、此うちなりしやと思されつらめ　又百八人の内には、扈三娘、孫二娘、顧大嫂の三人女武者あり。御賜の綠錦、魯智深、武行者まで、其服に製せし事有り。三婦女のことは一事もいはず。又流布の通俗忠義水滸傳の下編三十八の十七丁に、五虎將八彪將と云を、八を假名のハとし彪と書たれば、讀人には何の事とも辨がたかるべし。是等は校合の屆ざる誤なり。

こと有べからず。宋江再拜して恩を謝し、某はもと罪を犯し、江州に流され、酒後に詩を題し亂言を云ひ、遂に官司に捕はれ、殺されんとせし時、諸の朋友共力を併せて、一命を救ひ、共に江州を逃出しか共、身を立べき所あらず、梁山泊に取籠り、苟くも徽命を保て、今日御赦免を蒙り、かく聖恩を受る事、先祖の光輝、子孫の眉目、何事か是にしがん、誠に膽を披き、骨を碎く共、聖恩に報い奉らんこと、尤難からんに、幸ひ今遼を征伐するの勅命を蒙り、豈力を盡し功を建ざらんや、陛下必ず叡慮を安んじ給へ。天子是を聞せ給ひ、御感悅あり。御弓一張に箭を添へ、御馬一疋に鞍を置せ、宋江に賜ふ。宋江頓首して拜領し、遂に帝を辭して、諸將と共に陣屋に歸り、出陣の用意をぞ催しける。天子又中書省院の官、二人に勅命有て、三軍を賞せしめ給ふ、但し一人の軍士に、酒一樽肉一片を賜る。扨宋江は吳用と商議して、人馬を二手に分ち進發す。五虎八彪將に前軍を掌せ、十驃騎將に後軍を掌せ、宋江、盧俊義、吳用、公孫勝は中軍を掌り、水軍の大將、三阮兄弟、李俊、張橫、張順は童威、孟康、王定六と共に、水軍を引て兵船に乘り、蔡河の內より黃河に出で、直に北を望で進發す。此軍の次第は次巻に詳なり。

按ずるに、百八人招安に依て、皆天子の御目通りに、列座せし內には、燕青あれば、天子

て、宜しく奏聞せんとて、遂に別れて回りけり。扨宋江は諸將と商議して、已に歸山のことを催しける。此度山陣に回る人々は、宋江を首として吳用、公孫勝、林冲、劉唐、杜遷、宋萬、朱貴、宋淸、三阮兄弟、總て一萬の人數を領す。其餘の人馬は悉く、盧俊義に隨ひて、東京城の外に屯せり。已にして宋江等は、東京を打立て急ぎけるが、不日に梁山泊に至り、忠義堂に會集し、卽時に號令を傳へ、諸家の眷屬に旅粧を調へしめ、牛を殺し馬を宰て晁天王を祀り、而後位牌を收拾め、此日は忠義堂に酒宴を設けて、諸將一同に飲酌を催し、諸家の眷族悉く其州其鄕に送せ、宋江が老父宋太公も、再び鄆城縣の宋家村に回り、又良民となりにける。宋江、則阮家三兄弟に命じ、好兵船若干を擇ばせ、其餘の舊船等を都て百姓等に分ち與へ、山中の陣塞、幷に諸の房屋、盡く打毀ち、事全く調りしかば、翌日宋江人馬を發し、山を下り、直に東京の界に至りけるに、盧俊義出迎へ、陣屋に入り、先燕靑を宿太尉が家に馳せ、宋江已に回りし間、早々人馬を起し、遼を征伐仕るべし、天子へ奏し給はるべしと、具に訴へければ、宿太尉參內して此事を奏聞せり。翌日天子武英殿に出御有て、宋江等百八人を召し、御酒を賜り、御悅の餘り玉音を開て宣ふは、汝等此度偏に知勇を盡し、朝敵遼賊を滅し早く凱歌を奏し歸陣せよ、朕公に功を論じ官爵を加ふべし、必ず慢て大事を誤

故茲制示。想應知悉。

宣和四年夏月　日

宋江、盧俊義等詔書の趣を聞て、衆皆大に悦び、宋江先宿太尉を拜謝して云く、某等は原來國家の爲に力を盡し、功を建て、業を立て、忠臣とならんことをのみ、平生の願望とす、今太尉某等を憐み給ひて、宜しく奏聞ありしゆゑ、かくのごとき勅命を承て、喜び望外に出たり、太尉の恩は九鼎よりも重く、九淵よりも深し、誠に感激の至りなり、已に勅命を蒙りし上は、早速兵を發して、遼を攻べけれども、晁天王の位牌をいまだ安置せず、諸家の眷屬をいまだ故郷に送らず、其外梁山泊の城柵をもいまだ毀さず、諸の兵船をも、いまだ此邊に取寄ず、願くば太尉此ことを奏し給ひて、十日の暇を賜ば、再び山陣に回りて、これらのことを盡く相調へ、且又多く軍器等を帶して忠功を勵むべし。宿太尉聞て大に悦び、早速歸朝して此事を奏しければ、天子其願を許させ給ひ、また宿太尉を以て、黄金一百兩、白銀五千兩、綵緞五千疋、これを宋江等に賜ふ。宋江等宿太尉に就て、君恩を謝し奉れり。宿太尉がいはく、將軍等速に回て早く來り給へ、必ず延引して日限を誤り給ふ事なかれ、我專ら消息を待ん、尤梁山泊を收拾め再び至りたまふ日も、又豫じめ使者をもつて我に報じ給へ、然ば我早速參內し

伏して願くば、陛下明かにこれを察し給へとて、謹で奏しけるに、天子此奏を叡聞あつて、大きに童貫等を罵り給ひ、汝讒佞の輩、動もすれば能を妬て、賢路を塞ぎ、巧言令色を以て、朕を誑き、天下の大事を誤んとす、今日は先暫く汝等が罪を免す間、必ず以來を愼めとて、大いに怒らせ給ひて後、忝くも御手自詔書を書せ給ひて、宋江に賜り、則宋江を以て、遼を破の都先鋒とし、其餘の諸將共は功成て後、官爵を授け給はんとの御事、委細に勅命あり。宿太尉を宋江が陣屋に遣し給ひて、遂に御座を起せたまひしかば、百官都て退出したりけり。扨宿太尉は詔書を領して朝を出で、逕に宋江が陣屋に至りしかば、宋江等急ぎ香案を設け、君恩を謝し、謹んで詔書を披讀す。

制曰。舜有天下。擧皐陶而四海咸服。湯有天下。擧伊尹而萬民俱安。朕自即位以來任賢之心夙夜靡怠。近得宋江等。衆順天護國秉義全忠。如斯大才未易輕任。今爲遼兵侵境逆虜犯邊勅加宋江。爲破遼兵馬都先鋒。使盧俊義爲副先鋒。其餘軍將如奪頭功表申奏聞。量加官爵。就統所部軍馬。尅日興軍直抵巢穴。伐罪弔民掃淸邊界。所過州府別勅應付錢糧。如有隨處官吏人等不遵將令者。悉從便益處治。

て、いまだ此ことを曉し給はざるとなり。已にして樞密院の童貫等、表を奉て云く、梁山泊の頭領百八人の輩を、急に城中に賺し入給ひて、誅戮あらば可ならんと、一同に奏しける。

○宋公明詔を奉て大遼を破る

斯る處に、忽ち屏風の後より、殿前の都太尉宿元景進み出て、高聲に呼りけるは、今處々に一揆起るは、樞密院の官等がごとき、家を忘れ國を敗るの臣有がゆゑなり、宋江等百八人の豪傑は、義を結で死を共にせんと、誓ひし者どもなるに、いかんぞあへて散々に別れんや、然るに又彼等を害せんと圖て、妄りのことを奏聞するは、莫大の過なり、彼等智勇足備つて、等閑の人にあらず、若萬一異議出來し、事變じなば、何を以てこれに當んや、今遼王十萬の兵を興し、諸州諸府を犯し、國々より表を奉つて、急を告ること尤頻りなり、我朝の人馬、各力を併て、助け戰ふといへども、只一度も勝利を得ず、這々に打なされ、毎度敗北のみ、已に大事に及ぶといへども、奸臣どもこれを藏して帝に奏聞せず、國家を誤んとす、臣愚意を以てこれを思ふに、此たび幸ひに、宋江等が人馬を差向給ひて、遼の賊を打せ、若果して戰功を立なば、宜しく官爵の御沙汰有て、彼等を廷に用ひ給へ、然らば國家において大いに利あらん、

だ官爵をも受ざるに、一百八人の者、はや散々にならん事、元來本望にあらず、我輩は皆死生を一處にせんと盟りけるに、誰か肯て約を背く者あらんや、只此事に於ては勅命に隨ひがたし、若必然此のごとくんば、我輩再び山陣に歸るべしと、少しも怕ず勅使に答へければ、宋江慌て忙めき、諸將を制し、則忠言を以て、恭しく勅使を賴で云けるは、願くば、指揮使朝廷に回り給ひなば、宜しく奏し給はるべし。彼指揮使諸頭領が氣色を見て、殆ど驚き立回りて、遂に一句も殘さず詳に奏しければ、天子大に驚き給ひ、又樞密院の官等に御評議有けるに、樞密院等奏して云く、彼輩已に歸順せしといへども、其心いまだ改ず、終には後の患たらん、臣等愚意を以てこれを思ふに、百八人の徒を城中に賺しいれて、一人も漏さず誅戮し、然して後に軍馬を分つて、國家の患を絕すべし。天子これを叡聞有て、御心未だ決し給はず、只默然として沈吟し給ひけり。此年大遼の國王、兵を起して、山東山西を劫うて、河南河北を掠めければ、國々より表を持て、飛脚到來すること尤頻りなり。しかれ共蔡太師、高太尉、楊太尉、樞密院の童貫等と商議して、私かに表を隱し、曾て天子に奏聞せず、擅に自ら諸方の軍馬を催し、屢これを發して戰をなしけれ共、雪を擔て井を塡るがごとくなりしかば、其益更にあらざりけり。世人擧てこれを知りしか共、唯天子のみ、此數輩の奸臣等に誑れ給ひ

子叡覽有て御悅び淺からず、則殿上に宣て、座を給りしかば、宋江等殿に上り各謹で跪く。天子勅命有て、御宴を設けしめ給ひ、則御盃を宋江等に賜りければ、宋江等再拜して、これを頂戴し、其日は百八人の輩、忝けなく天子に陪し奉つて、御宴に酌み、初て九重の善盡し、美盡したるを見て、各心中に聖恩を拜謝して、殿を下り朝廷を出て、陣屋に歸り、翌日又參內したりしかば、禮儀司の官、宋江等を引て文德殿に至り、則上恩を謝し奉しめけるに、天子益〻御感悅有て、百八人の輩に官爵を授け給はんと、勅命降りしかば、宋江、盧俊義等拜謝して退出し、又陣屋へ歸りける。斯る處に樞密院の官、都て表を奉りて奏しけるは、新たに歸順したる者共未だ半點の功もあらざるに、輕々しく官爵を加へ給ふことなかれ、後日勳功を立るを待て、此沙汰に及び給へ、今彼十萬の勢を以て城外に陣を取しこと、甚以て患はし、宋江等が人馬は過半都の官軍降參したる者共なれば、これを御幙下に還さしめ、外路の軍馬は又各其故鄉に歸らしめ、其餘の兵を都て五路に分て、山東河北等の地に遣し給へ、是則ち良計ならん。天子これを叡聞有て、其議に同じ給ひ、翌日御駕指揮使を、宋江が陣中に馳給ひ、宋江等が人馬、速にこれを分て故鄉にかへるべし、必遲疑する事なかれと、嚴に勅命ありしかば、諸頭領これを承りて心中に憤り、我輩今朝廷に歸順せしか共、いま

孫、龔旺と同行し、王定六が面目猙獰に、郁保四は身軀長大なり。時遷、乖覺、白勝、高強なり。段景住は馬上群に超え、後殿三人あり。安道全、素服を著し、皇甫端紫髯を拂ひ、神機軍師朱武中間にあり。英雄豪傑朝廷に入形勢、帝釋天男天女を引て、天宮に下り、海神龍子龍孫を伴ひ、洞府を離るゝも、斯やあらんと思はれけり。帝、豪傑を御覽有り、甚だ御悦有り、百官に語らせ給ふは、彼等の英雄各萬夫不當の勇有て然も忠義を懐き、國家の爲に力を竭さんと欲すること、誠に朕が福なり、朕もしも老早より彼等皆、義士たることを知なば、速に赦免すべき處に、朕かつて是を知らず、今迄延引したるこそ後悔なれとて、御感嘆斜ならずして、勅使を馳給ひ、宋江等且甲を脱で、御賜の紅錦綠錦の袍を著し、早々帝を拜すべしと勅命有しかば、宋江等謹で命を承り、頓て鎧甲を脱で、各御賜の紅錦綠錦の袍を著し、衆皆金牌銀牌を懸て、華やかに粧ひけり。公孫勝は紅錦を裁て道袍となし、魯智深は僧衣となし、武行者は直裰となし、皆君の御賜を用ひける。宋江、盧俊義を首とし、吳用、公孫勝を次とし、諸頭頭、都て威風堂々として、東華門より禁中に入る。當時辰の上刻なりけるを、天子ははや文德殿に出御なりしかば、儀禮司郎の官、宋江等を引て朝廷に入り、已に階の下に至りけるに、宋江等百八人次第に依て列をなし、一同に拜を行ひ、萬歲を呼りけり。天

滔、彭玘と相竝び、何れも武勇の精神顯れ、薛永、施恩、猛烈逞しく見え、單廷珪、皂袍閃爍し、魏定國、紅甲を光輝し、宣贊、郝思文左右に列り、凌振、神算子相隨ひ、黃信、孫立、歐鵬左よりし、鄧飛、鮑旭、樊瑞右よりし、雙鋒をつき、郭盛、呂方は畫戟を持ち、鐵面孔目裴宣は紗巾吏服を左手に下たり。聖手書生蕭讓は、烏帽儒服を右手に下ぬ。絲韁玉勒を負せたるは、山東の豪傑宋江、畫韁瑚鞍を負せたるは、河北の英雄盧俊義なり。吳用は綸巾を戴き、羽扇を持ち、公孫勝は鶴氅道袍、林冲と關勝と連り、呼延灼と秦明と竝び、花榮、楊志と左右し、索超、董平等しく進み、魯智深は烈火の袈裟を掛け、武行者は香皂の直裰、柴進、李應と相伴ひ、楊雄、石秀肩を竝べ行く。徐寧、張淸と竝び、劉唐、史進相隨ひ、朱同、雷橫と作ひ、燕靑、戴宗と同行し、李逵は左に居、穆弘右に在り。阮二、阮五の後に阮七、病尉遲と竝び、兩張の内張橫を先にす。李俊、張順と左右し、陶宗旺は、鄭天壽と雙をなし、王矮虎、一丈靑と配行し、項充、李袞、宋萬、杜遷と竝び、菜園子、小蔚遲と對し、孫二娘と顧大嫂と等しく行き、後面に蔡福、蔡慶、陳達、楊春あり。前頭に童威、童猛、侯健、孟康を列し、燕順、楊林肩を對し、穆春、曹正、踵を接ぎ、朱貴、朱富對し連り、周通、李忠と相接し、左に玉臂匠、右に鐵笛仙あり。宋淸、樂和と接し、焦挺、石勇に隨ひ、湯隆、杜興と相伴ひ、丁得

百八人登営
見物帝都の
街こ充ノ

此時宿太尉は、御駕指揮使を引き、城外にて出迎へければ、宋江自等諸將と共に拜謁し、軍馬を新曹門の外に屯し、陣を列ね、專ら勅命を待候ふ。宿太尉御駕指揮使を引て參内し、宋江が人馬已に新曹門の外に屯して、勅命を待奉ると、奏しければ、天子の宣く、朕聞宋江等百八人の輩は、上天星に應じ、英雄勇猛他に越たると聞く、今日朝廷に歸順して、良臣とならんこと、國家の福と云つべし、朕明日、百官を引き、自ら宣德樓に上り、城中の軍民等と倶に、彼等を一見せん、百八人の豪傑共を、華やかに披掛せて、城中に入しめよ、若大軍を入城せば、民必ず騷動すること有べきに、僅四五百の人數を引しむべし、尤東華門より入しめて、文德殿にて拜を請給ふべきよし、已に勅命有ければ、御駕指揮使、聖旨を承り、再び城外に出で、宋江が陣屋に至り、勅命の趣を傳へけるに、宋江等謹でこれを承り、翌日裴宣に命じて、精兵五百餘人を擇せ、前には金鼓を打しめて、後には劍戟を持せ、中には順天護國の兩旗を建て、軍士都て軍器を持て、嚴に披掛ひ、隊伍を一行に連ねて、東華門より城中に入けるに、東京城の民百姓、老を扶け、幼を抱き、雲霞のごとく路に迫て見物す。此時天子も百官を引て、宣德樓に登らせ給ひ、宋江等が行粧を叡覽ある。解珍解寶、鋼叉を仗て相對して行く。孔明孔亮兵器を執り、肩を齊して相竝び、鄒淵鄒潤を立て、其跡に李立、李雲、韓

まさによく妻子等を故郷に送べし、宋君自らこれを察し給へ。宋江が云く、軍師の言尤可なり、然らば妻子等は倘山陣に留て、我輩は急に上京せんとて、三軍に號令を傳へて用意を調へしめ、翌日五更の一點に山を下り、先濟州に至り、太守張叔夜に見え、委細を語りければ、張太守喜悅し、宋江等を饗應し、懇に三軍を賞しけり。宋江已に太守に謝して、濟州を打出で、諸の軍馬を引て東京に進發し、先戴宗燕靑を馳せ、宿太尉に斯と告知しむ。宿太尉は此消息を聞て、急ぎ朝廷に參內し、宋江等が人馬、はや城外に至りぬと奏しければ、天子叡聞有て、御感悅斜ならず。則宿太尉に、御駕指揮使の官、一人を相添て、城門の外に遣し、禮を以て、宋江等を迎はしめ給ひけるに、宋江等は當先に紅の籏二流を持しめ、一流の籏には順天の二字、一流の籏は護國と云二字を書けり。諸の頭領は都て甲を著し、華やかなる裝ひなり。惟吳學究は綸巾羽服を著し、公孫勝は鶴氅道服を著し、魯智深は烈火の僧衣を著し、武行者は香皂直綴を著し、嚴に行列を定めて、各急ぎしかば、不日に東京城の外に至りける。

○宋公明夥を全うして招安を受く

梁山泊義士宋江等。謹以二大義一布二告四方一。昨因下哨二聚山林一多擾二四方百姓一。今日幸天子寛仁厚德。特降二詔勅一。赦二免本罪一招二安歸降一。朝暮朝覲。無下以酬謝上就二本身一買市十日。倘蒙二不レ外賚一レ價前來。以レ一報レ十。並無二慮謬一特此告知。遠近居民勿二疑辟避一。惠然光臨不レ勝二萬幸一。

梁山泊義士宋江等謹請

宣和四年三月　日

蕭讓已に告示を書終りしかば、州郡に人を馳て、百姓等を山陣に呼聚め、三月三日より十三日まで買市をなす。梁山泊の庫に收置し金銀珠玉、綵段綾羅等の物、盡く運び出して、山のごとく積み、其内只獻上物ばかり、數種擇取り是を殘せり。凡山陣に來りて買市をなす者には、遍く酒食を以て款待し、殊更懇の體なりければ、四方の百姓雲のごとく屯りて、市に臨む。宋江號令を傳へ、十を以て一に換へ、大いに百姓を利しけるに、百姓ども想はず、過分の福を得、衆皆一同に大悅して、十日が間山陣に滯留し、市已に罷りしかば、各宋江に謝して歸りけり。宋江諸家の妻子を、先故鄕に送んと議しけるに、吳用諫て云く、宋君何ぞ此等の事を急ぎ給ふや、諸家の眷族は、倘山陣に留め置き、我輩皆天子を拜して恩を蒙るの日、

金銀財寶を掠しこと甚多し、某今山陣に貯し所の金銀を盡し、十日の内に買市をなし、百姓を利し、其後軍馬を催して上京すべし、是又上聞に達し給ひて、日限を寛げ給はるべし。宿太尉聞て領承し、遂に別れて濟州へ赴きけり。宋江等は山陣にかへり、忠義堂に相聚り、宋江令を傳へて云けるは、王倫此山陣を築て後、晁天王山に上て業を建て、已にかくの如く繁昌せり、我昔日江州にて殺さるべき處に、諸豪傑に救はれて、此山に上り、晁天王逝去の後已ことを得ずして、山陣の主となり、已に數ヶ年を過せり、今日幸に御赦免を蒙て、再び天日を見んこと、一生の悦何事かこれにしかんや、明日都に至りなば、王家の爲に力を盡して、子孫の繁榮を圖るべし、我輩百八人は、上天星に應じて、死生一處なり、已に御赦免有し上は、早々都に登て、萬乘の君の聖恩を謝すべし、三軍の内、若故郷に歸らんとねがふ者もあらば、我これを許さん、諸軍に觸よと。裴宣、蕭讓此ことを掌つて、三軍に觸けるに、故郷に回らんと願ふ者總て五千餘人有しかば、宋江多く金銀を分ち與へて回しけり。宋江又蕭讓に命じて、告示を寫さしめて、人を四方の州郡に馳せ、百姓を山陣に呼集め、十日が間、買市をなさんことを催しける。其告示に曰く、

を知ずして、我を留め給ふならん、我此度天子の勅命を奉り此處に至り、大義已に調りし上は、一日も早く歸京すべし、若延引に及ばゞ、奸臣又いかなる計を行うて、異議出來らんも料りがたし。宋江が云く、某は只太尉を留めて、山の風景をも見せ進せんとこそ思ひつれ、原かくのごとき尊念有上は、豈あへて留め候はんや、然れども、今日は飮宴を樂み給ひて、明日早々發駕し給へとて、大小の頭領、盡く堂上堂下に列座して、慇懃に宿太尉を管待ける。翌日未明、宿太尉、已に旅裝束を調しかば、宋江一盤の金銀珠玉を餞に送りけるに、宿太尉堅く辭して請ざりしか共、宋江再三慇懃に獻じければ、宿太尉も固辭がたくこれを收め、已に人馬を催し、山陣を打立しかば、宋江又聞煥章に餞を送て、宿太尉とともに、都に歸らしめ、諸頭領皆、樂を奏し勅使を送り、直に金沙灘を渡て、三十里外に至れば、宋江又盃を執て、宿太尉に獻じ、再三拜謝して云けるは、某等此度御赦免を蒙りしは、都て太尉の賜なり、明日著京し給ひなば、彌宜しく奏聞有て、某等を助け給へ。宿太尉が云く、此事に於ては全く心易かるべし、我京に囘りなば、足下等の忠義を備細に奏聞すべし、只宜しく上京有べし、軍馬已に東京に到りなば、先使者を出して我に報じ給へ、然らば我また早速參內して、豫じめ天子に奏聞し、勅使を以て義士等を迎はしめ、十分の禮儀を現すべし。宋江が云く、昔

太尉の憐憫を蒙りて、大罪を免かるゝこと、誠に再生の幸なり、此恩何を以て報い奉らんや。宿太尉が云く、我原來御邊等の天に替て、道を行ふことを知りしか共、いまだ便機を得ずして、奏聞に及ばず、徒に年月を延引せり、前日、聞煥章が書簡を得て、初て足下等の哀情あることを聞き、我忽ちこれを憂る處に、天子披香殿に於て、私に足下等のことを、我に問せ給ふによつて、我此便機に乘じ、一々奏せし處に、豈料らんや、天子は先達て、いづれの筋よりか、叡聞に達し、天子能知しめしまし〳〵、我奏せし處と一々符合し、一點も差ざりしかば、天子いよ〳〵足下等の忠義あることを信じ給ひ、翌日文德殿に出御有て、百官の前にて、童樞密を羞しめたまひ、高太尉を恨せ給ひ、早速御手自詔書を修へ給ひて、我を勅使に命ぜられ、足下等の罪を御赦免ある所なり、早々用意を調へ、都に上らるべし。宋江等承り大に悅び、彼聞煥章を忠義堂へ邀へ、宿太尉に逼しめけるに、宿太尉、故人に相逢て、大悅斜ならず。各座已に定りしかば、宋江酒宴を設しめて、山河の珍物品を重ね、大に飲酌を催して、黃昏に宴終りければ、宿太尉を始として、衆皆客廳に入て歇みけり。翌日も又酒宴を設けて、終日閑談し、既にはや數日を經たりしかば、宿太尉歸京せんと欲す。宋江再三是を留て云けるは、太尉猶數日逗留有て、山陣の風景をも殘らず遊覽し給へ。太尉が云く、宋頭領はいまだ朝廷のこと

宋江諸
頭領を
金
沙灘を

素懐忠義不施暴虐。歸順之心已久。報効之志凛然。雖犯罪惡各有所由。察其情懇。深可憫憐。朕今差殿前太尉宿元景賚捧詔書親到梁山水泊。將宋江等大小人員所犯罪惡盡行赦免。給降金牌三十六面紅錦三十六疋。賜與宋江等上頭領。銀牌七十二面緑錦七十二疋。賜與宋江部下頭目。赦書到日莫負朕心早々歸降。必當重用。故茲詔勅。想宜悉知。

宣和四年春二月　日　　詔示

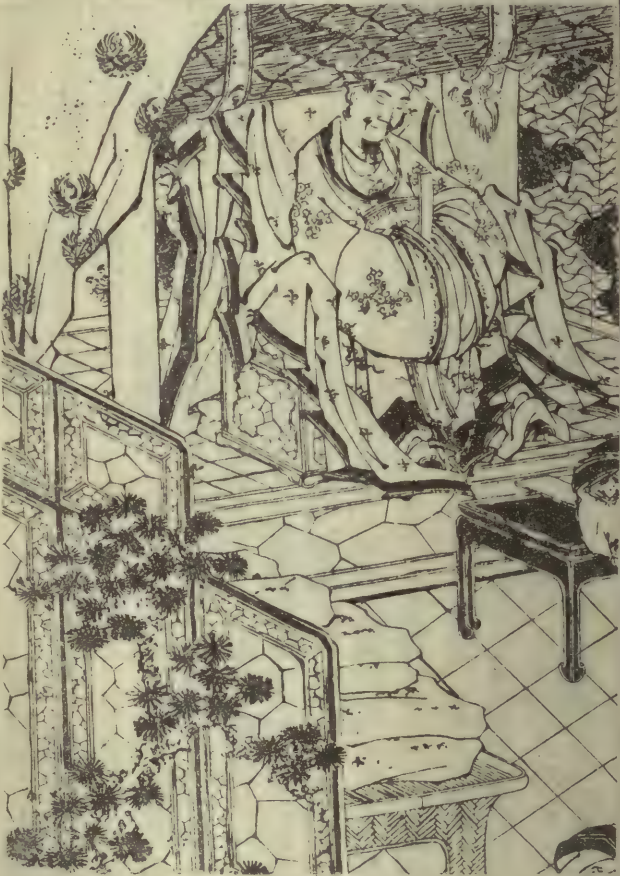
今蕭讓已に詔書を讀畢りしかば、宋江等一同に萬歳を呼り、再拜し天恩を謝せり。宿太尉御賜の金銀牌、紅緑錦等を把て諸頭領共に分與へ、又御酒を開きて、親自一盞を斟み、則諸人に對して云けるは、天子我に勅命有て、此御酒を諸頭領に賜しめ給へ共、恐らくは疑もやあらんずれば、我先試に一盞を飲べきに、義士等これを見て疑を晴し候へとて、已に一盞を乾ければ、宋江等都てこれを感謝せり。宿太尉、又一盞を斟で宋江に送りけるに、宋江盞を執て拜伏し、謹でこれを飲しかば、其次に盧俊義、呉用、公孫勝、盞を執て、順に輪し、百八人の頭領共に、宿太尉を拜して云けるは、某等昔日華州に於て太尉の尊顔を拜し奉り、今日又

乗て、梁山泊に進發す。張叔夜幷に吳用等四人の頭領も馬上にて相從ふ。宿太尉が馬の前には、御赦免の御旗を持せ、行列を嚴に備へて、一度に濟州を出で、纔十里許過けるに、此處に、一つの棚を設け、種々の花を掛け、許多の軍士共鼓樂を奏して、勅使を迎へ奉る。宿太尉此光景を見て、心中大に悅び、又十五六里馳けるに、此處にも又棚を設けて、若干の人出迎へければ、宿太尉益これを感じ、已に此邊を打過し處に、宋江盧俊義幷に、諸頭領早くも途中に出て傍に跪き、恭しく詔書を迎へ奉りて、聖恩を謝しにけり。宿太尉已に宋江等に對して、案內すべきよし仰せ、直に金沙灘を渡て岸に上りけるに、關上關下樂を奏して、異香を炷き、萬千の人勅使を中央に取圍んで、忠義堂の前に至りしかば、宋江等宿太尉を請て、堂上に上り、詔書幷に御賜の品々を、堂上の正面に安置し、又佳香を炷て、詔書の前に供へ、宋江盧俊義謹て宿太尉を拜し、諸頭領都て堂上に跪き、肅然として詔書を拜聽す。時に蕭讓、太尉の命を奉て、詔書を披讀し奉る。

制曰。朕自二卽位一以來。用二仁義一以治二天下一。行二禮樂一以變二海內一。公二賞罰一以定二干戈一。求レ賢之心。未二嘗少怠一。愛二民之心一未二嘗少洽一。博施二濟衆一。欲三與二天地一均同。體レ道行レ仁咸使二黎民蒙一レ庇。遐邇赤子悉知。朕心切念。宋江盧俊義等。

に受ざりければ、宋江再び禮物を收めしめ、吳用、朱武、幷に蕭讓、樂和の四人を太守に隨はしめ、濟州に遣し、明後日諸頭領三十餘里の外に出て、勅使を迎へんと約を定めけり。吳用等四人は濟州に赴き、翌日驛中に於て、宿太尉を拜謁し、地上に跪きければ、宿太尉も禮を還し、各座を列ねしめ、則姓名を問けるに、吳用答へて云く、某は吳用、彼等三人は朱武、蕭讓、樂和なり、宋江の命を請て太尉を迎へ奉る、宋江等諸頭領は明日三十里外に馳出て、詔書を迎へ奉らんと、已に用意を調へり。宿太尉是を聞て大に悅び、我向に華州に於て吳先生に別れ、已に數ケ年を過しけるに、今日又相遇ふこと、誠に大悅の至りなり、我老早足下等は、皆忠義の心を懷きたまふことを知けれ共、奸臣權威を執て、賢路を塞ぎ、下情上に達せず、久しく義士等を苦めり、然れ共尙幸ひなるは、帝已に此事を曉させ給ひ、則我を勅使として、御筆の詔書、幷に金牌、銀牌、紅錦、綠錦、御酒是等の物を降し賜つて、足下等百八人の罪を免させ給ふ、必ず疑を起さずして、朝廷に歸順有べし。吳用等拜謝して云く、山野の村夫等が爲に、太尉自ら駕を枉給ふこと、誠に感佩の至りなり、此度御赦免を蒙りて、再び天日を見んこと、皆是太尉の賜なれば、此恩死を以て報ずべしとて、歡喜更に限なし。此時張叔夜は美々しく酒宴を設け、太尉幷に吳用等を款待けり。翌日御賜の品々を三輛の車に載せ、宿太尉馬に

ごとく禮を行ひ給ふならば、國家の軍民若干を傷ふまじきものを、童貫、高俅ごとき、己が權威にのみ傲る、愚魯の小人、兩度の軍事に、天下の良士良民を塗炭に苦め、莫大の糧を費し、農夫を役使し、天子の幸福を損ふこと少々ならず、今更千悔至極なり。宿太尉が云く、我は先此處に在て、消息を待ん、足下は自ら梁山泊に赴き、宋江等に斯と告て、詔書を迎る用意を調へしめ候へ、張太守謹で命を請け、則馬に乘り、供人十餘人從へ、逕に梁山泊の下に至りしかば、山兵等是を見て、本陣に報じけるが、宋江急ぎ山を下て、太守を忠義堂に迎へ、慇懃に禮を行うて座已に定りしかば、張太守賀して云く、義士等皆悅び給へ、此度天子宿太尉を勅使として、足下等の罪を御赦免し給ふ、勅使已に濟州城に著駕し給ひぬるに、速に用意を調へ、詔書を迎へ給へ。宋江これを聞て、甚だ悅び、是誠に某等が再生の幸なりとて、張太守を饗應せんとしける處に、張叔夜辭して云く、我款待を受ざるは無禮に似れ共、宿太尉嘸待侘給ふならんに、一刻も早く回るべし。宋江が云く、既に此のごとくば、豈あへて留んや、太守速に回り給へとて、一盤の金子を送りけるに、張太守堅く辭してこれを請ず。宋江が云く、此體の薄義只某が寸心を表すのみ、何ぞこれを辭し給ふや、願くば笑納し給へ。張太守が云く、宋頭領の厚意感謝に堪ず、然れ共禮物は先山陣に預け申さん、此處に留め置給へとて、終

梁山泊への賜を宿大尉に附与せらる

來るべしと、仰せけるに、兩人命を請け、途中に馳せ、委細其實否を伺ひ回り、則宋江に報じけるは、此度又朝廷より、宿太尉を勅使として、詔書、御酒、金牌、銀牌、紅錦、綠錦等を降し賜り、近々濟州に著駕なる由、風說專らなり。宋江是を聞き、欣然として太悅び、早速號令を傳へて、梁山泊より濟州の間、一連に棚を設け、棚の上には、種々の花をかけ、棚の下には都て樂器を備へ、豫め山河の珍物を調へて、美々しく宴を設け、勅使の著駕を待侘けり。扨宿太尉は許多の供人を引て、已に濟州の界に至りしかば、太守張叔夜、城を出て宿太尉を迎へ、恭しく延て城中に入り、頓て宴を設け、慇懃に饗應し、張太守頓首して云けるは、向に兩度まで、御赦免の詔書降りしか共、奸佞の人中に在て、事を妨げし故、宋江等敢て歸順せず、今太尉向ひ給ふ上は、宋江等樂で歸伏し、國家の爲に大功を立んこと、何の疑かあらん。宿太尉が云く、天子頃日宋江等百八人の者共は、忠義を以て主とすることを叡聞あり、則我を遣し給ひて、彼等が罪を御赦免あらしめ給ふ、此度は御手自、詔書を修へ給ひて、金牌三十六面、銀牌七十二面、紅錦三十六疋、綠錦七十二疋、御酒一百八瓶を降し賜ふ、此禮物輕かるべきや。張叔夜が云く、此御賜都て禮に當れり、況や宋江等は、禮物の輕重を論ずる者にあらず、唯忠義を以て國に報い、名を後代に揚んことを圖るのみ、太尉もし早々來り、かくの

ける は、臣不才たりといへ共、願くば梁山泊に馳て、彼等を撫諭すべし。天子聞せ給ひて、御悦斜ならず、則親手自詔書を修へ給ひて、又庫藏官に勅命有て、金牌三十六面、銀牌七十二面、紅錦三十六疋、綠錦七十二疋、并に御酒一百八瓶を取出させ給ひて、宿太尉に附與し給ひ、招安の御旗一流を賜ひて、近日發足すべきよし、勅命ありければ、宿太尉、謹で勅命を承り、明日にも打立候はんとて、直に天子に辭し別れ奉り、則文德殿を罷けり。童樞密は、百官と共に朝廷を出て、私宅に歸り、自ら大に羞て虛病をなし、翌日より參内を休にける。高俅も又此事を聞て、甚だ恐懼し、毎日鬱悶に逼て、心を煩はしめ、私に世間の風聞を窺ひ居けり。扨も宿太尉は、已に旅粧を調へ、御赦免の御旗を當先に持せ、城の南薰門を打出けるに、諸の官人共、城下迄送りしかば、宿太尉慇懃にこれを謝し、遂に別て濟州へと進發す。こゝに又戴宗、燕青、蕭讓、樂和、四人の頭領は、夜を日に繼で梁山泊に馳回り、始終のことを、宋江并びに、諸頭領に告知らせ、燕青、彼御筆の詔書を取出し、宋江に呈しければ、諸人皆是を見て、悦びざるはなかりけり。吳學究が云く、此度は必定吉左右あるべし。宋江是を聞て、九天玄女の籤を取出し、空を望で祈りけるに、果して大吉の籤を得たりしかば、宋江大に悅び、平生の願望、必ず成就すべし、戴宗、燕青は、再び途中に打出て、事の體を窺て

勝負はいかん。童貫奏して云く、臣去年大軍を率して、梁山泊を攻し時、犬馬の力を竭ざるにあらざりしかども、炎暑太しく、人馬病を得て、自ら死する者其數を知ず、是に依て、臣兵を收めて歸陣せり。其後又高俅、水陸より並び進んで攻ける處に、不圖風病に犯され、戰をなすこと能ず、是又半途より引回しぬ。天子これを叡聞有て、大に怒せ給ひ、汝奸佞の臣、何ぞ朕を誑くことの甚しきや、汝去年大軍を以て、梁山泊を攻め、只兩陣の戰に散々に敗北し、人馬を失へり、朕豈これを知らざらんや、其後高俅、多く國家の錢糧を費し、兵船を造り、莫大の民夫を苦め、これ又三陣の戰に打負て、擒となりしかども、宋江是を害せず、一命を饒せり、汝兩人、君命を辱めて、天下の笑ひを取ながら、虛言妄語を以て朕を誑かす、其つみ甚重し、朕聞く、宋江等は、州府を侵さず、良民を掠ず、只赦免の詔書を待て、國家の爲に力を罄さんと欲するに、汝がごとき賢を妬む小人、朝に在ゆゑ、下情上に達せずして、朕が大事を誤れり、本汝を罪して、衆に示し、後來を禁めんと思へども、今日は先免し置く、猶他日其罪を沙汰せんとて、大いに怒らせ給ひければ、童貫默々として退きけり。天子又諸の大臣を望で宣ひけるは、朕自ら詔書を修て、宋江等が罪を免し、國家の爲に彼等を用んと欲す、誰か敢て此度の勅使たらやんと、未だ宣ひも終らざるに、太尉宿元景、列を出で、奏し

七編　巻之六十六

○梁山泊に金を分て大に買市す

神行太保戴宗、浪子燕青、鐵叫子樂和、聖手書生蕭讓、四頭領共城門の邊に出て、拂曉を待居ける處に、城戸已に開けしかば、四人は飛が如くに城外に走り出で、直に梁山泊を望で回りけり。扨李師々は此夜燕青が回ざる故、心中略疑ひけり。翌日高太尉が家の下官、飯を送りて、後園に入けるに、彼兩人の者見えざりしかば、下官大に駭き慌てゝ、老都管に斯と告ければ、老都管自ら後園の内に入て、方々尋し處に、墻の上より二筋の索垂て、柳の樹に拴著てありしかば、はや逃去たるを知り、高太尉に見えて、此事を告けるに、太尉大に驚き、いよ〳〵憂を添へて鬱悶し、只虛病をなして出ざりける。次の日帝文德殿に出御あつて、百官の朝賀を請給ひて後、殿頭官に問せ給ふは、今日文武の列已に全きや。殿頭官奏して云く、今日左は文、右は武、其列已に全くして、群臣盡く殿下に伺候せり。此時天子左右に勅命あつて、玉簾を捲しめ給ひ、則ち樞密院童貫を召出し、問せ給ふは、汝去年十萬の大軍を引て、梁山泊を攻し時、

へ、我等兩人は、又墻の外に在て、強く索を引べし、かならず時刻をあやまち給ふなとて、約を定め遂に出にけり。樂和は再び後園の內に入て、蕭讓に此ことを告げ、此夜夜半時分、兩人齊しく墻の邊に忍び出て、待居ける處に、戴宗燕青は時刻を差へず、墻の外に至り、各一筋の索を持て、墻の內に投入しかば、蕭讓樂和、早くも柳の樹に捆著け、頓て又索を搖しけるに、戴宗燕青各力に任て強く引ば、蕭讓樂和恰も蜘蛛の網を傳ふごとく、各索をつたひて、墻の外に出で、遂に地上に下り立けり。こゝに於て四人大に悅び、此上は一刻も急く、山陣に回りて注進すべしとて、先城門の邊に馳行けり。

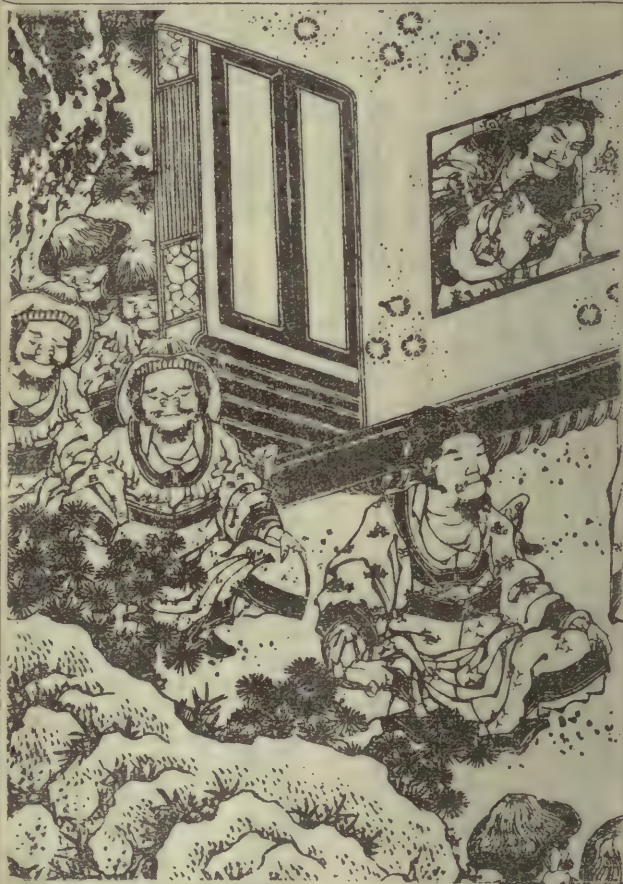
按ずるに、通俗忠義水滸傳に、此卷燕青が歌、白の字を是の字とし、又聞煥章が書簡附假名亂雜にして讀べからず。今支那の本に依て字を改め、つけがなは明白にす。論者いはく、前卷の花榮が勅使を射殺すより此卷の初め迄、高俅がなす所、勅使は高俅が臣下のごとし。されば勅使を射殺されても、もと王瑾が敎に依て、己が詔書を讀破らしめたれば、此事は問ず。其身助命されしかば、御赦免を取持んと云ふ。天子は遂に金と云えびすへ、生擒れたる位なれば、威光もなかりしならんずれ共、君臣の分を亂り敎になりがたきことなり。李師々燕青が話は大に可なり。

に在なるに、誰かよく音信を通ぜんや。時に戴宗一錠の大銀を取出し言けるは、虞候、もし樂和を引て某に遇しめ給はゞ、我今此銀を送て、寸志の禮を謝せん。虞候此大銀を見て、忽ち心を動し申けるは、梁山泊より來りたる兩人の者、實に太尉の仰に依て、後園の内にあり、我今樂和を引て汝に遇しめんに、必ず其銀を我に送り給へ。戴宗が云く、汝何ぞ、再三の言に及ばん、我決して約を違ふる者にあらず、汝早く彼を引て出給へ。彼虞候心中に悅び、汝兩人此處に在て待給へとて、急ぎ門内に入にけり。戴宗燕青暫く待居たる處に、彼虞候忙しく走り出て云く、先彼銀を我に與へ給へ、我已に樂和を引て、房間の内に來れり。戴宗これを聞て、燕青が耳に附き如此々々と低言て、彼銀を虞候に與へければ、虞候銀を得て大に悅び、遂に燕青を引て、房間の内に至り、汝兩人早く談話して立給へ、もし人有て見とがめばゆゝしき大事ならん。燕青聞て、少刻出候はんとて、則樂和に語て云けるは、我戴宗と計を施して、足下兩人を救ひ出さん、豫め用意を調へ給へ。樂和が云く、我等兩人深く後園の内に在て、四方の墻又高ければ曾て脫出ん處なし、足下等何等の計有て、我輩を救ひ出したまはんや。燕青が云く、墻の邊に樹木有や。墻の邊には都て大なる柳あり。燕青が云く、今宵四更の時分、我二つの索を墻の内に投入べき間、足下兩人此索を柳の木に捆著け、おの〳〵索を傳うて出給

て太尉の厚恩を感じ奉らん、是は輕微たりといへども、宋江敢て獻じ奉るとて、豫て用意したりけん、懷中より一盆の珠玉を取出して、宿太尉に獻じけるに、宿太尉是を收しかば、燕青大に悅んで、遂に別を告げ、再び戴宗と共に旅宿に歸りて議しけるは、事已に次第有て意思好といへ共、蕭讓樂和猶高俅が家に在事、尤是を憂ふべし、知らずいかなる計を以て、救出さんや。戴宗が云く、我汝と倶に又下官の形に出立て、高俅が家の前に徘徊し、家人の出るを待多くの金銀を送り、先消息を蕭讓等に通ぜしめ、其後計を施すべし。燕青此言に服し、兩人又衣裳を改て下官の形に粧ひ、多く金銀を懷中して高俅が家の前に至て、良久しく徘徊ひ、人や出ると伺ひし處に、年若なる虞候の官、門を出て燕青が前を過りければ、燕青進み寄て禮を行ひけるに、彼虞候問て云く、誰なれば、我を見て禮を行ひ給ふや、我曾て足下を識認ず。燕青が云く、某虞候に些談話すべきことあり、先茶坊の内に來り給へとて、三人共に入て、閣子の上に坐し、戴宗を指ざし、虞候に對して云く、甚だ率爾のことに候へ共、向に太尉梁山泊より誘ひ給ひたる、兩人の頭領の內、一人は樂和と申す者なるが、此人の爲には親類なり、これに依て何とぞ遇んと欲し、特々此邊に來られしなり、虞候憐愍を垂給ひて、音信を通じ給はらんや。彼虞候無興の體にて云けるは、汝兩人、いかんぞ此のごときことを云や、彼等兩人は、節堂の内

太尉恩相鈞座前。賤子自髫年時出入門墻三十歳矣。昨蒙高殿帥喚至軍前參謀大事。奈緣勸諫不從。忠言不聽。三番敗績。言之甚羞。高太尉與賤子一同被擄。陷於縲絏。義士宋公明寬裕仁慈。不忍加害。則今高殿帥帶領梁山蕭讓樂和。赴京欲請招安。留賤子在此質當。萬望恩相不惜齒牙。早晚於天子前題奏。早降招安之典。俾令義士宋公明等早得釋罪獲恩建功立業。非特國家之幸甚實天下之幸甚也。立功名於萬古。見義勇於千年救取賤子。實領再生之賜。拂楮拳々垂昭察。不勝感激之至。

宣和四年春正月　日　　聞煥章再拜奉上

宿太尉書簡を見て大に驚き、則燕青に問て云けるは、汝は原誰なるぞや。燕青答て云く、某は梁山泊の浪子燕青と云者なり、昔日太尉華州の廟に御代參ありし時、某數日太尉の左右に侍しに、何ぞはや忘れたまふや、宋江常に御赦免のことのみ心にかけ、向に神明を祈て、籤を求めける處に、若太尉に就て、御赦免の義を願ば、必ず吉左右あらんとの事、明かに籤の面に現れり、太尉若肯て天子に奏し給ひて、宋江等が罪を御赦免あらせ給はゞ、梁山泊十萬の人數舉

燕青道に宿元景に遇て轎上に書を呈す

や還幸ありければ、燕青は私用有よし、李師々に告て、再び旅宿に回り、始終の事、一々戴宗に告ければ、戴宗大に悅びて云く、是則莫大の幸なり、此上は一刻も早く、宿太尉に書簡を屆くべし。燕青聞て尤なりと同じ、兩人遂に旅宿を出て、宿太尉が館の近邊に至りたり。

○戴宗計を定めて蕭讓を賺す

賺すと云ふは高俅を賺して蕭讓と樂和とを奪出す義にいへり

斯る處に、宿太尉は朝廷を退出して、已に此邊を過りしかば、燕青が云く、戴公は先此處に在て、消息を待給へ、某は往て、宿太尉にまみえんとて、直に馳て、轎の前に跪き、書簡を呈し奉るよし、謹で申す。宿太尉聞て、我館に來るべしとて、遂に引て館に至りしかば、燕青堦の下に拜伏す。宿太尉問て云く、汝は何れの處より來たるや。燕青答て云く、某は山東より來れり、則聞參謀の書簡を呈し奉る。宿太尉問て曰く、聞參謀とは誰事なるや、我是を忘れり。燕青答んとする時、先々書翰を披見せば其名知れんとて、封を披き、則其名を見て、云けるは、聞參謀とは誰が事にやと思ひしに、原我と一所に在りし、同門の學友聞煥章なりしものをとて、急に書を披てこれを見る。其書に曰く、

侍生聞煥章沐手百拜奉二書

命斗を助り、這々逃歸れり、其次に高太尉、大軍を引て寄來り、天下の百姓を役につかうて、若干の海鰍船を作り、此時も十節度使の十大將に軍を扶けしめ、大軍水陸より竝で攻けれ共、是又三陣の間に打負け、十節度使、討死生捉、其餘加勢の軍將共、わづか四人のみ助り回り、數萬の人馬、兵船を一時に失ひ、剩へ高俅梁山泊に生捉れり、然れ共宋江は、高俅は申に及ず、生捉し諸將を皆助命し、宋江、高俅に對し、御赦免の義を取持給へと賴けるに、高俅早速領掌し、兩人の頭領を伴ひ回り、梁山泊には人質なりとて、參謀聞煥章を留め置けり。天子叡聞有て、大に嘆息し給ひ、朕焉ぞ此ことを知らんや、童貫は軍馬暑氣に疲て、傷ふ者多きゆゑ、暫く軍を收て歸陣しけると奏し、高俅は又病を得て、征伐なしがたきゆゑ、先戰を止て、歸京せしよし奏せり、此輩何ぞかくのごとく朕を誑くや。李師々奏して云く、陛下、最聖明なりといへども、九重の深きに居給ふゆゑ、民間のことを知り給はず、却て奸臣等に、賢路を塞れさせ給ふなり。天子ます〳〵嗟嘆し給ひ、燕青は、童貫高俅が軍の次第、宋江等がつねに忠義を思へども、上に達せざる事共、逐一明白に奏聞しければ、肇て事情を曉し給へり。扨夜も漸更ければ、燕青頓首して、天子を拜し、遂に御前を退き、天子は自ら、李師々が手を携て、床の上に登り給ひ、常より御悅の體に見えさせ給ひ、此夜五更の一點に、天子はは

神霄玉府眞主宣和羽士虚靖道君皇帝。特赦二燕青本身一應無レ罪。諸司不レ許二拿問一。

天子已に詔書を書せ給ひて、其下に又書判を押て、燕青に賜りしかば、燕青再拝して聖恩を謝し奉る。李師々も同じき想ひに有難と、上恩を謝し奉つて、悦ぶ事限なし。天子又燕青に問ひ給ふは、汝已に梁山泊に在なば、彼處のこと委細に知りつらん、詳に奏聞せんや。燕青謹で奏しけるは、宋江等諸の豪傑共、旗の上に替レ天行レ道と云四字を書て忠義を守り、敢て州郡を犯さず、尤良民を害せず、只濫官汚吏讒佞の輩を殺し、専ら御赦免の詔書を待て、國家の爲に力を竭さんと欲す。天子宣はく、朕向に兩度まで赦免の詔書を降しけれ共、皆朕に違いて歸順せず、豈敢て國家の爲に力を竭さんや。燕青奏していはく、初の詔書には、一點も恩澤憐愍の詞あらず、妄に權威のみを逞し、豪傑を嚇さんとし、剰へ御賜の御酒を村酒に換て、甚だ欺きける故、宋江等敢て歸順せず、其次の詔書には、肝要の一句を讀破り、宋江を除て外の輩を御赦免有よし、讀聞ける故、此時も又事變じて歸順せず、初め童樞密莫大の軍馬を引き、八路の都監八人も、許多の勢を以て童貫を助けしめられ、梁山泊に推寄けれ共、唯兩陣の間に打負け、八路の將或は討れ生捕れ、其外兵過半を失ふ、宋江は特と童貫を討留させず、

者なれば、胸中のこと御前にて奏しがたし。天子の宣く、汝に罪あらば、朕これを免さん、汝早く委曲を奏聞せよ。燕青これに於て、再拜して奏しけるは、臣幼き時より江湖に飄泊して、山東に流落し、一人の商客に隨て、梁山泊の下を過りし處に、彼山の豪傑に活捕れ、三年餘り滯留して、梁山泊の陣中にあり、今日偶身を脱れて、都に囘りしか共、未敢て街を奔走せず、其故はいかんとなれば、若人有て臣を捉へなば、臣必ず分說すること能ずして、非命の死を致さんことを恐れてなり。李師々も又奏して云く、彼者が心中には只此事のみ苦んで、晝夜心を安んぜず、望らくは、陛下御憐を垂させ給へ。天子宣く、汝は李師々が爲には表弟なれば、誰か敢て汝を捉んや、汝必ず心を安んじ、街を奔走せよ。此時燕青暗に李師々を見て、腰眼したりしかば、李師々早くも其意を曉し、又天子に奏して云く、陛下もし宸筆にて、御赦免の勅書を書せ給ひて、彼者に賜りなば、婢妾則ち安堵すべし。天子宣く、此處には朕が玉印もあらざるに、いかんぞよく詔書を書んや。李師々が云く、陛下宸筆を染給はんに何ぞ玉印を論ぜんやとて、再三再四詞を磬し奏しければ、帝已ことを得給はず、御手自筆を取て、燕青が名を問給ふ。燕青が云く、臣が姓名は燕青と號す。天子是を聞給ひて、早速御筆にて一紙の詔書を書給ひて曰く、

給ひしかば、燕青謹で奏しけるは、臣が學びたる處の曲は、都て淫詞の艷曲なるに、いかんぞ御前にてこれを唄ひ候はんや。天子重て曰ひけるは、朕私に此處に忍び來るは、艷曲をも聞て心を慰んが爲なり、汝少しも遠慮なく唱ふべしと、勅命已に下りしかば、燕青謹で帝を拜し、忽ち喉を開て、歌ひける。其曲にいはく、

一別家鄉音信杳。百種想思腹斷何時了。燕子不來花又老。一春瘦的腰兒小。薄倖郎君何日到。想自當初莫要相逢。好著我好夢欲成。還又覺綠窓但覺鶯聲曉。

燕青已に歌ひ罷りし處に、天子其韻の淸きことを聞せ給ひて、御歡限りなく、再び歌ふべきよし勅命有ければ、燕青謹で又一曲を唱ふ。其曲にいはく、

聽哀告。聽哀告。賤軀流落誰知道。誰知道。極天罔地罪惡難分。顚倒有人提出火坑中。肝膽常存忠孝。常存忠孝在朝須把大恩人報

燕青已に歌ひ畢りしかば、天子大に驚き給ひて、問せ給ふは、汝何故此曲を唱ひぬるや。燕青聞も敢ず、忽ち流涕して、地上に拜伏したりけるに、天子愈疑せ給ひて宣ふは、汝が胸中のこと詳に訴へよ、朕汝が爲にこれを理會せん。燕青奏して云く、臣は已に大罪を犯したる

李師々に訴て云けるは、娘子今晩我をして天子を拜せしめ、其上にて御赦免の詔書を乞求め給はらば、娘子の鴻恩、天地と同じく、齒を沒るまでこれを忘るまじ。李師々が云く、我今晩汝を呼出して、天子に見えしめんこと最易し、汝只平生の遊藝をもつて、天子の御心を慰め奉れ、然らば御赦免の詔書を求めんこと、是又難かるまじとて、已に議を定め、天子の著御を待居けるに、一更の時分に至て、天子一人の小黃門を從へ給ひ、李師々が家の後門より忍ばせたまひて、後堂に御入ありしかば、李師々常よりも華やかに粧うて、御駕を迎へ奉り、種々の珍物を獻じて、御盃を勸めければ、天子叡感斜ならずして宣ひけるは、汝近く進んで朕が心を慰よ。此時李師々、近く御前に伺候して、奏しけるは、叡聞に達し奉るは、恐多くは候へども、婢妾一人の表弟、年久しく外鄉に流落てありけるが、今日婢妾が家に歸り、何とぞ天顏を拜し奉らんと、再三是を願ひしか共、勅命降らざる間、妄に彼を出さず、伏して願くは、陛下御憐憫を垂給へ候へかし。天子の宣く、汝が表弟にて有ならば、朕今彼に遇ふとも、何の妨あらん、急ぎ召出せと、勅命有ければ、小三板頓て燕青を引て、御前に至る。燕青已に天子を拜し奉つて、傍に跪く。天子燕青が人物の風雅なるを御覽有て、御悅の體に見えさせ給ひしかば、李師々此機に乘じ、燕青に簫を吹しめけるに、天子御感悅有て、又曲を歌ふべきよし命じ

るべけれ共、燕青は心鐵石のごとき、眞の豪傑なれば、酒食に本心を亂す族にあらず、かくのごとき仁義のことを以て、李師々が心を抑へけるは、智慮深き英雄なり。燕青又李老母を迎へ拜をなし、親子の約をぞ誓ひける。已に燕青は李師々に辭して囘らんと欲しければ、李師々云く、燕青容屋に滯留あらんより、我家に歇み給へ。燕青が云く、娘子既に懇情を盡し給ふ上は、我先旅宿に歸り、行李を取て、少刻來るべし。李師々が云く、我專ら汝を待んずる間、一刻も早く來り給へ。燕青が云く、我旅宿は此處より遠からざれば、早速來り候はんとて、遂に別れて旅宿に歸り、始終のことを戴宗に語り聞ければ、戴宗欣悅し、已にかくのごとくば、これ十分の幸なり、然れ共燕公心を收めて、酒色を守り給はんこと、恐らくは難からん。燕青が云く、大丈夫たらん者、もし酒色に心を亂され、其本を忘れなば、禽獸と相同じ、某もし不義の心あらば、身を劍戟の下に去すべし。戴宗打笑て云く、大丈夫何ぞ是等のことに誓を立候や、早々彼處に往て、大事を成就なし得給へ、宿太尉へ送る書簡をも、足下の囘るを待て、これを呈すべし。燕青聞て可なりと同じ、又多く金銀を取て、再び李師々が家にかへり、則此金銀を二つに分け、其一つは李老母に送り、又其一つは一家の男女に與へけるに、衆皆大に悅びて燕青を敬ひけり。此夜幸ひ天子の御忍び有よし、先達て告來りしかば、燕青これを聞て、

ば、燕青深く感歎し、某も一曲唱ひ候はんとて、忽ち喉を開いて唱ひけるに、其韻甚だ淸かりければ、李師々益感悅し、又盃を取て燕青に勸めけるに、燕青これを謝して一連に數盃を酌み、酒已に酣なりし時、李師々只管燕青に戲れしかば、燕青は唯頭をたれ、默然として言ず。李師々又咲を含で云けるは、燕青は一身に花を刺し給ひぬと聞けるに、願くばこれを見せしめ給へ。燕青は笑て云く、某が身體に幼き時より、花を刺したりしか共、豈あへて娘子に見せ進せんや。李師々が云く、燕青何故慇懃のことを云給ふや、速に見せしめ給へとて、頻りに望ければ、燕青已ことを得ず、衣服を脫で見せけるに、李師々これを見て、大いに悅び、尖々たる玉手を以て、燕青が身を摸ければ、燕青慌て忙き衣服を著し、再び恭しく坐しにける。李師々又酒を以て燕青に勸め、只顧戲を云て、事已に急に見えしかば、燕青心中に想道く、李師々、若再三我を惹ば、我終に又辭すること能ふまじきに、豫じめ計を以て、此事を避んとて、則李師々に問て云けるは、娘子の青春は幾何ぞや。李師々答へて云く、今年二十七歲なり。燕青が云く、某は今年二十五歲にして娘子には二才の弟なり、娘子若某を憐み給ふ心あらば、我娘子を拜し姐とせん、娘子も又我を弟とし給へとて、則身を翻し急ぎ李師々を拜しける。燕青もし尋常の人ならば、此時李師々に愛て、宋公明が大事をも、誤

燕青これを謝して云く、某天情酒を飲こと能ず、願くば娘子酒を饒し給へ。李師々が云く、遠路來り給ひて、嘸疲候はん、先酒を酌給へと、告に勸ければ、燕青辭すること能ず、李師師とともに、獻酬數盃に至りけり。此李師々は原風流の妓女、水性の人なれば、燕青が人物の風雅なるを見て、春心を動し、略戲を云けるに、燕青は伶俐なる者なれば、はや李師々が心底を察し、若こゝに於て心を動さば、宋公明の大事を誤んと思ひ、愈愼で動ずる氣色はなかりけり。李師々がいはく、燕公は諸藝に達し給ふとなるに、簫にても吹候はんや。燕青が云く、某頗る吹彈、歌舞を學しかども、いかんぞ娘子の前にて弄ばんや。李師々が云く、我先一曲を吹候はん、燕公是を聞給へとて、則簫を取て吹けるに、流石は上手と覺えて、雲を穿ち石を裂の聲ありしかば、燕青大に喝采にけり。李師々已に吹罷て、簫を燕青に與へて云けるは、燕公も一曲吹候ひて我に聞しめ給へ。燕青是を聞て、心中に想道く、我今簫を吹て、李師々が心に合ひなば、宋公明の大事を圖るに、必ず易からんとて、遂に簫を取て、一曲吹ければ、其聲清雅にして、文多かりしかば、李師々聞て大に稱美し、燕公は元來諸藝に通達し給ひぬと、聞及しかども、よもかく迄はあらじと思ひしに、比類なき上手かなと、再三再四これを感じ、又歌を唱ひ、燕青聞しめけるに、果して黃鳥の鳴がごとくにして、餘韻悠揚たりしか

句一言も、恩澤のことあらず、剰へ御賜の御酒を村酒に換て人を欺けり。其後又詔書降りける處に、肝要の一句を讀破り、

除宋江盧俊義等大小人衆所犯過惡竝與赦免

と云句を分て、除宋江と讀て詔書を申渡しゆゑ、諸頭領皆是を憤て、未だ朝廷に歸順せず、向にも童樞密と相戰て、只兩陣の内に、官軍多く討取り、童樞密を追散しける、其次に高太尉來て、水陸より攻けれども、是又三陣の内に悉く諸將を討捕り、高太尉を生捉たり、然れ共宋江是を殺害せざりしかば、高太尉大に悦び、則誓を立て云けるは、我都に回らば、早速帝に奏聞し、御赦免の義を調ふべき間、兩人の頭領を伴んとて、蕭讓、樂和兩頭領を引て歸京し、梁山泊へ生捉し諸將も、皆免し置しを、高太尉僞なき證據に、人質に留置候へと有けるを、皆送り回すに及で、聞煥章一人を、是非留よとて質とし、梁山泊に止め、皆歸京ありしが、召具し給ふ兩人の頭領も、己が家に藏し、未だ山陣にもかへらず、此度軍に打負け、千萬の人馬を失ひしを、私にこれを藏し、天子を欺くと覺えたり。李師々が云く、高太尉多くの人馬を失ひしことといかんぞ、敢て天子に奏せんや、今高太尉は、虚病を構へ、家に在とは我老早これを知れり、燕公先酒を酌て疲を慰め給へ、此ことに於ては我宜しく議せんと云ければ、

が子孫小旋風柴進なり、門前に在し兩人の同作は、一人は神行太保戴宗、一人は黑旋風李逵なり、某又張閑と云しと僞けるが、實は浪子燕青と號し、原北京大名府の者なり、宋江去年此處に至て、娘子に見たるは、毛頭も歡樂を求るにあらず、何とぞ娘子の内緣を賴て、我輩皆忠義の志あることを天子に奏聞し、御赦免のことを願ひ奉んが爲なり、今朝廷には、奸臣道に當つて、讒佞權を振ひ、擅に賢路を塞て下情上に達すること能ず、是に依て、娘子の内緣を賴んと欲して、宋江自ら此處に至りし處に、思ず禍を惹出して、娘子を驚しめ、宋江つねに是のみ歎はしく思ひ、此度又某を遣して、禮物を送り奉る、尤輕少たりといへども、是を笑納し給はゞ、宋江が悅びこれに過たることあらじとて、則一包の金銀を取出して李師師が前に閣きければ、彼老母若干の金銀を見て、心中に悅び、早速これを收めて、燕青を後堂に邀へ、種々美を盡し、懇に饗應し、李師々自ら慇懃に管待ければ、燕青謝して云く、某は死に到る罪人なるに、豈敢て娘子の款待を蒙らんや。李師々が云く、燕青何故謙退し給ふや、梁山泊の人々は、都て義士たること聞及びしか共、朝廷に賢臣あらざる故、燕公等のこと、未だ叡聞に達せずして水泊に棲ひし給ふなり、誠に惜き義士かなとて、憐を含て云ければ、燕青是を聞て、心中に悅び、又告て云けるは、向に兩度まで御赦免の詔書降りしか共、詔書の内半

我今李師々に見えて語度ことあり、願くは娘子に遇しめ給へ。李老母が云く、汝去年我家に來て家を燒き、今更何のことありや、速にこれを語れ。燕青が云く、李娘子出給ひなば我具に心事を語らん。李師々は窓の下に在て此言を聞き、則洋々然として出來る。燕青これを見て、急ぎ拜をなしければ、李師々も急に禮を還して、座已に定りし處に、燕青恭しく云けるは、去年は來て貴宅を鬧し、此罪尤輕からず。李師々云く、汝去年彼山東の客を引て我家にいたり、遂に火を放つて帝を驚しめ奉り、我家禍大いなりしか共、我巧言令色を以て奏聞しける故、禍を免れて無事なり、若然らずんば、豈よく今日を保んや、彼日山東の客が作りし詞の内に、

六六雁行連　八九只管金雞消息

と云二句あり、我曾て此意を曉さず、已に問んと欲ふ處に、帝の著御と聞し故、慌しく走り出て、終に其意を問ず、今に於て疑さらに晴ざるに、汝又來るこそ幸なり、少しも藏さず、彼客等が事を詳に告知せ候へ、若一點にても僞らば、我決して汝を免すまじ。燕青が云く、我實に彼等がことを詳に語らんに、娘子必ず驚き給ふことなかれ、其夜上座に坐したる、面色黒き小漢子は、梁山泊第一の頭領呼保義宋江なり、其次に坐したる面色白き壯年は、晁世宗

と云ことを知ず、汝只管我輩を擱らんより、梁山泊の賊來るを待て、緊く擱るべし、汝眼あらば、是を見よとて、豫て用意やしたりけん、假公文を取出して、彼下官等に見せしめければ、彼下官共これを見て、足下兩人果して開封府の人ならば、速に入給へ、此節は誰人を論ぜず都て改を加る間、先此の如く問けるなり、必ず恨み給ふなとて、慇懃に云ければ、燕青再び公文を取り、袖に入れ、戴宗と共に呵々と唉て、城中に入直に開封府の前に至て、旅宿を求め、此夜は穩に歇けり。翌日燕青衣服を著し、閑人の形に出立て、一包の金銀を携へ戴宗に對し云けるは、某今日は且李師々が家に往て大事をなさんに、戴公は爰に在て消息を待給へ、萬一何等の禍有ことを聞給ひなば、自ら梁山泊に急ぎ回て注進し給へとて、終に旅宿を出李師々が門前に至り、且頭を擡げ望見るに、去年李逵に燒れて後新に建たると覺えて、門戸樓閣以前よりも甚だ美麗なり。燕青已に簾を掲げて内に入、直に客座の前に至て、其邊を見るに、佳香馥郁として、尋常ならぬ光景なり。燕青暫く候ひける處に、一人の小三板出て問けるは、貴客は何等のこと有て、此處に至り給ふや。燕青答て云く、我は只李老母に見えん爲此處に至れり、汝早く入て、李老母に斯と報べし。小三板此言を聞て内に入り、則李老母に告ければ、老母早速出て燕青を見、忽ち大に驚て云く、汝いかんぞ又我家に至るや。燕青が云く、訝かること勿れ、

聞煥章答て云く、宿太尉は原某とは同學の朋友なり、彼人已に太尉の位に昇て、朝夕帝の御前に侍り、尤賢の譽高き仁義の士なり。宋江が云く、某等私に慮るに、高太尉都に回り給ふ共、我等が爲に御赦免のことを、奏聞有んは不定なるべし、是故に宿太尉を頼で、御赦免のことを願ひ奉らんと欲す、殊さら宿太尉は、某と知人なれば、憐を垂給ふこともやあらん。聞煥章これを聞て云けるは、將軍既にかくのごとくば、某書簡を修て、委細に頼み遣すべし。宋江聞て大に悦び、先九天玄女を拜して、籤を求けるに、上々大吉の籤を得たりしかば、早速聞參謀に書簡を修へしめ、若干の金銀と共に、戴宗燕青に與へ、東京に至る日少しも誤ず事を行ふべしと、命じければ、兩人の頭領命を承り、則下官の形に出立て、此日山を下り、直に東京を望んで進發し、夜を日に續で急ぎしかば、不日に東京に至て萬壽門より、城に入んとせし處に、城門を守る下官共、兩人を攔りて、いづれに行やと、問ければ、燕青郷談を使て云けるは、足下等我を咎るはいかん。下官共が云く、梁山泊の盜賊城中に紛入んことも有べければ、城門の出入誰によらず緊しく改べきよし、開封府よりの仰を蒙りし故、かくの如く改るなり。燕青哈々と打咲ひ云く、汝等は定て物馴たる人ならんに、何故自家の者を識認ざるや、我等兩人は幼なき時より、開封府に在て小卒となり、此門を出入すること幾萬遍

置き、天子に見えしめんこと、會て是あらじ、若御赦免のことを思ひ給はゞ、空しく神力を勞すのみならん。宋江が云く、已にかくのごとくんば、今更是をいかゞせんや。吳用が云く、聰明伶俐人に勝れたる者、兩人を擇出し、多く金銀を與へて都に遣し、何とぞ内緣を求めさせ、此度のことを私に奏聞致させなば、高俅自ら藏すこと能ずして、遂に奏聞すべければ、御赦免の事必ず調はんと、議しける處に、燕青進み出て云けるは、某去年宋君に隨て、李師々が家に行し時、李逵火を放て、李師々が家を燒ければ、李師々定て、内心我輩を恨むべけれども、此度又多く金銀を送て、彼を賴ば、彼舊惡を忘れて、我輩の爲に宜しく帝へ奏すべし、恐らくは是に過たる内緣有まじきに、某又東京に馳て計を行ふべし。宋江が云く、汝此度東京に行ん事、尤危ふければ、畢竟いかゞあらんとて、未だ議を決せざる處に、戴宗すゝみ出て云く、某共に東京に馳て計を行ん、宋君心を安んじ給へと申ける。此時又神機軍師朱武、進み出て云けるは、宋君昔日華州を擊給ひし時、宿太尉に遇給ひて、恩を蒙り候ひつるに、何ぞ此人を賴み給はぬや、此宿太尉は原仁心深き人なれば、宜しく奏聞し給ふ事有べし。宋江是を聞て、九天玄女の詞に遇宿重々喜とあるは、此宿太尉の身の上に應ずることもやあらんとて、彼聞參謀を忠義堂に邀へ、宋江是に問けるは、聞相公は、太尉宿元景を識認給ふや。

俅、又再三別を告て京に歸らん事を急ぎければ、宋江等敢て留ず、早速宴を設け、別の盃を勸ける。高俅が云く、諸豪傑の内、誰にても、我に隨て來り給へ、我直ちに引て天子に見え奏り、則足下等の忠義あることを、詳に奏聞すべし。宋江此言を聞て大に喜び、吳用と商議して、誰を遣して可ならんやと問けるに、吳用がいはく、聖手書生蕭讓に、鐵叫子樂和を相添て遣すべしと、已に議定したりしかば、高太尉又いはく、我已に豪傑等の賴を請し上は、聞參謀を山陣に留め人質とせんに、必ずこれを辭し給ふことなかれ。宋江此言を聞て、益悅び、種種珍物を重ねて饗應し、翌日早天に、宋江、吳用、二十餘騎を引連れ、高太尉幷に、諸の節度使を送つて、金沙灘に至り、恭しく高俅に別れて、山陣に回りけり。高太尉は諸人と共に、梁山泊を離れ、濟州に回りしかば、張太守幷に、周昂、王煥、項元鎭、張開等都て城外に出て相迎へ、先高俅が恙なきを賀しにける。高太尉已に城中に入て、二三日逗留し、則三軍に號令を傳へ、諸節度使とともに、兵を引て濟州城を打出ち、東京をさして進發す。此時宋江は、吳用に問て云けるは、高俅もし都に回りなば、御赦免のこと果して調べきや。吳用打笑つて云く、我曾て高俅の相を觀るに、蜂目蛇形あり、是則義を忘れ恩を背く、魂表に現る、彼已に若干の人馬を失ひしかば、必然これを羞て、虛病を構へ、蕭讓、樂和をも、唯己が家に留

太尉高球
燕青と相撲を
挑て倒さる

入て再び酒を酌給へとて、手を携て堂上に入けるに、高俅は自ら深く恥不興の體に見えにけり。宋江又盃を改めて飲酌を催し、日已に暮れ、夜はや闌なりしかば、宋江自ら高俅を延て後堂に歇せけり。翌日宋江又酒宴を設けて、高俅をもてなしける處に、高俅已に別れを告て、都に回らんと欲しければ、宋江が云く、某等、曾て異心あらざるに、何ゆゑ早回らんと欲し給ふや、若一點も僞あらば、天の罰を蒙て、誅戮を免るまじと、誓ひを立ければ、高俅是を聞て云けるは、足下等肯て我を回し候はゞ、我宜しく奏聞を遂げ、御赦免の儀を調ふべし、若違變することあらば、早速罰を被て身を鎗箭の下に亡すべし、足下等尚疑ひ給はゞ、此度活捉られたる諸將等を、山陣に留め置き、これを人質とし給へ。宋江拜謝して云く、太尉は是朝廷の貴官なれば、定て虚言有べからず、何ぞ必しも人質を止めんや、某等眞に忠義の心を思はざらんには、我山陣の豪傑をふるつて京に攻入らば、今日諸將に別るゝ共、再び山陣に伴んこと掌を反すより安し、我輩皆忠義を思ふのみにて、朝廷の官人は犯し凌ぐことなからしむ、縱ひ詔命にもせよ、撫諭のことなく、權威を以て屈伏せしめんと有ては、梁山泊一統、命を棄ても、伏する者一人もあらず、太尉我等が心服を察し給ひて、御執成を願入て候なり、但し先數日逗留あつて、休息し給へとて、此日も又夜に入迄飲酌をなしけるに、次の日高

七編　巻之六十五

○燕青月夜道君に遇ふ

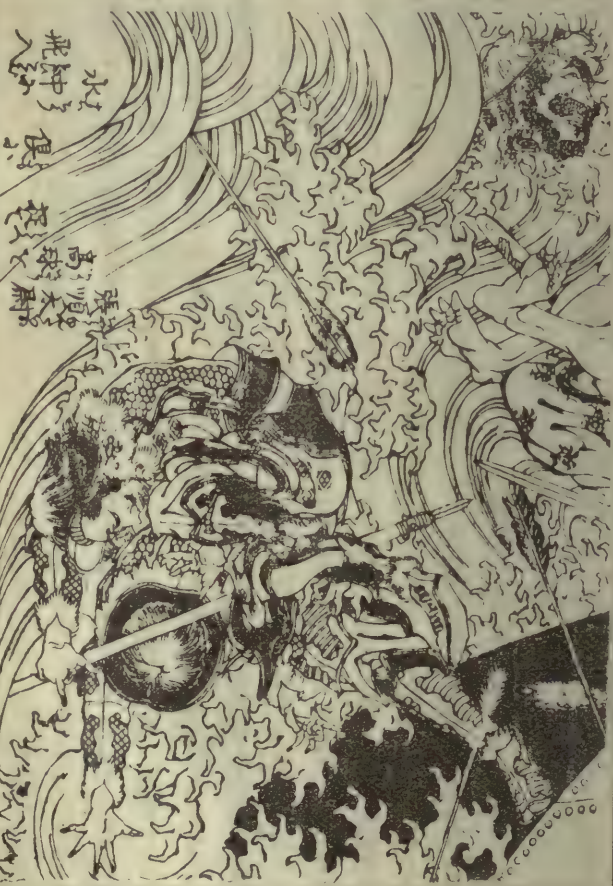
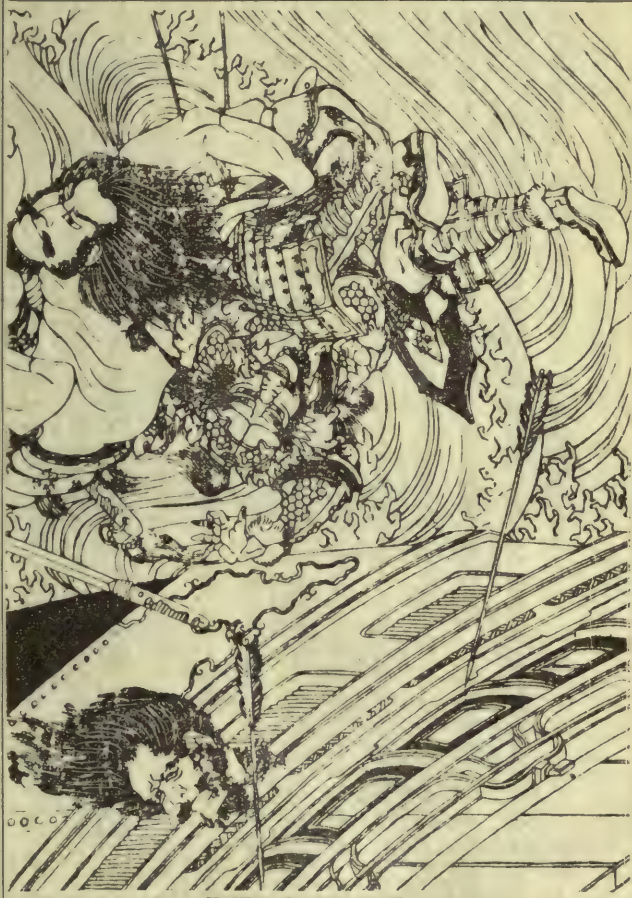
太尉高俅梁山泊の款待に依て、酩酊に及び、憚りなく云けるは、我昔日相撲を好で、能其術に達し、天下に於て一人も對手なし、知らず諸豪傑の内に、相撲の上手ありや。盧俊義此誇言を聞て、心中に惡み答て、當山陣に頭領たる者、力を以て他と競ふこと、上手とは申難けれ共、心得ざる者一人もなし、其中にも未熟ながら、これにある燕青と申者、近來岱岳廟に於て、天下無雙の上手と云し頭籌に贏て、名を遠近に振ひ候へ共、當山陣に於ては、誰々も此位の業は心得ある處なりと、未だ言も罷ざるに、高俅衣服を脫捨て躍出で、燕青を對手にして、一番撚んと望みければ、燕青是を見て、宋江が心を憚りしかども、高俅再三望みければ、燕青遂に衣服を脫で進み出で、兩人堂外に於て相撲を初め、暫く相担て見えけるが、燕青早く高俅が胸に著て、一折き折ければ、高俅忽ち身を翻して倒れけり。宋江、盧俊義一同に出て、高太尉を扶け起し、故意打笑て言けるは、今日太尉酒に醉給ひ、いかんぞ相撲に贏給ふ氣力あらんや、先席に

按ずるに、通俗忠義水滸傳に葉春を葉と訓しは非なり。周の時國の名姓となりしなり。又同書に高俅に從ひし梅展は、薛永搠伏て首を刎とあり。末に四頭領梅展を生擒來るとあり。是は四人徐京を生捉と云を誤りしなり。此四人鄭天壽、薛永、李忠、曹正、相討の高名なり。梅展も薛永が討しゆゑ是よりあやまりしなるべし。徐京の活捉二ケ所有り、是又あやまりなるべし。

興は葉春、王瑾が首を獻ず。解珍、解寶は聞參謀、并に妓女表子等、盡く活捉て引來る。打もらしたる者とては唯彼周昂、王煥、項元鎭、張開等四人のみなり。已にして宋江は自ら諸將の綁を解て、盡く皆堂上に扶上げ、牛を殺し馬を宰り、美々しく宴を設け、懇に饗應す。宋江盃を執て高太尉に勸て云けるは、某等諸人原來朝廷に背くの意なきといへども、恨らくは世を逼られ身を立べき處あらざる故、只此山陣に籠て難を避け候處に、毎度天兵を發して攻しめ給ふ故、已ことを得ずして一戰をなしぬ、先に兩度迄御赦免の詔書を降し給ひしか共、奸臣中に在て妨をなし、擅に我輩を阻て朝廷の大事を誤てり、伏して願くば、太尉某等を憐給ひて、救ひを垂給へ、若御赦免を蒙りて再び國家の臣となりなば、太尉の厚恩死を以て報ずべし。高俅此言を聞て、左右を見るに、諸頭領共、威風凛々として座に列り在しかば、高俅心中深く怕れ、則答て云く、宋公明足下等必ず心を安じ給へ、我若都にかへりなば、足下等の忠義を委く帝へ奏聞し、御赦免のことを願ひ奉り、衆皆官に陞らしめ進らせんこと、何の難き所あらんと、早速領承したりしかば、宋江是を聞て大に悅び、猶再三珍物を盡し、高俅等を款待し、酒已に闌に至りし處に、高俅甚だ爛醉に及びけり。高俅梁山泊に於て相撲の勝負をなすより、次卷に明か也。

遂に十餘合戰ひしか共、未だ勝負を分たざりける處に、後軍の官兵大に亂れ騷動す。原梁山泊の大軍山前山後に埋伏して在けるが、此時已に賊の聲をあげ突て出で、四方より夾で攻戰ふ。東南には關勝、秦明あり。西北には林冲、呼延灼あり。此四大將は各萬夫不當の勇ある豪傑なれば、項元鎭、張開敵し戰ふこと能ず、遂に鋒を逆にして、逃去けり。周昂、王煥も又戰に利を得ず共に馬を飛して、濟州城に逃入り、先三軍を城中に屯しけり。扨宋江は水戰を掌て高太尉を活捉たると聞しかば、早速戴宗を馳て、妄に官兵を傷ふこと勿れと、三軍に觸しめ、遂に山陣に回り、宋江、吳用、公孫勝等、都て忠義堂の上に在し處に、張順水濕たる高俅を高手小手に綁し揚、已に堂前に引立至りしかば、宋江慌忙き、高太尉が綁を解て、堂上に扶け上げ、則身を翻し拜をなしけるに、高俅急に禮を還さんとしけれども、吳用、公孫勝、親自高俅を扯住めて、宋江が拜を請しめける。宋江已に高太尉を拜し畢り、又燕青を馳て三軍に觸けるは、いまより後若誤て官軍を殺す者あらば、軍法に依て罰を行んと、嚴に號令を傳へしむ。かゝる處に童威、童猛は徐京を活捉て引來る。李俊、張橫は、王文德を活捉て引來る。楊雄、石秀は楊溫を活捉て引來る。三阮兄弟は李從吉を活捉て引來る。鄭天壽、薛永、李忠、曹正は徐京を活捉て引來り、薛永兼て梅展が首を獻ず。楊林は丘岳が首を獻ず。李雲、湯隆、杜

○宋江三高太尉を敗る

徐京、梅展これを見て、丘岳を殺したる水軍はもと親方の水軍にあらず、夫脱すなと、下知して、兩人等しく楊林に砍てかゝる。こゝに於て又四人の頭領一同に出て楊林を相助く。一人は白面郎君鄭天壽、一人は病大蟲薛永、一人は打虎將李忠、一人は操刀鬼曹正なり。此四人、各軍器を擧て進しかば、徐京これを見て、敵し難くや思ひけん、急ぎ水中に跳入し處に、又水底に人有て、遂に徐京を活捉けり。薛永は梅展と鎗を合せ戰ひけるが、是又梅展を搠伏て、早速頭を刎落しぬ。猶別に三人の頭領鎗を撚て搠來る。一人は青眼虎李雲、一人は金錢豹子湯隆、一人は鬼臉兒杜興なり。諸の節度使縱ひ三頭六臂ありと云共、豈よく是等の頭領に敵せんや。原宋江盧俊義は、水陸に分れて戰ひけるが、宋江は水戰を掌り、盧俊義は步軍を掌る。此時盧俊義は諸將とともに、人馬を引て山前の大路に打て出で、敵の先鋒周昂、王煥等を迎へて戰を挑む。周昂已に盧俊義を見て、眞先に進み出で、大音聲に呼り罵りけるは、汝反賊我を識認たるや。盧俊義これを聞て、甚だ怒り、汝賊官死眼前に在を知らずして、猶大言を吐出すや、汝等我手なみを見せんとて、鎗を撚て馬を躍せ、直に周昂に搠てかゝる。周昂大斧を擧て相迎へ、

れて、水頻りに滾入ければ、諸船の軍士共、一度に呼て、こはいかにと慌てける。看々若干の官船水中に沈しかば、梁山泊の小船共は、官船を望んで攻來る。高太尉これを見て、此たび新に造りし海鰍船、何ゆゑ水漏るやと、奇異の事に思ひけり。是則水軍の頭領張順手下の水軍を引て水中に沈み、鑿を以て船底に孔を鑿しゆゑ、かくのごとく水滾入て、官船都て沈みけり。高太尉樓の上に上て後軍の船を招きし處に、水底より一人の頭領現れ出で、高俅が船の上に跳上り、我肯て太尉を救はんとて、高俅を揪へて共に水中に跳入たり。此時梁山泊の小船早くも漕來て、高俅を船の上に引上げ、恰も飛がごとくに漕かへしぬ。今高俅を捉へて水中に跳入たる頭領は、浪裡白跳張順なり。張順水中に在て人を生擒は、甕の内を探て鱉を取がごとくなり。此時丘岳は親方の陣勢亂れたるを見て、急ぎ此處を逃出でんと圖りける處に、傍にありし水手等が内より、一人の水軍躍出で、直に丘岳を望で搠かゝる。丘岳は只親方の水軍にてぞ有らめと、原來油斷して在しかば、さらに手を措に及ず、遂に搠れて、水中に落入けり、此水軍は、則梁山泊の頭領錦豹子楊林なり。老早より官軍等が内に紛入てありしかども、丘岳是を知らずして、既に今殺されけるこそ運の究なり。

等に火炮火箭を放たせける處に、彼船の水軍共、又水中に跳入けり。丘岳こゝに於て、又三艘の船を得、彌興を添て漕行けるに、又三艘の小船漕來る。各七八人の軍士あり。中なる船の大將は混江龍李俊、左なる船の大將は船火兒張横、右なる船の大將は浪裡白跳張順なり。此三將一同に呼て云けるは、汝賊官等多くの船を我梁山泊に送り來る事、我甚だ感謝に堪ざるなり。丘岳等三人の大將是を聞て大に怒り、射手を揃へて射させければ、彼三頭領并水軍等都て水中に跳入けり。此時十一月の天氣にて、水面も冷かなりければ、官船の水軍等は敢て水中に入ず、只管猶豫して居ける處に、梁山泊の頂に、相圖の砲頻りにひゞきしかば、蘆葦深き處より、一千餘艘の小船一度に漕出で、船ごとに五六人の軍士あり。官船ども進み戰はんとしけれ共、水底に木石を沈めて、水路を塞ければ、彼海鰍船かつて進むこと能ず、只遠矢を射かけしか共、梁山泊の船には多く鐵牌を用て防ぎければ、箭に中る者一人もなし。兩軍の船已に近づきし處に、梁山泊の水軍ども、撓鉤を以て官軍四五人、水中に鉤落しければ、官軍共是を見て大に驚き、急に馬を退んとしけれ共、其邊の水路はや木石を以て塞ぎしかば、再び船を動すこと能ず、遂に戰を始し處に、後軍の船大に呼て騒動す。高太尉是を聞て、聞煥章と共に岸に上らんとせし處に、蘆葦の内に又金鼓の聲大に響き、官軍恐るゝ處に、官船の底破

乘る。高俅已に大小の海鰍船を前後に列ね進發す。高太尉は聞煥章と共に中軍に船を備へ、彼妓女表子等をも同じ船の中に携たり。丘岳、徐京、梅展等は數十艘の船を領し、先陣にすすむ。楊溫、長史王瑾、葉春等も數十艘の船を領して、其後に相從ふ。王文德、李從吉兩人は、後陣に在て船を備ふ。船毎に旗劍戟を立ならべ、誠にゆゝしき有さまなり。既にして大小數百艘の海鰍船、喊き叫んで梁山泊へ寄來る。宋江吳用已に此事を知りしかば、豫め備を設け、官船の至るを待懸ける處に、官船共はや近々と進みければ、梁山泊の水軍より三艘の船漕出づる。船毎に十四五人の軍士有て盡く身に衣甲を著し、各一流の旗を建て、旗の上には阮氏三雄と云四字を、大文字に書き、中なるは阮小二、左なるは阮小五、右なるは阮小七なり。此三兄弟金銀を鏤たる甲を著しければ、日に映じて輝きけり。官船の大將丘岳、徐京、梅展、三軍に下知して、火炮、火棒、火箭一度に放せけれども、三阮少しも騷ず、船の頭に立ならぶ。官船やう〳〵近く至りしとき、三阮呵々と笑て、水中に跳入けり。丘岳等は三艘の空船を奪取勢に乘じ、又二三里許行し處に、又三艘の快船相竝て漕來る。中なる船は十餘人の軍士あり。此船の大將は玉旛竿孟康、左なる船には、わづか四五人の軍士有り。此船の大將は出洞蛟童威、右なる船には、同く四五人の軍士あり、此船の大將は翻江蜃童猛なり。丘岳これを見て、官軍

高俅見畢て大に怒り、梁山泊の叛賊、いかんぞかくのごとく人を欺くや、我もし賊を砍盡さずんば、誓て軍を回さじとて、牙を咬で呼りければ、聞煥章諫て云く、太尉怒りを息給へ、某愚意を以てこれを思ふに、彼自ら恐懼するゆゑ、却て悪言を以て、我輩を嚇んと圖るならん、尙四五日過しなば水陸より竝び進んで攻給へ、今冬の天氣かくのごとく暖なるは、則是天子の洪福、太尉の虎威なり。高俅此言を聞て、大に悅び、遂に諸將を引て城中に入り、頓て手分を定めける。先周昂、王煥に大軍を引しめて救應とす。又項元鎭、張開に一萬騎を與へて、梁山泊の大路を守らしむ。又梁山泊は古より、四面八方都て茫々蕩々として蘆葦のみ茂れり。山前の大路も宋江が新に開し路にして、古はこれなし。高俅先人馬を馳てこの路を守らしむ。其餘の大將、聞煥章、丘岳、徐京、梅展、王文德、楊溫、李從吉、長史王瑾、幷に船大工葉春等は、都て高俅に從て船に乘る。聞煥章諫めて云く、太尉は步軍馬軍を引て陸路より進發し給へ、自ら船に乘て險地に臨給ふは、禍を招く道理なり。高俅が曰く、此事毛頭も憂なし、我先に兩度迄打輸しは、皆計の齟齬したるが故なり、今既に若干の海鰍船を造せ、我親自乘て攻ずんば、いかんぞよく宋江等を生捉んや、此度は我賊と一戰を決して、雌雄を分たんと、已に主意を定めけるに、汝再び諫を云ことなかれ。聞參謀再び言ず、遂に高俅に隨うて船に

び水軍を數ふるに、頃日馳聚りし新參の水軍都て一萬餘人と記せり。此日高俅諸將を引て船を見るに、彼海鰍船三百餘艘水面に分排き、鑼鼓梆子等を設けて遍く旗を挿し、其船のはやき事、恰も箭を射るがごとくなりければ、高俅是を見て、心中に悅び、かくの如く自由自在の快船を以て賊を打ば、賊これに當ること能ふまじ、此たびの合戰は親方に勝利を得んこと必然なり、豫め先葉春を賞せんとて、金銀段帛を以て葉春に惠みければ、葉春謹で拜領し、悅ぶこと限りなし。翌日高俅牛を宰馬を殺し、香花燈燭を供て水神を祭り、衆皆拜を行ひけり。丘岳は石疵已に癒て、心中に忻悅し、我張淸を生捉て、此うらみを雪がずんば、再び都に回らじと、諸人の前をも憚ず、誓を建て誇言しぬ。高俅向に都より携へたる、妓女表子等を船に乘せ、吹彈歌舞の戲を催し、終日酒興に入り、其夜は妓女表子等と共に船中に歇みけり。翌日も又酒宴をなし、一連に五六日遊興を貪て、未だ出船の日限も定らず。かゝる處に、一人の軍士慌しく馳來り、梁山泊の賊徒、一首の詩を書て、濟州城の內なる土神廟の門の上に貼たるを、揭取て來り候と告て、則其詩を獻じければ、高俅取てこれを見るに、其詩に云く、

生擒楊戩與高俅　掃蕩中原四百川
便有海鰍船萬隻　倶來泊內一齊休

石誤ず丘岳が面門に中り、丘岳忽ち眼を眩し、馬より下に陷にけり。周昂これを見て、死を捨命を輕んじ力戰し、這々丘岳を救うて回らしめ、再び張淸と鋒を交へ數合戰ひけるに、張淸又馬を控へ逃けれども、周昂あへて追ざりしかば、張淸自ら引かへして、又戰んとせし處に、王煥、徐京、楊溫、李從吉四隊の人馬を引て助け來りしかば、張淸五百の馬軍を領し、飛がごとく跑去けり。官軍共は伏兵有んことを悚れ、各長追せず、遂に軍を收めて引退く。城中城外三ヶ所の火は、益熾んにして、曉方迄燒たりしかば、軍民擧て仰天す。高太尉は丘岳が打れたる疵を見るに、彼石面門へ中つて、四つの齒を打碎き、脣都て破れければ、高俅急ぎ醫師に命じて療治を加へしむ。丘岳は石に中て疵を蒙り、梁山泊を怨むこと深く、骨髓に徹せり。高俅又葉春に命じて、急ぎ船を造らせ、船廠の四方には、節度使等陣を列ね、嚴に守りける。扨張淸、孫新、張靑、孫二娘、顧大嫂、時遷、段景住等七人の頭領は、一處に會合して梁山泊に馳回り、三箇所に火を放て、張淸が又丘岳を打しこと、一々詳に告ければ、宋江是を聞て大に悅び、此日は宴を設けて、七人の者を賀しにける。これより每度人を馳て、濟州の消息を伺せ、少しも油斷なかりけり。はや冬の時節に至りしか共、此年天氣暖なりければ、高太尉私に天の助けと悅んで、只管葉春を催促して船を造らせ、船漸調りしかば、再

在ければ、張、孫両人此内に雜て共に樹木を拽き、遂に船廠の内に入にけり。船廠の内には、數千の船大工あつて船を造り、出入の民夫下官は、其數を知るべからず。孫二娘、顧大嫂も、おの〳〵破衣を著して飯を入たる籃を提げ、諸の婦人と共に、船廠の内に入けるに、天色はや晩て月色明かに、時すでに二更時分を待附け、孫新張青は、左の船廠に火を放ち、孫二娘顧大嫂は右の船廠に火を放ち、暫く傍にかくれ窺ひ見るに、少刻に焚起て、烈火焊々として、猛焔騰々たり。諸の民夫どもこれを見て、一度に騷動し、火を消んとする者一人もあらずして、盡く皆廠の外に逃出ける。高太尉は船廠に出火ありと聞て、大に驚き、急に人數を馳て、火を救んとせし處に、城樓の上と草料場とに、又等しく火起て恰も白晝の如くなりしかば、高俅みづから兵を引て樓の火を救ひ、丘岳、周昂には草料場の火を救はしむ。かゝる處に鼓の聲地に震ひ、喊の聲天に響く、是則梁山泊の頭領沒羽箭張清、五百の人馬を領し宵より此處に埋伏して有けるが、丘岳、周昂が兵を引て火を救ふを見、直に突出で、丘岳、周昂に向て罵りけるは、汝賊官等早く馬を下て降參せよ、梁山泊の豪傑等都て此處にあり。丘岳大に怒り、馬を飛せ刀を舞して、張清に切てかゝる。張清鎗を撚て相迎へ、僅二三合戰て急に逃ければ、丘岳後に從て追來り、反賊走ることなかれと、呼りし處に、張清早くも石を取て飛せければ、其

説専らなり。宋江是を聞て、呉用と議して云けるは、此のごとき大船水面に浮んで自由を働ば、これを打んこと難からんか、軍師良計を施し給へ。呉用笑て云く、是何の怕かあらん、只數人の水軍頭領を用て、敵軍を敗るに足れり、陸路の合戰は、親方も猛將多ければ、是又恐るゝに足らず、我思ふに是等の大船を造んには、必ず數十日を經べし、先一兩人の頭領を敵の船廠に遣し、彼等を一惱しなやまして、其後計を施すべし。宋江聞て可なりと同じ、則時遷、段景住の兩人を敵の船廠に遣し、張青、孫新を樹木を拽く民夫の形に出立せて、船廠の内に紛入せ、又顧大嫂孫二娘を中食の飯を送る婦人に出立せて、時遷、段景住等を助けしむ。各計を受て卽日山を下り、直に船廠をさして馳行けり。高俅は毎日催促して船を造らせ、濟州の東路一帶は都て船廠と成にけり。時遷、段景住先船廠に至り、時遷暗に段景住に對して云く、孫、張、夫婦は定めて船廠に火を放つべし、我等兩人は此處に火起るを待て城門の邊に馳行き、城中より火を消んと欲して、救の軍士出ん時、勢に乘じて、城内に紛入り、我は城樓の上に火を放さん、汝は草料場に火を放て、然らば三方に火起て城中の軍士大いに騷動せん、豈快き事ならずや。段景住是を聞て、其言に服し、各懷中に火藥を隱し、船廠に火の起るを城門に伏して待侘けり。扨張青、孫新兩人は濟州の城下に至て、此處を見るに、四五百の民夫樹木を拽て

給はんこと、何の疑かあらん。高太尉此言を聞き、又船の圖を見て悦び斜ならず、早速葉春を褒美し、急ぎ船を造らしむ。在々所々より、樹木を運ぶ事其數を知べからず。葉春は晝夜怠らず、數百の船を造りける。諸國諸州より馳來る水軍は日を追て多かりける。斯る處に、丘岳、周昂人馬を引て到著しぬと報じければ、高俅自ら節度使等を引て城を出で、丘岳、周昂を迎へ勞を謝し、遂に城中に誘引して、種々饗應したりける。兩將が云く、太尉急ぎ三軍を發して、戰はしめ給へ。高俅が云く、兩將軍、先數日待給へ、海鰍船全く調りなば、水陸並び進んで推寄せ、唯一鼓に賊を平ぐべし。丘岳、周昂が云く、某等兩人宋江等を見る事猶孩兒の如し、何ぞ道に足らんや。高俅が云く、兩將若果して奇功を立候はゞ、某天子に奏聞して、速に昇進あらしめんとて、此日は暮に至るまで飲宴を催し、翌日より高太尉愈催促して、油斷なく船を造せけり。時に宋江は吳用等と商議して云けるは、兩度まで御赦免に應ぜずして、勅使を傷ひ愈罪を増せり、必ず朝廷より人馬を加へて山陣を擊しめ給ふべし、且人を馳て事の虚實を窺はしめんとて、此日小卒を遣しけり。小卒すでに濟州城の邊に馳て委細を伺ひ、早速立回て報じけるは、高俅近日若干の水軍を募め、又葉春と申者に命じ、大小の海鰍船數百艘を造せ、東京より又丘岳、周昂と申す兩人の猛將數千の人馬を引て、高俅を相助け、近々寄來る由風

あり、究てよく船を造る。原泗州の人にして姓は葉、名は春と號す。向に蔣東より歸るさに、梁山泊の下を過し時、小賊共許多出て、行李等を奪取し故、再び故鄉に歸ること能ず、倘濟州に流落て、常に梁山泊を恨み在けるが、此度高太尉が船を造る事を聞て、此節幸ひ梁山泊を破んと欲し、船の圖を畫て高太尉に見せければ、高太尉問て云く、汝何等の計ありや。葉春が云く、相公向に船を以て梁山泊を攻給ひしか共、勝利なきはいかんぞなれば、其船皆法にあたらずして、進退不自由なるがゆゑなり、某一つの計を獻じ勝を得せしめ參らせんとて、彼船の圖を呈し云く、もし梁山泊を破らんと欲し給はゞ、先此大船數百艘を造らしめ給へ、此大船は名を大海鰍と申す、船の兩邊に水手二十四人を置き、船の內には都て數百人を乘せ、前後左右には全く竹笆を用て矢箭を防ぎ、船の面には、樓を設けて矢を放たせ、若進んと欲する時は、梆子を打て相圖とし、彼二十四人の水手に櫓を搖せて、飛が如くに走しむ、若此のごとき船を用て敵を攻ば、などか勝利を得ざらんや、又其次の船は、名を小海鰍と申す、船の兩邊には水手十二人を置き、船の上には總て百餘人を乘せ、前後左右には同じく竹笆を用て、矢箭を防ぎ、船の頭には樓を設け、箭を放たせ、又梆子を打て相圖とす、此船は梁山泊の小港にすゝめ、賊の伏兵を擊しむべし、若此計に從給はゞ、梁山泊の賊徒を立處に亡し、水泊を淸め

官帶右義衛親軍指揮使車騎將軍周昂なり。此兩將軍は數度大功を立て名を海外にふるひ、深く武藝に通じて、京師を鎭守す。此丘岳、周昂は原來高俅が心服の人なり。かゝる故に出陣の日限を定め、則兩將を引て、蔡太師が館に至りしかば、蔡太師再三命じて云く、汝兩將必ず心を用ひて早く大功を建よ、然ば我帝に奏聞し、昇進なさしむべし、愈怠ること勿れとて、嚴に仰ける。兩將謹で命を奉り、遂に別れて、四營の内に來り、諸軍に號令を傳へ、明日出陣せんと約しけり。楊太尉此日兩將を私宅に招き、各名馬五疋を惠みければ、兩將頓首して、是を謝し、必ず賊を破て、再び拜謁すべしとて辭別せり。翌日兩將三軍に觸て、華やかに披掛しめ、則二手に分て、丘岳は左軍を領し周昂は右軍を領し、辰の上刻はや城中を打出ければ、楊太尉は自ら城外に出て、兩將を送り、諸事くはしく命じけるに、兩將命を受け楊太尉に別れ、遂に東京を離れ濟州へと急ぎけり。

○張順鑿て海鰍船を漏しむ

偖も高太尉は濟州に在て、聞煥章と商議し、先兵船を造らしめ、再び梁山泊を攻んとて、早速軍民に命じ多く樹木を伐しめ、專ら船大工水軍等を募ける。此時濟州城の客屋に一人の旅客

放ちければ、其箭過ず面門に中て、勅使は忽ち倒れけり。諸の豪傑等一度に咄と呼り、萬弩齊しく放ちければ、高太尉大に慌て、急に城を跳で箭を避ける。諸頭領はや盡く馬に乘兵を引て馳かへる。城中には伏置たる官軍共、先を爭て砍て出で、頻りに宋江が人馬を追蒐け、漸五六里ばかり馳ける處に、後軍に砲の聲大に響き、東には李逵歩軍を引て砍て出で、西には扈三娘馬軍を引て突て出で、兩邊より夾んで攻ければ、官軍共大に驚き、慌忙き城中に引退く。宋江が人馬是を見て、半途より引回し、三面より緊しく打しかば、官軍遂に亂れ、死する者多かりける。太尉高俅は宋江等未だ歸順せずして、勅使を射殺したる事、表を以て朝廷に奏聞し、また密書を修へて蔡太師と楊太尉とに送り、願くば某が爲に宜しく奏聞あつて、尙救兵を差越給はゞ、某一世の幸ひ此事なるべしと、具に賴み遣しけり。蔡太師は高俅が密書を得て、早速參內し、濟州の事委細に奏しければ、天子叡聞有て、御憤り斜ならず、彼賊しばしば朝廷を辱しめ、累に大罪を犯す上は、急ぎ軍馬を催して、高俅を助けしめよと、勅命有しかば、蔡太師綸言を奉りて退出す。楊太尉も高俅が密書を得たりしかば、蔡太師と商議して、御營の內に於て、兩人の猛將を選み、總て二千の兵を彼兩人に與へて、高俅を助けしむ。此兩將は一人は、八十萬禁軍都敎頭官帶左義衞親軍指揮使護駕將軍丘岳、一人は八十萬禁軍副敎頭

濟州城に花榮
勅使を射殺す

姓と共に詔書の趣を承り、早速甲を卸候べし。高太尉此事を許し、城中の百姓共ことごとく、城の上に呼集めて、詔書を聞しむ。百姓共紛々として、城の上に跪き、謹で左右に相列る。宋江等諸頭領も已に城下に至り、恭しく地に跪て、詔書を拜聽す。各背後には馬を牽せて用心緊しく見えにける。勅使親自詔書を拔き、高聲に讀起て曰く、

制曰。人之本心本無二端。國之恒道俱是一理。作善則爲良民。造惡則爲逆黨。爲逆黨者。是非正命。深可憫焉。朕聞梁山泊聚衆已久。不蒙善化未復良心。今差天使頒降詔書。除宋江盧俊義等大小人衆所犯過惡並與赦免。其爲首者詣京謝恩。協隨助者各歸鄕閭。毋違朕意以負汝懷。嗚呼速霑雨露以就去邪歸正之心。毋犯雷霆當效革故鼎新之意。故茲詔示。想宜悉知。

宣和　年　月　日

當時、軍師吳用は除宋江と云三字を讀に至て、卽眹眼して花榮を視、將軍今の三字を聞給ひしやと云ければ、花榮私に點頭き、詔書已に誦終りし處に、花榮大音聲に呼て云く、宋江を免し給はぬに、我輩朝廷に歸順して何の益かあらんとて、弓箭取て打搭へ、彼勅使を望で漂と

清等を差添へ、馬軍一千を與へて濟州の西路に埋伏させ、炮の聲を相圖と定めて、城の北門に集らしめんとて、此日李逵、一丈青に各一千の兵を與へ、先濟州に遣しけり。太尉高俅は濟州城に在て、王煥等と相議し、即日諸陣に號令を傳へ、急ぎ兵共を城中に入しめ、諸の節度使等は、各嚴に披掛て城内に埋伏す。其外の諸大將等もこと〴〵く裝束して城中に備へ、城の上には都て旗を立ず、只北門の上に黃色の旗一流を立て、旗の上には天詔と云二字を書けり。高太尉は勅使ならびに、諸の官人等とともに都て城の上に在て、宋江が至るを待侘けり。此日梁山泊の頭領沒羽箭張清は、五百の軍馬を引て先濟州に至り、城の四方を一遍巡見して、城の正北の方へ馳去けり。其次に神行太保戴宗來て、城の週廻を巡見せり。此時高太尉は親自城の上に出て左右に百餘人を從へ、前に香案を設けて詔書を置き、專ら宋江が至るを待ける處に、宋江が人馬嚴密に行列を備へて馳來る。當先には宋江、盧俊義、吳用、公孫勝、馬上に在て身をかゞめ、即高太尉に對して禮をなす。高太尉左右に呼らしめて云く、此度天子御憐愍の上にて汝等が罪を御赦免なし給ふに、何故甲を著して伺公するや。宋江是を聞て、戴宗を城下に遣し答へけるは、某等いまだ恩澤を蒙ず、いはんや詔書の趣、又如何たることを知らざる故、敢て甲を著せり、願くは太尉城中の百姓をも、此處に呼集め給へ、某等皆百

王瑾高太尉に媚て詔書を讀替んことを勸む

高太尉がいはく、先宜しく眼前のことを顧て、後來の事は再び議すべしとて、聞煥章が諫言を用ず、先人を梁山泊に馳て、天子汝等が罪を、御赦免なし給はんとの御事にて、勅使詔書を携へて、濟州に著駕ありし間、盡く皆濟州の城下に至て、詔書の趣を拜聽せよと、云越ければ、宋江是を聞て大に欣悦し、則使者に對面して、委細に問ければ、使者答て云く、高太尉某を馳て、諸頭領を濟州の城下に請ひ、詔書を披讀し奉つて、將軍等に聞しめんとのことなり、少しも異心あらざる間、一刻も急來り給へ、必ず疑ひ給ふこと勿れ。宋江是を聞て、軍師吳用と議を定め、重く來使を賞し、先濟州へ囘しけり。宋江又諸頭領に號令を傳へて、濟州に赴くべき用意を催しければ、盧俊義これを見て云けるは、宋君先急ぎ給ふことなかれ、恐らくは高太尉に何等の計あらんも測難し、若輕々しく行給はゞ、必ず後悔有べし。宋江が云く、もし再三疑を起さば、いづれの日かよく朝廷に歸順して、平生の忠義を現さんや、先善悪を論ぜず衆皆城下に赴きて、詔の趣を拜聽すべし。此時吳用打笑て云く、高俅たとひ計ありとも、我輩が勢に數陣を破られ、膽を消したる上なれば、何程のことか做出さん、唯宜しく宋君に隨て濟州へ行給へ、我今黑旋風李逵に、樊瑞、鮑旭、項充、李衮等を差添へ歩軍一千を與へて、濟州の東路に埋伏させ、又一丈青扈三娘に顧大嫂、孫二娘、王矮虎、孫新、張

はんとの御事、我是を嫌ふにはあらざれ共、我已に兩度の合戰に打負け、歩軍水軍大半討れ、何の面目有てか再び都に歸らんやと、躊躇して更に決せず。其比濟州に王瑾と云老吏有けるが、原來大佞人にて、人皆是を惡みしかども、聰明伶俐なること他に越たるにより、此度太守、王瑾を以て高俅を款待しむ。王瑾なにとぞして、高太尉が意に合んと圖る折節、高太尉詔書を見て、躊躇決せざりしかば、王瑾これを幸ひの事に思ひ、則高俅が前に伺候して、恭しく告けるは、太尉必ず憂ひ給ふことなかれ、某向に詔書を見しに、中の一行の句に、

除宋江盧俊義等大小人衆所犯過惡並與赦免。

と云の言あり、此一句に依て宋江を亡さんこと最易し、其故はいかんとなれば、這句の内除宋江と讀斷て、盧俊義等大小人衆所犯過惡並與赦免と讀しめたまひ、彼等を城下に賺し寄せ、賊首宋江を捉て殺しなば、其餘の者どもは、各四方に散去て功立處に成ぬべし、古の語にも蛇は頭なくして行ず、鳥翅なうして飛ずとこそ申なり、宋江をだに亡し給ひなば、其餘の賊徒等何ぞいふに足んや、知らず、此計はいかん。高俅欣悅して其言に服し、則聞煥章を招きて、此事を議しければ、聞煥章諫ていはく、あによく此事を行うて、天子の綸言を改んや、後來もし此ことを知る者あらば、等閑の事と同じからず、必ず邪の企を止給へ。

戰ひ、暫く雌雄分たざりし處に、索超馬を回して逃走る。高太尉兵を引て追懸け、一つの山坡を過し處に、豹子頭林冲軍馬を引て砍て出で、高俅が兵を五六里許追散しぬ。此處に又青面獸楊志兵を引て突て出で、已に一陣を敗しかば、高俅大に膽を消し、東を望んで八九里引退く。横道より又一彪の人馬馳出で、美髯公朱同眞先に跑て一陣を打破れり。此の如く伏勢を設け、處處に於て高俅が兵を打しむるは、是皆吳用が計なり。高俅が兵どもは相救ふこと能ず、我先にと奔走し、夜半過る時分に、漸濟州城に至りける。此處に又喊の聲大に起り、四五百の火把一度に揮照し、千軍萬馬の勢ありければ、高俅大に歎息して云く、我必定此處にて討るべし、先人を馳て敵の實否を伺はせんとて、十騎斗を遣して斥候せしむるに、此處に埋伏したる大將は、楊雄、石秀にてありけるが、此處には唯わづか五百の兵を引て五百の火把を持せ、唯高俅を駭かしめんが爲なれば、戰はずして引行けり。彼十騎斗の馬軍早速馳回りて、敵已に退ぬと報じければ、こゝに於て高俅まさに心を安んじ、再び敗軍を集めて城中に入り、即時に兵を算ふるに、半を過て討れしかば、高俅甚だ鬱悶せり。翌日飛脚到來して、勅使の著駕と報じければ、高俅諸將を引て城外に出で、自ら勅使を迎へける處に、天使勅命の趣を告げ、先城中に入り、彼詔書を取て高俅に見せしかば、高俅私に諸人に對して云く、帝今宋江を御赦免なし給

七編　卷之六十四

○宋公明兩高太尉を敗る

于爰又牛邦喜は官船盡く燒擊せられたるを見て、水中に飛入一命を脱れんと圖りし處に、一人の漢子水面に現れ出て、牛邦喜を水中に拖落し、遂に是を縛けり、此漢子は船火兒張横なり。此時官軍共は手を束ねて討取られ、血水滾々として、殊更哀れの光景なり。獨黨世英は小船に乘て逃行く處に、左右より雨の如くに箭を放て、黨世英を射殺し、其外許多の官軍共を水中に射落し、散々に攻ければ、帶傷死人は其數を知べからず。李俊は劉夢龍を活捉り、張横は牛邦喜を活捉り、倶に山陣に引せんとしけれ共、宋江が又是をも助けん事を恐れ、兩人已に商議し、此處に頭を刎ね、只首ばかりを山陣に獻じけり。此時高太尉は人馬を引て水邊に至り、水戰の勝負はいかゞと打望みける處に、命を脱れたる敗軍共追々に馳來て、燒擊せられたることを詳に告ければ、高俅是を聞て、大に怕れ、急に三軍を引て退んとせし時、山前に鼓の聲喧しく、一彪の人馬突來る。此大將は急先鋒索超なり。高太尉が背後より、節度使王煥鎗を撚て索超と相

次巻につゞいて、高俅が軍の次第明らかなり。

柳樹の内より、炮の聲天地に震ひ、兩邊に攻鼓齊しく鳴し、二隊の軍馬馳出る。左は霹靂火秦明、右は雙鞭將呼延灼なり。各五百の人馬を引て直に水邊に至りしかば、劉夢龍これを見て、急に彼五七百の精兵を招き、再び船に乘せけるに、敵緊く攻たりければ、早半は討れけり。牛邦喜は前軍の騷ぐを聞て、先後軍の船を退んとせし處に、大炮頻りに響き、蘆葦の内に颼々と聲有て、公孫勝髪を被り劒を提げ、山の上に在て風を祈る。風忽ち起て石を走せ沙を飛せ、白浪飜り黑雲落ち、日色更に光なし。劉夢龍此大風を見て、大に驚き急ぎ船を回して漕行處に、蘆葦深き處より、若干の小船出て官船のむらがる中に漕入り、一度に火を放て、官船を燒撃す。此計は吳用が劉唐に授て、船の上に蘆葦、薪、硫黄、焰硝等の物を積せ、今此大風に乘じて火を放ち、擅に官船を燒しむ。暫時の間に官船都て猛火盛にして、黑煙綠水に迷ひ、紅焰清波に起る。誠に鬼神をも驚しむる光景なり。此時劉夢龍は官船に火起て煌盛んなるを見、急に盔甲等を脫捨て水中に跳入り、則水底を潜て脫れ行く。かゝる處に一艘の小船、此邊に漂て、一個の人船の上に在ければ、劉夢龍これを見て、又此處を避行んとせし處に、水底に一個の人有て、劉夢龍が腰を抱き、頓て水面に浮み出て、彼小船の内に拖上げ、竟に索をかけにけり。此水底に在し者は、混江龍李俊、船の上に在し者は、出洞蛟童威なりけり。猶

早速對面して、兵船の事を問けるに、牛邦喜答て云く、某方々に廻て大小の兵船一千五百艘を催して、已に此邊の川内に至れり、船中の軍士等都て水戰に馴たる者どもなれば、一戰に勝利を得んこと何の疑かあらん。高俅是を聞て、欣然として悦びける。扨て梁山泊の軍師吳學究は、高俅又兵船を催したると聞て、計を劉唐に授て、水路を掌せ、其餘の頭領共にも、各計を授け、船毎に蘆葦薪等を積しめ、敵船を燒拂はんずる用意をぞ調へけり。此外又公孫勝を始として、各計をうけ、水陸ともに防を嚴密に備へけり。高太尉は再び梁山泊に寄すべしとて、水陸の兵を催しければ、牛邦喜、劉夢龍、黨世英等三將と水軍を掌て船を兩行に連ね、首尾に纜の索を著て一同に漕出し、はや梁山泊に至りしか共、敵軍は一艘も見えざりけり。此時陸軍等も已に進發し、諸の官船漸金沙灘の邊に至りし處に、二艘の漁船漕來る。船の上には、各兩人の漢子在て一同に哄ひければ、劉夢龍是を聞て大に怒り、早速射人に命じ射させけるに、彼漢子共一度に水中に跳入けり。劉夢龍猶再三下知しければ、諸船等しく喊の聲を揚て漕來る。金沙灘の上に三四人の牧童、牛を柳の樹に拴で、草の上に打臥ける。又一人の牧童牛に乘て、一管の笛を吹き、林の中より出來る。劉夢龍先陣の精兵を擇で岸に上らせしかば、彼牧童等これを見て、呵々と大に笑て、柳の樹の蔭に進み入る。五七百の精兵共岸に上て奔走しける處に、

御赦免あらん。時に兩將謹で申けるは、先に遣し給ふ處の勅書には、專ら彼等を嚇す詞のみ有て、更に恩澤の詞なかりける故、宋江等是を憤り、未だ歸順せざるとなり、若憐愍の上にて御赦免あらば、彼必定樂で歸順すべし、權威と恐怖せしむると二つを用ひては、彼等身は死す共服すべからず、百萬の勢を以て征伐する共、更に恐る心なき上は、何ぞ尊貴の權威を恐れ思はん、四海の昇平を好み給はんには、御工夫の上御計ひ然るべしと、申述ければ、蔡京聞て其言に服し、明日天子に奏聞すべしと、領掌したりしかば、衆皆これを謝して歸りけり。翌日天子紫宸殿に出御なりければ、蔡京列を出て、宋江等を御赦免あらば大に可ならんと、奏しけるに、天子其奏を准へ給ひて宣ひけるは、今高太尉安仁村の聞煥章を軍中に請て、ともに計を商議せんと計る故、聞煥章近々發足するよしを聞及べり、幸ひ此聞煥章を勅使に添へて濟州に遣し、宋江等が罪を赦すべし、彼若歸順せずして敵することあらば、彌高俅に命じ、立處に擊しむべしと、議定ありしかば、蔡太師勅命を奉り、早速聞煥章を城中に迎へけり。此聞煥章は原來有名の文士にて、朝廷の大官抔にも、知る人多かりければ、此日各禮物を送りて、聞煥章を賀しにける。勅使は已に詔書を携へて、聞煥章と共に都を打出で、直に濟州を望んで進發す。扨高太尉は濟州城に在て甚だ憂ひ居たりける處に、牛邦喜至りぬと報じければ、高俅

に乘しめて山下迄送りければ、兩人喜で共に濟州城に馳囘り、則高太尉に見えて、宋江等が歸順の心あることを、詳に告けるに、高太尉これを聞て、大いに怒り、汝兩人を放ちたるに、我軍心を慢らしめんが爲の計なり、汝兩人何の面目あつてか再たび我にまみえんや、先汝等を誅して衆に示さんとて、已に左右に命じければ、王煥等の諸大將高俅が前に跪いて曰く、此兩人に於ては一點も預ることなし、是皆宋江吳用兩人が作處の計なるに、若此兩人を殺し給はゞ、反て賊等は嘲り笑ひ候はん、伏して望らくは明かに察し給へ。高俅諸人に諫られて、兩人が命を饒しけれ共、職を削て東京に遣し、則泰乙官に仰せて兩人を罰せしむ。此存保は原韓忠彥が姪なり。韓忠彥は蔡太師の樞機あるゆゑ、遂に大官に陞て權威あるにより、朝廷の官人韓忠彥が門下より出たる者多し。其頃鄭居忠と申御史大夫あり。是は韓忠彥が擡擧たる者なる故、韓存保とは常に睦じかりければ、韓存保一々事を鄭居忠に告けるに、鄭居忠即日韓存保を引て、尙書餘深にまみえ、此事を議しければ、餘深が云く、先蔡太師に訟へて、其後天子に奏聞致さば可ならんとて、三人齊しく蔡京が館に至て、宋江等原異心あらずして、御赦免を願奉るよしを訟へしかば、蔡京未だこれを信ぜずして云く、嚮に陳太尉を遣はして、御赦免の仰あれ共、宋江等曾て歸順の心あらず、已に詔書を扯破て、天子を欺きし徒ども、豈よく

隊は大刀關勝なり。兩人の猛將飛がごとく跑來り、直に官軍等が中に突入て、散々に打ければ、張開遂に韓存保を弃て、獨梅展を救ひ、後をも見ずして走り行く。張淸再び馬を得て是に乘り、又韓存保を奪ひ復して、軍士に引せける。呼延灼も力を盡し一同に追擊し、直に濟州城の近邊に至て軍を收め、是より引回して、梁山泊へ歸りけり。張開は已に敗軍を引て濟州城に馳入り、極て這々の光景なり。扨宋江は忠義堂に在て、自ら韓存保が綁の索を解き、慇懃に請て堂上に坐せしめ、黨世雄をも、共に堂上に邀へて韓存保に遇せ、宋江先此兩將に對して云けるは、某元來一點も異心あらざれ共、濫官等に世を逼められて、此山陣に取籠れり、若朝廷の御赦免を蒙らば、國家の爲に力を盡すべし、願くは兩將軍明らかにこれを察し給へ。韓存保が云く、向に皇帝陳太尉を勅使として、詔書御酒を賜り、足下等を御赦免あらんとの御事なりけるに、其節は何ゆゑ歸順したまはざりしや。宋江が云く、其節は詔書明ならずして村酒を賜りし故、諸人都てこれを憤り、あへて勅命に從はざりき、殊更張韓辨、李虞候擅に威勢を振て、我輩を恥しめ、甚だ無禮をなしける間、我部下の者ども、忽ち此兩人を害し棄ん氣色なりしを、我強てこれを忍び、猶部下を制止候ひぬ。韓存保が云く、是皆濫官等がなさしむる處にして、國家の大事を誤りしなりと、再三嘆息す。宋江急に酒宴を設しめて、兩將を饗應し、翌日馬

の上に上り、已に人馬を進めて打出んとせし處に、前面に一簇の官軍來て、韓存保を尋けるが、此處に於て兩軍已に適遇ひ、各喊の聲を揚て戰を挑む。官軍の內より兩人の大將進み出る。一人は節度使張開、一人は節度使梅展なり。梅展已に韓存保が活捉れたるを見て、恚骨髓より起り、急に刀を舞し、直に張清を望て砍て蒐る。張清是を迎へ纔二三合相戰ひ、はや馬を勒て逃走る。梅展後に從て追蒐ける處に、張清急に猿臂を舒して、錦袋の內より石を取出し、頓て腰を捻て只一打にと飛せけるに、其石果して梅展が額の上に中りしかば、忽ち血流れ眼を眩し、遂に刀を棄て逃走る。張清後に隨て追來り、已に危く見けるに、張開速に馳來て一箭を放ち、張清が乘たる馬の眼を射中ければ、馬は倒れ張清地上に落たりけるが、猶鎗を撚て步戰をなす。張清は只石を飛し人を打の法は妙を究れ共、武藝は却て如ざる處あり。張開、先梅展を救うて本陣に回り、再び馬を飛せて跑來り、直ちに張清を迎へ相戰ふ。張開は武藝の達人といひ、殊更馬上に在て自由を働きしかば、張清決して敵すること能はず、慌忙き軍中に逃回る。張開相從て追來り、直ちに敵軍の內に突入て、恰も人なき處を跑るが如く、四面八方に當りて、矢場に五六騎突伏せ猶猛勇を振て跑轉り、敵の大勢を東西に赶散し、再び韓存保を奪取り、已に引回さんとせし處に、喊の聲大に起て、兩隊の軍馬馳來る。一隊は霹靂火秦明、一

呼延灼又急に逃走る。韓存保心中に想ふ、彼已に兩度迄戰ひしか共、我に敵する事能はず、我今彼を生捉ずんば、更に何れの時をか待んとて、又方天戟を撚て火急に赶蒐け、一つの山坡を過て二つの路ある處に至りしに、呼延灼は早左の路を馳過て溪を繞り走り行く。韓存保是を見て、大音聲に罵りけるは、呼延灼潑賊早く馬を下て降參せよ、若然らずんば、立處に汝が一命を傷はん。呼延灼から〳〵と打笑ひ、我こそ汝を活捉んと欲して、此處まで賺し寄たるに、早く手を束ねて綁を受よと、欺きければ、韓存保大に怒り、馬を溪邊に躍せ、呼延灼に相近づく。此處一邊は高山、一邊は深溪にて、二騎打の場所なれば、戰不自由なりしが共、兩將少しも騒ずして、頓て馬を交へ、韓存保は鎗を擧げ、呼延灼は鞭を舞し、各精神を抖て戰ひ、四五十合に至りけれ共、雌雄いまだ分たざりし處に、呼延灼焦て鎗の柄を握り、一向奪はんと扯しかば、韓存保は奪れじと、緊く固め、良久しく力を用ひて扯合けるに、二疋の馬勇力に壓れて、腰を折き、一同に溪の内に落入ければ、兩將も共に溪水の內に陷入て、押並べ引組み、各聲を發して擣合しか共、相も劣ぬ大力の勇士等にて、上になり下になり約莫十四五遍反覆して、雌雄さらに分たざりけり。斯る處に一彪の軍馬岸の上に馳來る。此大將は没羽箭張清なりけるが、兩將が溪底に在て組合あるを見、急ぎ馳下て、呼延灼を助け遂に韓存保を活捕て、再び溪

國を廻て武藝を修行せし時、一人の英雄と交を結びけるが、此人深く韜略に通じ、善兵器を曉し、孫、呉が才有て諸葛が智あり、姓は聞、名は煥章と號し、頃日は東京城の外なる、安仁村に居住し、專ら讀書を指南して營とす、若此人を得て參謀とし、彼呉用が詐の謀に敵せしめ、戰をなさば必ず勝利を得べし。高太尉是を聞て、悅び斜ならず。則一人の使者を安仁村に馳て、慇懃に聞煥章を請しめければ、使者命を奉て、已に濟州城を馳出で、未だ四五日も過ざるに、宋江が人馬はや濟州城に推寄て戰を挑しかば、高俅聞て大に怒り、早速人馬を催し、節度使等と共に城外に出で、陣勢を列ねけるに、宋江が人馬は急に二十五里の外に退て、平川曠野の地へ屯しぬ。高俅是を見て、又兵を發し追來り、兩軍已に對陣せし處に、宋江が軍中より一人の大將華やかに披掛て馬を陣前に跑出し、旗號の上に雙鞭將呼延灼と分明に書にけり。高太尉是怒を見、大にて云く、彼は先に連環馬を布て賊と戰ひけるが、終に打負て賊に降りたる不忠不義の敗將呼延灼なり、誰かある彼を活捉て功名せよと、左右を顧みける處に、雲中の節度使韓存保、方天戟を撚て陣前にかけ出で、直に呼延灼を迎へ馬を交へ、兩將勇を奮て五十餘合戰ひしか共、雌雄更に分たざりし處に、呼延灼忽ち馬を回し迯ければ、韓存保慕て追來り、其間近く至りし時、呼延灼再び馬を勒へ、二つの鐵鞭を舉げ、終に鋒を交へ十餘合戰ひけるが、

の至りなり。高太尉は終夜馳て濟州城に入り、水陸の諸軍勢を點視に、陸軍に失ひしは僅なりけれ共、水軍は大半討れ、唯一艘の船もかへらざりけり。劉夢龍は這々命を脱れて濟州に歸りける。其餘の軍士共は、よく水性を識たるは、まれに一命を免れ、左なきは盡く水に溺て死にけり。高太尉が軍馬は只此一戰に勇氣を折き、空しく城中に屯し、牛邦喜が處々の軍船を聚め來るを待侘びて、頸を伸さざるはなかりけり。

○劉唐火を放て戰船を燒く

斯て高太尉は文書を諸方に遣し何船を論ぜず、皆濟州へ聚るべきよしを嚴に觸にけり。扨梁山泊の陣中には、宋江先董平を助けて馳回り、神醫安道全に命じて、董平が箭疵を療治させければ、安道全金瘡の膏藥を用ひ、是を醫療す。軍師呉用も、すでに諸頭領を收め、山陣に上りける。水軍の頭領張橫は、黨世雄を活捉て、忠義堂の前に引せければ、宋江まづ黨世雄を後陣の内に遣しけり。此度は奪ひ取し官船は都て水陣の内に備へけり。既に諸頭領各號令を受て忠義堂を退きけり。扨又高太尉は濟州城に在て、諸將を集め、梁山泊を破らん計を議し、且又童貫が敗軍も無理ならずと、密に思ひくらべけるに、節度使徐京進み出て云はく、某昔日諸

張横水底に
潜て覚世
雄を
生捉

の官兵共大に仰天して、盡く船を捨て水中に跳入けり。劉夢龍は衣甲を脱捨岸の上に跳上り、一つの小路を求て逃走る。彼黨世雄は敢て船を棄ず、只顧水軍に下知して、再び船を漕回し、漸〳〵二三里ばかりに至りし處に、前面に三艘の小船漕來り、船の上には阮氏の三兄弟在て、各〻鎗を撚り、早近く至りければ、官軍等是を見て、一戰にも及ず、都て皆水中に跳入ぬ。黨世雄は獨船傍に立ち、鎗を撚り阮小二と鋒を交へ數合戰ひけるが、阮小二何故にや、忽ち水中へ跳入けり。阮小五、阮小七急に鎗を擧て、左右より黨世雄に搠蒐りければ、黨世雄敵すること能ず、同じく水中に迯入しが、船火兒張橫水底に在て黨世雄を捉しかば、蘆葦の内より水軍許多走り出で、竟に黨世雄を高手小手に綁め、山陣に引渡せり。高太尉は水面を望み見るに、親方の兵船紛然として亂れければ、水戰は親方輪たりと料り識り、急に金を鳴し軍を收め、先濟州へ回て再び良計をなさんと議しける處に、天色はや晩て四下に砲の聲齊しく響き、宋江が軍馬十方より攻來る勢なりしかば、高太尉忽然として大に驚き、諸軍に下知して、急ぎ濟州へ迯回る。元來臆病なる東京勢、砲の聲を聞て盡く自ら亂れ、慌しく走りしかば、相互に踏傷はれたること、其數を知るべからず。梁山泊の軍馬此處には一人も在ざりしかども、只砲を放つて高俅を嚇しけるに、高俅果して自ら亂れ、膽を消魂を飛し、自ら兵を傷ひしは、眞に愚鹵

しむ。項元鎭鎗を撚て陣前に馳出で、大音聲に罵て云けるは、草賊早く來て我と勝負を決せんや。董平聞て、飛がごとく跑來り、直に項元鎭を迎て十餘合戰けるに、項元鎭馬を控て逃走る。董平勢に乘じ追來り、漸近く至りしかば、項元鎭鎗を棄弓箭を撚て、能拽て漂と放ちけるに、其矢過ず董平が左の臂に中れり。董平馬を回し逃ければ、項元鎭再び弓に箭を搭へ忙しく追來る。林冲、呼延灼これを見て、兩人齊しく跑來り、遂に董平を救て本陣に歸りける。高太尉大軍を發し散々に攻ければ、宋江が人馬大に亂れ、四面八方に逃走る。高太尉勢に乘じて水邊まで追蒐けり。さて彼劉夢龍は黨世雄と共に、水軍を引て梁山泊へと船を漕寄せ、其間已に數十里ばかりに至て、此處を見るに、蘆葦茫々として光景冷じ。諸の官船ども首尾を連て只顧漕行ける處に、山坂の上に砲の聲大に響き、四面八方より小船餘多漕出ければ、官船の上なる軍士共是を見て、各心中に驚きける。小船どもは直に官船を望で突來る。官船の軍士等は、初て此處に來り、未だ案內をも知らざりしかば、小船に敵し戰ふこと能ず、半は船を棄て逃走る。梁山泊の豪傑等は、官軍共が陣勢の亂れたるを見て、齊しく鼓を擂ち、一同に小船を進め、緊しく攻ければ、劉夢龍、黨世雄急に船を回さんとしけれども、梁山泊の小船ども、前後左右に取圍み、大船往來不自由なるに乘じて、官軍等を打取んと欲しければ、諸

けるは、王節度汝は是老年の大將なれば、いかんぞよく國家の爲に力を出さんや、若誤あらば徒に命を傷うて、一世の清名一旦に廢れなん、汝は先濟州に回り壯少の大將に換せよ。王煥之を聞て、大に怒り、汝梁山泊の草賊として、何ぞ天兵を欺くや。宋江が云く、王節度汝必ず武勇に傲ることなかれ、我山陣には百餘人の豪傑あり、豈あへて汝に輸る腰拔のあらんや。王煥聞も敢ず、鎗を撚て宋江に掴かゝる。宋江が背後より豹子頭林冲、鎗を擧て王煥を迎へ、兩將互に平生の武勇を奮ひ、死を捨て功を爭うて、一往一來秘術を盡し戰ひしかば、敵親方これを見て、了得の勇士等かなと、一度に咄と喝采にけり。王煥、林冲各精神を抖て戰ひ、已に八十餘合に至れ共、雌雄未だ決せざりしかば、兩陣各金を鳴し軍を收めけるゆゑ、王煥、林冲先戰を休め、本陣に引回しぬ。かゝる處に、節度使荊忠馬を躍せ、高太尉が陣前に馳來り、身を屈て申けるは、某不才たりといへども、賊と戰て一陣を決せんとす、願くば號令を承らん。高太尉これを聞て大に悅び、則荊忠を出し戰はしむ。宋江が陣中より呼延灼二つの鞭を擧て荊忠を迎へ、兩將各勇を振て相戰ひ、良久しく勝負決せざりし處、呼延灼詐て十步ばかり退きしかば、荊忠刀を擧て追來り、兩馬已に相交へけるに、呼延灼鞭を擧て、荊忠が頭を打碎きければ、荊忠忽ち馬より落て死にけり。高俅是を聞て大に怒り、項元鎭を出して戰

進發せんと仰せける。節度使は命令を受て、城外に打出で、木を伐り家を毀て、陣柵を列ね、甚だ民を苦めり。高太尉は專ら諸將の賄賂を貪り、送る者には、戰せずして功を記し、賄賂を送らざる者には功あれども、功を記さず、始終强敵と戰はせて、終に討死させせんとぞ計りける。第二日の朝、劉夢龍が兵船至て、會合したりければ、高俅十人の節度使を集め計を議しけるに、王煥等が云く、先步軍を遣し給ひて、賊を賺し出し、然して後に水路より兵船を進めて、賊船を劫せなば、群賊立處に亂れて遂に擒となるべし。高俅聞て、其意に從ひ、即日兵を分て、王煥、徐京を先鋒とし、王文德、梅展を後軍とし、張開、楊溫を左軍とし、韓存保、李從吉を右軍とし、項元鎭、荊忠を前後の救ひとし、黨世雄に三千の兵を與へ、劉夢龍が水軍に加へ、專ら戰を扶けしむ。諸將すべて號令を奉り、纔二日の內に全く用意を調へ、則高太尉を請て、諸軍の隊伍を見せしめければ、高俅自ら城外に出て、一々これを點視め、水陸一度に進ませて、梁山泊へとおしよせける。扨董平、張淸は已に山陣に回て、事を備細に報じければ、宋江急に諸頭領と共に、大軍を引て山を打下り、はや官軍共を近く望んで、兩軍互に陣勢を對しける處に、東京の先鋒王煥馬を飛せ、陣前に跑出で、鎗を横たへ、高聲に呼りけるは、梁山泊の反賊、節度使王煥を認識たるや。宋江是を聞て、自ら陣前に馳出で、同じく呼て云

○宋公明一高太尉を敗る

此時王文徳は、董平が武藝に勝がたきを料識て、本陣に跑回り、則三軍に命じて云けるは、且戰を休て、此處を砍拔よと、下知をなし、當先に馳て通りければ、董平人馬を引て追來り、漸一里ばかり過ける處に、前面に又一彪の人馬突て出で、沒羽箭張淸馬上に在て高聲に罵り、賊官走ることなかれとて、石を撚て飛せければ、王文徳これを見て、急に躱れけるに、其石王文徳が盔の上に中つて火出しかば、王文徳大に驚き、鞍に伏して逃走る。董、張、兩將跡を慕て追來る。漸近く至りし處に、傍より又一簇の軍馬馳出る。王文徳是を見るに、同節度使楊溫が軍馬なり。楊溫大勢を引て、王文徳を助け、遂に兵を一所に合せければ、董平、張淸敢て追ず、これより軍馬を引回しぬ。王文徳、楊溫は三軍を引て、濟州に至りしかば、太守張叔夜自らこれを迎へ、城中に入り、二三日の中に十人の節度使、盡く到著しける處に、急ぎ飛脚をたつて、高太尉の人馬已に至りたるよしを報じければ、張太守幷に十節度使、各城外へ馳出で、恭しく相迎へて城中に入り、衆皆高俅にまみえて、出陣のことを賀しにける。高太尉十人の節度使に命じて云く、汝等が人馬は城外に屯すべし、劉夢龍が水軍至りなば、共に

太尉は御營の内より擇出したる、精兵共を先城外に打出させ、又三十餘人の妓女を軍中に携へ、已に吉日を揀て天子に辭別し奉り、大軍都て東京城を馳出ける。高太尉が馬前には黨世英黨世雄の兩人を左右に從へ、其外統制官等を引て、備もつとも嚴重なり。高太尉すでに人馬を引て、濟州に進發し、到る所に於て妄に百姓を惱しければ、百姓共皆大に苦みけり。節度使王文德は京兆等の地の人馬を引て、先濟州へ馳來り、鳳尾坡と云處に至て、林を過し處に、鼓の聲忽ち響て一彪の人馬突出で、まつ先に一人の大將馬を進め、旗號の上に、英雄雙鎗將風流萬戸侯と云十字を書き、手に金鎗を撚て、威風堂々たり。是則梁山泊の勇將董平なり。董平馬を勒へて、大音に呼りけるは、今此處に至りたる人馬は、東京の官軍にてぞ有らん、早く馬を下りて索を懸れ。王文德此言を聞て呵々と打笑ひ、汝潑賊二つの耳あらば、定て我ことを聞つらん、我は是毎度朝敵を亡し名を天下に揚たる、節度使王文德なり、汝若命惜くば、速に降て死を脱れんや。董平聞も敢ず、大に罵り、汝賊官弱を亡したるを以て、梁山泊の英雄を欺なば、死眼前に至るべし。王文德是を聞て憤り、汝我手なみを見せんとて、鎗を撚り馬を飛せて董平に攔蒐る。董平も鎗を撚て相迎へ、兩將互に勇を奮て三十餘合戰ひしか共、勝負未だ分たざりけり。

處の兵船を濟州に聚めしむ。高太尉が帳前に、若干の大將有といへども、其内に兩人の勇士あり。一人が名は黨世英、一人の名は黨世雄と號して、同胞の兄弟なりけるが、統制官に任ぜられ、各萬夫不當の勇あり。高太尉總て十三萬の人數を催し、諸事全く調へ、近日發馬すべき由、風聞有ければ、戴宗、劉唐此事を聞て、急ぎ梁山泊に歸り、東京の動靜、一々詳に語て、宋江に告けるに、宋江は高太尉が十三萬の人馬を引き、十人の節度使と共に、近々攻來ると聞て、大に驚き、則吳用に請て計を議しければ、吳用が云く、宋君必ず憂へ給ふことなかれ、蜀の諸葛孔明は三千の兵を以て、曹操が十萬の軍馬を破りぬ、某も彼十人の節度使がことを聞けるに、每度敵を亡し、朝廷のために大功を立たることなれども、其頃の諸方の敵、彼等が對手になる者あらずして、幸に豪傑の譽を取ぬ、今我山陣には、若干の英雄あるに、何ぞ彼等に如ざらんや、彼若推寄なば某先謀を施して、一陣を破るべし。宋江問て云く、軍師何等の計ありや。吳用が云く、高太尉が人馬濟州に至りなば、我山陣より兩人の猛將を馳て先一陣を擊しむべし。宋江が云く、誰を遣さば、可ならんや。吳用が云く、沒羽箭張淸、雙鎗將董平此兩人を遣すべし。宋江聞て、其意に同じ、則張淸董平に二萬の兵を與へて、先濟州に遣し、又水軍の大將に命じて敵の兵船を奪取せ、山陣にははや敵を防ん備をぞ催しける。扨高

梁山泊を攻る間、十節度使の輩、各一萬の精兵を引て濟州に相聚り、宜しく力を合せて、高俅を助くべし、と命じけり。彼十人の大將は、

河南河北の節度使王煥　上黨大原の節度使徐京
京北弘農の節度使王文德　潁州汝南の節度使梅展
中山安平の節度使張開　江夏零陵の節度使楊溫
雲中雁門の節度使韓存保　隴西漢陽の節度使李從吉
瑯琊彭城の節度使項元鎭　淸河天水の節度使荆忠

此十人の節度使が人馬は、原來軍馴たる精兵なり。況や此將は昔日强盜の頭領をなして、威風天下に振ひ、其後朝廷に歸順して、節度使となり、都て萬夫不當の勇なる者共にて、等閑の人と同じからず。此時已に蔡太師の文書を得て、各用意を催しけり。其頃又金陵建康府に、水軍の統制官劉夢龍と云ものあり。其母が夢に一條の黑龍、懷中に入と見て、遂に此劉龍を誕生せり。よつて名を劉夢龍と號す。此人幼よりよく水性を知り、西川峽江に於て賊を平げ、大功をなせし故、統制官に任ぜられ、一萬五千の水軍を領し五百餘艘の兵船を備へ、常に江南を守りて在けるを、高太尉これを招て軍中に加へ、又步軍校尉牛邦喜と云者を諸國に遣して、處

太尉高球梁山泊征討の綸命を蒙る

重ねて奏しけるは、別に名將を揀み出して攻しめ給はゞ、必定賊を亡し、一害を除くべし。天子宣ひけるは、梁山泊の賊徒は、心腹の患なれば、これを除かずんば有べからず、たゞ知らず誰かあへて朕が爲に賊を攻んやと、いまだ宣ひも終らざるに、高俅進み出て奏しけるは、臣不才たりといへども、犬馬の勞を施し、立處に賊を平げて、天下の患を除き候はん。天子宣ひけるは、汝あへて朕が爲に力をつくさば、精兵を擇で汝に與へんに、近々都を打立べし。高俅頓首して又奏しけるは、梁山泊八方八萬里の水泊にて、船にあらざれば進み難し、願くば臣勅詔を奉つて、梁山泊の近邊なる樹木を砍り、多く船を造せ、水陸より進推寄せ候はゞ、必然過ち有まじ。天子宣く、諸事汝に任せん、行て宜しからん筋は、早速行て大功を建べし、然れ共百姓を犯すことなかれと、懇に綸命あり。勅使有て、錦の袍と金の甲を、高俅に賜りければ、高俅謹で拜領し、此日は百官都て退出したりけり。爰に又此頃天下にかくれなく、英雄の聞え高き十節度使有り。高俅は直ちに蔡太師が館に至り、則蔡京に見えて云けるは、十節度使の輩は先にも大金大遼等の地を攻て、大功を立たる、豪傑の譽れ高き者共なれば、某此十將を引て、賊を討んと欲す、願くば太師文書を以て、此輩にも仰候はんや。蔡太師聞て領承し、則十封の文書を以て、十節度使に仰せけるは、此度高太尉勅命を奉つて、

序に奏聞し給へ。蔡京が云く、足下の所存最理なり、我これを曉せりと、評議して居ける處に、一人の近習來て、鄷美囘りぬと報じければ、蔡京早速呼入れ、汝いかゞして命を脱れたるや、と問けるに、鄷美答へて云く、宋江原來歸順の心有よしにて、活捉れたる者には、路銀を惠て放ちけるゆゑ、某も一命を脱れ再たび馳かへりぬと、具に語りければ、高俅冷笑て云く、宋江等詐の計ある故、故意汝等を饒しつらん、重ねて梁山泊を攻んには、山東河北等の人馬を催さば可ならんや。蔡太師が云く、我明日諸事を詳に奏聞を遂げ、議を定むべければ、今日は先私宅に歸り明日朝參内有べしと約しければ、高俅、童貫、鄷美遂に別れて各私宅に歸りけり。

○十節度議して梁山泊を取んとす

東京の蔡太師は、高俅童貫等を歸し、其翌朝五更の一點、百官都て參内し、丹墀殿に於て、天子を拜し奉り、文武相分れ、列をなしける處に、蔡太師進み出て、童貫嚮に大軍を引て梁山泊に推寄しかども、炎熱甚だしく、人馬皆疲れぬるゆゑ、先軍を休て歸陣したるよしを奏しければ、天子叡聞有て宣ひけるは、已にかくのごとくば、此節賊を討こと能ふまじきや。蔡太師

戰輸たらんことを察し、遂に後堂に迎へ軍の次第を問けるに、童貫再三拜をなし跪きければ、蔡太師が云く、汝心を憂しむることなかれ、此度の戰に敗北せし事は、我疾これを曉れり。時に高俅進み出て云く、梁山泊の賊等は、皆水泊に居して防ぎける故、船なくしては進みがたき處、童貫は只軍馬を以て攻しゆゑ、遂に勝利を失ひ、敗北せりと、宜しく取成を云ければ、童貫も又賊の謀に中りたる次第、一々具く語りける。蔡京が云く、汝許多の軍馬を失ひて、若干の錢糧を費し、豈よく此事を帝に奏聞せんや、帝もし此事を知り給ひなば、必定汝を罰し給ふべし。童貫再拜して云く、伏して願くば太師一點の仁慈を垂給ひて、某が一命を救ひ給へ。蔡太師が云く、我明日參内し、天色熱して軍士つかれける故、且軍を休めて歸陣したるよしを奏すべけれ共、帝若怒りを震ひ給ひて、かくの如くんば、心腹の患何れの日かこれを除んやと、のたまふことあらば、我重ねて奏すべき辭なし。高俅が云く、帝若果して此等の言をのたまはゞ、某大軍を引て、親自梁山泊を攻破らん、太師此事を奏し給ひ、宜く吹噓を施し給へ。蔡京が云く、足下肯て梁山泊を攻候はゞ、一鼓に賊を破らんこと何の疑かあらん、我明日帝へ奏聞し、再び梁山泊を攻しめんとて、已に領承したりしかば、高太尉また告て云く、某梁山泊を攻んには、若干の兵船を用ひ、水陸より竝び進で推寄すべきに、此事をも

か我爲に此役を勤めたまはんやと、說も畢らざるに、座中より一人進み出て云く、小生願くは往べしと、答へければ、衆人も誰やらんと見かへれば、是神行太保戴宗なり。宋江大に悅で云く、是迄軍事を探聽のことに附ては、多く儞を勞したり、此度賢弟東京へ赴んとならば、必ず一人の幇手を同伴有べしと、云ければ、李逵傍より進み出て云く、我哥々と同じく行んと。宋江笑て云く、儞此まで處々に至て大事を惹出せば、此度の件は叶ふまじと、再三制しければども、李逵猶も行んと乞しかば、宋江大に叱て再び問て云く、誰か賢弟を助けて行べきやと、有ければ、赤髮鬼劉唐すゝみ出て云く、小弟願くば戴宗哥々と同じく行んは如何と。宋江大に喜んで許しければ、戴宗は劉唐と共に、旅の用意取したゝめ、宋江に相辭し、兩人東京へ赴けり。扨も東京の大元帥童貫は、畢勝と共に敗軍四萬有餘を聚め、夜を日に繼で急しかば、はや東京城も近く望みける處に、八路の軍馬共は、各辭して本國に歸りけり。童貫は只東京の人馬を引て城中に入り、逕に高太尉が館に至て、軍に打負たる次第幷に、鄷美を活捉られたること、一々詳に語ければ、高太尉これを聞て、少しも動ぜず、夫輸贏は兵家の常なり、童公必ず憂ひ給ふことなかれ、只天子をだに誑き奉らば、何の大事か有んとて、高俅卽時に童貫を引て、先蔡太師が館に至りし處、蔡太師は童貫歸陣して高俅と共に來りたるよしを聞き、必然

宋江自ら立て、鄷美が禁の繩を解き、堂上に請じ、自ら盃を捧て、鄷美を相待しけり。此日山寨の頭領は、牛を殺し馬を宰し、大に三軍を賞しけり。宋江は鄷美を兩日迄とゞめ、酒食を以て大に款待し、鞍馬を備へ、金沙灘にて行を送りければ、鄷美は大に喜びけり。宋江は恭しく鄷美を拜して云く、此度將軍に敵し威厳を侵せしは、皆止ことを得ざればなり、宋江等は舊より異心ある者にあらず、只朝廷に歸順して、國家の爲に力を出し、御用に立べきことを冀へ共、たゞ朝廷不法の人に屈せられ、かくの仕合にて候へば、將軍何とぞ我等が冒瀆を赦し、朝廷に歸り給はゞ、美言を以て天子に奏し、我等が願をかなへ給はゞ、君の大恩高德、死すとも忘るまじ、と宣ければ、鄷美も始て其理に伏して、其義を領受し、且我を殺さゞるの恩を謝し、宋江に相辭し、山を下りければ、宋江は猶も人をして、界の外まで送らせければ、鄷美はそれより只一騎東京へ歸りけり。去程に宋江は再び忠義堂に歸り、吳用を始め多くの頭領を聚め、軍事を商議す。元來此度十面埋伏の計を以て、童貫が軍を散々に攻破りしは、此皆軍師智多星吳用が機謀なり。其時吳用宋江に對して云く、童貫京に歸らば、再び天子に奏し、大軍を起すべし、今一人探聽の人を東京に遣し、事の虚實を聞繕ひ、豫じめ準備を爲んはいかん。宋江が云く、軍師の高論我心に符合せりとて、隨即衆の頭領に對して云く、爾等衆人の中、誰

らんとせし處に、左の方の林の中より一簇の敵軍攻來る。眞先に馬を躍して馳出る大將は、沒羽箭張淸なり。左の方に控たる大將は龔旺なり。右の方に控たる大將は丁得孫なり。各手に軍器を取り、三百餘騎の馬軍を引連れたり。各輕き弓短き矢を取り、繡旗花鎗を提たり。張淸、龔旺、丁得孫、眞先に進んで攻來る。嵩州の都監周信は、張淸が軍勢の少きを欺負て、手中の鎗を挺べ張淸を接く。張淸は左の手に鎗を住め右の手に礫を取り、周信を目懸けて大に呼て云く、著れよと、劈面へ投ければ、其礫過たず周信の鼻を打ければ、馬より撞と落にけり。張淸が左右に控へたる龔旺丁得孫の兩將は、其儘馬を馳出し、手中の鎗を取直し、周信が咽喉を突ければ、眞に秋霜の邊地の草を摧き、春雨の上林の花を打がごとくにて、隨卽陣前に死にけり。去程に童貫は畢勝と共に辛き命を助り、敗殘の軍勢を引率し、濟州に入り、猶も四方の殘兵を聚め、夜を日に繼で、東京を差て去にけり。原來宋江は兼て朝廷に歸順するの心ありければ、初より衆將に命じて、故意童貫を捉へしめず。其時宋江金を鳴し、各路の軍馬を收め、都て梁山泊へと歸りけるに、眞の騎馬の人は皆金鐙を敲き、步下の卒は齊しく凱歌を唱へて、水滸の寨中に歸りければ、宋江、吳用、公孫勝は先忠義堂に上り、裴宣に命じて、各將の功勞を賞し、多くの金帛を賜りけり。斯る處へ盧俊義は、酆美を活捉のまゝ、階下に引來りしかば、

李逵斧を揮く兵馬都監段鵬挙を伐つ

し、鄧美が持たる刀を打落し、隔勢處を近附て、後より腰を揪み、只一脚に戰馬を踏開き、活捉にこそなしにけれ。盧俊義が左右の副將楊雄石秀の二將は、陣前に跑出鄧美が乘たる馬を奪ひ、鄧美を引渡して本陣の前に回りける。去程に畢勝、周信、段鵬擧三將は、童貫を助け命を捨て敵軍を切拔走りしが、又背後より盧俊義が軍勢に切立られ散々に打なされ、恰も網を漏魚のごとくにて、漸一方の重圍を切拔て、濟州さして走りし處に、又向うの山坡の下より一簇の敵軍馳出る。眞先に進みし二人の英雄は、黒旋風李逵、喪門神鮑旭なり。各手に軍器を持三千の歩軍を引率す。後に控へたる二人の副將は項充、李衮なり。各手に蠻牌を舞し、合後をなす。其時四人の頭領は、童貫が軍勢を縱横に切立れば、官軍大に敗走す。童貫は衆將とともに、且戰ひ且迯て、既に敵軍の核心を切拔ける處に、李逵手に大斧を提げ雷の如く吼來り、童貫が前に控たる段鵬擧が乘たる馬の前脚を、只一斧に砍落せば、馬は其儘倒れけり。段鵬擧は馬より落て迯んとせし處を、李逵勢に乘じ飛來り、斧を揮上頓て首を砍落せり。されば童貫は敗殘の軍兵をあつめて、已に濟州の近邊まで迯延しか共、誠に頭に著たる盔の不正、持たる鎗の落るも知らず、人馬ともに疲れ、這々命を助りけり。童貫は溪邊に軍馬を休めて在けるが、忽ち又向うの溪間より砲の聲天に響き、射矢は雨の如くなれば、童貫大に驚き、急に溪岸に上りて走

七編　巻之六十三

○宋公明再童貫に贏つ

樞密院使童貫は、終日幾度か悲哀なる危急を經て、漸敵合をはなれ蘇生せし心地にて、始てほつと一息つき、夜に乘じて落延んと、商議も果ざる處に、又も梁山泊の强敵攻來り、數千の火把白晝の如く、眞先に進だる一人の大將、白馬に打乘り、手に二丈許の鋼鎗を引提げ、威風凛々たり。是則梁山泊の副主河北の玉麒麟盧俊義也。左の方に控たる副將は、病關索楊雄、右の方に控たる副將は、拚命三郎石秀なり。各手に朴刀を提げ、三千餘人の軍勢を引連れ、精神を抖擻て攻來る。盧俊義馬上より大に罵て云く、奸臣童貫早く馬より下て縛を買れと、呼はりければ、童貫大に愕然き、衆將に對して云く、前に伏勢あり、後に追兵あり、進退已に如何せん、と慌けり。酆美が云く、樞相必ず憂給ふことなかれ、小將君の爲に命を捨て、賊を截止め候はん間、君は衆將と共に、一筋の路を切ひらいて、濟州へ落行給ふべしと云捨て、馬を躍し刀を舞し、盧俊義を接て戰ひしが、未だ數合に至らざるに、盧俊義は手中の鎗を取直

得て、此場の大難を免れたりとて、衆将と共に敗残の軍兵を聚て済州に逃んとて評議未だ終らざるに、忽ち向うの山坡の下より、許多の火把晝の如くに照し、喊の聲天に響き、一簇の敵軍馳來る。此將は誰ぞ、次巻を見るべし。

べし。周信領受し、頓て軍勢に號令を下し、隊伍をそなへ、心を齊うし、力を併せしめ、自ら鄷美と共に馬に打乗て眞先に進み、金を鳴し鼓を擂て、山坡の邊に切來る。未だ一里の道を過ざるに、又刺斜里より、一簇の軍馬馳出しかば、鄷美馬を躍し、刀を舞して切蒐れば、敵軍にはあらで是睢州の都監段鵬擧なり。時に三人の大將軍勢を一處になし、山陰に馳至り、童樞を接へけり。去程に童貫は味方の殘軍を聚め、商議して曰く、我輩今夜の中に脱れて好んや、明朝に至て切拔くべしやと、評定まち〳〵なり。鄷美が云く、我等四人死すとも樞相を助け、今宵の內に敵の重圍を切透し候はゞ、賊の憂を免るべし、遲延して明朝に至らば、却て大事に及ぶべし、と宣ければ、童貫も尤なりとて、日の暮るを見すまし、各準備をなしにけり。已に二更の比にもなりしかば、忽ち四方に喊の聲大に起り、敵の大軍金をならし鼓を打て攻來る。鄷美は陣前に馳出て、四方を望むに、其夜は別して星月明朗なりしかば、隨即衆軍に下知して、童貫を守らしめ、其身は馬を馳て眞先に進み、互に力を併せて山坡の下まで切下りければ、前後の敵軍追來り、聲々に呼て云く、童貫佞臣を脫することなかれと。童貫が軍勢はこゝを最期と苦戰をなし、西南の方へ落行き已に三更の比にもなりしかば、漸敵軍の核心を切拔ければ、童貫大に悅び、馬上より天地を頂禮し、神明を拜し終て云く、且辱し、我天の憐を

たる刀、李明が乘たる馬の後脚を切落せり。彼馬大に斷て飛がごとく跑出し、李明は馬より落たるを、楊志手早く刀を揮上げ、李明の首をぞ打にけり。去程に史進、楊志は呉秉彜、李明を打取り、勢に乘じて童貫が陣に攻入り、あたるを幸に敗軍を砍まくりければ、童貫がさしも大軍たりしも、今は纔に打なされ、皆四方へぞ迯散けり。童貫は呉秉彜、李明の兩將を、眼前敵に打取られ、其身は酆美、畢勝と共に、辛き命を脱れて、五六里ばかりも迯延けれども、四面八方こと〴〵く敵軍なりければ、いかゞはせんと慌てけり、酆美が云く、樞相必ず憂へ給ふことなかれ、某東南の方を望むに、猶味方の軍兵多くありと見えたり、八路の軍勢の旗も多く見え候へば、某一筋の道を切抜け、身方の殘兵を集め來るべし、樞相は畢勝都統と共に、那邊の山陰に待給ふべしとぞ宣にけり。童貫が云く、旣に日暮にもなりければ、儞早々去て早く歸るべし、必ず敵の計に落べからずと、制しければ、酆美承て童貫に相辭し、手に大桿刀を提て、馬を飛し敵軍を切破り、南方に至て身方の殘軍を尋求る處に、向うの方に一簇の軍兵屯せしかば、酆美近寄りて望見れば、嵩州の都監周信が兵馬なり。此時周信は酆美が來るを見て、自ら接へ、陣中に請じて問ていはく、樞相今何處に居給ふや。酆美が云く、只向うの山陰に畢勝とともに待給ふ、汝早く此軍勢を引連て救ひ給ふべし、若遲延せばあしかる

て、敵軍潮の湧が如く攻來れば、童貫が軍勢大に亂て、風落雲散に奔走す。童貫大に驚き、いかがはせんと慌てける處に、忽ち向の山間より一簇の軍兵馳來る。童貫頭を擧て遙に望みければ、是陳州の都監吳秉彝、許州の都監李明の兩將なり。此時吳秉彝李明は、敗殘の軍勢を集めて、琳琅山より迯來り、童貫が軍を助け、漸く一方の重圍を切拔け、走らんとせし處に、又左の方の山邊に喊の聲大に起り、一簇の敵軍馳出す。各手に紅の旗を捧げたり。眞先に進みし二人の大將は、青面獸楊志、九紋龍史進なり。各戰馬に打乘り、手に刀を提げ、前路を遮り切てかゝる。其時李明は鎗を挺て楊志と戰ひ、吳秉彝は方天戟を持て、史進と戰ふ。四人の猛將等、各平常の祕術を盡し、戰ふこと二十餘合、其時吳秉彝は方天戟を揮上て、史進が心炊へ突掛たり。史進早くも身を閃しければ、吳秉彝が突掛たる戟は、史進の脇の下をくゞり、吳秉彝は馬に乘ながら、史進が身の邊に近附ければ、史進は早も刀を揮上て、吳秉彝が劈面を切附たるにぞ、馬より落て死たりけり。李明は最前より、楊志と戰てありしが、今目前に吳秉彝が敵軍に殺さるゝを見て、臆病風や起りけん、忽ち馬を返し迯んとす。楊志勢に乘て追詰しかば、李明魂消え、魄散じて、手中の鎗を打捨て、已に坡の上に迯登らんとせしところを、楊志大に叫んで刀を揮上げ、劈面より切かくれば、李明は透さず身を閃しけるに、楊志か切附

と慌ければ、鄷美、畢勝馬を馳來り、童貫を助けて重圍を切拔け、辛き命を脫れて、漸山東の路に逃來り、休息せんとせし處に、忽向の山邊に砲の聲天に震ひ、鼓の聲地を動し、一彪の敵軍馳來る。まつ先に進し二人の大將は、解珍、解寶兄弟なり。各手に五股鋼叉を提げ、許多の軍勢を引率して、陣中に切來る。童貫が軍勢は一遮も遮ず四方へ落行ければ、梁山泊の軍勢、馬歩火急に追來れば、鄷美、畢勝は童貫を助けて、一二里ばかりも迯延たる處へ、解珍、解寶手に鋼叉を提げ、大勢軍馬を引來り、直に童貫が馬前に砍かゝりければ、鄷美、畢勝取てかへし、暫く解珍、解寶と戰ひしが次第々々に力弱り、既に危く見えける處に、唐州の都監韓天麟、鄧州の都監王義の二將馬を馳來り、鄷美、畢勝を助け、漸重圍を切拔け、童貫に從つて又二里ばかりの路を過けるに、忽ち向の林の中に鑼の音して、一簇の敵軍塵を蹴立て馳來る。眞先に進みし二人の大將は、雙鎗將董平、急先鋒索超なり。各手に兵器を持て更に一言をもいはず、馬を飛し童貫に打てかゝりければ、王義鎗を挺て索超を迎へけるが、索超手中の斧を揮上て、王義の頭を只一打に劈ければ、王義は馬より落て死てけり。韓天麟は王義を救はんとて、馬を進め陣前に馳出しに、董平鎗を挺て、只一搠に馬より下に突落し、頓て首を剁にける。鄷美、畢勝は命限りに童貫を助けて走りけるが、前後左右こと〴〵く、金鼓の音し

軍馳來る。左の方より進み來る大將は、雙鞭將呼延灼なり。手に雙鞭を取り。後に從ふ軍勢は、各白色の旗を捧げたり。又右の方より進み來る大將は、豹子頭林冲なり。手に長き鎗を提たり。後に從ふ軍勢は、各黑色の旗を捧げたり。二人の大將馬上に叫て云く、奸臣童貫何國へ迯んとするや、早く汝が頭を渡すべしとて、直に陣中へ切入ければ、官軍の方にも彼睢州の都監段鵬擧は呼延灼を迎へ、洳州の都監馬萬里は林冲を迎へ、各火花をちらし戰ひけり。去ほどに馬萬里は林冲と戰ひ、未だ數合に至らざるに、叶ずとや思ひけん、馬をかへし迯んとせし處に、林冲大に叫で追詰ければ、大に慌てゝ、手に持たる鎗を落しければ、林冲就勢手中の鎗を取直し、只一鎗に馬萬里を突ければ、馬より落て死てけり。段鵬擧は最前より、呼延灼と戰て在しが、馬萬里が敵軍に殺さるゝを見て、戰を決するに心なく、馬を跑して迯ければ、呼延灼は勢に乘じ逼迫て、既に危く見えける處に、童貫多くの軍勢を引率して、漸段鵬擧を助け山邊を過ける處に、忽ち喊の聲天に震て、背後より一簇の步武者、童貫が軍に打かかる。眞先に進し和尙は花和尙魯智深なり。手に鐵禪杖を提て、雷のごとく吼來る。後に繼で進みし行者は、行者武松なり。手に兩刀を持て砍りかゝれば、童貫が軍勢大に恐れ、未だ戰ずして大に亂れ、四方五落に落行けり。童貫は前後に敵を引請て進退きはまり、いかゞはせん

らば、後悔する共益有まじ、一度此地を引退き、必ず近き内に敵の虚實を打聽き、其時に兵を進んも遲かるまじ、と宣けれ共、童貫は猶も怒はれず。是非に兵を進めて、今夜の内に宋江を擒にせずんば死すとも歸るまじと、既に軍勢を引率し、一町ばかりも進みし處に、忽ち後の方に喊の聲して、後軍大に亂しかば、童貫大に驚き、酆美畢勝と共に、いそぎ後軍に歸り來て救ふ時、東山の邊に又鼓の音して、一簇の敵軍汐の湧がごとく攻來る。左の方より進んだる大將は、霹靂火秦明なり。手に狼牙棍を提げ、後に隨ふ軍兵は、皆紅色の旗を捧げたり。右の方より進んだる大將は、大刀關勝なり。手に偃月刀を提げ、後に隨ふ軍兵は、皆青色の旗を提げたり。二人の大將各五百餘の軍勢を引率して、童貫が軍に攻來り、大に呼つて云く、童貫々々早く汝が首を渡すべしと、罵りければ、童貫大に怒て酆美に命じ、關勝を迎へしめ、畢勝に命じて秦明を迎へしむ。其時四人の猛將は祕術を盡して戰ひけり。童貫は馬上より四人の戰を見てありじが、忽ち又後軍の方に、喊の聲しきりに起りければ、味方に誤りあらんことを恐れ、急ぎ金をならして軍を收め、酆美畢勝と共に退んとせし處に、朱同、雷横又軍勢を引來て、前後より夾んで攻ければ、童貫が軍兵大に亂れ、其討るゝ者數を知らず。酆美畢勝は童貫を祐て重る圍を切拔け、這々辛き命を逃れて、十里ばかり退きし處に、又刺斜裏より一簇の敵

美と戰ふ。四人の猛將陣前に戰ていづれ勝負はなかりけり。童貫馬上より望んで感じ入てぞ居たりける。其時朱同、雷横の兩將は佯り負け、馬を馳て本陣に迯歸りけるに、鄷美畢勝兩將は勝に乘て馬を馳せ、追蒐けたりしが、再び引囘さんとするに、又朱同、雷横かへし來て突戰ひける故、童貫三軍に命じ、金を鳴らし鼓を打しめ、鄷美畢勝をたすけ、旣に山邊に追行しに、忽ち山上に畫角の音頻に響き、山上より火砲を打ければ、童貫其伏勢あることを知て、諸軍を止め、遙に向うを望に、山上に一本の黃色の旗を建て、上面に金糸にて替天行道の四字を繡せり。童貫馬を山邊に止めて、子細に山寨の內を望むに、一簇の綵旗を立並べたる下に、一人の大將馬上に端坐せり。是則鄆城縣蓋世の英雄、山東の呼保義宋公明なり。背後に控へたるは、軍師吳用公孫勝なり。左の方に許若の金鎗を立並べ、眞先に立し大將は小李廣花榮なり。童貫見て大に怒り、宋江を手取にせんとて十萬の人馬を二手となし、攻上らんとせし處に、山上忽ち音樂の聲して、宋江をはじめ衆の敵軍一度に咄と笑ひければ、童貫いよ〳〵怒て、齒を咬しばり罵りて云く、儞等天に逆ふの賊寇いかんぞ天兵に戲れるや、我眼前に擒にすべしとて、猶も三軍に下知し、山上へ攻上らんとせし處に、鄷美、畢勝諫て云く、樞相必ずはやまり給ふべからず、彼等必ず計あらんもはかりがたし、もし敵の奸計に落入て險地に至

るに、忽ち向の蘆葦の間より、一聲の轟天砲を放ちければ、天地も崩るゝばかりなり。官軍の騒動なゝめならず。前軍の士卒來て云く、山東山西すべて、敵軍の伏兵有と告ければ、童貫大に驚き、急ぎ酆美、畢勝を召て商議す。酆美畢勝が云く、樞相公必ず憂へ給ふなとて、其まま刀を拔持ち前軍に來り、大に呼つて云く、もし敵を恐れ迯る者あらば、一刀に砍べしと、制しければ、三軍も暫し靜つて見えにける。童貫は衆將と共に山寨の方を望むに、忽ち鼓の聲天に震ひ、一彪の軍馬馳來る。各手に黄なる旗をさゝげて喊を咄と作りけり。當先に進んだる大將は、梁山泊の頭領美髯公朱同なり。後に控へたる大將は、同じく插翅虎雷横なり。二人の大將各黄驃馬に打乘り手に軍器を持ち、五千の軍勢を引率して、童貫が軍に攻來る。童貫其儘酆美畢勝に命じて敵を迎しむ。其時畢勝手に鎗を挺へ、馬を躍し陣前に出で、大に罵て云く、儞等小賊能聞け、天兵の至り給ふに、猶降參せずして敵するは、自ら死を求るにあらずやと呼はりければ、雷横聞て、馬上に大笑していふ、汝等命惜くば早く歸るべし、若我に刄向はゞ、立處に死すべしと呼はれば、畢勝大に怒り馬に拍打ち、鎗を挺て打かゝる。雷横もまた鎗を挺べ、火花を散し戰ひけり。凡戰ふこと二十餘合なれ共、未だ勝敗を分ざれば、酆美焦て馬を躍し、刀を舞し畢勝が戰を助んと打てかゝれば、宋江が軍中よりも朱同馬を躍し刀を舞し、酆

む。もし捉へずして空しく歸らば、一刀兩斷こと〴〵く切殺すべしと、下知すれば、五百餘人各甲冑と衣服を脱棄て水に飛入り、一度に吼と喊を作りけり。彼漁人は少も慌てず、其時船頭に立て、童貫を指ざし、大に罵て云く、國を亂す賊臣民を害するの禽獸、自ら身の分限を知らず、我が義軍に向ふは、恰も蟷螂の斧を振て隆車に對するがごとし、今眼前に死すべしと、大に呼りければ、童貫聞て大に怒り、左右に下知して、雨の如くに箭を放たしめければ、彼漁人呵々と大に笑ひ、簑衣箬笠を脱棄て水中へ飛入けり。原來此漁人は梁山泊の頭領水練の達者、浪裏白跳張順なり。頭に戴きたる箬笠、身に著したる簑衣は、裏面に糞銅のへだて有て龜の殼のごとくに作りたる物なれば、百萬の强弓を以て射る共、遂に透すこと能はず。其時五百餘人の水軍は、彼漁人を捉んとて、此や彼を尋求むるに、忽ち水底に人有て、水中へ引入ければ、水軍大きに驚き、迯回らんとする處を、張順は水底にて刀を拔出し、挑頭に切附くれば、五百餘人の水軍も、過半は水中に死てけり。偖も大なる湖水皆血に染ければ、童貫大に驚き、呆れはてゝぞ控へける。童貫の傍にある者告ていはく、梁山泊の山寨にたてたる黃旗、頻りに動き候と指ざしければ、童貫は馬上より遙に望むに、果して其ごとくなれば、大に駭き奇んで、いかゞせんと控へたり。酆美三軍に下知して十餘萬の軍勢を二手となし、旣に山前の蘆葦原に至りけ

童貫命じて
乱箭を濺
人を射らしむ

ば、童貫子細に望み見るに、彼漁人、頭に青き箬笠を戴き、身に簑衣を著て、更に敵とも見えざれば、軍士に命じこれを試しむ。其時一人の軍兵水邊に至り、漁人に對して大に呼つて云く、儞知らずや、梁山泊の賊人いづくに在やと、再三問けれ共、更に一言の返答さへせねば、童貫心中に其敵なることを知て、能弓射者に云附射させけり。其時二人の弓者は、各手に弓箭を引搭へ、水邊に馬を乘止め、漁人を望みて颼地放つ。其矢誤たず、漁人の後心に中りけるが、忽ちに喘地と響きて、箭は水中に落にけり。弓者は猶も矢をつがへ、頻りに五六度も射けれ共、皆以前のごとくなれば、心中に大に慌てゝ、馬を乘かへし、中軍に至て童貫にかくと告ければ、童貫壯士に命じ、水邊に三百餘の硬弓を竝べ、彼漁人に向て一度に放させければ、亂箭一度に中りけれ共、或は船傍に立ち、或は水中に落入りて、漁人の簑衣箬笠へは一本も立ざりければ、童貫大いに疑ひ、水練の者に命じて、水に入て彼漁人を捉ふべしと下知すれば、四五十人の水練の達者、各甲冑を脫棄て、水に飛入り、已に漁人の船に近附ければ、彼漁人忽ち釣竿を水中に抛棄て、手に杖竿を取上て、船に近附く者を見當るを幸に打立れば、四五十人の水練の者、あるひは頭腦を打れあるひは腹を突れて、過半は水中に死にけり。殘る人々是に見懲し、叶はじとて迯返れば、童貫大に怒りて、又五百餘人の水練達者を揀び、各水に入て漁人を捉へし

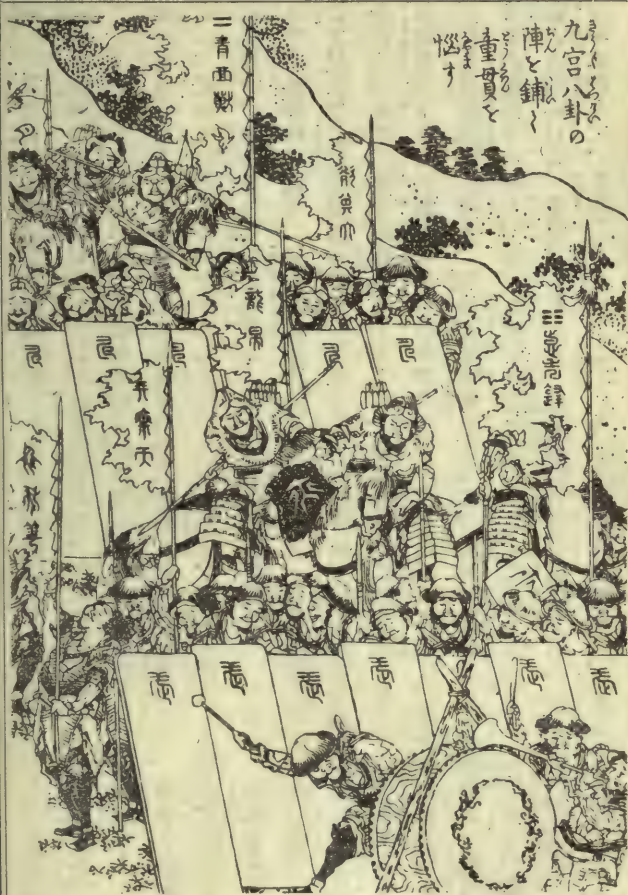
も過ければ、其夜の七つ時に酒飯を以て士卒に與へ飽しめ、各甲冑を著し、手に弓鎗戈刀等の軍器を擧げ、八路の軍馬を左右に竝べ、三百人の鐵の鎧を著したる軍兵を、眞先に進め、酆美、畢勝の兩將みづから中軍を守護し、其勢都合十萬餘騎梁山泊へと馳向ふ。

○梁山泊十面の埋伏

童貫已に三十里ばかりの路を過て、前日の戰場の邊に至り、四方を望めども、敵軍とては、一人も見えざれば、童貫心中大に疑ひ、其計あらんことを恐れ、自ら前軍に來て、酆美、畢勝に告ければ、二人答て、樞相必ず案じ給ふことなかれ、たとへ吳用等、何等の謀計をめぐらし何の備を用ふる共、既に長蛇の陣を設置たれば、敵軍に計ありとも、恐るゝに足らず、只軍馬を進め給へとて、大に人馬を引率して、梁山泊の水邊に至りけり。其時童貫は酆美畢勝と倶に馬を水邊に乘止め、遙に四方を望めども、更に一人の敵軍なく、たゞ四方は渺茫たる湖水にて蘆葦の生たる水鄉なり。又遙に水滸の山寨を望み見るに、只一本黃色なる旗風に颭たるのみにて、更に一人の人なければ、童貫心中に疑ひて、暫し控へて在ける處に、忽ち向の蘆葦原より一人の漁人、小舟に乘て官軍の前に舟を搖來り、水を隔てゝ一町ばかり向にて、釣を垂けれ

度に咄と切入ければ、童貫が大軍大は敗北して、刀を棄て、鎗を置て、散々に迯失けり。宋江が軍兵は、勝に乘て猶も追行ければ、軍師呉用は陣中に金を鳴し、軍を收め制して云く、迯る敵を長追すべからず、只我梁山泊の威勢の寄附がたきを、官軍に知らしむるまでなり、と云聞け、宋江と同じく、許多の人馬を引率して、山陣に歸り、功ある軍士には金帛をもつて賞しけり。樞密使童貫、最初の一陣さん〴〵に打負け、梁山泊を離るゝ事三十里許に陣を取り、味方の軍兵を點見するに、死する者一萬餘人に及びければ、心中大に憂ひ、いかゞはせんと諸將を召集め、商議をなしにけり。酆美畢勝進み出て云く、樞相公必ず憂へ給ふことなかれ、某つらつら按ずるに、梁山泊の賊人は、もとより山寨に據て勢をなすといへども、實に恐るゝに足らず、此度は我官軍の至るを知つて、前方より此陣勢をなせり、官軍原より敵の地理を知らざれば、誤て賊等が奸計に落ち入り、一時に利を失ふといへ共、再び軍馬を整練し味方の鋭氣を養ひ、三日を經て全軍を分ち、長蛇の陣を張攻打ば、立處に勝候べし、抑此長蛇の陣と申は、常山の蛇を象り、首を撃んとすれば尾にて是を拂ひ、尾を撃んと欲する時は、首にて是を拂ひ、都て連絡て絕ず、奇妙の陣にて候へば、大敵に遇ても屈すること候はずとのべければ、童貫聞いて、尤なりと同じ、則三軍に命じ軍馬を訓練し、かつ謀を敎へけり。斯て三日

賊を咄と作りけり。其時陳翥刀を横たへ、聲を勵し罵て云く、天に逆ひ國に背く草賊の輩、天兵の至り給ふに降參せずして、儞の骨肉の土となるを待やと、呼りけり。宋江が南陣の内より、一人の猛將馬を躍せ馳出し、手に狼牙棍を提て、物をもいはず打てかゝる。此人は則先鋒頭領虎將秦明なり。陳翥も又手中に刀を輪し、祕術を盡して戰ふ事二十餘合に至れども、未だ勝負を分たず。其時秦明は故意敗北し、馬を回し迯ければ、陳翥は勝に乘て追附き、手中刀を振て、秦明に打てかゝる。秦明透さず身を避ければ、陳翥は空虚を切附て、三間斗も砍入ければ、秦明勢に乘じて狼牙棍を振上げ、陳翥を目がけ切著れば、陳翥が首は兜を被ながら、馬の前に落たりける。秦明が左右に控へたる副將、單廷珪、魏定國、馬を馳て飛來り、陳翥が馬を奪取り、秦明を助けて本陣に反けり。東南の陣門に控へたる雙鎗將董平は、秦明が敵の大將を打取しを見て、自ら思らく、我も又此勢に乘じて、主將童貫を擒にし、名を後世に擧べしとて、手に二本の鎗を提げ、忽ちに霹靂のごとく叫んで、童貫が軍中に跑入ければ、童貫は其勢の甚しきを恐れ、本陣をさして迯入けり。西南の陣門に控たる、急先鋒索超も、又思へらく、此勢に乘じて、童貫を擒にすべしとて、手に大なる斧を揺げ、童貫が中軍に切入けり。秦明は董平索超が敵軍へ切入を見て、其誤有んことを恐れ、先鋒の軍勢に命じて、一

九宮八卦の陣を鋪く童貫を惱す

たる女將は、母夜叉孫二娘なり。背後に控たる三人の大將は、各三女將の夫なり。中央に控たるは矮脚虎王英なり。左の方に控たるは、小尉遲孫新なり。右の方に控たるは、菜園子張青なり。各二千の軍兵を引連れて、合後をぞなしにけり。去程に九宮八卦の陣已に成りしかば、其軍馬幾千萬と云ことを知らず。誠に天地の機關に合ひ、風雲の氣象を奪ひ、前後には龜蛇の狀をつらね、左右には龍虎の形を分ちしかば、孔明が妙計、李靖が神策といへ共、是にはしかじと思はれけり。樞密使童貫は將臺の上にて、梁山泊の敵軍を望しが、未だ一時に足らざる間に、此九宮八卦の陣を張り、人馬潮の湧が如くなるを見て、魂魄飛散し、大に恐れ驚き、自ら思ふ、誠なるかな、是迄朝廷より度々の官軍を向られしか共、遂に勝利を得ざりし、我此度怎生か勝事を得んやとて、暫し思案してありしに、敵軍より頻に鑼太鼓を打て、戰を催促せしかば、只得將臺を下りて戰馬に打乘再び前軍に至り、高聲に呼つて云く、誰か梁山泊の賊を打取て、朝廷の聖恩に報ぜんやと、云もいまだ終らざるに、先鋒の隊より一人の猛將馬を躍せ進み出で、身に白袍銀甲を著し、手に大桿刀を提げ、馬上にて身をかゞめ、童貫に向て云く、某願くは馳向んと望みける。童貫是を見るに、則是鄭州の都監陳翥なり。現に副先鋒の職なれば、其まゝ士卒に命じて、金鼓を打しめ、紅の旗を三度迄搖しければ、陳翥馬を陣門より馳出し、

の事務を主どる。又中軍の眞中を望むに、右の方銷金青羅傘の下に一人の先生駿馬に打乘て、頭に如意冠を戴き、身に絳綃衣を著し、脊に大小の寶劍を脊負ひ、手に紫の轡を採れり。此人は能風雨を呼び、鬼神を使ふの眞師、梁山泊の入雲龍公孫勝なり。又左の方銷金青羅の傘の下に、一人の軍師駿馬に打乘り、頭に綸巾を戴き、身に白道服を著し、手に羽扇を持ち、腰に二筋の銅練をかけたり。此人はよく謀略に通じ、兵器を暗じ、孫吳の祕を會得し、呂望、張良の蘊奧を明め、神變不測の籌略をなす、梁山泊の軍師智多星吳學究なり。眞中の銷金の大紅羅傘に、一人の大將照夜玉獅子といへる名馬に打乘り、頭に鳳翅盔を戴き、身に渾金の鎧を著し、手に鋸鋙の寶劍を提たり。此人は則梁山泊の主義統軍の大元帥、濟州鄆城縣の人山東の及時雨呼保義宋公明なり。三人の主帥は中軍を主る。左右には大戟長鎗を建並べ、五六十人の軍勢各名馬に打乘り、弓矢鎗長刀を提て、中軍守護をなす。背後の方には二十四の畫角幷に、太鼓陣鐘を並べたり。又左右に二組の遊兵を屯せり。左の方には沒遮攔穆弘幷に、弟の小遮攔穆春ともに、一千五百人の軍馬を領して控へたり。右の方には赤髮鬼劉唐、九尾龜陶宗旺と共に、又一千五百人の軍馬を領して控へたり。又後陣はことぐく一簇の陰兵あり。眞先に馬を馳出したる女將は、一丈青扈三娘なり。左の方に控たる女將は、母大蟲顧大嫂なり。右の方に控へ

手に刀を提て、二十餘人の軍卒を隨て陣前に立たり。後の左右に十二本の金鎗、十二本の銀鎗を建たり。左の方金鎗を立ならべたる邊より、一人の大將眞先に馬を出す。頭に纓花冠を戴き、身に繡袍を著し、手に金鎗を取り。是則金鎗手徐寧なり。右の方銀鎗を立並べし方より、一人の大將當先に馬を馳出す。頭に黃金の盔を戴き、身に綠錦袍を著し、手に銀鎗を提たり。是則小李廣花榮なり。二人は都て風流威猛の良將なり。左右に附從ふ軍兵、左の方は綠の衣服を著し、右の方は紫の衣服を著し、各頭に皂羅巾を戴き、鬢の邊に翠葉金花を挾み、各手に黃越白旄を提たり。背後に相從ふ軍卒は、頭に花帽を戴き身に錦衣を著、左右に綾羅金繡の幔幕を張り、朱幡皂蓋を立ならべたり。又東の方には二十四本の鉞斧を立て、西の方には二十四本の鞭撾を建つ。眞中に金の紙にて張たる傘を立て、傘の下左の方より一人の大將、金の鞍かけたる馬に打乘て陣前に進み出で、身に黃羅衫を著、手に金繡の旗を持つ。上面に金箔にて令の一字を書附たり。此人は則一日によく千里を走る、梁山泊の英雄神行太保戴宗なり。又傘の下右の方より一人の大將、銀鞍かけたる馬に打乘陣前に進み出で、頭に青包巾を戴き、身に金鎖袍を著し、背に強弓を脊負ひ、手に眉と等しき棒を提たり。此人はよく世事の機密を知たる、風流の若者、梁山泊の英雄浪子燕青なり。二人の英雄各中軍を守護して、軍中の往來

背後の繡旗上に寫して云く、小溫侯呂方と。また右の方十一本の畫戟を立たる邊より、一人の大將まづ先に馬を馳出したり。頭に寶冠を戴き、身に錦襴袍を著し、手に方天戟を提たり。背後の繡旗上に寫して云く、賽仁貴郭盛と。二人の大將各左右に控へ、まん中には一簇の步兵、各手に鎗刀を以て控へたり。まづ先に進み出たる兩人步軍大將は、兩頭蛇解珍、雙尾蝎解寶なり。兄弟各に三股の蓮華叉を執り、三百餘人の步兵を引率して、中軍を守護せり。左の方より一人の文士、馬を馳出すに、烏紗帽を戴き、身に白羅襴を著たり。背後の繡旗上に寫して云く、

胷藏二錦繡一筆走二龍蛇一

と、此則梁山泊の文案を主る、聖手書生蕭讓なり。又右の方よりも一人の文士馬を馳出す。頭に綠紗巾を戴き、身に皂羅衫を著たり。背後の繡旗上に寫して云く、

氣貫二長虹一心如二秋水一

と、是則梁山泊の吏事を主る鐵面孔目裴宣なり。二人の文士各手に筆を以て、功ある者を賞し、罪ある者を罰する役を勤む。後に控へたる紫衣を著たる人、各手に麻札刀を提たり。左右に控へたる錦衣を著たる人は、梁山泊の劊手鐵臂膊蔡福、一枝花蔡慶兄弟なり。各

の甲冑を著しけり。當先に馬に乘たる兩人の大將は、美髯公朱同、挿翅虎雷橫なり。又東門の方に控たる大將は、金眼虎施恩なり。西門の方に控たる大將は、白面郎君鄭天壽なり。南門の方に控たる大將は、雲裏金剛宋萬なり。北門の方に控たる大將は、病大蟲薛永なり。彼四門の中央に黃色の大旗を立て、上面に「替天行道」の四字を書附たり。旗の四角に黃絲網をつけ、四人の陣する四方より控へたり。後に旗を守る大將は、險道神郁保四なり。彼旗の背後に炮の臺をならべたり。炮を主る大將は、轟天雷凌振なり。後に二十餘人の軍士、各手に撓鉤套索を以て控へたり。背後に數百本の雜綵の旗を立て、中に二十八本の金繡の旗あり。上面に金箔にて、二十八宿の星辰を畫きたり。眞中に一本錦襴の旗を立て、上面に金糸を以て帥の字を繡せり。左右の纓には、眞珠の環金銀の鈴をつけ、上に雉の尾にて作たる飾あり。背後に控へたる大將は、沒面目焦挺なり。左の方に控たる副將は、毛頭星孔明、右の方に控たる大將は、獨火星孔亮なり。三人の大將各手に長き鎗を提げ、腰に利劍を帶び、戰馬に打乘りたり。馬のうしろに二十四本の狼牙棍を立て、五十餘人の軍兵左右に竝び居たり。又眞向に二本の戰繡旗を立て、左右に二十四本の方天畫戟あり。左の方に十二本の畫戟を立てたる邊より、一人の大將眞先に馬を乘出す。頭に明朱冠を戴き、身に麒麟袍を著し、手に方天の畫戟を提たり。

人の大將各手に兵器を提戰馬に乘て、陣前に立たりけり。又東北の方を望に、一彪の軍勢、各青き身甲を著し、前に一本の金繡の旗を建て、上面に金のすり箔にて、艮の卦を畫き、下に飛豹の繡あり。彼金繡の旗搖く處に、一人の大將當先に陣を馳出す。頭に穰花の盔を戴き、身に柳葉の身介を著し、手に長刀を提たり。背後の號旗の上に寫して云く、驃騎大將九紋龍史進と。左の方に控へたる副將は、跳澗虎陳達なり。右の方に控へたる副將は、白花蛇楊春なり。三人の大將各手に兵器を取戰馬に打乘り、陣前に立にけり。又西北の方に當て一群の軍勢各黑き鎧を著し、殺氣天を衝冲り、前に一本の引軍旗を建て、上面に金のすり箔にて乾の卦を畫き、下に飛虎の繡あり。彼引軍旗動く處に、一人の大將、頭に雙鳳の彫たる盔を戴き、身に黑き鎧を著し手に長刀を提げたり。背後の號旗に寫して云く、驃騎大將靑面獸楊志と。左の方に控たる副將は、錦豹子楊林なり。右の方に控たる副將は、小覇王周通なり。三人の將は各手に兵器を持戰馬に打乘て、陣前にこそ立たりけり。八方の軍勢隙間もなく取圍み、各鋼刀、大斧、長鎗、大刀、旌旗等を携て、勇み進んで控たる彼八陣の眞中に、團々と都て杏葉色の旗を建て、中に六十四本の長脚旗を雜たり。各上面に金箔にて、六十四卦の圖を畫き、又人馬を以て東西南北に四つの陣門を儲けたり。南門の軍勢は黃なる旗を立黃なる馬に打乘り、身には黃色

七編　巻之六十二

○宋公明九宮八卦の陣を排ぶ

斯て大宋の貴官樞密院童貫は、東南の方の敵軍を望み見るに、一夥の軍勢各青き旗を建紅の鎧を著し、前に一本の金繡の旗を建て、上面に金のすり箔にて、巽の卦を畫き、下に飛龍の繡あり。彼金繡の旗搖く處に、一人の大將眞先に馬を馳出す。頭に金の兜を戴き、身に桃花色の鎧を著し、手に二本の鎗を提たり。背後の號旗の上に寫して云く、虎軍大將雙鎗將董平と。左の方に控たる副將は、摩雲金翅歐鵬なり。右の方に控たる副將は、火眼狻猊鄧飛なり。三人の大將各手に兵器を持ち、戰馬に打乘て陣前にこそ立たりけれ。又西南の方を望むに、一簇の軍勢各紅き鎧を著し、前に一本の金繡の旗を立て、上面に金の銷金にて、坤の卦を畫き、下に飛熊の繡あり。彼金繡旗閃く處に、一人の大將眞先に馬を馳出す。頭に鳳翅の金盔を戴き、身に鐵の甲を穿ち、手に大いなる斧を提たり。背後の號旗の上に寫して云く、驃騎大將急先鋒索超と。左の方に控たる副將は錦毛虎燕順なり、右の方に控たる副將は鐵笛仙馬麟なり。三

る副將は、鎭三山黃信、右の方に控へたる副將は、病尉遲孫立なり。三人の大將各手に兵器を取て、白馬に打乘り陣前に立たり。後に續き一簇に人馬あり。各黑き盔黑き鎧を著し、黑き馬に打乘て、黑色の引軍旗を立て、上面に金のすり箔にて、北斗七星を畫き、下に玄武の繡あり。かの引軍旗搖く處一人の大將眞先に馬を馳出す。頭に黑鐵の盔を戴き、身に皁羅袍を著し、手に烏龍鞭を提たり。背後の號旗に寫して云く、合後大將雙鞭將呼延灼と。左の方の副將は百勝韓滔なり。右の方の副將は天目將彭玘なり。三人の大將各手に兵器を提げ黑馬に打乘て、陣前に立たりしは、さも嚴快ありさまなり。宋江が陣法官軍と合戰勝劣に至ては次卷に詳なり。

るに、上面に金のすり箔にて南斗六星を畫き、下の方には朱雀の繡あり。其時忽ち鑼を音して、かの引軍旗しきりに搖きければ、一人の大將眞先に馬を馳出す。頭に赤色の盔を戴き、身には猩々袍を著し、手に狼牙棍を取れり。背後の號旗の上に寫て云く、先鋒大將霹靂火秦明と。左の方に控たる副將は、聖水將軍單廷珪なり。右の方に控たる副將は、神火將軍魏定國なり。三將めい〳〵手に兵器を取り、赤馬に打乘り、陣前にこそ立たりける。又東山の方より來る軍勢は、各青き盔に青き鎧を著し、ひとしく竝び、青き馬に打乘り、前に一本の青色の引軍旗を建て、上面に金のすり箔にて、東斗四星を畫き、下に青龍の繡あり。忽ちに鑼の音して、引軍旗搖く處、一人の大將眞先に馬を馳出す。頭に藍靛色の盔を戴き、身に翡翠袍を著し、手に青龍の偃月刀を持ち、背後の旗じるしの上に寫して云く、左軍大將大刀關勝と。左の方に控へたる副將は、醜郡馬宣贊、右の方に控たる副將は、井木犴郝思文なり。三將各手に兵器を取り青き馬に打乘て、陣前にこそ立たりけり。又西山の方より來る軍勢は、各白き盔に白き鎧を著し、白馬に打乘り白色の引軍旗を建て、上面に金箔にて西斗五星を畫き、下に白虎の繡有り。かの引軍旗の搖く處に、一人の大將眞先に馬を馳出す。頭に銀色の盔を戴き身に素羅袍を著し、手に綠沈鎗を提たり。背後の號旗の上に寫して云く、右軍大將豹子頭林冲と。左の方に控へた

が軍勢は、勝に乘て五六里ばかりも追蒐けしに、忽ち平川廣野の地に至りければ、軍馬を止めて陣を取り、猶も人をして、梁山泊の軍兵を追しめけるに、李逵樊瑞は山を渡り林を過て、蹤跡なくぞ去にけり。其時童貫は中軍に馬を控へ、士卒に下知して木を攢て作りたる將臺を立て、二人の法官をして將臺に登らしめ、玉麈尾を以て左の方へ招けば、將臺忽ち左の方に颭け、右の方へ招けば、忽ち右の方へ颭き、上を指ば、忽ち起て天に齊しく、下を指せば、忽ち俯て地に齊し、是を名けて四門斗底の陣と云なり。時に陣勢已に完ければ、童貫は梁山泊に攻上らんと議しける處に、忽ち向の山に炮の音天に響きて、後の山間より一彪の敵軍馳向ふ。童貫左右に下知して、急ぎ備をなさしめ、自ら將臺に登り遙に望みけるに、山東一路の敵軍潮の湧來る如く、當先の一軍は盡く紅の旗を立て、第二軍は盡く雜綵の旗を建て、第三軍は青き旗を立て、第四軍は又是雜綵の旗を立たり。又山西一路の敵軍も潮のごとく滿來る。第一軍の人馬は盡く雜綵の旗を立て、第二軍は悉く白旗を立て、第三軍はまた雜綵の旗を立て、第四軍は盡く皂の旗を立て、後の方には盡く黃なる旗を立て、各陣勢を張てさも嚴密に見えにけり。又中軍には火烟紅の旗をおし建て、各赤き鎧に赤き兜を著し、赤き馬に打乘て、中央に赤色の引軍旗を建て、いさみ進んで馳向ふ。童貫は猶も瞳を定めて、彼引軍旗を望み見

將は三十餘の軍馬を引具し、已に童貫が軍前に至て、各口笛を吹き、引返して退きける。童貫が先鋒の大將段鵬擧、陳翥兩人は、いまだ大將の指令を得ざれば、自ら恣に追討ず。其趣中軍へ報じければ、童貫其まゝ陣前に打出て望ければ、張清再び馬を引返し、童貫が馬前へと進みける。童貫噪つて人をして撃しめんと欲しければ、左右の良將諫て云く、此人こそ音に聞えたる礫の名人、梁山泊の張清にて候なり、彼馬の鞍に繋たる錦の袋の中に多く小石を貯へ、敵を見て投る時は、百發百中多くの人命を破れり、必ず彼が奸計に墮給ふまじと、宣ければ、童貫も尤と同意して休にけり。去程に張清は童貫が陣前にて、三度迄口笛を吹て敵を誘ひけれども、童貫が方より兵を進めざれば、馬を引返し去たり。斯て童貫が軍兵は又三四里ばかりも過ける處に、忽ち向の山の方に、鑼の音して、早くも五百餘人の軍兵歩行立にて馳出る。當先の四人は梁山泊の歩軍頭領黑旋風李逵、混世魔王樊瑞、八臂那吒項充、飛天大聖李袞なり。其時四將は五百餘の歩兵を引連れて、山の坡の下に陣を取ければ、童貫も同じく眞向に陣を張り、一度に喊を作りけり。此時童貫馬上にて手に玉麈尾を取下知して云く、早く梁山泊の賊徒を打取べしと、呼りければ、大勢の軍兵一度に咄と切て蒐る。李逵樊瑞もしば〳〵支て有けるが、忽ち味方の軍兵を二手となし、各手に蠻牌を持て、山路をさして迯回る。童貫

の軍馬を引率して攻來ると注進ありければ、宋江吳用と商議して計を定めて、許多の頭領に告知らしめ、もし軍令に違背する者あらば、罪科に處すべしと、嚴に命じければ、衆頭領はこと〴〵く領承し、皆々用意して相待ける。斯て其夜も明ければ、童貫三軍に下知をなし、各調撥をなしにけり。先睢州の兵馬都監鵬擧をして先鋒大將軍とし、鄭州の兵馬都監陳翥を副先鋒大將軍となし、陳州の都監吳秉彝、ならびに許州の都監李明兩人を合後となし、唐州の都監韓天麟、鄧州の都監王義兩人を我左の方を祐しめ、洳州の都監馬萬里、嵩州の都監周信兩人を我右の方を祐しめ、飛龍大將酆美、飛虎大將畢勝兩人をして中軍の羽翼とし、童貫自ら元帥として、十萬餘騎の軍兵を領し、自ら金作りの鎧を著し、名馬に策て勢齊をなす。其時三軍已に用意整ひければ、童貫諸軍に下知し、鼓を打鐘を鳴らし、梁山泊へと進發す。諸軍は已に八里ばかりの路を過て、向の方を望けるに、忽ち金鼓天に響きて、一簇の軍馬塵を飛ばし馳來る。すはや敵軍來れりとて、近寄り見れば、凡三十餘人、各身には綠の戰袍を著し、頭に靑巾を戴き、馬上に緋絲にて織たる纓に金銀の鈴を緊ぎ、手に弓箭或は戈鎗等を提て、各口笛を吹て馳向ふ。眞先の馬に乘たる大將は、梁山泊の英雄巡哨頭領没羽箭張淸なり。左の方に控へたる大將は、同じく龔旺なり。右の方に控へたる大將は、同じく丁得孫なり。其時三

劫ず、其罪小からず、朝廷よりも度々軍馬をさし向て征伐すといへども、力微に智少くして遂に功を立ることなく、却て賊人の勢を滋蔓せしむ、此其人を得ざるを以てなり、我此たび勅命を承り、百人の良將十萬の大軍を以て、梁山泊を打亡し、衆の賊人を擒て民を安んじ、天恩に報ずべし、と演らるゝ。張叔夜答へて云く、樞密相公の智謀鬼神をも挫ぎ給ふべし、去ながら彼梁山泊の賊寇、もと水泊要害の地に據て、常に兵馬を調練せり、況や其中智謀勇烈の人多ければ、必ず小覷給ふべからず、一旦怒氣の故に輕々しく兵をすゝめ給はゞ、却て賊の奸計にあたるべし、唯長便と良謀を廻らし、大功を立給ふべしと、憚る處なく申ければ、童貫聞もあへず大に怒りて云く、汝等もと懦弱なる匹夫、つね〴〵兵を恐れ劍を避け、生を貪て死を恐るゝより、賊の勢を養て國家の大事を失へり、是不忠不義と云つべし、我今こゝに到て何の恐るゝことあらんやと、高聲に罵りければ、張叔夜も心中に童樞密が佞奸不智なるを知て、再び辭なく、先酒食を以て童貫に奉り、已に酒宴畢り、童貫は張叔夜に辭し、城外に至り大軍を引率し、其夜は梁山泊の邊の廣野に陣を取りけり。張叔夜暫く童貫が旅行を送り歸り、倩思ふに、童貫が容子將の器にあたらず、此度の軍に莫大の軍士の命を落さんこと痛ましいかなと、歎息して止ざりけり。扨又梁山泊には、先達て細作の者立歸りて、此度童貫十萬

酒を飲盡しければ、楊戩もまた盃を進めて云く、樞相公、君は元來兵書を讀給ひ、深く太公の計に通じ給ふ人なれば、這等の賊人を攻亡したまふことは、掌を返し給ふより安かるべし、然といへども、彼梁山泊は水邊に據て不便の地利なれば、必ず良計をなし給へとて、盃を進めしかば、童貫は忝しとて、頓て盃酒を飲盡し、重て高俅、楊戩に向て云く、二太尉必ず案じ給ふことなかれ、小官不肖なりといへ共、少しく軍の法度を知れば、彼地に至り、機に臨み變に應じ、一人も餘さず打取べしと、いさみ進で宣られければ、高俅、楊戩も頼もしとて、再三酒食を進め、筵席已に終ければ、童貫に辭別して東京城に歸られけり。斯て童貫は馬に打乘其地を立れければ、大小の官人は、猶も數十里の外まで送り、各相辭し、皆東京へ歸りけり。童貫三軍に下知して兵馬を九隊となし進發す。都合其勢十萬餘騎、鼓を擂金を鳴し、旗旆刀劍林のごとくに圍んで押通れば、天地も崩るゝばかりにて、さも嚴快見えにけり。去ほどに東京を打立てより、已に二三日をも過ぎ、濟州の地へ著ければ、太守張叔夜は兼てより、界迄出て迎へけり。童貫は大軍を濟州の城下に屯し、其身は纔の從人を召連て、張叔夜が館に至りければ、張叔夜は急ぎ童貫を堂上に迎へ、已に茶も濟ければ、其恙なきを賀しけるに、童貫が云く、汝も知る通り、梁山泊の強盜先年より良民を殺害し、府州を騷動せしめ、族人を

樞密院童貫十万の兵を引く梁山泊を征す

馳集りければ、童貫自ら主帥となつて、中軍を掌握て三軍に下知をなす。其勢都合十萬餘騎と聞えける。童貫は武庫を開きて、軍器を取出し、并に許多の兵糧を持て三軍に分ち與へ、吉日を選て軍を出さんと相待ける。高俅、楊戩の二太尉は、酒食を以て童貫が軍を賞しけり。

○呉加亮四斗五方旗を布く

去程に已に吉日を得ければ、童貫は十萬餘の軍兵を引連て天子に辭し、馬に打乗新曹門を出で、梁山泊へ進發す。已に十里の路程を過て向を望みけるに、人馬夥しく見えければ、何人なるやと人を以て問しめければ、高俅、楊戩の二太尉、軍を餞別し給ふなり、と答へたり。童貫はいそぎ馬より下りて、驛館に入ければ、高、楊二太尉も程なく入來る。高俅盃を執て童貫に勸めて云く、樞密相公此度梁山泊へ赴き給はゞ、必大功を立給ふべし、何とぞ早く凱歌を奏し歸り給ふべし、梁山泊の賊人もと水邊に據て、敵を迎ふるの計較をなせば、此度はたゞ四方を圍んで、粮草の路筋を絕て、味方の陣を堅固にして、敵を誘引出を下し、而して後、兵を引て攻討ば、一人も殘らず切盡して、永く禍の根を拂ひ給ふべし、然らば君が功勳も少なからず、必ず早く吉左右を聞しめ給ふべしと、宣られければ、童貫も難得君が厚意を忘るまじとて、盃

密院童貫に問て、汝朕が爲に大軍を領し、梁山泊の賊寇を退治すべきや、と宣ひければ、童貫勅答しけるは、古人も既に謂ることあり、子としては孝を盡し、臣となつては忠を竭すべしと、臣願くは犬馬の勞を顧ずして、聖主の爲に心服の憂を除くべしと。楊戩、高俅も傍より、童貫こそ賊寇を退治すべき人なりと、推擧せしかば、天子隨卽聖旨を降し、童貫を拜して統軍大元帥の職を授け、金印兵符を賜うて、急ぎ四方より勇士を召集め、軍馬を催し、日を選で梁山泊を勦捕すべしと、下知し給へば、童貫は難得と領掌して、徑に樞密院に歸り、軍兵を召し、符驗を認め、飛脚を分撥し、東京の管下の八ヶ國の太守に命じ、各一ヶ國より、一人の良將に、一萬の軍馬を差添て、加勢あるべしと下知し、東京の守護、中軍の内よりも、二人の精兵を選み、樞密院中の應有事務は、下役に預しめ支配させ、又天子の御手勢の中より二人の良將を選び、左羽右翼となし、號令已に定りしかば、只諸事の完く備るを待て、不日に發馬すべしと計りける。彼八ヶ國の軍馬は、睢州の兵馬都監段鵬擧、鄭州の兵馬都監陳翥、陳州の兵馬都監吳秉彝、唐州の兵馬都監韓天麟、許州の兵馬都監李明、鄧州の兵馬都監王義、洳州の兵馬都監馬萬里、嵩州の兵馬都監周信なり。又天子御手勢の内より、揀出せる二人の良將、左羽右翼の助けとするは、御前の飛龍大將酆美、御前の飛虎大將畢勝なり。斯て四方の軍馬盡く

梁山泊の賊人勅使を罵り詔書を破りし事を備に說せけり。楊太尉が云く、此賊人等甚だ無禮なり、初め天子に勸めて、招安をなさしめたるは誰なりやと問にけり。高太尉が云く、我其日朝廷に在合せなば招安はさすまじき物をと、各商議區々なり。童樞密が云く、思ふに梁山泊の賊徒は皆是鼠竊狗盜の輩にして恐るゝに足ず、區々たる小才一支の軍馬を引き、日を定て發足し、賊徒を攻亡し、永く禍を拂ふべしと、宣たりける。衆人も尤なりと同意して、翌日天子へ奏聞を遂げ、發足の日を定むべしと、商議已に定りければ、其日は各相辭して歸りけり。去程に翌朝天子紫宸殿に出御有て、朝政事を聞給ふ。君臣の禮畢て皆萬歳を奏しける。時に蔡太師進み出で、梁山泊の賊、詔書を扯破りたる事を奏しければ、天子甚しく逆鱗有り、群臣に問て、最初朕に招安のことを勸めしは、何者にてありし。侍臣給事中奏して云く、招安を主張して勸め奉りしは、御史大夫崔靖にてこそ候ひしと、答へければ、天子隨卽崔靖を召出し、官を脫て大理寺の官人に命じ、罪過に行はしめられけり。天子再び蔡京に問て宣はく、梁山泊の賊、害をなすこと年久し、何の人を遣し攻亡すべきや。蔡京答て云く、若大軍を遣し、能謀をなすにあらざれば、竟に勝事能ふまじ、臣倩愚意を以て按ずるに、必ず樞密院の官人に命じ、親ら大軍を引しめ、能謀を以て攻打ば、遠からずして勝べしと奏しけり。天子樞

を褒美するに似たれども、時世を諦め權道を行ふは、亦理の有所、今度彼等が無禮を怒て、天下の勢を奮て攻給ふとも、將は擒となり軍士は數萬亡びて、しかも敵の勢を加へんこと眼前に明かなり、上に武王なく、下に周公、太公望なく、誰人何萬の勢を以て向ふ共、梁山泊の英雄共、誰人か恐るゝ者あらん、却て大將たる貴官は、女大將などの生擒となり、恥辱を蒙るのみか、天子の御威光迄を失ふべし、其身の權威にのみ傲り、梁山泊の軍師吳用が十分一の謀計もなく、彼に勝んとするは、己が智慮、己が軍術の程、己が勇力の程も知らず、まして帝王へ忠勤に合ふ處は、更に知らざる族多ければなり、惜かな、太尉の無益の心を費し給ひ、此上又不日に、天下の士民いくばく死亡出來んこと歎ても餘りありとて、理を細かに述ければ、陳太尉も殆歎息に堪ざりけり。夫より翌早朝に發駕し、夜を日に繼で京に歸り、先蔡太師が館に至り、梁山泊の動靜を逐一訴ければ、蔡太師聞て、大に怒て云く、賊人甚無禮なり、足下大宋の臣として、眼前に彼等が橫行を見捨られたるや、と叱りければ、陳太尉泣て云く、若是太師の福蔭大いなるにあらずんば、小官此度身骨を碎かるべし、今幸ひに辛き命を助りて歸り候と申ける。其時蔡太師隨卽に童樞密高太尉楊太尉の方へ使を以て請じければ、頓て童、高、楊の三官人來りければ、白虎堂の奥座數に會集せり。其時蔡太師は張幹辦李虞候の兩人を呼寄せ、

告けるに、張叔夜が云く、小生最初、太尉梁山泊へ行給ふ時より、左こそ存じたれ、誠に太尉にも心力を費し、別して疲勞もあらん、今夜は此處に休息し給ひ、明日早く發駕し急ぎ歸京の上、奏聞有て然るべしと、宣ければ、太尉も領承し、張叔夜に辭し、旅館に回りけるに、太守直に旅館へ見廻のため來り、密談して云けるは、某先日兩人の附人を當所へ殘し留たしと申せしかど、太尉は、蔡家、高家の意をかね給ひ、彼兩人も立腹の體見え、諫ても屆かずと存じ、其分に過しか共、梁山泊の次第左あらん事は、其節すでに眼前に見る如く覺たり、先宋江幷部下の者共は、萬夫不敵の豪傑共にて、威勢を以て挫しがんとせば、却て亂を招く者なり、是迄朝廷より良將を選て向らるゝ事、いく度ぞや、其面々度每に生捕と成り、敵の威を添るのみにて、軍士の戰死いくばくを知らず、此後とても征伐せんには、とても屆かざれば、段々天下の人民戰死して盡ずんば、兵を止むる期はあるべからず、唯奇特なる事は、彼賊共内心は天子に眞忠を存ずる處、感ずるに餘りあり、然るを招安の詔は、天子の幸福天下萬民の安堵なれば、誰人の奏聞によつてのことなるや、勸め申せし官人は、事理に明かなる良臣と云べし、天子は周の武王のごとく、左右の臣下は周公旦、太公望の如くならば、軍を向て梁山泊を掃清めん事年月を待べからず、さる世にあらば宋江等衆を集ることも成べからず、今の招安は盜賊

にあらず、如何せん朝廷の貴人我が梁山泊衆人の意を知り給はず、猥に權威をもつて服せんとす、此を以て衆人さらに隨ず、願くは再び詔書を降し、善言を以て撫恤給はゞ、我輩忠義を盡し國に報じ、縱ひ死すとも恨もの一人も是なし、太尉朝廷に歸り給はゞ、宜しくお抗成を賴奉るとて、急々に船を以て渡しければ、陳太尉衆人辛き命を助り、はふ〳〵濟州をさして去にける。斯て宋江は再び忠義堂に歸り、餘多の頭領を集めて云く、此度朝廷詔書の趣、甚だ以て明ならずといへども、汝等衆人も又甚だ以て不敬なり、いかんがして朝廷の貴人を驚かしめたるやと、叱りければ、衆人各自返答はなかりけり。吳用が云く、大哥必ず怒りを休給ふべし、朝廷の詔書甚だ以て托大なり、人を以て人とせず、衆頭領の怒りは尤なるべし、只此上は急に令を下し武具馬具を準備し、水軍を敎へ軍船を用意せん事、專要なり、追附彼等必ず天子に奏して、大軍を引來るべし、其時は小生少しく計を以て彼等が軍馬を切盡し、片甲も殘さず、夢にも我梁山泊に睨ん程に恐れしめば、其時彼等小心にして招安せば、事成就すべし、大哥憂へ給ふことなかれと、理の當然を宣ければ、宋江を始めとして、諸頭領も皆々尤なりとて、其日は各本陣へ歸りけり。扨陳太尉は辛き命を助り、衆人を召連濟州へ跑囘り、急ぎ太守張叔夜に見え、梁山泊の賊人聖旨に違うて詔書を扯破棄たる事、其外危難の事を委細に

りければ、衆人都て來て李逵を勸め、漸堂より扯迚去にける。斯て宋江、太尉に對して云く、太尉先案堵したまふべし、必ず彼等が無禮を免し給ふべし、先御酒を賜はゞ、衆人をして飲しめ、各恩波に浴すべしとて、やがて金の嵌彫したる盃を取寄せ、裴宣に命じて一瓶の酒を、酒舟の上へうちあけけるに、只淡落の惡酒なりければ、宋江再び裴宣をして九瓶の酒を殘らず酒舟へあけけるに、皆惡酒なりければ、衆人大きに驚き、皆々怒をなしにけり。かゝる處に魯智深手に鐵禪杖を提げ、虎の如く叫んで、堂に跑上り、高聲に罵て云く、汝娘撮鳥なんぞ人を欺の甚しきや、水酒を以て美酒となし、我等を哄さんとするやとて、打かゝれば、跡に繼て赤髮鬼劉唐、朴刀を構て馳上る。行者武松も雙戒刀を掣ければ、沒遮攔穆弘、九紋龍史進も皆一度に刀を掣て跑上り、喊を咄と作りける。宋江は是只事ならずと推量して、早くも身を横たへ、太尉を隔急に下知して云く、汝等衆人少しにても太尉を犯し傷ることなかれ、若太尉を犯さんと思はゞ宋江を殺し、其後に兎も角も料らふべしと、高聲に呼はりければ、さしも鬼神に等き好漢も、少し控へて見えければ、宋江は急ぎ僕從をして陳太尉を轎に乘せ、盧俊義と共に馬に打乘り、陳太尉衆人を護防して金沙灘へぞ送りける。斯て宋江は馬より下りて頭を地に俯し、陳太尉に向て恭しく申けるは、太尉必ず罪を許し給ふべし、我輩原來歸降する心なき

不臣伏。近爲爾宋江等嘯聚山林、劫據郡邑。本欲用彰天討、誠恐勞我生民。今差太尉陳宗善、前來招安。詔書到日卽將應有錢糧軍器馬匹船隻、目下納官。折毀巢穴、赴京。原免本罪。倘或仍昧良心違戾詔制、天兵一至齠齔不留。故玆詔示。想宜知悉。

宣和三年孟夏四月　日詔示

蕭讓已に讀終りければ、宋江を始め諸の頭領各怒て見えにける。斯る處に忽ち一聲霹靂のごとく叫で、黑旋風李逵梁の上より飛下り、すぐに蕭讓が手より詔書を奪取て、粉のごとくに扯碎き、其まゝ陳太尉を劈取て、頭を目がけて打ければ、宋江盧俊義立寄て止しか共、猶も止まらざりしかば、盧俊義身を横たへて、勸解ける。李虞候傍より喝て云く、這厮是何者ぞ甚だ以て大膽なり、村賊として貴人を犯す、まさに死すべしと、罵りける。李逵は猶も人を尋ねて打しに、李虞候がかく惡口するを聞て、劈面より打來り、揪止て云く、汝此烏漢持て來るは誰が詔書ぞ。張幹辨か云く、これは是大宋皇帝の聖旨なり。李逵が云く、縱ひ皇帝にもせよ、何にても些も倣大ならば、此男は聞まじ、汝の皇帝が名氏宋といはゞ、我哥分も名氏を宋といふ、今一度此李逵に對して偌大ならば、先詔を書し人を打殺し、繼に汝等を打殺さんと、罵

○黒旋風詔を扯て欽差を罵る

斯て宋江は太尉を請て轎に乘しめ、二疋の白馬を牽來て、張幹辨、李虞候を乘せ、宋江は一百餘人の頭領幷に許多の小卒を召連れ、遙太尉の後に隨て簫を吹鼓を打しめ、山上へ馳上る。已に三つの關をも過ければ、衆人一齊に馬より下、太尉を請て、忠義堂へぞ坐せしめり。十瓶の御酒一匣の詔書を堂上に具へ、張幹辨、李虞候は左の階に坐しければ、梁山泊の方には、蕭讓、裴宣は右の階にぞ坐しにける。其時宋江梁山泊の頭領を呼聚るに、都合一百七人の内にて唯李逵一人を見ざりければ、又もや大事を仕出さんと、人をして四方を尋求めしかども、一向に知れざれば、其儘にて罷にける。此時は四月中旬比の天氣にて、已に暖氣なれば、宋江を初許多の頭領は都て夾羅の戰袍を著し、階下に坐して皆百拜をぞなしにける。其時陳太尉手づから匣の内より詔書を取出し、蕭讓へ渡しければ、蕭讓裴宣謹んで讚禮す。衆人都て拜す。蕭讓其まゝ詔書を披き、高聲に讀む。其文に曰く、

制曰。文能安レ邦武能定レ國。五帝憑ニ禮樂一而有ニ彊封一。三皇用ニ殺伐一而定ニ天下一。事從ニ順逆一。人有ニ賢愚一。朕承ニ祖宗之大業一。開ニ日月之光輝一。普天率土罔レ

れば、頓て村醪を求めて十瓶に貯へ、初めのごとく封じ、再び龍鳳擔の内へ入れ、水手に命じて船を搖しめ、陳太尉の船に追著て金沙灘へ附にけり。此時宋江は衆の頭領と同じく岸にむかへ、香を燒燭を點し、金を鳴し鼓を擂音樂を奏し、陳太尉を岸の上に登せ、御酒及び詔書を一つの卓子の上に置て、四人をして擡しめ、宋江等衆人頭を低て拜しけり。宋江拜し罷て云く、文面の小吏罪を犯し、遁るゝ處なく、辱なくも貴人をして、こゝに至らしむ、早速接待に參るべきの所、延引して失禮せり、伏して望らくは其罪を免し給ふべし。李虞候が云く、太尉は是朝廷の貴官、自ら來て招安し給ふ事、輕々しき事にあらず、汝等疎略にして、事を曉さざるの村賊に任せて船を搖しめ、水を漏して險些兒太尉の御命を誤んとす、是何の義ぞ。宋江が云く、我此梁山泊の船は皆々好工人の作にして、水の漏義はよも有まじと答へける。張幹辨が云く、汝見ずや太尉の衣襟水に濕て猶乾かず、汝しらぐと抵斯やと、叱りければ、宋江は唯頭を低て罪を謝す。宋江の後に控へたる頭領共、五虎將八驃騎は、最初より左右を離ず在けるが、李虞候、張幹辨が、宋江の前にて擅に惡口するを聞て、各自怒りの氣色をなし、都て二人を打殺さんとせしか共、唯宋江の旨に違んことを恐れて、皆々無念の齒咬をなし、拵手劃脚してぞ控へたり。

る水手は、哈々と大に笑ひ、皆水中へぞ飛入ける。阮小七船頭より大に呼て云く、汝等衆官たち、我水手を皆水中へ打入て、いかゞして此船を搖給ふやと、云ければ、滿船の人々は顔と貌を見合せ、皆返答はなかりける。かゝる處へ源流より二艘の早船押來る。原來阮小七は計を設け、豫先より船の底に穴をあけ、木栫にて詰を込置き、二艘の帮船の來るを待て、事をなさんと謀りしが、其時二艘の快船を見受け、暗地木栫を拔ければ、はや船底より水湧揚り、船中忽ちに一二尺程も滿ければ、船中の騷動斜ならず上を下へと攪けり。阮小七大に呼て云く、船漏たりとも、衆人驚き給ふまじ、幸ひに帮船來れり、乘移り給ふべしと叫けり。陳太尉等衆人は取物も採あへず、御酒勅書を捨置き、命這々助りて皆彼船へ移り、金沙灘へと赴きけり。去程に阮小七は陳太尉の船已に遠ざかるを見て、楯子を以て船底の孔を塞ぎ、相圖の口笛を吹ければ、二十餘人の水手悉く水底より扒上り、船中の水を舀捨けり。阮小七急ぎ水手を呼で、先一瓶の御酒を取來らしめ、其まゝ封を開くに、酒香頻りに薫ひければ、盞をも求ず、一飲して盡しけり。猶も一瓶にて足ざれば、しきりに三四瓶の酒を飲ける處に、水手が云く、船の端にある六瓶は皆白酒にて候と、告ければ、阮小七が云く、我すでに飽り、汝も飲べしとて、水を酌杓を以て、酌分ち與へければ、水手ども大に歡び、彼六瓶の酒を一滴も殘さず飲盡しけ

にて相待御迎へ申候間、太尉何卒雷霆の怒を止め、我輩の罪を許し、國家の爲に好事を成就なし給ふべし、と願ひけり。李虞候傍より猶も罵つて止ざりければ、呂方、郭盛も怺兼ね、顔色變じて見えければ、蕭讓、裴宣は是を制し、猶一向に罪を請ひ、菓酒を以て陳太尉に奉りけれども、さらに見やりさへせねば、只得多くの官人を案内して、梁山泊の水邊に至りけり。去程に梁山泊には、豫てより三艘の船を攏著て、一艘にては馬を渡し、一艘にては蕭讓等衆人を渡し、今一艘は陳太尉衆人を迎へける。此船を掌るは活閻羅阮小七なり。其時阮小七は獨船端に坐し、二十餘人の水手をして、各腰刀を帶しめ、船を棹さして灘邊に至り、陳太尉を始め、張幹辨李虞候及び衆人從人を迎へ、勅書幷に御酒を船頭上に餝り、其身は一拜をもなさず、傍若無人に見えにけり。斯て二十餘人の水子は船を水上に搖出し、各村歌を唱へけり。李虞候大に罵つて云く、村驢甚だ無禮なり、朝廷の貴人こゝに在すぞと、制しけれども、許多の水子少も忌憚ることなく、返答にも及ばずして、猶も高聲に村歌を唱へければ、李虞候は手に藤の鞭を取て、許多の水手を劈面より打けれ共、水手は猶恐るゝ色なく答へて云く、我等の歌を唄ふは、汝に預ることにあらずと、皆一度に云ければ、李虞候大に怒り罵て云く、汝等潑賊まさに死すべし、いかんぞ我に向つて惡口をするや、いで物見せんと立かゝれば、兩方に竝居た

太尉陳宗善勅を奉て梁山泊に使す

李虞侯
張幹辦

れ、只勅使を迎るの準備をなすべしとて、先宋清曹正兩人をして筵席を餝備しめ、柴進をして堂上堂下に錦の幔幕を張しめ、庭上には絹子緞子などにて作りたる花などを懸け、十分齊整をぞ盡しけり。又呉用をして、萬事の指合をなさしめ、裴宣、蕭讓、呂方、郭盛の四人に命じ、梁山泊より二十餘里の外に遣し、陳太尉を迎はしめけり。去程に陳太尉は、張乾辨、李虞候と共に、各白馬に打乘て、從人三百餘人幷に濟州より附たる官軍數十騎は前に進んで案內す。龍鳳擔の內に十瓶の御酒を載せ、騎馬の官人は勅書の箱を背ひ、濟州の牢子五六十人前後を取圍み、梁山泊を望で進發す。皆々心中に富貴あらんことを願ひける。蕭讓、裴宣、呂方、郭盛の四人は宋江の命を領て、纔に兩三人の僕從を連れ、身には少しの刀劍の類をも帶ず、美酒菓子の類を以て、半路にて相待ける。其時陳太尉衆人の至るを見て、地に俯して三拜す。張幹辨高聲に叱して云く、彼宋江誰の勢に托して、自ら來て勅使を迎へざる、汝の輩皆是死すべきの賊人なり、幸に今朝廷の招安を請ながら、此のごとく禮を知らざるや、請ふ、太尉此處より御歸り有べしと、呼りければ、蕭讓、裴宣、呂方、郭盛の四人は一度に頭を地につけ、頻に罪を請て云く、自來天子よりの御詔一度も梁山泊へ至りたることなし、これに因て此度とても、未だ眞實を知らざるに依て、某等四人を半路に遣し、宋江は大小の頭領とともに、都て金沙灘

けるが、細作人來て濟州より使來れりと告ければ、未だ眞實は知らざれども、先悦をなしにけり。かゝる處に、小嘍囉一人濟州より知らせの役人を忠義堂へ連れ來りて云く、此度朝廷より太尉陳宗善を遣し、十瓶の御酒幷罪を赦しの丹詔を持て、已に濟州城に至りければ、早々迎接の用意あるべしと申ける。宋江聞て大に悦び、遂に酒食を以て濟州の使をもてなし、褒美として花銀十兩反物等を遣し、使を濟州へ歸しける。宋江悦の餘り、衆くの頭領に向て云く、我輩多年の間種々のくらうせしか共、幸に此度招安うけて國家の臣とならば、豈悦ばしからざらんやと申ける。吳用笑て云く、某倩按ずるに、此度の招安は、恐らくは成べからず、縱ひ招安して、我輩の罪を許す共、朝廷へ歸順するの後は、必ず我輩を草芥同前に應答べし、併彼等を激し、大軍を引來らば、其時謀略を施して、人馬を切盡し、我梁山泊の威勢を顯し、其後に歸順せば、彼等我輩を敬ひ信ずべしとぞ答へける。宋江聞ていはく、汝の輩かやうに說ば、我輩忠義の二字を壞るべし、是をいかんがせんと歎じけり。林冲がいはく、朝廷より貴官來るの時は、必ず我輩を敬すべし。關勝が云く、詔書の中少しにても、我等を欺負の辭あらば、我死すとも隨ふまじ。徐寧が云く、朝廷より來るの使は、必ず高太尉が手下の人なるべしなどと、彼是爭說て止ざりければ、宋江焦つて云く、汝が輩總て疑ふことなか

ひ鬼人のごとき者なり共、我等國家の威勢を以て、一問一答盡く伏すべし、却て小心和氣を以て彼を撫恤ば、賊の勢を恐るゝに似て候なりと、傍若無人に申けり。張叔夜重て陳太尉に向ひ、此兩人は太尉には御家來に候やと、問ければ、陳太尉が云く、一人は蔡太師が内幹人、一人は高太尉が虞候なりと、答へける。張叔夜が云く、然らば二位は此處に留め置給ひて然るべし、召連られんには、却て勞して功有まじと、憚る所なく申ければ、太尉かさねて答けるは、彼兩人は、蔡府、高府心腹の人にて候なり、若二人を差置き、某一人梁山泊へ參らば、御疑も有べしと答へける。張叔夜再三止めけれ共、更に許容の體もなかりけり。張幹辨傍より高聲に云く、我等兩人太尉に伴ひて參るからは、少も失脱はあるまじと存るなりと、立腹してぞ見えにけり。張叔夜は事の成べからざるを察して、再び諫ず。心の内に蔡太師高殿師などが奸佞短智、眞實に帝へ忠義を思はず、其身の愚なるも心附ず、唯權威につのることのみを知りて、兩人の附人能も主人の愚昧に似たるかなと、内心に歎息し、一言も口外に出さず、先美酒佳肴を以て陳太尉及び衆人を款待し、已に筵席も終りければ、陳太尉は張叔夜に辭別し、衆人を召連濟州の驛館に宿し、其翌日にもなりしかば、濟州の太守より使を以て、此趣を梁山泊へ申遣しけり。梁山泊には宋江許多の頭領を忠義堂の内に聚め、軍の大事を商議して在

く後の患を拂ふべし、是草を剪て根を除くの計なるべし、これ我願に候なり、且又此度太尉一人にては、御大役と存るなり、我家臣に李虞候は發明者にして、殊に懸河の辯舌なれば、萬事の助けともなるべし、召連られて然るべしとて、李虞候を止置き、其身は陳太尉に相辭して歸りける。去ほどに陳太尉は、翌朝にもなりしかば、荷物を點へ、先十瓶の美酒を車に載せ、四方に金銀の紙にて龍鳳の餝をなし、上に一面の黃色の旗を立て、自ら白馬の打乘て、脊に詔書を脊負ひ、蔡太師よりの附人張幹辨、高殿師よりの附人李虞候をも、各馬に騎しめ相從へ、其外部從數人、新曹門を出て進發す。大小の官人は各相送てぞ歸りける。されば陳太尉は數日を經て、濟州に至りしかば、太守張叔夜は兼て待設けし事なれば、自ら迎へ府中に請じ、色色款待招安の一事を問ければ、陳太尉逐一に答ける處、張叔夜が云く、某倩愚案を廻らすに、此度の招安は誠に朝廷の吉兆に候なり、しかし彼宋江の部下には、性質烈火の如き人多ければ、一言半句にても、彼等に衝撞の辭あれば、却て大事を壞るべし、君かしこに至り給はば、國の爲なれば必ず甜言美語を以て、彼等を撫恤み給はゞ、彼必ず歸順して、江山永く太平ならん、唯好も歹もよく料り給ふべし、と有ければ、陳太尉が傍に控たる張幹辨、李虞候同聲にいはく、我等二人は此度主人の命を承り、太尉に從て梁山泊へ參る者なれば、賊人たと

ると承る、それに因て特々足下を招き、説話たき仔細と云は餘の義にあらず、彼宋江等衆人は、元來山野の草賊なれば、縦ひ朝廷へ歸順する共、座を同じうする輩に非ず、汝彼地に参らるゝ共、必ずしも己を枉て、朝廷の綱紀、國家の法度を失ふべからず、論語に言ずや、

行已有恥。使四方不辱君命。

とあれば、必ず麁略にすべからず、我此府裡の幹人は、能萬事に通達し、朝廷の法度も能知たる人なれば、相伴るべし、汝の知ざることは、商議有つて然るべしと。陳氏太尉かしこまりて、有がたしと領承し、太師を辭し、彼幹人たる張幹辨とともに我館に歸り、急ぎ酒肴を具へて、張幹辨を饗應ける處に、忽ち門前に車馬の音喧く、高殿師の御入と告ければ、陳太尉慌忙と衣服を改め出來り、恭しく高殿師を上座に請ひ、互に寒温を述終る。高太尉が云く、此度朝廷より宋江を赦し招安するの趣、只今承つて後悔せり、若某其時朝廷に在合せなば、此儀は是非止むべし、いかんとなれば、原來此賊度々朝廷を辱しめ、其罪悪計へ盡すべからず、若是を赦して、京城に引入なば、後來大いなる憂をなさんも料りがたし、今又此儀を止んと欲すれ共、王の言再び回るべからず、若此度宋江等衆賊、聖旨を違うて少しにても冒瀆あらば、儞早くことを止て歸るべし、某早速天子に奏し、大軍を引率し、衆賊を剿し亡し、なが

七編　巻之六十一

○活閻羅船を倒にして御酒を偷む

抑〻太尉陳宗善は、梁山泊へ勅使の命を蒙り、私館に回り旅の用意をなしける處に、同僚の友人多く來り、酒菓を以て餞て且賀して云く、此度太尉梁山泊へ使し給ふは、誠に大役と云つべし、一つには國家の爲に大事を幹め、二つには民百姓の爲に憂を除き給ふことなれば、彼地に至り給はゞ、甜言を以て宋江等を喩し給はんに、彼等も皆々忠義を專らとする人なれば、必ず朝廷に歸順て忠勤を致すべく、太尉も又大功を立給ふべしと、說話なかばなる時、門前に案内の聲して、大師府より幹人來て申けるは、主人蔡公、急々に太尉に說話たき仔細有ば、唯今參らるべしと宣ぶ。陳太尉承つて、頓て朋友を相辭し、隨即轎に乘り、新曹門の蔡太師が館へ急ぎけり。已に蔡府に至りしかば、陳太尉頓て轎より下て、案内をなしければ、府幹出來り、節堂の奥深き座敷へ請じけり。斯て蔡太師は程なく出來り、已に寒温も終りければ、蔡太師が云く、此度天子より足下を以て、梁山泊へ遣し、宋江等が罪を赦し、朝廷へ召出さる

し召れ、尤なりとて、隨卽殿前の太尉官陳宗善を召て勅使となし、丹詔幷に美酒を持しめ、梁山泊へ遣はさるべしと勅諚有ける。此勅使梁山泊に到るの所、いかにも勅書倣大なりとて、豪傑怒つて扯破り、勅使を罵り悲哀の難儀に遇しめ、這々歸京さする次第よりは、七篇目に詳なり。

事ならば早く退朝あれと、是毎々の例式なり。進奏の卿進み出て奏していはく、臣が院署の内に各所よりの表文を多く收たり、みなこれ宋江等が四方を騷動し、公然として府州に至り、庫藏を劫し、民百姓を殺害し、貪猒にして足ことを知らず、官軍もこれを制すること能ずと奏せり、若はやく勦捕をなさずんば、後々大いなる患をなすべし、と言上す。天子宣く、去年正月上元の夜、此賊京國を鬧せり、今年又各所に行て騷擾す、朕先年より累次樞密院に命じて、許多の官軍を指向け梁山泊を征伐せしかども、今に至つて回奏せず、勝敗いかんと宣ひける。御史大夫崔靖進み出で奏して云く、臣久しく聞り、自今梁山泊に一面の大旗を立て、上に、替天行道と云四字を書りと、此皆民を罹すの術にして、民の心已に歸服せり、輕々しく兵を加ふべからず、倘或は其虛に乘じて、遼國の軍馬境を犯さば、兩所の軍彼此遮掩がたかるべし、臣が愚意をもつて熟々案ずるに、宋江等衆人は皆是山間亡命の輩にして、各官刑を犯し一身を避るに所なく、よつて各自山林に遁れ隱れて嘯聚し、恣に不道をなせり、若一封の丹詔を下し賜て、光祿寺の官人に命じ、御酒珍羞を持しめ、直に梁山泊に差し、甜語を以て衆人を撫諭し、是までの罪過を赦して官軍となし、其兵馬をもつて、遼國の敵を防せば、豈兩便に候はずや、只願くは陛下倩聖慮を廻らし給へ、とぞ奏しけり。天子此旨を逐一に聞

を掛け、直ちに縣門の邊に追出させ、未だ公服も脱ずして、二つの斧を手に提げ、擅に衙門の外に出ければ、諸の民これを見て、覺えず一哄を催しけり。李逵已に縣前を馳過し處に、穆弘相迎へ呼はり云けるは、諸頭領都て足下の見えざるを憂へぬるに、足下此處に在て何事をなし、かくのごとき裝束を著したるや、早々山陣に歸り候へとて、則李逵が手を携へて兩人齊しく飛が如く馳回り、已に金沙灘に至りしかば、諸人李逵が裝束を見て各大に笑ひけり。李逵公服を著して手に斧を提、直に忠義堂に至り、宋江を拜しける處に、諸頭領此體を見て、各咄と哄ひけり。宋江大に罵つて云く、汝何ぞかくのごとく大膽なるや、此度も我に知らせず山を下り、至る處に於て禍を惹出す、此罪まさに死に當れり、向後若心を改めず、再び斯ることを做出さば、我決して宥すまじ。李逵拜伏して恭しく罪を謝し、已に忠義堂を退きけり。梁山泊是より人馬平安にして、毎日武藝を演し、弓馬を學んで、官軍を防ん備をのみ催しけり。扨又泰安州よりは是まで、宋江が輩四方騒擾の一事を委しく東京へ進奏す。又各處よりも、表文をもつて宋江等がことを奏しけり。其時道君皇帝は病に染んで、一月ばかり政事を聞給はず。此月始て御疾瘥ければ、朝廷へ出御あつて萬事を聞給へば、文武の官人各金階に列り、皆萬歳を奏しけり。殿頭の官人高聲に呼つて云く、今天下の内に事あらば、早く天子へ奏聞あれ、無

を尋ける處に、後堂の内に知縣が冠衣服等有ければ、李逵是を著して、廳上に走り出で、大音聲に呼つて云く、我今日より知縣となりたるぞ、諸役人等盡く來つて拜をなせ、若一人にても來らざる者あらば、早速法度に依て罪を行ふべし。諸役人是を聞て、止事を得ず、盡く來て一同に拜を行ひければ、李逵甚だ興に入て問けるは、我此裝束を著したる風俗模樣はいかん。諸人齊しく答ていはく、頭領公服を著し給へる模樣十分に相稱へり。李逵これを聞て哈々と大に笑ひ、汝等早く訴訟人を引て廳前に來れ、我公に決斷すべし、若背く者あらば一々首を刎落し禁とせん。諸役人等告て云く、頭領の來り給ふを見て、訴訟人等も都て逃囘り、只一人も此所にあらず。李逵が云く、しかあらば、汝等が内兩人假に訴訟人となつて、我前に出て對決せよ、我戲に是非を決斷せん。諸役人是を商議して、兩人の牢守を訴訟人に出立せて、爭をなしたることを訴へしめければ、李逵兩人の訴訟人を見て、汝等は何ゆゑ爭をいたしたるやと、問ける處に、先一人が云けるは、彼者痛く某を打ぬるゆゑ、某敢てこれを訟へ奉る、願くは知縣相公事を公に決斷し給へ。また一人が云く、彼みだりに某を罵りしゆゑ、某彼者を打ぬ、相公これを察し給へ。李逵此言を聞て云けるは、打たるものは豪傑なれば、此者に罪なし、打れたる者は懦弱なれば、此者に罪ありとて、諸役人に命じ、打れたる者に頭枷

○李逵壽張縣に喬衙に坐す

偖も李逵は手に二つの斧を提て直に壽張縣に至り、知縣が衙門の内に進み入て、梁山泊の黑旋風李逵なりと、呼りしかば、縣中の人大に驚き、慌忙き八方へ逃走る。此壽張縣は梁山泊に近うして、人皆黑旋風が姓名を聞及び、常に黑旋風李逵と云五字を稱する時は、小兒ども大に怖れ、夜啼をせざるとかや。然るに今日李逵自ら來りぬるに、いかんぞ是を怖ざらんや。此時李逵廳上に上つて知縣が座する椅子の上に坐し、大音聲に呼つて云く、誰にても一兩人我前に出て說話せよ、若然らずんば、我火を放つて縣中を燒拂はん。諸人此言を聞て甚だ恐れ、衆皆商議して云けるは、若彼が言に背ば、必定禍出來すべし、しかじ出て慇懃に挨拶せんにはとて、大膽なる者兩人李逵が前に跪き、再三頓首して云けるは、今日頭領來臨を惠み給ふは、いかさま事有てならんに、快く命じ給へ。李逵が云く、我誓つて汝等を犯すにあらず、幸ひ此近邊を過りし故、縣中を遊覽せんがため、此處に至れり、汝等早く知縣を請て我に遇しめよ、我知縣に對面して頗用事あり。兩人のもの答て云く、知縣相公は頭領を見て大に驚き、後門を出て逃去けるが、某曾て其行先を存ぜず。李逵是を聞て全く信ぜず、自ら後堂に入て知縣

大勢一度に馳來る。太守は黒旋風が名を聞て大に驚き、慌忙き馬に乗て州裡へぞ歸りける。任原は臺の下に投落されて、猶立起らずして居ける處に、黒旋風杉の折木をもつて、頭微ぢんに打碎き、燕青と共に廟門の外に打出で、四面八方に跑て狂ひしかば、數萬の人嵐に打るゝ木の葉の如く、東西に散て逃走る。下官共は個々弓箭を撚つて、雨のごとく射蒐ける。李逵燕青此矢を避て屋の脊に跑上り、瓦を把て下官等を打ける處に、廟門の前に喊の聲大に起り、當先には盧俊義刀を揮て砍て入り、其次には魯智深、武行者、史進、穆弘、解珍、解寶都て七人の頭領一千餘人を引き、各軍器を擧げ、直に廟門の内に突入て、下官等を四方におひ散す。李逵燕青是を見て、屋の脊より跳下り、盧俊義等と共に力を併せて相働く。李逵又旅宿に回つて、二つの斧を搶取り、遂に諸將に從つて再び道中に打出る。官軍共已に大勢を催す内に、梁山泊の人馬は引取て馳回る後へ、出來つて追蒐しか共、はや遠く隔りしかば、官軍等敢て長追せず、引回す。盧俊義は諸將を引て二時餘り馳けるが、李逵一人見えざれば、盧俊義打笑つて云く、李逵又禍を引出さんは疑ひなし、諸將の内誰にても彼を尋出して、山陣に伴ひ給へ。時に穆弘進み出で、某李逵を尋連歸るべし。盧俊義が云く、足下敢て是を計ば、我全く憂なし、宜しく心を留め尋出し候へとて、自は諸將を引て先梁山泊へ歸りけり。

此巻中三丁迄
病床之図也

燕青相撲に勝て
任原を擲落と

で、肩を擦脊をおして見物す。此時任原は暗に拳を捏り、只一踢に踢殺し、天下の豪傑に膽を冷させんと圖り、早速臺の上に躍り出ければ、燕青も同じく躍り出で、兩人相對して蹲ひける處に、羽扇を入れ、兩人に示して云く、互に心を留めて合せ給へ、必ず誤ることなかれとて、聲を掛羽扇を引ければ、兩人一度に立て、一往一來祕術を盡して擣合けるが、燕青は原來手快き達人なれば、或は左の脇を鑽り、或は右の脇を鑽り、只手先を以て對しければ、任原焦燥て、只一推に推倒さんとしけれ共、燕青其手を鑽り、後に拔前に廻つて、良久く勝負分たざりし處に、任原漸疲れて、手足已に亂れしかば、燕青これを見すまし、急に衝入鵓鴿旋と云專門の法を以て、了得の大漢子を眼より高く指擧げ、大に聲を放て臺の下に擲撲けるに、任原は身を翻し、眞倒に落にけり。此時數萬の見物人一同に咄と高聲に喝采しかば、其響天地に震ひて、山川も崩るゝばかりなり。任原が弟子共は只彼利物禮物に心を掛てありけるが、任原が輸たるを見て、二三十人齊しく跳出で、棚の上なる利物を盡く爭ひ取て、竪に拽横に拖て大に紛れ亂す。太守も是を禁ずること能はずして、猶頻りに騷動しける處に、黑旋風李逵、此光景を見て、忽ち忿然として虎の鬚をたて、傍に在し杉の木を捻折て、數萬人の中に打て入る。下官等が内に李逵を識認たる者有て、彼こそ梁山泊の黑旋風李逵なれ、夫脱すなと口々呼はつて、

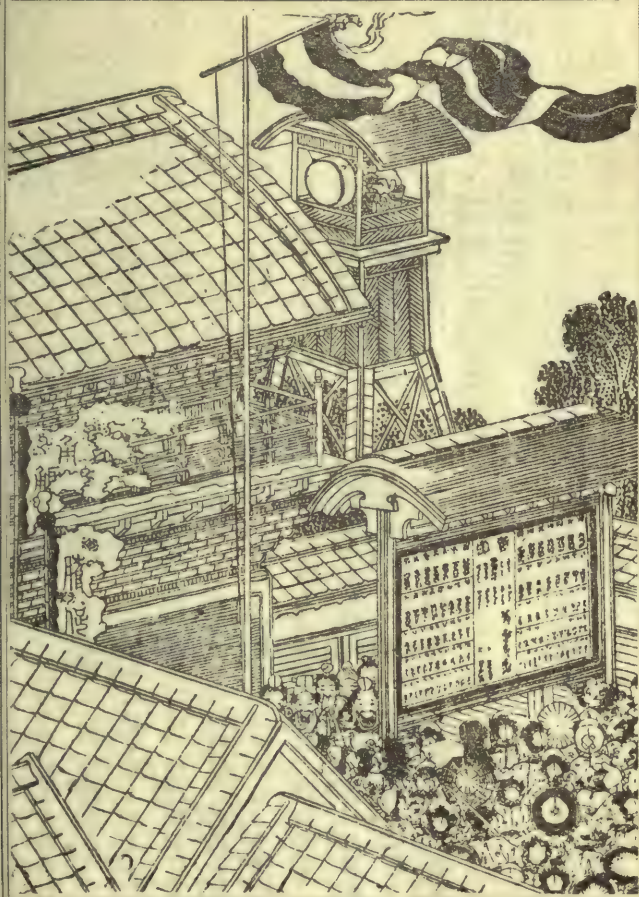
某彼と相撲を合せんと欲し、今年初めて當社に參詣せり。太守が云く、彼利物禮物は都て我出せし物なれば、我これを二つに分て汝と任原とに惠むべし、汝相撲を罷休て我に事んや、然らば我汝を擡擧て重く用ふべし。燕青是を謝して云く、相公の好意感激に堪ず、然れども某が所望は、只任原を踢倒し、名を天下に知られんと欲す、伏して願くは相公某が望みを許し給へ。太守が云く、任原は力量千人に勝れ、相撲の達人なるに、汝いかんぞよく彼を倒さんや。燕青が云く、某縱ひ彼が業に性命を傷はるゝ共、更に怨なし、只相撲を合せて、勝負を決すべし。部署が云く、汝死を求んよりも、宜しく利物を分取て、相公の尊命に從ひ奉らば、久しからずして立身を遂べきに、何ゆゑ只顧弱を以て強きに敵せんと欲し、自ら事を誤つや。燕青が云く、足下部署をも勉る身にて、相撲の利害を辨へ給はざるや、身材の大小、力の多寡、體の肥瘦、見分の强柔とを以て、勝負を論ずべからず、相撲の實利は智と愚とのみ、我又覺えなくして、相撲を合せんと望べきや、相撲の術に於ては、神變不測の道を學び得て、今日の頭籌ごとき者、一時に十人來る共、片腕にも足ずと、思ふ處あればこそ、特々此處に來つて、相撲を合せんと乞ふ、大言は益なし、今に勝負を見て、我言を考合せ給へ、然らば多く言を費し給ふなとて、遂に太守の前を退き、臺の上に登りしかば、數萬の貴賤魚鱗のごとく立竝ん

を讓るべし、殊更我拾取て諸人の目を醒し申さん、我對手にならんと思ふ人は、數を盡して出給へ、我毛頭も惶ずとて、四方を白眼て立しかば、諸見物人一度に哄と喝采けり。此時燕青臺の上に跳上り、某不能たりといへども、頭籌相撲の對手にならんと呼りければ、部署燕青を見て冷笑ひ、汝は何國の人にて、姓名はいかんと問けるに、燕青答へて云く、我は山東の商人李乙と申者なり、我只諸見物の爲に相撲を合せて、一覽に供ふべし。部署云く、足下若頭籌相撲と合せ候はゞ、一命を失ひ候はんも料がたし、知らず慥の保人ありや。燕青が云く、大丈夫の相撲を交へんに、なんぞ必しも保人を用ひんや、殊更相撲の上にては、死生を論ぜずといふ舊例あり、汝いかんぞこれを惶るゝや。部署が云く、已に此のごとくば、足下先衣服を脫て來り候へ。燕青是を聞て、早速衣服を除きし處に、諸人都て燕青が身内に、花を刺したるを看て、大いに驚き、此人定めて等閑の人にあらじとて、衆皆感歎したりける。任原は初め燕青を一飲に呑で居たりけるが、今身内の刺を見て、いかさま覺えある者ならんと思ひ、頗る心中に惶れけり。太守は棧敷の内より、燕青が花の刺を見て、了得の者ならんと推察し、則棧敷の前に呼寄て問けるは、汝が故鄕は何國の者なるぞ、又姓名は何と號すぞ。燕青頓首して云く、某は山東萊州の者にして、名を李乙と號す、彼任原天下の人の相撲を搦むと聞しゆゑ、

を出て相撲場に至りし處に、見物の貴賤群集して、各燕青を指ざし、彼後生こそ相撲の對手なれと、口々に呼はりける。燕青棚の上を見るに、利物の金銀、禮物の錦繡堆く積上げ、勝方にこれを送ると、榜の上に書て、棚の前に建置けり。宋朝には臺の上に、相撲を交しむるの例ありけるが、果して高く臺を設け、天井には幕を蓋ひ、幕の內には金銷の天蓋を吊り、四隅の柱は金鍜を用ひて包みぬ。其外の餝言語に盡すべからず。太守を始として、大小の諸役人都て棧敷に坐して見物す。時に一人の部署臺の上に進み出で、先謹で神明を拜し、羽扇を擧て東西を招き、今年の相撲早く出候へと、呼はりし處に、彼任原都て二三十人の弟子を引て臺の上に揚り、部署に對して何やらん云けるが、部署又羽扇を擧て、高聲に呼はり云けるは、抑此任原といふ人は、去年初て當社に於て相撲の頭籌をなし、多く人に勝、名を遠近に振ひ、今年も又餘多の弟子を引て當社に至り、對手を擇ずして相撲を合せんと欲す、誰にても望み給ふ人あらば、速に出て相撲を初め給へ、と未だ云も畢らざるに、任原も又自ら進み出て大音聲に呼りけるは、我多年國々を廻て相撲を交へしかども、我に勝者未だ一人もあらず、去年初めて當社に至り、好相撲共數十人を倒して利物を得たり、今年も我來つて頭籌をなす、若我と思はん人あらば、快く出て一撲り試み候へ、譬ば百番の內に險にも輸なば、棚の上の利物禮物をこれ

欺きけり。燕青再び旅宿に回りしかば、李逵大いに屈して云く、我終日虚病をなして打臥し、心極めて鬱悶し、實に病をなさんとす。燕青が云く、只今宵一夜を忍び給へ、明日は我相撲を合せて勝負を決せんとて、其夜は先歇みけり。已に二更の前後に至りしに、聖帝廟の鼓樂の響大に起り、其鬧熱なること尋常ならず。四更の一點に、李逵燕青同じく起て用意を調へ、則主に對して云けるは、今日相撲に勝て早々回らん、主樂んで待給へ。此夜此店を借りて一宿したる參詣の人、約莫二三十人ありけるが、燕青がかく云を聞て、衆皆心中に冷笑ひ、都て燕青を諫めて云けるは、彼任原は天下無雙の相撲なるに、足下かくの如き身材にて輕々して對手になり給はゞ、必定命を失ひ、輕くは身を傷ひ、眼前に禍至るべし、足下自ら是を察し、今日の相撲を罷休給はゞ、心安く身全からん。燕青咲つて云く、我相撲は幼きより學び得て、其法其術最神妙なり、今日我彼を倒し相撲に勝たらん時、利物禮物盡く是を奪はん間、貴客等も皆同宿の情を顧て、共に力を併せ心を同うして、利物禮物を奪取給へ、任原いか程身材高く、萬人の力ありとも、我眼には肥太たる蟻のごとし。諸人これを聞き、各領承したれ共、心には怪みながら、先廟前に馳至りぬ。李逵が云く、我二つの斧を携へて可ならんや。燕青が云く、不可なり、若人あつて疑はゞ禍速に至るべし、只常の體にて來り給へとて、兩人遂に旅宿

を具て李逵燕青に進めけるに、李逵面を包し絹を取て出しかば、主李逵が相貌を見て、大に驚き、相撲を交へ給ふ豪傑は、必然此客ならん、と云けるに、燕青打咲ひ、此人は病を得て進退不自由なるに、いかんぞよく相撲を交じへんや、我斯痩て力なしといへども、任原が對手に相撲を合せんと欲す。主打笑つて云く、客戯を云給ふことなかれ、任原は一丈餘高の大漢子なり、客は六尺に滿ざる小漢子なるに、豈對手になり給はんや。燕青が云く、汝必ず我を侮るべからず、相撲の利は唯智に在のみ、何ぞ必ずしも身材の大小を論ぜんや、我明後日任原に贏て、多く諸人の褒美を受け、汝にも是を分與ふべし。主聞て未だ心中に信ぜず、客褒美を得給はんことは猶定めがたしとぞ答へける。翌日燕青早天に起て飯を用ひ、則李逵に對して云けるは、足下は病未だ快よからざるに、暫くも門外に出でず養生し給へとて、己は遂に廟前に馳行けり。任原が弟子共二三百人、盡く任原に隨つて旅宿に在ければ、燕青私に任原が宿に忍入て、任原を見るに、高く床几に坐して、威風凜々相貌堂々たり。弟子の内に燕青を見たる者有て、任原に斯と告けるに、任原故意高聲に呼はつて云く、今年は死を招く族我相手にならんと欲するは、誠に笑止のことなりと、燕青を白眼て云ければ、燕青急に頭を低て、外面に出にけり。任原が弟子共燕青を見て大いに笑ひ、彼が如き小漢子、何ぞ對手にするに足らんやとて、先甚だ

けり。每年三月廿八日は、聖帝の誕生日にて、遠近の男女參詣夥しく、諸商人の店は其數を知るべからず。客店は總て一千五百間、盡く參詣の人充滿して、咫尺の地も有ざりけり。李逵早燕青を迎へ、共に旅宿を求め、暫く休息して居ける處に、忽ち門前大いに騷で、二三十人の大漢子店の內に進み入り、今年の相撲の對手は此店に在と聞けるが、果して此人ありやと、問ければ、主答て、我店の內には曾てかくのごとき人あらず、恐らくは門差ひなるべし。彼漢子共が云く、諸人擧て此店の內に入たると云しに、汝なんぞ僞るや。主が云く、我店の內には、兩人の漢子宿を借けれ共、一人は病に苦で、聲を出すことさへ叶ず、又一人は山東の商人にて、六尺に足ぬ小漢子なり、彼いかんぞ相撲を能せんや。彼二三十人の漢子等が云く、汝先其山東の商人を引て我輩に遇しめよ。主が云く、足下等房間の內を見給へ、牖の下に打臥たる兩人の者、則一人は商人、一人は病人なり。彼漢子共これを見て、かゝる小漢子いかんぞよく相撲を會せんやとて、衆皆怪みける處に、其內一人が云けるは、彼已に額を踢破つて去んと、惡口したる者なれば、必定等閑の輩にあらじ、彼病人と云は、是又人に圖られんことを恐れ、虛病を構たるに疑ひなし。諸人是を聞て、實もと同じ、明後日相撲を見て、實否を知るべしとて、各店を出し處に、又三四十人の漢子進み入て、口々に問ければ、主返答に倦れけり。其夜主飯

の誕日は、四方より大勢の人聚つて、其鬧熱なること尋常ならず、恐らくは足下を識認たる者やあらんに、足下若我が三件これにしたがひ給はゞ、我敢て汝を同往せん。李逵が云く、我易く三件に隨はん、汝先これを示し給へ。燕青が云く、第一には、道中に於て我と汝と各前後に分れ路を行き、旅宿に至りなば、必ず外に出給ふことなかれ、第二には、廟門の前にて宿を借りなば、汝は只虚病を構へ、面を包み妄に鼾を出し給ふことなかれ、第三は、相撲を見物し給ふ時、必ず騒ぎ給ふことなかれ、足下若此三件を守り給はゞ、肯て伴ひ申さん。李逵哈々と打咲ひ、これ體のこと何ぞ難きとするに足ん、我都て守るべし、汝心を安んじ給へとて、兩人已に宿を借て休息し、翌日未明に打立て、李逵は前に走り燕青は後より馳せ、直に聖帝廟をさして行にける。此時參詣の貴賤恰も蟻の如く群つて路に連れり。燕青漸く廟門の前に至りし處に、若干の人相撲場を圍んで額を仰ぎ見る。燕青も雜貨擔を傍に卸して額を見るに、泰原の相撲擎天柱任原と書附け、其側に兩行の文字あり。

拳打南山猛虎脚踢北海蒼龍

と云十二字なり。燕青これを見て冷笑ひ、我此額を踢破つて棄ん物をと、牙咬をなしければ、諸人これを聞て大に駭き、かの漢子は定めて相撲の達人にてあらんとて、頓て任原に斯と告に

燕青雜貨商と扮て泰安州角觝場に到

是を聞て、然りと同じ、その夜は衆皆歇けり。

○燕青智をもつて擎天柱を撲つ

扨も翌日燕青山東の商人に出立て、一荷の雜貨擔を荷ひ、手に串鼓を撚つて、山陣の郷談をつかひしかば、諸頭領是を聞て、一度に吐と笑ひけり。此日燕青遂に諸頭領に別れて、山陣を下り、直に泰安州を望て急ぎけるに、紅日西に傾しかば、燕青旅宿をこゝに求んと欲し、村中に入んとせし處に、背後に人あつて、燕青暫く待候へと、呼はりければ、燕青急に頭を回して此人を見るに、黒旋風李逵なり。燕青問ていふ、李公我を慕つて來り給ふはいかん。李逵が云く、汝前日我に同伴して荊門鎭に來りぬるに、我此回何ぞ又汝に同伴せざらんや、此ゆゑ宋君にも候はず、暗に山陣を下つて馳來りぬ。燕青が云く、我彼地に行には、却て汝を伴ひがたし、足下早々回り給へ。李逵焦燥て云く、汝は了得豪傑にて、人の力は頼むまじけれども、我一點の好意を以て、汝を助けんと欲するに、汝いかんぞ我を回さんとするや、遮莫我は汝に隨て馳行んに、何の不可なる事かあらん。燕青心中に思ひけるは、我もし再三是を嫌はゞ、必定義氣を壞ふことあるべし、曲て彼を伴はんと圖り、則ちまた李逵に對して云けるは、聖帝

は限なし、是に依て天下の豪傑都て彼が門弟となる、願くは大王某等が命を饒し給ひて、泰安州に至らしめ給へ。宋江是を聞て甚だ憐み、早速発して一命を助けしかば、此漢子共再三頓首して宋江に謝し、頓て麓に下て泰安州へと馳行けり。當時燕青進み出て云けるは、某幼き時より、盧員外に從つて相撲を學び、遍く天下に對手なし、然るに彼任原聖帝廟に於て相撲を催し、天下の豪傑を招て相手とすること、甚だ以て傍若無人なり、今月廿八日もはや近ければ、某只一人泰安州に馳て、任原と相撲を合せ、彼を一踢に踢倒して、名を四海に現はし、若負ば誓つて再び山陣に囘るまじ、伏て望くは、宋君數日の暇を賜るべし。宋江が云く、彼任原は身の長一丈餘高にして力量あると聞く、汝いかんぞ彼を對手に勝ことを得んや。燕青が云く、抑相撲の利は智に在て力にあらず、彼たとひ千百斤の氣力ありと云とも、某が相撲にはよもしかじ。盧俊義が云く、我此燕青は、幼き時より相撲を學び得て、最神妙なり、彼自往んと願はゞ、宋君是を発し給へ、然らば某も自ら泰安州に赴き、若何等の事出來致しなば、某これを助べし。宋江此言を聞て、再び燕青に問けるは、汝已に意を決して往んと願上は、我汝に暇を許さんに、只知らず何れの日發足すべきや。燕青が云く、今日は三月十四日なれば、明日發足致し、二十六日に至り廿七日に委細動靜を伺ひて、廿八日には相撲を合すべし。宋江

逵と共に女兒を引て牛頭山を下り、再び劉太公が館に至りしかば、劉太公女兒を見て悅斜ならず、忽ち地上に跪きて、李逵、燕青を拜謝す。燕青がいふ、女兒を救ひしは、都て宋公明の力なり、汝山陣に來て宋公明に謝すべしとて、即日李逵、燕青遂に劉太公を引て、梁山泊に歸り、假宋江等が二つの首を宋江に獻じて、終始詳かに語りしかば、宋江大に悅び、劉太公に遇けるに、劉太公は多く禮物を具へて、宋江に獻じけれども、宋江決して是を請ず、懇に饗應して、深く憐愍を加へしかば、劉太公甚だ感激して、遂に私宅に回りけり。梁山泊これより無事にして、早三月の天氣に至りし處に、一日山下より一夥の人を活捕て山陣に引せしかば、宋江此者共を見るに、各尋常の人に勝れて、身の丈七尺許なる大漢子なり。宋江問て云く、汝等は何れより何れに赴く者なるぞ。彼大漢子共答て云く、某等は皆鳳翔府より、泰安州に赴く者共なり、今月廿八日は天齊聖帝の誕生日にて、毎年彼處に武藝の比試あるゆゑ、某等も連年彼處に馳て、武藝を試候ひける處に、去年初めて泰安府より、相撲の達人任原といふ豪傑來つて、餘多の人を踢倒し、自ら擎天柱と號して、天下無雙と稱し、今年も已に國々に榜を建て、天下の豪傑を招くゆゑ、某等も一つは聖帝廟を拜せんが爲、二つには彼任原に從つて武藝をも學ばんが爲、今年も又泰安州に上り申す、彼任原は身の丈一丈餘高にして、力量

李逵燕青二賊を勦て劉家の女を救ふ

處に、内より一人の漢子走り出て大いに怒り、汝何者なれば、自來て死を求るやとて、刀を揮て李逵に切て蒐る。李逵これを相迎へ、戰二三合にも至らざる處に、燕青棒を輪して跑來る。彼案内したる男は此有様を見て、大いに惶れ、再び籬に逃去ける。燕青棒を振て李逵を助け、彼漢子が眉間を打しかば、彼男忽ち地上に倒れけるに、李逵斧を擧て頭を砍劈る。猶人やあると待けれ共、更に一個の人も出ざりけり。燕青が云く、此内の男女恐らくは後門より逃出んことも有べければ、我は後門の邊に轉り出で防がん、李逵前門を守り給へとて、直に後門の邊に馳て、暫く待居ける處に、一人の大漢子後門を開き、已に走り出んとせし時、燕青棒を廻し打て蒐しかば、彼大漢子甚だ慌て、急に前門を望んで逃けるに、李逵斧を廻して又此漢子を砍倒し、遂に首を刎にけり。燕青これを見て、いざ門内に砍入んとて、李逵と共に猛威を振て院の内に跑入しかば、七八人の小賊ども慌忙き逃出んとせしかども、李逵に盡く殺されける。燕青房門の内に入て搜し見るに、果して一人の女床の下に躱れ在り。燕青問て云く、汝は劉太公が女兒にてはあらずや。彼女答へて、我則劉太公が女なるが、不幸にして兩人の賊に奪はれ、竟に此處に至つて苦みを蒙り、毎日流涕するのみなり、願くは將軍我一命を救ひ給へ。燕青がいはく、我等兩人汝を救はんため、此所まで尋來りしぞ、必ず怖るゝことなかれとて、李

にこれを申せ、若遲疑せば、即時に首を刎落さん、必ず僞ることなかれ。彼漢子が云く、某猥に推察致し候に、劉太公が女兒を奪ひ取し族は、則此近邊にあらん、此所より西北の方に當つて、牛頭山と云山あり、山の上には道院あつて數箇の道士棲ける處に、此比強盜來て道士等を殺害し、擅に道院を奪ひ其内に居住す、一人が名は王江、一人が名は董海と申す、近き比又六七人の小賊來て相從ひ、專ら往來の旅人を惱すのみならず、在々所々に至て、民家を劫ふ、彼王江詐つて梁山泊の宋江と唱へ、傍若無人に猛威を揮て、其惡行甚だ盛んなり、恐らくは此王江が所爲にて、劉太公が女兒を奪ひしならん、彼牛頭山に馳て尋給へ、此所より彼山へは二十里に足ざる路なり。燕青此言を聞て云けるは、汝が云處頗る來歷あり、汝に我等兩人が姓名を知らしむべし、彼人は是梁山泊の頭領黑旋風李逵、我は浪子燕青なり、汝矢疵を貼理し、我々を導きて、牛頭山に赴くべし。彼男が云く、若某を免し給はゞ、敢て導き參らせん。此時李逵、燕青彼漢子に隨つて、牛頭山へ馳行き、漸十七八里に至つて、彼山を見るに、其形果して牛頭の如し。二人齊しく山上に登つて、頂を見るに、誠に一間の道院あり。李逵暗に燕青に對して云く、我足下と共に門内に入て、動靜を伺ふべし。燕青が云く、曉を待て事を行んに、先暫く控へ給へ。李逵が云く、我いかんぞ能く、天明を待んやとて、門を打破つて跳入んとせし

彼假宋江を捉へんと欲す、此邊に於て、險山荒野の人煙なき所を搜し、彼を求んとて、遂に劉太公が家を出て、方々搜しけれども、此日さらに消耗あらずして、翌日も又消息なかりしかば、李逵大に焦燥て、一連に數日東西を尋しか共、曾て其在所を知らざりき。此日李逵燕青黄昏まで尋ねて、一つの古廟の内に歇み、良久しく商議して在ける處に、廟下に人の足音しければ、李逵暗に廟門を開き、是を見るに、一人の大漢子手に刀を提げ、岡の上に登り行く。李逵心中に是を恠み、則ち後に從つて馳ける處に、燕青も同じく弓箭を取て走り出で、李逵に對して云けるは、李公先追給ふことなかれ、我自ら所存ありとて、漸近々馳て彼漢子を望み、能挽て漂ど放ちけるに、其矢過たず彼男が腿の上に中り、遂に地上に射倒しけり。李逵飛がごとく跳來り、彼漢子を捉へ、再び廟中に囘りて大いに責て云けるは、汝潑賊いかんぞ劉太公が女兒を奪ひけるや、若命惜くば眞直に白狀せよ。彼漢子が云く、劉太公が女兒がことは、某かつてこれを知らず、某は只此道中に徘徊して旅人を剝取小賊なり、人を奪ふごときは、洪大の所爲なるに、某何ぞかくのごとき事をなさんや。李逵益吼つて云く、汝若實情を云ずんば、忽ち頭を打碎んとて、二つの斧を揮ひければ、彼漢子大いに驚き云けるは、兩人の豪傑先某を免し給へ、某頗る所存あり。燕青が云く、我肯て汝を免さん、汝もし此事を知りたらば、速

を脱れん計ならん、我何ぞ輕々しく汝を免さんや。李逵頓首して云けるは、某が罪尤重く候へば、數十棒痛く打しめ給ひて、怒りを休め給へ。宋江が云く、汝先には頭を與へんと約束しけるに、今更痛く打と云は如何。李逵が云く、宋君若決して免し給はずんば、速に我頭を刎給へ、我又半點も恨る所なし。此時諸頭領再三再四李逵に替つて罪を謝しければ、宋江がいはく、李逵もし彼假宋江を捉へて、女兒を劉太公に還さば、我肯て罪を免すべし。李逵躍起て云けるは、彼假宋江を捉へんこと、恰も囊を探て物を取んがごとし、何の難きことか候はん。燕青宋江が云く、彼は兩人汝は一人、恐らくは誤あらん、再び燕青を添て、汝を助けしめん。燕青是を聞て大に悅び、某不才たりといへども、李逵に從つて馳べしとて、頓て短棒を取て、粧束を調へ、李逵と共に宋江を辭して、直に劉太公が家に至り、宋公明が仰せたる次第を、一々詳に語つて劉太公に聞しめ、假宋江が風俗模樣、事の起を備細に問ければ、劉太公答へて云く、彼假宋江が相貌は、眞の宋江よりも面白うして身材高し、又彼後生は身のたけ六尺ばかりにして兩眼圓なり、此兩人三日以前に我家に至り、天に替つて道を行ふことを語り、誠に忠義の士と見えけるゆゑ、女兒を奪はんとは夢にだも思はずして、油斷なしける處に、豈料んや、彼假宋江暗に女兒を奪つて、逃失候ひぬ。李逵が云く、我等兩人宋公明の號令を奉つて、今

李逵自縛して
宋江明ニ罪を謝す

先山陣に歸つて待べき間、汝は燕青と共に後より來れとて、遂に劉太公が家を出で、再び人馬を領して山陣に歸りける。燕青李逵に對して云けるは、足下已に宋君を犯して、罪を蒙り給ひしかば、今更これをいかんともすることなし。李逵が云く、我常に短氣にして、儘事を誤るに至る、我已に證文を取交したる上は、一命脱れがたし、我自ら首を刎落して、宋公明に獻ぜんに、汝我首を山陣に携へ給へ。燕青是を聞て云けるは、足下今日自殺し給はんこと、太以て殘念なり、我一つの計を授け申さん、須くこれを行ひ給へ。李逵問て云く、汝何等の計ありや。燕青答て云く、足下自ら索を掛つて、忠義堂の前に跪き罪を請給へ、然らば宋君舊日の情を思ひ出し給ひて、殺害を免し給ふことあらん。李逵が云く、此事尤可なりといへども、諸人に嘲られんも恥かしければ、しかじ自ら首を刎て爽に死せんには。燕青が云く、山陣の諸頭領たとひ骨肉の親にあらずといへども、總て皆義を結びし兄弟なるに、何人か敢て足下を哄はんや、必ず誤つて非命の死をなし給ふな、眞の豪傑は一命を長く全うし、忠義を盡すを以て是を本意とす。李逵此言を聞て、遂に其議に同じ、自ら索を羂つて山陣に歸りける。宋江は諸頭領と忠義堂に在て、各李逵がことを取沙汰して居ける處に、李逵已に忠義堂の前に至つて跪き、只頭を低て默しける。宋江是を見て打笑ひ、汝みづから索を掛つて來るは、却て死

六編　巻之六十

○梁山泊に雙の頭を獻ず

去程に劉太公が家の門前に、十四五騎の馬を待しめ、宋江柴進ははや後堂に至りしかば、李逵は斧を提て傍に控へし處に、劉太公已に後堂に至つて、宋江柴進を良久しく打望み、前日來りたる宋江は此人にあらずと云ければ、宋江則ち李逵に對し、汝太公が言を聞たるや。李逵が云く、汝暗に太公を白眼し故、太公惶れて斯こそ云ならん。宋公明がいはく、汝未だ信ぜずんば、家内の男女盡く呼出して見せしめよ。李逵がいはく、勿論のことなりとて、急ぎ家内一人も剩さず呼出し、宋江を見せしめけるに、諸人一度に呼つて云けるは、前日の宋江は此人よりも面色白くして、身材高し、其風俗は大に同じからず。此時宋江劉太公に對して云く、我は是梁山泊の主宋江、此人は則柴進なり、汝が女兒を奪ひ取し宋江は、我名を借たる假宋江ならん、汝心を留て彼宋江を尋よ、若消息あらば、早速我山陣に注進すべし、我肯て汝が爲に宜しく行ひ得さすべし。劉太公是を聞て、恭しく拜謝す。宋江又李逵に對して云けるは、我は

て、二通の證文を書しめ、各判を居て互に是を取交しぬ。李逵冷笑つて云けるは、劉太公が云し一人の後生は、則柴進に疑ひなし。柴進これを聞て云く、我も汝と共に劉太公が家に馳て實否を正さんぞ、汝先焦燥ことなかれ。李逵が云く、我も亦汝を伴はで置べきや、彼後生若汝に極りなば、柴大官人にもせよ、王大官人にもあれ、我此斧を以て、頭を砍劈べし。柴進が云く、彼後生我に極りなば、汝が心の儘に行ふべし、我少しも寃あらじ、我輩若汝より先に行ば、汝また疑を生ずべき間、汝燕青と共に先に馳て、我輩が來るを待べし。李逵が云く、我もかくこそ思ひつれとて、卽ち燕青と再び劉太公が館に馳行ければ、太公迎へ問けるは、李頭領我女兒がことは、彌肯て還し給ふや。李逵が云く、宋江自ら來つて太公に對面し、事の實否を正さんと欲す、今來る宋江前日の宋江に紛れなくば、女兒を早速還すべき間、太公夫婦幷家人共皆悉く彼を見よ、若前日來りたる宋江ならば、少しも惶れず眞直に申せ、我自ら所存ありと、云けるにぞ、太公恠みながら、妻家從共へ此ことを申聞ける。此宋江果していかん、次卷に明かなり。

宋江が云く、かくの如きこと、我あに是をなさんやと、未だ云も終らざるに、李逵高聲に呼つて云く、我常に宋江は誠の義士とのみ思ひけるに、誰か識ん畜生に劣りし人外なり。宋江責て云く、李逵先我言を聞て、然して後惡口せよ、我諸將と共に二三千の人馬を引て、山陣に回りしことは、諸人都てこれを知れり、何の違あつて劉太公が館に行んや、汝若信ぜずんば、我房間の內を捜し見よ。李逵が云く、汝かくのごとき愚のことを云や、今山陣に在者共は、都て汝が手下なるに、いかんぞ女兒を藏さざらんや、我昔日は汝が色慾を貪らざることを敬ひけるに、豈料らんや、汝はもと酒色を貪るの徒なり、汝昔日閻婆惜を養ひて後、已にこれを殺し、此度また東京において、李師々を慕ひ、二夜つゞけて彼が家に行しごときは、都て色慾より起る所なり、汝はやく劉太公が女兒を、再び劉太公に還せ、然らば我尙あへて汝を免さん、若また女兒を回さずんば、我今汝を害すべし。宋江が云く、汝先騷ぐことなかれ、我汝と共に劉太公が家に行て劉太公に對面し、其上にて事を分明に正すべし、もし我が奪ひたるに極りなば、我汝が斧を受べし、若我奪ひたるにあらずば、汝かくのごとき無禮、必ず罪を免すまじ。李逵が云く、汝もし劉太公が女兒を奪はずんば、我頭を汝に與ふべし。宋江が云く、汝必ず其言を差ふことなかれ、諸頭領都て證人なるぞ、我今汝と證文を取替さんとて、頓て鐵面孔目裴宣に命じ

だずだに扯破去ければ、諸頭領是を見て大に驚き、こはいかなる無禮ぞと忽ち騒動す。宋江大に怒つて云く、李逵何ゆゑ又傍若無人の無禮をなすや。李逵是を聞て兩眼を睜開き、二つの斧を擧て直ちに宋江に砍て蒐る。宋江が左右には、關勝、林沖、秦明、呼延灼、董平等の五虎將軍座を列ね居たりけるが、急に李逵を攔りて斧を奪ひ取り、遂に堂下に拖下す。宋江忿然として大に怒り、李逵何ぞ甚だ兇惡をなすや、もし我に過あらば、汝先是を語れ。李逵怒りに逼て、未だ聲を出すこと能はざりしかば、燕青進み出て云く、某委細に告知せ進らせん間、宋君これを聞給へ、李逵向に東京城の外の旅宿より馳出て、東京城を打破らんと跑行し處に、某例の相撲の手を以て李逵を踢倒し、遂に引て四柳村に至り、狄太公が館にて、李逵男女兩人を殺し、其後荊門鎭の邊に至て天色昏しゆゑ、劉太公が館に一宿せし處に、太公夫婦終夜哭きけるゆゑ、翌朝李逵其ゆゑを問ければ、太公が云く、三日以前十八歳になる女兒を、梁山泊の宋江幷に、一人の後生を引來て奪去る、夫婦これを悲しんで終夜落涙したるよし語りける間、李逵是を信じて、宋君を恨みしゆゑ、某再三これを論じて、宋君においてかやうに不仁なること決してあるまじ、恨み給ふことなかれと、制しけれ共、李逵これを聞入ず、宋君東京においてすら李師々に愛給ふ、此所において何ぞ此事なからんやとて、唯今の如く十分に憤りぬ。

をゆるし給へ。李逵が云く、太公女子を奪はれ、かほど悲しくば、何ぞ再び取回さゞるや。太公が云く、女兒を奪ひしは尋常の人にあらず、則ち梁山泊の大王宋江なり、彼は百八人の豪傑をあつめて梁山泊の山陣を守り、官軍すら彼を犯すこと能はざるに、我いかんぞよく女兒を取かへさんや。李逵又問て云く、宋江幾ばくの人を引て來りぬるや。太公が云く、彼三日以前に一人の後生を引て、我家に踏入み、擅に女兒を奪ひ取候ひぬ。李逵是を聞て忽ち怒り、則燕青に對して云けるは、汝太公が言を聞ぬるや、我彼宋公明は原是義士にあらず、何ぞ斯の如き不仁のことをなすや。燕青が云く、宋君に於てはかゝることよもあらじ、恐らくは僞ならん。李逵が云く、宋公明此度東京に於てすら、李師々に愛けるほどの不覺人なるに、何ぞ此所に於てこれらのことなからんや、我今日までは、宋江を義士と思ひけるに、我眼力の差ふこと返す〴〵も遺憾なりとて、則太公に對して云けるは、我は是梁山泊の頭領黒旋風李逵、彼は浪子燕青なり。宋江實に汝が女兒を奪ひしならば、我再び女兒を汝に還すべし。劉太公是を聞て大に悅び、忽ち地上に拜伏して、再三是を謝す。李逵燕青は遂に劉太公が家を出て、梁山泊に馳回り、兩人共忠義堂に至りしかば、宋江早速問けるは、汝兩人は何故晩く回ぬるやと、未だ云も終らざるに、李逵二つの斧を揮て、替天行道と書て建たる大旗の竿を砍折り、旗をず

處に、燕青が云く、此家は村中の富貴人と見えて、旅人を留むべき所にあらず、別に客屋を覓て宿を借らば可ならんや。李逵が云く、もし此家に歇ば定て客屋よりも強如ならん、何ぞ必しも客屋を覓んやと、未だ云も終らざるに、一人の家僕走り出て云けるは、我家は旅人を留むる客屋にあらず、殊更主人憂ある時節なれば、足下等を留がたし、早く此所を立去て客屋を尋ね旅宿を求め給へ。李逵曾て耳にも聞入ず、直に進み入て草堂の内に至り、恰も奔雷の如く呼つて云けるは、我輩兩人は道路の旅人なり、今宵此家を借りて一宿せんに、何の妨かあらん。主の劉太公此聲を聞て、何奴なれば、我家に入て無禮をなすやとて、暗に李逵を見て、忽ち大に驚き、彼漢子が相貌極めて兇惡なり、若彼を留めずんば、恐らくは事を引出して難儀あらん、一夜は出て借べしとて、則ち飲食を具へて、李逵燕青を款待ければ、兩人の頭領大に悅び、頓て草堂の内に歇けり。此夜李逵酒足ざりけるゆゑにや、未だ睡らず在けるに、太公夫婦寐間に在て只顧哭しかば、李逵此聲を聞て心中に怒り、我今宵はいとゞさへ睡られざるに、彼夫婦の者又哭聲を發して我を犯すこと、是何の不禮ぞやと頻に憤り、終夜曾て睡らずして、翌日未明に起き、則太公に問て云く、汝何故竟夜哭て我を犯しけるや。太公答て云く、我一人の女兒今年十八歲なるを、人に奪はれけるゆゑ、我等夫婦是を悲んで每夜落涙す、願くは貴客無禮

は道士我を饒し給へ。李逵これを聞て大に怒り、汝が如き不孝不順の淫婦を助け置て、何の用にか中らんとて、叉斧を揮て女兒も砍殺し、頓て二つの首を提て、房間の外に走り出で、大音聲に呼つて云く、我兩人の鬼を捉へて殺したり、此首を見よとて、地上に投下ければ、一家の男女盡くこれを見て、大に驚きける。狄太公夫婦女兒が頭を見て、深く悲み泣然として流涕す。彼漢子が首は誰なるにやと、各これを相けれども、識認たる者あらざりし處に、其内一人が云けるは、この首は正しく東村の烏粘王小二と云者なり。李逵打笑つて云く、汝頗る眼力あり、我女兒に此漢子がことを問ければ、私情を通じたる夫王小二と云者なりと告けるゆゑ、我是を殺したり。太公涙を洒で云く、王小二は殺し給ふ共、我女兒を饒し給ひなば、多少悦ばしく候はんに、道士何故女兒を殺て、悲みを受しめ給ふや。李逵大に罵りて云く、汝愚なる老翁、猶不孝の子を惜んで我を怨むるや、太以て不禮なり、我明日汝と說話せん、今宵は先歇んとて、燕青と共に後堂に入て睡りけり。翌日李逵狄太公に對していひけるは、我昨夜汝が爲に鬼を殺しけるに、何ゆゑ我を謝せざるや。狄太公已ことを得ず、多く酒食を設けて、李逵燕青を饗應したりしかば、兩人の頭領飽まで喫ひ、遂に狄太公が家を出て、梁山泊へと急ぎける程に、不日に山陣の近村に至り、此日も漸昏しかば、李逵一軒の大家を尋て、門を敲きし

意し給へとて、彼二つの斧を左右の手に提げ、家僕に火把を揮せ、直ちに房間の邊に至つて、房間の内を望み見るに、隱に燈の光あつて一人の漢子と、一人の女と一處にあり、何やらん喃々吶々と說話する聲聞えしかば、李逵大に吼つて進み入り、汝兩人は何奴なれば、此間人を嚇しぬるや、若眞直に白狀せずんば、唯今一命を害すべし。彼漢子李逵が兇相を見て、忽ち膽を消し、急に逃出んとせし處に、李逵右の手の斧を揮て砍ければ、彼漢子遂に頭を劈れて倒れけり。女兒大に驚き、床の下に逃入んとせし時、李逵早くもこれを踢倒し、大音聲に罵つて云く、我今殺せし漢子は、汝が爲に誰なるぞ、早々實情を申せ、若一句にても詐らば、汝も倶に殺すべし。彼女揮ひ慄いて云けるは、彼は我が私情を通じたる夫王小二と申者なり。李逵又問て云く、汝常に房間の内より投出したる石瓦は、何れの所より得たるや。女兒が云く、我家の後門の外は、人家なき空地にて、廢れたる石瓦極めて多し、半夜三更に至り人皆靜つて後、相匙をもつて後門の鎖を開き、則ち彼漢子を出して石瓦を拾はしめ、常に晝の内は夫を床の下に藏し置き、若人來らんとする時は、我夫と共に、石瓦を打出して、人を傷へり、此ゆゑに父母は只、我病にて斯あると思ひ、常に祈禱怠らずして、家内に此事を知りたる者一人もなし、此比は一家の男女各嚇惶れて、房間の前に來る者あらざるゆゑ、擅に樂み候ひぬ、望らく

れ蘇州羅眞人の弟子にして、雲に坐し霧に駕し、神通最廣大なり、就中鬼を捉ふることは、我專門とする所なれば、今宵我鬼を捉へて、其病を除くべき間、先一猪一羊を殺して、神將に祭り給へ。太公が云く、猪羊牛馬の類は我家に極て多し、何ぞ仰にや消んとて、頓て猪羊を殺し神將を祭りしかば、李逵是を見て云く、我今宵三更の時分に鬼を捉ふべき間、其内酒肴を調へ、我に與へ給へ。太公がいはく、酒肴を進せんこと是又易し、若符紙等入用に候はゞ、これをも進すべし。李逵が云く、我法は符を用るがごとき手延のことにあらず、唯房間の内に入て鬼を捉ふのみなり。燕青これを聞て、暗に一笑を催しける。李逵故意親手酒を供へて神將に祀り、又香を拈つて拜をなし、頓て彼猪羊を取て擅にこれを吃ひ、則ち燕青に對して云けるは、足下も猪羊を用ひて一盃酌給はんや。燕青は心中に冷笑ひ、只默然として居たりける。李逵又酒を取て十餘碗酌乾し、其外肴等一點も剩さず吃ひければ、狄太公此光景を見て大に呆れ、いか樣凡人にあらずと、低言けり。李逵又太公に對して云く、我はや酒にも醉ひ食にも飽たれば、急ぎ鬼を捉へん、息女の房間へ誘引し給へ。太公が云く、女兒が房間の內よりは、石瓦を打出すに因り、我家の男女盡く恐れて、房間の邊に近づく者なし、願くは道士法力をもつて、自ら入り給へ。李逵是を聞て冷笑ひ、已にかくの如くば我みづから房間の內に入んゆゑ、火把を用

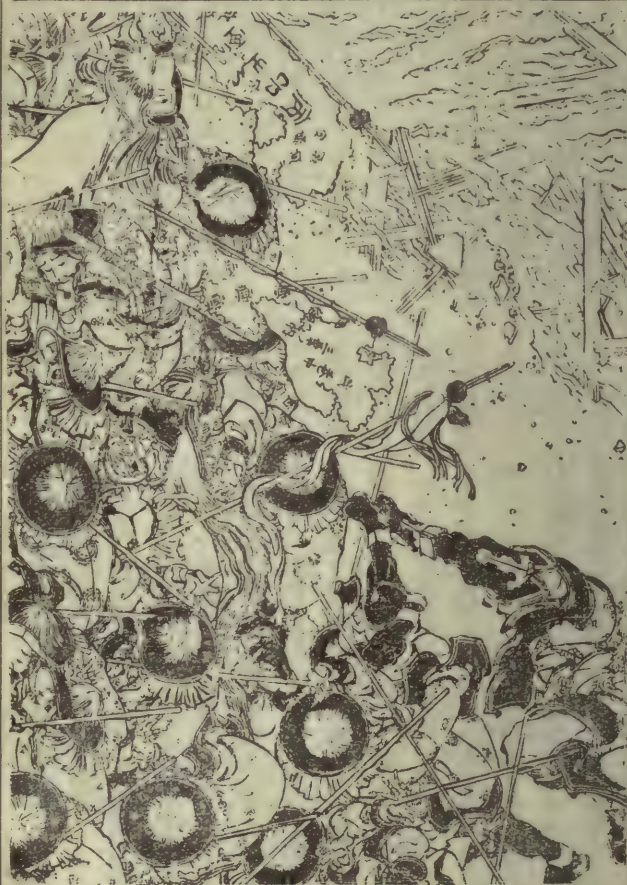
奏聞を遂て、梁山泊を攻べしとぞ議定しぬ。去程に李逵は燕青に隨つて、忙はしく一軒の家を借て、暫く歇み居ける處に、主の狄太公、李逵を見て大に驚き、此人の相貌甚だ兇惡なり、必定尋常の人にあらじとて、則ち燕青に對して、李逵がことを問けるは、彼人は定めて道士にも有ならん。何ゆゑ相貌兇惡なるや。燕青が云く、彼人は相貌醜しといへども、道德高き道士なり、太公必ず恠み給ふことなかれ。狄太公是を聞て、忽ち地上に跪き、淸德の道士もし肯て我を救ひ給はゞ、一家の禍何事かこれにしかんと、再三慇懃に申ける。

○黑旋風喬く鬼を捉ふ

狄太公の言を聞て李逵は呵々と打咲ひ、我太公を救はんこと容易し、先速に其ことを語り給へ。狄太公が云く、我眷屬都て百餘人ありといへ共、骨肉の親とては、只一人の女兒を持けるが、今年二十餘年にして容儀も醜からず候へども、半年以前に不圖邪祟に著つて狂はしくなり、只房間の裏に在て、朝夕の飮食も、房間の外に出て討吃ふことあらず、若人あつて呼出さんとする時は、石瓦を打出して其人を破り傷ふ、是に依て疵を被る者甚だ多し、每度祈禱をなしけれども、更に其驗あらず、願くは道士是を救ひ給へ。李逵此ことを聞て云けるは、我はこ

呼りけるは、梁山泊の諸豪傑盡くこゝに在り、汝高俅速に東京城を獻じて降參せよ、若然らずんば、汝が頭を立所に刎べきぞ。高俅是を聞て大に驚き、兵を引て城中につぼみ入り、堅く城戸を閉て防がせける。宋江又燕青に命じて云く、汝と李逵とは別して懇切なる間、汝は暫く此所に待ちて李逵とともに歸るべし、我は先諸軍を引て歸山せんとて、遂に兵を收めて梁山泊へと急ぎけり。李逵は先旅宿に歸り、行李を取、再び東京城を打破らんとて、只一人城の邊に跑け來りし處に、燕青これを見て抱き住め、早くも足を飛せて李逵を地上に踢倒し、我宋頭領の命を奉て足下を待たる間、先怒を息て、我と共に歸り給へとて、遂に引て馳けるに、了得の李逵、燕青に投られて、一言の返答にも及ばず、只相隨て走り行く。李逵何ゆゑ燕青を恐るゝなれば、燕青は天下第一の相撲の名人にて、時々李逵を投けるゆゑ、李逵常に燕青を恐れけるなり。燕青がいはく、若大軍後を慕うて追來らば、敵せんこと難からん、一足も早く進むべしとて、陳留縣の路を過て飛が如く落行けり。翌日東京大に騷動し、高太尉又軍馬を引て追蒐しかども、竟に追上ずして馳回りぬ。李師々が家の火難は、放火の由を訟へける。彼楊太尉は昨夜命を脱れ逃回りしといへ共、略疵を蒙て未だ快からずとなり。城中の帶傷都て一千餘人とぞ記しける。高大尉は樞密院の童貫と共に蔡太師が館に至つて、蔡京に此事を告知せ、急に

に御街の邊に砍て出で、左右を拂つて狂ひしかば、恐らくは城門を閉され脱れ難からんとや思ひけん、戴宗燕青を留めて李逵を助けしめ、宋江柴進は飛がごとく城外に馳出たり。此時帝は火の起りたるを見給ひ、御心を驚かしめられ、急ぎ還幸遊しけり。鄰家どもは舞馬災難出來たりと騒動し、水桶梯子手々に提げて火を救はんと跑來る。かゝる處に太尉高俅は城內を巡見して在けるが、此事を聞て慌て忙き、人馬を引て馳來り、李逵を尋て東西に跑廻る。李逵は半途に於て穆弘、史進兩人に適遇ひ、各軍器を擧て相助け、高俅が從卒を四面八方へ追散し打なびけ、城門の邊に至りしかば、守門の軍士これを見て、城門を闢さんとせし處に、魯智深、武行者、朱同、劉唐、軍器を揮て早くも城內に亂れ入り、軍士等を四方に追散し、李逵等四人を救ひ出し、漸く百歩ばかり馳し時、高太尉已に軍馬を引て城外に打出たり。宋江等は甚だ憂て途中に徘徊し居ける處に、梁山泊より五人の猛將、一千餘騎を引て此夜此所に至り、幸ひ宋江、柴進、戴宗三人に遇て悅ぶこと限なし。今此軍馬の至る所以は、向に宋江諫言を用ひずして山陣を下りしゆゑ、軍師吳用必ず禍あらんを料り知り、則ち梁山泊の五虎將軍、關勝、林冲、秦明、呼延灼、董平等を遣はして、此夜の難を救はせけるとかや。魯智深等八人の頭領も已に至りしかども、此內一人黑旋風は見えざりけり。彼五虎將軍等は城の濠際に馬を勒へ、大音聲に

李逵放火して李師々が
青樓を鬧す

給ふとなれば、妾いそぎ御駕を迎へんとす、願くは官人今宵も先我爲に歸り給へ、尚重ねてまみえ候はんとて、遂に小三板と共に後門の邊に出にける。宋江等は傍に伏して私に天子を見奉る處に、彼李師々地上に跪て奏しけるは、陛下又御駕を惠ませ給ふこと、忝く感悦し奉る。帝宣ひけるは、朕今日上清宮に幸行し已に今還御なす、楊太尉をも召連んと欲し、暫く待けれ共、彼未だ至らざるゆゑ、朕先自ら來れり、汝近く進んで朕が心を慰むべしとて、御感悦の體に見えさせ給ひしかば、宋江暗に議していひけるは、若此度御赦免のことを奏聞せずんば、重ねて圖る共難かるべし。柴進が云く、不可なり、今縦ひ帝此所にて罪を免し給ふとも、後必ず奸臣等に讒言せられ、遂變することあるべければ、卒爾に奏問せんも如何あらんと、商議更に定らず。扨黑旋風李逵は、宋江柴進が李師々に愛たると思ひ、忿然として怒に堪ざりける處、楊太尉天子の御跡を慕ひ奉りて門前に至り、則ち李逵を見て罵りけるは、汝は何者なれば、敢て此所に在や。李逵是を聞て大に怒り、忽ち斧を揮て楊太尉に砍て蒐る。楊太尉肝を冷し、こはいかにと奔走す。戴宗急に李逵を攔り住んとせしか共、李逵虎のごとく吼て門内に狂ひ入り、花燈の火を取て此彼に放ちければ、李師々が家忽ち火起て、黑煙直ちに天に沖る。宋江柴進是を見て、門外に走り出で、李逵を引て共に城外に逃出んとしけれ共、李逵大に呼はつて、擅

ごとく相貌醜しといへども、力量人に越て武藝の達人なりと語りしかば、李師々嘸と打笑ひ、則小三板に命じ、戴宗、李逵に盃を廻して酒を勸めしむ。兩人各重て乾ければ、燕靑是を見て、李逵が又醉狂せんことを怖れ、兩人の者を門前に出しける。宋江が云く、大丈夫酒を飮んに、何ぞ小杯を用んやとて、遂に大盞を乞出して、はや數盃乾しければ、李師々興に乘じて歌をうたひ、樂み已に濃なりける處に、宋江欣然として筆を揮ひ、便ち樂府の詞一首を書して云く、

天南地北問乾坤。何處可容狂客。借得山東烟水寨。來買鳳城春色翠。袖圍香絳綃籠雪。一笑千金値。神仙體態薄倖如何消得想。蘆葉灘頭蓼花汀畔皓月空凝碧。六々雁行連八九。只等金鷄消息。義膽包天。忠肝蓋地。四海無人識。離愁萬種醉鄕一夜頭白。

宋江書畢て李師々に見せければ、李師々再三反復して見けれども、さらに其意を曉さず。宋江が心中には、李師々若此詞の意を問ば、則ち便機に乘じて我心中の事を告知せんと圖りし處に、小三板來て慌しく報じけるは、今宵も天子料らず忍ばせ給ひて、はや後門に著御なりぬ、早早御駕を迎へ候へ。李師々大に慌て、則ち宋江に辭していはく、今宵も天子後門に御入あらせ

しかば、李師々相迎へ謝しけるは、官人いかんぞ初ての相見なるに、許多の禮物を送り給ふや。宋江が云ふ、我郷には珍らしき土産もなき故、輕少ながら賀義を送りけるに、何ぞ是を謝し給ふや。李師々頓て酒宴を設けしめ、宋江柴進を款待し、酒已に數巡に至つて、李師々只管風流の閑談を催しける所に、宋江は梁山泊の豪氣を顯し、其言更に相應せざりしかば、柴進打笑て云く、長兄常に酒に醉給ふ時は、豪傑の氣象顯れ、聊も風流ならず。李師々これを聞同じく打笑ひ、我家に於て風流の談話は常のことに候へば、極て珍らしからず、豪傑の詞こそ、甚だ珍らしけれと、云も終らざるに、一人の小三板來つて告けるは、門前に兩人の漢子在て貴客等の同伴なりと見えけるが、其相甚だ醜うして、人を駭かしむ、獨何やらん喃々呐々と貴客を罵り申す。宋江が云く、其兩人の男則我同伴なり、汝はやく此所に誘引せよ。小三板承つて、遂に戴宗、李逵兩人を引て宋江が前に至れり。李逵は宋江、柴進が李師々と一處に在を見て、はやくも心中憤り、忽ち兩眼を睜開いて宋江等三人を白眼ける。李師々問て云く、彼男は官人の同伴にて候や、何とやらん山神の形に似て狂しき模樣なりと、衆皆一同に咲ひけり。宋江が云く、彼は我心腹の家僕小李と云者なり。李師々が云く、彼を我家に連給ふ分は、少しも妨なしといへ共、若彼を他所に召連候はゞ、却て官人の面目を汚すべし。宋江が云く、彼此の

進と同く、官人の形に出立ち、戴宗、李逵、燕青を引て萬壽門より城中に進み入り、此夜諸門の軍士衣甲を著し、弓箭を帶し、甚だ嚴の有さまなり。高太尉は自ら五千の人馬を領して、城中を巡見す。宋江等五人の頭領は群人の中に相雜つて、遂に城內に紛れ入り、宋江又燕青に計を授けて李師々が家に遣し、自らは柴進等と共に又彼茶坊の內に坐して、專ら消息を待にけり。燕青已に李師々が家に至りしかば、李老媽則ち燕青に對面して云けるは、昨夜は帝不時の御入にて、彼客を空しく回し參らせ、我心いまだ安んぜず。燕青が云く、我主人再三老娘の好意を感じ、薄少たりといへども黃金一百兩、これを送り申す、向後若珍らしき土產あらば、重ねて進上致さんとて、先彼一百兩の金子を取出して、李老媽に與ふ。李老媽金子を得て心中に甚だ悅び、則ち謝して云けるは、彼客誰か知らんかくのごとく懇切なることを、今宵も定めて花燈を見物に出給ひぬらんに、張公何ゆゑ我家に誘引し給はぬぞ。燕青が云く、我主人今宵も已に此邊に至り、前面の茶屋の內に在て、我此消息を待居給ふ。老媽が云く、今宵は上元の佳節にて候へば、我今女子と共に一盞を酌んと欲す、張公若我を棄給はずんば、彼客を同伴して我家に至り給へ。燕青此言を聞て、再び茶坊に歸り、遂に宋江等四人を誘引して、李師々が門前に至りし處に、戴宗李逵兩人は則ち此所に待せ、宋江、柴進、燕青三人は內に入、客廳に至り

送らんに、願くは暫時趙小娘を借給へ。老娘が云く、女趙元奴に遇しめ進らせんこと、いと易く候へ共、今宵女は家に在ざる間、他日重ねて來り給へ。宋江が云ふ、果して今宵家に居給はずば、先歸りて異日尋ね申さんとて、遂に別れて門外に出で、四人直に天漢橋の邊に來つて、花燈を見物し、漸く樊樓の前に至りけるに、樓上に管絃の音頻にして、遊興をなす者、其數を知るべからず。宋江等四人、同じき樊樓の上に登つて、暫く歇み居ける所に、九紋龍史進、沒遮攔穆弘、先達て此所にあり。大に爛醉して亂言を云ければ、宋江想はずこれを看て、甚だ責て云く、汝兩人何ゆゑ斯大醉して、亂言を申すや、若我汝等を見ずんば、必ず下官等に捉はるべきを迚、早速史進、穆弘を引て、直に城門の外に出で、宋江又史進、穆弘に對して云く、今宵は先旅宿に歸つて、明晩又花燈を見ん、汝等兩人も急ぎ旅宿に歸りて休むべしと命じ、宋江等四人は萬壽門の外の旅宿に歸りし處に、李逵相迎へて云けるは、宋君等四人は城中に入て、花燈を見物し給ひ、嘸樂しからん、只某のみ旅宿に留つて寂寞に堪兼ね候ひぬ。宋江が云ふ、汝常に禍を惹出すゆゑ、我汝を連ざりしなり、然れども明晩は汝を引て花燈を見せしめ、夫より直に梁山泊に歸るべし。李逵呵々と打咲て殆悅び、其夜は各歇みけり。翌日は正月十五日、上元の夜なりしかば、東京の城中大いに鬧熱ひ、貴賤群集して街に充滿す。此夜宋江は柴

今日幸ひ張閑の引合に依て、初めて貴客の尊顏を覩奉り、我心の悅び、君これを察し給へ。宋江答て云く、某村中の田夫、豈あへて慇懃の言に當らんや、我久しく李小娘の花容を慕ひぬるに、今日緣熟してまみえ申事、寔に天の賜なり。李師々又柴進戴宗に向つて一々禮を述べ、暫く談話して居ける處に、小三板來つて慌忙き告けるは、帝今我家に著御あつて、後廳に幸し給ひぬるに、早く來つて御駕を迎へ給へ。李師々是を聞き、宋江に向つて云く、今上皇帝折節は我家に忍ばせ給へども、不時の御入候ゆゑ、其來り給ふ時日は豫めこれを料りがたし、豈知らんや、今宵も帝、我家の後廳に入せ給ひぬるとなれば、我急々御駕を迎へんと欲す、明日は帝上淸宮に幸ある間、必定我家には忍ばせ給ふまじ、願くは貴客今宵は先歸り給ひて、明日再び來臨を惠み給へ、然らば我快く盃を獻じて、貴客を慰め進らせん。宋江是を聞て、急ぎ座を立ち、恭しく李師々に謝し、再び來り候はんとて、頓て門外に出で、則柴進に對して云けるは、今上皇帝兩人の妓女を寵愛し給ふ、一人は是李師々、又一人は彼趙元奴なり、今已に李師々には遇けれども、未だ趙元奴に遇ず、去來又此より直に趙元奴が家に往て、彼にも遇べしとて、遂に趙元奴が家に至つて趙老媽にまみえ、燕靑先云けるは、我此兩人の客は、山東第一の富貴人にて候が、趙小娘にまみえんとて此所に至り給ふ、我今一百兩の銀を老娘に

宋江明們李師々ガ青樓ニ登

び、李老母に對して又云けるは、某則其時の張童子なり、我親張乙兒も此世を去て已に久し、我今年は山東の商客に隨つて上京したりけるが、此商客は世に雙なき大富貴人にて、燕南河北等の地に於ては、誰知らざる者もなし、此人今日上京し給ひぬる所以は、第一京にて商賣かた〴〵、元宵を一覽せんが爲、第二は此處に許多の親類あるを、一々訪はんが爲、第三は何とぞ老娘の家に至つて、一たび李師々にまみえんが爲なり、彼人千百兩の銀を老娘の家に送らんとなるに、必等閑の客と日を同じうして見給ふことなかれ。彼老媽これを聞て、平生の大慾心を動かし、哈々と打笑て云く、縱ひ然らずとも、張公自ら來り給ふ上は、怎ぞ隔心あらんや迚、則ち李師々を呼出し、燕青に遇しむ。燕青此李師々を見るに、流石は東京第一の名妓にて、沈魚落雁の容、閉月羞花の貌あり。佳香忽ち衣襟に起つて直に能人を襲ふ。彼老媽先燕青が由來を語て、李師々に聞しめしかば、李師々則ち燕青が前に進み問て云く、其客は今何れの處に居給ふや。燕青が云く、彼客は前面の茶坊にあつて、我消息を待居給ふ。李師々が云く、速に誘引あつて、暫く歇ましめ給へ。燕青聞て大に悅び、再び茶坊の内に回つて、消息を宋江に報じければ、宋江柴進戴宗一同に茶坊を出て燕青に隨ひ、終に李師々が家に至りし處に、李師々自ら宋江等を迎へて客座に伴ひ、座已に定りしかば、李師々先宋江に對していはく、

其下には一脚の香卓を設て一個の香爐を置き、香爐の内には佳香馥郁たり。燕青暫くこの所に控へけれども、未だ人出ざりしかば、又天井の内に轉り入てうかゞひ見るに、此も又一座の客廳あり。廳上には種々の花鳥を雕したる沈の小床を三脚設け、其上には各錦の褥を敷き、其前には金玉を鏤めて餝りたる飛龍の燈籠をかけ、いかさまにも常ならぬ光景なり。斯る所に一人の小三板出て燕青に問けるは、貴客は何れより來り給ふぞ。燕青が云く、我は只李老母に見えんと欲す、汝入て此ことを傳へ給へ。彼小三板言を領じ内に入り、李老母に斯と告ければ、李老母頓て走り出で、則燕青を見て云けるは、貴客は何等のことあつて我を問給ふや。燕青慇懃に答て云く、某はもと此邊に住居したる張閑と申者なり、昔日幼年なりし時は、時々門下に來つて戯れ遊び、多少老娘の愛憐を蒙りぬ、老娘何ぞ我を忘れ給ふや。老媽此言を聞て暫く沈吟し、忽ち打笑つて云く、昔日大平橋の邊に住したる張乙兒と云し人の一子に、たしか張閑とやらん申たる男子あり、毎度我家に來つて小三板共と相戯れ、我深く寵愛し、折節は菓子なんどを惠みけるが、其後に不通に見えざりしゆゑ、我これを問せけるに、何ゆゑやらん、張乙兒一家の眷屬を携へ、他鄕に引越たるとなり、貴客は定て其時の張童子にて有べし、年久しき事なるゆゑ、我はや見忘れ候ひぬ。燕青此言を聞て、想はず我計的に中りたると暗に是を悅

人は、官人の形に出立ち、戴宗は承局の形に出立ち、燕青は家人の形に出立ち、李逵は旅宿に留つて、行李を守りける。宋江等四人城中を奔走して、御街を見るに、千門萬戸都て燈籠棚を設け、種々の花燈を掛て、一連に火を點しければ、其晃白晝よりも明らかなり。眞にこれ樓臺の上下火火を照し、車馬の往來には人人を看る。東京の繁昌何を以てこれに喩んや。宋江等四人這廂那廂遊行して、前面を見るに、兩座の青樓高く聳えて各一面の牌を掛け、牌の上には歌舞神仙の女風流花月魁と云文字を二行に書列ねたり。其傍に又一軒の小茶坊有ければ、宋江茶坊の内に進み入て一凳に坐し、則主に問て云けるは、前面に見えたる青樓には、定めて名妓多からん。主答て云く、彼兩座の青樓は、東京第一の名妓兩人あり、一座は李師々が青樓、一座は趙元奴が青樓なり、抑此李師々趙元奴と申兩妓は、古往今來雙なき美人にて、その名四海に芳し。宋江が云く、我聞、此兩妓が青樓には今上皇帝時々忍ばせ給ふと聞く、果して此ことありや。主聞もあへず宋江を制して云く、貴客聲を高くし給ふことなかれ、若人あつて此言を聞ば恐らくは爲あしからん。宋江是を聞て再び問ず、暗に燕青を呼で命じけるは、我今李師々に逢て事を圖らんと欲す、汝先李師々が家に馳て、宜しく首尾を調へ來るべし。燕青命を承つて、逕に李師々が家に入て内を見るに、一碗の鴛鴦燈を掛て、光明らかに照し、

進が言を一々傳へけるに、王班直これを聞て偏に其意を曉さず。まづ錦衣花巾を取て再び著し、遂に私宅へ歸りけり。翌日朝中朝外に、專ら沙汰有て云けるは、何者の所爲にや、叡思殿の屛風の上に御筆にて書せ給ひぬる、天下四大賊の姓名の內、山東宋江と云四字を截去りたるゆゑ、今日より緊しく御門を緊め、出入の諸人一々嚴に査めさせ給ふと、風說頻なり。王班直は此ことを聞て暗に思ひけるは、我昨日酒に醉て臥たりし時、我著したる錦衣花巾自ら脫て、枕邊に有けるゆゑ、我これを疑ひしかども、其意いまだ解ざりけるに、扨は昨日の官人、我を誑いて酒に醉しめ、我錦衣花巾を著して、禁中に紛れ入り、山東宋江と云四字を截去て捨たるに疑ひなし、彼必定梁山泊の强盜にてぞあるべきに、如じ沙汰なしにせんにはとて、自らこれを心中に收め、深く愼んで云ざりけり。

○李逵元夜に東京を鬧がしむ

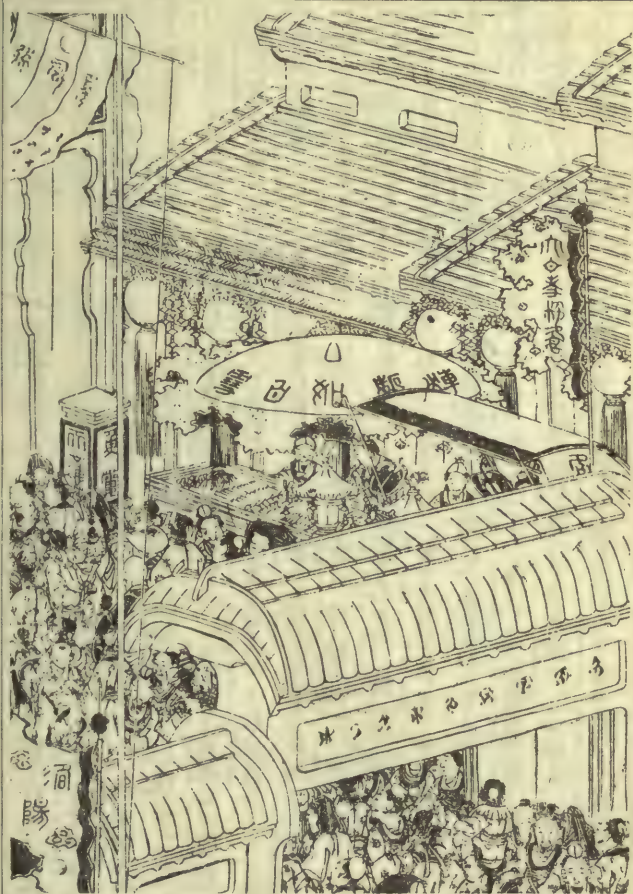
去程に柴進は、燕靑を引て旅宿に歸り、禁中に紛れ入て、山東宋江と云四字を截取たること、一一詳に告て、其文字を宋江に呈しければ、宋江これを見て只管嘆息已ざりけり。既に十四日の晚に至りしかば、宋江粧束をあらため、柴進等數人を引て城內に入にけり。此時宋江柴進兩

しければ、進み入こと能はずして、竟に凝暉殿の前を轉り過ぎ、一つの偏殿の邊に至りて、御額を見るに、叡思殿と云三字あり。則ち此殿は帝御勤學の所なり。柴進密に此内に忍び入て殿中を見るに、正面には御座を設け、左右には堆く群書を置き、其外書房の諸色備らざると云ことなし。御座の前には山河社稷混一の圖を掛け、御座の背には屏風をかこみ、屏風の上には正しく御筆と覺えて、天下四大賊の姓名を書せ給ひぬ。

山東宋江　淮西王慶　河北田虎　河南方臘

柴進四大賊の姓名を見て想道く、我輩がゆゑに國家を亂され、天子常に是を叡慮に掛給ふゆゑ、四人の姓名を記させ給ふに疑ひなし、我今宋頭領の姓名を除んとて、身邊にたづさへたる軍器を取出し、山東宋江と云四字を截去り、急ぎ殿中に出て、再び東華門を過ぎ、竟に酒樓に回りて、彼王觀察を見るに、毒氣猶朦々として未だ醒起ず。柴進彼錦衣花巾を脱で、王觀察が枕元に置き、則酒錢を償うて、酒保に命じけるは、王觀察は是我が同僚の人なり、我は先禁中に入て少刻來らん、彼若酒の醉醒て我事を問ば、汝宜しく此ことを云聞せよ、其爲に汝を賞せんとて、白銀二兩を出して與へ、頓て燕青と共に酒店を出て、再び萬壽門の外の旅宿へぞ歸りける。王班直は黃昏に至て毒酒の醉醒て、則ち酒保を呼で、柴進が行方を問ければ、酒保柴

も、乃天子の御賜にして、枝上に一つの小金牌を掛させ給ふ、金牌の上には與ㇾ民同ㇾ樂と云四字あり、頃は我輩毎日此邊に徘徊し、街を巡見す、若異事ある時は、卽朝廷に入て注進す、凡此翠葉花を插たる者は、禁中の出入何時にても許させ給ふ印なり。柴進が云く、我いまだかゝることを知らざりしとて、再び盃を執て、再三王班直に勸め、酒又數巡に及び、柴進又酒を熱くして拿來るべきよしを、燕青に命ず。燕青頓て一壺の熱酒を拿來る。柴進是を大盞に釃で班直に送り、某謹で此酒を觀察に獻じ奉る、願くは觀察これを乾給へ、其後某が姓名を報進せん。王班直盃を取て云く、某いまだ足下のことを思ひ著ず、願くは大名を報じ給へとて、遂に盞を傾け、此酒を乾けるに、忽ち身體癱て口中涎を流し、翻顚して地上に倒れけり。是則酒中に毒藥を加へたるゆゑなり。此時柴進班直が著たる、錦衣花巾を剝取て、己が身にこれを著し、則燕青に命じ、若酒保來つて王觀察がことを問ば、汝宜しく返答に及ぶべしとて、燕青を樓上に留め、自らは樓を下り東花門の內に入り、暗に心を止めて禁中の光景を見るに、金銀、瑠璃、瑪瑙、珊瑚を以て、御門御殿に鏤め、四方一面に淸潔光輝目を猒しめず、心を驚しめ、其富饒なること爭か言語に盡さんや。柴進數重の禁門を經けれ共、錦衣花巾を著したるゆゑ咎る者あらざりけり。柴進殿門の上を見るに、各黄金の鎖を用ひて闕

東京元宵花燈見物
四民群集之

燕青委細其意を曉し、頓て樓を下り酒店を出で、一人の班直を迎へ慇懃に禮を行ふ。彼班直燕青を見て云けるは、我曾て汝を識認ず、何ゆゑ禮を行ふや。燕青が云く、我主人今酒樓の上に在て、專ら張觀察を待詫申す、願くは早く來臨を惠み給へ。彼班直が云く、我姓は王なり、張觀察と云は我ことにあらず、恐らくは人差ならん。燕青は聰明伶俐の人に越たる者なれば、流水と口に任せて答へけるは、誠に主人も王觀察と申候ひし、某が不圖誤つて張觀察と申ぬ、觀察先尊歩を移し給ひて、我主人に遇給へ、然らば其虛實自ら知候はんとて、遂に王班直を引て再び酒樓に上り、燕青先柴進に對して、王觀察を迎へたるよしを告ぐ。則王班直を柴進に遇しむ。柴進急に禮を叙て、慣々しく挨拶す。班直同禮を還し、暫く柴進を打望んで云けるは、某兩眼拙して尊顏を見忘れたり、願くは大名を報じ給へ。柴進打笑つて云く、某と足下とは竹馬の友なり、先我これを云まじきに、足下再び思ひ出して見給へとて、はや酒食を具しめ、慇懃に王觀察を勸め、酒數巡に至りし處に、柴進問て云く、觀察の頭上に翠葉花を挿給ひねるは、何等の意ぞや。王班直答て云く、今上皇帝元宵を慶し給ひて、民とともに樂を同じうし給はんとのことなるゆゑ、我輩ごとき者總て二十四人、同じく下役總て五千八百人、皆かくのごとく花巾錦衣を朝廷より拜領して、各是を著す、此一朶の翠葉花

れば、常の時と同じからず、道中に於て酒を用ふる共必ず過すなかれ、若一點の誤あらば、百八人の内を除くべし。李逵が云く、軍師毛頭も憂へ給ふべからず、我自ら愼で禍を避べし、何ぞ妄りに宋君を煩はしめんやとて、遂に宋江にしたがつて金沙灘を離れ、直ちに東を望んで急ぎける程に、不日に東京の界に至り、城の萬壽門の外に旅宿を求め歇みける。此時正月十一日なり。宋江暗に柴進と商議して云く、明日白晝に城中に入らんことは不可ならん、來る十四日の晩人の鬧熱なるに紛れ、城内に忍び入らん。柴進が云く、某明日は燕青を引て城中に入り、豫め動靜を窺つて來るべし。宋江聞て其言に同じければ、翌日柴進錦の衣を著し、花やかに粧ひ、燕青にも粧束を改しめ、兩人遂に旅宿を出て城門を望馳來り、先城外の村邑を見るに、門々戸々若干の燈籠を架設け、元宵を慶する用意を調へければ、城中の催し嘸と料れけり。柴進燕青已に城内に入て御街を盤桓し、直に轉つて朝廷の東花門の外に至りけるに、此處就中鬧熱ひ、新に設けたる茶坊酒肆其數を知らず、遊行をなす士農工商は紛々然として路に聯れり。茶坊の瓷酒店の閣に座をもとめ、息を歇る人は入替り〳〵引も取らず夥し。柴進も燕青と共に酒店の樓に上り、欄杆に凭れ、樓下を望み見るに、正しく班直の官と覺え、頭に翠葉花を簪したる者多かりしかば、柴進暗に燕青に低言て、此の如し〳〵と云けるに、

六編　巻之五十九

○柴進花を簪して禁院に入る

宋江此度上京につき、同往の人々も相定りし處に、黒旋風李逵進み出て云けるは、東京の花燈某も是を觀まく欲す。宋江が云く、いかんぞ汝を能伴はん、汝は只諸頭領と共に山陣に留つて堅く守り在べしと、再三これを命じけれども、李逵頻りに行んことを願ひ、決して留ん氣色なかりしかば、宋江止ことを得ずして云く、汝彌行んとならば、必ず事を惹出すべからず、燕青も又李逵に伴つて同往すべしと命じ、此日先史進、穆弘を旅人の形に出立せ、山陣を下らせ、其次に魯智深、武行者を行脚の僧に出立せ、山陣を下らせ、又朱同、劉唐を商人の形に出立せ、山陣を下らせ、各身邊には軍器を持しむ。扨宋江、柴進は官人の形に出立ち、又戴宗を承局の形に出立せ、是を伴ふ。萬一事出來せば、山陣に注進させん爲なり。李逵、燕青は家人の形にて、各行李を擔げ、宋江にしたがひ山陣を下る。諸頭領は皆金沙灘まで送つて宋江に別る。吳用再三李逵に命じ、汝常に山を下る毎に禍を惹出す、此度は宋君に伴ふことな

云宋は其後にて、姓は趙なり。依て劉宋趙宋と稱して別つ。是等も仔細に其時代覺ふべし。

△火眼狻猊 火のごとく尖き狻猊なり。△矮脚虎は猛虎の勢あれ共、生質丈低きなり。△喪門神は邪神なり。△扈三娘孫二娘等娘にて娘にあらず。△混世魔王とは此世をなきものにせんとする怖しき魔王なり。△跳澗虎は挿翅虎の類にて、澗に遇ても忽ち跳越る義なり。△雲裡金剛は金剛力士が雲の裡に立たるに象る。△中箭虎は箭に中たる虎が狂ふさまなり。△金眼彪とは眼の光金色なる 豹 なり。都て其猛きを表し虎豹の字を呼もの多し。△金錢豹子は湯隆打鐵匠をなし、惣身火傷の瘢多きを、豹の皮の紋がらに譬て云なり。△催命判官は命を縮むる官人の義。△菜園子はもと圃園の守りを勤し義なり。△母大蟲は婦人ゆゑ雌虎を名とす、母夜叉も婦人の夜叉と云義、夜叉も鬼なり。△活閃婆は其跳走 閃 婆見留がたく疾きに取る。△活閻羅は活たる閻魔のごときを云ふ。都て活の字は動靜自在の義に取る。△沒面目は立向へば直に敵を討て面目を沒するなり。沒は無の字と同義、沒羽箭と云も張清石を飛し人を打こと神妙を得たれば、弓箭の術は無に同じと云義なり。婦女の爲に意義の大略をこゝに述ぶ。

宣和二年とあるを日本に當れば、七十四代の帝鳥羽院の保安元庚子年にて、平の清盛生れて三歳になる時なり。又宋の世と云に二つあり。南北朝と云時の宋は 姓 劉なり。水滸傳に

庵が字彙を珍重し、正字通康煕字典など未だ舶來なしと雖も、岡島氏の附國字にかゝる誤りは甚だ不審のことなり。△撲天雕は天を撲雕にて、撲をぼくと讀べからず。△拚命三郎は捨命ともあり。拚も捨もすつるにて同義なり。義に臨み命を拚るも厭ぬ義にとれり。△井木犴は狐の類なり、井木行と有は誤れり。△轟天雷の轟にさまぐ〵音を替てあれども、音クワウなり。△八臂を入臂と書しは誤なり。△玉臂匠を匹に書は非なり。△星の名地孤星を狐の字に書は誤りなり。△鬼臉兒杜興の臉はおとがひ音センなり。鬼臉兒とあるは誤りなり。△活閃婆を一に霍閃婆と書しもあり。△鼓上蚤を蚤に作るは同字なり。△病尉遲病關索病大蟲などの病は、びやうと呉音に訓も妨なし。尉遲は古人の名に取る、尉遲と讀べからず、大蟲は虎の一名なり、病の字は謙退して加へたる字なり。△霹靂火は雷の火のごとく烈しきに取る。△黑旋風とは李逵が色黑く、旋風のごとく働くに取る。△沒遮攔とは其勇猛るを遮攔人沒との義、小遮攔は其弟ゆゑ小の字を呼たるなり。△挿翅虎は翅を挿たる虎彌が上に猛きなり。△浪裡白跳は張順が色白にて水練に達し浪に躍るに取る。△雙尾蝎は兒を兩頭蛇と云ゆゑ、雙尾蝎と云しなり。△醜郡馬鐵面孔目ともに官務職事の名に取る。△摩雲金翅は雲を摩は高く飛こと、金翅鳥は佛教に出る名なり。

我原來山東に長生して、未だ京の光景を見ず、我此度數輩の英雄とともに、私に東京に上つて花燈を見んに、誰人か我に從ひ來らんや。吳用諫めて云く、今東京には眼明かに手快の下官共甚だ多し、若誤つて彼等に見咎られ給ひなば、由々しき大事出來すべし。宋江が云く、晝の内は旅宿に在て形を藏し、夜に入て城中に進み、暗に徘徊して燈籠を見んに、誰か我を識者あらんや、多く疑ふことなかれとて、嘗て諸人の諫言を容ず、已に上京のことを議定して、相伴ふ人々を手分して進發す。先宋江は柴進と同往し、史進は穆弘と同往し、魯智深は武行者と旅の同行となり、朱同は劉唐と同往し、其餘の頭領は皆山陣に留つて相守るべしと定めける。東京元宵の花燈一覽の始末、次卷に詳なり。

論者いはく、梁山泊の豪傑、高名の人々新參多くして座席の高下も定がたく、大率人意な以て定め、宋江吳用等多く道士を湊へ、天意に託て一時に座列の論なからしむ。怪しき火を見せたるは、公孫勝が術なるべく、何玄通が天書の字を暗記訓皆吳用が謀に出たるなるべし。早く埒明諸豪傑一偏信じて異論なく座を守るは、大に作者の働きなり。

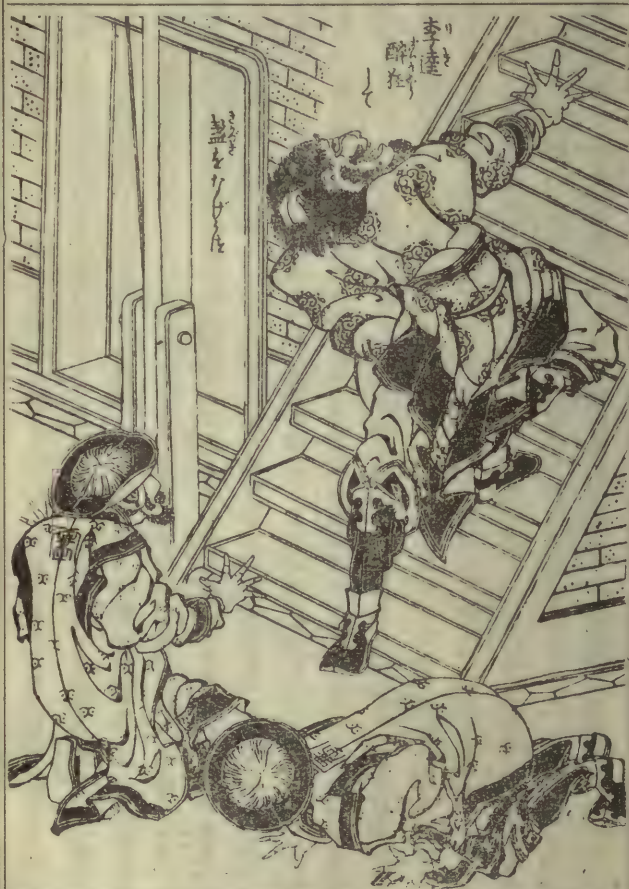
私云、此卷豪傑の姓名并に諢名の文字、世に呼處甚だ誤り多し。今一々是を改正す。先板通俗忠義水滸傳下編三十二卷に出る處、附國字尤誤れり。岡島氏の比は字書乏しく梅勿

九花燈ノ圖
上下
巻中三葉

は諸人の諫に從つて先罪を免す、若重て無禮をなさば、必ず法度に依て罪を行ふべし。李逵恭しく拜をなし、唯々として退きけり。此より梁山泊無事にして、はや年の暮も遠からず、紛々として、一天に雪降り、世界都て銀を鋪たる如くなり。誠に是王猷が訪戴の時、袁安が高臥の日、斯ぞあらめと思はれける。已に四五日を過て雪漸晴ける處に、山下より注進して云く、萊州の者共若干の燈籠を東京に送らんとして、麓を過りしゆゑ、則ちこれを捉へて、關外迄引せぬと報じける。宋江是を聞て、其者共に對面せんと云ければ、遂に是を引て堂前に至りぬ。宋江此輩を見るに、兩人の下官と八九人の脚夫なり。一人の下官先宋江に告て云く、某等は萊州の命を受て、花燈を東京に獻ずる者共なり、願くは一命を免し給へ。宋江が云く、我もと燈籠を盡く奪ひ汝等が一命ばかりを助け、麓に追下さんと思ひけれども、汝等都て罪を蒙らんも不便なれば、只一つの燈籠を留めて、其餘は汝に還さんまゝ、早々東京に送るべしとて、白銀二十兩を與へて、一つの九花燈を留めければ、兩人の下官頓首再拜して恩を謝し、則脚夫等を引て再び山陣を下りけり。宋江は彼九花燈を晁天王が靈前に掛て、是を見るに、其細工の巧なること兎角言語に盡しがたし。宋江此時諸將に對して言けるは、東京の舊例として每年種々の花燈をかけ、元宵を慶し、貴賤等く樂を同じうして、美盡し善盡すと聞けれども、

きに歸し、國家の臣となり、忠功を勵んと欲するのみ、毛頭も別心なし。魯智深が云く、今京には奸臣朝に滿て天子を昧し、譬ば我此衣の黑がごとし、豈よくこれを洗ひ淸んや、御赦免のこと畢竟益あるまじきに、宋君しばらく先望を斷て、御赦免の願を忘れ給へ。宋江がいはく、當世の天子は至聖至明にましませ共、只奸臣等のゆゑに蔽れ給ひて、暫時昧せ給ふなり、然れども他日雲開けて日を見給ふ時節至らば、必ず我輩が忠義有ことを曉給ひて、御赦免の詔書降るべし、其節我諸英雄と共に、心を同じうして國に報い、力をつくして功を施し、遍く天下の生靈を安ぜんと欲す、諸豪傑誤つて我を恠み給ふことなかれ。諸將此言を聞て、其仁德を感じ、衆々宋江を拜謝し、其夜は退散しけり。翌朝諸豪傑來つて李逵を伺ひけるに、李逵は猶酒の醉醒ずして、甘く眠て在しかば、諸頭領急ぎ呼起して云く、足下昨日酒狂に乘じ宋君を欺て、無禮をなし候ゆゑ、宋君今日足下を罪し給はんとなり。李逵、我夢にだも宋君を欺ず、宋君我を罪し給はんとならば、我快よく坐罪一死をなし申さん、半點も宋君を恨ることなし。こゝに於て諸人李逵を引て堂上に至りしかば、李逵謹んで宋江にまみえ、再三頓首して罪を請ふ。宋江責て云く、我手下に許多の人有といへども、各令を守つて、法度を亂さず、獨汝のみ動不動醉狂して無禮を行ふ、我若英雄の意思を顧みずんば、汝を殺すべけれども、此度

李逵酔狂して

盞をなげうつ

思ひぬるに、何の赦免か受んとて、覺えず盃を取て座上に投ければ、宋江是を見て、忽ち大に怒り、汝なんぞかくの如き無禮をなすや、軍法に任せて頭を刎べしとて、自ら軍卒を呼で、これに命じける處に、諸頭領大に驚き、個々罪を謝して云く、李逵常に醉狂をなすことは、宋君素より知給ふ處なるに、願くはこれを免し給へ。宋江が云く、此度の無禮は免しがたしといへども、諸英雄斯諫め給ふ上は、暫く死罪を延して牢中に遣すべしとて、軍士に命じ、李逵を引せけるに、軍卒等は李逵に恐れ、進み兼て見えしかば、李逵が云く、汝軍卒等恐るゝことなかれ、宋君縦我を寸々に切み給ふ共、我毛頭も寃なし、若宋君にあらずんば、誰か能我を殺すことを得んやとて、竟に引れて堂外に出にけり。宋江此言を聞て、心中に憐み、昔日江州にて働きし事を思ひ出し、覺えず兩眼に涙を含ければ、呉用諫て云く、今日の佳會、諸人樂を催し、願くは宋君李逵が罪を許し給へ、彼一時の酒興に乘じて無禮をなしけれ共、原毫髮も惡意なし、必ず尊慮に掛給ふこと勿れ。宋江が云く、我昔日江州にて、酒後に誤つて反詩を吟じたる時、多く李逵が力を得て一命を脱れぬ、我今怒に逼つて舊情を忘れ、已に彼を害せんとしたること、返す〲も後悔なれ、是ゆゑに潸然として流涕す。武松は又能事を曉したる人なるに、何ゆゑに我言に背いて、諸人の心を冷さしむるや、我が存念は朝廷の御赦免を蒙りて、邪を去り、正

某は只百八人と共に忠義を心に存して、勳功を國に著し、天に替つて道を行ひ、境を保て民を安んじ、世々百八人相聚て盟を結ばんことを欲す、伏して願くは上天是を鑒み給へと、謹んで誓を說ければ、盧俊義を初として、諸頭領皆天を拜し、不仁不義有まじきことを同音に誓ひけり。宋江是を見て大に悅び、此日は大宴を設て、衆皆誓の酒を酌にける。扨此百八人の頭領ども常に人馬を引て山陣を打下り、專ら官人等が不義の財を奪ひ取て、山陣の用に備へ、又或時は二三百里の間に徘徊して、不仁の家を亡し、家財盡く掠め取て山陣に運せ、猛威を遠近に振て、傍若無人の體なりしかども、官府も是を治ること能ず、諸州諸郡恐れざるはなかりけり。宋江は久しく軍を休て、人馬の氣力を養ひ居ける處に、はや夏も過て秋來り、重陽の節已に至りしかば、宋江忠義堂に於て諸將と共に菊花を賞して、觴を飛せ、酒興漸濃なりける處に、宋江忽ち嘆息していはく、我今諸英雄と會して樂を催すといへども、未だ朝廷の御赦免を蒙らざるにより、寸志猶安んぜず、知らずいづれの日か帝都を踏んやと、未だ云も罷ざるに、行者武松高聲に呼つていはく、宋公何ゆゑ動もすれば御赦免のことを云給ふや、もし再三是を歎じ給はゞ、却て諸頭領離心の端を開くべし。黑旋風李逵大音聲に叱ていはく、再三再四朝廷を恐れ給ふや、我東京の位を奪て宋君に與へ、賊官を蹴殺し平生の恨を雪んとこそ

掌管專一排設筵宴一員　鐵扇子宋清
掌管監造供應一切酒醋一員　笑面虎朱富
掌管專一築梁山泊一應城垣一員　九尾龜陶宋保
掌管專一把捧帥字旗一員　險道神郁保四

宣和二年孟夏四月吉旦に、宋公明忠義堂に於て、諸頭領の職事を定め、豐に酒宴を具へ、終日飲酌をなし、漸黄昏に至て宴終りしかば、諸頭領各兵符印信を領し、役所々々に歸りけり。宋江又吉日良辰を擇で、諸頭領を忠義堂に招き、則語て云けるは、今日既に天罡星地煞星相聚ること、原來宿緣ありといへども、再び天に對し誓を盟り、各異心起さずして、死生相托み吉凶相救ひ、禍福相扶け一同に國を保て、民を安んぜば可なるべし。諸頭領大に悅び、宋君の高論誠に天理に合ふべき事なるに、誰かあへて異議あらんやとて、各香を拈て堂上に跪きしかば、宋江先天を拜して云く、某鄙猥の小吏にして、不才不能たりといへども、天地の蓋載を荷ひ、日月の照臨を蒙り、豪傑を梁山に聚て、英雄を水泊に結び、總て百八人、上は天數に符し、下は人心に合す、自今已後若不仁不義の心を生ずる者あらば、天神地祇これを誅し、給ひて、百八人の天數の內を除き、萬々世を經共、罪を免して、人身を得せしめ給ふこと勿れ、

神機軍師朱武

梁山泊掌管監造諸事頭領一十六員

掌管行文走檄調兵遣將　一員　聖手書生蕭讓

掌管考算錢糧支出納入　一員　神算子蔣敬

掌管定功賞罰軍正司　一員　鐵面孔目裴宣

掌管專工監造大小戰船　一員　玉旛竿孟康

掌管專造一應兵符印信　一員　玉臂匠金大堅

掌管專造一應旌旗袍襖　一員　通臂猿侯健

掌管專攻醫獸一應馬匹　一員　紫髯伯皇甫端

掌管專治諸疾內外科醫士　一員　神醫安道全

掌管監督打造一應軍器鐵甲　一員　金錢豹子湯隆

掌管專造一應大小號砲　一員　轟天雷凌振

掌管專一起造修緝房舍　一員　青眼虎李雲

掌管專一屠宰牛馬猪羊牲口　一員　操刀鬼曹正

梁山泊總探聲息頭領一員

神行太保戴宗

梁山泊軍中走報機密步軍頭領四員

鐵叫子樂和　鼓上蚤時遷　金毛犬段景住

白日鼠白勝

守護中軍馬軍驍將二員

小溫侯呂方　賽仁貴郭盛

同斷步軍驍將二員

毛頭星孔明　獨火星孔亮

梁山泊專掌行刑劊子二員

鐵臂膊蔡福　一枝花蔡慶

專掌三軍內探事馬軍頭領二員

矮脚虎王英　一丈青扈三娘

梁山泊一同參贊軍務頭領一員

飛天大聖李袞　病大蟲薛永　金眼彪施恩
小遮攔穆春　打虎將李忠　白面郎君鄭天壽
雲裡金剛宋萬　模著天杜遷　出林龍鄒淵
獨角龍鄒潤　花頂虎龔旺　中箭虎丁得孫
沒面目焦挺　石將軍石勇

梁山泊四寨水軍頭領八員

混江龍李俊　船火兒張橫　浪裡白跳張順
立地太歲阮小二　短命二郎阮小五　活閻羅阮小七
出洞蛟童威　翻江蜃童猛

梁山泊四店打ニ聽聲息一邀ニ接・來賓一頭領八員

東山酒店　小尉遲孫新　母大蟲顧大嫂
西山酒店　菜園子張青　母夜叉孫二娘
南山酒店　旱地忽律朱貴　鬼臉兒杜興
北山酒店　催命判官李立　活閃婆王定六

馬軍小彪將兼遠探出哨頭領一十六員

鎭三山黄信　病尉遲孫立　醜郡馬宣贊
井木犴郝思文　百勝將韓滔　天目將彭玘
聖水將單廷珪　神火將魏定國　摩雲金翅歐鵬
火眼狻猊鄧飛　錦孟虎燕順　鐵笛仙馬麟
跳澗虎陳達　白花蛇楊春　錦豹子楊林
小覇王周通

歩軍頭領一十員

花和尚魯智深　行者武松　赤髮鬼劉唐
小李廣花榮　金鎗手徐寧　靑面獸楊志
病關索楊雄　拚命三郎石秀　兩頭蛇解珍
雙尾蝎解寶

歩軍將校一十七員

混世魔王樊瑞　喪門神鮑旭　八臂那吒項充

計　開

梁山泊總兵都頭二員

呼保義宋江　玉麒麟盧俊義

梁山泊掌管機密軍師二員

智多星吳用　入雲龍公孫勝

梁山泊掌管錢糧頭領二員

小旋風柴進　撲天雕李應

馬軍五虎將五員

大刀關勝　豹子頭林冲　霹靂火秦明

雙鞭將呼延灼　雙鎗將董平

馬軍八驃騎兼先鋒使八員

插翅虎雷橫　黑旋風李逵　浪子燕青

急先鋒索超　沒羽箭張清　美髯公朱同

九紋龍史進　沒遮攔穆弘

は朱同、雷横此を守る。東山の一關は史進、劉唐これを守る。西山の一關は楊雄、石秀これを守る。北山の一關は穆春、李逵是を守り、此六關の外に八陣を立置き、四つは陸陣四つは水陣なり。正南の陸陣は秦明、索超、歐鵬、鄧飛これを守り、正東の陸陣は、關勝、徐寧、宣贊、郝思文此を守り、正北の陸陣は呼延灼、楊志、韓滔、彭玘これを守り、東南の水陣は李俊、阮小二これを守り、西南の水陣は張横、張順これを守り、東北の水陣は阮小五、童威これを守り、西北の水陣は阮小七、童猛是を守る。其餘の頭領等も各其職を守れり。此度新に若干の旗を作らせて、山陣の四方に建竝ぶ。中央の大旗には替天行道と云四字を大文字に書記し、又二つの紅旗を忠義堂の左右に建て、一つには山東呼保義と書き、一つには河北玉麒麟と書たり。其外飛龍飛虎の旗、飛熊飛豹の旗、青龍白虎の旗、朱雀玄武の旗、四斗五方の旗、三才九曜の旗、二十八宿の旗、六十四卦の旗、週天九宮八卦の旗、一百二十四面鎭天の旗、陣前陣後關前關後、透間もなく建列ね、其いくばくと云數を知らず。宋江吉日を擇て牛を殺し馬を宰り、天地神明に獻じ恩を謝し、諸頭領并に軍卒に至るまで、此日は酒宴を開て樂みを催しけり。宋江又號令を傳へて云く、大小の諸頭領各よろしく其職を守つて誤ことなかれ。若義氣を傷ふ者あらば、軍法に依て罰を行ふべしとぞ命じけり。扨諸頭領の職事左に記す。

天辱なく奇瑞を現じ給ひて、列座の次第天罡地煞を分ちて明かに定め給ふに、誰かあへて相違く者あらんや、向後 彌 天言に隨つて 各 其位を守るべし。此時宋江黄金一百兩を以て何玄通に謝し、其餘の道士どもにも多く金銀を送つて慇懃に謝しければ、皆宋江等が由來を感じて、翌日山陣をぞ下りける。此日又宋公明は吳用朱武等と議定して、堂上に一面の額を掛大文字にて忠義堂と云三字を書き、斷金亭にも又大額を掲け、前面に三つの關を建て、忠義堂の背後にも、一つの雁臺を建て、正面の廳 上には晁天王の靈牌を供養し、東西に又二つの書房を建たりけり。

○梁山泊の英雄座次を排す

扨も梁山泊東の書房には、宋江、吳用、呂方、郭盛、此に住す。西の書房には盧俊義、公孫勝、孔明、孔亮、此に住す。階 の下の左一代の房中には、朱武、黃信、孫立、蕭讓、裴宣此に住す。同き右一代の房中には、戴宗、燕青、張淸、安道全、皇甫端此に住す。忠義堂の左の方錢糧倉は柴進、李應、蔣敬、凌振是を 掌 り、同く右の錢糧倉は花榮、樊瑞、項充、李袞是を 掌 る。山前の南路第一關は解珍、解寶是を守る。同き第二關は魯智、深武行者是を守る。同じく第三關

地全星　鬼臉兒杜興　　地短星　出林龍鄒淵
地角星　獨角龍鄒潤　　地囚星　旱地忽律朱貴
地藏星　笑面虎朱富　　地平星　鐵臂膊蔡福
地損星　一枝花蔡慶　　地奴星　催命判官李立
地察星　青眼虎李雲　　地惡星　沒面目焦挺
地醜星　石將軍石勇　　地數星　小尉遲孫新
地陰星　母大蟲顧大嫂　　地形星　菜園子張青
地壯星　母夜叉孫二娘　　地劣星　活閃婆王定六（活又霍に作る）
地健星　險道神郁保四　　地耗星　白日鼠白勝
地賊星　鼓上蚤時遷　　地狗星　金毛犬段景住

何道士一々天書を辨じて讀ければ、蕭讓これを寫し終り宋江に呈す。宋江等諸頭領各是を見て、奇異の思ひをなしけるに、宋江諸將に對して云く、我輩都て天星に應じ、今日上天奇瑞を現し給ひて、百八人大義に聚り、座位の次第天已に是を定め給ひぬる上は、各天書の列に依て其位を守り給へ、必ず爭て天言に背き給ふことなかれ。諸英雄是を聞て、一同に答けるは、

地然星　混世魔王樊瑞
地狂星　獨火星孔亮
地走星　飛天大聖李袞
地明星　鐵笛仙馬麟
地退星　翻江蜃童猛
地遂星　通臂猿侯健
地隱星　白花蛇楊春
地理星　九尾龜陶宗旺
地樂星　鐵叫子樂和
地速星　中箭虎丁得孫
地稽星　操刀鬼曹正
地妖星　模著天杜遷
地伏星　金眼彪施恩
地空星　小霸王周通

地猖星　毛頭星孔明
地飛星　八臂那吒項充
地巧星　玉臂匠金大堅
地進星　出洞蛟童威
地滿星　玉旛竿孟康
地周星　跳澗虎陳達
地異星　白面郎君鄭天壽
地俊星　鐵扇子宋清
地捷星　花項虎龔旺
地鎭星　小遮攔穆春
地魔星　雲裡金剛宋萬
地幽星　病大蟲薛永
地僻星　打虎將李忠
地孤星　金錢豹子湯隆

天哭星　雙尾蝎解寶　　天巧星　浪子燕青

石碑の裏に書して云く、梁山泊地煞星七十二員、

地魁星　神機軍師朱武　　地煞星　鎭三山黄信
地勇星　病尉遲孫立　　地傑星　醜郡馬宣贊
地英星　天目將彭玘　　地奇星　聖水將單廷珪
地雄星　井木犴郝思文　　地威星　百勝將韓滔
地猛星　神火將魏定國　　地文星　聖手書生蕭讓
地正星　鐵面孔目裴宣　　地闊星　摩雲金翅歐鵬
地闔星　火眼狻猊鄧飛　　地強星　錦毛虎燕順
地闇星　錦豹子楊林　　地軸星　轟天雷凌振
地會星　神算子蔣敬　　地佐星　小温侯呂方
地祐星　賽仁貴郭盛　　地靈星　神醫安道全
地獸星　紫髯伯皇甫端　　地微星　矮脚虎王英
地慧星　一丈青扈三娘　　地暴星　喪門神鮑旭

天猛星　霹靂火秦明
天英星　小李廣花榮
天富星　撲天鵰李應
天孤星　花和尙魯智深
天立星　雙鎗將董平
天暗星　青面獸楊志
天空星　急先鋒索超
天異星　赤髮鬼劉唐
天微星　九紋龍史進
天退星　挿翅虎雷横
天劍星　立地太歳阮小二
天罪星　短命二郎阮小五
天敗星　活閻羅阮小七
天慧星　拚命三郎石秀

天威星　雙鞭將呼延灼
天貴星　小旋風柴進
天滿星　美髯公朱同
天傷星　行者武松
天捷星　沒羽箭張淸
天祐星　金鎗手徐寧
天速星　神行太保戴宗
天殺星　黑旋風李逵
天究星　沒遮攔穆弘
天壽星　混江龍李俊
天竟星　船火兒張横
天損星　浪裡白跳張順
天牢星　病關索楊雄
天暴星　兩頭蛇解珍

我常に是を熟讀して能天書を曉す、其碑を我に見せ給はゞ、早速に辨じ候はん。宋江聞て大に悦び、即碑を取て、何玄通に見せしむ。何道士良久しくこれを見て、大に驚き、此篆書都て將軍等の大名を書し者なり、左の一行は替天行道と云四つの文字、右の一行は忠義雙全と云四つの文字、上の一行は皆星辰南北の二斗等あり、下の一行は都て諸大將の尊號あり、若妨なくんば我一々是を讀べし。宋江悦び斜ならずしていはく、先生是を讀給ひ、我輩が迷を解しめ給はゞ、深く大德を感ずべし、恐らくは上天我輩を責給ふの詞も有べきか、先生是を藏し給はずして、一字も剩さず盡く敎給へ、若一言半句たりとも、是を藏し給ひなば、却て某等が不幸たらん迚、則蕭讓に命じて何道士が讀所を寫さしむ。何道士が云く、碑の表に三十六行の天書あり、是皆天罡星なり、同き裏に七十二行の天書あり、是皆地煞星なり、其下に諸將軍の姓名あり、我これを知らしめ申さん、誤らず寫し給へとて、一々次第に讀ければ、蕭讓是を寫して云く、梁山泊天罡星三十六員、

天魁星　呼保義宋江　　天罡星　玉麒麟盧俊義
天機星　智多星呉用　　天閑星　入雲龍公孫勝
天勇星　大刀關勝　　天雄星　豹子頭林冲

二十八宿十二宮辰を設け、堂外には四天王の像を列ね、彼是嚴に餝て慢る事あるべからずとて、則日諸將と倶に萬事全く用意を催し、遂に四十八の道士を請待して、山陣に至りければ、公孫勝を加へ、ともに四十九人の道士、悉く忠義堂の上に在て醮事を行ふ。此日萬里の空晴天色殊に朗がなり。扨宋江盧俊義を首として、吳用幷に諸頭領を次とし、個々香を拈て拜をなす。公孫勝は諸道士の上に立ち、已に醮事を修し、毎日怠らず。早第七日に至りしかば、宋江彌天帝に奏聞し、以來の安全を祈らんとて、事を公孫勝に命じけるに、公孫勝命を奉て虛皇臺の第一重に坐しければ、諸の道士は第二重に坐し、宋江は諸將を引て第三重に坐し、軍卒等は皆臺下に坐し、諸人悉く上天を拜し、懇に祈りけり。此夜三更の時分に、空中大に響て、西北の方に光りあり。諸人怪でこれを見るに、忽ち一塊の火現れ出て、暫く虛空を飛けるが、遂に虛皇臺の上に落て、臺の四方を繞り、又地に落て正南の方に留りぬ。宋江早速人を馳て其火を取しめけるに、火と見えしは則ち一つの石碑なり。碑の面に數行の天書あり。宋江是を見て、香を炷花を供へ、忠義堂の内に運せ、諸の道士幷に諸の頭領を請て、同く石碑を見るに、碑の面の文字、都て篆書の類にて人皆これを識ず。時に何玄通と云道士進み出て云けるは、我家には先祖より傳て、一册の祕書を持けるが、其内の文字都て篆字等の天書なり、

公孫勝天を祭りて百八人の座位を定む

凡人馬を引て向ふ所破らずと云ことなくして、今日已に百八人の豪傑大義に聚るは、偏へに上天の引合せにして、人力のなす所にあらず、諸豪傑の内、或は擒となつて縲絏に陷ち、或は疵を蒙りて病に臥し、種々の災難多かりしかども、終には脱れて、今日かくのごとく無事を保つは、是又天神地祇の加護なり、今已に百八人の心を同じうし、力を合せて山陣を守ること、古往今來誠に稀有の交なり、此間軍馬の到所多く生靈を殺害し、我兵も戰場に亡る者多し、然れ共未だ曾て此罪を讓謝せず、因て我今羅天大醮を修し、天地神明眷佑の恩を報い、一つは則諸頭領都て、身心安樂ならんことを祈り、二つは則朝廷の御赦免を蒙りて、忠功を盡さん事を祈り、三つは則晁天王早く仙界に生じ給ひて、生々世々再び相見えんことを祈り、四つは則火に燒水に溺れ、横死を遂たる科なき軍民等が、倶に善道を得んことを祈り、聊我輩が罪過を謝せんと欲す、未だ知らず、諸英雄の所存はいかん。諸將これを聞て云けるは、此事尤其理に當れり、誰か敢て同心せざらんや。吳用がいはく、先公孫勝を請て醮事を主せ、其後又人を四方に馳淸德の道士を請待し、諸事宜しく商議して、半點も差あらしめず、則四月十五日を始として、七日七夜醮事を行せ、多く錢財を施し、諸式を調へ、忠義堂の前には大旗を立て、堂上には三重の高臺を設け、堂の中央には七寶三淸の聖像を供養し、兩邊には

民にして、諱名を紫髯伯と申す、若此人を梁山泊に誘引し給はゞ、後日其用有べし、此節これを招き給はんや。宋江聞て甚だ悦び、我いまだ此の如き人を得ずして、平生これを患ひける、皇甫端若肯て山陣に上らば、莫大の幸ならん。張清此言を聞て、早速皇甫端を招き寄せ、宋江幷に諸頭領にまみえしむ。宋江此皇甫馬醫を見るに、人物凡からず、英雄の風ありければ、宋江益感悦し、山陣に伴ん事を議りけるに、皇甫端樂しんで領承しけるゆゑ、諸頭領都て歡喜し、其夜は東昌府に一宿し、又翌日宋江三軍を引て東昌府を打出で、一度に咄と凱歌を唱はせて、遂に梁山泊へ歸りけり。されば此度東平東昌兩城を破つて、若干の兵粮を得たれば、一同大に悦び、山陣到著の上忠義堂に相集り、龔旺丁得孫を請て宜しく撫諭しければ、兩人の者深く感激し、宋君若某等を饒し一卒共なし給はゞ、敢て心血を竭し、救命の恩を報ずべし。宋江是を聞て、大に悦びけり。

○忠義堂の石碣に天文を受く

去程に宋公明大小の頭領を數ふるに、總て一百八人と記しける。時に宋江諸將に對して云く、昔日江州を鬧しめ、當陣にのぼり晁天王逝れ給ひて後、諸英雄再三我を立て當陣の主たらしめ、

劉唐を救ひ出し、其後東昌府の庫を開て、金銀米錢悉く奪取り、これを二つに分ち、一つは梁山泊に運せ、軍用の備となし、一つは國人に與へけるが、此處の太守は平常潔白にして能民を憐み、不義の富を求る人にあらずとて、宋江是を殺さしめず、饒し置ぬ。諸大將皆東昌府に聚りし處に、水軍の大將等張淸を引來つて、宋江に獻ず。諸頭領多く張淸に打惱れしかば、各齒切して殺害せんと議りけるに、宋江再三諫て親自張淸が綁の索を解き、慇懃に禮を行うて云けるは、我誤て將軍の虎威を犯しぬ、望らくは罪を免し給へと、未だ云も終らざるに、魯智深頭を包み禪杖を提げ、恰も猛虎のごとく吼て堂前に跳來り、張淸を望んで只一打に、糊のごとく打潰さんと揮擧ければ、宋江大に驚慄てこれを攔り、只管詞を盡して、魯智深を宥め、遂に張淸を助けける。張淸は宋江が仁德を感じ、忽ち地上に拜伏し降參を求む。宋江酒杯を取て天地を奠り、箭を折て誓を立て、向後我輩若張將軍を恨ことあらば、皇天の罰を蒙り、刀劍の下に死すべしと、高聲に呼りければ、諸豪傑も皆一同に首を低れ、異義さらにあらざりけり。是に於て宋江大に悅び、はや歸陣すべしと議しける處に、張淸進み出て云く、此東昌府に一人の馬醫あり、復姓は皇甫、名は端と號す、此人能馬を相し、又善馬を醫す、或は藥を下し、或は針を用ひ、未だ曾て驗あらずと云ことなし、眞に伯樂が才と等し、此人もと幽州の

水軍の頭領等
張清を水中に
生捉

し、はや近々と至りし所に、張清馬上より彼石を飛せければ、魯智深が頭に打中て、血は水を衝がごとし。萬夫不當の勇ある花和尚も、此石に當て眼を眩まし、敵の大軍に圍れ已に討れんと見えける處に、武行者兩刀を揮て多勢の中に砍て入り、這々魯智深を救うて許多の車を撇て、慌忙き逃走る。張清遂に車を奪取てこれを見るに、果して皆兵粮なりしかば、心中甚だ悅び、頓て三軍に車を推せ城中へ回り、太守にまみえて斯と告ければ、太守悅ぶこと限りなし。張清が云く、某又水中の粮船を掠取て來るべし、太守相公再び好音を待給へとて、重ねて人馬を領し城中を打出で、直に河の濱に至りし處に、忽ち陰雨空に布て黑霧天に遮り、人々面を對すといへ共、更に見え分ず。此則ち公孫勝道術を行つて、かくのごとく天地を暗ましけるなり。張清此天氣を見て大に周章て、再び引退んとせしか共、早道見えずして、四方に喊の聲齊しく起り、林冲先人馬を引て跑來り、張清を馬人共に水中に追落しければ、李俊、張橫、張順、三阮、兩童、八人の水軍の頭領鋒を揃て待受け、三阮兄弟當先に進で、遂に張清を活捕り、頓て宋江が本陣に送りける。宋江吳用勝に乘じ、三軍を進め直に城下を攻寄て、城を重々に取圍み、喊の聲は乾坤も崩るゝ許なり。太守は此聲を聞て膽を消し、急に副手の城戸を開て、迯出んとしけれ共、軍兵充滿て更に一筋の路もなかりけり。宋江が人馬はや城内に亂れ入て、先

彼等が動靜を伺しめ、其後計を施すべしとて、一人の細作を遣しけり。細作早速立回り報けるは、陣の背後の西北の上に、百餘輛の車に兵粮を載せ、叉河の内にも五百餘艘の船に兵粮を積み、水陸を竝び進て發向す、其虚實は分明に曉しがたし。太守これを聞て云く、恐らくは計あらん、再び人を遣し其實否を探聽せ、若果して兵粮に紛なくんば、別に良計を議すべしとて、また一人を遣しけり。翌日此細作立回り告けるは、車の上なるは都て兵粮に疑ひなし、船の上なるも是叉兵粮なり、尤これを藏さんが爲、幕を以て覆ひけれども、米袋露れ出候ひぬ。張淸が云く、已にかくの如くば、我今宵打て出で、先岸の上の車を掠め、其後叉水中の船を取べし、太守相公は堅固に城を守り給へ、然ば一鼓にして利を得んこと何の疑かあらん。太守此計を聞て、神妙なりと同じ、卽時に號令を傳へ兵を催しぬ。此夜張淸一千餘騎を引て城外に馳出、漸十里ばかり過ける處に、前面より一簇の車を推來る、車の上に一行の大文字あり。張淸月色に透して文字を見るに、水滸寨忠義粮と分明に書附ける。此時花和尙魯智深は、六十二斤の鐵禪杖を横たへ、當先に馳來る。張淸是を見て想道く、彼和尙が頭に一石を施し、一興を催さんものと、石を撚て待懸たり。魯智深は已に敵有ことを知しかども、故意知らぬ體にもてな

六編　巻之五十八

○宋公明糧を棄て壯士を擒る

梁山泊の陣主呼保義宋江は、人馬を收め陣屋に回り、龔旺、丁得孫兩人の生捉を先梁山泊に送り、諸將に對して云けるは、我聞五代の時大梁の王彦章は、日影を移ざる間に唐の大將三十六人を打しとかや、我諸將彦章が下に在ずといへ共、今日の軍張淸は片時の間に我大將十五人を打けるは、是も亦一人の猛將なり。諸豪傑是を聞て、各默然として言ず。宋江重て云く、我熟張淸を見るに、龔旺丁得孫を羽翼として勢を振ひけるが、今已に此羽翼を活捉れては彼が勢必ず衰ふべし、若良計あらば諸將心置なく、速に示されよ。時に軍師吳用進み出て云く、宋君須く心を安んじ給へ、我今日彼が動靜を委細に窺て、計を已に施しぬ、然れ共疵を蒙し大將は、皆山陣に回して養生なさしめ、其代として魯智深、武行者、孫立、黃信、李立等に兵を引しめ、則水陸より竝進ませ救應とし、彼張淸を賺し出し、一戰をなさば、立所に大事成ぬべし、某先計を設けんと、頓て手分を定めけり。扨張淸は城中に在て、

宋江打入てつ又此巻に顧大嫂火を放つべき謀差ひ、空しく城内に奔走するとのみにて、も何のする事なく、立消せしが如し。

超大に痛み、這々斧を提逃回へる。扨林冲花榮は龔旺と戰ひ、呂方廓盛は丁得孫と戰ひ、暫し勝負は決せざりけれ共、龔旺はや飛鎗を盡て大に仰天し、見に林冲花榮兩人に生捉れたり。丁得孫も亦飛劍を用ひたれども、中るまじきと思ひ、只鎧を以て死戰をなす。浪子燕青は陣門の下に在て、暗に想ひけるは、張淸石を以て打惱し、十五人の大將悉く打れたり。我今弓勢を現さずんば、何の時をか待んとて、弓箭打搭へ能搜て漂と放ちけるに、其箭丁得孫が馬の足に中りしかば、馬飛騰て丁得孫を落しける處に、呂方廓盛駈寄是を生捉ける。張淸是を救はんとしけれ共、小を以て大に敵しがたく、只劉唐を縛めて東昌府に引入けり。太守は城の樓に上て、張淸が始終の働を見、心中に感悅斜ならず。副將兩人を捉はれたりといへ共、劉唐一人を捉へ、大將分多く打倒し打落したるを以て、今日の軍は親方の勝と評論し、先劉唐に頸枷を掛て牢中に入置けり。張淸が畢竟はいかん、次卷を見れば詳なり。

此段は水滸傳百回本の六十八回に、宋江盧俊義に從ふ諸頭領廿五員水軍の頭領三員宛と有て、其姓名は此卷に出るごとし。然して其人を算れば、宋江の方二十三員、盧俊義の方二十四員（但し外に水軍三員づつ）也、姓名の數齟齬あるは作者の杜撰なり。又先板通俗忠義水滸傳に、李瑞蘭が宅東平府の西丸子と書しは、西瓦子の誤なり。丸と瓦と似たるに誤りしと覺ゆ。か

功を建ざるに、若此度武藝を顯さずんば、何れの時か又軍功を建て、光彩を生ぜんやと、雙鎗を提て陣前に跑出し所に、張淸是を見て大に罵り、董平我と汝とは原來隣國の好みあれば、共に力を併せ賊を亡さんこそ理の當然なれ、何ゆゑ朝廷に背きて賊に降りぬるや、汝猶是を恥ずして、我と戰んとするは木竹にだも如ざるなり。董平此言を聞て大に怒り、雙鎗を撚つて張淸に攔蒐り、兩軍馬を交へ、戰已に十餘合に至りし時、張淸また石を撚て飛せけるに、董平これを避て冷笑ひ、汝が飛石他人には中るとも、我にはよも中らじ、汝に我手段を見せんとて、急に雙鎗を上て緊しく攔入しかば、張淸馬を回して走行き、第二の石を取て飛せけるに、董平又是を拂ひければ、張淸二つの石中らざるを見て、大に慌て馬を飛せて、陣門の邊に退きし處に、董平背後より鎗を取伸攔しかば、張淸これを避て再び鎗を交へ、各祕術を盡して相戰ひ、精神益盛んなり。宋江が陣中より索超斧を揮て跑出けるに、張淸が陣中よりは、龔旺丁德孫一同に跑出で、直に索超を迎へて相戰ふ。林冲、花榮、呂方、郭盛等の四大將、相續て突出ければ、張淸敵しがたくや思ひけん、本陣を望んで走り行く。董平勢に乘じ追掛し處に、張淸又石を飛せしかば、董平敢て長追せず、遂に本陣に引回す。索超是を見て、龔旺丁得孫を捨て、張淸に砍て蒐る。張淸又石を飛せ、索超が面上を打破り、血迸り流れて紅に染しかば、索

退んとせし處に、張清又石を投て劉唐を地上に打倒し、頓て軍士に命じて捉せけり。宋江是を見て大に悔い、誰かあへて劉唐を救はんやと、呼りけるに、青面獸楊志刀を揮て張清に砍てかゝる。張清鎗を撚て相迎へ、戰纔數合にして、又石を飛せて楊志が盔の上に打中しかば、楊志甚だ恐れ、心を寒し、急に本陣に引回しぬ。宋江此光景を見て憂愁し、若今日の戰に利を得ずんば、彼に氣を奪れ、重ねての戰にも勝を得んこと難かるべし、誰かよく彼を活捉て、我此憤を休めんや。朱同此時雷横に睃眼して云けるは、彼は石を飛すの神手なれば、一人を以て敵せんこと不可なり、我雷横と共に力を併せて、左右より夾で撃ば、爭か勝を得ざらんやとて、二騎轡を竝べ衝出で、已に陣前に至りしかば、張清これを見て哈々と打笑ひ、汝潑賊等一人の勝負叶はずして又一人を添けるや、縱十騎二十騎一連に來る共、何等の大事か做出さんとて、石を拈て待掛ける處に、雷横先刀を舞て近附きしかば、張清急に石を飛せて、又雷横を打伏けり、關勝これを見て牙をかみ、彼青龍刀を輪し跑來り、朱同雷横を救うて張清を討んとせし處に。張清又石を投ければ、關勝はやくも青龍刀を以て拂ひけるに、其石刀の刃に中り火光出て電光のごとし。了得の關勝も稀有のことに思ひ、再び戰ずして陣中に退きけり。此時董平は陣中に在て始終の戰を一覧し、穩に心中に思ふやう、我今新に降參して、未だ寸

に、過ず宣贊が腮に中りしかば、忽身を翻して、馬より下へ眞倒に落てけり。丁得孫襲旺齊しく跑出て、宣贊を捉んとせしか共、宋江が人數早くも馳出て宣贊を救ひける。宋江此體を見て、忿然として大に怒り、我若彼を捉ずんば、誓て再び回らじとて、自ら劍を拔て跑出んとしたりしかば、呼延灼攔て云く、宋君何ぞ輕々しく手を下し給はんや、某不才たりといへ共、彼を生捉て尊覽に呈すべしとて、遂に陣前に進み出て大に罵けるは、張清汝が飛石何ぞ云にたらん、汝曾て呼延灼が大名を聞たるや。張清忽然として甚怒り、汝は是朝廷に背て、梁山泊に降參したる敗將、いかんぞかく大言を吐や、汝先我飛石を受けて手段を試よとて、はや一石を飛せけるに、呼延灼鐵鞭を擧て是を拂はんとしけれども、其石竟に左の臂に中りしかば、呼延灼敵しがたくや思ひけん、急ぎ馬を勒へ、本陣に回りけり。宋江左右に呼つて云く、馬軍の大將共は多く打れぬるぞ、歩軍の大將出て彼を生捉んやと、未だ云も了らざるに、劉唐陣前に躍り出で、刀を撚て相迎ふ。張清冷笑つて云く、馬軍の輩だにも猶且勝ざるに、汝歩軍の分として、豈能我に敵せんや。劉唐これを聞て大に怒り、只一刀にと躍り狂うて蒐りけるに、張清鎗を倒して本陣へ逃回へる。劉唐原來手疾き達人にて、遂に張清が馬の腿を砍しかば、彼馬壁のごとくに立て跳ける時、馬の尾劉唐が面上を掃ひければ、忽ち兩眼眩んで、引

没羽箭礫を飛して大小山陣の諸将と戦へ

巻中三景
病床の画

鏡に打中しかば、錚然として其聲大に響けるに、燕順益膽を冷し、鞍に伏て走りける。宋江が中軍より、又一人の大將突て出で、匹夫何ぞ恐るゝに足んやと呼はり、直ちに張淸を迎へて相戰ふ。宋江此大將を見るに、百勝將韓滔なり。宋江が前にて勇を顯さんと欲し、精神を抖擻て十餘合戰ひし處に、張淸再び馬を囘して跑來り、暗に石を藏し韓滔を打けるに、其石差ず韓滔が鼻の上に中りければ、鮮血水を洒ぐがごとく流れ、這々本陣に逃囘りぬ。彭玘これを見て大に怒り、彼匹夫縱ひ萬千の石を打とも、何程のことかあらんと、刀を舞し馬を躍せ、陣前に跑來り、未だ鋒をも交へざるに、張淸はや石を飛せて、彭玘が太陽の上に打中しかば、彭玘手を措に及ず忽ち刀を撇て逃囘る。宋江は親方の諸將、都て石に中りたるを見て心中に憂へ、先兵を收めて引退き、明日再び戰はんと議しける處に、盧俊義が背後より、一人の大將高聲に、呼つて云く、若今日の戰に、親方利を得ずして引退かば、明日の軍いかんぞ又勝利を得んや、遮莫張淸が打石我にはよも中らじとて、陣前に跑出ぬ。宋江此大將を見るに、醜郡馬宣贊なり。宣贊刀を舞し近く進みしかば、張淸大音聲に呼つて、汝潑賊一人來ては一人逃げ、二人來ては二人走る、汝も亦我飛石の手段を知りたるや。宣贊怒て云く、汝が飛石他を打ことは得べけれども、我を打んことは難かるべしと、未だ云も終らざるに、張淸又石を把て飛せける

共に三軍を引て打出で、平川曠野の地に陣勢を張て兵を嚴に備へ、宋江先門旗の下に有て敵陣を望見るに、沒羽箭張清華かに扮掛て、同く門旗の下に勒へけるに、左には花頂虎龔旺あり、右には中箭虎丁德孫あり。各功を建べき氣色現れ、了得の豪傑と見えければ、宋江一向是を讃歎す。此時張清等三騎の大將陣前に馳出で、大いに宋江を罵つて云く、水泊の草賊速に出て勝負を決せよ。宋江これを聞き、左右を顧み、誰かある彼と戰て擒にせよと、云もあへず、金鎗手徐寧馬を飛せ陣前に跑出で、直に張清を望んで搠蒐る。兩將馬を交へ暫く戰ひけるが、張清急に鎗を拖て逃しかば、徐寧後に隨ひ追蒐たり。

○沒羽箭石を飛せて英雄を打つ

張清は赶れ行しが、忽ち振囘り又石を飛せ、徐寧が眉間に打中ければ、憐むべし悍勇の徐寧、早くも身を飜し馬より下に落にけり。龔旺、丁得孫齊しく跑出で、徐寧を捉んとせし處に、宋江が陣中より、呂方、郭盛二騎相並で飛がごとく馳來り、竟に徐寧を扶け本陣に引囘しけり。宋江又、誰か出て戰はんやと問けるに、錦毛虎燕順鎗を撚つて馳出で、張清を迎へ鎗を交へ、戰纔數合にして、燕順敵する事能ず、馬を囘し逃走る。張清追掛石を飛せ、燕順が盔の上の

を打破られ、親方の兵多く亡び畢ぬ、彼所に一人の猛將あり、姓は張、名は淸と號し、原彰德府の人なり、たヘて能石を飛せ人を打に、百たび發つて百たび中る、是故に綽名を沒羽箭と申す、手下に又兩人の副將あり、一人が名は花頂虎龔旺と號して、馬上より能鎗を飛しむ、又一人が名は中箭虎丁得孫と號して、馬上より能劒を飛しむ、前日の戰に郝思文と張淸と鎗を合せ、張淸遂に迯しかば、郝思文是を追蒐ける處に、張淸石を飛せ郝思文を馬より下に打落せり。燕靑此時張淸が馬を射たりしゆゑ、郝思文が一命を救ひぬ。此日一陣を破られ、翌日又混世魔王樊瑞、項充李袞兩人を引て戰ひし處に、丁德孫劒を飛せて項充に中けるが、猶幸に疵深からずして、一命を脫れぬといへども、此日また一陣を破られしなり、是ゆゑに軍師某を馳て救ひを求め給ふ、願くは宋君速に三軍を移して、戰を助け給へ。宋江聞もあへず、大に歎息して云く、盧員外何ぞかくの如く緣なきや、我は偏に盧員外に先敵を破らしめんと欲し、吳用公孫勝まで添て遣しけるに、却て戰に利なきこと誠に是を恨べし、此上は我輩一刻も早く盧員外を助べし、諸將早く用意を調へ候へとて、卽日三軍に號令を傳へ、遂に東平府を打出て東昌府へ急ぎけるに、はや府界に至れば、盧俊義自ら迎へ相見え、戰の次第一々具に語り、先陣を列ねて評議區々なる處に、沒羽箭張淸又人馬を引て戰を挑むと告ければ、宋江諸將と

へ。董平が云く、程萬里は原貪欲無道にして、百姓を傷ふ大惡人なり、若宋君某を放て城下に遣し給はゞ、守門の軍士を誑て城門を開しめん、三軍一度に亂れ入て、容易く兵粮を奪取給ふべし。宋江是を聞て大に悅び、則其議に同じければ、董平嚴に披掛て馬に乘り、當先に進んで發向す。宋江は半里ばかり後れ、暗に進發し、三軍已に城下に至りけるに、董平大音聲に呼つて云く、董平再び逃回りたるぞ、速に城戸を開け。城内の軍士共此聲を聞て、火把を揮照し則城下を望み見るに、果して董平正手の門前に馬を勒へ有ければ、軍士等都て大に悅び、急に城戸を開き吊橋を下し、董平を迎へし所に、董平馬に策て一番に騎入しかば、宋江は三軍を引て其跡より城中に砍て入り、已に東平府の前に至つて、宋江三軍に號令を傳へ、百姓を犯すことなかれと堅く制しけり。董平此時程太守が館に亂れ入り、一家の男女盡く斬盡し、只一人彼女兒を剩して是を奪取ぬ。宋江牢門を打破らせ、史進を救ひ、東平府の庫を開て金銀米錢悉く奪ひ、若干の車に裝載て、先是を梁山泊に運せけり。史進は兵を引て李瑞蘭が家に行き、親子三人并に諸の眷屬一々是を砍盡し、一時の怨を報じけり。宋江又程太守が家財を府前に運び出させ、是はもと百姓より剝取し財なれば、再び百姓に還さんとて、公に分つて百姓等に惠みけり。斯る處に白日鼠白勝至て報じけるは、盧員外東昌府の合戰に容易兩陣

宋江が軍馬盡く皆平を迎へ、戰いまだ十合に至らざるに、兩將忽ち馬を回して逃走る。宋江は壽張縣の界まで退きける。董平は曾て敵に計あるを知らずして、一向後をしたうて跑しかば、はや十餘里ばかり過ける處に、深草の内より孔明、孔亮現れ出で、董平はやく降れと呼つて、各鎗を擧て搠掛りしかば、董平これを迎へ戰んとせし時、兩邊に鑼の聲大に響き、地上に索を引て、董平が乘たる馬の足を纒て鉤倒しければ、董平忽ち馬より下に落けるに、左の方よりは一丈青王矮虎撞て出で、右の方よりは張青孫二娘馳出で、一度に折重つて遂に董平を綁め、兩人の女大將各是を監押して、宋江が前に引せけり。宋江は楊柳樹の下に在て董平を見て、慌忙き走り倚て、自ら董平が綁を解き、錦の衣を與へ是を著せしめ、慇懃に禮を行うて云けるは、董將若某を棄給はずんば、恭しく山陣に留め申さん、伏して望らくはこれを嫌ひ給ふことなかれ。董平急に禮を還して云く、某は擒となりし者なれば、早速誅戮を被るべきに、却て慇懃の禮は何を以てか是に當らんや、若一命を助給はゞ、某愚たりといへども、駑鈍の力を盡して大恩を報じ奉ん。宋江が云く、我山陣に粮乏しきゆゑ、此度東平府に粮を借らんと欲し、かく人馬を起し發向せり、誓つて別心あらず、願くは將軍是を察し給

昨日宋江と戰ひ城中に引取し時、又一人の媒を以て女を乞ければ、程太守是を聞て云く、我は文官彼は武官なれば、文武互に緣を結んこと、理に於て當れり、我向に求めに應じ、急に婚禮の事を議せんと欲しけれども、頗る所存あつて延引に打過ぬ、幸ひ此度は早速承引すべき事なれども、賊兵かく城を圍て、事已に危急に及び、若此節此義を應承は、必ず世人の口に笑るべし、後日賊兵を退け、城中無事ならん時、此義を議すべければ、先しばし延引あつて可ならんと、懇に答へける。董平此ことを聞て心中に想は、程太守此節はかくのごとく答ふといへども、後日城中無事ならん時は、必ず此義を違變すべしとて、只顧躊躇決せざりける處に、宋江が人馬火急に城を攻しかば、程太守頓て董平を請て計を議しけるに、董平大に怒て云く、某又兵を引て是を退けん。程公憂へ給ふことなかれとて、遂に三軍を率して城外に打出ける。宋江自ら大音聲に呼つて云く、董平汝がごとき小勢、怎んぞ我に敵せんや、古人の語にも大廈將に傾んとしては、一木の支べきに非とこそ云なれば、汝いかんぞ我勢を見ざるや、我手下には精兵十萬、猛將千人あり、各天に替つて道を行ひ、困るを扶ひ危きを扶く、汝若天命を知ば、速に降つて一死を免れよ。董平聞て大に怒り、汝文面の小吏萬死の狂徒、いかんぞ亂言を以て我を欺くやとて、雙鎗を撚て突出ければ、宋江が左右より林冲花榮等しく跑出て、董

相戰ふ。董平は原來萬夫不當の勇士なりければ、韓滔敵しがたく見えける處に、宋江又徐寧を出して、韓滔に替らしむ。徐寧竟に韓滔に替つて董平と鎗を交へ、戰已に五十餘合に至れども、雌雄いまだ決せず。宋江是を見て、徐寧が誤つ事もやあらんとて、急に金を鳴し軍を收ければ、徐寧馬を勒て引回す。董平二つの鎗を一度に擧て忙しく追來りしかば、宋江旗號を揮せける處に、左右より若干の人馬並び起り、董平が東に行時は東を圍み、西に跑る時は西を圍み、左右より夾で攻ければ、殆ど危く見えしか共、董平死を捨て力戰し、申の刻に至て一つの路を殺開き、這々身を脫れ突出けるに、宋江何等の所存ありてかまづ兵を收め、董平を追しめざりしかば、董平穩かに敗軍を收め、其夜は城中に引取たり。宋江此夜二更の時分、三軍を發して城下まで寄來り、城を重々に圍せ緊しくこれを攻させける。顧大嫂は史進とともに、城中に火を放さんと圖りけれ共、史進日を差へ事を誤りしかば、未だ火を放にも及ず、只徒に城中を奔走す。史進は官軍等に牢の四方を圍れ、猶二つの門の邊に徘徊て空しく便機を伺ひけり。扨此程太守に一人の女あり。容顏殊に美麗にして佳人の譽世に流布し、萬人心を寄たりしかば、董平深く是を戀ひ每度氷人を以て、紅絲の緣を結ばんと議しけれども、程太守承引せざりしゆゑ、董平甚だ是を恨み、常にしも言和して心和せざりけるが、董平いかなる存念にや、

一つの門外に走り出で、宋江が人馬の至るを待にける。牢中にありし下官共此體を見て大に仰天し、追々馳て東平府に斯と告ければ、程太守此事を聞て色を失ひ、早速董平を請て議しけるに、董平が云く、城中に敵の細作紛れ入たるに疑ひなし、先人數を馳て史進を圍ましめ、某は此便機に乘じて、城外に打て出宋江を生擒べし、相公はかたく城をまもり給へとて、遂に兵を遣し牢の四方を圍せ、董平ははや人馬を引て城外に打出けり。程太守は諸の節級幷に下官共を引て、自ら牢獄の邊に馳出で、喊き叫で取蒐けるに、史進は猶牢中の一つの門の邊に徘徊して、あへて出ざりしかば、下官共又敢て入ず、只喊の聲を作つて騷動す。顧大嫂は此ことを曉り獨暗に苦けり。さて彼董平は四更の時分城外に突出で、直に宋江が陣を望み攻來る。宋江此消息を聞て、甚だ愕然き、是必定顧大嫂生捉れ、親方の計露見したるならん、敵已に攻來る上は、備を設け迎へ戰ふべしとて、急ぎ號令を傳へ、三軍を起し、已に董平が兵を迎へて、對陣したりけるに、天色漸明にけり。此時董平當先に進み出戰を挑む。抑此董平は心靈機功にして、三敎九流通ぜざる所なく、品竹調絃、會せずと云處なし。山東河北等の人皆彼を稱して風流雙鎗將と云ならはせり。宋江陣に在て、董平が人物の凡からざるを見て、心中甚だ是を愛し、先韓滔を出して戰はしむ。韓滔命を受て、馬を躍せ鎗を撚つて出で、直に董平を迎へ

九文龍下官等に酒肉をあたへて牢を破

う、若男子ならば、決して許しがたきことなれども、彼は女性と云ひ、況や乞食たる者なれば、何の利害か惹出さん、我今日の善根に彼を許して、史進に遇しめんとて、遂に顧大嫂を引て牢中に進め入る。史進は顧大嫂を見て大に驚き、只呆たる計なり。顧大嫂詐て、流涕し、飯を送る體にもてなし、暗に告て云く、今月晦日の黄昏に城を攻る間、史大郎自ら計をなして牢中を脱出給へと、未だ云も終らざるに、又一人の下官至て大に罵りけるは、汝貧女、誰が許を受けて牢中に入り、妄に飯を大罪人に送るや、早く門外に出よ、若遲々するに於ては、棒を施さんとて、手中の棒を拈りければ、顧大嫂再び門外に出にける。史進は晦の日のことを心に記し、三月二十八日に至つて想はず日を誤り、今日は定て晦にてあるべきに、小節級に問ばやと思ふ折ふし、兩人の小節級至りしかば、史進是に問て云く、今日は晦にて候や。兩人の節級も不圖誤て答へけるは、今日は則ち三月二十九日小の晦日なり、牢中の舊例に、錢財ある罪人は月の大小を論ぜず、毎月晦には、酒を求て是を酌事あり、足下もし錢の貯あらば、酒を求めて舊例を行はんや。史進是を聞て幸のことに悦び、則酒を調へしめ、數人の小節級等を盡く牢中に邀へ、良久しく飲酒を催し勸めけるに、小節級等都て爛醉に及び、唯餘念なく見えしかば、史進勢に乘じて、小節級等を一々地上に踢倒し、牢中の罪人共を盡く放て、

顧大嫂謀て史進に食を贈

が知亮凡人の及ぶ所にあらずと感じけり。

○宋公明義をもつて雙鎗將を識る

翌日顧大嫂飯を携へて、牢門の邊に至りし處に、一人の下官出たりしかば、顧大嫂地上に拜伏して、只顧流涕ける。彼下官問て云く、汝貧女何ゆゑ涕を流すや。顧大嫂慇懃に告て云く、今牢中に入置れし史進と云人は、原我主人にて、殊さら洪恩を蒙りしが、別てより以來十年餘り音耗も漸疎くして、罪の次第は知ざれども、史進前日街を引れて入牢したるを、我半途より跟隨て、これを見屆け、餘り哀れに思ふゆゑ、只一飯を送らんと欲し、敢て此所まで伺ひぬ、願くは官人一點の仁慈を垂れ給ひて、史進に閃と遇しめ給へ。下官此言を聞て云けるは、史進はこれ梁山泊の强盜と云ひ、殊更此度城内に忍び入て、國中の生靈を燒殺さんと圖りし大罪人なれば、誰かあへて汝を引て遇しめんや、速に此處を立去るべし。顧大嫂猶涙を洒で云く、彼人此の如き大罪を犯さんは、夢にだも想はざりつるに、いかなる宿業に因て斯る事には至りけるぞ、此上にも我宜しく諫て、寃なく死を遂させ、又此一飯を送つて舊日の情を顯さんに、只憐愍を施し給ひて、暫し是を許し給へとて、地に領巾伏て哭きける。下官是を聞て、熟想ふや

の類は新しきを迎へ、舊きを送り、許多の人を迷はしめ陥穽に墮し、信實の情ある者罕なり、譬ば一分の恩愛ありと云共、老拙が手を出難し、史進此度必定禍を被るべし。宋江此言を聞て、忽ち大に慌て、再三計を吳用に求む。此時吳用顧大嫂を呼んでいはく、汝今貧女の形に出立て、城中に忍び入り、唯乞食をなして、史進が消息を窺べし、若好音耗あらば、早速馳回て告給へ、彼史進萬一敵の擒と成て、牢中にあらば、汝史進に飯を送る體にもてなし、牢門を守る士卒を誑き、則牢中に入て史進に遇ひ、今月晦日の黄昏に我三軍を起て城を攻べき間、其中何卒牢中を、脱出べき計をなして、晦日の夜親方の爲に、城内に火を放てと語るべし、若史進身を脱れ出て城中に火を放ば、大功立處に成ぬべし、扨又顧大嫂を城中に忍び入せん計は、宋君先兵を引て汶上縣を攻給へ、彼處の百姓ども我人馬の至ると聞ば、必ず東平府に逃べき間、顧大嫂此内に紛れて城中に入給へ、然らば見尤る者あるまじとて、一々計を授て、吳用は再び東昌府の陣へぞ歸りけり。宋江は解珍解寶に五百の兵を與へ、汶上縣を攻させけるに、彼所の百姓共果して大に怕れ、老を扶け幼を抱盡く皆東平府へ逃來る。此時顧大嫂は髮を鬖鬆し、衣を襤褸し、百姓等が内に打雜りて、城内に紛入り、街に徘徊して乞食をなし、這廂那廂にて史進が消息を窺ひけるに、史進ははや官府に捉はれ、牢中に在よしを聞しかば、吳用

と、平生の辯舌を持て誑きけるに、了得の史進毫髪も疑はざるこそ愚なり。此時李瑞蘭詐て別離の情を叙べ、約莫一時ばかり過しぬる處に、數十人の下官一度に咄と樓上に跑上り、史進が油斷に乘じて、手執足執遂に索を掛たりけり。史進は手を束ねて白々と綁られ、牙を咬で怒しかども、その益更にあらざりけり。下官ども史進を引て、東平府に至りしかば、程太守大いに罵つて云く、汝潑賊いかんぞ斯大膽に、只獨城中に忍び入て細作をなすや、若李瑞蘭が父これを訟ずば、ゆゝしき大事を做出すべし、汝快く實情を白狀せよ、若抵頼ば痛く拷問を行なふべし。史進これを聞て、心中に嘆じ、唯默然として言ざりければ、程太守が云く、汝草賊打ずんば有べからずとて、左右に命じけるに、五六人の下官共躍出で、頓て史進を引倒して散散に打けれ共、史進曾て白狀せざりけり。董平が云く、先是を牢中に入置き後日宋江を捉たらん時、一處に皆東京へ引すべし迚、遂に死囚牢の內に遣しぬ。扨宋江は史進が出たる跡より、書を詳に修へて、吳用に寄けるに、吳用大に驚て、此事を盧俊義に告、連夜に宋江が陣に至て問けるは、史進は誰が下知を請て、城中に入たるや。宋江答て云く、史進が昔日恩愛深かりける、李瑞蘭と云妓女、東平府に在よし語り、裡應外合の計をなさんとて、自ら願て馳行ぬ。吳用がいふ、某若こゝにありなば、史進を遣すまじき物を、今更後悔萬千なり、凡妓女表子

やうに議を決し給へ。李公が云く、梁山泊の豪傑等は都て等閑の輩にあらず、凡城を攻るに破らずと云ことなし、若妄に史進がことを云出さば、却て禍を惹べし。老母此事を聞て大に罵り、汝何ぞ此のごとく愚なるや、諺にも蜂懐中に刺入時は、衣服を解てこれを趕といふ事あり、汝獨天下の通例に背んより、快く東平府に馳て訟へ給へ、然らば官軍許多來つて、史進を捉ふべき間、後日の禍を脱るべし。李公が云く、彼多く黄金を送つて、我家を頼たるに、若これを官府に訴るものならば、宋江後此城を破たらん時、必定我輩を誅すべし、縦ひ然らずと云共、豈人の命を害せんや。老母是を聞て冷笑ひ、我女をもつて妓女とし、已に萬千の人を誑て陷坑に落し、大惡業の過活をなす身として、何ぞ一人の命を論ぜんや、汝若行ずんば、我自ら馳て東平府に訟へ、汝も同類たる由を申べし、其時後悔し給ふことなかれ。李公が云く、汝先焦燥べからず、女は宜く彼に陪侍して酒を勸めよ、若草を打て蛇を驚かしむるがごとくば、彼必ず逃去べきぞ、我は先馳て下官等に訴へ、其後又東平府に訟べしとて、遂に門外に跑出けり。扨史進は李瑞蘭が面色紅白定まらざるを見て、心中に略怪み、則問て云く、汝が面色甚だ定らず、何等の異事有て斯驚たるや。李瑞蘭眞しやかに答て云く、我今樓を上りさまに、梯子の上にて跌き、已に落んとしたるゆゑ、心忽ち慌て大に驚しに依て、面色穩なるまじ

風流全くして、百般の遊藝具り、其容儀甚だ美麗にして、梨花雨を帶し玉香を生ずる光景なりければ、時の人擧て戀はざるはなかりけり。李瑞蘭先史進に問て云く、君は梁山泊とやらん云所に居住有て、宋江と云人に隨順し給ひ、共に山陣の頭領をなし給ふと聞けるが、果して詐にあらずや、此兩日は又城中大に騷ぎ、宋江人馬を引て當地を燒拂と云風說、晝夜耳に轟きて、寸心更に安んぜず、君は定めて宋江と共に當城を攻給ふならんに、今日は又いかなることにより、城内に來り給ふや。史進答て云く、我日外汝に別れてより方々奔走して艱難を蒙りけれ共、今は幸ひ梁山泊に在て、身の榮花極りなし、然れども我いまだ半點の功を建ずして、旦暮唯是を愁ふ、此度宋公明當城を攻給ふゆゑ、我聊功を建んと圖りて、汝がことを委しく宋公明に告ければ、宋公明大悅して、我を細作の爲城中に遣し給ひぬ、汝必ず事を漏すべからず、功成就の後は汝を山陣に娶て、一生安樂に過さすべし、先是は當座の賜なりとて、黃金一包取出し李瑞蘭に與ふ。李端蘭黃金を收めて、史進を款待ければ、史進舊日の恩愛を思ひ出して、心中に感じける。李端蘭暗に樓を下り、父母に此事を告て云けるは、昔日史進我家に出入したる時は、淸白の男子にて在しか共、今は已に梁山泊に入て强盜の頭領をなす者なれば、昔日の史進にあらず、もし此事外に洩て、人是を知らば、禍必ず我身に及ばん、いかん共宜しからん

董平郁保四生定六を策

東平

平大に怒て云く、先其兩使を引出し首を刎ね、其後これを議すべし。程太守諫て云く、古より兩國の戰に、來使を殺さずと云に、今若此使者を斬ば禮に於て不可なり、只二十杖策て、城外に追出さば可らん。董平其言に同じ、則兩人の使者を綁め、各痛く二十杖策遂に軍士に命じ、城外にて追拂ひたり。兩人本陣に歸りて宋江に見え、董平己が勇に傲て、山陣の人馬を慢り、我輩を各二十杖策羞めを被らせ候と、始終具に語りければ、宋江聞もあへず、忿然として甚怒り、我一先禮を以て書簡を寄し處に、彼いかんぞ使者を打て無禮を行ふや、我遂に此城を破て、寃を雪んものをとて、郁保四王定六を先山陣に送つて、棒瘡を養生なさしめけり。此時九紋龍史進進み出て、某昔日此東平府に在し時、一人の妓女と恩愛を交へけるが、其妓女が名は李瑞蘭と申し、尚此東平府に住す、某此度多く金銀を携へ城内に忍び入り、則李瑞蘭が家に逗留し、宋君城を攻て董平と戰ひ給ふ時、某ひそかに鼓樓に上つて火を放ち、裡應外合の計に乘じて大功を立べし、知らず宋君の尊意はいかん。宋江此計を聞て、可なりと同じ、多く金銀を以て史進に與へければ、史進金銀を得て、暗に軍器を帶し、此日宋江に辭し、直に城内に忍入り、遂に西瓦子の李瑞蘭が家に至りけるに、老母史進を見て大に驚き、先女李瑞蘭に逢しめて後、樓に誘引す。抑此李瑞蘭は當世有名の妓女にて、萬種の

り四十里外に至り、安山鎭と云處に陣を列ね、人馬を屯し、宋江則諸將に對して語りけるは、東平府の太守程萬里幷に兵馬都監董平、此兩人は皆河東上黨郡の産なり、抑此董平と云人は、能雙鎗を遣ひて、萬夫不當の勇有ゆゑ、人擧つて雙鎗將と稱ふ、我今此城を攻るといへども、一先書簡を遣し禮を通じ、彼もし降らば戰を休め、若降らずんば戰をなして誅戮を行ふべし、誰かあへて書簡を携へて城中に入んや。時に一人の大將進み出づ、身の長は一丈許にして、腰の潤さは十圍に餘る、是則郁保四なり。郁保四謹で云けるは、董平と某とは知己にて候へば、此度の使を蒙り城中に入べしと、領承したりし處に、又一人の大將進み出て、某山陣に上りてより以來未だ半點の功あらず、願くは某も今郁保四と共に、書簡を携へて城中に赴くべし。宋江此大將を見るに、楊子江より山陣に上りたる王定六なり。宋江大に悦で云く、汝兩人行ば何の憂ることかあらんとて、早速書簡を修へ兵粮を借るべきこと、一々詳に述、則郁保四王定六に付與して、城中に遣しけり。扨東平府の太守は宋江が人馬寄來て、安山鎭に屯したると聞て、大に驚き、彼雙鎗將董平を請て、軍事を議しける處に、宋江が使者書簡を携へ到來せりと告ければ、太守兩使を呼入て對面す。郁保四王定六書簡を呈しけるに、太守これを披讀して、董平に問て云く、宋江今兵粮を借んと欲す、此事如何せんや。董

と共に香を炷て天地を祈り、各一つの鬮を拈りし處に、宋江は東平府に拈著り、盧俊義は東昌府に拈り著りしかば、諸頭領皆默然として、心中に服しける。宋江頓て令を下し人馬を催す。先宋江に相從ふ大將には、林冲、花榮、劉唐、史進、徐寧、燕順、呂方、郭盛、韓滔、彭玘、孔明、孔亮、解珍、解寶、王矮虎、一丈靑、孫二娘、孫新、顧大嫂、石勇、郁保四、王定六、段景住等二十五人、其勢總て一萬餘騎を領す。又水軍の大將には、阮小二、阮小五、阮小七三人なり。盧俊義に相從ふ大將には、吳用、公孫勝、關勝、呼延灼、朱同、雷横、索超、楊志、單廷珪、魏定國、宣贊、郝思文、燕靑、楊林、歐鵬、凌振、馬麟、鄧飛、施恩、樊瑞、項充、李衮、時遷、白勝等二十五人、其勢同じく一萬餘騎を領す。又水軍の大將には、李俊、童威、童猛三人なり。其餘の頭領秦明、柴進、李應、魯智深、武松、戴宗、李逵、穆弘、穆春、張横、張順、楊雄、石秀、朱武、黃信、孫新、蕭讓、裴宣、蔣敬、鮑旭、金大堅、孟康、侯健、陳達、楊春、鄭天壽、薛永、周通、湯隆、李忠、曹正、宋萬、杜興、鄒淵、鄒潤、朱富、朱貴、蔡福、蔡慶、李立、李雲、焦挺、張靑、杜遷等數輩は、山陣所々に持場を立て嚴重に相守る。宋江已に諸將を引て山を下りしかば、盧俊義も同じく諸將を引て山を下り、各一方を望で進發す。此時三月の初なりければ、日暖に風和かにして、人馬の働も易かりき。扨宋江は東平府の城よ

宋江盧俊義
天を祀り閣を拵ふ

六編　卷之五十七

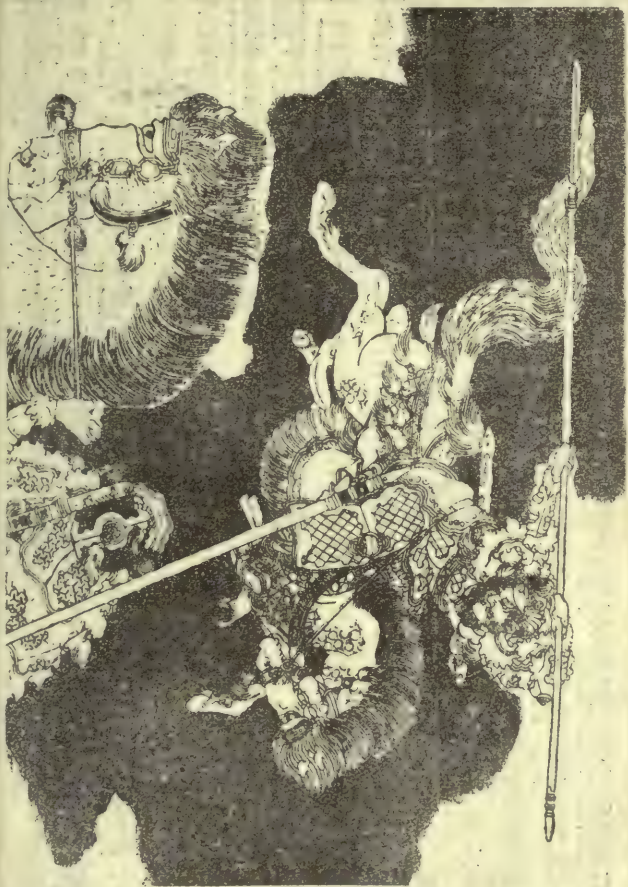
○東平府に誤て九紋龍を陷る

宋江は盧俊義が大功、晁蓋が遺言に符合するを述て、山陣の主を讓らんとすれ共、衆皆心服せざれば、此上は天意に事を定んと云けるゆゑ、吳用問て云く、宋君何等の高見有や、願くは是を承んと申にぞ、宋江が云く、今山陣に錢糧乏しきに因て、天意を假の道理を思ひ出しぬ、梁山泊の東に二ヶ所の州府あり、此兩所は原來錢糧多し、一ヶ所は東平府又一ヶ所は東昌府なり、我輩未だ彼所を鬧さず、幸ひ此度兩府に於て兵粮を借べけれ共、彼承允せざるは必然ならん、今我盧員外と鬮を拈て、各一方に馳向ひ、先に城を破りたらん者、梁山泊の陣主と倣べし、是則天意に任する處なり。吳用が云く、是尤私なき公論なり、いよ〳〵この事を行ひ天意に任せ給へ。盧俊義是を聞て、地上に跪て云けるは、宋君何故再三讓り給ふや、某に於ては宋君の號令をこそ蒙るべけれとて、さらに領承せざりしかども、先主晁天王の遺命等閑にならずと、裴宣に命じければ、遂に二つの鬮を書拿出たり、盧俊義止ことを得ず、宋江

を宋君に譲り候に、今更一位の座を他人に讓り給はゞ、我當先に砍て出で、立處に山陣を踏毀し、各々退散いたすべし。武行者も相繼て進み出で、同く高聲に呼て云く、今宋君の下に在豪傑等は、過半朝廷の俸祿を食し官人共なるに、いかんぞ肯て他人に事へ候はんやと、未だ云も了らざるに、劉唐身を奮て躍出で、昔日我輩七人此山に上り、王倫亡てより後、晁天王を初めとして、山陣の主を宋君に讓んと欲しぬ、今日もし位を他人に讓り給はゞ、即時に禍生ずべし。魯智深も同じく、霹靂のごとくに吼て云く、宋君いよ〳〵位を讓り給ふならば、我今禪杖を揮て陣柵を打碎き、諸豪傑と共に四方に散去べし、願くは宋君諸人の存念に從ひ給ひて、無事を調へ給ふべしと、再三諫言したりしかば、宋江是等の言を聞て、暫らく躊躇決せざりけるが、忽ち諸人に對して云けるは、我今天意に憑て陣主を定めんに、諸頭領異議を云ことなかれと、諭ければ衆皆一時に靜て其意を待つ。宋江何ごとを云出すや、次卷を見るべし。

しめ給ふとも、某が爲には望外の悦びなり。宋江が云く、某全く謙讓するにはあらざれども、三つの事員外に如ず、第一は某相貌醜して才拙し、員外は是容貌堂々威風凛々として、貴人の相あり、第二は某もと小吏として、罪を犯したる囚人なり、然れ共諸豪傑の愛憐を蒙りて此位に坐せり、又員外は原豪傑の子孫として、半點の罪名なし、向に少し禍を被り給ひしか共、天の佑に依て其難を脱れ給ひ、今更毛頭も穢あらず、第三は某文は邦を安んずることと能ず、武は衆を伏ること能ず、手には雞を縛る力なく、身には寸箭の功なし、員外は是武は萬人に敵し、文は古今を窮む、天下の人誰か其風を慕はざらんや、員外已にかゝる才德有上は山陣の主となり給へ、他日若朝廷に歸順有て、功を建業を立て、官爵陞遷し給ふ時は、我輩諸頭領も、其福蔭を蒙りて、各光彩を生ずべし、我心已に決しけるに、必ず過て辭し給ふことなかれ。盧俊義これを聞て、地上に拜伏し、宋君何ぞ是等の言を云給ふや、某縱ひ死す共、此事に於ては尊命に從ふまじとて、決然として是を辭す。吳用が云く、宋君は第一位に坐し給ひて、盧員外は其次に坐し給へ、此の如くんば人皆肯て服すべし、若再三相讓り給はゞ、諸人離心を生じ、山陣の大業一時に廢れなんとて、暗に諸人に瞼眼したりしかば、黑旋風李逵先躍出て、大音聲に呼りけるは、我江州より一命を輕んじて、此處まで隨ひ來り、諸人都て位

ける。浪子燕青は史文恭の乘たる名馬を牽て、本陣に回りけるに、諸頭領此馬を見て、各大に讃稱す。向に段景住此馬を宋江に獻じ、梁山泊に歸順する贄にせんとて奪取り、もと金の王子が乘し名馬照夜玉獅子、一名千里玉獅子とも云ふ。段景住が牽往半途を曾家の族奪取り、敎師たる故史文恭に送りしが、今終に梁山泊の有となれば、段景住が寸志聊届に似たり。扨宋江兵を曾頭市に屯して曾昇を斬罪し、其外曾家の一類盡く誅戮し、翌日兵を起して、曾頭市を打出で、三軍一度に凱歌を唱て、梁山泊に歸りける。此時關勝、花榮も已に青州凌州の人馬を擊退け、都て山陣へ歸り會集す。宋江號令を傳へ、大小の頭領を忠義堂に招き、蕭讓に祭文を作らしめ、衆皆晁蓋が靈前に伺候し、頓て史文恭か頭を刎て、是を靈牌の前に供へ、諸頭領各拜をなして祭りけり。宋江又吳用等諸豪傑と商議して、山陣の主を盧員外に讓んと欲しける處に、吳用が云く、宋君は第一位に坐し給ひ、盧員外は第二位に坐せしめ給へ、何ぞ必しも再三讓り給はんや。宋江が云く、晁天王臨終の時、誰にても史文恭を捉へたらん人は、山陣の主を讓べしと遺言あり、今日盧員外已に史文恭を捉へて、晁天王の仇を報い給ふ上は、則是山陣の主なり、諸人必ず晁天王の遺言を忘るゝことなかれとて、位を盧俊義に讓んとせし處に、盧俊義再三辭して云く、某は是何等の者なれば、敢て宋君の座を奪んや、遙末座に侍ら

寺の内より斬て出で、東西の喊の聲は、天地も崩るゝ斗なり。曾長官は陣中に在て是を防んとせしか共、敵火急に攻入しかば、戰んやうなく、遂に自殺して死にけり。曾密は西陣の方に馳けるに、朱同に殺され、曾魁は東陣を望んで、跑たりしか共、敵の大勢に引包れ、雜兵に討れけり。蘇定は北陣の前に至りし處に、魯知深、武行者急に追蒐しかば、又馬を回し逃行處に、楊志、史進が人馬に行合亂箭に中て死す。此時曾頭市の人馬共に此方彼方にて追討せられ、死する者其數を知べからず。扨史文恭は千里玉獅子と云名馬に乘しかば、西門を殺拔て二十餘里逃けるに、此夜天色暗々として何れの處なるかも知らざりき。史文恭、馬を勒へ息を繼んとせし處に、樹林の内より鼓の聲大に響て、五百餘の軍馬突て出で、當先に進みし大將棒を擧て、史文恭が乘たる馬の足をなぎけれ共、流石の名馬にて棒を跳越て跑過けり。かゝる處に、恠かな空中に一人の大將現れ出で、路を攔りしかば、史文恭仰天して、これを見るに、正しく晁蓋が靈魂なり。此時史文恭再び舊の路を尋ねて馳回りしか共、浪子燕青弓箭を搭へて、待かけたりしかば、史文恭急に横道へ跳んとせし處に、盧俊義刀を舞し飛がごとく馳來り、早くも史文恭が腿の上を一刀砍て、馬より下に拖り落し、頓て高手小手に絆め、宋江が陣に引せければ、頓て宋江是を見て大に悦び、史文恭を山陣に携て晁天王の靈前に供ふべしと、先陷車に入置

だに破れなば、其餘の陣は自から破れ候はん、又彼李逵等五人の者共は歸陣の刻これを殺すべし。曾長官が云く、已に此の如くんば、教師必ず良計を施して、大功を立給へとて、頓て號令を傳へ、北陣の蘇定、東陣の曾魁、南陣の曾密、都て一同に馳て敵陣を劫ふべしと約しける。郁保四は法華寺に至て、李逵等五人の者を窺ひ、竊に時遷を呼て、計を通じけり。扨宋江は計の次第を吳用に問けるに、吳用が云く、郁保四回らざるは、史文恭我計に中たるに疑ひなし、彼若今宵來て我陣を劫ば、我兵は皆兩邊に埋伏し、又魯智深、武行者兩人に步軍を與へて彼が西陣を討せ、楊志史進には馬軍を與へて彼が北陣を討しむべし、此則番犬伏窩の計と申て、百度發して百たび中る上計なりとて、已に用意を調へけり。此夜史文恭は蘇定、曾密、曾魁等と倶に人馬を引て打て出で、前には史文恭蘇定あり、後には曾密曾魁あり。各勢に乘じて馳來り、直に宋江が本陣に至て窺ひ見るに、陣門鬭さずして、陣中に人あらず。殊更靜なる體なりしかば、史文恭大に驚き、我誤て敵の計に陷たるにやと、急に引退んとせし處に、曾頭市の內に鑼を鳴し鼓を擂騷動しきりなりしかば、史文恭が兵共は、先勇氣を折て惶れけり。此時時遷は法華寺鐘樓に上て、郁保四が通じたる如く、相圖の鐘を撞立ければ、東西の兩邊に石炮の聲大いに響き、大勢一度に陣中に斬て入る。李逵、樊瑞、項充、李袞等は法華

授け、親方の爲に用んと欲す、汝若肯て此功を建ば、汝を山陣に留め、同く頭領を做しむべし、汝向に馬を奪し仇は、我乃ち箭を折て誓をなし、全く是を免すべし、曾頭市の滅亡は旦夕にあり、汝よく三思を加へて、山陣に降參せんや。郁保四此言を聞て大に悦び、宋君もし我罪を免し給はゞ、我死を捨て此恩に報ずべしと、謹んで謝しければ、吳用頓て計を郁保四に授けて云く、汝今此處を逃出たる體にもてなし、曾頭市に回り、則史文恭に告て云べきは、宋公明此度和睦の儀を承允したるは、只かの名馬を求んが爲なり、名馬だに取復さば、必然違變すること有べし、今靑州凌州兩國の人馬寄來ると、注進有し故、宋江甚だ驚きけるに、若此勢に乘じて、計を行ひ給はゞ、由々しき大功成ぬべしと、彼を諫よ、彼もし果して此言に從はゞ、我又別に計ありと、委細に云含ければ、郁保四計を受て、曾頭市に回り、先史文恭に見え、宋江が和睦は信實にあらざる間、今宵勢に乘じ、彼が本陣を劫ば、立處に勝を得るに見えて一々眞しやかに語りけるに、史文恭是を聞て、暫く沈吟し、遂に郁保四を引て、曾長官こと有べし。曾長官が云く、我倅曾昇人質として、彼が陣中に在に、若今違變せば、曾昇は終に殺さるべし、豈よく此事を行んや。史文恭が云く、彼が油斷に乘じて、其不意を打ば、暫時の間に陣を破て曾昇將軍をも容易救ひ出すべし、必ず憂ひ給ふことなかれ、宋江が本陣

士を備へ、陣の四面を圍せける。曾長官又曾昇、郁保四兩人を人質として、彼奪取し馬共盡く宋江が陣中に還しければ、宋江一々是を改めけるに、向に段景住が獻ぜんとしたる、千里玉獅子と云馬見えざりしかば、宋江則ち曾昇に問て云く、千里玉獅子は何故牽せざるや。曾昇答て云く、彼名馬は向に段景住が手より奪取しかども、史文恭再三所望せしにより、遂に彼に與へ候なり、よつて此度此馬を牽せ候はず。宋江が云く、已に然らば汝早く書簡を遣し彼馬を取復すべし。曾昇爰に於て書簡を修へ、人を史文恭が方に馳て委細を云遣しける處に、史文恭が云く、別の馬は毛頭も吝からざれ共、此玉獅子に於ては決して還すまじと返答しけるにぞ、曾昇又使を馳せ、史文恭へ申遣しけるは、足下愚父と議し宋公明へ書簡を送つて和議を求め、忽ち其書簡の文に背き自ら和議の敗れんことを好むは、是何の心ぞや、原奪し馬疋數を盡して還納すべきとの書簡の表は覆べからずと、頻りに求め、使者の往來はや五六遍に及びし時、史文恭が云けるは、彌此玉獅子を求んとならば、先兵を退け候へ、然らば我此馬を送るべしと返答す。宋江是を聞て、呉用と共に評議區々なりし處に、忽ち飛脚到來して青州凌州兩路の軍馬寄來ると報じければ、宋江是を聞て、密に號令を傳へ、關勝、單廷珪、魏定國三人を馳て、青州の人馬を迎はしめ、又暗に郁保四を呼出し、再三懇に撫諭して云けるは、我今汝に計を

曾長官史文恭共に返簡を看了り、已に此の如くんば、互に人質を取替すべしと議定して、翌日又使者を宋江が陣中に馳て此事を云ければ、宋江曾て承引せざりしか共、呉用諫て云く、何の大事かあらん、宋君聊憂へ給ふことなかれとて、則時遷、李逵、樊瑞、項充、李衮等五人を選出して質とし、計を時遷に云含遣しける。扨又關勝、徐寧、單廷珪、魏定國等は宋江が請に應じ山陣を下り、此日宋江が本陣に至て、各對面しけり。

○盧俊義史文恭を活捉る

去ほどに時遷敵地に到て云けるは、我等五人の者守將宋公明の號令を奉じ、人質として參たる間、宜しく和睦の議を調へたまへ。史文恭が云く、呉用足下等を遣したるには、必然詐の計有べしと、いまだ云も畢らざるに、李逵是を聞て大に怒り、雷の如く吼て史文恭に打て蒐る。曾長官慌忙き李逵を宥め、先怒り給ふことなかれと、云ける處に、時遷がいはく、李逵は原急性の人たりといへ共、宋公明甚だ寵愛す、然るに彼を以て人質に出したる上は、長官必ず疑心を生じ給ふことなかれ。曾長官は只和睦の義を調んと欲しけるゆゑ、曾て史文恭が詞を容ひず、早速五人の者を懇に饗應し、法華寺の陣に遣し、其守として五百餘人の軍

卒施放冷箭。更兼奪馬之罪。雖百口何辭。原之實非本意。今頑丈已亡。遣使講和。如蒙罷戰休兵。將原奪馬疋盡數納還。更賫金帛犒勞三軍。此非虛情。免致兩傷。謹此奉書。伏乞照察。

宋江書簡を見て大に怒り、則其書を扯破て罵りけるは、汝我晁天王を殺し、冤骨髓に徹れるに、豈肯て和睦をせんや、我汝が村中を斬盡し人種を絕し、まさに冤を晴すべしとて、牙を嚙み、齒を切つて忿怒甚しかりければ、使者此光景を見て震ひ慄きける。吳用再三宋江を諫て云く、宋君何ぞ甚だ憤り給ふや、豈一時の忿に大義を失ひ給はんやとて、遂に反簡を修へ使者に與へければ、使者反簡を得て、大に悅び頓て立歸て史文恭に呈しけるに、史文恭則是を披き見る。其書に曰く、

梁山泊主將宋江手書回復曾頭市主曾弄帳前。國以信而治天下。將以勇而鎭外邦。人無禮而何爲。財非義而不取。梁山泊與曾頭市自來無讐。各守邊界。奈緣爾將行一時之惡惹數載之冤。若要講和。便須發還二次原奪馬疋幷奪馬兇徒郁保四。犒賞軍士金帛。忠誠既篤禮數休輕。若或更變。別有定奪。草々具陳情照不宣。

り、宋君先心を安んじ給へとて、早速號令を傳へ、三陣の頭領に此事を告知らせ、解珍解寶に計を授け陣の左右に在しめ、其餘の人馬はこと〳〵く四方に伏置けり。扨史文恭は曾頭市の陣中に在て、曾昇に對し云けるは、賊兵今日の戰に打輸㷀恐怖して在べし、此虚に乘て今宵陣を劫ば、必大功成ぬべし。曾昇聞て其議に服し、即時彼蘇定、曾密、曾索等を請て夜討の事を告知せ、此夜二更の左側に各人馬を引て、宋江が陣内に亂れ入て、四下を見るに、只一人の兵もあらざりしかば、衆皆大に驚き急に身を回して馳出んとせし處に、左の方よりは兩頭蛇解珍斬て出で、右の方よりは雙尾蝎解寶斬て出で、背後よりは小李廣花榮兵を引て追來る。曾索は一程許殴れて迯ける處に、解珍已に追著て馬より下に攧落しけり。此時兩軍紛々と亂れて攻戰ひ、曾頭市の兵は多く討れて、八面に敗走す。史文恭漸一つの血路を殺開き、這々本陣に回りける。曾長官は又曾索を討せ、悲いよ〳〵深かりけり。史文恭こゝに於て甚だ怖れ、此體にては勝を取んこと難かるべし、我先書簡を以て、宋江が兵を退んとて、早速書簡を修へ、即日使者を遣して、是を宋江に呈す。宋江書簡を披き讀に、其書にいはく、

曾頭市主曾弄頓ニ首再ニ拜宋公明統軍頭領麾下一。昨日小男仗ニ倚一時之勇一誤有レ冒ニ犯虎威一。向日天王率レ衆到來。理合就當ニ歸附一。奈何無レ端部

なるを見て敢て再び戰はず。且李逵を射たるを勝利として、陣中に引取ければ、宋江が兵も本陣に引回しけり。翌日史文恭、蘇定曾昇を諫て戰を休めしめんとせしか共、曾昇曾て此言を用ず、是非急に兄の仇を報んとて、彼段景住が手より奪取し千里玉獅子と云名馬に打乘り、當先跑て陣前に出ければ、史文恭も已ことを得ずして後より突て出で、頻に鼓を打て攻來る。宋江が陣より、霹靂火秦明一番に乘出し、狼牙棒を舞して、史文恭に打てかゝる。史文恭鎗を撚て相迎へ、兩將各勇を震て戰ひ、已に三十餘合に至りし處に、秦明漸力疲れ逃回る。史文恭勇を奮て追蒐け、鎗を取延て秦明が腿の上を刺ければ、秦明馬より落けるを、呂方、郭盛、馬麟、鄧飛一同に突出て、秦明を救ひしか共、兵過半打せ本陣へ引取ける。宋江先秦明を車に載て梁山泊に送り、且又吳用と商議して、大刀關勝、金鎗手徐寧、聖水將單廷珪、神火將魏定國四將を梁山泊より呼下し戰を助けしめば、大に可ならんとて、頓て書簡を修へ山陣に遣しけり。宋江また自ら香を焚て、天地を拜し、此度の軍に勝利を得て、晁蓋の仇を報はしめ給へと、深く觀念してこれを祈り、則卜して一籤を得たりけるに、吳用籤の面を見て宋江に告て云く、此曾頭市は必ず破るべけれ共、今宵先賊兵來て陣を劫んとする凶籤面に表はれたり。宋江が云く、已にかくのごとくば、豫め備を設け可ならんや。吳用が云く、某已に計あ

軍を乞求め、兩所より征伐し、官軍には梁山泊を打しめて、我兵は曾頭市を守らば、賊必ず自ら屈し、急に引退んとすべければ、其時某等將軍等兄弟と共に、三軍を發して追討せんに、いかでか大功を得ざらんと、理を盡して云けるに、副教師蘇定も、此議に同じて云く、梁山泊の軍師吳用は謀多き者なれば、輕々しく敵しがたし、先官軍の至るを待て別に計を施さば、必定賊を破ること易からん、若今急に打んとせば、却て親方に損多かるべし。曾昇是を聞大に呼り、眼前に兄を打せ、此節仇を報ぜず、何の時をか待ん、もし一向延引に及ばゞ、賊いよ〳〵氣力を養て再び討んこと難かるべしとて、兩人の諫を容ざりしかば、兩教師倶にこれを憂へ、猶再四諫言を加へけれども、曾昇重ねて耳にも聞入ず、僅十騎を引て、陣外に馳出で、大音聲に呼つて、戰を挑みけるに、宋江前軍に下知して戰はしめ、秦明打出んとせしに、黑旋風李逵早くも斧を輪し、陣前に跳出で、梁山泊の豪傑黑旋風李逵なるぞ、曾昇速に出て、雌雄を決せよと、呼りければ、曾昇大に怒り急に弓箭把て打搭へ能挽て漂と放ちけるに、其矢差へず李逵が腿の上に中りしかば、了得の勇士黑旋風も終に地上に倒れけり。曾昇が軍士これを見て、我首取んと先を爭ひ跑出し處に、宋江が陣中より秦明花榮齊しく跑出て、敵を追拂ひしかば、馬麟、鄧飛、呂方、郭盛、一同に馳來り、李逵を扶け本陣に回りける。曾昇は敵の多勢

に乗り、直に陣前に出て戦を挑みけるに、宋江は中軍に在てこれを聞き、頓て呂方郭盛等を引て陣外に打出で、遙に曾塗を見て、忽ち心中に舊讐を懐き、急に左右を顧て、誰か彼賊を生擒て往日の仇を報はんやと、呼はりし處に、小溫侯呂方方天戟を撚て當先に跑出で、遂に曾塗と鋒を交へ三十餘合戰ひ、各心力を盡すといへども、雌雄いまだ分らざりけるが、呂方が武藝曾塗に及ばざるにや、漸疲れ頗る危かりしかば、郭盛是を見て、呂方が誤あらんを恐れ、馬を躍せ戟を輪し、陣前に突出で、呂方と力を合せ曾塗を討んと勵みしかども、曾塗兩將に敵して少しも怕ず、精神ますく盛んなりければ、花榮是を見て兩將が輸べきを料り知り、急に馬を飛せ跑出で、弓箭打搭滿月の如く拽緊め、暫し望で漂と放ちけるに、其箭過ず、曾塗が左の肩に中りしかば、曾塗忽ち馬より下に眞倒に落ち、終に呂方郭盛に殺されけり。軍士共是を見て、陣中に馳回り、曾長官并に史文恭に斯と告ければ、曾長官是を聞て、深く流涕し暫く昏々として前後不覺の體に見えける處に、舍弟曾昇大に怒り、我若兄の爲に仇を報ずんば誓て再び囘るまじと、牙咬をなし、已に跑出んとしたりしかば、史文恭これを諫め、將軍輕輕しく戰ひ給ふことなかれ、宋江が軍中には智勇の猛將極て多し、某愚意をもつてこれを想ふに、先宜しく五つの陣を堅固に守り、暗に人を凌州に遣し、朝廷に奏聞なさしめ、多く官

聞て又兵を分け、曾索を助けける。本陣の前には石炮の聲一向響しかば、史文恭兵を安置して擧動せず、只宋江が攻入を待て、陷坑の内に追落さんとぞ圖りける。梁山泊の軍師吳學究は山の背後に兵を廻し、兩路より攻けれ共、敵の伏勢は猶陣前に備へ、後陣の敵を防ざりしかば、吳學究便機に乘じて、人馬をすゝめ、兩邊より緊しく攻させけるに、敵軍共は陷穽の計相違し、自ら潰亂し、慌忙き逃走らんと騷動し、事の急なるに逼つて半は陷坑の内に挨落され、只這々の光景なり。史文恭これを見て大に驚き、遂に人馬を引て陣の前に打出ける處に、宋江兵に下知し、彼百輛の車に積し蘆葦の内に火を著しかば、烟火天を迷はし、史文恭が軍馬を燒拂ふ。史文恭手を措におよばず、又急に兵を引囘さんとせし時、公孫勝早くも陣中に在て、劒を揮咒を念じ、法を行ひければ、忽ち大風起つて、火焔南門の内に捲入り、陣樓塞柵等に火著て、暫時の間に盡く燒毀ちぬ。この時宋江一戰の内に、莫大の勝利を得、頓て金を鳴し軍兵を收めしかば、諸將すべて、諸方の挑合を止て、四方より陣中に馳せ入り、其夜は暫く息みけり。史文恭は計を敵に見破られ、多く人馬を討せ遺憾甚だ限なし。翌日曾塗は史文恭を呼で議しけるは、もし早く賊首宋江を殺さずんば、梁山泊を掃ひ清めんこと、すこぶる難かるべし、足下は先陣を守つて氣力を養ひ給へ、我自ら一戰をなすべしとて、即時に華やかに披掛て名馬

る敵一騎跑來り、宋江が前軍のまへを打通りしかば、諸將是を見て討取んと騒ぎし處に、吳用制していはく、何ぞ必しも一騎の敵に目を懸んや、先彼を追ず、此邊に陣を取候へとて、三軍に號令を傳へ、要害の地に陣を列ね、四面に濠を掘しめて、所々に柵を設け、諸將各堅固に分守り、已に三日を過しける處に、吳用又時遷を敵の士卒に出立せ、曾頭市に遣し、敵の出ざる意并に陷坑の有所一々是を探聽せけるに、時遷已に敵の陣中に紛入て、一日の內に委細を窺ひ知り、陷坑のある所には、暗に記號け遂に立回て、吳用に斯と告しかば、吳用具さに其意を曉し、翌日一百輛の車に蘆葦を裝載て中軍の內に藏し置き、其夜又諸將に號令を傳へ、明日巳の刻に敵陣を攻べしと約し、又北陣を攻る大將楊志、史進には只人馬を備しめて、敵陣を攻させず、虛しく喊の聲を作らせ、敵軍を迷はせける。扨史文恭は宋江を引て、陣を攻させ、陷坑へ追入大功を建んと圖り居ける處に、翌日巳の上刻に忽ち石炮の聲陣前に響き、敵の大軍南門に寄來る。又東陣の方に、一人の和尙、一人の行者前後より攻來ぬと、史文恭に告ければ、史文恭是を聞き、其兩人は必ず魯智深、武行者ならん、此兩僧は勇力の譽高き剛の者なれば、等閑の敵にあらずとて、則兵を分て曾魁を助け堅く東陣を防せける。又西陣の方に兩人の大將攻來り、旗號の上に美髯公朱同、挿翅虎雷横と書付け、其勢甚だ猛しと報ければ、史文恭是を

て三千の兵を與へ攻さしめ、同く正東の方の大陣へは、魯智深、武行者を大將として、孔明、孔亮を副將とし、是又三千の兵を與へ攻さしめ、同く正北の方の大陣へは、楊志、史進を大將として、楊春、陳達を副將とし、是又三千の兵を與へ攻さしめ、同く正西の方の大陣へは、朱同、雷横を大將として、鄒淵、鄒潤を副將とし、是亦三千の兵を與へ攻さしめ、同く正中の總本陣へは、宋江、吳用、公孫勝、大將にて、呂方、郭盛、解珍、解寶、戴宗、時遷等副將として、都て五千の兵を領し是を攻む。後軍を掌る步軍の頭領には、李逵、樊瑞を大將として、項充、李衮を副將とし、五千の兵を引て進發す。其餘の頭領は各梁山泊に留主居して、堅く山陣を守る。此時宋江五路の兵を起して、山陣を下り、直に曾頭市を望で推寄る。此事はや曾頭市に聞及び、曾長官頓て、史文恭、蘇定を請て、軍情の重事を議しけるに、史文恭が云く、梁山泊の草賊等を捉へんには、多く陷坑を設けば、是則上計ならん。曾長官聞て、可なりと同じ、早速軍卒に命じ、村口の邊、數十箇所に陷坑を掘しめ、若干の兵を伏せ、專ら敵の至るを待懸けり。宋江が山陣を下りし時、吳用、時遷を曾頭市に遣し、動靜を伺せけるに、數日の內に馳囘て、陷坑あることを備細に告ければ、吳用大に咲て云く、是等の計何ぞ奇とするに足んやとて、遂に三軍を催促して急ぎける程に、はや曾頭市の邊に至りける。此日午の刻に華やかに披掛た

法華寺に良馬を養ふ

の勇士と見え候、向に奪取りし馬共は、總て法華寺の內に養ひ置候なり。吳用これを聞て、山前山後の諸頭領を盡く呼集て、一同に評議を遂て云く、彼今五つの陣を張て防ぐといへ共、親方よりも又五路の人馬を以て手痛く攻ば、陣を破るに足べしと、未だ云も畢らざるに、盧俊義進み出ていはく、某一命を救はれて、山陣に上り、深く洪恩を蒙りぬといへ共、未だ曾て半點の功をも建ず、旦夕心を安んぜず、幸ひ此度命を捨て當先致さんに、願くは宋君兵を借し給へ。宋江が云く、員外當先し給はゞ、我毛頭憂ふる處なしと、悅びける處に、吳用諫て云く、盧員外初て山陣に至り給ひて、未だ戰場を經給はざれば、山嶺の險阻不案內なるべきに、先陣し給はんこと不可なり、別に一彪の人馬を引て、平川の邊に埋伏し、石炮の響を相圖とし、急に出て戰を助け給へと議定せり。吳用今かくはからふ存念いかんぞなれば、若盧俊義先陣をなし、萬一史文恭を生擒ば、必ず晁天王が遺言に背ず、山陣の主を盧俊義に讓ん。然らば大勢の豪傑の內には、和し難きことも出來んを恐れてなり。又宋江が大意は、盧俊義先陣せんと云を幸ひ、史文恭を討しめ、山陣の主たらしめんとの志なれば、深く悅びけるなり。扨盧俊義は燕青を引て五百の步卒を領し、卽日山を下て平川の方に馳行ける。吳用又人馬を五路に分て進發せしむ。先曾頭市正南の方の大陣へは、秦明、花榮を大將として、馬麟鄧飛を副將とし、總

晁天王の靈前に供ふべし。呉用が云く、時遷は原來簷を飛び、壁を走ることの達人なれば、先彼を曾頭市に遣し、消息を探聽しめ、其後計を議定すべしとて、頓て時遷を呼で委しく命じければ、時遷命を奉つて、其夜已に山陣を下りけり。第三日の午の下刻楊林石勇も同じく、山陣に馳回り、史文恭が大言を吐出し、山陣を羞辱ることを、備細に告ければ、宋江怒に堪ずして、はや三軍を起すべしと議しけれども、呉用再三これを諫めて云く、時遷近日歸るべければ、其消息を聞人馬を起すべし、先暫く怒を息給へ。宋江は猶忿然として憤り心に逼り、則又戴宗を馳て消息を求しめけるに、戴宗は反て時遷より先に立回り、委細宋江等に告て云く、曾頭市の敵凌州の仇を報んと欲し、曾頭市の口に大陣を張り、又法華寺の内に中軍を設け、五百里の間に遍く旗號を竝べ、嚴密に備へ候、と語りける。翌日時遷も又立回り報けるは、某直に曾頭市の内に忍び入て、事の樣を伺ひけるに、すべて五つの陣を列ね、各若干の人馬を籠め、又曾頭市の前には、二千餘人を以て村口を守しむ、本陣は教師史文恭これを守る、北陣は嫡子曾塗副教師蘇定とともにこれを守る、南陣は二男曾密これを守る、西陣は三男曾索これを守り、東陣は四男曾魁これを守る、中陣は五男曾昇父曾弄とともにこれを守る、又彼青州の强賊郁保四は、身の丈一丈ばかりにして、腰の横さ十圍に餘る、諢名を險道神將と云て、了得

すべしとて、衆皆金沙灘を渡て忠義堂の前に至りしかば、宋江自ら出て單廷珪、魏定國を延て堂上に登り、大小の頭領各相見して、一禮畢りし處に、黒旋風李逵も此時山陣を回り、焦挺鮑旭を引て宋江に見えしめ、半途に於て韓伯龍を殺したること、并に焦挺鮑旭を語らひ、凌州の背口を伺ひ、想はず宣贊、郝思文が囚車を奪ひ凌州を攻破りし事、一々告ければ、宋江喜ぶこと斜ならず、三軍を賞しけり。然るに段景住進み出で、馬を奪れし始終備細に訴へしかば、宋江これを聞て大に怒り、向にも曾頭市の徒我手に入べき馬を盗のみならず、剰へ晁天王を射たる、此仇深く骨髓に徹し、近々これを報んと思けるに、彼又此度馬を奪取りしこと、此冤左右言語に盡しがたし、一刻も早く推寄て一々捌取り、晁天王の仇を報ひ、山陣の恥を雪ぐべしと、身を躍らし怒りける。

○宋公明夜曾頭市を打つ

此時吳用が云く、幸ひ今暖春の時節なれば、人馬道中の往來に苦しまず、戰をなすに極てよし、前遭の軍に親方輪たるは、地の利を失ひしゆゑなり、今次は必ず智を以て取べし。宋江が云く、曾頭市の仇は、一山の諸將各被る所なれば、別して智勇を盡し、彼史文恭を活捉て、

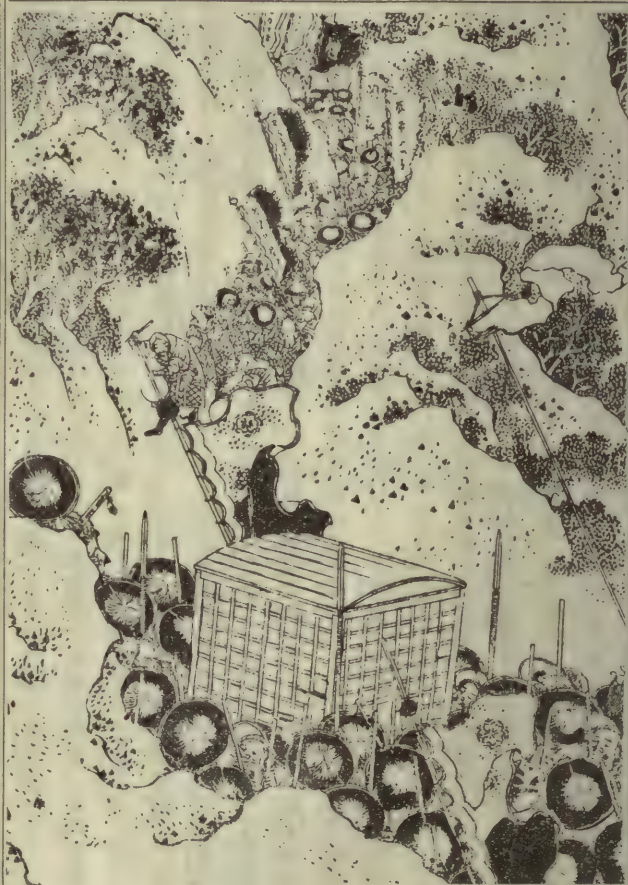
に入べしと、已に議定したりけるに、林冲これを諫て云く、人心は原忖りがたき者なれば、猶三思を加へて此事を行ひ給へ。關勝が云く、英雄たらん者の作んこと、毫髪も妨なし、林頭領必ず心を安んじ給へとて、遂に單廷珪を引て城中に入しかば、魏定國これを迎へ大に悦び、則關勝を饗應して舊情を語り、互に睦じきこと兄弟の如し。魏定國頓て城中の人馬を催して、關勝に相隨ひ、衆皆城中を打出で、關勝が本陣に至りけるに、林冲楊志幷に諸頭領齊しく迎て各相見し、悦び尤淺からず。關勝林冲即刻三軍を起して陣を拂ひ、一度に咄と凱歌を唱へて梁山泊へ引回す。こゝに又神行太保戴宗は宋江が命を奉て、李逵を尋ね、直ちに凌州に入て李逵に遇ひ、宋公明の深く憂ることを李逵に告げ、片時も早く回るべしとて、遂に引て梁山泊へ馳行けり。扨關勝が軍馬ははや金沙灘の邊に至りける處に、金毛犬段景住慌忙き跑來る。林冲恠て問けるは、汝は向に楊林石勇等と共に、北邊に遣し馬を買しめけるに、何故斯慌く回りぬるや。段景住答て、某等三人北邊に馳せ、好馬共二百餘疋買取て青州の地に至りし處に、一簇の強盜起て馬共を悉く奪取り、直に牽て曾頭市に獻じける。楊林石勇も各逃散て其行向知ず、某連夜に馳回て先此ことを告知せ參らす、急に人數を差向け、馬共を取復し給はゞ可ならんや。關勝が云く、一先山陣に回て、宋頭領に訴へ、其後此事を議

ず。又引回しける處に、關勝三軍を發して散々に追擊したりしかば、官軍共手を措に及ずして、數多討取れ、這々中陵縣に至て、人馬を屯しけり。關勝兵を引て、縣を重々に取圍み、三軍に號令を傳へて晝夜緊しく攻さしむ。魏定國は城戸を閉て、再び出戰ふ事なかりけり。單廷珪又關勝林冲に對して云けるは、魏定國はもと一勇の夫なるによつて、若緊しく城を攻給はゞ、縱ひ死す共、降參は致すまじ、願くは某城中に赴き、言を盡し理を究て彼を諫め、早速引て親方に降すべし、然らば宋頭領の望に應ずといひ、干戈の戰を止て人馬の息をも繼すべし。關勝此言を聞て大悅し、則單廷珪を城内に遣しけり。單廷珪已に城内に入ければ、魏定國自ら迎て、來意を問けるに、單廷珪言を盡して云けるは、今朝廷明ならずして天下大亂し、奸臣權を握り、佞人威を振ひ、忠臣讒を蒙り、賢者志を失ふ、我輩先宋公明に隨て、梁山泊に閉籠り、久しうして後、奸臣等朝廷を屏けられん時節有べければ、其刻再び出て邪を去り、正に歸て忠功を天子に盡すべし、足下誤て自ら差ひ給ふ事なかれ。魏定國是を聞て、良久しく沈吟し、已にかくの如くんば、關勝自ら來て我を請ば、我肯て降るべし、若然らずんば、縱ひ死すとも、城を守て降るまじと、詞を放て申ける。單廷珪再び城外に出て陣中に歸り、魏定國が云しことを詳に語りければ、關勝が云く、大丈夫の做こと何の疑かあらん、我今單廷珪と共に城中

舊情を叙べ、遂に單將軍を諫て親方に降らしめぬ。林冲是を聞て大に悦び、先陣中に伴ひけり。扨淩州の兵共は、城中に逃回て單廷珪が敵に降參したることを、張太守丼に魏定國に告ければ、魏定國大に怒り、翌日人馬を引て城外に打出で、三軍喊の聲を揚て戰を挑みける。此時單廷珪は關勝林冲に隨て陣前に出ければ、魏定國これを見て當先に跑出で、單廷珪を指ざして、大に罵て云く、汝恩を忘れ、主に背き、天罰怎か脱れんや。關勝これを聞て甚だ怒り、馬を飛せて砍て出で、兩將已に鋒を交へて、戰いまだ十合に及ばざるに、魏定國本陣を望で逃走る。關勝急に追蒐んとせし處に、單廷珪高聲に呼て、關將軍追給ふべからずと、云ければ、關將此ことを聞て引退んと思ふ時節、淩州の陣中より五百の火兵、盡く皆火器を持て陣外に馳出で、五十輛の火車に高く蘆葦を積み、硫黄焔硝等の火藥を以て、一度に火を著しかば、忽ち猛火を飛せて、敵軍を燒拂ふ。關勝が人馬は、了得に心は勇ども火攻に敗れ、四面八方に奔走す。魏定國追打すること十四五里に至て、再び軍馬を收め、慢々と引回し、城下に近づきける處に、城中に大火起て黑煙一天を迷はしむ。抑是は黑旋風李逵、焦挺鮑旭等を引て軍馬を發し、淩州の背後に推寄て、城の北門を打破り、遂に城内に亂れ入て、四方に火を放ちたるなり。魏定國此光景を見て、敵はや城を乘取たることを料知り、あへて城中に入

が、城外にはや關勝寄來て再三戰を挑む。單廷珪是を見て、一千の軍馬を率し、頓て城外に打出て、關勝を罵りけるは、汝恥を知らざる敗將、いかんぞ又來て死を求るや。關勝これを聞て大に怒り、急に青龍刀を舞し砍て蒐る。單廷珪も馬を躍せ鎗を撚て相迎へ、戰已に二十餘合に及し處に、關勝馬を勒へて慌て忙き逃走る。單廷珪後に從て追懸け、はや十餘里ばかりの路を走りて人なき處に至りし時、關勝又大に呼り罵て云く、汝今馬を下て降參せずんば、性命を害せられんに、早く降て死を脱れよ。單廷珪益怒り、鎗を撚て捌蒐る。關勝こゝに於て平生の神威を振ひ、刀の背を以て只一打にと打けるに、了得の單廷珪遂に打れ、馬より下に落にけり。關勝も相續て馬を跳下り、頓て單廷珪を扶起して、將軍免し給へと、罪を謝しければ、單廷珪甚だ感激し、地上に跪て降參を求める。關勝が云く、某宋公明の前にて足下等兩大將の武勇を吹噓したりしかば、宋公明則某を馳て貴公等兩人を山陣に邀へ、倶に大義に聚んと欲す、毛頭も足下等兩人を殺害する心なし、彌心を傾け、宋公明に隨順し給へ。單廷珪が云く、某原來不才たりといへ共、願くは犬馬の力を施し、同く天に替て道を行ぶべし。關勝これを聞て斜ならず悅び、再び馬を並べて陣前に出しかば、林冲相迎て其故を問けるに、關勝は戰の贏輸を語ず、只答て云けるは、我今人なき所に於て多く

賊等を引て彼陷車を奪取しかば、官軍共大に驚き急に逃んとせし處に、喪門神鮑旭後より馳來て散々に打しかば、官軍盡く四方八埏に逃失けり。李逵自ら陷車を開て、其内を看たりしに、宣贊郝思文綁められて在しかば、李逵大に驚て兩人を救ひ出し、我輩は只別の囚人ならんと思ひしに、足下兩人を救ひしこと、莫大の幸なりと欣躍す。郝思文又逵李が此處に在所以を問ければ、李逵此時宋公明に責られて、其夜暗に山陣を馳下り、半途に於て先韓伯龍を殺し、其後又焦挺に遇て共に此處に至りしこと、始終具に語り、頓て鮑旭焦挺を請て宣贊、郝思文に遇しめ、衆皆悅ぶこと限なし。郝思文又鮑旭、焦挺に對して云けるは、足下兩人彌梁山泊に入て、宋頭領に隨順し給はんとならば、先此山の手勢を引て凌州に馳行き、心を同うし力を併て、凌州を攻候はんこと、是第一の上計ならん。鮑旭が云く、我も今李公と斯ぞ議しけるに、足下の言我輩が存念と相同じ、我此山陣にも總て四五百疋の馬七八百人の兵あり、急ぎ是を領し打立べしとて、卽日五人の大將遂に軍馬を領して、凌州へと進發す。彼二三百の官軍共は、二つの陷車を奪れ、右往左往に逃散て、追々に凌州城に馳回り、半途に於て强盜等に陷車を奪取れたるよしを、張太守幷に單、魏、兩將に告ければ、兩將これを聞て大に怒り、若再び彼等を活捉ば、當城に於てこれを斬罪すべしと、各牙咬をなして殘念がりける

黒旋風
喪門神
囚車を奪て
不圖宣郝
二将を救ふ

けるに、西の方より四五百の人馬一度に竝び起て鉤索を地上に引き、先宣贊が馬を鉤倒して、遂に宣贊を生捉けり。郝思文これを見て、急ぎ退んとせし處に、東の方よりも又四五百の軍馬一同に競ひ來り、同く郝思文が馬を鉤倒して頓て、是をも活捉けり。憐むべし。宣贊、郝思文は、敵の計に中て、白々と擒になり、已に凌州へ引渡さる。單、魏、兩將は各五百の人馬を引て再び陣外に打て出で、恰も烈火のごとく關勝が陣に突入しかば、關勝これを防ぐに便なく、遂に潰亂れて敗走す。單、魏、兩將は勝に乘て追來を、關勝三五里ばかり至りし處に、幸ひ林冲楊志兵を領して、左右より攻來り、荒手の精兵を進めて、横合より衝しめければ、凌州の官軍共新手の人馬に跑立られ、忽ち敗れて引回しぬ。此時關勝敗軍を收めて林冲等と兵を合せける處に、孫立、黃信等も人馬を引て已に至り、諸軍一處に陣を取て屯しぬ。單、魏、兩將は宣贊郝思文を活捉て勝利を得、遂に城中に引取しかば、張太守自ら相迎て三軍を賞し、頓て宣、郝、兩人を陷車に載せ、總て三百餘人を跟て東京へ引せけり。官軍共は囚車を監押して急ぎしかば、はや半途に至て前面を見るに、山の上に枯樹多き處有けるが、忽然として鼓の音此内より響き、一簇の強賊群り起て、當先に大漢子二つの斧を輪して馳下り、呼る聲は雷の轟くごとくにして、梁山泊の豪傑黑旋風李逵こゝに在りと、吼て路を攔り、遂に小

と云七字を書ぬ。關勝是を見て馬を陣前に勒へ、先高聲に呼て云く、兩將軍別れてよりは、曾て消息を聞ざりけるに、愈恙なき體を拜謁し、某甚だ是を忻悅す。單、魏、兩將此言を聞て大に罵り、關勝汝は已に盜賊に隨順し、上は朝廷の恩澤に背き、下は先祖の名目を辱しめ、今日又自ら來て天子の國を犯さんとするは、罪いよ〳〵九族を亡すに當れり、早々手を束ねて、綁を被れ。關勝答て云く、汝兩將大に差へり、當代の主上自ら昧くましますゆゑ、奸臣權を握て小人を進め、君子を退け、擅に天下の生靈を傷ふ、是に依て宋公明許多の豪傑を梁山泊に聚め、各天に替て道を行ふ、宋公明久しく足下兩人の淸德を慕ひ、則某を遣し、兩將を山陣に請奉る、若宋公明を棄給はずんば、速に駕を枉給へ。單、魏、兩將大に怒り、汝何ぞ我輩を辱るやとて、一度に軍器を擧て當先に馳出で、兩軍紛々と亂れて、戰已に數刻に至りしか共、單、魏、兩將一點も懼るゝ色なく、精神益盛んにして、勇氣諸軍に勝れけり。かゝる處に宣贊、郝思文齊しく馬を飛せて跑出で、則單、魏、兩將を迎へ各鋒を合せ、互に功を爭ひ名を惜み、一來一往祕術を盡し相鬪み、戰已に二十餘合に至りし處、單、魏、兩將一同に馬を勒へて本陣に引回す。郝思文、宣贊、猶後を慕ひ、陣中に追入しかば、魏定國は左の方に馳せ、單廷珪は右の方に走る。宣贊、郝思文相分れて追蒐

六編　卷之五十六

○關勝水火の二將を降す

偖も大刀關勝は、宣贊、郝思文兩將を引五千の人馬を領し、直に凌州へ急ぎし程に、凌州も早近々と望みける。此時凌州の太守は勅書幷に蔡太師が文書を接へ、則兵馬團練使單廷珪、魏定國兩人の大將を招き、勅書の趣を語て委細を議しけるに、兩將此事を承つて云けるは、今天下に文武兩道を兼たる名將多しといへ共、此度の討手を某等兩人に仰せ賜ること、誠に廣大の面目なりと大悦し、急ぎ人馬を催し、近日出陣すべしとて、已に用意を調ふべき處に、近村鄰鄉より飛脚往々馳來り、梁山泊の大將大刀關勝、數千の軍馬を引て逆寄し、はや近々と至りぬと、報じければ、單、魏兩將これを聞て大に怒り、早速兵を率して城外に打出で、兩軍已に相迎へ陣を對す。梁山泊の陣中關勝當先に出で、凌州の陣中よりは、單廷珪進み出で、前面に一本の大旗を持しむ。旗の上には銀字を以て、聖水將軍單廷珪と云七字を書ぬ。其次には又魏定國進み出づ、同く一本の大旗を持しむ。旗の上には銀字を以て神火將軍魏定國

我は後より頓て回るべしと、意を決し云ければ、時遷は原來李逵が急性なるを怕れしかば、再び諫言を加るに及ず、遂に別れ先山陣に歸りける。李逵は又焦挺と共に枯樹山を望て進發す。闕勝、單、魏、兩將を歸降せしむる事わけ、李逵鮑旭が働等、次卷に詳なり。

梁山泊の宋公明に從はざるや。焦挺が云く、我久しく宋頭領を慕ふといへ共、未だ樞機あらず、徒に打過しなり、今日李公に遇たるは天其便を賜るものなり、李公もしいよ〳〵某を棄給はずんば、隨て梁山泊に上るべし。李逵が云く、我此度只獨山陣を打出しことは、宋公明に責られたるにより、何卒單、魏、兩將を打取て恥を淸んと欲するが故なるに、豈能手を空して回らんや、汝もし果して梁山泊に上んとならば、先我を引て枯樹山に行彼鮑旭を諫て、共に凌州に馳せ、單、魏、兩將を討取て大功を建て、而して後梁山泊に回るべし。焦挺が云く、凌州一府には許若の軍馬有べきに、我輩たとひ城中に忍び入たりとも、本望を遂んこと能ずして、空しく一命を失ふべし、先枯樹山に馳て鮑旭を誘引し、共に梁山泊に上て其後此事を圖らば可ならんやと、兩人評議して在ける處に、時遷此處に跑著て呼り云けるは、李公何故山陣を忍び出給ひて、斯諸人を患はしめ給ふや、宋頭領已に人を四路に馳て李公を尋しめ給ふ、先一刻も急に山陣に回り給へ。此時李逵焦挺を請て時遷に遇しめ、始終のことを具さに語りける。時遷又李逵を諫て云く、早々山陣に歸り給ひて、宋頭領の心を安んぜしめ給へと、只顧催促しける處に、李逵答て云く、我今焦挺と議定して、先枯樹山に赴きかの鮑旭を引て山陣に歸んと欲す、汝も倶に我に隨て來るべし。時遷が云く、是大に不可なり、宋頭領專ら待わびて苦

我決して汝に贏がたしとて、遂に走り行んとしたりけるに、彼漢子又李逵を呼回して云く、先汝が姓名を我に報よ、其後又我姓名を汝に達すべし。李逵が云く、我は是梁山泊の頭領黒旋風李逵と云者なり。彼漢子これを聞て、汝已に梁山泊の豪傑ならば、稀にも兵を引て通るべきことなるに、況や今兵亂時節只一人何國に赴くや。李逵が云く、我此度凌州にはせ、彼單廷珪、魏定國の兩人を討て大功を顯さんと欲し、今已に此處に至れり。彼漢子が云く、梁山泊よりは、先立て軍馬打出けるに、汝梁山泊の李逵に僞なくんば、向に發向せし大將等の姓名も知つらんに、早々これを告知せよ。李逵が云く、先に打出たる大將は、大刀關勝なり、其跡より打出たるは、豹子頭林冲、青面獸楊志等なり。彼漢子是を聞て、忽ち李逵に向て拜をなす。李逵又問て云く、願くは早く汝が姓名を聞ん。彼漢子が云く、某は原中山府の者にして、先祖より相撲を傳へ、子々孫々に至るまで、これを業とす、只今李公を打し拳法も、先祖より傳へし處の祕密の手なり、某が姓は焦、名は挺と號し、綽名は沒面目と申す、尤も山東河北の地に隱れなし、皆承るに、寇州枯樹山に一人の豪傑山陣を列ね、猛威を遠近に振て、專ら好で人を殺す故、世擧て喪門神鮑旭と稱す、我今彼山に上て鮑旭に隨順せんと欲し、想はず此處にて李公に見え申こと誠に雀躍の至なり。李逵が云く、足下かくのごとき武勇を保ち何故我

黒旋風一撃に
韓伯龍を殺す

主宋公明の開かしめ給ふ者にて、我は是梁山泊の豪傑韓伯龍と云頭領なり、汝若我を欺ば一死立處に至るべし。李逵此言を聞て心中に冷笑ひ、此漢子必定我山陣の威風を假て、強盜をなすに疑ひなし、我幸ひ今是を除んと、忽ち計を設け、先一つの斧を投出して云けるは、我酒錢を償ふまで、此斧を預けて質とせん、汝これを許さんや。韓伯龍計とは知らずして、則是を許し頓て手を舒し斧を取らんとせし處に、李逵急に斧を擧て、韓伯龍が眉間に打蒐しかば、憐むべし、韓伯龍は今日想ず李逵が手に死にけり。李逵は竟に店を出て凌州へと急ぎける處に、又路の傍より一人の大漢子走り出で、李逵が面を打望で蹺蹊ありげに見えしかば、李逵則問て云く、何奴なれば、一向我を見るや。彼漢子答て云く、我汝を見る共何の妨かあらん。李逵これを聞て大に怒り、頓て彼漢子に打て蒐る。彼漢子少しも騒ずして、右の拳を揮擧け、却て李逵が肩骨を痛く打ければ、李逵忽ち駭然として驚き、此漢子いかんぞかくのごとく饒勇なるや、必然剛の者ならん、先彼が姓名を問んとて、李逵再び呼つて問けるは、汝が姓名はいかん。彼漢子打笑て云く、我は元來姓名もなし、汝無益のことを問んより、速に來て我と雌雄を決せよ。李逵此言を聞て、大に怒り重て拳をあげ、足を飛せて打入ける處に、彼漢子又李逵が小腹を踢たりしかば、李逵高聲に呼つて云く、汝はいかなる者なれば、かく強勇なるや、

す。呉用が云く、宋君いかんぞ彼が心を知り給はぬや、彼は原其性靜ならずといへども、却て義氣重し、多くは二三日の内に再び囘り來るべし、宋君先心を安んじ給へと、諫しか共、宋江猶深く念慮にかけて、先戴宗を遣し尋ねしめ、後又時遷、李雲、樂和、王定六、四人を四路に分遣して、共に尋ねしむ。黑旋風は其夜兩個の斧を提て山陣を馳下り、小路を過て凌州へと走り行く、李逵心中に想道く、彼官軍等を討んに、何ぞ必しも餘多の人馬を用んや、我城中に跑入り、一々賊官を斬殺し、宋公明に悅ばしめ、向後諸朋友と、一點の勇氣をも爭はんとて、覺えず欣々然として、半日許馳しかば、忽ち飢渴に逼て、人家もやあると、左右を伺ひ見るに、果して一軒の酒店有ければ、李逵則走り入り、多く酒肉を求めて是を用ひ、已に身を奮て跳出んとせし處に、酒保攔住めて酒錢を求めしかば、李逵が云く、我先途中に出て宜しき商買を尋ね、重て囘るさに酒錢を償ふべし、暫く先賖らしめよと、又走り出んとせし時、一人の大漢子外面より進み入て大に怒り、汝は誰なればかく大膽に酒を飮で錢を償ざるや。李逵兩眼を睜開て云く、我は是何方にても錢を償はずして飽まで酒食を吃す、汝も只曲てこれを許せ、必ず錢を求めて禍を得ることなかれ。彼大漢子罵つて云く、汝は定めて道中に徘徊する、小賊にてぞ有ん、我此店の由來を語て、汝に聞せん、汝驚くことなかれ、抑此酒店は梁山泊の

いかゞ是を許し給はんや。宋江此言を聞て斜ならず悦び、則宣贊郝思文兩人を副將として、關勝に從はしめ、五千の精兵を擇んでこれを與へければ、翌日關勝兵を引て山を下りけるに、宋江等は皆金沙灘迄送り、竟に別れ、關勝は宣、郝、兩氏とともに凌州へ進發す。扨呉用は宋江に對していはく、關勝此度の出陣いまだ其心を保ずして、必然誤もやあらん、再び良將を遣し救應をなさしめば可ならんとて、林冲、楊志を大將として孫立、黄信を副將とし、總て五千の人馬を與へ、凌州道へ遣しける。斯る處に、黑旋風李逵進み出て云けるは、某も兵を借て發向致さん、宋君これを許し給へ。宋江が云く、此度は汝を用ひがたし、已に良將有て打立しかば、定て大功を建べし、亦復汝を遣して何の益かあらん。李逵大に焦燥て云く、我若閑暇に在時は、必ず病を生ず、宋君若兵を借給はずんば、我一人山を下て馳行べし。宋江是を聞て甚だ責り、汝若我軍令を用ひずんば、先汝が頭を刎べしと、聲を勵し罵りければ、李逵は只鬱々として、忠義堂を下りける。林冲楊志は已に兵を引て山陣を打出ぬ。翌日一人の兵忠義堂の前に至り、昨夜二更の時分黑旋風李逵兩個の斧を提て、山陣を忍び出で、更に行向知れずと、告ければ、宋江此言を聞て大に苦み、我昨夜彼を責りけるゆゑ、彼必定それを憤り、他所へ投たるに違なし、我もし早く斯あらんを知らば、責るまじき物をとて、再三これを後悔

師の言極て其理あり、先人を北京に馳て事の實否を探聞しめ、其後堅く備へて官軍を防ば可ならんや。吳用打咲つて云く、某已に人を馳てはや旬日を過しぬ、定めて今明日中には、歸山すべしと、語りける處に、果して此日彼探事人立歸り、北京の梁中書、表を天子に獻じ、奏聞を遂しかば、諫議大夫趙鼎宋江等を御赦免あらば、可ならんと奏しけるに、蔡京大に怒り、趙鼎が官爵を削り、今凌州の猛將單廷珪、魏定國等に軍馬を領せしめ、近々山陣に寄來ると風聞頻なるよしを報ければ、宋江問て云く、已にかくのごとくんば、いかなる計を以て是に當らんや。吳用答て云く、宋君少も是を憂へ給ふこと勿れ、若彼我が山陣に寄來らば、早速是をも活捉べしと、いまだ云も終らざるに、關勝すゝみ出て、某山陣に上てより以來、宋君の洪恩を蒙るといへ共、いまだ一分の氣力をも費さず、幸ひ此囘は某あへて馳向ふべし、彼單廷珪、魏定國は某曾てこれを知れり、抑かの單廷珪は能水を用て、兵を渰すの法を曉しぬるにより、人皆聖水將軍と稱す、又魏定國はよく火を用ひて、兵を擊の法を曉しぬるにより、人擧て神火將軍と稱す、某尤不才不智なりといへ共、願くは五千の軍馬を借て、未だ彼等か至らざる先に凌州に推寄せ、早く敵の動靜を窺ひ、彼若親方に降參致さば誘引して山陣に囘るべし、若又降參致さずんば、活捉て宋君に獻ずべし、全く諸頭領の力を用るに及ぶまじ、宋君

を防がしめ給はゞ、却て是上計ならんかと、未だ云も畢らざるに、蔡京此言を聞て大に怒り、汝已に諫議大夫として、いかんぞ朝廷の憲法綱紀を滅せしむるや、彼賊等は都て萬死に當るの朝敵なり、若これを御赦免有ば、政天下に行はれじと、奏しけるに、帝叡聞有て則此奏に同じ給ひ、趙鼎が官爵を取上給ひて、再び入朝すべからずと、勅命有しかば、趙鼎暗に歎息して退朝す。帝又蔡京に問て宣ひけるは、此賊已に朝敵たれば、急ぎこれを討ずんば有べからず、知らず誰を遣して征伐せしめば可ならんや。蔡太師奏して云く、臣是を思ふに、彼が如き草賊猶いまだ大軍を用るに足ず、凌州に兩人の勇將あり、一人姓は單、名は廷珪、又一人姓は魏、名は定國と申し、則凌州の團練使なり、伏して願くは陛下此兩人を召て一彪の軍馬を與へ給ひ、近日梁山泊に遣し、賊等を征伐あらしめ給はゞ、必定水泊を掃清め早速捷軍の表を獻ずべし。帝大に御感あり、勅書を修ふべきよし、樞密院に命じ給ひ、殿中に入せ給ひしかば、百官盡く退出し、各心中に冷笑ひぬ。翌日蔡京勅使を擇で凌州へ遣しけり。扨又梁泊山の豪傑等は都て忠義堂に會聚したりける處に、呉用先宋江等に對して云けるは、此度北京城を攻破り、多くの軍民を殺したれば、梁中書などか表を京に獻じて奏聞せざらん、殊更當朝の太師蔡京は、梁中書が丈人なれば、必ず軍馬を起して當陣を攻さすべし。宋江が云く、軍

し、剰へ我を害せんと料り、却て今我に殺さるゝは、是則天罰なりとて、頓て兩人の頭を刎にけり。盧俊義再び堂上に登り諸頭領に謝し、衆皆悦びを催ぬ。扨又梁中書は梁山泊の兵已に引取ぬと聞しかば、再び李成、聞達とともに、敗軍を收め遂に城中に入り、家内眷屬都て殺されければ、各深く哭きける。梁中書餘りにこれをうらみ、さつそく隣國に馳て急を告て人馬を借り、各跡を慕追蒐けしか共、梁山泊の人馬は早遠く馳過しかば、官軍共竟に追著ず、空しく兵を收めて引回しぬ。こゝに又梁中書が夫人は、幸に後園の内に隱れ一命を脱れ、則梁中書をして表を京に獻ぜしめ、此度梁山泊の賊と戰ひ、親方に討れたる者五千餘人、中傷は其數を知らずと訟へしかば、蔡太師先これを聞て大に怒り、翌日五更の一點に、諸の文武百官を聚め、則蔡太師を首として帝に表を獻り、北京の軍の次第逐一詳に奏しければ、帝大に驚せ給ひ、百官と議して曰ひけるは、梁山泊の强賊屢大罪を犯す、言語道斷の事なり、何等の計を用ひて是を平げんやとて、龍顏患しく見えさせ給ふ。時に諫議大夫趙鼎、列を出て奏しけるは、向に大刀關勝に兵を與へて、差向し處に、戰に負賊に活捉られぬ、其以前呼延灼、幷に韓滔、彭玘等も勝を取ず、敗北せしも、蓋地の利を失うたる故ならん、臣愚意を以てこれを思ふに、若勅書を下し賜て、彼等を御赦免有り、則良臣となして、邊境の害

を聞て大に怒り、汝兩人何ごとか曉して無禮の言をいふや、再び多言することなかれと、大にこれを叱りける。盧俊義又宋江に對して云く、宋君もし頻にかくのごとくんば、我心半點も安んじがたし、伏して願くは此論を休給へとて、跪て牢く辭しける處に、李逵又呼て云く、兩公無益のことに言語を費し給はんより、宋君は皇帝をなし、盧公は宰相となり給へ、我輩は皆大官をなし、生涯を樂ん、早く軍馬を起して東京を攻給へと、躍起つて云ければ、宋江此言を聞て、忽ち忿然として顏色を變じ、大に李逵を罵りければ、吳用再四宋江を諫て云く、宋君先怒りを休給へ、今宵は盧員外を歇ましめ、後日其功に依て、再び座位のことを議論有べしと、當然の理をもつて是を決しければ、宋江甚だ悅び、其夜は皆々歇みける。此時薛永は已に鬮勝が眷族を取て山陣に回りけり。翌日宋江は多く賜を以て、馬軍、步軍、水軍、一人も遺さず恩賞を行ひけり。盧俊義は彼淫婦奸夫兩人の族を、今日殺害すべきよしを宋江に告ければ、宋江打笑て云く、我誠に是を忘れぬ、早く拖出せと、左右に命じけるに、軍卒共頓て兩人を引出し、李固を左の方の柱に綁著け、賈氏を右の方の柱に縛附け、則宋江盧俊義幷に諸頭領を請て一覽に呈す。宋江がいはく、此兩人が罪惡は、元來問に及ばず、唯盧員外の心のまゝに行ひ給へと、云ければ、盧俊義自ら刀を提て、忠義堂を下り大に罵つて云く、汝兩人不義をな

座を列ねし處に、宋江先盧俊義に對して云く、我輩都て盧員外を山陣に留め進せ、共に大義に聚んと欲し、却て大難を員外に請しめ、某朝夕是を患として、寸心を惱しける處に、今日再び尊顏を覩奉ること、何事の幸かこれに增らん、願くは員外我輩が大罪を免し給へ。盧俊義これを謝して云く、上は宋君の虎威に托し、下は諸豪傑の勇力に依て、脱れがたき一命を拾ひ、今日再び山陣に上りしこと、此恩天地と相同じ、何を以てかこれを報んやとて、感激に勝ざりけり。扨又蔡福、蔡慶は恭しく宋江を拜し、心を傾け膽を吐て隨順す。此時宋江自ら下て、山陣の主を盧員外に讓りければ、盧俊義大に謙退して云く、某は何等の者なれば、敢て山陣の主たらんや、只宋君の帳前に一卒共なりなば、某愚なりといへ共犬馬の勞を施し、聊救命の恩を報ずべし、是則莫大の福なるに、宋君何故慇懃の言をもつて某を苦め給ふやと、再三頓首して是を辭しければ、宋江が云く、盧公の德誰か是を敬はざらんや、必ず辭し給ふことなかれとて、猶頻に第一位の座を讓りしかども、盧俊義決して是に從はず。かゝる處に黑旋風李逵大音聲にたけり呼つていはく、宋君若山陣の主を他人に讓り給はゞ、我早速斧を以て立處に一座を鬧さんと、いまだ云も終らざるに、行者武松も同く進み出て云く、宋君只顧位を相讓り給ふならば、恐らくは諸頭領の心に合はずして、異事出來らんも測がたし。宋江これ

我自ら其者等が罪を行はん、宜しく是を守り候へとて、燕青張順に預けける。扨梁中書は李成に從て城外に逃出し處に、又聞達に適遇ひ、則敗軍を收めて、勢を一所に合せ、倶に南を望で落行き、纔半里ばかり馳ける處に、前面に喊の聲大に起り、混世魔王樊瑞、項充李袞兩人を從へて、各名飛刀を舞し、飛鎗を揮て攻來る。背後には又挿翅虎雷横、施恩、穆春を引て二千の步軍を率し、喊を揚鼓を擂て梁中書が軍馬を攔へけり。此時殆危く見えけれども、李成聞達死戰をなして前後にあたり、竟に圍を突拔て大難を脫れ、共に梁中書を護てこれより又路を換へ、各西を臨で走り行く。樊瑞、項充、李袞等は、雷横、施恩、穆春等と兵を合せ、急ぎ後に隨て追蒐け敵兵餘多討取けり。

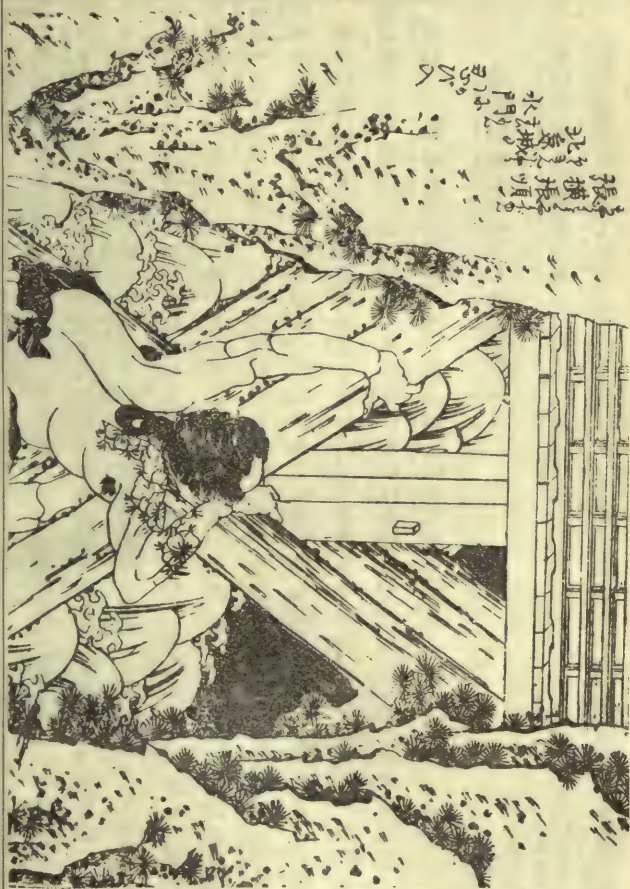
○宋江馬步三軍を賞す

吳學究は城中に在て四方の猛火を消さしめ、大名府の庫を開て金銀米錢を奪取り、則是を分つて城中の百姓に施し、其餘は悉く車に載て、梁山泊へ運せけり。諸の豪傑已に人馬を引て馳集りしかば、頓て李固賈氏兩人を陷車に載せ、諸の軍馬を三隊に分け、凱歌を作り直に梁山泊へ引回す。宋江は此消息を聞て大に悦び、自ら山を下て相迎へ、遂に忠義堂に至て、各

固兩人を捉ふべしとて、直に私宅へと跑行ける。扨彼淫婦賈氏奸夫李固は、梁山泊の豪傑人馬を引て、城中に攻入しと聞しかば、急に家を出て逃行んとせし處に、若干の人喊き叫んで家内に打入ければ、李固これを見て大に怕れ、賈氏とともに身を回して、後門の方の水邊に出で、蘆葦の内に身を躱さんとしたりけるに、張順岸の上に在て、大音聲に呼り、淫婦、奸夫汝等何國に走んとするや、速に手を束ねて索を掛れと、罵りければ、李固忽然として、魂魄體に附ず、慌忙き船の上に飛下り、艙の内に隱んとせし處に、一人の漢子早く現れ出て、李固を揪へ大に罵つて云く、奸賊汝我を認識たるや。李固此漢子が音聲を聞に、浪子燕青なりしかば、則答て云く、燕青汝と我とは、仇もなく寃もなきに、何ゆゑ我を揪ふるやと、事もなげに云けるに、燕青益怒て終に綁めければ、張順ははや淫婦賈氏を捉て船の邊に拖り來り、李固と共に城の東門を望て連行けり。扨盧俊義は五人の豪傑を引て家内に至り、彼此搜しけれども、李固と賈氏とは見えざりけり。よつて先家財を收拾よとて、金銀珠玉等盡く擇み取て、車に載せ、遂に吳用に會合せり。柴進も又蔡福蔡慶を引て、同じく吳學究に遇けるに、天色はや明にけり。此とき吳用三軍を收て、百姓を犯すことなかれと、厳に號令を傳へしかば、百姓ども甚だ是を感悦す。燕青張順は奸夫淫婦を引來りけるに、盧俊義これを看て、大に悦び、

半なる處に、小李廣花榮弓を拈り、箭を搭へ能引て兵と放ちければ、李成が副將箭に中つて、馬より下にまつさかしまに落にけり。李成是を見て、大に駭き急ぎ馬を回して走り行處に、右の方に又喊の聲忽ち起り、霹靂火秦明馬を躍せ棒を舞し、燕順、歐鵬を引て突出る。楊志も同じく後より進しかば、李成此に於て大に潰亂し、兵過半討取れて、這々梁中書を護て逃去けり。扨又杜遷、宋萬は梁中書が館に亂れ入て、一家の男女一人も遺さず斬盡す。劉唐、楊雄は太守が眷族を斬殺す。孔明、孔亮は獄屋の後より、墻を越て跳入ける。鄒淵、鄒潤は獄屋の前に在て、往來の官軍共を斬拂ふ。獄屋の内には、柴進、樂和相圖の火已に起りたるを見て、蔡福、蔡慶等兩人に對て云く、足下兄弟此騷動を見給ひぬるや、早々牢門を開て盧俊義石秀兩人を救ひ出し給へと、いまだ云も終らざるに、鄒淵、鄒潤刀を揮て斬て入り、梁山泊の豪傑都て此處に在り、早く盧員外石秀兩人を出して、降參せよと、呼りしかば、蔡福兄弟これを聞て大きに駭きけり。孔明孔亮は已に塀を越て牢門の前に跳下り、頓て牢を打破り、盧員外、石秀を救ひ出し、猶四方に當て打回る。柴進急ぎ蔡福、蔡慶を諫て云く、足下兩人速に眷屬を帶して、我輩に降參し、共に梁山泊に上り給へ。蔡福兄弟これを聞て原より望所なりしかば、早速眷屬を引て柴進に相從ふ。此時盧俊義は、石秀、孔明、孔亮、鄒淵、鄒潤等五人を引て、賈氏李

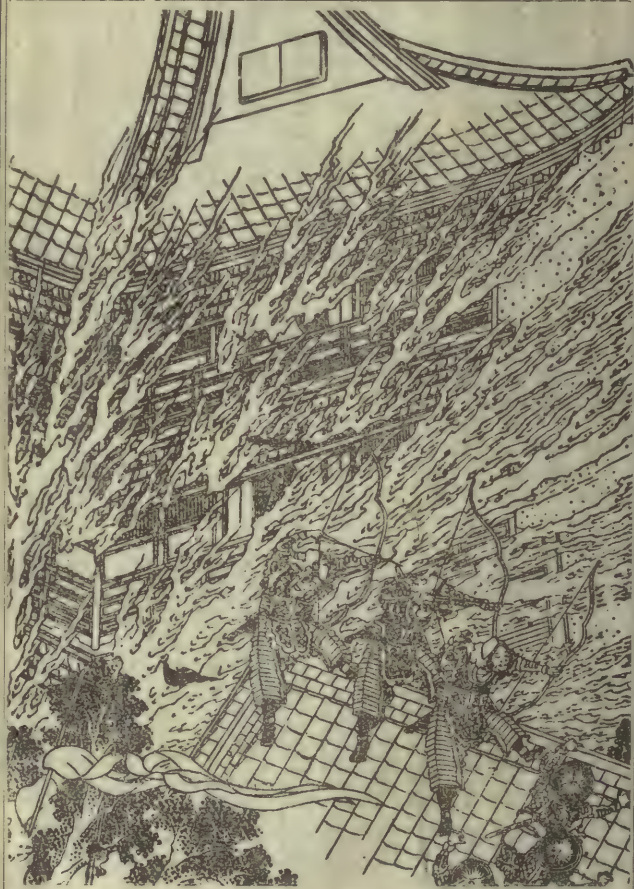
方に奔走す。梁中書又西門の方に逃行し處に、城隍廟の內より大石炮を放て天地も崩るゝばかりの音あり。鄒淵鄒潤相ならびあらはれ出で、おの〳〵火器を持て所々に火を著しかば、忽ち焰を飛せて焚起る。王矮虎、一丈青、孫新、顧大嫂四人は一所に在て相働く。張青孫二娘は銅佛寺の前に在て火を放けるに、北京城の百姓共、哭き叫んで奔走す。此時四方の火勢大に盛なり。扨梁中書は西門の邊にて李成が軍馬に適遇ひ、勢を一所に合せて、南門の城樓に上り、遙城下を望み見るに、大軍群て旗號の上に、呼延灼と云三字を分明に書附け、中には呼延灼あり、左には韓滔あり、右には彭玘あり、後には黃信あり、同く三軍を進て攻來る。梁中書城外に出ること能はず。また東門の方に馳けるに、沒遮攔穆弘幷に杜興鄭天壽左右に相從ひ、當先に進み都て一千餘人を引率し、城中に斬て入り、梁中書又南門の方に馳て、吊橋の邊に至りける處に、火把の光白晝のごとくにして、黑旋風李逵、幷に李立、曹正、各軍器を捻つて、城外より攻來る。李成當先に跑て一つの路を殺開き、梁中書を護て忙はしく逃行處に、左の方に喊の聲大に起て若干の火把を揮照し、大刀關勝赤馬に乘青龍刀を舞し、直に梁中書に斬て蒐る。李成急に兩刀を揮て相迎へ、戰未だ數合に至らざるに、宣贊、郝思文、左右より斬て出で、孫立は後に在て兵を進め、一度に鼓を鳴し攻來り、敵親方紛々と相亂れて戰まさに

張横張順

は此消息を聞て大に驚き、馬物の具と慌忙きける處に、時遷遂に翠雲樓に火を放しかば、忽ち煌々と焚上て、烈き焔天に衝突火光月の明を奪ふ。梁中書彌肝を消し、急ぎ馬に乗て火を救はんと跑出しける所に、兩人の大漢子各車を推て馳來り、頓て車の内に火を放ちけるに、原來多く火藥を設けたるにや、同き猛火起て黑烟人を迷はしむ。梁中書益仰天し、城の東門に出んとせし處に、彼兩人の大漢子大音聲に呼つて云く、我が輩は梁山泊の豪傑李應史進なり。官軍共一人も脱さじとて、刀を揮て狂ひしかば、城門を守軍士等大に騒動し、盡く皆先を爭ひ逃走る。殿れたる軍士總て十餘人討れけり。杜遷宋萬も同く刀を揮て馳來り、李應史進と共に、四人一處に在て、城の東門を攔りければ、梁中書是を見て、心を冷し魂を散し、直に南門を望んで走り行く。こゝに又一人の大和尚禪杖を輪し、一人の行者兩刀を使ひ、喊き叫んで、斬回る。梁中書大に恐れ、再び馬を回し館前に至りける。

○吳用智を以て大名府を取る

かゝる處に解珍解寶各軍器を擧て、四面八方に跳たりしかば、梁中書又州衙の邊に馳行けり。扨王太守は劉唐楊雄に適遇て闘けるが、遂に兩頭領に殺されける。其餘の軍官等は各四

盡せり。此夜節級蔡福は舍弟蔡慶に牢獄を守せて、先私宅に歸りし處に、柴進已に樂和を引て門内に入ければ、蔡福慇懃に迎て饗應しぬ。時に柴進が云く、我輩今宵の便機に乘じて、盧員外、石秀を訪んと欲す、願くは節級牢中に導せ給へ。蔡福これを聞て、早其來意を察し、暗に躊躇して想道く、若此人等が望を准へずんば、後必ず寃をや請べき、しかず早く導んにはとて、遂に柴進等兩人を引て牢中に至りけるに、時にはや初更の時分なり。扨彼王英、一丈青、孫新、顧大嫂、張青、孫二娘等は、郷下の者に出立て、城の東邊に馳入ぬ。公孫勝凌振は城隍廟の邊に徘徊ず。鄒淵、鄒潤は花燈を挑て城中に奔走す。杜遷宋萬は各一輛の車を推て梁中書の門前に往來す。劉唐楊雄は各水火棒を持て、州橋の兩邊に盤桓ふ。燕青、張順は城の水門より城内に入て、靜なる處に埋伏す。時已に二更前後になりしかば、時遷は籃の内に硫黃焰焇等の火藥を入れ、暗に翠雲樓に上て樓閣の内を見るに、笛を吹鼓を打て、若干の貴賤座に充滿す。時遷心中に想道く、約束の時刻已に至りしかば、城外には定て、梁山泊の人馬はや推寄たらんに、急ぎ事を行ふべしと圖りし處に、樓前の諸人一度に騷動し、梁山泊の軍馬推寄聞達が陣を破りしぞと呼り、敗軍共都て城内に引退く。李成は城中に在て、此消息を聞慌忙き、兵を催し城門を閉しむ。王太守は手勢百餘人を引き、梁中書が館に馳來る。梁中書

時遷
火を放つて
翠雲樓を
焼

は簷を飛壁を走ることの達人なりけるが、本路より城に入らば、萬一看尤に遭こともやあらんずればとて、夜中墻を越て城中に飛入り、彼此にて旅宿を求めけれども、單身旅人には、宿を借がたしとて留めざりしかば、晝は街に徘徊して、夜は東嶽廟の内に歇み、正月十三日の朝獨閑に街を遊行して四下を見るに、千門萬戸盡く花燈棚を設け、豫め上元の夜の用意をぞ催しける。かゝる處に解珍、解寶は麅兎等の野味を荷て城中を往來す。又杜遷宋萬兩人も同じく此邊を徘徊す。爰に又孔明は乞食の形に身を窶し、手に一つの碗を提此處に至りけるが、時遷を見て暗に詞を懸しかば、時遷が云く、足下原來上品の人物なるにより、曾て乞食の模樣にあらず、若下官等に見尤らるゝことあらば、由々しき大事ならん、早く此邊を避行給へと、いまだ云も畢らざるに、舍弟孔亮も同じく乞食に假て此邊に至る。劉唐、楊雄は此三人の者を見て速に馳來り、汝三人何ぞ此處に徘徊するや、下官等に捉れなば、宋頭領の大事を誤るべきぞ、先我等兩人に隨て來れとて、五人同く寺の前に至りし處に、又公孫勝、凌振兩人に往遇ひ、七人暗に商議を定め、各四方に分れけり。上元の夜も早近かりしかば、梁中書已に聞達に兵を與へて、城外飛虎峪の邊に陣取しめ、又李成に騎馬の軍士五百人を與へて、城の四方を巡しむ。已に正月十五日に至りしかば、北京城中の民屋幷に寺院色々の花燈を設て、各善盡し美

て賊を防ぐべし、李成にも亦同じく、一彪の軍馬を與へて、城の四方を巡見致さすべし、然らば賊來るといふ共恐るゝに足ず、相公自ら是を察し給へ。梁中書此言を聞て可なりと同じ、頓て文書を北京中に廻し、今年は例よりも多く花燈を設け、貴賤相共に樂べきよしをぞ觸にけり。扨梁山泊には北京の消息を聞しかば、吳學究宋江に對して云く、此度は宋君に替つて北京に向ふべしとて、急ぎ八路の軍馬を催しぬ。第一隊の大將は、雙鞭將呼延灼なり。韓滔彭玘を引て前部とし、鎭三山黃信を後陣に在しめて救應とす。第二隊の大將は、豹子頭林冲なり。馬麟鄧飛を引て前鋒とし、小李廣花榮を後陣に在しめ、救應とす。第三隊の大將は大刀關勝なり。宣贊郝思文を引て前軍とし、病尉遲孫立を後陣に在しめ、救應とす。第四隊の大將は霹靂火秦明なり、歐鵬燕順を前部とし、青面獸楊志を後陣に在しめ、救應とす。第五隊の大將は歩軍頭領沒遮攔穆弘なり。杜興鄭天壽を引て進發す。第六隊の大將は同く歩軍の頭領黑旋風李逵なり、李立曹正を引て進發す。第七隊の大將は同く歩軍頭領挿翅虎雷横なり。施恩穆春を引て進發す。第八隊の大將は同く歩軍の頭領混世魔王樊瑞なり、項充李衮等を引て發進す。手配已に調りしかば、正月十五日の二更の時分諸軍都て北京の城下に至るべしと約を定め、八路の人馬此日盡く山を下て馳行ける。其餘の頭領は都て宋江に隨て山陣を守りけり。扨彼時遷

るを相圖として、諸の下官を擱らしむ。又公孫勝を道士の形に出立せ、凌振を道童の形に出立せ、暗に炮を持しめて、城内の靜なる地に控へさせ、同く火の手擧るを相圖に炮を放たしむ。又張順燕靑を水門より城中に入しめ、盧員外が家に踏籠せ、彼淫婦奸夫を捉はしむ。王矮虎、孫新、張靑、扈三娘、顧大嫂、孫二娘等を郷下より來りたる夫婦の者共が形に出立せて、盧員外が家に火を放たしむ。又柴進樂和を軍官の形に出立せ、蔡福兄弟を救はしむ。已に手分盡く調りしかば、諸頭領皆山を下り、各次第に因て進發す。扨北京の梁中書は、李成、聞達、王太守等を招て議しけるは、花燈を點じて元宵を賞し、民と諸に樂を同じうするは、古より北京の年例なるに、今梁山泊の盜賊等と仇を結びし間、若每年のごとく、花燈を點さしめば、必ず禍を惹出すことあらん、此故に我今年は花燈を停止すべきと思ふなり、汝等各所存あらば速に申すべし。時に聞達が云く、某つら〳〵是を思ふに、梁山泊の賊徒等、向に故なくして歸陣したるは、いかさま山陣に異事出來ぬと覺えたり、縱ひ花燈を點さしめ給ふ共、何の禍かあらん、若今年花燈を點さずんば、却て賊徒に笑はるべし、宜しく北京中に觸を廻し、往年よりも猶多く花燈を設しめ、相公自ら是を遊覽し給ひて、民とともに樂を同うし給はゞ、乃福を祈るの道理なり、某は一彪の人馬を引て城外に打出で、飛虎峪に陣を張

の案内略これを曉しぬ、城の正手より北に當て翠雲樓と申して、古より有名の高樓あり、正月十五日上元の夜には、城中定て喧鬧ならんずれば、某暗に翠雲樓に上て火を放ち申さん、軍師は先兵を引て、牢獄を劫ひ給へ。吳用これを聞て大悅し、汝已にかくのごとくんば、明日先山を下て彼地に赴き、元宵の夜の一更時分樓上に火を放て、烽火を擧べし、必ず怠て過つことなかれ。時遷委細領承し、翌日諸頭領に別れて、先山を下りけり。吳用又解珍解寶を獵人の形に出立せ、鹿兎野味の類を、北京城中の諸官人の家に獻ぜしめ、正月十五日の夜火の手擧るを相圖として、事を告る官軍等を攔らしむ。又杜遷宋萬を糶米商人の形に出立せ、二輛の車を推せて城中に入しめ、同く火の手擧るを相圖として、先城の東門を奪しむ。又孔明孔亮を乞食の形に出立せ、北京城中の人家の簷下に徘徊せしめ、同く火の手擧るを相圖として、救應をなさしむ。又李應史進を旅人の形に出立せ、城の東門の外に旅宿を求めしめ、同く火の手擧るを見て、先城門を守る軍士を殺さしむ。又魯智深武松を行脚の僧の形に出立せ、城外の庵中に休ましめ、同く火の手擧るを相圖として、城の南門に來ん敵を攔らしむ。又鄒淵鄒潤を燈籠賣商人の形に出立せて、北京城中に旅宿を求めしめ、同く火の手擧るを相圖として、牢獄の邊にて働しむ。又劉唐楊雄を下官の形に出立せ、北京城の官府の前に宿借しめ、同く火の手擧

六編　巻之五十五

○時遷火をもつて翠雲樓を焼く

扨も宋公明は呉用の一言を深く感謝し、さるにても軍師はいかなる計を用ひて、北京城を攻給はんやと問けるに、呉用答へて云く、某此間暗に人を馳て、北京城の消息を伺はせけるに、梁中書我軍馬の再び至らんことを恐れ、已に鋭氣を折きけるとなり、東京の蔡太師も、關勝が降りしことを聞き、甚だ是を恐れ、只某等が罪を赦免せんと商議して、盧俊義石秀をも未だ殺させざるとこそ承知仕れ、幸ひ元宵の節も近ければ、北京の年例に在々所々都て花燈を掛るの故事あり、某此便機に乗じ、豫め兵を城中に入れて埋伏させ、城外には又大軍を以て推寄せ、裡應外合の計をなして、手痛く攻んには、何ごとか城を落さゞらんや。宋江此計を聞て大に悦び、尤神妙なりと同じける。呉用又いはく、城中に火を放て、相圖の烽火を上んこと、是第一の肝要なるに、諸豪傑の内誰か先城中に入て、此一大事を行ひ候はんや。時に遙末座より鼓上騷時遷進み出て云けるは、某昔日北京に赴て數月逗留しける故、城中

ば、翌日呉學究等と商議して、北京城を攻破り、盧員外石秀兩人を救て、忠義の志を表さんと圖りけるに、安道全これを諫て云く、宋君の病未だ全く痊ざるに、輕々しく遠出有べからず、若再發せば、重て療治すとも、其驗あらんこと難かるべし。呉學究も同じく諫て云く、宋君是等のことを念慮に掛候ひて、神思を傷ひ給ふことなかれ、某不才たりといへ共、春の暖氣に乘じて、北京城を打破り、盧員外石秀を救うて、淫婦奸夫を殺し、聊宋君の憂を省せ參らせんとて、詞を盡し諫めければ、宋江大に悅び、軍師肯てかくのごとく力を盡して、北京城を攻破り候はゞ、我死すとも恨なしと、感涙を催しけり。扨此北京城軍の勝負果していかん、次卷を讀て知るべし。

んとて、已に神行の法をなして、飛が如くに跑行けり。扨張順は此村に一兩日逗留して路次の疲を休息し、且又王定六が來る事もやあらんと心待して居ける處に、果して老父と共に此村に至りしかば、張順是を接へて大に悦び、我專ら足下を待て、猶此處に逗留せしと云ければ、王定六父子深く是を謝し、又安道全が事を問けるに、張順具に告て云く、安道全は今幸ひ、戴宗來て先迎へて、山陣に馳回りぬ、我輩も去來後を慕て急ぐべしとて、三人遂に此處を打出で、直に梁山泊を望んで進發す。去程に戴宗は安道全を引て、飛がごとくに馳しかば、不日に梁山泊に著しける處に、大小の諸頭領都て安道全を迎へて、宋江が床の前に至りき。安道全宋江が顏色を見て、其後脈を伺ひ則打笑て云けるは、諸頭領必ず驚き給ふことなかれ、脈體少しも惡からず、尤血氣衰へぬといへども、是亦妨なし、某誇言を申にはあらね共、只十日の內には平復ならせ進ずべし。諸頭領此言を聞て、一度に安道全を拜して悅びける。安道全頓て外には敷貼の餌を使ひ、內には長托の劑を用ひ、醫の祕術を盡して療治したりしかば、未だ十日も過ざるに大に其驗有り。飮食常のごとくに進み、顏色日を逐て潤し。去程に張順は王定六父子を引て、此日梁山泊に至り、則宋江に見えて、楊子江の事等一々詳に語て、王定六父子を宋江幷びに諸頭領等に見えしめ、其夜は衆皆休みけり。宋江は病已に快りしか

けるにや、忽ち疲れて一歩をも行こと能ず、甚だ難儀に見えたりしかば、張順自ら安道全が手を携へ茶坊の内に入り、暫く休息して在し處に、外面より一人の旅客同じく茶坊の内に入けるが、張順を見て忽ち呼て云く、足下は何ゆゑ斯遲滯に及びぬるや、と云ければ、張順頭を擡げ此人を見るに、是則神行太保戴宗なり。張順急ぎ安道全を請て戴宗に遇しめ、宋公明の病近日如何と問けるに、戴宗答ていはく、宋頭領已に病重り、比日は半點の飲食も用ひ給はずして、精神甚だ衰へ、旦夕死を待のみなりと、未だ語りも終らざるに、張順大に哭て、流るゝ涙は降る雨のごとくなり。安道全此言を聞て、宋頭領尙痛く覺え給ふや、と問ければ、戴宗答て云く、每日朝より夕に至るまで、其痛を苦しみ給ふ、此故顏色憔悴して、神思昏迷し危きこと尤火急なり。安道全が云く、宋頭領果して猶痛を覺え給ふならば、此病卽ち療治致さるべし、然共只恨らくは、日限延引して誤つことあらん。戴宗が云く、某幸ひ神行の法をなして、一日の内に八百里の路を行く、都て四つの甲馬を股の上に當て、法を行ふといへども、今二つの甲馬を分て先生の股の上に當しめ申さんとて、頓て二つの甲馬を取出して、安道全が股の上に拴り著け、自らも又二つの甲馬を用ひて、三人同く茶屋を出で、戴宗又張順に對して云けるは、足下は後より緩々と來り給へ、我は先安先生と共に、一刻も早く急ぎ申さ

に分與へんことを忍びず、遂に我手にかけて砍殺し候なり、願くは豪傑某が一命を饒し給へ。張順笑て云く、汝は我を何等の者と思ふかや、我は原潯陽江に在し張順と云者にて、今は宋公明に隨ひ梁山泊に登り、遍く天下に縱横して人皆怕ずといふことなし、我若水性を知らずんば、前日水中に沈られし時、遂に溺て死すべけれども、我幸に梁山泊にて船手の大將たれば、水練の妙を極るが故、水中に幾日幾夜を重ねて沈在とも、陸上に替ることなし、此故に水中にて綁の索も切解き、辛き命を脫れたり、今日又汝をも我がごとくして沈べき間、汝もし水性を知らば我ごとく一命を免れ、猶百年の壽を保てとて、張旺を高手小手に綁め、水中に沈めけり。王定六是を見て、歎息をぞ催しけり。三人遂に船を漕て著岸しける處に、張順又王定六に對して云けるは、足下の懇志身を沒るまで忘れがたし、汝若彌我を棄候はずんば、尊父とともに家を收拾て、梁山泊に上り、宋公明に隨順して諸の豪傑と大義を結び給はんや。王定六これを聞て云けるは、張公の宣ふ所誠に我心に合へり、我老父と商議して後より來るべき間、張公は安先生と共に先に馳候へとて、三人同じく北岸の上に上り、王定六先兩人の者に暫く別れ、再び船に乘て宿所へぞ歸りけり。張順は安道全と倶に路に臨み、漸三十里ばかり馳けるに、安道全は原文墨の人にて、士大夫の家に出生したるに因り、遠路を步み慣ざり

悔ることなかれ、我は只宋公明の爲に大事をなさんとこそ圖りつれ、何ぞ是等の仇を念慮に掛て、自ら宋公明のことを忘れんやと、未だ云も終らざるに、王定六不圖外面を見て、忽ち躍起てはるか對面を指ざし、張公彼を見給へ、對面より來る漢子、乃張旺なりと告ければ、張順是を見て云く、先彼を驚しむることなかれ、只彼が行處を見屆事を行ふべしとて、暗に窺ひけるに、張旺已に江邊に至り、船を見て在ければ、王定六走出て、張船主其船を假て我兩人の親族を渡らしめ候へ、と呼りけるに、張旺が云く、船を借んとならば、早々客を引て來り給へ。王定六が云く、少刻導き來らん、暫し船を停て待給へと、急ぎ家に回て張順に斯と告ければ、張順則安道全に對して云く、去來彼船に乘て賊を殺さん、我に從て來り給へとて、王定六と共に三人同く江邊に至りし處に、張旺頓て船を漕つけて三人を乘しめしかば、張順暗に艙の內に入て坐し、船やう〳〵江心に至りし時、張順が云く、船底破れて水湧入ぞ、船家長早く來つてこれを塞げと喚しかば、張旺計とは夢にも知らず、急に來て船艙の內に入んとせし處を、張順速に是を揪へ、大に罵つて云く、汝潑賊前日は能も我を欺て金銀を奪ひぬるよな、汝倘我を識認たるや。張旺是を聞て忽ち仰天し、只震ひ慄くばかりなり。張順又問て云く、前日の後生は何故船に在ざるや。張旺答て云く、前日某金銀を見て慾心益起り、彼

張順が智安道全を山陣に導く

人殺者
安道全也

順又これを砍臥けるに、張旺は房間の内より、此光景を暗に見、急に窓を鑽墻を越て迯たりしかば、張順甚だ悔けれ共、其益さらにあらざりけり。張順こゝに於て、暫く沈吟したりけるが、頓て衣の襟を血に蘸して、人を殺したる者は安道全なりと、白壁の上に分明に書付ぬ。漸五更の前後に至て、安道全睡を醒し、房間の内より李巧奴を呼ければ、張順進み入て云く、先生聲を側給はずして、先是を見給へとて、四人の屍を見せしめけるに、安道全忽ち膽を冷し、こはいかにと呆れける。張順又粉壁の上を指ざしていはく、先生壁の上の文字を見給へ。安道全これを見て、益魂を散し、張公何ゆゑ我を苦しめ給ふやと、恨みしかば、張順が云く、事已に此に至り、何爲恨を起し給ふや、先生もし聲を高めて叫び給はゞ、我自ら逃去て、禍を先生の身の上に干くべし、若又禍を脱んと欲し給はゞ、速に某と共に梁山泊に上て、宋公明の病を救ひ給へ、此二つの事孰れにても、先生の望に任せて行ふべし。安道全是を聞ていはく、張公已に此のごとき罪を犯し給ひぬる上は、禍必ず我身にも及ぶべきに、彌張公に隨て梁山泊に落行べしと、遂に領掌したりしかば、張順大に悦で、安道全と共に此處を馳出て、直に王定六が家に至りし處に、王定六告て云く、昨日張旺此處を過りしかども、張公に遇ざりしこそ惜かりつれと悔ければ、張順反つて是を諫て云く、汝これを

間に歇せしかば、張順は獨鬱々として、いまだ睡らざりける處に、二更の時分に門を敲く音頻りなり。張順怪て壁の縫間より是を見るに、李巧奴が母走り出で、門を開きしかば、一人の漢子進み入て、息女は家に在やと、問けるに、母答て、今宵は大醫安道全來て歇まれ候へば、汝は先囘り給へ。彼漢子が云く、我今十兩の銀を息女に送らんと欲す、老娘宜しく方便を囘らして暫時なり共遇しめ給へ。母が云く、已にかくのごとくんば、汝先我房間に入て待候へ、我少刻女を呼で遇しむべしと、領掌したりけり。張順彼漢子を見るに、是則楊子江にて、金銀を奪取し海賊截江鬼張旺なり。此者常に江中に於て錢財を得たる時は、李巧奴が家に至て、遊興をなしけるとかや。張順是を見て、怒りに堪兼ね忽ち跳出んとしけるが、又早まつて誤つこともやあらんと思ひ、暫く控へ動靜を窺ひ見るに、彼老母酒を具へて張旺を款待し、又女李巧奴を呼出して相伴させ、良久しく興に入て飲酌をなし畢んぬ。老母幷に兩人の下女は遂に各房間を出て、燈の下に醉臥ければ、張順是を見て暗に喜び、房間の戸を推開て、厨の邊に至り、一把の菜刀を尋取て、先彼老母を殺しけるに、兩人の下女叫ばんとせしか共、餘りに驚て聲も更に出ざりけり。張順又刀を揮て、兩人の下女をも倶に砍殺し、直に房間の内に入んとせし處、李巧奴未だ睡ずして、此騒動を聞き何事にやと、已に房間の外に出しかば、張

かこれにしかんやと、一向泪を流して申けるに、安道全其志の切なるを感じ、遂に領掌したりけり。其頃建康府に一人の妓女、李巧奴と云者ありけるが、容儀十分に美なりしかば、安道全常に睦じく往來しけり。此夜安道全張順を引て李巧奴が家に至て、張順を款待酒已に闌なりし處に、安道全李巧奴に告て云く、我今晩は此所に歇み、明日は汝に別れて此張公と共に山東の地に赴く、遲き時は一ヶ月餘、早き時は廿日餘には、再び囘りて汝に遇ふべき間、汝自ら重く保養して、我歸るを待べし。李巧奴これを留めて云けるは、君いかんぞ我を棄て、遠く往給はんや、願くは此度の外出を休給へ。安道全云けるは、止難きこと故我已に旅の用意を調へければ、明日早々發足すべし、汝心を寛げ待候へ、我一日も早く囘て再び見えんに、汝何ぞこれを憂るや。李巧奴又云く、君彌我を棄て行給はゞ、我は空しく參商の憂に逼て徒に相果べしとて、一度は泪を洒ぎ、一度は情を含で、再三實しやかに諫しかば、張順は傍に在て、此光景を見、暗に眉を皺めて苦みけり。此時天色已に晩ければ、李巧奴頓て安道全を延て、寐間に入宜しく歇しめ、再び出則張順に對して云けるは、貴客は先旅宿に歸り給へ、我此處は房間も淸からざる故、敢て留め申さぬなり。張順が云く、安先生の起給ふ迄、待て共に歸るべき間、暫く此處を貸給へとて、安々と坐しけるに、李巧奴止ことを得ずして傍の房

ければ、我張公とともに此仇を報ふべし。張順是を聞て大に感謝して云く、足下の懇志誠に忘れがたし、我若此處に數日逗留なさば仇をこそ報ふべけれ共、宋公明の病を誤つことあらん、明日建康城に入り、急ぎ安道全を請て山陣に回るべし。王定六此ことを聞て再び留ず、則一套の衣服と、十兩の銀子とを張順に送て路銀を助けしかば、張順深く是を謝し、翌日王定六父子に別れて、建康府に入り、直に槐橋の下に至て安道全が家に入ける處に、安道全幸ひ宿に在て遇しかば、張順慇懃に拜をなす。安道全が云く、我久しく張公にまみえざりけるに、今日は何等の事有て、自ら至り給ひぬるや。張順答て、江州を鬧しめ、宋江と共に梁山泊に上りしこと、一々語り、今又宋公明脊に腫物生じけるにより、黄金一百兩を送りて、先生を山陣に請んと欲し、已に楊子江に至て、海賊に逢に金子を奪れたることを具に告ければ、安道全が云く、宋公明は當世の義士なれば、我山陣に行て、病を療治せんは願ふ所なりといへ共、頃日愚妻死して家事を掌る者なきゆゑ、遠く出んこと尤難ければ、某得こそ參るまじければ、回て此よしを告給へ。張順大に憂て云く、先生若辭し給はゞ、某も亦再び山陣に歸りがたしとて、再三哀みければ、安道全これを憐て云く、我尙宜しく商議して行れば行き候はん、張公先憂を休給へ。張順此言を聞て大に悅び、先生もし駕を枉給はゞ、一山の福何事

公明を得なば、彼惡官等に惱さるゝことなく、居民共生涯を安んずべきにとて、只顧宋江が德を慕ひしかば、張順是を悅で云けるは、我が由來を老丈に告申さんに、必ず驚き給ふ事なかれ、某こそ梁山泊に於て水軍の頭領、浪裡白跳張順と云者なり、今宋公明脊に腫物生じ痊がたきゆゑ、黄金一百兩を送て安道全を請求んと欲しけるに、某昨夜道中の勞に依て、渡船の上に熟睡したりしかば、彼兩人の船家長某を縛て水中に沈めけれ共、某水底に伏して綁の索を礁に當て擦斷り、這々一命を脫れて此處に至りぬ、老丈もし實に宋公明の德を慕ひ給ふならば、此節彌一點の情を垂給へ。老翁が云く、足下果して梁山泊より來り給ひし豪傑ならば、先某が忰に遇しめんとて、則忰を呼ける處に、一人の後生走り出て、張順を拜して云く、某久しく張公の一名を聞及びしか共、緣なくして未だ尊顏を拜せざりけるに、今日始て高風を接ること莫大の幸なり、某が姓は王、名は定六と申す、某又跳走ること快き故、人皆諢名を施し活閃婆王定六と稱ず、某未だ師に從て學ずといへども、棒を使ひ水を越ことは頗る是を曉しぬ、張公を劫ひぬる兩人の船家長は、某都て是を知れり、一人は截紅鬼張旺と申者、又一人の後生は華亭縣の民にて、油裏鰍孫三と申者なり、此兩人常に此江中に徘徊して旅人を惱す、張公先我家に數日逗留し給へ、其內には彼必ず我店に至て酒を沽べ

しかば、張順岸の上に跳上り、直に樹林の内に入て、此處を窺ひ見るに、是則一軒の酒店なり。張順頓て門を敲きけるに、一人の老翁出しかば、張順先恭しく拜をなす。老翁此體を見て問けるは、汝は定めて海賊に遇たる人なるべし。張順答へて云く、我建康府に馳て急用を調へんと欲しける處に、昨夜兩人の船家長に衣服金銀を奪れ、某を痛く綁て水中に沈しか共、某原來水性を識たる故、一命を免れぬ、伏して願くは老丈某が眉を燃の難を救ひ給へ。老人これを聞て憐に思ひ、則延て後堂に至り、此寒天に水を越て嘸凍候はんとて、火盆酒等を與へて寒を省せしかば、張順感激に堪ざりけり。老人再び問て云く、汝の鄉はいかん、建康府には又何等の事有て馳給ふや。張順答て云く、某山東より來る、姓は張なり、建康府の大醫安道全は某が兄弟なり、今急事に因て、彼を訪はんと欲す。老翁が云く、汝は定めて山東より來て梁山泊の下を過り給ふならん。張順が云く、我實にも彼山の下を經て此處に至り候なり。老翁が云く、我聞彼山の主及時雨宋公明は往來の旅人を劫ずして、生靈を害せざるとなれば、誠に仁者共謂つべき人なり。張順が云く、彼宋公明は專ら忠義を以て主とし、良民を害せずして、唯大惡の官人等を殺すのみ。老翁が云く、宋公明に相從ふ豪傑等も同じく天に替て道を行ひ、貧を救て老を助け、偏に百姓を憐むとなるに、我此處にもし宋

張順水底に縛縄を解

汝早く船を江心に漕行ける処に、船家長遂に帆索を以て、張順を高手小手に緋めければ、張順忽ち睡醒し、掙扎とせしか共、はや強く緋られ、更に動くこと叶はず。船家長已に刀を持て、張順が前に來りけるに、張順再三詫て云ふ、願くは我命を饒し候へ、金銀衣服等は盡く足下に送るべし。船家長が云く、事已に玆に至り、我決して汝を免すまじ、只快く一死を受よ。張順が云く、汝若刀を以て、我を砍死さば、我此寃の魂永く汝に纏ふべし、若我身體を傷ずして水中に沈めば、我死して九泉の下に於ても更に寃なし。船家長これを聞て、汝が所望を准んに、彌我を恨ること勿れとて、遂に張順を把て水中に沈けり。已にして船家長は包袱蘊を開て内を見るに、若干の金銀有ければ、忽ち欲心生じ、是を分るに忍びず、彼後生を殺し、己一人が福にせんと圖り、暗に彼後生が油斷を窺て、遂に是を殺し屍を水中に投入れ、再び船を漕回しける。扨彼張順は原來能水性を識り、三日三夜が間水底に伏すといふ共、曾て疲れざる水軍の大將なれば、此時船家長水中に沈けれ共、少しも苦ず自ら水底に在て尖き礁を覓め、緋の索を礁の尖に當て、遂に是を擦斷頓て水を潜て南岸に至りけるに、樹林の内より燈の光閃き出

人の漢子船傍に立出て問けるは、貴客は何れより來て何れに行給ふや。張順答て、我は今此江を渡て建康府に行んとする者なり、我船賃を厚く謝せんほどに早く渡らしめよ。彼船家長が云く、我貴客を渡し進せんは容易きことなれ共、今日ははや紅日も西に傾き候へば、縱ひ江を渡り給ふとも、彼邊に於て旅宿を借給はん處なし、先我船に乘給ひて、四更の前後迄穩に歇み給へ、風靜に月明かになりなば、方に好船を出し貴客を渡し進すべければ、多く船賃を賜るべし。張順是を聞て、可なりと領承したりければ、船家長遂に張順を迎へ船に乘しめ、再び蘆葦の内に纜ぎけり。

○浪裡白跳水上に寃を報ず

張順船に入篷の下を見るに、一人の後生火を燒てありしかば、頓て濕衣を脫で、彼後生に烘しめ、又包袱の内より錦の衣を取出してこれを著し、身を柂に靠て打臥けるに、連日辛苦を經たる旅路なれば別して熟く睡り、初更の時分に至れ共、未だ睡醒ずして餘念なき光景なり。彼後生張順が包袱蘊を見て、船家長に告て云けるは、汝彼客が包袱蘊に氣を附給ひしや、いか樣物ありと覺えて、重く見え候なり。船家長これを聞て、我も斯思ひしとて、暗に張順が

我今三軍を収めて歸るべし、安道全を請て直に梁山泊に歸るべし、日發足し、早々彼地に赴き、宜しく安道全を請て直に梁山泊に歸るべし、張順一々領掌し、遂に宋江に別れて、即日陣屋を出東を望て進發す。扨呉用はまた號令を三軍に傳へて歸陣の用意を催し、頓て宋江を轎に乗しめ、其夜陣を拂て梁山泊へと引退く。城兵共都て敵の回るを見たりしか共、向に伏兵の計に中て鋭氣を折し時節なれば、又もや詐の計あらんと疑て、敢てこれを追ざりけり。翌日梁中書諸將を聚て、宋江が歸陣の意はいかんと問けるに、聞達李成答て云く、呉用は原來詭の計多き者なれば、其意未だ分明に曉されず、只城を守て出ざるに如ことなしとて、竟に追ざるこそ愚なれ。去程に張順は宋公明を救はんと欲し、夜を日に續で急ぎけるに、時しも冬の末にして雨降ざれば、則雪降道中極て艱難なりしか共、張順自ら能これに堪へ、已に數千里の路を馳て、漸楊子江も程近かりしが、此日北風大に作り凍雲低く垂れ、飛々揚々として一天大に雪降り、寒冷殊更格別なり。然れ共張順は此日江を渡らんと欲ひ、直に楊子江を望んで馳行けり。直に江に至て渡し船や有と尋けれ共、只一艘の船も見えず。張順こはいかにと慌て、又蘆葦の内を窺ひ望むに、一艘の小船を繫で蒹葭深き處にありしかば、張順則呼つて、船家長其船を我に借て、此江を渡らしめよと、云けるに、一

ひばかりを待らんに、我若歸陣に及ばゞ、梁中書彼兩人を殺すべし、事已に兩難に出ぬとて、評議未だ一決せざる處に、翌日宋江頭痛甚だ禁がたくして、熱發しければ、諸大將大に駭き尊體いかゞと伺ひけるに、宋江が背の上に腫物生じ、毒を包しかば、吳用これを見て、此腫物瘡にあらずんば、則疽ならん、若急に療治を加へずんば由々しき大事たるべしとて、種々醫療を盡しけれ共、更に其驗なし。時に張順進み出て云けるは、某昔日潯陽江に在し時、老母疽を病けるゆゑ、某百藥を盡し療治を加へしか共、曾て驗なかりける處に、後建康府より、安道全と申外科を請て、療治を賴しかば、彼人只一貼の膏藥を用ひて最易く痊しぬ、宋君の此病若安道全を請て療治なさしめば、立處に驗有べけれ共、此處より彼地へは路甚遠ければ、早速は至りがたし、しかれ共某連夜に馳て彼人を請來らば可ならんや。吳用此を聞て云けるは、宋君の夢に晁天王の宣ひし、江南の地の靈星能これを治すべきとの言は、正しく此安道全に應ずるの語ならん、若此人を得て療治せしめば、此病立處に痊んこと、何の疑かあらん。宋江聞て其意に服し、則張順に對して云く、汝もしいよ〳〵其人あらば、急ぎ彼地に馳て誘引し、速に我一命を救ふべしと、餘儀なくぞ命じける。此時吳用一百兩の黃金を以て安道全への謝禮として、又五十兩の白銀を持て張順が路費とし、則是を張順に與へて云く、汝今

宋公明夢中に
九天王を
感格す

に疲れ半睡ける處に、忽ち陰風颯々として、寒氣人を襲ひしかば、宋江怪やと頭を擡て傍を見るに、托塔天王晁蓋が靈魂現れ出で、宋江に示して云く、宋頭領汝早く山陣に歸るべし。宋江是を聞て恭しく跪て云く、晁天王今こゝに靈魂の現れ給ふは、未だ曾家の一族を亡さざるが故ならん、某晝夜晁天王の仇を報はんことのみ念慮にかけ、心を安んぜざる處に、頃日又不慮の難儀出來して已ことを得ず、軍馬を起し、斯寸暇に乏き故、久しく靈魂をも祭祀を怠りぬ、伏して望らくは、此罪を免し給へ。晁蓋が云く、我今此に來るは、其事の爲にあらず、足下に百日血光の災ある故、只是を告んが爲なり、江南の地の靈星、能これを治すべければ、早く兵を收めて歸陣候へ、是第一の上計なりと教へて、遂に化失しかば、宋江大に哭き、今又一遭形を現し給ひて、我思ひを省しめ給へと、後を慕うて走り出んとせし時、忽然として睡醒けるに、是則南柯の一夢なり。宋江大に駭き則呉用を請て、夢の異事一々語りて、吉凶いかゞと問けるに、呉用が云く、晁天王已に靈を現し給ふ上は、疑ひ給ふことなかれ、今中冬の時分にて、天寒く地凍え、軍馬久しく屯するに宜しからず、權く先山陣に回りて、冬を過し春を迎へ雪消氷解て候はゞ、其節再び兵を起して、此城を攻べし、これ尤上計ならん。宋江が云く、軍師の言然も可なりといへ共、只恨らくは盧員外石秀縲絏の内に在て、只我輩が救

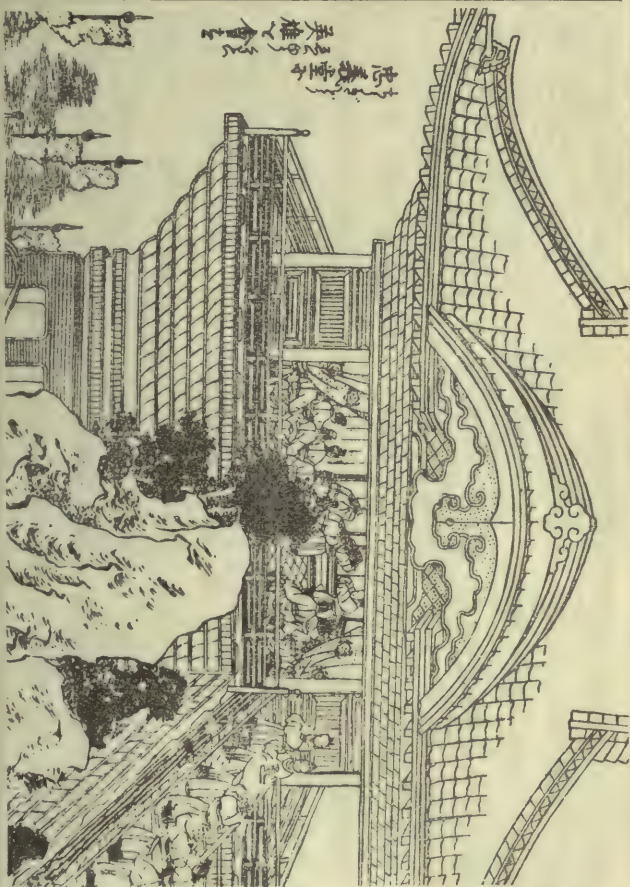
超を生捕り、頓て宋江が本陣へ引渡しける。是によつて官軍共は大いに騒ぎ、盡く皆城中に逃回て、梁中書に斯と報じけるに、梁中書は恰も寶を失うたる心地して、且只城を堅固に守らしめ、再び出て戰ふことなかりけり。

蓋忽ち崩れしかば、憐むべし索超は馬ともに坑の内に陷入けるを、左右の伏勢竝び起て遂に索

○托塔天王夢中聖を顯す

こゝに宋江は兵を收めて本陣に回りし處に、諸の伏兵共、索超を拖て帳前に至りしを、宋江是を見て、自ら綁の索を割解て帳前に坐せしめ、再三撫諭して云く、我山陣の豪傑共、大半は朝廷の官職を受け、天祿を食し輩なりけれ共、今上皇帝明ならずして、奸臣志を得佞人權を專にし、妄に天下の民を傷ふ故、我輩これを避て、梁山泊に引籠り、天に替て道を行ふのみ、若將軍我を棄給はずんば、心を同じうし力を併せて、共に大義に聚り候へ、我一點の異心を存せずとて、只管詞を盡して諫しかば、索超深く宋江が德を感じ、遂に降參したりけり。宋江吳用斜ならず大悦し、此夜は佳宴を具て索超を饗應し、翌日又城を破らん事を商議し、一連に數日手痛く攻しか共、直正落べき樣も見えざりける間、宋江甚だ憂悶して、帳中

宋江これを見て、急に三軍に下知したりしかば、梁山泊の精兵ども一度に喊の聲をあげて、我後れじと攻來り、取圍て散々に打けるに、李成が軍馬大に亂れ、七斷八絶して這々城中に逃入けり。宋江は軍馬を進めて城下に至り、堅く陣を列ね兵を屯しける。翌日索超一彪の人馬を引て打出しかば、呉用三軍に命じていはく、索超を迎へて戰はゞ、詐て敗を取べし、彼若追來らば、勢に乘て引退けと、計を授けけるに、三軍計を承り、急ぎ索超を迎へ相戰ひ故意敗れをなして、奔走したりしかば、索超此一戰に利を得て大に喜悅し、先城中に引入ける。此夜大雪頻に降ければ、呉用是によつて計を設け、若干の兵を城外の山邊に遣して、陷坑を掘しめ、其上には土を用ひて蓋ひけるに、此夜雪ます〳〵大にして、陷坑の上に約莫二尺ばかり降積ける故、平地と等しうて、更に坑有とも見えざりき。翌日城兵共は宋江が軍馬を望み、各恐るゝ色あり。我打出て戰んと云者もなかりける處に、索超また三百の軍馬を領して城外に馳出で、遂に一戰を始める。宋江が人馬大に潰亂して、八面に奔走す。斯る處に水軍の大將李俊張順踏住て、索超を迎へ戰わづか二三合にして、李俊張順一同に逃ければ、索超大に吼て追來る。彼兩人の頭領は擅に索超を賺して、陷坑の内に至り此より横に切れて、山の下の澗間に逃入ければ、索超相續て追蒐し處に、山の背後より炮の聲響と等しく、陷坑の

爲、美々しく酒宴を設けて、索超を邀へ共に酒を酣て居ける處に、忽ち一人の軍士來り、關勝、宣贊、郝思文、都て梁山泊の戰に打負三人悉く生捉れ、悉く賊に降參し、今關勝等賊の先鋒となつて、當城に寄來り候、此度の合戰は向に異なり、甚だ手強く働き、城を落さずば引取まじと誓て、向ひ候と普く申傳へ候と、告しかば、梁中書魂を天外に飛して驚き、こは如何すべきと慌てける處に、索超が云く、某前度の軍に流矢に中りければ、此度の軍には又敵を射て、此仇を報い候はん、相公必ず驚き給ふべからずと申けるに、梁中書此言を聞て、略力を得たれ共内心甚だ恐怖しながら、即時に兵を催し索超に與へ、先城外に出して敵を迎はしめ、聞達、李成は其後より打出ぬ。此時仲冬の天氣にて雪降風起て、殊更寒冷なりけり。宋江が兵はや至りぬと聞えしかば、索超は人馬を引て、飛虎峪の邊に陣を列ね、翌日兩軍陣勢を帶し、各喊を作り鼓を擂て戰を挑みける。宋江此時呂方郭盛を引て高き處に打上り、遙に戰を一覽す。大刀關勝馬を躍せ、刀を揮て陣前に跑出けるに、索超これを見て大に罵り、急に軍器を擧て關勝に掛て懸る。關勝已に刀を舞し、これを迎へ、兩將勇を奮て相鬪み、戰はや十合計に至りける處に、索超漸氣力衰へしかば、李成是を見て、兩刀を振て助け來る。宋江が陣中よりも亦、宣贊、郝思文、各軍器を輪して突て出で、五騎の馬一塊に成て攻戰ふ。

關勝嘆じて云けるは、天下の人擧て宋君の淸徳を稱しけるが、果して僞ならず、某等家ありといへ共、奔り難く、國あれども投難し、宋君いよ〳〵我們を山陣に留め給はゞ、辱く帳下に在て、駑鈍の力を盡すべし。宋江此言を聞て大に悅び、頓て酒宴を設しめて、關勝等三人を欵待ける。又降參したる官軍五七千の者共にも多く酒食を與へて、懇に撫諭したりければ、衆皆悅に勝ざりけり。其内にも年老たる者共は、多く盤纏を與へて、本國に歸しけるに、各宋公明が仁徳を感じ、都て嗟嘆を催しぬ。翌日宋江は關勝が眷族を山陣に邀へ取べしとて、薛永を蒲東郡に遣しける。已に宋江は關勝等三人の英雄を得て、心中に甚だ悅び、此日も又諸將を集めて、飮宴をなしけるが、忽然として盧俊義石秀二人がことを想ひ出し、覺ず涙を流しければ、吳用これを察して云く、宋君必ず心を惱し給ふことなかれ、某已に計あり、明日再び兵を起して北京を攻んに、何ぞ功を立ざらんやと、未だ云ひも終らざるに、關勝進み出て云く、某いまだ宋君の大恩を報ぜざるに、願くは此回の先陣をなして、聊心力を盡すべし。宋江是を聞て甚だ悅び、則宣贊郝思文をも關勝に從はしめて、先陣とし、翌日先梁山泊を打立ける。其餘の大將は原の數に一人も缺ず、盡く皆宋江に相從ふ。將又水軍の大將李俊張順等も同く後陣より進發す。此時梁中書は、索超が矢疵平復したるを賀せんが

に咄と勝喊を揚て宋江が本陣に馳行けり。此に於て降參したる官軍共は其數を知べからず。宋江已に諸將と會合して山陣に上りけるに、東方漸明たりけり。已にして諸頭領忠義堂の左右に坐を列ねしかば、軍卒頓て關勝、宣贊、郝思文等三人を引出す。宋江是を見て慌しく堂を下り、親自三人が綁の索を割解き、先關勝を扶けて、堂上に坐せしめ、宋江慇懃に拜をなして云けるは、某等亡命の狂徒、將軍の虎威を犯し罪、尤輕からず、伏して望らくは、此を免し給へ。關勝此體を見て、慌忙き禮を還しける處に、呼延灼も又關勝を拜して云く、某向に號令を奉て將軍を謀き、遂に計に陷し參せたる罪、殊に深重なり、偏に寛宥なし給へと、恭しく申ければ、關勝心中にこれを感じ、暗に左右に列座したる豪傑共を見るに、いか樣皆一騎當千の勇士ならんと覺え、威風端嚴として義氣沈重なり。此時關勝頭を回し、宣贊郝思文兩人に對して云く、我們已に縲絏の恥を蒙りし上は、縱ひ一命を饒さるゝとも、何の面目有てか、再び都に回らんや、しかじ一刻も早く殺されんにはとて、三人等しく宋江に告て、一死を乞けるに、宋江大に驚き云く、將軍は何ゆゑ此のごとき言をのたまふや、倘某を棄給はずんば、我此山陣に留て倶に大義を結び、同じく天に替て道を行ひ給へ、若又某等が鄙賤を嫌ひ給ひて、此事同心にあらずんば、某今人を以て將軍等を都に送せ進すべし。

て、四下の伏兵一齊に並び起り、地上に鉤索を引て、關勝が乘たる馬を鉤倒し、大勢咄と折重つて、遂に關勝を捉へ竪に引横に拖て本陣に馳行けり。扨又林冲花榮は各一彪の兵を率して、路を攔り、月光の下に於て、郝思文が軍馬を迎へ、林冲當先に進み出て、郝思文を罵り、元帥關勝已に活捉れけるに、汝無名の小將何ぞ馬を下りて綁を請ざるや。郝思文これを聞て大に怒り、鎗を撚り馬を飛せて、林冲と鋒を交へ、戰未だ三四合に至らざるに、花榮鎗を撚て助け來りしかば、郝思文兩將に敵すること能ず、急に馬を勒へ逃行し處に、傍より女大將一丈青進み出で、自ら鉤索を投懸て、郝思文を馬より下に鉤落し、頓て是を綁め、本陣に引せけり。扨又秦明孫立は各一彪の軍馬を引て宣贊を捉へんと圖り、果して宣贊に行遇し處に、宣贊先馬を出して大音聲に罵つて云く、梁山泊の草賊匹夫、我に當ん者は死を致し、我に避ん者は生を保つべきに、汝等早く路を開て、我軍馬を過らしめよ。秦明これを聞て大に怒り、馬を躍せ棒を輪し宣贊に打て蒐り、兩將遂に軍器を交へ數合戰ひける處に、孫立傍より助け來りしかば、宣贊これを見て大に驚き、氣力忽ち衰へけるに、秦明棒を擧て遂に宣贊を、馬より下に打落しければ、三軍一度に跑合せ、頓て宣贊を活捉ける。此時撲天雕李應は人馬を引て、關勝が本陣に突て入り、先張橫阮小七を救ひ出して、馬物の具兵粮等を奪取り、一度

點に至りしかば、呼延灼已に三軍を導て打て出で、又關勝に告て云く、宋江必ず陣中より石炮を放つべき間、これをば裏應外合の相圖の石炮と知り給ひて、三軍を一度に進めて陣を突給へと、具しく云含め、則ち引て小路より過り、約莫半時ばかり馳けるに、前面に四五十人の兵有て暗に低言ていはく、こゝに來り給ふは將軍にてはあらずや、某等宋公明の密命を承り、此所に出迎へ申すと、云しかば、呼延灼これを聞き、此輩を已が軍中に加へ、再び當先に進んで馳けるに、關勝も同じく後に隨て相續き、又一つの山を轉り過し處に、遙對面に一盞の紅燈見えしかば、關勝馬を勒へ、呼延灼に問て云く、紅燈の見ゆる處は何れの地なるぞや。呼延灼答て云く、彼所は則宋江が中軍なり、片時も急ぎ候へとて、三軍を催促して馳ける處に、果して石炮の聲大に響しかば、是ぞ宋江が放さしめたる相圖の石炮なるぞとて、關勝已に先を跑て、人馬を進め、已に紅燈の下に至り四下を望み見るに、唯一人の敵もあらずして、呼延灼もはや見えざりけり。關勝此體を見て大に驚き、扨は計に中りぬるよとて、急に引退んとせし處に、四方の山の上に鑼を鳴し鼓を擂ち、喊の聲は天地に震ひしかば、官軍共大に慌て、各先を爭うて逃走る。關勝已に馬を囘へして走り行き、左右の親方を顧るに、相從ふ者とてはわづか十騎には足ざりけり。漸山坡を過りける處に、樹林の内に又石炮の聲響

六編　巻之五十四

○宋公明雪天に索超を擒にす

呼延灼黄信との戦已に十餘合に及ける處に、呼延灼鞭を揮て黄信を馬より下に打落しければ、宋江明急に諸將を馳て、黄信を救せける。關勝これを見て大に悦び、大小の三軍を進めて一度に攻させけるに、呼延灼これを諫て云く、將軍誤て長追し給ふことなかれ、彼呉用は廣く計に富し者なれば、いかなる奸計を設たらんも知るべからず、先是より引回し給へと、云ければ、關勝此言に服し、急に兵を收めて本陣に引取り、種々の珍物を重ねて呼延灼を款待、關勝彼黄信が來歴を問ければ、呼延灼答て云く、彼の鎭三山黄信は原朝廷の官職を受し者なりしか共、昔日青州に於て秦明花榮等と共に賊に降りしなり、尤武藝に通達し霹靂火秦明の弟子なり、今日先此賊を打傷ひしかば、彼等定て鋭氣を折て在らん、今宵賊陣を劫ば、必然大功成なんと、語りければ、關勝これを聞て喜悦斜ならず、則ち號令を傳へて、宣贊郝思文を二手にわけ救應とし、自らは五百の馬軍を引て打出べしと議しけるに、其夜も已に二更の一

く、我今日先此軍に打贏ち、晩間亦計を行うて、林冲等を生捕べしとて、已に兵を引て打出しかば、呼延灼も同じく陣前に進み出ぬ。宋江早くも呼延灼を見て故意怒り、罵て云けるは、我重く汝を用ひけるに、汝は何ゆゑ昨夜陣を忍び出て敵に降りたるや。呼延灼答ていはく、汝等山野の草賊何の大事か做出さん、我元來豪傑の譽を得たる大丈夫なるに、豈肯て汝が徒に從はんやと、冷笑て恥しめしかば、宋江則鎭三山黃信を出して鬪はしむ。呼延灼二つ鞭を擧て相迎へ、兩將各勇を奮て戰ひけり。此合戰の畢竟、次卷に詳なり。

を延て帳前に至りぬ。關勝此大將を見るに何とやらん見識たる樣なりしかば、則先問て云く、足下は誰なるぞや、其姓名を報じ給へ。彼大將が云く、將軍須らく左右の人を退け給へ、某一つのことを密談致すべし。關勝が云く、左右の者等は我心服の者のみなれば、少しも憚る所なし、若事あらば速に語り給へ。彼大將が云く、我は是雙鞭將呼延灼なり、向に朝廷の爲に連環馬軍の計を以て、已に兩三度まで賊を破りしか共、想はず吳用が計に陷され、多く軍馬を討せけるにより、再び京に回ること能はず、今曲て梁山泊に降りぬ、將軍今朝林冲秦明等の兩將に敵して戰ひ給ひし時、殆ど危く見えけるゆゑ、宋江深く將軍を傷んことを怖れ、急に金を鳴し軍を收め候ひき、宋江は素より歸順の意ありといへ共、諸の賊これに從ずして、天兵を犯しぬ、此度宋江某と暗に議定し、天命に從はざる賊を生擒て、將軍に降參せんと欲す、將軍もし是を免し給はゞ、明晩月光に乘じて小路より賊の陣に突入り、林冲等を生捕給へ、某路徑を案內いたして、ともに大功を立べしと、心を傾け膽を吐て云ければ、關勝此言を聞て大に悅び、頓て帳中に請て種々饗應したりけるに、呼延灼又宋江は原來忠義を以て主とすといへども、已ことを得ずして衆賊とともに、梁山泊に在ことを語り、兩人互に哀情を催し、半點も疑心なかりし。翌日宋江三軍を發し戰を挑けるに、關勝は呼延灼と議して云

理なり、今我關勝を見るに、誠に英雄の忠臣なれば、我いかんぞ是を傷ふに忍びんや、抑且彼が先祖關雲長は漢の末に天下三分たりし時、魏蜀呉に比びなき名譽の勇士なりき、是によつて今の世に至る迄關菩薩と拜れ給ふ、我もし此人を山陣に得ば、速に一位の座を譲て山陣の主たらしめん。林冲秦明これを聞て心中悦ざりけり。此日は先兩軍とも兵を收めて、各陣中に引取けり。關勝は獨帳中に在て暗に想道く、我今日林冲秦明兩將に敵して、已に生捉れんとせし處に、宋江却て金を鳴し、軍を收めぬるは、いかなる意をや主ると、推察に勝ず。則張横阮小七を引出して問けるは、宋江は原鄆城縣の小吏なるに、汝等は何ゆゑ、心を傾け隨順するや。阮小七が云く、宋江明は山東河北等の地に、大名を馳て、及時雨宋江と稱せらる、汝がごとき輩いかんぞ宋公明の德義を知らんやと、大に呼つて答へけり。關勝是を聞て暫く頭を低れ、又兩人の者を陷車の內に入置き、其夜は關勝益鬱悶に逼て坐臥安んぜず、獨閑に帳外に歩出で、月色天に滿霜華地に遍きを見て、一向嗟嘆のみしける處に、一人の兵來て報けるは、今轅門の外に一騎の大將來て、元帥にまみえんと云けるゆゑ、其姓名を問ひしか共、彼あへてこれを報ぜず、只元帥にまみえんと斗答へ候。關勝が云く、すでにしからばそれを誘引せよと、命じけるに、彼兵命を承けて、再び走り出で、頓てかの大將

敵せんとするや、早く宋江を出して、我と勝負を決せしめよと、罵りしかば、宋江馬を飛せて馳出で、則關勝を見て恭しく禮をなし、某は是鄆城縣の小吏宋江なり、謹で將軍を拜し奉ると、慇懃に云けるに、關勝これを聞て、汝已にかくのごとくば、何ゆゑ又朝廷に背きぬるや。宋江答て云く、朝廷明らかならざるゆゑ、奸臣道に當り、讒佞權を專らにして擅に天下百姓を害す、これに依て某諸豪傑と共に難を避て梁山泊に籠城し、只天に替て道を行ふのみ、毛頭も異心あらず、願くは將軍是を察し給へ。關勝大に叱て云く、天兵今こゝに至りけるに、汝猶是を攔らんと量り、斯巧言令色を以て我を誣んと欲ふや、汝若馬より下て降參せずんば、忽ち骨を粉にし、身を碎くべきぞ。霹靂火秦明これを聞て大いに怒り、手に狼牙棒を舞して、關勝に打て蒐る。關勝これを見て哈々と打笑ひ、青龍刀を揮て相迎へし處に、林冲功を秦明に奪はれんことを恐れ、急に鎗を撚て同じく關勝に搠蒐り、三人馬を交へ戰ひしかば、敵親方目を駭かして見物す。宋江是を見て關勝を損はんことを忍びず、急ぎ金を鳴して、軍を收めたれば、林冲秦明遂に關勝を棄て引回し、則ち宋江に對して云けるは、某等已に關勝を活捉んとせしに、何故金をならし軍を收め給ひしや。宋江が云く、我輩は皆忠義を主とするにあらずや、然るに若強きを以て弱を欺かば、是則義士の本意に背く道

め、兩將遂に鋒を交へて、雌雄を爭ひ、戰已に十餘合に至りし處に、花榮故意馬を回して逃ければ、宣贊後に隨て赶來る。花榮暗に弓箭を把て打搭へ、能挽て兵と放ちけるに、宣贊弦音を聞て急ぎ刀を揮て拂ひしかば、箭は地上に落たりけり。花榮一の箭中らざるを見て、又二の箭を放ちけるに、宣贊早くも鐙の內に身を藏し、其箭をも避けるが、花榮が弓勢の強きを見て、敢て再び追ず、遂に本陣を指引ければ、花榮彼が趕ざるを見て、急に馬を回し跑來り、直に宣贊が後心を望で、又第三の矢を放ちける處に、大に響て甲の上の護心鏡に射著しかば、宣贊甚だ驚き忙き、馬を飛せて陣中に跑入り、頓て人を馳戰の次第を關勝に報ける。關勝是を聞て、長一丈に高八尺なる祕藏の名馬に打乘り、全身嚴密に披掛て、偃月刀を提げ、直に馳て陣前に至りし所に、宋江此關勝を見るに、威風凜々相貌堂々として、恰も關雲長の像を見るがごとくなりしかば、吳用とともに一向讚嘆して云く、誠に稀有の良將かな、若關雲長の子孫にあらずんば、いかんぞ斯のごとき英雄を生ぜんやと、諸將に向て誇獎ける處に、豹子頭林冲忽ち忿然として云く、我が輩梁山泊に上てより以來、大小の軍已に六七十陣に及びしかども、未だ一度も銳氣を折ず、宋君今日は何ゆゑ、自家の威風を滅し給ふやとて、鎗を撚り馬を躍せ陣前に跑出す。關勝已に林冲を見て、大に怒り、汝梁山泊の潑賊いかんぞ朝廷に背て、官軍に

大刀関勝
張横阮小七を擒にす

は前にあり、張順は後にあり。一度に喊の聲を揚て敵の陣中に攻入し處に、刀鎗旌旗のみ建並べて、唯一人の兵もあらざりけり。阮家兄弟あきれ駭き、急に引退んとせし時、帳前に鑼の聲響くと等しく、左右より多少の軍馬突出で、八路にわかれていく重〳〵に圍み來りけるに、張順は此光景を見て、敵し難くや思ひけん、先水中に飛入けり。三阮兄弟は路を求て逃走り、漸水邊に至りしかども、敵の官軍八面より競ひ來り、阮小七が後れて走るに追附き、頓て折重つて活捉たり。阮小二、阮小五、張順殆ど危かりし處に、混江龍李俊、童威童猛を引て同じく兵船を漕著け、力を併せ死を棄て三人の頭領を救ひて、這々船を開て逃行けり。官軍共は阮小七を擒にして、是又陷車の内に入置ぬ。去程に水軍の大將等は此事を山陣に訴へしかば、劉唐則張順を馳て、宋公明に此消息を報けるに、宋江大に驚き、關勝を退んには、いかなる計を用んやと、吳學究に問ければ、吳用答て云く、明日先試に一戰をなし、其勝負如何たるを一覽し、其後別に又計を施すべしと、議定しける處に、忽ち攻鼓一齊に鳴して、敵大勢攻來る。是則醜郡馬宣贊が兵なり。宋江諸將と共に打出て宣贊を見るに、いかさまにも強勇の大將と覺えて、粧束も嚴かに威風また猛し。此時宋江大に呼つて、誰かある彼活捉れと、下知したりけるに、小李廣花榮馬を躍せ鎗を撚て宣贊に搠かゝる。宣贊も同じく刀を擧て馬を陣前に進

關勝これを見て、大いに怒り、汝梁山泊の潑賊何ぞ擅に我を欺んとするや、我近々宋江等を生捉て共に京に引せん、先陷車に入置けと、命じければ、諸の官軍共頓て張横を拖て陷車に入たりける。扨張順は舍兄が活捉れたるを聞て深く愁歎し、則阮家三兄弟が陣中に至て、三人の者に見え、我兄張横某が諍を容ずして、關勝が陣を劫んと闘り、却て關勝に捉はれぬと、告ければ、阮小七大に呼つて云く、我等兄弟三人も其志相同じうして互に救ひすくはるゝ、足下何ぞ白々と兄を捉はれ給ふや、若これを救はずば何の面目あつてか、宋公明に見え給はん、我が輩三人自ら馳て、足下の兄張横を救はんに、豈一點も難きことあらんや。張順が云く、未だ宋頭領の號令あらざるに、輕々しく擧動せんは不可ならん、阮小七が云く、宋頭領の號令を待て空しく日を過さば、足下の兄は遂に敵の手に殺されん、何ぞ必ずしも號令を待て自ら事を誤らんや。阮小二阮小五も是を聞て同心したりしかば、張順此三人を諫ること能ずじて、遂に其議に從ひ、其夜四更の時分水陣の大將ども、各快船に駕し、都て一百餘艘一度に漕開て、關勝が陣に攻來る。岸の上の官軍共は、水面に敵船寄來るを見て、關勝に斯と訴へしかば、關勝冷笑つて云く、智謀なき賊徒等幾千萬來る共、何ぞ恐るゝに足んやとて、則諸將に計を低言て如此々々と示し、頓て用意を催しける。扨阮家の三兄弟

張横夜中
関勝が陣を
襲ふ

んや、汝は左もあれ右もあれ、我は今宵自ら馳て大功を立譽れを遠近に取べきぞとて、已に意を決しければ、張順言を竭し猶再三これを諫しか共、張横重ねて耳にも聞入ず、其夜五十餘艘の小船を催し、毎船に纔三五人の兵を乗せ、一度に漕連なりて、蘆葦の内に入にけり。此時二更の比にして、天色陰りしかば、月の光も朦朧なり。扨關勝は獨帳中に在て、兵書を看て居ける處に、蘆葦の内に四五十艘の賊船有て、兩邊に埋伏せりと、告ければ、關勝これを聞て哈々と打笑ひ、盗賊の徒何ぞ道に足ん、我試に一つの計を施さんとて、早速三軍に號令を傳へて計を備へしめて、いはく、敵若陣中に入たらば、帳前より鑼を鳴さん、此響を相圖と定め四方より突て出で、敵一人も漏さず活捉れと命じける。諸軍謀を受け各防ぎを備へ、專ら敵の至るを待わびぬ。船火兒張横は二三百の水軍を引て、蘆葦の内に藏れ、時分を伺て盡く岸に上り、暗に敵の本陣に忍び入て、張中を望見るに、燈燭明々として關勝只獨兵書を看て在しかば、張横大に悦び手に長柄の鎗を撚つて帳中に搠入んとせし處に、忽ち傍に鑼の聲響き、喊の聲乾坤に震ひ、其勢山を崩し川を飜す如くなり。張横甚だ仰天し、鎗を拖て走り出んとせしか共、四方の伏兵一度に竝び起て、散々に擊しかば、張横が三百の兵一人も漏ず、活捉れぬ。張横は猶勇を奮て戰ひけれ共、竟に大勢に捉はれけるこそ哀れなれ。

に、背後の方に石炮頻に響しかば、聞達李成大に駭き急に退んとして、軍馬を返しけるに、左の方より小李廣花榮突出で、右の方より豹子頭林冲討て出で、各五百の軍馬を引て兩邊より夾で攻ければ、聞達李成敵の計に中て手を措に及ばず、急に引返さんとせし處に、呼延灼一彪の兵を領して進み出で、三面より取圍んで打けるに、聞達が兵ども大に亂れ、這々城中に逃入て、城門を閉再び出て追ざりけり。宋江が人馬は次第に依て漫と引退き、漸梁山泊に近附し處に、醜郡馬宣贊、路を攔つて戰を挑しかば、宋江先三軍を收て陣を取り、暗に使を小路より馳山陣に告知せて云く、北京の親方盡く引取て、遂に此邊、到著せり、水陸の軍馬を發し、戰を助くべしと約しける。扨水陣の大將船火兒張橫は、舍弟浪裡白跳張順と商議していはく、我輩兄弟山陣に上てより以來、語傳ふべき功を立ず、只他人に功を奪れぬるは、多少恥かしき所なり、幸ひ此たび大刀關勝兵を三手に分て我が山陣を攻るなれば、我等兄弟先登して敵陣を劫ひ、彼關勝を擒にして、大功を立なば、向後諸豪傑の前にても、肩を披き臂を張べし、知らず汝はいかゞ思ふぞや。張順が云く、我輩兩人は、只此水陣を守るのみにして、人數太だ鮮し、若先登して誤あらば、反て敵味方に笑はるべし、先宜しく便機を待て此計を休給へ。張橫是を聞て云けるは、汝が言の如くんば、何れの日にか能大功を立

軍斗を引取せ、猶二手の人馬を留め、飛虎峪の左右に伏置べし、城中の官軍我兵の引を見ば、必定城を出て追蒐べきに、若かくのごとき伏勢を設けずんば、我が兵大に亂るべし。宋江此言に服し、頓て小李廣花榮に五百の兵を與へて、飛虎峪の左に埋伏させ、豹子頭林冲にも同く五百の兵を與へ飛虎峪の右に埋伏させ、又呼延灼に二十五騎の馬軍を與へ、幷に凌振を從はしめ、城より十四五里西に伏置き、若城兵の打出たらんには、相圖の炮を放させ、親方の伏兵に消息を知らしむ。扨前軍の兵共は其夜暗に打立ければ、後軍の兵共も相續て馳出で、翌日巳の刻に至りて、盡く皆陣を拂て城下を離しかば、城兵共これを見て、追々に梁中書が廳前に至り、梁山泊の軍馬はいかなる事出來たるにや、盡く皆陣を拔て馳回り候ぞと、訴へける。梁中書これを聞て、聞達李成に此意を問しかば、聞達が云く、彼今圍を解て歸陣するは、必然東京の救兵、直に梁山泊へ寄たるならん、若此勢に乘じて追討せば、宋江を生捉んこと最易かるべしと、云ける處に、東京の使者文書を持て馳來り、今東京の救兵直に梁山泊に寄ける間、宋江定て兵を引回すべし、急ぎ城兵を出して、立處に打取給へと告しかば、梁中書これを聞て大に悅び、聞達李成に各兵を與へ、東西の兩路より追しめけり。宋江此時城兵が出たるを見て、三軍を催促し息をも繼ず走り行く。聞達李成喊き叫で跑來り、遂に飛虎峪の邊に至りし處

じて、神思を勞し、心益安んぜざりしかば、軍師吳用を請て、共に商議をなしけるに、吳用が云く、我輩城を圍むこと久しといへ共、未だ何方よりも救兵至らず、城中の敵もまた出て戰ず、只城を堅固に守りて動靜を窺ふは、いか樣にも緣故あらん、東京の蔡太師は梁中書が丈人なるに、婿の圍れたると聞ば、何ぞや救の兵を馳ざらんや、然るに未だ其消息あらざるは、若北京に良將ありて、魏を圍んで趙を救ふの計を用ひ、先此城を救はずして、直に梁山泊を攻取んと圖る事もや候はん、是は原來必然の道理なれば、宋君須く三思を加へ給へと、申けり。

○呼延灼夜月關勝を賺す

宋江が陣中には神行太保戴宗唯今到著せりと報ければ、宋江急に迎へて對面しける處に、戴宗告て云く、東京の蔡太師關將軍の子孫、蒲東郡の大刀關勝と申英雄の良將を募め、一萬五千の精兵を與へ、梁山泊に差向ぬるゆゑ、陣中の諸頭領評議紛々として、未だ一決に能はず、願くは早々回り給ひて、山陣の難を救ひ給へ、若然らずんば誤もやあらん。吳用是を聞て、今も宋君と語て此事に及べり、然も此のごとしといへども慌て馳回るべからず、今宵先步

を取圍み、甚だ急にして、敗れ旦夕ならんとす、將軍國家の爲に良計を施し、北京の圍を解候はんや。關勝謹で云く、某も已に彼賊等が猖獗ことを聞及べり。彼今山陣を離れて遠く北京に至るは、自ら滅亡を取道理なり、某若今北京に向て戰はゞ、尤勝利を得べけれ共、親方にも亦討るゝ者多くして、全く賊を亡すの計にあらず、某先數萬の兵をかりて、豫め梁山泊を攻取り、其後精兵を領して北京の賊を討ば、只一鼓に大いなる勝を得べし。蔡京此言を聞て悅び服し、此則ち魏を圍んで趙を救ふの計なりとて、即時に樞密院の官を呼で、山東河北等の精兵一萬五千を催させ、郝思文を先鋒として、宣贊を後軍とし、關勝を中軍として、領兵指揮使の職を授け、又步軍太尉に兵粮運送賞罰のことを掌せて救應とす。此日關勝蔡太師を辭して東京を打出で、一萬五千の人馬を三手に分け、直に梁山泊へ急ぎける。扨又宋江は諸將と倶に每日北京城を攻るといへども、いまだ城を落さざりしかば、唯三面を圍んで、牢く陣を連ねける。聞達李成は再び城を出て戰ふにも及ず、只城門を閉て城を堅固に守るのみ。宋江は城の落ざるを見て、心中に鬱悶し、其夜燈を秉て、九天玄女より授りし天書を披覽して在けるが、忽然として想道く、戴宗を山陣に回して久しけれ共、未だ消息あらず、又城を圍むこと已に月日を經たれ共、諸方より援兵の至らぬは、必竟いかなる故にやと、轉た疑を生

太師早速奏聞を遂げ、貴公を都に請て商議有べしとて、慇懃の文書を賜りけるに、必ず辭し給ふことなかれと、具に語りしかば、關勝これを聞て、甚だ喜悦に堪ざりき。此時郝思文も一座に在ければ、關勝又宣贊に對して云く、此人は是姓は郝、名は思文と申て、某とは兄弟の盟を誓ひたる八拜の至交なり、昔日此人の母夢に井木犴の胎に入と見て、此人を誕生したるにより、人皆是を知りて、井木犴郝思文と稱す、尤強勇にして十八般の武藝、一つとして熟せずと云ことなし、某幸ひ太師の募に應ずるなれば、此郝思文をも共に同往し、各功を建以て國に報い、民を救はゞ可なるべし。宣贊これを聞て益悦び、早々打立給へと催促したりしかば、關勝急に旅の粧を相調へ、卽ち郝思文と共に、關西の精兵千餘人を率し、馬物の具刀鎗等を持しめ、遂に宣贊に隨て發足し、はや東京城に入て、蔡太師が門前に至りしかば、宣贊門を守る軍士に就て、蔡太師に斯と告知さしめ、遂に兩人の者を導て節堂の前に至り、頓て太師に見えしむ。蔡京已に關勝を見るに、實も萬夫不當の勇ある豪傑と覺えて、身の長八尺五六寸に餘り、三極の鬚細かにして長く垂れ、兩眉鬢に入て鳳眼天に朝ひ、面は棗を重ねたるごとくにして、唇は硃を塗たるに似たり。蔡太師則問て云く、將軍の青春は多少ぞや。關勝答て、某今年三十有二歲なり。蔡太師又云く、今梁山泊の賊首宋江、大軍を以て北京城

宣賛関勝が許へ使を

かば、老早立身も有べき處に、童貫と不和なるゆゑ、今に碌々として兵馬保義の職をなすのみなり。蔡太師是を見て問けるは、汝已に計ありや。宣贊答て云く、某當初故郷にありし時一人の朋友有けるが、關將軍の嫡孫にして、姓は關、名は勝と號す、先祖關雲長の相貌に異ならずして、尤よく青龍偃月刀を使ふゆゑ、人みな大刀關勝と云慣せり、今は只蒲東郡に於て、巡檢の職をなし、屈して人の下にあり、此人幼き時より博く兵書を讀て、深く武藝に通じ、萬夫不當の勇あり、若相公慇懃に彼を請給ひて、大將となし給はゞ、梁山泊を破て賊徒を滅し國を保ち民を安ぜん事、最易かるべし。願くは相公禮を厚し文書を修へ給へ。蔡京聞て大に悅び、則ち宣贊を使者として、文書を持しめ、連夜に蒲東に遣し、關勝を東京に請はしめける。扨宣贊は文書を領して馬に乘り、不日に蒲東巡檢司の前に至り馬を下りぬ。此日關勝は郝思文と云者を私宅に邀へ、兩人閑に古今興亡の事を論じて居ける處に、東京より使者至りぬと告ければ、關勝急ぎ走り出て廳上に迎へ、一禮已に畢りけるに、關勝先問ていはく、我足下と互に相疎して久しく消息をも通ぜず、我つねにこれを想ひけるに、只知らず今日は何等の事有て、自ら來臨を惠み給ひぬるや。宣贊答て云く、今梁山泊の强賊北京を攻て危急なるゆゑ、某蔡太師の前にて貴公の才德を吹噓し、賊を擊國を保つの計策有ことを告ければ、蔡

○關勝議して梁山泊を取んとす

さる程に王定は都て三騎東京に至り、先蔡太師に拜謁し、書簡を呈しけるに、蔡太師是を披讀して大に驚き、則軍の起りを問しかば、王定謹で盧俊義がことを詳に訴へて云く、今宋江兵を領して城の三面を圍み、賊勢浩大にして敵すること能ず、庾家疃、槐樹坡、飛虎峪等の三陣、都て奪れ、城を攻ること烈火のごとく、落城遠かるまじと覺え候と、語りける。蔡太師是を聞て云く、汝已に遠路を來て鞍馬の疲あらん、先館驛に入て歇め、倘明日評議せんと、仰せければ、王定重ねて申けるは、北京の危きことは累卵のごとくにして、其破れ旦夕に在り、倘城を落されなば、河北の郡縣は都て失ふべし、願くは片時も早く救ひの兵を差下し給へと、最懇に告て館驛に至りける。蔡太師此日樞密の官を請けるに、樞密使童貫等三人の太尉を引て伺候せり。太師蔡京これを迎へ對面し、則北京の危きことを告て、賊を退ん計を議しければ、衆皆これを聞て面を覷合せ、頗る心中に驚きぬ。かゝる處に一人の大將すゝみ出づ。是則衙門の防禦使宣贊と云者にして、專ら兵馬を掌る。此人身の長八尺ばかりにして、武藝諸人に勝れり。昔日王府に在て郡馬人となりしゆゑ、醜郡馬と諢名す。尤豪傑の士なりし

走り漸暁比に城下に至りける。梁中書は此消息を聞て、魂を落し膽を冷し、慌て忙き兵を引て打出で、遂に敗軍を迎へて、共に城内に引退き、牢く城門を閉して出ざりけり。翌日宋江が軍馬正手の門に推寄て、陣を堅固に列ね、城を攻ること風火よりも急なりける。梁中書は城中に在諸將を集め、いかなる計を以て賊を退んやと、評議紛々たるばかりなり。時に李成進み出て云けるは、賊兵城を圍で其急なること、眉を燃すに似たり、若延引し給はゞ、恐らくは誤あらん、唯急に書簡を修へて使者を都に上せ、軍の次第一々に蔡太師の方に告進せ、早く帝へ奏聞あらせて、援兵の沙汰に及ばんには如べからず、且又文書を隣國に遣して救ひを求め、其上大名府の土民等を駈催して城中に籠め、心を同うし力を協せ、城郭を守り、檑木、炮石、瓦瓶、金汁等を備へて晝夜怠らず防ば、方に保て無事ならんと、恐れ入て申ける。梁中書此言を聞て、書簡を修へんはいと易けれ共、誰をか馳て可ならんやと、未だ云も畢らざるに、王定進み出で云く、某あへて馳參じ申さんとて、卽日書簡を領し、二人の馬軍を從へ、暗に城中を馳出で直に東京へと急ぎけり。扨宋江は兵を分て城の東西北三面に陣を列ね、只南門をのみ圍ずして、毎日戰を挑む。聞達李成は城外に出て戰ひしか共、終に一遭も勝を取ざりけり。索超は又箭疵未だ痊ざりしゆゑ、只家に臥て療治に暇なかりけり。

しける處に、軍師吳用が云く、官軍共は嘸怕て在べき、此勢に乘じて追擊すべし、若此時を鬆めば、恐らくは敵勇氣を養つて、再び破るに難からん。宋江是を聞き、吳軍師の言可なりとて、其夜勝誇たる精兵共を四手に分け、直に城下を望んで寄來る。此時聞達は諸將を集て、評議區々なりける處に、敵又寄來ると報ければ、聞達急に馳出望み見るに、東山の上に火把數千揮照し、野も山も遍く白晝よりも明らかなり。聞達兵を引て迎へ戰はんとせし處に、後山の方に又一彪の軍馬推來る。此手の大將は小李廣榮花、同く副將は陳達楊春なり。花榮兵に下知して、急に攻させしかば、聞達手を拱に及ず、兵を率して引回す。又西山の上に數千の火把を揮照し、當先に數騎の大將跑來る。正將は呼延灼、副將は歐鵬燕順等なりしが、緊く鼓を敲て攻寄たり。又後の方に喊の聲大に發り、霹靂火秦明幷に韓滔彭玘力を併せ寄來る。聞達が軍馬前後左右に敵を受け戰ずして奔走す。前面に又火の光晃耀として、若干の兵相控へたり。此手の大將は轟天雷凌振なりけるが、小路より轉て此處に至り、只顧石炮を放ちけり。聞達益仰天し、三軍と共に路を求めて走り行處に、火光の內より豹子頭林冲斬て出で、副將鄧飛馬麟等とともに敵の歸り路を截住む。四方の人馬攻鼓を打て烈火のごとく競ひ來りしかば、官軍大に亂れて逃走る。聞達刀を揮て逃行處に、幸ひ李成に遇ければ、頓て兵を一處に合せ、且戰ひ且

走り漸暁比に城下に至りける。梁中書は此消息を聞て、魂を落し膽を冷し、慌て忙き兵を引て打出で、遂に敗軍を迎へて、共に城内に引退き、牢く城門を鎖して出ざりけり。翌日宋江が軍馬正手の門に推寄て、陣を堅固に列ね、城を攻ること風火よりも急なりける。梁中書は城中に在諸將を集め、いかなる計を以て賊を退んやと、評議紛々たるばかりなり。時に李成進み出て云けるは、賊兵城を圍で其急なること、眉を燃すに似たり、若延引し給はゞ、恐らくは誤あらん、唯急に書簡を修へて使者を都に上せ、軍の次第一々に蔡太師の方に告進せ、早く帝へ奏聞あらせて、援兵の沙汰に及ばんには如べからず、且又文書を隣國に遣して救ひを求め、其上大名府の土民等を駆催して城中に籠め、心を同うし力を協せ、城郭を守り、檑木、炮石、瓦瓶、金汁等を備へて晝夜怠らず防ば、方に保て無事ならんと、恐れ入て申ける。梁中書此言を聞て、書簡を修へんはいと易けれ共、誰をか馳て可ならんやと、未だ云も畢らざるに、王定進み出で云く、某あへて馳參じ申さんとて、卽日書簡を領し、二人の馬軍を従へ、晴に城中を馳出で直に東京へと急ぎけり。扨宋江は兵を分て城の東西北三面に陣を列ね、只南門をのみ圍ずして、毎日戰を挑む。聞達李成は城外に出て戰ひしか共、終に一遭も勝を取ざりけり。索超は又箭瘢未だ痊ざりしゆゑ、只家に臥て療治に暇なかりけり。

しける處に、軍師吳用が云く、官軍共は嚥怕て在べき、此勢に乘じて追擊すべし、若此時を鬆めば、恐らくは敵勇氣を養つて、再び破るに難からん。宋江是を聞き、吳軍師の言可なりとて、其夜勝誇たる精兵共を四手に分け、直に城下を望んで寄來る。此時聞達は諸將を集て、評議區々なりける處に、敵又寄來ると報ければ、聞達急に馳出望み見るに、東山の上に火把數千揮照し、野も山も遍く白晝よりも明らかなり。聞達兵を引て迎へ戰はんとせし處に、後山の方に又一彪の軍馬推來る。此手の大將は小李廣榮花、同く副將は陳達楊春なり。花榮兵に下知して、急に攻させしかば、聞達手を拱に及ず、兵を率して引囘す。又西山の上に數千の火把を揮照し、當先に數騎の大將跑來る。正將は呼延灼、副將は歐鵬燕順等なりしが、緊く鼓を敲て攻寄たり。又後の方に喊の聲大に發り、霹靂火秦明幷に韓滔彭玘力を併せ寄來る。聞達が軍馬前後左右に敵を受け戰ずして奔走す。前面に又火の光晃耀として、若干の兵相控へたり。此手の大將は轟天雷凌振なりけるが、小路より轉て此處に至り、只顧石炮を放ちけり。聞達益仰天し、三軍と共に路を求めて走り行處に、火光の内より豹子頭林冲斬て出で、副將鄧飛馬麟等とともに敵の歸り路を截住む。四方の人馬攻鼓を打て烈火のごとく競ひ來りしかば、官軍大に亂れて逃走る。聞達刀を揮て逃行處に、幸ひ李成に遇ければ、頓て兵を一處に合せ、且戰ひ且

を待て、はや庚家疃の邊に打出ぬ。宋江が人馬もおなじく此邊に寄來り、兩軍已に對陣す。大刀聞達は諸軍を嚴に備へ、萬弩齊く放つて陣脚を射住めける。宋江が陣中より霹靂火秦明當先に進み出て、大音聲に呼りけるは、北京の賊官等我輩に敵し性命を捨んより、速に盧員外石秀兩人を還して、淫婦奸夫兩人を絆め出せ、然らば我肯て汝等を饒さん、もし萬一强て戰ふことあらば、立處に城を攻破り、城中の人民上下盡く殺すべし。聞達これを聞て大に怒り、誰かある彼活捉れと、呼りけるに、急先鋒索超馬を走驅出で、高らかに呼つて云く、秦明汝は是多年朝廷の祿を食み、何ゆゑ國家に背て梁山泊には入けるぞ、我今汝を活捉つて、肉を削り骨を拔べきぞと、大に惡口し罵りければ、秦明これを聞て甚だ恚り、狼牙棒を擧て索超に打てかゝる。索超馬を進めてこれを迎へ、兩將鋒を交へて雌雄を爭ひ、戰已に二十餘合に至れども、勝負更に分たざる處に、百勝將韓滔弓矢搭へて能引て放ちければ、其箭索超が左の臂に中り、索超大に驚き急に馬を引回し本陣に走入る。宋江此時鞭を揚て招きしかば、三軍一齊に喊き叫んで攻來り、官軍共を散々に擊しかば、屍は横たへ野に遍く、血は流れて河をなしぬ。既にして宋江が軍馬は庚家疃を過て、槐樹坡の陣を奪ひけり。此夜聞達は敗軍を收めて、飛虎峪の陣に屯し、兵の存亡を數ふるに、約莫三が一つを討せたり。宋江は槐樹坡の陣に屯

又兵を分て四方の賊兵を活捉んとて、已に三軍を分ければ、索超は人馬を引て突て出で、手中の斧を揮て一丈青に斬て蒐る。一丈青敵て戰ず、馬を回して山の背後に引退く。此時已に李成は人馬を分て、四方に馳頻に敵を追ふ處に、忽ち喊の聲起て一彪の軍馬突來る。李成是に駭き、急に四十五里退て庾家曈に入んとせしに、梁山泊の軍勢漸近く追至り、左に解珍孔亮が人馬馳出で、右に孔明解寶が軍馬突出で、喊き叫んで攻來るに、三人の女大將も、同じく後に隨て追來り、三面より夾んで攻しかば、李成が人馬大に亂れ、四面八方に敗走し、急ぎ本陣に引取んとせし處に、黑旋風李逵當先に進んで道を遮り、一人も漏さじと二つの斧を擧て散々に砍しかば、官軍いよ〱潰え亂る。李成索超自ら鋒を交へて死戰をなし、只一つの路を殺開き、這々本陣に逃入けり。宋江が軍馬遂に一陣を打破り、暫く陣を列ねて休息す。扨李成索超は兵餘多討取れ、慌忙き城中に人を馳て、梁中書に斯と告ければ、梁中書早速聞達に兵を與へて戰を助けしむ。聞達すでに城外に打出しかば、李成相迎へて陣中に入り、戰負たる次第一々詳に訴へし處に、聞達打笑つて云く、疥癬の病を受たるに等しき草賊の軍、何ぞ憂るに足ん、我明日彼を退けんと、議を定め、其宵に三軍に號令を傳へ、四更に食させ、五更に披掛て曉に一戰を捌むべしと、觸たりしかば、諸軍衆皆用意を調へ遂に曉

逵と云者なり、此度先陣の大將を蒙りて、當先いたす、若北京に勇士あらば、早く出て勝負を決せよ。李成是を見て、索超と共に大に笑ひ、梁山泊の豪傑等と云は、原此のごとき田夫野人の輩なり、我自ら是を活捉んに、何の其難きことあらんと云ければ、索超打笑て云く、彼體の賊を殺さんに、都監自ら手を下し給はんは大に不可なり、何ぞ雞を割に牛刀を用んや、先諸將に命じて捉はしめ給へと、諫めける處に、王定と云勇將百餘騎を引て斬て出で、直に李逵を望んで突來る。李逵暫く攔て戰ひけるが、いかなる所存にや、遂に引回して奔走す。索超はこれを見て相續て馳出で、一向一里許追行し處に、山坡の兩邊に金鼓の聲響て、若干の人馬馳來る。左には解珍孔亮あり、右には孔明解寶あり。各五百の人馬を引て戰を助けしかば、索超これを見て、頗る馬を勒て回りける。李成問ていはく、足下何故賊を捉へざるや。索超が云く、某今坡の邊まで追行しかども、伏兵起て左右より助け戰ひしゆゑ、先兵を引て回りぬ。李成が云く、これらの草賊幾千萬來ると云共、恐るゝに足ず、我自ら是を追拂はんと、兵を引て庾家村の邊まで追來りけるに、又一彪の敵兵攻來り、當先に女大將三騎轡を竝出で、中には扈三娘あり、左に顧大嫂あり、右に孫二娘あり。總て一千餘の軍馬を引て勢猛くぞ見えにける。李成心中に冷笑ひ、則索超に對して云けるは、足下は兵を發して迎へ戰ひ候へ、我は

尉遲孫立、鎭三山黃信、此四將相從ふ。前軍の大將は霹靂火秦明、副將は百勝將韓滔、天目將彭玘、後軍の大將は豹子頭林冲、副將は鐵笛仙馬麟、火眼狻猊鄧飛、左軍の大將は雙鞭將呼延灼、副將は摩雲金翅歐鵬、錦毛虎燕順、右軍の大將は小李廣花榮、副將は跳澗虎陳達、白花蛇楊春、幷に轟天雷凌振を帶して石炮を打しむ。兵粮の運送を掌る大將は神行大保戴宗と定めけり。已にして手分調りしかば、卽日諸軍山を下て進發す。其餘の頭領は副軍師公孫勝を初として衆皆山陣を守りける。扨北京の大將索超は、飛虎峪に陣取て在けるが、宋江が人馬はや近く至りぬと聞しかば、早速槐樹坡の陣に人を馳て、李成に斯と報ず。李成是を聞て、使者を城中に遣し、此事を梁中書へ訴へける。翌日李成又三軍を起して、索超が陣屋に至りければ、索超自ら李成を迎へて戰のことを議定し、其夜五更の時分諸軍を引て馳出で、直に庾家疃と云處に陣勢を列ね、一萬五千の兵を前後左右に備へ、李成索超嚴に披掛て、陣門の下に馬を勒へ、遙對面を打望に五百餘人の兵土烟を立て馳來る。李成これを見て兵に下知したりければ、各弓矢を撚り鎗刀を舞して陣前に進み出づ。梁山泊の人馬は庾家疃の前に至て陣を對す。兩軍互に喊の聲三たび合せて後、梁山泊の陣中より、先陣の大將黑旋風李逵馬を躍せ斧を揮て陣前に跑出で、恰も霹靂のごとく吼て大音聲に呼りけるは、我は是梁山泊の豪傑黑旋風李

黒旋風先陣して
北京城を伐

じて軍馬を催させ、明日いよ〳〵出陣せんとぞ議定しける。かゝる處に黒旋風李逵、大音聲に呼り云けるは、我二つの斧久しく暇にて有けるに、此たび五百の人馬を借給はゞ、速に北京城を攻破りて、兩人が性命を救ひ、又彼梁中書が頭を刎落し、猶且淫婦賈氏、幷に奸夫李固、此兩人をも同じく寸々に砍て、我二つの斧を濕すに、何の不可なることかあらんとて、躍起て悅びぬ。宋江が云く、汝は最猛き勇夫たりといへ共、北京城は他の城と等しからず、いはんや梁中書は蔡太師が婿といひ、殊更手下の大將に聞達李成とて、兩人の勇士あり、必ず輕々しく敵すべからず。李逵是を聞て大に呼り、梁中書が幕下に幾千の猛將有といふ共、我かつて是を恐れず、某若勝利を得ずんば、誓て再び山陣に回るまじ、願くは某に五百の兵を借し給へとぞ申ける。吳用が云く、汝果して馳向んとならば、我五百の兵を汝に與へて先鋒とせんに、明日山を打下るべしと、遂に商議を定めけり。此時秋の末冬の初の天氣なりしかば、人馬の働も易かりき。扨先陣の大將は黑旋風李逵五百の兵を領す。第二陣の大將は兩頭蛇解珍、雙尾蝎解寶、毛頭星孔明、獨火星孔亮、一千の兵を領す。第三陣は女大將一丈青扈三娘、同副將母夜叉孫二娘、母大蟲顧大嫂、一千の兵を領す。第四陣の大將は撲天鵰李應、副將は九紋龍史進、小尉遲孫新、一千の兵を領す。中軍の大將は宋江、吳用幷に小溫侯呂方、賽仁貴郭盛、病

十五里南に陣を取れ、我は跡より大軍を率して打出べしと、命じければ、索超是を領承し、次の日兵を引て三十五里の外に打出で、飛虎峪と云地に陣を堅固に取り列ねける。翌日李成も又兵を率して、三十里外に馳出で、槐樹坡と云處に陣を嚴密に下し、四方に柵を設け、劒戟を建並べ、三面に陷坑を掘て闇に敵を圖り、諸軍勢力を協せ、心を同うして敵の至るを待侘けり。去程に神行大保戴宗は、盧員外石秀共に生捉れたることを聞て、心中に想道く、先我一つの計を施して梁中書を誑き、彼兩人が斬罪を暫く延引あらしめ、其内此ことを宋公明に訴へ、終には彼等をも救はんものをとて、多く無名の書簡を修へ、北京の城中城外に捨置き、遂に梁山泊に歸て、盧員外石秀が次第、一々備細に語りければ、宋江是を聞て甚だ憂へ、則諸大將を集めて議しけるは、向に我呉軍師と共に、好意を以て盧員外を山陣に留んと欲し、今日却て盧員外に禍を蒙らしめ、況や又石秀を擒にせられ、今更いかなる計較を以て、此兩人の命を救はんや、諸將もし良き計あらば、早々これを示し給へと、未だ云も畢ざるに、軍師呉用進み出て云く、宋君先憂を省き給へ、某一つの計を獻じて、兩人が性命を救ひ、殊更北京城の兵粮を奪取て、山陣の軍用に備ふべし、幸ひ明日は吉日なるに、過半の豪傑を分山陣を守らしめ、某は宋君と倶に其餘の豪傑を引て、北京城を攻べし。宋江此言を信服し、則裴宣に命

六編　卷之五十三

○宋江が兵北京城を打つ

此時梁中書は兵馬都監大刀聞達、同く天王李成、此兩人を呼て商議をなし、梁山泊の宋江がことを語て甚だ怖れしかば、天王李成打笑ていはく、梁山泊の潑賊幾千萬有といふ共恐るゝに足ず、相公何ぞ必しも神思を勞し給ふに及ん、某不才にして多年祿を食ひ、未だ寸功もあらざるに、幸此回人馬を借り、城外に陣を列ね、快く賊を迎へて一戰を勵候はん、彼若山陣を離て遠く此所に至らば、定めて軍馬も疲るべし、某一々是を生捉て、上は國家俸祿の恩を報じ、下は平生學ぶ所の志を伸べ、尤肝膽を砕て患を除くべし、梁中書是を聞て大に悦び、多く金帛を以て兩人の大將を賞しければ、兩將齊しくこれを謝して退きけり。翌日李成大小の官軍を集て、評議區々なる處に、傍より一人の猛將進み出けるが、威風凜々として相貌堂堂。これ則姓は索、名は超、諱名は急先鋒と云て、萬夫不當の勇士なり。李成是を見て、大に喜び、今梁山泊の賊宋江近々兵を發して、我此北京を攻んと測る、汝は先兵を引て城外三

せたればとて、出して渡すとは、怪しむべし。五百兩の銀懷中は猶さら包みて提るとも、目方といひ嵩高にて、こゝに云ごとく取扱ふこと成べからず。

來善懦なる人なりければ、此言を聞て、心中に憂ひ、即ち梁中書に告て云く、梁山泊の豪傑等は各萬夫不當の勇あるが故、朝廷の天兵だにも尙且敵すること能はず、いはんや此小城一つを守て、豈よく彼等に對し戰はんや、彼もし大勢を起し寄來らば、縱ひ朝廷より援兵を馳給ふ共、よも其間には合まじければ、城を落されんこと必然ならん、高唐州の蔡九知府、青州城の慕容知府、華州の賀太守が近例眼のあたりならん、此時後悔する共益あらじ、某愚意を以て想ふに、先しばらく彼兩人が斬罪を延し、表を朝廷に奉り書を蔡太師に呈して、此度の一事具しく京に訟へ、其後人馬を催し城外に陣取せ、防を堅固に備へて、强賊を攔扣ば、方に保て此城恙なかるべし、若彼兩人が命を害しなば、梁山泊の賊兵急に推寄て城を攻べきに、何を以てかこれを退んや、好々三思を加へ給へとて、理を盡してぞ申ける。梁中書是を聞て可なりと同じ、則蔡福蔡慶に命じて云く、盧俊義石秀二人の賊は、尋常の囚人と同じからず、汝兄弟宜しく守て誤ことなかれ、先は汝等に預るぞと、命じければ、蔡福兄弟命を請て暗に悅び、急ぎ牢中に至て彼兩人の者を懇に慰め、深く憐愍を垂にけり。盧俊義石秀畢竟いかん。次卷を見て明ならん。

論者いはく、此卷李固主人を殺さんとて、節級に銀を送て賴むに、五百兩の銀を幸ひ持合

中に遣しける。蔡福は梁山泊に通同せんと思ふ心ありしかば、盧俊義石秀を一所に入置き、毎日酒食を與へて介抱を加へし故、兩人共牢中に在共、少も苦きことなかりしなり。梁中書此日王太守を招て石秀がことを議論し、かつ又石秀に砍れし人を數ふるに、死したる者七八十人、傷はれたるは其數を知らずと記しけり。翌日城中城外の者共方々に書簡の落しあるを、拾ひ取てこれを見るに、書簡の内には宛名もなく、其文甚だ奇異なりしかば、密に棄置んもいかゞなればとて、盡く皆梁中書に呈す。梁中書此書簡を見るに、其文に曰く、

梁山泊義士宋江。仰示大名府布告天下。今爲大宋朝濫官當道。汚吏專權。歐死良民。塗炭萬姓。北京盧俊義即豪傑之士。今者啓請上山。一同替天行道。特令石秀先來報知。不期倶被擒捉。如是存得二人性命。獻出淫婦奸夫。吾無侵擾。倘若傷羽翼。屈壞股肱。拔塞興兵同心雪恨。人兵到處玉石倶焚。天地咸扶。鬼神共佑。勦除奸詐。殄滅愚頑。談笑入城。幷無輕恕。義夫節婦。孝子順孫。好義良民。淸愼官吏切勿驚惶。各安職業。諭衆知悉。

梁中書此書簡を見畢て、大に驚き早速王太守を呼で、此ことといかにと商議しけるに、太守は原

法場を劫し石秀樓上より飛跳

しぞとて、恰も奔雷のごとく吼て、群る中に砍て入しかば、暫時に十餘人を斬倒す。蔡福兄弟大に驚き、遂に盧俊義を棄て逃去けり。石秀猛威を振て、東西に馳南北に跑て、散々に斬廻りしかば、役人下官八方に迯去り、攔る者なければ、急ぎ盧員外が手を携て南に望で走り行く。石秀は原北京の道を識ざりけるに、況や盧員外甚だ恐懼して、彌道を往こと能はざりしかば、此彼に猶豫ばかりなり。此時梁中書は、盧員外逃たると聞て大に驚き、卽時に若干の人馬を馳て、城の四門を守らせ、其外許多の官軍共を催して、四面八方を捜させけり。此時石秀は盧俊義が手を縮て、此彼に徘徊し居ける處、四下に人馬の聲大に起て、一度に咄と競來り、石秀盧俊義を正中に取圍んで、夫活捉れと、口々に呼りしかば、石秀勇を奮て働しか共、遂に大勢に兩人とも生捕けり。諸の官軍共、盧俊義石秀兩人を綁めて、頓て梁中書の方に引渡せしかば、梁中書石秀を見て大に怒り、汝潑賊何ぞ擅に罪人盧俊義を奪去けるや。石秀眼を怒し聲を勵し、梁中書を罵つて云く、汝は是國家を壞ひ、百姓を害するの奸賊なるに、いかんぞ我を恥しむるや、梁山泊の宋公明、近々人馬を發して、此城を攻破り、汝が頭を刎て百姓の爲に、一害を除んと欲す、故に我先來て汝に此事を報るなりとて、再應悪口をぞしたりける。諸の役人共是を聞て、各襲慄ぬ。梁中書良久しく沈吟したりしが、則蔡福に命じて、先兩人を牢

に梁山泊の下を過りし時、彼山陣の頭領等に生捉れ、數月山陣に逗留し、比日逃回りし處に、官府の決斷に依て沙門島に流罪になりける處、何故にや、又道中に於て、監押の下官兩人を殺して、再び官軍に捉はれ、今日午の上刻此邊に於て、斬罪に行はれ候なり、此ゆゑ見物の諸人相湊ふとぞ語りける。石秀これを聞て暗に驚き、直に法場の前に至て、其邊の酒店の樓に上り、先酒肉を求て飽迄食し、今もや盧員外を引渡すらんと、頸を伸して待居ける處に、はや巳の刻も過しかば、街の上大いに騷て、見物の人益々相加る。石秀は樓の窓より望見て在けるが、已に午の刻よと覺ふ時分、果して盧俊義を引渡し、當先には十餘對の鎗刀を持しめ、若干の官軍共左右を拂て馳來り、頓て盧俊義を法場の內に引居けるに、扨彼兄弟の節級蔡福蔡慶兩人は、盧俊義が左右に隨つて暗に告て云く、員外先に流罪なりし事は、我等兄弟十分に力を盡して是を調へき、然れ共員外かの兩人の下官を殺し給ひぬるに依て、今日又斬罪に決斷せり、此上は我等が力にて救ふこと能はず、誤て某等兄弟を恨み給ふことなかれと、低言し處、孔目の官呼で云けるは、時刻は能ぞはやく頭を刎よと、下知したりけるに、節級蔡福は原來劊子の職を兼たりしかば、頓て盧俊義が背に轉て、明晃々たる刀を閃し、已に斬よと見えし處に、石秀刀を揮て樓の窓より跳出で、大音聲に呼つて云けるは、梁山泊の諸豪傑、みな爰にありて待

恩賞を請ひ候へ、秋毫も恨あらずとぞ申しける。兩人の旅客これを聞て、からくと打笑ひ、我輩もし早く足下を殺しなば、嘸後悔をこそなすべきに、足下は浪子燕青にてありしよな、我等兩人の者を誰とや思ひ候ぞ、乃是梁山泊の頭領、汝を踢たるは病關索楊雄、汝に踢られたるは、拚命三郎石秀なり、我等兩人今宋公明の命令を奉て北京に馳、速に盧員外の安否を探聽んと欲す、足下早々員外の消息を詳に報じ候へ。燕青是を聞て大に悅び、盧員外が難に遭たる始終の事、一々備細に語りしかば、楊雄が云く、既に此の如くんば、我は先燕青と共に梁山泊に回り、宋公明に次第を告べし、石秀は獨北京城に馳て消息を伺ふべし。石秀が云く、足下兩人は一刻も早く連夜に馳回り給へ、我は自ら北京城に入て、盧員外の動靜を窺んと、領掌したりしかば、楊雄遂に燕青を引て、梁山泊に立回り、則宋江に見えける處に、燕青具に盧俊義が事を告ければ、宋江是を聞て大に駭き、早速諸將を集て評議區々なりけり。扨石秀は只獨北京の城外に至りけるに、天色已に晩しかば、此日は城内に入こと能ず、城外に旅宿を求め、翌日朝飯後に城内に入て、密に動靜を伺ひける處に、街の上に貴賤群集して、盡く皆歎息に逼りける。石秀是を見て、心中に怪み、街を行人に向て、かく群集するは何事の候ぞやと、問ければ、彼人答て云く、此北京に盧俊義と申す、大富貴の英雄有て、其名も廣く聞えけるが、向

等兩人を踢倒して、包袱包を奪取ざらんやとて、暗に衣の袖を卷紀て待居ける處に、彼兩人の旅客はや近々と至りしかば、燕青脚を飛せて後なる漢子を、一踢に踢倒しける處に、前なる漢子是を見て、大に怒り、急に脚を擧て、燕青が小腹を踢たりしかば、燕青踢られて、同じく地上に倒れけり。此時彼踢倒されたる漢子扒起て、燕青を踏著け、大に怒り罵つて云けるは、汝潑賊いかんぞ我を踢たりけるやてと、已に刀を拔て殺さんとしたりしかば、燕青大に歎じて云く、我今殺されん命は、一毛よりも猶輕く思へ共、若我死する者ならば、誰か梁山泊へ音信を通じて、主人の難を救はんやと、未だ云も罷ずして、淚は玉を連ねけり。彼漢子此言を聞て問けるは、汝梁山泊にいかなる消息を通ぜんと欲ふや。燕青が云く、汝無益のことを問んより、早々我を害せよとて、怕るゝ氣色はあらざりけり。彼前なる漢子燕青が身上に花を刺したるを見て、不圖思ひ出し、汝はもし盧俊義と云人の家人、燕青とやらん云者にはあらずや。燕青是を聞て思ふ樣、彼已に我を認ぬる上は、定て官府へぞ引渡すべきに、主人と一處に殺されなば、此處にて死んよりは猶大に强ならめとて、則答て云けるは、我こそ其盧員外が家人浪子燕青と云者なり、主人想はず難に遇て近々殺されんとする故、我今梁山泊に馳て宋公明を賴み、何卒主人の一命を救んと思ひ、却て汝等に捉れぬるも、運の極めと思ふなるに、早く官府に送て

て居たりける處に、茶店の主此沙汰を聞て大に驚ろき、遂に里正が家に至て暗に相見え、我店に兩人の漢子、休息して在けるが、いか樣にも蹺蹊ありげに見え候と、具に告しかば、里正父官軍等につげんとて、茶店のあるじを引て馳出けり。扨浪子燕青は鹿兎の類を射て、主人に參せんと思ひ、已に弓箭を提て、野外に出けるに、村中村外大に騷ぎしかば、暫く木蔭に躱れて、窺ひ見る處に、約莫二百餘人の官軍共、盧俊義を囚車に載て擡行ければ、燕青これを見て、大に悲み、跳出て助けんと圖りしか共、手に軍器を持ざりければ、又心中に想道く、我此體にて馳出たり共、終には大勢の者に捉はるべし、しかあらば、主人を救んとする人有べからず、我は先此を脱れて梁山泊に行き宜しく宋公明を賴で、主人の一命を救はんとて、其夜二更の時分迄路徑を馳けるに、餘り疲れて勝がたかりしかば、林の中に入て打臥し、曉に目を醒して、倍憂を催しける處に、喜雀頻に噪ぎければ、燕青心に想ふ樣、我今路銀に盡て、餓に苦みけるに、先彼喜雀を射て食せんと圖り、唯一筋の箭を殘したるを拔取て、頓て是を打搭へ、暫く喜雀を望み、能挽て漂と放ちけるに、其箭喜雀が尾に中て、喜雀は山坡の下に飛去ける。燕青後を慕うて追行き、此彼を尋ねけれ共、喜雀は更に見えざりけり。かゝる處に兩人の旅客遙對面より來りしかば、燕青これを見て想道く、或今路費に盡て梁山泊にも至りがたく、何ぞ彼

難からん。盧俊義が云く、我も左こそ思へども、棒瘡發し皮肉破れしゆゑ、路を行んこと甚だ難し、我運命何ぞかくのごとく衰へぬるやてと、又も憂を催しけるに、燕青が云く、事已にこゝに至り、もし遲々することあらば、又もや難に遭給はん、去來某背奉りて馳行べしと、遂に盧俊義を脊に擔ひ、直に梁山泊を望で馳けるに、纔十四五里に至て、はや大に氣力疲れ衰へて、眞正背負難かりしかば、一軒の茶店を尋ね暫くこゝに憩ひけり。

○法場を劫して石秀樓を跳ぶ

斯る處に過路の旅人共、追々來て語るは、林の内に兩人の下官射殺され在けるが、今もや殺されたると覺て、身猶冷かならずと申ける。里正共聞て大に愕き、早速人を馳て見すれば、果して兩人の下官射殺されてあるよし告ければ、即時大名府に此ことを訟ふ。梁中書是を聞て、急ぎ人を遣はし改さするに、殺されしは、董超薛覇兩人なりと報じければ、梁中書日を限て其殺したる者を捉はせけるに、諸の官軍共論議して云けるは、董超薛覇を射たる者は、必定盧員外が家人燕青にても有べきに、急に追蒐活捉べしとて、總て二百餘人手分をして追行しかば、近郷近隣大に騷ぎけり。又盧員外は棒瘡發して路を行こと能はず、尙茶店の内に在て、休息し

燕青箭を放て
盧俊義が危難を救ふ

まだ殺されずして、薛霸自ら地上に倒れて在しかば、董超奇怪のことに思ひ、薛霸が前に倚てよく見れば、薛霸口中に血を吐胸の上に一筋の箭を受て死したりける。董超大に駭き、こはいかにと慌ける處に、東北の方の樹の枝に一人の漢子跨て在けるが、弓に矢を搭て滿月のごとくに引緊め、箭壺差ふなと呼つて、漂と放ちけるに、その箭過ず董超が喉に中しかば、忽ち身を飜して地上に倒れけり。此時漢子樹の枝より跳下り、直に盧員外が前に至て、樹に捆りし索を砍解き、一向地にひれ伏て、哭けるこそ憑しけれ。盧俊義已に眼を開き、此男を見るに、則浪子燕青なりしかば、盧俊義餘りに悅で、こは夢中にて汝に遇たるにやと、疑ひけるも理に覺えける。燕青泪を拭て云けるは、某昨日北京城に在て、此兩人の動靜を窺ひけるに、李固密に此兩下官を請て、茶店の内に入ぬるゆゑ、いかさま是は主人を害せんと圖るならめと推察し、今朝老早此林の内に躱れて待伺ひし處に、果して案に差ざりし、某已に此兩人を射殺せし上は、相公先心を安んじ給へとて、半は喜び半は悲み諫めけり。此時盧俊義燕青に對して云けるは、汝今我を救ひしといへ共、兩人の下官を殺せし上は、又此辜を添ていよ〳〵重科なるに、今何れに逃去て身命を免れんや。燕青がいはく、相公かく禍を蒙り給ふこと、都て宋公明がなせし處なれば、唯梁山泊に上て此難を避け給へ、若他所に行給はゞ、必竟禍を免れ

義は腿酸脚軟て、一歩も進むこと能ず、動すれば後に毆れ、兩人の下官に打れけるは、いとも哀れなる形勢なり。已に一日董超、薛覇は林の内に入て、暫く睡んと圖りけるが、盧俊義が逃る事もやあらんと疑ひしに、盧俊義が云く、我縱ひ翅を生じたり共、逃行ん處なし、況や渾身疲れ一歩を行にも苦しきに、豈よく逃候はんや、只心を安んじ睡り給へと云けるに、薛覇が云く、汝が言甚だ信じ難し、我先汝を綁て其後快く歇んとて、頓て腰に著たる索を取て、盧俊義を松の樹に捆り著しかども、盧俊義かつて、左右の事も云ざりけり。薛覇暗に董超に對して、汝は林の外に出て左右を窺ひ、若人の來ることあらば、咳嗽を相圖とし給へ。董超が云く、汝は只速に手を下すべしとて、林の外に出ければ、薛覇は棒を舉て盧俊義を望み、汝必ず我を恨むることなかれ、汝が家の都管李固再三我等を賴で汝を殺さしむるにより、我等兩人已ことを得ずして、今汝を殺すなり、汝たとひ沙門島に至りぬるとも、終には殺害を蒙るべきなれば、寧此處にて殺されよ、明年の今日は汝が週年なる間、我肯て香花をも供へ、茶湯をも奠くべきぞとて、情なくも云ければ、盧俊義是を聞て泫然として涙を流し、嗚呼我運命の拙きぞ恨なりとて、頓て頭を低眼を閉て死を請しかば、薛覇頓て棒を輪しける處に、忽ち大に響く聲有て林外に聞えければ、董超これを聞き、はや殺しぬるよと馳入てこれを見るに、盧俊義はい

りとて、八十兩の銀を取出して兩人に與へければ、兩人の下官これを見て、良久しく沈吟したりしが、遂に銀を見て慾心生じ、頓て領掌したりけり。李固大に悦で云く、我は是恩を忘るゝ輩にあらず、彌彼を殺して回りなば、多く金銀を送り申さんとて、已に約諾したりしかば、兩人の下官、共に喜悦して茶店を出で、再び盧俊義を拖て打出けり。盧俊義兩人の者に對して云けるは、我已に四十杖策うたれて全身腫たれば、今日の發足は叶ふまじ、明日に延引し候はんや。薛覇怒て云く、汝自ら口を閉よ、我等兩人不幸にして、汝がごとき極貧の囚人に取著り、六千餘里の路を馳て沙門島に赴んとするに、何ぞ優に日を延さんや、殊更汝が手中には、只一錢をも携ずして、何を賴みにかゝる言を云ふやとて、大に恥しめ、或は罵りあるひは笑ひしか共、盧俊義猶悲んで云けるは、我は無失の罪に陷たる者なるに、少しは憐を垂給へと、未だ云も終らざるに、董超大に怒て云く、汝此間富貴なりし時は、一毛をだにも拔ずして、今日天の罰を蒙り倘これを曉さぬこそ愚なれとて、再三催促して道を急しかども、盧俊義心に怒るといへ共、敢て言ず。遂に隨て十餘里許行けるに、天色漸晩に向とす。兩人の下官此處に旅宿を求めて歇みけるが、盧俊義を牛馬のごとく使ひければ、盧俊義甚だ疲れけり。其夜四更の時分に、兩人の下官はや起て旅宿を打出で、一向盧俊義を赶て馳ければ、盧俊

張孔目が云く、盧俊義尤も梁山泊に數月逗留すといへ共、原捉れて山陣に至りしことなれば、未だ通同せしといふ正しき證據もあらず、只四十杖策て三千里外に流し給はゞ、公の決斷ならんか、相公の尊意はいかんと申ければ、梁中書是を聞て、孔目のこと極て明けし、さらば流罪に決斷すべしと、蔡福に命じて盧俊義を引出させ、則四十杖策て面に金印を刺し、卽時に頸枷を枷て、沙門島と云處に配流す。相隨ふ兩人の下官は、董超、薛覇とて、原東京開封府の下官にてぞ有けれども、一年林冲を監押して、滄州に赴し時、高太尉が命を請け、林冲を殺さんと圖りける處に、魯智深に妨られ、終に林冲を殺さず、這々の體にて回りしかば、高太尉これを惡んで北京に流しけるに、梁中書彼兩人が才覺なるを見て、これを擡擧けるとなり。此日董超、薛覇、梁中書の命を受て盧俊義を監押す。已に廳前を退いて役所に至りし處に、李固此事を聞て大に駭き、暗に兩人の下官を茶店の內に招き入れて、種々懇に款待ければ、董超、薛覇これを謝して云く、貴客は何故我輩を款待給ふや。李固が云く、我一つのことを兩公に賴んと欲す、我仇人盧俊義今沙門島に流るゝ由にて、兩公是を送り給ふと聞し故、今朝より此處に至て兩公を待請しなり、兩公若道中に於て盧俊義を殺し給はゞ、我重く此恩を報ずべし、是は先當座の禮物な

定盧俊義が命を助け流罪にぞ決斷せん、然らば我輩がなすこと全うして、梁山泊の豪傑等是を悦ばん、且幸に人情をなす道理なり、若途中に於て盧俊義を殺す者有共、是は又我輩の與る處ならねば、少しも妨有じと、理を究て申ける。蔡福是を聞て大に悦び、汝が云處我心に合へりとて、且盧俊義に宜しく憐愍を加へ、朝夕酒食を與へ食しめ、暗に梁山泊音信を盧俊義に告知せ、遂に千兩の金を分て、梁中書張孔目幷に諸役人に背く賄賂を送り、事を宜しく調へけり。去程に李固は翌日蔡福が家に至て、盧俊義が消息を求めけるに、舍弟蔡慶幸に家にありて答へけるは、我兄弟盧俊義を殺さんと圖りけれ共、梁中書是を免し給はず、緊く人を附て守らしめ給ふゆゑ、我輩是を殺すこと能ず、足下自ら馳て梁中書に賄賂を送り給へ、若梁中書だに承引あらば、我輩早速手を下して彼を害すべしと、實しやかに申けるに、李固此言を聞て實もやと思ひけん、卽日人を頼で梁中書へ賄賂を送りしかば、梁中書が云く、牢中に囚人を殺さんは節級が干る所なるに、我において何の益かあらん、然れども我猶商議すべき間、先是を受るぞとて、賄賂を收めけるこそ貪慾なれ。張孔目も又李固が賄賂を請しかば、心中いかゞせんと躊躇しける處に、蔡福重ねて若干の金子を、梁中書と張孔目とに送つて、近々に決斷あらんことを催促したりければ、張孔目來つて梁中書にまみえ、盧俊義が事、急に決斷

盧員外が一命を救ひ給はゞ、此恩天地と等しうして、一山の諸豪傑是を忘れ候まじ、若萬一盧員外終に殺さるゝの義あらば、山陣の人馬盡く寄來て、北京城を攻落し、貴賤老少の分ちなく都て斬盡し、北京城の人種を絶すべし、節級は眞の大丈夫とこそ聞及ぬれ、我輩が心底を察し候へ、先當座の禮物とし、黄金一千兩を持參せり、若又某を捉へんと欲し給はゞ、早速捉へ給へ、某少しも悔なしと、餘義なく申ける。蔡福是を聞て心中に甚だ怕れ、暫く返答にも及ばずして、躊躇するばかりなり。柴進又云く、大丈夫の事をなさんに何ぞ躊躇する事のあらんや、須らく早々一決し給へ。蔡福これを聞て、豪傑先爰を退き給へ、我自ら所存ありと、いひければ、柴進これを謝して云く、節級既にかくのごとくば、永く大恩を報ずべきなりと感激して、門外に徒せし從人を呼で一千兩の黄金を取出し、これを蔡福に與へて云けるは、節級先此金を收め給へ、猶異日重く謝すべしとて、遂に別れを告て門外に馳出けり。彼從人は則神行太保戴宗なり。扨蔡福は此消息を聞て躊躇して決せず、再び牢中に來て、舍弟蔡慶に此事を具に告げ、いかゞせんと商議せしに、蔡慶が云く、長兄は常によく事を決斷し給ふに、何故今是等の小事を躊躇し給ふや、既に一千兩の金子を送りし上は、我長兄と倶に此金を以て、上下の役人へ賄賂を送るべし、梁中書張孔目都て皆利を貪る徒なるに、若賄賂を得候はゞ、必

我に送て員外を殺さんと圖るならん、我何ぞ五十兩の銀に迷て後日の禍を求めんや。李固又云く、節級斯宣ふは必定銀の少きを嫌ひ給ふ故ならん、我猶五十兩の銀を添申さんに、是を領掌し給はんや。蔡福が云く、汝もし猫を殺さんと思はゞ、是等の銀を賄賂んも可ならん、北京第一の英雄盧員外を害せんに、豈よく是等の銀にて能はんや、汝もし肯て五百兩の銀を我に與へば、我肯て承允すべし。李固が云く、節級もし盧員外だに殺し給はらば、五百兩の銀はいと易し、幸今持合せ候とて、則取出して五百兩の銀を與ふ。蔡福銀を收めて云けるは、汝明日來て盧員外が骸を見給へとて、遂に別れて回りける。李固は此言を聞て大に悅び、暫く酒を飮で一興を催しぬ。蔡福は家に回りける處に、一人の客來りて、節級家に在やと、呼りければ、蔡福急にこれを迎へて、貴客は何れの處より來り給ひぬるや、又貴姓大名はいかん。彼人答て、我敢て姓名を報ぜんに、節級必ず是を驚き給ふこと勿れ、某はもと滄州横海郡の者にて、姓は柴、名は進と號し、大周皇帝の末孫なりしか共、不幸にして罪を犯し、今は流落て梁山泊にあり、此度宋頭領の命を承て、盧員外が消息を探聞んが爲、已に此處に至りけるに、豈料んや盧員外は淫婦と奸夫との計にて、無實の罪に陷され、入牢したりしかば、盧俊義が一命の懸る所、都て節級の手にあり、故に某死を捨て貴宅に至りぬ、敢て此事を告申すは、節級若

を一枝花と申す。此時蔡福蔡慶に對して云けるは、汝速に此罪人を牢中に入置べし、我は先家に回て來らんとて、既に牢門を出て二十歩ばかり馳ける處に、浪子燕青手に籃を提て走來り、則蔡福を拜して涙を流しければ、蔡福問て云く、汝は何故流涕するや。燕青答て云く、願くは節級憐を垂給へ、某が主人盧員外、今無實の罪に陷つて入牢しけれども、飯を送る者もあらざる故、某今一飯を送らんと欲す、もし節級我を免して飯を送らしめ給はゞ、此恩身終るまで忘れ候はじと、未だ云も終らずして、流るゝ涙は降る雨の如くなり。蔡福是を聞て云けるは、我も豫め、此回の事を既に曉しぬ、汝自ら入て飯を送れと、許しければ、燕青大にこれを謝し、自ら牢中に入て飯を盧員外に送りけるに、員外淺からず感じけり。扨蔡福は一つの橋を過て走り行處に、茶坊の内より一人の小厮出て、蔡福が前に至り、今一人の客官某が樓上に來り、専ら節級の過り給ふを待請て何やらん説話せんとなり、暫時立倚給へと、云ければ、節級遂に小厮に隨て樓上に至りし處に、彼都管李固恭しく迎へて、座已に定りしかば、蔡福先問て云く、李公は何等の事有て我に示し給ふや。李固答て云く、我今一つの事を節級に頼んに、若これを辭し給はずんば、我重く謝すべしとて、先五十兩の銀を取出して蔡福に與へしかば、蔡福哈々と打笑て云く、汝此度主人の妻を奪ひ、剰へ家財等迄自家の所有とし、今此五十兩の銀を

しき證明なりと、纔に云終りし處に、妻賈氏も又呼つて云く、我丈夫を害せんと圖るにはあらざれ共、一人謀叛を企る時は、九族滅すといへば、我是を恐れて豫め、官府へ訟候ぞ、誤て我を恨み給ふなと、情なく云ければ、盧俊義大に怒り悔けれ共、更に益ぞなかりけり。妻と李固又呼つて云けるは、員外今更悔給ふとも甲斐なからん、速に白狀して拷問を免れ給へと、未だ云も終らざるに、張孔目は李固が賄賂を得たりしかば、忙しく進み出て、梁中書に告て云く、彼反賊痛く拷問し給はずんば、豈肯て白狀せんや、速に打しめ給へと、諫めけるに、梁中書其意に同じ、則左右の下官等に命じ、打しめしかば、下官共命を奉り、盧俊義を扯倒して散々に打ければ、忽ち皮開肉綻びて鮮血滚々と流れぬ。盧俊義天を仰で歎じけるは、我は是横死をなすべき運命にてぞ有らんに、曲て白狀せばやと思ひ、我かつて梁山泊に通同し候と、白狀しければ、張孔目白狀の次第を一紙に寫し、卽時に頸枷を枷て牢中に遣しけるに、街の人々盧俊義を見て、憐を催ぬはなかりけり。盧員外已に牢中に至りしかば、彼兩院押牢節級盧俊義を一ト目見て、汝は我を識認けるやと問けれ共、盧俊義は只頭を低て更に聲をも作ざりけり。此兩院押牢節級は劊子の職を兼けるが、姓は蔡、名は福と號して武藝の達人なるにより、諢名を鐵臂膊と號して、傍に又一人の漢子あり。此人は則蔡福が舍弟蔡慶と云者なり、諢名

官人盧俊義を
生捉に向ふ

て、先涙を洒ぎて哭しかば、盧俊義これを見て云けるは、汝須く哭きを過て、速に燕青がことを語るべし。妻益哭て云く、相公先酒食をも用ひ給ひて、疲を慰め給へとて、分明に燕青がことを語らざりしかば、盧俊義彌疑を生じける處に、前後の門に大に喊の聲起て、二三百の官軍共我先にと家内に亂れ入り、頓て盧俊義を高手小手に綁めけり。盧俊義は只呆れたるばかりにて手足を動し働くにも及ばず、白々と手を束ね綁められしこそ憐なれ。諸の官軍等遂に盧俊義を引て、梁中書が廳前に至りし處に、妻賈氏幷に都管李固は堦の下に跪きけり。梁中書盧俊義を見て、大に罵て云く、汝は是北京の良民なるが、何故梁山泊の賊と通同して朝廷に背ぬるや、汝已に裏應外合の計をなして、北京を攻んと圖り、今日反て捉はれぬるは、豈天罰にあらずや。盧俊義が云く、某愚にして、梁山泊の呉用に欺れ、想はず彼等に捉はれ、約莫四ヶ月餘り、梁山泊に在けれども、今日身を遁れて再び家に回り、毛頭逆心の企あらざるに、伏して願くは相公明らかに是を察し給へ。梁中書尙怒て云く、汝若梁山泊に通同せずんば、いかんぞ能三四ヶ月逗留することあらん、殊更汝が妻賈氏幷に家人李固先達て此事を訟へぬるに、汝猶これを抵賴んやと、大に責て云けるに、李固も又盧俊義に對して云く、事已に此に至り何ぞ再三是を抵賴給ふや、壁の上にも分明に四句の反詩を書給ひぬれば、是正

燕青零落して
主人公を
諫む

宿を借こと能はず、只此邊に徘徊して乞食をなす、相公再び梁山泊に回り給ひて、別に商議をなし給へ、若城中に居給はゞ、必定禍を蒙り給ふべしと、涙を含で申ける。盧俊義聞も敢ず、反て燕青を叱りけるは、我妻は原來賢慮にして、不義をなす者にあらず、汝かく云は必定私の怨有ならん。燕青が云く、相公は常に氣力を熬給ひて女色に親しからざる故、夫人老早に是を悦び給はず、原來李固と私情を通じ候ひて、只相公の眼目をのみ詐き給ひけるが、今日此便機に乘じて、李固と夫人と夫婦になり給ひしかば、相公を害せんと圖らるべし、相公若回り給はゞ、必然彼等が毒手に遇給ふべし、只宜しくこれを察し給ひて、梁山泊に回り給へ。盧俊義大に怒て云く、我家五六代相續て北京に住し、誰か我事を知らざらん、李固いくばくの首あつて斯る不義をなさんや、是必ず汝が身の上に不義あるを恐れて、却て我を詐くならんとて、眼を怒らし罵りしかば、燕青是を聞て涙を流し、相公某が言を疑ひ給ひて、禍を被り給ふなと、て、急ぎ袂にすがりけるに、盧俊義これを踢倒して、遂に家に回りしかば、家人等是を見て大に驚きし所に、李固恭しく迎て後堂に至り、忽ち身を飜して拜をなしぬ。盧俊義が云く、燕青は家に在や。李固答て云く、燕青がことは一朝一夕の言に盡しがたし、先暫く休息をなし給へ、其後これを告知らせ進らすべしと、いまだ云も終らざるに、屏風の後より妻賈氏進み出

六編　卷之五十二

○冷箭を放て燕青主を救ふ

偖も盧俊義は梁山泊を離れて、夜を日に繼急じかば、日あらず北京城外に至りけるに、天色已に晩て城内に入がたく、其夜は先旅宿を借て歇み、翌日盧俊義早天に出て、城内に入し處に、前面より一人の漢子來りけるが、頭巾破碎衣裳襤褸、最艱難の光景なり。此漢子漸相近づき、盧俊義を一目見て、忽ち地上に跪きしかば、盧俊義誰なるにやと是を見れば、是則ち浪子燕青なり。盧俊義怪て問けるは、汝何故かくやつれて、此邊に徘徊するや。燕青が云く、此處は人の往來繁くして説話する處にあらず、且傍に來り給へとて、遂に人なき處に至り、則告て云けるは、相公發足し給ひて後、李固先回て夫人に告て申けるは、相公は梁山泊に歸順し給ひて、宋江が次第二位の座に座を定め、朝敵となり給ひぬるはとて、李固と夫人と擅に私情を通じて不義をなし、先達て相公の罪を官府へ訟ける故、某是を支りしかば、彼大に怒て某を追出し、斯艱難を蒙らしむ、某猶城中に宿を求んと思ひけれ共、李固に攔担られて、

盧俊義は全く威風義氣凜々堂々として、大將の器も備へたる君子にして、一己の武藝を自負すると八卦の趣向を除きたらば、作意の花ならんに、惜いかなと。又盧俊義は員外の官人にて商ひをすること、孟州牢の管營の息施恩快活林の酒肆なると云類にて、士と商と兼るは支那の風なるにや。

を、宋江深く渇想し、第一の位を讓らんと迄いふこと何とも肯がたきことなり。

此段に吳用盧俊義が宅の白壁に卦歌を書せしは、謀を貼し深き心にてせしなるべし。扨又李俊が船に乘て、他の船に歌ふ詩を聞て驚くと云處に、又此詩を出し、唯其三句目知ニ此理一と云處を、留ニ此裡一と少しく變たり。末に山陣にて吳用李固を追掛とゞめて、汝が主人原反心有て、宅の壁に反詩を書したる、其句每盧俊義反と云四字を包てありとて、四句の義を示す處には、第一の句のみ。外三句は大に齟齬したれ共、其場には其句にて的當すれば、是を一の詩に書改がたし。原作者の不念と覺ふ。

先板通俗忠義水滸傳に、盧俊義が壁に吳用が書たるとあるは、支那の本を譯するに見誤たると覺ふ。此卷都て通俗忠義水滸傳には、所々飛々に見違等あり。たとへば盧俊義を山陣に迎る處に、一乘の轎を八乘の轎とあり。如何樣の形の轎ならん、讀人解すべからず。此新譯は皆百回本を以て悉く改正して書り。

論者いはく、盧俊義眞の大丈夫にて婦女のごとく八卦の凶に迷はされ、自ら身を誤るは、妻の賈氏、李固燕靑が思慮には、遙に劣りし人物なり。且其身一分の武勇に慢じ、大勢の豪傑に遇て生捉んと思ふも思慮たらず。孟子に云く、匹夫の勇一人に敵するとある類にて、李逵同格の勇者なり。何程武藝に達し剛勇の人なり共、女性や家人の思慮程も分別なき者

けれ共、盧員外曾て領掌せざりし處に、神機軍師朱武又十餘人の頭領を引て、忠義堂に至り、則呼つて云けるは、某等皆員外の德を慕うて、かく申に、員外もし某等が款待を辭し去給はゞ、恐らくは諸豪傑其輕く見らるゝを恨て、事を惹出すにも至らん、願くは員外是を察し給へ。呉用が云く、足下等先鬧ぐこと勿れ、我宜しく員外を留め、諸人の望を叶ふべしとて、則盧俊義に對して云けるは、古の語にも、酒を將て人に勸むるは終に惡意なしとこそ云なれ、員外何ぞ諸人の誠實を顧み給はぬや。盧俊義今は辭しがたく、又數日逗留したりしかば、前後三四十日を經たりける。盧俊義北京を出しは四月なりしが、はや四ケ月餘過しければ、金風淅々玉露冷々として、已に中秋の節も近く、盧俊義故郷の家を思ひ、又別れを告歸らんことを願ひしかば、宋江是を許して云く、員外切に歸らんとあるを再び留申さんは、反て無禮なれば、明日金沙灘に於て別るべき間、早々用意を調へ給へと、諾しければ、盧俊義悦ぶこと限なし。翌日宋江諸の豪傑とともに、盧俊義を送り金沙灘に至り、一盤の金銀を將て餞したりしかば、盧俊義これを辭して云く、我自ら誇て申にはあらず、頗家富て金銀乏しからざれば、全く是を受るに及ずとて、路費ばかりを留め、其餘は盡く還しけり。宋江其外共依々戀戀盧俊義に別れ、山陣に引入けり。是より故郷に歸りていかならん、次卷を見て曉すべし。

や、明日我格別に酒宴を設て、聊款待を盡さんに、これを辭し給ふことなかれとて、其日も遂に留めけり。翌日宋江酒宴を設け饗應したりしかば、次の日は吳用宴主となり、又其次の日は公孫勝宴主となる。約莫三十餘人の頭領每日宴主を輪して、盧俊義を款待けるに、光陰梭の如くにして、覺ず一月有餘を過しければ、盧俊義今は切に歸らんことを欲し、此日宋江に別れを告し處に、宋江が云く、員外何故再三歸らんと想ひ給ふや、明日宴を備へて別離の盞を勸め申さん、再會俄に期しがたければ、今日は强て心を寬げ滯留有べしと、いまだ云も終ざるに、諸頭領一度に進み出て云けるは、宋頭領十分に員外を敬ひ給ふことなれば、我輩は又十二分に員外を敬ふべきことなり、何ぞ只宋頭領の款待のみ請給ひて、某等が款待を受給はざらんや、我輩も亦各員外を請ひ、君に三盃の酒を勸めて陽關の曲をも歌ふべきにと、慇懃に申ける處に、黑旋風李逵大音聲に呼つて云く、我一命を捨て、吳軍師と共に北京に行き、邂員外を賺して、當陣に至らしめけるに、何ぞ一點の款待なからん、我輩各席を輪して、員外を饗應し、快く別れをも惜むべきに、若是を辭し給はゞ、我あへて員外と火併せんのみとて、眼を怒し聲を勵して叫りければ、吳用大に笑て、李逵はもと愚直にして、言語の高下を曉さぬ者なれば、員外是を免し給ひて、猶數日逗留あらば、諸人の心足ぬべしと、再三詞を盡し

り、李固を近く招て云けるは、汝が主人盧員外は已に我輩と議定して山陣に跡を留め、第二位の座に坐して、宋公明が次とす、盧員外未だ此山に上り給はざる先に、已に内々朝廷に背く心ありて、家内の壁の上に四句の反詩を書給ひぬ、彼詩の内には一句毎に字を包み、蘆花叢裡一遍舟と云は、盧の字を隠せり、俊傑那能北地遊と云は、俊の字を隠せり、義士手提三尺劍と云は、義の字を隠せり、反時須斬逆臣頭と云は、反の字を隠せり、此四句の内に、盧俊義反すと云四字を包みたり、今日汝が主人山陣に上りたる上は、近々大事を企つべき問、汝必ず盧員外跡より回んと想ふこと勿れ、汝等衆人がことは、本殺さんと圖りしか共、罪もなければ、我一點の仁心を垂れて恙なく歸すなり、重ねて此邊に來ること有べからずと、嚴に命じければ、李固等是を聞て恐れ慄き、一向地上に拜伏す。吳用又云く、汝等早々馳回るべしとて、兵を引て歸り上りしかば、李固等は車を推て、北京へと急ぎける。吳用又言を巧にし、色を令して盧俊義を慰め、其夜も酒宴を設て、款待を盡しけり。翌日盧俊義は宋江吳用幷に諸英雄に告て云けるは、我諸豪傑の厚意を蒙て、山陣に逗留すといへども、日を過すこと年のごとくにして、寸心を安んぜず、願くは今日別れを告て山を下り申さんに、若是を許容あらば、ますく\感ずべし。宋江が云く、我此たび幸に員外を覩奉り、何ぞはや山を下し參らせん

り、某身に一點の罪なく頗る家財あり、何故山陣に留り候はん、況や大宋に生れ、大宋に死せんこと、大丈夫始有て終有所なるに、我なんぞ朝廷に背んやとて、更に從ふ氣色なかりけり。吳用ならびに諸頭領又頻に諫めしかども、盧俊義いよ〳〵從はざりければ、吳用又云く、員外心を決して留り給はずんば、我輩豈あへて強に留め申さんや、然れ共猶數日滯留し給はゞ、聊か款待を盡すべきにとて、餘儀なく云ければ、盧俊義これを聞て云く、某數日逗留せんは最易く候へ共、もし家族共此消息を聞ば、嘸憂ひ申さん、望らくは速に回し給はるべし。吳用が云く、此事いかんぞ難からんや、先李固に車を與へて回らしめ給はゞ、貴族皆心を安じ給はん、員外は數日逗留有て後より歸り給へ、必ず尊心を煩はしめ給ふなとて、吳用則彼李固を呼出して問けるは、車の上なる貨物紛失はあらざるや。李固答て、聊も紛失なしと、申ければ、宋江是を聞て大に悅び、則二錠の大銀を李固に與へ、今日山を下つて馳回るべしと、命じけるに、李固これを聞て忽ち夢の醒たる心地して、暗に安堵の思ひをなしける。此時盧俊義李固に命じて云く、汝家に回りなば、我恙なく四五日の內に、跡より歸らんことを委しく妻に告憂を省かしめ、燕靑以下にも能傳ふべしと、懇に云含めければ、李固謹で領掌し、遂に別れて山陣を下り、諸人に車を推せて路口に打出ける處に、吳用又五百の兵を引て馳下

とし、今日幸に威顔を拜して雀躍にたへず、先には多く高風を犯しぬるに、伏て望らくは罪科を高免し給へとて、悲しく詫ければ、呉用も又身を屈て云けるは、某向に宋頭領の命を請け、員外の貴館に至り、擅に八卦を卜して、員外を此處に賺し寄進せぬ、是皆員外の徳を慕うて、共に大義に聚んと欲せしゆゑなれば、願くは恚を息て恕り宥し給ひ、我輩が懇望を准へ給へ。宋江又盧俊義を請て第一位の座に坐せしめける處に、盧俊義これを辭して云く、我は元來不能不才の徒といひ、殊さら擒となりし者なれば、萬死猶輕しとする處なるに、何ゆゑかゝることを以て我に戲れ給ふや。宋江打笑て云く、我豈員外を戲れ候はん、我常に員外の清徳を慕ひ渇想す、若我を棄給はずんば、此處に留て山陣の主となり給へ、我旦夕諸頭領と共に員外の號令を承ん。盧俊義が云く、我死す共宋君の尊命に從ひがたしとて、意決して見えしかば、呉用が云く、明日重て商議せんに、今日は先疲れを慰め申さんとて、早速酒宴を設け、盧俊義を饗應し、其夜は各退散しけり。翌日又宋江盧俊義を請て忠義堂に至り、再應慇懃に云けるは、我輩已に員外の威風を犯し候へども、原皆徳を慕ての事なれば、員外これを明察し多罪を赦し給へ、山陣隘して馬を歇め給ふに堪ずといへ共、忠義の二字を顧み給ひて、山陣に留り給へ、某肯て一位の座を員外に讓るべし。盧俊義が云く、宋頭領の言大に差へ

山泊に上りたる、混江龍李俊と云者にして眞の漁人にあらず、員外もし山陣に降參し給はずんば、非命の死をなし給はん、自らはやく是を曉し給へ。盧俊義怒て、我汝に誑れぬるこそ恨なりとて、刀を揮て斬てかゝりしかば、李俊これを見て、急ぎ水中に跳入けり。斯る處に又一人の漢子、水底より顯れ出で、我は是浪裡白跳張順なりと呼り、遂に船傍を把て引翻しけるに、船底は天に朝て盧俊義は水中に落入けり。當世名譽の勇士なれども水中に落入浛れけるを、張順水底に在て、盧俊義を抱き住め、頓て對面の岸に拖上しかば、五六人十の兵ども、若干の火把を點し馳來り、盧俊義を綁んとせし處に、戴宗跑著大音に叱り呼りけるは、汝軍士共盧員外の尊體を損ふことなかれ、宋頭領の命令なるぞとて、頓て錦の衣を以て、盧員外が濕衣に更へ、一乘の轎に乘しめ、山陣に上りける處に、前面に數十對の燈籠現れ出で、一簇の人馬鼓樂を奏し迎へ來り、前には宋江、吳用、公孫勝あり、後には都て諸頭領從ひあり。宋公明先盧員外を接て地上に跪きしかば、諸頭領も同じく一齊に拜伏す。盧員外これを見て、急ぎ禮を回して云く、我はこれ擒となりし者なれば、速に一死を求んに、諸頭領何ぞ大禮を行ひ給ふや。宋公明から〳〵と打笑て云けるは、員外先陣中に至り給ひて、我輩が存念を聞候へとて、遂に延て忠義堂に至り、宋江慇懃に罪を謝して云く、某員外の大名を聞こと雷の耳に轟がご

蟠龍の頭領李俊盧俊義を虜にす

生來不會讀詩書　且就梁山泊內居
準備窩弓射猛虎　安排香餌釣鰲魚

盧俊義歌の意を察して甚だ驚き、只聲もなさずして動靜を窺ひける。然る處に又一艘の小船漕來る。同じく二人の漢子打乘り、これも亦歌を歌うて曰く、

乾坤生我潑皮身　賦性從來要殺人
萬兩黃金渾不愛　一心要得玉麒麟

盧俊義これを聞て大に驚き、後悔何ぞ啻萬千のみならんや。又當先に一艘の快船漕來る。船の頭に一人の漢子立出て、同じく山歌をうたうていはく、

蘆花叢裡一遍舟　俊傑俄從北地遊
義士若能留此裡　反躬逃難可無憂

盧俊義此歌を聞て、心中深く驚きける處に、此三艘の船に乘たる者、中なるは阮小二、左なるは阮小五、右なるは阮小七なり。三艘の船一度に漕來りしかば、盧俊義暗に想ふやう、我は原水心を識ざるに、若船中にて彼等に犯されば、必定誤もやあるべきと、則漁人に向ひ、船を岸に著よと、いひければ、漁人これを聞て呵々と打哄ひ、我は是多年潯陽江に在て、今此梁

鼓の聲地に振ひ、豹子頭林冲、霹靂火秦明、各〻一彪の人馬を引て、東山の邊より砍て出で、旗を振賊を作て又雙鞭將呼延灼、金鎗手徐寧同じく一彪の軍馬を引て西山の邊より砍て出で、更に一筋の路もなか馳下る。盧俊義此猛勢を見て、いよ〳〵慌て、四方に跑り道を尋ねけれ共、獨自ら小路を望で走りりけり。此時天色漸晩て殆ど飢に疲れしかば、盧俊義辛苦に逼り、盧俊義暗に嘆息し、這々行く。此處もと林深く露濃にして、前後左右見え分たざりければ、則盧俊義を望で呼り鴨嘴灘の邊に至りし處に、蘆葦の内より一人の漁夫小船を漕で出來り、夜中に徘云けるは、官人何ぞかく大膽なるや、此處はこれ梁山泊の麓にして強賊の出沒なり、路を失うて徊給ふは、自ら災を招き給ふに似たり。盧俊義が云く、我誤て此處に至り、人郷あれ共道雜て認が斯迷へり、汝我を救はんや。漁人が云く、此より三十餘里はなれて、若官人十貫の錢を與へ給はゞ、我たし、若船路より行ときは、纔四五里に過ずして、容易往來す、人家ある所に至らしめば、我魚獵を止て肯て船を借候はん。盧俊義が云く、汝もし我を渉して、呼りしかば、彼漁人船を岸に著け、十貫文の外猶重く賞錢を施すべし、早々船を著て乘せよと、則盧俊義を船に扶け乘せ、遂に三五里ばかり漕行ける處に、蘆葦の内より一艘の快船出來る。船の上には兩人の漢子あり。一人は櫓を搖一人は篙を撑て、高らかに歌て曰く、

軍師が計に落されたるを知り給はざるや、員外縱ひ二つの翅を生じ給ふ共、飛出んこと難からん、早々山陣に上て諸豪傑と共に大義に聚り候へ、此故に先刻より山陣の同僚追々戰へども、眞實に鬪ん心の者一人もなし、同僚誰か一人武藝に暗きものあらん、戰ず逃るを以ても其意を解し給へ。盧俊義怒一圖にして、刀を揮て砍て蒐るに、朱同、雷横各軍器を擧て三人鋒を交へ、戰二三合に至り、朱、雷、兩將叉身を囘して逃走る。盧俊義想道く、此兩人を殺さずんば、いかんぞ車を奪ひ囘さんやとて、刀を揮て山坡を追出ける處に、朱雷兩將ははや見えざりけり。かゝる處に山の上より一面の黃旗露れ、「替天行道」と云四字を書き、宋江、吳用、公孫勝二百餘人を引て走り出で、一齊に呼り云けるは、盧員外怒を息給へ。盧俊義これを見て、彌罵りしかば、吳用諫て云く、員外何故斯怒り給ふや、宋公明常に員外の淸德を慕ひ、則某に仰せてかくのごとき計をなさしめ、いかん共して員外を山陣に留んと欲す、望らくは員外德を慕ふの誠を顧み給ひて、山陣に足を留め給はんや。盧俊義大に罵つて云く、汝奸賊いかんぞ我を誑きしぞ、我誓て汝が首を刎べきぞ。小李廣花榮、宋江が背後より弓矢を撚て躍り出で、聲を勵して呼りけるは、盧員外汝再三武勇に誇ることなかれと、箭を搭へて盧俊義が笠の纓を射箭しかば、盧俊義初て此一矢に驚き、急に身を囘して走り行く。此時山の上に又

呼り云けるは、盧員外何ぞ自ら計に陷たるを知らざるや、既にはや脱れ出候はん路もあらざるに、宜しく山陣に上り給へ。盧俊義高聲に問て云く、汝は誰なるぞ。彼大將打笑て云く、我は是山陣の頭領赤髪鬼劉唐といふ者なり。盧俊義忿然として大に怒り、草賊走ることなかれとて、刀を舞し跳蒐る。劉唐是を迎へ、戰三五合に至りける處に、沒遮攔穆弘馳來り、劉唐と力を合せ助け戰ふ。盧俊義少しも怕ず、勇を振て鬪み戰ふ時節、背後より又撲天鵰李應刀を擧て跳蒐り、三人齊しく盧俊義に敵す。盧俊義三人を迎へ一點も慌ず、精神益盛にして二十餘合戰ける處に、山の上に金を鳴しければ、三人の頭領一度に引て馳去けり。盧俊義焦燥て、二百歩ばかり追しか共、終に追著ず、再び林の邊に立回て、彼十輛の車を尋ね見るに、車も人もあらざりしかば、盧俊義大に驚き、高き處に馳上り四下を望けるに、遙山坡の下に若干の小賊等、彼車を奪取て、李固等數十人の者を絆め、鑼を鳴し鼓を擂て、松林の邊に推て行く。盧俊義これを見て、怒心頭より起り、恰も奔雷のごとく吼つて、山を趕下り、漸近く望みける處に、又兩人の大將進み出で、盧員外何れに往給ふやと、呼りける。此兩將は美髯公朱同、挿翅虎雷横なり。盧俊義是を見て、大音聲に罵りけるは、汝等潑賊急ぎ車と人とを還せ、若遲羼せば、我今汝等を殺すべし。朱同髯を撚て哈々と打笑ひ、盧員外汝已に此場に至り、何ぞ呉

く、我久しく汝等賊黨を捉んと欲し、今日特地此處に至りし、早く宋江を出し降らせよ、若然らずば、一々首を刎て立處に後悔せしむべし。李逵呵々と大に笑て云く、員外今日吳軍師の計に中り、尙これをも曉し給はぬや、速に山陣に上て諸頭領の內に加り給へ、然らば我右の座を公に讓らん、若然らずんば、我斧を舉て頭を打割ん。盧俊義限なく怒り、手中の刀を撚て李逵に砍て蒐りしかば、李逵二つの斧を揮てこれを相迎へ、纔戰二三合にして林の內に逃走る。盧俊義刀を舉て追來り東西南北に馳囘る。斯る處に又一人の大和尙、一彪の人馬を引て馳來り、高らかに呼つて云く、員外我を見知り給ふや。盧俊義罵つて云く、汝は何れより來れる賊和尙なるぞ。彼大和尙打笑て云く、我は是梁山泊の豪傑花和尙魯智深と云者なり、我今宋頭領の命を奉て、員外を迎ふ、快く山陣に上り給へ。盧俊義甚だ怒り、汝何ぞかゝる無禮を云やとて、刀を輪して斬てかゝり、戰いまだ四五合に至らざるに、智深も同じく逃走る。盧俊義呵々と打笑ひ、汝等何ぞ云に足ん、我に敵せんと思ふものあらば、早く來て勝負を決せよと、呼りし處に、武行者兩刀を揮て砍て蒐る。盧俊義これを迎へて、二三合戰ひしかば、武行者も又逃囘る。盧俊義大に冷笑て呼りけるは、汝強賊何ぞ一人も我に敵する者なきや、恥を知らん輩は速に進出て、我刀の鋼を試よと、未だ云も終らざるに、山坡の上に一人の大將有て、大音聲に

らん、相公もし四つの旗を持しめ給はゞ、賊必ず起て難儀に及ぶべし、好々思慮を加へ給へと、恐れ入て申ける。盧俊義責て云く、汝等懦弱人、何事をか曉さん、梁山泊の盗賊等譬へば燕雀の群を以て、いづくんぞよく鴻鵠に敵せんや、我元來萬夫不當の勇有りといへども、未だ功名を取ず、今日幸ひ對手を得んは、我一身の武藝を顯すべき時節なり、汝等豫め索を調へて待受べし、我賊首を生捉つて京に引送り、武名を四海に振はんこと、掌の内に握りけるぞ、汝等若怕て進まざる者あらば、先是を殺して衆に示すべきぞとて、前には四輛の車を竝べ四つの旗を挿し、後には六輛の車を竝べ進發す。李固は衆人と共に甚だ怕れ、進ん氣色なかりければ共、盧俊義に責られ、止にとを得ず、衆皆相隨て梁山泊の路へ來りける。斯る處に遙向の林の内より、胡哨響しかば、李固等は是を聞て大に駭き、面色變じ一向震ひ慄くばかりなり。盧俊義諸人に下知して、車を一邊に推せければ、李固を始として四五十人の者共、衆皆車の下に躲んとしたりけるに、盧俊義これを見て大に怒り、鞭搶取て打廻る。此時林の中より早四五百の小賊馳出し處に、後にも又金鼓の聲大に響て、同く四五百の賊兵走り出で、前後より挾で路を截留む。又林の中に石炮の聲響きける處に、黑旋風李逵躍出て呼りけるは、盧員外日外の啞子道童八卦置に伴れ、公の門邊に待在しを識認給ふや。盧俊義是を看て、怒り罵つて云

者なるゆゑ、往來の旅人を害せずといへども、いよ〳〵暗に過り給はゞ、全く無事なるべしと、委細に告し處に、盧俊義これを聞て冷笑ひ、早速家人に命じて衣裳櫃の内より四つの旗を取出しけるに、兼て用意やしたりけん、旗の上に文字あり。其文にいはく、

慷慨北京盧俊義　遠駄貨物離郷地

一心只要捉強人　那時方表男兒志

李固等衆人は、此四句を見て大に驚き、賊もし此旗を見ば、必定人馬を發して路を攔るべしと、衆皆暗に低言ける。旅宿の家僕盧俊義に問ていひけるは、貴官は梁山泊に縁ありや。盧俊義が云く、我はこれ北京の富家なるに、いかんぞ梁山泊に縁あらんや、我却て梁山泊の賊宋江等を活捉んとこそ圖るなれと、高聲に云ければ、家僕大に怕れて云く、貴客是等の言をいひ給ふことなかれ、若梁山泊へ漏聞えなば、我家暫時に禍を蒙るべし、貴客たとひ千軍萬馬を以て敵し給ふ共、豈よく彼等に勝給ふことあらんや、無益の事を圖り給ひそ。盧俊義怒て、汝等都て梁山泊の賊と一列の者なるべし、されば先言を詐て人を赫すならん、家僕此言を聞て重て返答にも及ばざりけり。李固も又是を聞て心中に甚だ恐れ、則地上に跪て盧俊義に告て云く、相公我輩を憐み給ひて恙なく故郷に回し給はゞ、倘羅天大醮を修し給はんよりも、大に強な

盧俊義東岳へ發足
妻賈氏燕青等首途を送る

か共、自ら強てこれを忍び、則十輛の車に貨物を載て、五六十人の車客を催しければ、盧俊義も亦自ら旅粧を相調へ、翌日五更の時分、先李固に二輛の車を監押させて城外に出し、自らは暫く跡に留つて、先祖の靈牌を拜し、又燕青に對して云く、汝愼で家事を掌り、毛頭も怠ることあるべからずと、嚴に命じける。妻は涙を流し云けるは、相公今千里の長路に往給ふことなれば、道中自ら保養して恙なく歸り給へ。盧俊義がいはく、百日の前後には必ず歸るべし、好家を守り候へとて、遂に別離て城外に馳出ければ、李固は此邊に在て待迎しに、盧俊義が云く、汝は二輛の車に隨ひて先に馳せ、好らんずる旅宿を求て待べしとて、先李固を遣しけるに、盧俊義は諸家人とともに車に跟て後より馳せ、左右の風景を見て心に悅び、漸四十里ばかり至りし處に、李固此處に待て中食を進め、又四十里行て其日は旅宿に歇み、翌日又未明に起て旅宿を打立ち、只顧諸人を催促して急ぎけり。

○張順夜金沙渡を鬧す

盧俊義日あらずして、梁山泊の近村に至り、旅宿を借ける處に、旅宿の家僕出て云けるは、此處より梁山泊へは僅三十里に足ぬ道なるに、貴客自ら用心をなし給へ、山陣の大王宋江は原仁

取給ふや、若遠國に馳給ひて萬一誤あらば、偌大いなる家業一旦に廢し候はん、只宜しく遠出を休給ひて、清心寡欲高居靜坐に入て齋し給はゞ、災自ら避て無事ならん。盧俊義が云く、汝女性として何事をか曉さん、諺にも寧其有を信ずべし、其無を信ずべからずといへり、況や古の君子だにも災を聞ては、自ら避て謹むことまゝ多し、我心已に決するに、汝等再び諫を云ことなかれとて、顏色略悅びず見えしかども、燕青猶重ねて云けるは、某相公の福蔭に倚て武藝を學び得候へば、若途中に於て盜賊等に出遇ことあらば、四五十人迄は追拂ひ候はん、伏して願くは、李都管を家に留めて某を帶し給へ。盧俊義が云く、汝は諸事才幹たりといへ共、商賣のことはいまだ如ざる處あり、是故に我汝を帶しがたし、李固は又商賣の老功たるに依て、我これを帶せんと欲す、汝は宜しく家に留て、家内のことを掌れとて、燕青が望を進へざりける處に、李固は是を聞て、某日者脚氣生じ、長路を行がたく覺え候、願はくは相公是を察し給へ。盧俊義是を聞て忽ち大に怒り、兵を養ふこと千日、其用は一朝にあり、我今汝を帶し行んと欲するに、汝何ぞ病に托して勞を辭するや、若再び我に背くものあらば、我決して是を饒さじとて、拳を捏り牙を咬けるに、其勢大いに猛かりしかば、李固是を恐怖して、面色土の如くに變じ、再び言ず、皆一同に座を立て退きける。李固は心中に怨みし

て、宜しく災を除んことを祈るべし、第二には賣買の貨物を携へて、外鄕の風景をも遊覽すべき間、李固は十輛の車に貨物を載て、我に隨ひ來るべし、燕青は家に留て牢く家務を守れ、我三日の内に發足すべし。李固が云く、相公は何ぞ八卦等の、虛文の詞を容ひ給ふや、家に在給ふとも、何の災か至り候はん、必ず遠く出給ふことなかれ。盧俊義が云く、我命中に定る災あるに、いかんぞ大膽にしてこれを避ざらんや、若萬一災至りなば、後悔すとも晚からん、汝すべからく疑ふべからず。燕青も又云けるは、相公今泰安州に赴き給はんには、必ず梁山泊の下を過り給ふべし、今梁山泊には宋江等が輩山陣を守り、州郡を犯し、旅客を惱す、若仁聖帝の廟に、參詣あらんとならば、靜謐の後赴き給へ、彼八卦先生が亂言を用ひ給はゞ、反て災出來すべし、彼先生は必定賊徒にてもあるらめ、某昨日遇ざりしこそ最も惜けれ。盧俊義が云く、汝等いかんぞ斯る言をいふや、君子も又災を問給ふとこそ聞及ぶなれ、我彼梁山泊の賊を見ること、恰も草芥の如し、豈これを恐れて自ら留らんや、若彼路を出て我を擱ることあらば、我一々是を生捉て武名を天下に振はんに、何の不可なる事かあらんと、未だ云も畢らざるに、屏風の後より妻賈氏進み出て云けるは、我今相公の言を具に聞取り候なり、古の語にも外に出ること一日、家にあるにしかずと云なるに、何ぞ自ら亂言を容ひて迷ひを

李固と申者は別して盧俊義が洪恩を蒙り、僅四五年の内に都管に擡擧られ、家内大小の事すべて此李固これを掌るなり。盧俊義管家共を見るに、其内に一人の管家見えざりしかば、此者は何ゆゑ來らざるやと、問ける處に、彼一人の管家頓て至て共に盧員外が前に伺候す。此者身の丈は六尺以上にして、面の色は雪よりも白く、年の比二十四五歳ばかりなり。此者原北京の土民にして、幼き時父母を喪て孤となりける故、盧俊義深く是を憐み、家内に養ひ置き、年已に十五六歳に至て、聰明伶俐諸人に勝れければ、盧俊義格別にこれを愛し、彼が一身に五色の花を刺黥させて風流に飾り、全體すべて白錦に花を添て見るがごとし。殊さら吹彈歌舞に達し、諸國の鄉談を曉し、物假粧等の事一つとして會せずと云ことなし。なかんづく武藝に熟練して、よく弓を射百たび放て百たび中る、北京の人皆是を稱せざるはなかりけり。此人姓は燕、名は青、諢名を浪子と云ふ。此時諸の管家ども兩邊に分れて座をつらねけるに、左の方は李固を首とし、右の方は燕青を首とす。盧俊義則語て云けるは、我昨日八卦を卜して、我吉凶を考へしめける處に、百日の内に血光の災出來して、身を刀劍の下に亡さんと云ふ、若東南の方千里外に避行ば、災を脫れ生を保んとなり、我想ふに、東南の方に泰安州の東岳泰山、天齊仁聖帝の金殿有て、天下人民の死生禍災等を祐け給ふなれば、我第一は彼廟に參詣し

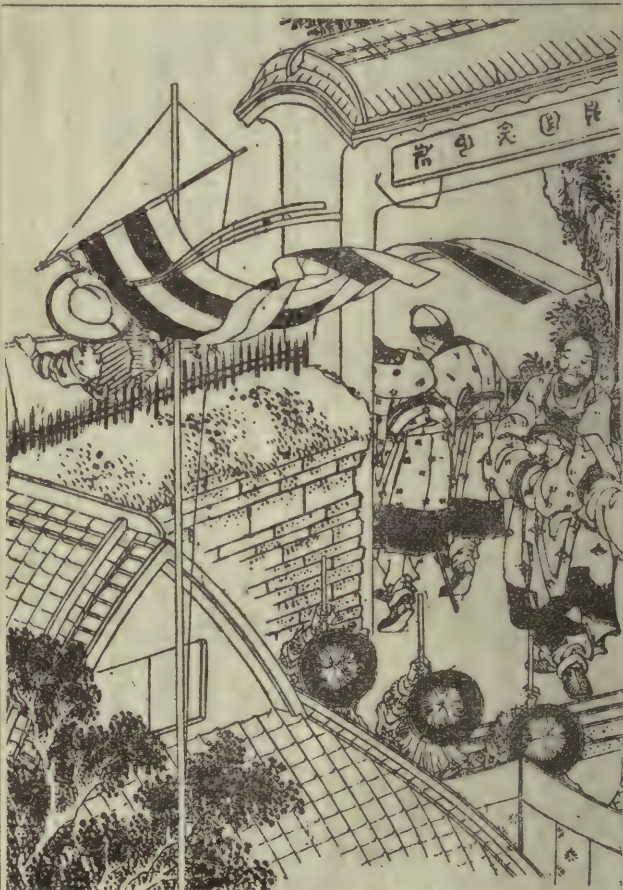
今までは大に好かりしかども、今年の運極て悪く、僅百日の内に血光の難出來して、死を脱れ給ふべからず。盧俊義がいはく、知らずいかなることを以て此難を避んや。吳用これを聞て、再び鐵算を取出し、故意半時計考て云けるは、員外もし此難を避給はんには、東南の方千里外に移り候はゞ、まさに能脱れ給ふべし、猶少し驚き給ふことあらん、然れ共尊體を傷ふに及ばずして、後必ず安きことを得給ふべし、命中に四句の卦歌あり、我今是を寫させ進すべきに、後此四句の語に驗あらん時、某が言の靈感なるを想ひ合せ給へとて、則四句の卦歌をうたふを、員外筆墨を取寄て、自ら白壁に書す。

蘆花叢裡一扁舟　俊傑俄従北地遊
義士若能知此理　反躬逃難可無憂

盧俊義書畢れば、吳用は鐵算を收納め別れを告けるに、盧員外門前迄送り出しかば、吳用又他日來るべしとて一禮を叙べ、遂に李逵を引て城外の旅宿に歸り、吳用私に李逵に告て云けるは、我が計已に行はれて大事早成ぬ、一刻も早く山陣に馳囘て用意を調へ、速に盧俊義が來らんを迎ふべしとて、即日梁山泊へ歸りける。去ほどに盧俊義は八卦の凶を聞て寸心を煩はしめ、一家中の管家どもを呼集けるに、諸の管家等李固と云る都管に隨つて、盡く皆廳前に至る。此

呉用が智
盧俊義を賺す

只眼前のことのみ卜ひ候へ、我は今年三十二歳にして、甲子の年乙丑の月、丙寅の日、丁卯の時に生れて、當病等の患もなしとて、八卦を賴ければ、吳用一つの鐵算を取出し、八卦の面を良久しく考へ、忽ち聲を放ち、あな恠哉と、呼りける。盧俊義これを聞て大に驚き、我卦何の吉凶を主ると、問ひければ、吳用答て、員外若疑ひ給はずんば、某まつ直に是を告申さん。盧員外が云く、先生は是迷ひの道を指敎へ給ふなるに、我何ぞこれを疑んや、速に吉凶を語り給へ。吳用が云く、員外の命大に不祥なり、百日の內を出ずして、必ず血光の災出來し、死を刀劍の下に遂給ふことあらん、嗚呼笑止やと、語りける。盧俊義聞も敢ず打笑て云く、先生差り、我北京に生れて富貴の家に長じ、先祖より犯法の男女なく、親族に再婚の女なし、抑且我平生を謹愼で非道のことをなさず、不義の財を取ず、況や一家の男女盜をなさず、過をなさゞるに、何ゆゑまた血光の災あらんや、我偏にこれを信ぜずと、心中に冷笑ぬ。吳用是を聞て、容を改め色を變じ、早速かの壹兩の銀を還して嘆息しけるは、天下の人皆諂を悅んで、金言耳に逆ふこそ恨なれとて、已に別れを告て歸んとしたりけり。盧俊義是を見て、暫く先待給へと、扯留めて云けるは、我今云し言は都て戯なり、先生宜しく怒を息給へ、我肯て先生の敎に從ん。吳用が云く、員外誤つて我言を疑給ふべからず、員外の運命

て殊更鬧しかば、盧俊義家人に問て云く、門前には何事出來して、かく鬧しきや。家人答て云く、他國より來れりと見えて、一人の先生街に奔走し、一兩の銀を與ふる人あらば、八卦を卜して、善惡吉凶を知らしめんと呼り、又一人の道童を從へけるが、其形醜うして、風俗人に異なるゆゑ、數十の小童後に跟てこれを笑ひ、街中を鬧し候なり。盧俊義が云く、八卦を卜する者は、僅數十錢をこそ求るなれ、彼偏に一兩の銀を求るは、必定尋常の先生にあらじ、汝速に行て彼先生を誘引して來れ、我彼に問ふことありと、命じければ、家人遂に門前に出で、吳用李逵兩人を請て門内に入けるに、吳用先李逵を此處に留め置き、己は廳前に至て盧俊義に對面す。盧俊義は當世名譽の英雄なりけるが、果して其模樣千人に勝れ、身の丈は九尺に餘り、眼の光は星のごとし、眉は八の字を分て、鬚は腮に垂れ、威風凜々して相貌堂々、吳用これを見て心中に讃美し、恭しく禮を行ひければ、盧員外も又身を躬て禮を回し、則吳用の姓名故鄕を問けるに、吳用答て、某姓は張、名は用と申者にして、自ら談天口と號す、原來山東の產なり、某よく人の善惡吉凶死生禍福等のことを卜す、若これを問んと欲し給はゞ、先一兩の銀を與へて問給へ、毛頭も差ふことあらず。盧俊義これを聞て、卽ち一兩の銀を與へて云けるは、君子は災を問て福を問ず、況や我家は貧しからざれば、彌福を問に及ばず、

呉用李逵姿を扮して北京城に到る

ける。吳用進み倚て恭しく禮を行ひければ、軍士問て云く、秀才は何れの處より來りぬるや。吳用答て、某姓は張、名は用と申者にて、八卦の卜を營とす、又此道童は姓は李にて候とて、假關文を取出し軍士に與へぬ。此時軍士等熟李逵を見て云けるは、這道童が眼ざしは恰も賊に似たりとて、衆皆惡口したりしかば、李逵大に怒て拳を擧けるに、吳用暗に睨ければ、李逵其意を曉して、再び頭を低にける。吳用又軍士等に向ていひけるは、這道童は原啞子にして、耳聾たるゆゑ、動もすれば人を疑て怒りを起す、一點も道理を知らざる徒にて候へば、無禮の罪を宥し給へとて、遂に城中に入て街の邊に至り、吳用鈴をならして、四句の口號を念じて云く、

甘羅發早子牙遲　彭祖顏回壽不齊
范丹貧窮石崇富　八字生來各有時

吳用猶自ら呼つて云く、所謂此四句の意は、則是一生の禍福吉凶、時なり、運なり、命なり、生を知り、死を知り、因を知り、道を知る、若身の上の吉凶善惡を問んと欲する人あらば、先一兩の銀を與へて問ひ給へとて、只顧鈴を振て街を奔走したりしかば、街中の童子共これを見て、約若五六十後に隨つて笑ひける。吳用すでに盧俊義が門前に至りし處に、童子益馳加つ

六編　巻之五十一

○吳用智をもつて玉麒麟を賺す

梁山泊にては晁蓋箭疵より病重り死去し、其仇を復せざれば、諸豪傑の面々まで愁鬱の折から、大圓和尚盧俊義が噂ありしより、頻に宋江、盧俊義が事を思出し、山陣に招度思ひ入處に、吳用が計ありと云しを頼み居けるに、吳用旅粧を調へ、李逵を道童の形に出立せ、遂に宋江等を辭し山を下ければ、宋江諸頭領を引て金沙灘まで送り、猶更宋江、李逵を戒め、汝吳先生の申含られし、酒を禁じ瘖瘂を假ること、何にても指揮を違まじきことを、一刻も忘れ怠るべからずと、懇に申聞ければ、則瘖瘂のごとく點頭して去ければ、吳用は別れて李逵を具し急し程に、不日に北京の城外に至り、旅宿を求め、翌日朝飯後に兩人立出けるが、はや城の南門に至りける。此時天下四方に群賊起て、世間靜謐ならざる故、諸州諸府各軍馬有て城を守る時節なるに、唯此北京は河北第一の要害なりしかば、梁中書大軍を以て此城を鎭守す。吳用李逵遂に城門に臨みける處に、一人の官人四五十人の軍士を左右に備へて、緊く城門を守り

数多の豪傑を指揮せらるべきや。作者の看官を愚にすること過たりと云べし。

て力を竭さんと、頻に願ひしかば、吳學究がいはく、汝我が三つの事に從はゞ、我汝を伴はん、もし然らずんば、汝は只山陣に留るべし。李逵が曰く、三つの事はさて置三十の事たりとも、軍師の望に從はん、早々是を示し給へ。吳用が云く、第一は汝常に酒性あしければ、今日より酒を禁ずべし、第二は汝道童の形に出立べし、我たとひ何等のことを示すとも、是にそむくことなかれ、第三は汝今日より一言も云ずして啞子を假すべし、此三つの事都て能守らば、我汝を伴ん。李逵これを聞て云けるは、是等のこと何ぞ難しとするに足ん、啞子を假んには、一個の錢を口に啣へて、言ふまじき間、是又易き所なり。宋江又李逵に對して云く、汝自ら切に往んと願ふゆゑ、我あへて攔らず、若萬一誤て官軍等に捉はる共、必ず我を怨ることなかれ。李逵が云く、遮莫我此二つの斧をだに携へなば、賊官等を殺して慰んに、豈反て宋君を恨み申さんやとて、はや覺ず拳を捏りしかば、諸將皆これを見て各一笑を催しける。扨此盧俊義山陣に入一條は事長ければ、次の六篇に詳にす。又曾頭市を打て盧俊義竟に史文恭を生捉り、晁天王の仇を亡す次第六篇に明細なり。

論者いはく、晁蓋曾頭市の軍、案内もしらぬ敵地に在ながら、兩僧の言に詐れ、白々と計に陷るとは、小兒の戲に等し。さばかりの虛氣者が、一囘たりとも山陣の主として、

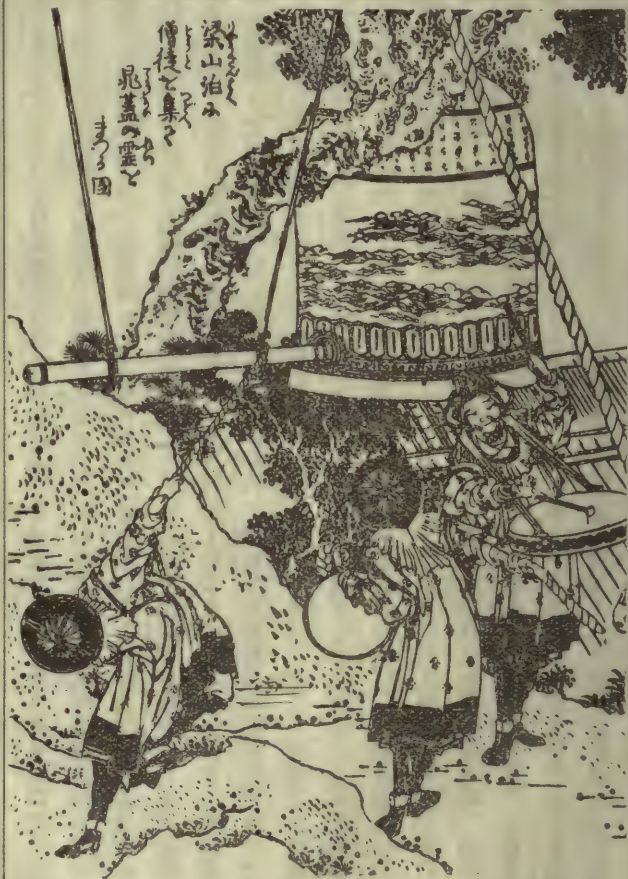
長者なるに、いかんぞ能山陣に彼を得んや。吳用打咲つて云く、我已に一つの計策あり、宋君これを憂ひ給ふことなかれと低言て、此日は先大圓和尙を款待しけり。もと雲遊の僧ゆゑ、別れを告げ、布施物を受て立去けり。宋江吳用に對し、軍師いかなる計を以て、盧俊義を山陣に得給はんやと、問ければ、吳用答て、彼を得んことは某自ら北京に馳て彼に遇ひ、三寸不爛の舌を以て宜しく賺し、終に山陣に至らしむべし、若一人大膽なる豪傑を引て、ともに往ば尤も可ならんと思へ共、只恨らくは、かくの如き大膽なる人あらずと、尙未だ云も終らざるに、黑旋風李逵進み出て云けるは、某軍師に隨つて馳行ん、軍師伴ひ給ふべきや。吳用打笑て云く、汝は是人を殺し、火を放つことは能すといへども、此回のことの如きは、汝が能する所にあらざれば、いかんぞ汝を伴はんや。李逵是を聞て大に焦燥て、我愚なりといへ共、何ぞ是等のことを曉さざらんやと、恨を含で云ければ、宋江是を撫諭していはく、汝妄に恨むることなかれ、北京大名府は、別して下官おほき所なれば、彼必ず汝が言語風俗の他に異なるを疑つて、擅に生捉こともあるべきと、軍師これを恐れ給ひてこそ、汝を伴ひ給はぬなれ、誤て軍師を怪むべからずと、懇に諫けるに、李逵これを聞き、呼りて云けるは、我山陣の爲に一命を捨んこと原來幸とする處なるに、望らくは軍師水火の內たりといふ共、我を伴ひ給へ、我肯

掌り、孟康兵船を掌り、侯健衣甲を掌り、陶宗旺城垣を築くことを掌る。其外の諸頭領、一々其職有て掌る。又朱貴、石勇、孫新、張青等の酒肆舊のごとし。此より梁山泊益興て人心彌服し、都て宋江が下知に從ひけり。ある日宋江諸將と議して云けるは、我兵を起して曾頭市に出馬し、晁天王の爲に仇を報んと欲す、知らず諸將の所存はいかん。吳學究が云く、士民農夫の輩だにも、喪に在る時は輕々しく擧動することあらず、山陣の喪未だ百日も過ざるに、いかんぞはや兵を動し給はんや、先宜しく喪を守て百日の後、軍の沙汰に及び給ふべし。宋江此言に服して、堅く喪を守り、每日僧を供養して法事を營み、晁天王を丁寧に追福す。一日北京大名府龍華寺の僧大圓和尙雲遊して、梁山泊の下に至りしかば、宋江則これを請待して、山陣に迎へ、終日法事を修せしめて後、宋江厚くこれを饗應し、閑談已に終りし處に、宋江又大圓和尙に對して、北京に豪傑ありやと問ければ、大圓が云く、將軍何ぞ河北の英雄玉麒麟が大名を聞給はざるや。宋江是を聞て、忽ち想ひ出して云けるは、誠に我玉麒麟のことを忘れたり、彼はもと北京の大員外、姓は盧、名は俊義、諢名は玉麒麟と號して、武藝は天下に雙なき達人なりと稱美し、私に吳用に向ひ、もし此人を得ば千百萬の敵を受るとも、何の憂ることかあらん。吳用が云く、彼を山陣に得ん事は最易し。宋江が云く、彼は是北京第一の

ね、山下に一つの水陣を張る、是則本陣ともに總て六陣なり。又後山に二つの小陣を設け、前山に三つの關隘を置く。宋江又吳用と議して、諸將の座位を定む。先本陣忠義堂の第一は宋江、第二は吳用、第三は公孫勝、第四は花榮、第五は秦明、第六は呂方、第七は郭盛、左陣の內、第一は林冲、第二は劉唐、第三は史進、第四は楊雄、第五は石秀、第六は杜遷、第七は宋萬、右陣の內、第一は呼延灼、第二は朱同、第三は戴宋、第四は穆弘、第五は李逵、第六は鷗鵬、第七は穆春、前陣の內、第一は李應、第二は徐寧、第三は魯智深、第四は武行者、第五は楊志、第六は馬麟、第七は施恩、後陣の內、第一は柴進、第二は孫立、第三は黃信、第四は韓滔、第五は彭玘、第六は鄧飛、第七は薛永、水陣の內の第一は李俊、第二は阮小二、第三は阮小五、第四は阮小七、第五は張橫、第六は張順、第七は童威、第八は童猛、六陣總て四十三人の大將、是を分ち守る。山前、第一の關は雷橫、樊瑞、第二の關は解珍、解寶、第三の關は項充、李袞これを守る。金沙灘の小陣は燕順、鄭天壽、孔明、孔亮、是を守る。鴨觜灘の小陣は李忠、周通、鄒淵、鄒潤、是を守る。山後の兩陣は、左の小陣を王英、一丈青、曹正、是を守り、右の小陣を朱武、陳達、楊春、是を守る。忠義堂の左一帶の房中には、蕭讓文書を掌り、裴宣賞罰を掌り、金大堅印信を掌り、蔣敬錢糧を掌る。右一帶の房中には凌振石炮を

軍師の言尤も可なり、今日我權く此位に當るべし、改日史文恭を打取て晁天王の仇を報いたらん人あらば、それ誰何を論ぜず、早速此位を讓るべければ、豫め皆此事を曉し候へ。時に黑旋風李逵大に呼つて云く、宋君すべからく梁山泊の主を做んことを休給ひて、大宋皇帝の位を簒ひ、自ら一天下の主をなし給へ、是最も山陣に主たらんよりは大いに樂しからん。宋江是を聞て、甚だ罵つて云く、汝何ぞ又亂言を云や、若再びかくのごときことをいはゞ、先汝が舌を拔て罪を正すべきぞ。李逵打笑て云く、我宋君を諫めて社長をもなし給へと云ぞならば、舌を拔れんも理ならん、今云し諫に因て罪せられんは公ならずとて、恐るゝ氣色なかりけり。吳用が云く、黑旋風はもと愚直にして、言語の高下を知らざる者なるに、宋君なんぞ彼が云し事を、尊慮にかけ給ふや、たゞ速に大事を調へ給へと、諫しかば、宋江漸怒をおさへ、喪中を愼み居けるに、諸豪傑の勸めにて、宋江則聚義廳の中央に香を焚しめ、第一位の座に坐しけるに、第二位の座には吳學究、第三位に公孫勝坐し、左の一列には林冲を頭とし、右の一列には呼延灼を頭とす。時に宋江諸將に對して云けるは、我今日權く此位に坐す間、諸將みな力を合せ、各天に替て道を行ふべし、今山陣には人馬多く、昔日と同じからず、宜しく諸將を分て、六陣を守らすべしと、議定し、先聚義廳を改て忠義堂とし、前後左右に四つの陣を列

梁山泊に
僧徒を集て
晁蓋の霊を
まつる図

是生滅法
諸行

寺院に人を馳て僧を請待し、毎日法事をなして、追薦殊更懇なり。宋江は朝夕晁天王の事のみ悲歎し、聊心を慰ず。此時林冲は呉用公孫勝并に諸頭領とともに、宋公明を立て山陣の主たらしめんとて、此ことを計議し、翌日林冲を首として、諸豪傑宋江を請て、聚義廳に會集し、呉用林冲先宋江に對して云けるは、宋君宜しく我輩が言を聞給へ、古の語にも、國に一日も君なくんば有べからず、家に一日も主なくんば有べからずと云り、今日山陣に晁天王逝去ありしかば、已に主無うして、山陣の事業再び興しがたし、豈又新に主を立ざらんや、抑宋君の大名は、遍く普天の下に流れて、人皆仰ぎ慕ふ、明日は幸吉日良辰なれば、宋君を請て山陣の主とし、諸頭領いよく號令を承んとなるに、必ずこれを辭し給ふことなかれ。宋江が云く、是大に不可なり、何ぞ晁天王の遺言を忘れんや、臨終の時、我に仰て誰にても史文恭を殺したらん者を、山陣の主たらしめよとこそ申置給ふ、諸將何ぞ此ことを忘れ給ふぞ、いはんや未だ晁天王の爲に追薦の軍をだになさゞるに、あに早く此沙汰に及んや、諸將必ず晁天王の遺命を忘れ大義に背き給ふことなかれ。呉學究又諫て云く、晁天王の遺言はかくのごとしといへ共、山陣に何ぞ一日も主なからんや、宋君若これを辭し給はゞ、山陣の人馬自ら離散し、事業一旦に虚かるべし、願くは權く先此位に坐し給へ、異日猶商議すべし。宋江が云く、

宗早くも馳來り、半路に於て適遇ひ、則號令を諸將に傳へて、一刻も急に歸陣有べしとのことなれば、林冲號令を承り、則戴宗と共に、梁山泊に歸りて、晁天王を見るに、已に渾身腫て飲食も進まざりしかば、宋江床の前に侍て深く哭き、親自膏藥を貼煎藥を灌で、懇に看病す。其餘の頭領共も、盡く皆帳前に伺候して、種々さま〴〵醫療を盡せ共、更に其驗なかりけり。當夜三更の時分、晁蓋病益重り、頓て息絶なんと見えしかば、宋江を初として諸頭領各涙を洒で哭ける時、晁天王眼を開き、則宋江を見て云けるは、宋將軍自ら恙なく身を保ち給へ、我を射たる彼史文恭を殺したる者を以て、山陣の主たらしめ候へ、我今諸將軍と永き別れをなすぞとて、嗚呼哀いかな遂に息絶え、黄泉の人となりにける。宋江は晁蓋が死したるを見て、猶父母を喪ひたるがごとく、聲を放つて大いに哭きけるに、忽ち眼を眩し倒れしかば、諸の頭領慌忙き扶け起しける處に、呉用公孫勝諫て云く、生死は是定る所なるに、何ぞかくの如く痛傷し給ふや、只宜しく悲みを省て大事を調へ給へ。宋江是を聞て、漸涙を收め、即死首に香湯を澆で沐浴し、正しく衣冠を著さしめて、棺槨に納め、聚義廳の中央に安置して、其前に靈牌を設け、梁山泊主天王晁公神主と書けり。山陣の諸頭領宋江より以下、都て孝服を著しければ、諸の軍卒等に至る迄、縞素を掛ざるはなかりけり。宋江頓て近村の

りけり。林冲これを見て、斯ては始終保ち難からんとて、先晁蓋を請て轎に乘しめ、三阮兄弟并に杜遷、宋萬を跟て、卽日梁山泊に送りける。其餘十五人の大將は、尙陣中に留て各嘆息して云けるは、晁天王這回の一戰に毒箭に中り給ふは、果して旗竿の折たる凶に應ぜし處ならん、此曾頭市を急に破らんことは難かるべし、先兵を收めて歸陣せば可ならんやと、評議區區なりる處に、呼延灼が云けるは、先宋江明の號令來らんを待て、方によく進退を決すべしとて、諸大將皆鬱々として憂しかば、士卒等が心も已に慢て、只歸山の思ひを催すのみにして、戰ん義勢さらになかりけり。此夜二更時分に諸將盡く鬱悶に逼り、嗟嘆轉た切りなり。誠に蛇に頭なくして行ず、鳥翅無うして飛ずとは、かゝることをや云なるべし。然る處に敵大軍にて寄來ると報ければ、林冲等是を聞て一度に馬に打乘り、各陣外に進み出望み見るに、敵三方に有と覺えて、火把三面に起り、其光明々なること白晝のごとし。敵漸近く來て、喊の聲天地に振ひけれ共、林冲敢て戰ず。卽諸將を引て退きけるに、敵勢に乘じて追來り、三面より取圍んで、緊く攻しかば、梁山泊の兵大に亂れ、四方八面に散て逃走り、約莫四五十里に至て、敵兵漸遠ざかりければ、林冲再び敗軍を收めて、人馬を點檢見るに、又五七百人を討せけり。諸將皆談合し、此上は一先山陣に回るべしとて、梁山泊を望んで急ぎけるに、戴

史文恭が毒箭
晁蓋を
射る圖

ける處に、三更の鼓已に響きしかば、兩僧當先に進んで晁蓋等を引き、漸五里餘馳けるに、彼兩僧忽ち形を隱してみえざりしかば、前軍大いに慌て驚て、早速晁蓋に報ず。呼延灼急に三軍を引て、百歩計退きし處に、四下に鼓の聲齊しく響き、喊の聲地に震ひ、前後左右都て火把の光晝のごとし。晁蓋諸將と共に軍馬を引て、纔に半里ばかり行けるに、一彪の敵兵進み出て、萬弩一度に放ちければ、晁蓋遂に流れ矢に中て、馬より下に眞倒に落にけり。敵兵これを見て、一度に咄と喊の聲を揚て、突出ける處に、呼延灼燕順轡を竝べて跑出で、敵を左右に受て勇をふるひ、力をつくして戰ひしかば、此隙に劉唐白勝馬を飛せ馳來り、頓て晁蓋を扶けて馬に乘せ、漸村中を殺出し處に、林冲兵を引て飛がごとくに跑散し、進む敵を迎へて、追つ返しつ、五六度まで戰ひけるに、天色已に明しかば、兩軍各先本陣へ引にけり。林冲陣屋に回て親方の兵を數ふるに、二千五百の人馬大半討れて、僅に剩る處の兵は、千二三百人には過ざりけり。三阮兄弟、歐鵬、杜遷、宋萬等も已に討れつらんと思ひけるに、這々水中に逃入て一命を脱れけり。扨晁蓋に中りし矢を拽拔てこれを見るに、箭の上に史文恭といふ三字あり。晁蓋忿然として大に怒りしかば、忽ち眼眩んで地上に暈倒せり。林冲急ぎ金瘡の膏藥を貼しかども、此箭もと鏃に毒を傅てありければ、疵淺しといへ共、毒氣骨髓に徹り、晁蓋益弱

云く、林將軍自ら疑心を生じて大事を誤べからず、我今宵軍馬を引て馳行き、速に曾家の一黨を擒りて此恨を雪ぐべし。林冲が云く、我輩兵を分て馳向ふべければ、晁君は陣を守つて控へ給へ。晁蓋が云く、我もし自ら向はずんば、恐らくは士卒の心慢ん。足下は兵を分ち陣を守り、若親方難儀に及ぶぞと見給はゞ、速に來て助け候へとて、二千五百の兵を分ち十人の大將を相從へ、則劉唐、阮小二、呼延灼、阮小五、歐鵬、阮小七、燕順、杜遷、宋萬、白勝等十將なり。此夜晁蓋遂に人馬を引て本陣を打出で、彼兩僧に隨つて、法華寺の前に來りしかば、晁蓋自ら寺中に入て見るに、只一人の僧もあらず。晁蓋彼兩僧に問て云く、かく大いなる古跡の寺に、何故一人の僧も見えざるや。兩僧答て云く、先にも已に語りしごとく、曾家の兄弟に寺中を辱惱られ、若干の僧衆盡く皆退散し、只一人の長老と數箇の侍者僧のみ有て、自ら塔院の内に住す、將軍先此處に人馬を屯し給へ、夜已に更候はゞ、我曾家の陣中に案內致すべし。晁蓋が云く、曾家の陣は何れの所にありや。兩僧答て云けるは、彼に四つの陣あり。北邊の陣は曾家兄弟が兵を屯しける處なり、もし此陣をだに打破らば、其餘の陣は尤も破るに易かるべし。晁蓋が云く、何れの時分に行ば可ならんや。兩僧が云く、今ははや二更の時なれば、猶三更の時を待て馳行き、其不意に出て備なきを討ば、必定其利多からんとて、暫く待居

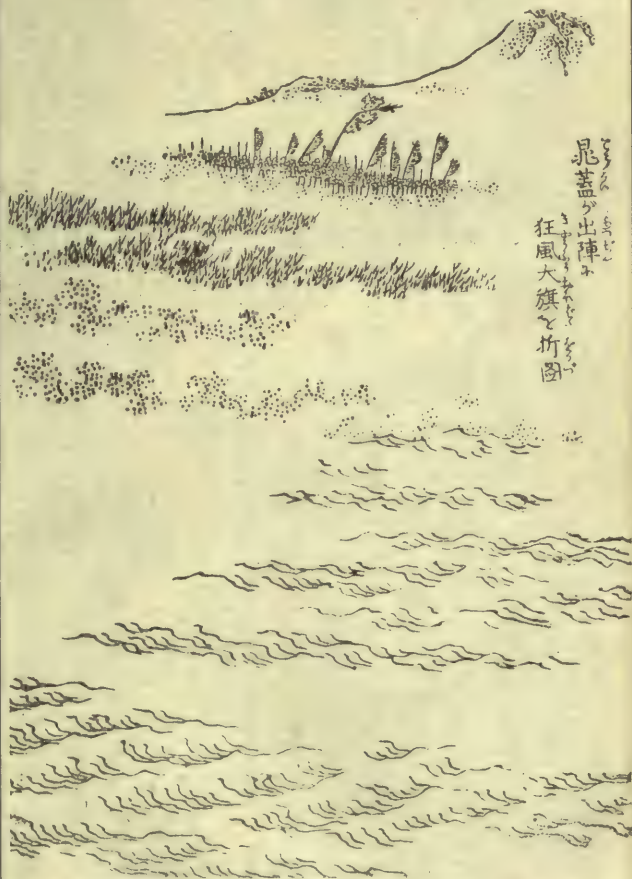
ん、一度に颯と林の内に引取けり。林冲呼延灼は晁蓋が左右に隨ひ、漸一つの路を尋求めて、本陣に回りけるに、兩軍討死する者尤も多かりぬ。晁蓋このよしを聞き、甚だ憂にせまりしかば、諸將皆諫めて云く、晁君先心を安んじて、憂給ふことなかれ、前遭數度の合戰に、宋公明幾次か危かりしかども、終に勝利を得て、恭喜歸陣ありき、今日の軍に敵親方各軍馬を失ひしか共、勝負未だ分たずして戰相均し、何の憂る事かあらん、宜しく尊慮を慰め給へとて、再三諫めしかども、晁蓋さらに心を安んぜず、欝悶し、一連に三日兵を發して戰を挑せけるに、曾家の陣中には一人の軍士も見えずして、物音絶てなかりけるが、第四日に至て忽ち兩人の僧、晁蓋が陣中に來り、則晁蓋にまみえて云けるは、貧僧等は乃ち曾頭市の東なる法華寺の僧にて候が、曾家兄弟に動もすれば、錢糧を借られ、寺已に衰微に及ぶ故、僧衆都て退散し、我等兩人は原來彼等が出沒の地を知りけるにより、將軍を導て入まゐらせんが爲、陣中に伺候せり。晁蓋此言を聞て大に悅び、則兩僧を請て、厚く款待全くこれを信じければ、林冲諫て云く、晁君輕々しく兩僧の言を信じ給ふことなかれ、恐らくは此中に詐あらん。兩僧これを聞て云けるは、我輩は黑衣を著したる沙門なるに、何ぞ敢て妄語を申さんや、貧僧等久しく、梁山泊の德義を感じけるゆゑ、今日敢て來て導んことを欲す、豈詐あらんや。晁蓋が

處なり、いかんぞ手を束ねて絆を受ざるや。晁蓋此言を聞て大に怒り、誰かある彼を活捉れと、呼りしかば、豹子頭林冲馬を飛せ、鎗を撚て曾魁に渡り合ひ、戰已に三十餘合に至れ共、更に雌雄分たざりけり。曾魁暗に林冲に勝がたきを料り急ぎ馬を回し、柳の林に迯入けるに、林冲は伏勢あらんと、馬を勒て赶ざりけり。晁蓋兵を收め本陣に回り、諸將とともに、曾頭市を攻んことを議定し、翌日五千の人馬を引て、曾頭市の口に至り、則平川曠野の地に陣勢を列ね、鼓を打賊を發して、戰を挑みける。曾頭市の上に大石炮響きける處に、大軍一度に打て出で、一行に陣を對し、七人の豪傑相竝ぶ。中には正師史文恭あり、上には副師蘇定あり、下には曾家の嫡子曾塗あり、左には曾參曾魁あり、右には曾索曾昇あり。各嚴に披掛華に粧扮けり。史文恭は左の手に弓箭を握り、右の手に戟を持ち、則彼玉獅子馬に打騎て、三軍に下知をなす。攻鼓三たび打畢りし處に、曾家の陣中より數輛の陷車を擡出し、寄手の兵に見せしめ、曾塗則これを指ざし大に罵りけるは、汝反賊等我此陷車を見たるや、我今日汝等を活捉此陷車に載せ、早速京に送て、恩賞に預らんと圖る、若早く馬を下て降參せば、一命ばかりは饒さんぞ。晁蓋聞も終らず大に怒り、鎗を撚り馬を飛せて突出しかば、諸將是を見、相續て斬て出で、兩軍已に入亂れ、半時餘戰ひし處に、曾家の軍馬はいかなる所存やありけ

然るべし。宋江も同じく諫て云く、晁君今出軍の時に至て、驟に此怪風起り、大旗の竿を吹折しは、必ず大將に於て不祥ならん、先日を延し、改日出馬あつて然るべし、急に軍を回し先此凶を避給へ。晁蓋が云く、天地の風雲何ぞ怪みとするに足ん、若此春暖の時節に彼を拿へずんば、彼必定勢氣を養て、再び滅さんに難かるべし、我已に軍を出し、婦女子のごとく、何ぞ風に怕れて自ら止んや、足下等重ねて諫を云こと有べからず。宋江是を聞て、いよ〳〵憂へ、猶再應留めけれ共、決して留らざるこそ、晁蓋が運の極めといふべけれ。

○晁天王曾頭市にて箭に中る

既に晁蓋出陣しければ、宋江大に嘆じて山に回り、又戴宗を馳て、軍の體を探聽せけり。扨晁蓋は兵を引て急ければ、日あらず曾頭市近く至て陣を取り、諸頭領を引て陣外に馳出で、曾頭市を望み見るに、野水四方を圍み、高崗三面を担り、誠に尋常ならぬ要害なり。かゝる處に、柳林の内より七八百の軍馬突出る。當先に進む大將は、白馬に乘て鎗を撚り、威風凛々として相貌堂々たり。是則曾長者が四男曾魁なり。曾魁大音に呼り罵つて云く、梁山泊の反賊我正に汝等を捉へて、厚く恩賞を求んとこそ圖りけれ、汝却て此處に至るは、天我に福を賜ふ

晁蓋が出陣に
狂風大旗を折図

犯さんと圖る、もし是を速に除き給はずんば、恐らくは後の患となるべし、宜しく是を議し給へと、未だ云も終らざるに、晁天王大に怒て云く、此奸賊いかんぞかくのごとく無禮なるや、我自ら馳向て、彼賊を生捉べし、もし然らずんば、誓て再び山陣に歸るまじとて、牙を咬で憤りければ、宋江是を止て云く、晁君は山陣の主なるに、豈輕々しく出馬し給んや、某晁兄に替て發向し、早速賊を捉へて獻ずべし、自ら出陣あらんことは休給へ。晁蓋が云く、足下は度度の合戰に疲れあらん、此度の討手には我自ら向ふべき間、足下は暫く休息を遂給へ、重ねて戰あらば、何時にても足下馳向ひ給へてと、はや三軍を催しけるに、宋江再三これを諫しかども、晁蓋かさねて耳にだも聞入ず、遂に二十人の頭領を從て五千の人馬を率し、翌日五更の時分に梁山泊を下りけり。其餘の大將は皆宋江に從つて山陣を守る。晁天王に隨ひ山を發する大將は、林冲、呼延灼、徐寧、穆弘、劉唐、張横、阮小二、阮小五、阮小七、楊雄、石秀、孫立、黄信、杜遷、宋萬、燕順、鄧飛、歐鵬、楊林、白勝等の二十人なり。宋江は呉用、公孫勝、并に諸頭領と共に金沙灘まで相送り、衆皆盃を執て、晁天王に勸めける處に、忽ち一陣の怪風起て、晁蓋が新に製たる大旗の竿を、半より吹折しかば、諸人是を見て大に恠み、個個色を失ふばかりなり。呉學究諫て云く、是則不吉の兆なれば、晁君須く日を改て出陣

宋公明の馬なるに、率爾のことをなすべからずと云ければ、彼輩却て悪口に及びし故、急ぎ逃走りて一命を免れぬ、これに依て此ことを訴へ奉る。宋江此段景住を見るに、相貌凡からずして、いかさま等閑の者とは見えざりしかば、心中甚だ悦で云けるは、汝が言の如くば、先我山陣に來て宜しく商議せよとて、遂に引て梁山泊に歸りけり。宋江等ははや金沙灘に至りしかば、晁天王自ら迎へ聚義廳に入ける處に、宋江彼樊瑞、項充、李袞幷に段景住を引て、晁天王に見えしむ。晁天王これを見て、甚だ喜び、則酒宴を設けて、諸大將を賀しにけり。此時段景住又かの馬のことを云出して、其好處を讃美しければ、宋江翌日戴宗を曾頭市に馳て、彼馬の消息を探窺しめける處に、第五日の午の下刻戴宗已に回て、晁蓋宋江幷に諸頭領に語りけるは、彼曾頭市の内に總て三千餘間の人家あり、其中に一間の大家あり、名けて曾家府と號す、此家の主はもと大金國の者にして、名を曾長者と呼ぶ、五人の男子を持けるが、曾家の五虎と云慣はせり、嫡男曾塗、二の曾參、三を曾索、四を曾魁、五を曾昇と申す、又兩人武藝の師あり、正師史文恭、副師蘇定と、此兩人も同じく曾頭市の内に在て、五七千の人馬を聚め列て、四五十輛の囚車を造り、常に悪口して云けるは、我遂に梁山泊の強賊を捕へて、此囚車に入れ、快く官府に送て、恩賞を求めんと云り、五虎彼馬を教師史文恭に騎しめ、專ら我陣を

段景住
初て宋江に
謁を求図

宋江是を迎へ帳中に入し處に、樊瑞等三人の者は、宋江が德義を見て甚だ感じ、各心を傾け、膽を吐て信服し、頓て宋江等諸大將を芒碭山に邀へ、種々慇懃に饗應しければ、宋江喜悦淺からず、則三軍を賞して、人馬の息を休めけり。樊瑞卽時公孫勝を拜して子弟の約を誓ひし處に、宋江遂に公孫勝をして五雷天心の正法を樊瑞に傳へしめければ、樊瑞大きに悦びけり。宋江人馬を歇て數日逗留したりしかば、はや梁山泊に歸らんとて號令を傳へ、三軍を催し、諸大將總て兵を引て山を下り、直に梁山泊へと急ぎしかば、漸近く望みける處に、蘆葦の內より、一人の大漢子走り出で、宋江を拜す。宋江馬より跳下りて、其名を問其國を問けるに、彼者答て云く、某姓は段、名は景住、綽名を金毛犬と號す、原涿州の者にして、平生北邊の道中に徘徊し、專ら馬を盜で業とす、今春一疋良馬を盜けるが、其色すべて雪よりも白くして、高さ八尺長さ一丈あり、一日の內に能千里の道を跑り、其名を照夜玉獅子馬と號す、是はもと大金の王子が騎りし馬なりしかども、鎗竿嶺の下にて、某遂にこれを偸ぬ、今天下に及時雨の大名芳しきと雖も、某尊顏を拜するによしなく、徒に年月を打過し候ひつるに、此度幸此馬を獻じて威顏を拜し、且山陣に加らんと欲し、已に凌州城の西南方、曾頭市と云處に至りけるに、曾長者と云人の、五人の忰に彼馬を奪れ、餘に惜く思ひ、此馬は是梁山泊の

囘却て義士に敵したることを後悔す、某等已に擒となりしかば、萬死猶輕しとする處なるに、倒て懇情の言を承り、感激方寸に迫れり、若彌罪を免し給はゞ、誓て力を盡し命を捨て、聊大恩を報じ奉らん、樊瑞今某等兩人を失ひ、豈よく獨立つことを得んや、若某が内一人を、山陣に囘し給はらば、速に樊瑞を引て、共に降參いたさせん、知らず宋君の尊意はいかん。宋江が云く、已に其如くば、莫大の幸なり、足下等立囘つて樊瑞を諫んに、いかんぞ一人を留め、一人を囘さんや、兩人共速に事を調へ候へ、我明日專ら好音をこそ待ん。兩人齊しく拜謝して云く、是則大丈夫のなす處なり、若樊瑞某等が諫に從はずんば、活捉て來らんに、尊慮を安んじて待給へとて、卽日宋江に別れ、再び芒碭山の下に至りしかば、小賊等是を見て大に驚き、直に引て山陣に上りし處に、樊瑞早くも兩人に遇て、來意を問ければ、項充李袞答へて云く、我輩已に天に逆て、萬死にあたるの罪を犯せり、樊瑞が云く、汝兩人何ゆゑかくのごときことを云や。兩人の者これを聞て、宋公明が義氣重きこと、始終具に語りしかば、樊瑞大に感歎して云く、宋公明果してかくの如き義士ならば、我が輩天に逆べからず、明日皆山を下て宜しく降參を求むべし。兩人が云く、我等兩人今日再び囘りしも、只此事を濟へんが爲なりとて、急に山陣を收拾て、翌日曉に三人同じく山を下て、宋江が陣前に至りしかば、

小旗を揺て西を指し、約莫四五遍かくの如くしける處に、公孫勝これを見て、急に寶劍を拔て呪語を念じければ、猛風忽ち項充李袞が脚跟邊より起て、天昏く地暗く日色光なく、四方に一人の軍馬も見えず、都て黑氣漫々たり。後に相續たる四五十人の兵ども、盡く皆見えざりけり。項充李袞大に仰天し、四方八面に繞て路を尋しか共、何ぞ一筋の路もあらんや。兩人轡を竝べ、尙東の方に馳けるに、忽然として霹靂大に震ひしかば、兩人馬を回さんとせし處に、俄に地陷て、馬人ともに都て穽の內に陷入けり。時に左右の伏兵竝起て、遂に兩人を縛索本陣に來て引渡しければ、宋江これを見て大に悅び、急ぎ三軍を發し敵陣を冲せるに、樊瑞これを攔ること能ず、這々山陣に引上り、兵過半討せけり。宋江先三軍を收めて本陣に歸り、諸大將と共に帳中におりける處に、軍卒はや項充李袞を引出す。宋江是を見て、親自絆の索を解き、懇に撫諭して云けるは、兩人の英雄我を恨ることなかれ、我佗ともに戰場に臨では生捉も生擒るゝも、時の運に憑なれば、生捉るゝ共何ぞ必しも恥んや、我久しく足下等の大名を聞及び、何とぞ山陣に招て、共に大義に聚らんと圖りけれ共、頃日まで合戰に遑なくして、延引に打過ぬ、足下兩人もし我を棄ずんば、倶に梁山泊に入て大義を結ばんや。兩人此言を聞て地上に跪き云けるは、某等多年及時雨の大名を聞しか共、緣なくして尊顏を拜せず、今

將樊瑞黒馬に乗て控へたり。兩軍互に攻鼓を擂て、喊の聲天地に響せし處に、三人の大將はや陣前に進み出て、敵陣を伺望む。樊瑞は原來武藝を能し、妖術を善すといへども、却て陣法に踈かりしかば、宋江が軍馬の四面八方に陣をなしたるを見て、心中甚だ是を悦び、我終に此陣を破らんものをとて、則項充李袞に命じて云く、汝兩人もし風の起るを見ば、五百の勢を引て敵陣に冲入べし。兩人の大將命令を承り、各軍器を持て、風の起るを待にけり。樊瑞馬上に在て、左の手には流星銅鎚を持ち、右の手には混世魔王の寶劍を提げ、口の内に暫く咒語を念へけるに、怪風忽ち四下に起て、沙を飛し石を走せ、天陰り地暗くして、日月さらに光なし。項充李袞是を見て、時分は能きぞ、敵陣を冲やとて、五百の勢を引て喊き叫で冲來る。宋江が軍馬是を見て、兩邊に分れしかば、項充、李袞當先に進んで、はや陣中に冲入けるに、相續者とては、僅に四五十人には過ざりけり。其餘の兵共は、宋江が兩邊の軍馬に射住られ、遂に本陣に引回しけり。宋江高き處に在て、項充李袞が陣中に突入たるを見て、急ぎ陳達に七星の旗號を搖しめければ、彼陣忽ち紛々として、長蛇の陣に變じけるに、項充李袞は陣中に在て大に驚き、東に跑西に走り、左に旋り右に轉れども、更に一路も見えざりけり。朱武は山坡の上に在て、兩人の者が馳行處を伺ひ、東に走る時は則小旗を振て東をさし、西に跑るとき則

公孫勝八門の陣圖と説く圖

我明日一つの陣法を獻じて、彼輩を生捉べし。宋江是を聞て大に喜悦し、則三軍を二十餘里引退け、陣を堅固に列ね、扨一つの陣圖を取出し、公孫勝これを宋江呉用に見せしめて云けるは、此陣圖は漢の末天下三分なりし時、諸葛孔明が石を攎べて陣としたる法にして、四面八方八々六十四隊に分れ、其像四つの頭八つ尾、左に旋り右に轉り、天地風雲の機、龍虎鳥蛇の狀を按く、敵もし陣に冲入んとする時は、兩軍齊しく開て、これを譲る、敵已に陣中に入なば、七星の旗號を揺動すを相圖として、陣忽ち長蛇の勢に變ず、こゝに於て我道術を行はゞ、彼等陣中に在て、前後に路なく、左右に門なうして、一向度に迷うて奔走せん、豫め陥穽を設けて、此内に追落し、終に是を生捉べし。宋江陣圖の利を聞て大に悦び、早速號令を傳へて、計を三軍に示しけり。又八人の猛將を用ひて陣を守らしむ、則呼延灼、朱同、花榮、徐寧、穆弘、孫立、史進、黄信等の八傑なり。又柴進、呂方、郭盛等にしばらく中軍を掌せ、宋江、呉用、公孫勝は陳達を引て、相圖の旗を搖しむ。朱武は五六人の軍士を引て、山坡に登り、敵の逃行處を望み見て、諸々の親方に是を知しむ。是日巳の刻に、三軍山に近附て陣勢を開き、旗を搖鼓を擂て、戰を挑けるに、芒碭山にも亦金鼓を打鳴し、三人の大將齊しく山を下り、三千の軍馬を兩邊に列ねて陣勢を布き、右には項充あり、左りは李袞あり、中軍には第一の大

五編　巻之五十

○公孫勝芒碭山に魔を降す

扨も九紋龍史進をはじめ、寄手敗軍しける處に、梁山泊の援兵來りしかば、力を得て翌日軍を進め、再び戰んとせし處に、北の大路より、又一彪の軍馬來ると告ければ、花榮、徐寧、史進等、齊しく馬を進めてこれを見るに、亦是梁山泊の旗號なり。宋江自ら吳學究、公孫勝、柴進、朱同、呼延灼、穆弘、孫立、黃信、呂方、郭盛等とともに、三千の勢を引て馳來る。史進これを迎へて、項充、李衮に破られたることを告しかば、宋江これを聞て大に驚き、只呆れたる計なり。吳用進み出ていはく、先軍馬を收て陣を取り、別に商議して敵を討取べし。宋江は頻に心忙しく、急に兵を出して一戰をなさんとて、吳用が言を容ず、直に山下に至りけり。此時天色已に晚しかば、芒碭山には都て青色の燈籠を點し、恰も白晝に異ならず。公孫勝良久しく山陣を望み見て云けるは、山陣の氣を考ふるに、必ず妖法を行ふ者あると覺えたり、今陣中に青色の燈籠を點すは、妖術を行ふ者陣中に在が故なり、吾輩は先軍を退け、兵を屯し、

等大に喜び、頓て共を一處に合せ陣取けり。此軍の次第次卷に詳なり。

扨史進は馬を飛せ、當先に進みければ、朱武、陳達、楊春も、相續て騎出し、四人一處に馬を勒へて暫く山陣を望み居ける處に、果して一彪の人馬飛がごとくに馳下る。當先に二人の大將轡を雙へ馬を躍せ來る、八臂那吒項充と飛天大聖李衮なり。已に兩軍近く陣を對しける處に、史進等四人の大將は、陣前に在て戰を挑む。敵の兩大將これを見て大に怒り、軍を進めて戰を始めけるに、寄手は未だ此處の案内を知らざりしかば、敵に引包れ、纔一戰に利を失ひ、大に亂れて奔走す。芒碭山の兵共は、原來案内を知りければ、此彼に轉り出で、夾んで攻けるに、史進が兵若干討死し、這々五七十里引退く。楊春は士卒に後れ走り行處に、項充に馬を傷はれしかば、急ぎ馬を棄て逃去ぬ。史進も已に危く見えしかども、幸に恙なかりけり。四人の大將漸敗軍を收めて算るに、半に過て討れしかば、史進これを愁へ、商議しけるに、朱武が云く、此體にては勝を取んこと難かるべし、速に人を梁山泊に馳て、援を求めんにはしくべからずと、評議區々なりし處に、北の大路より、二千計の人馬推來るよし報ければ、史進陣外に出てこれを見るに、乃ち梁山泊の旗號にして、兩人の大將眞先に進む。一人は小李廣花榮、一人は金鎗手徐寧なり。史進遂に是を迎へ、敗北のことを語りしかば、花榮が云く、公等四人出陣の後、宋頭領心を安んじ給はず、則我等兩人を遣し、戰を助けしめ給ふ。史進

百姓共歡喜すること限なし、晁天王此日宋江が歸るを聞て、諸頭領と共に山を下りて相迎へ、大に三軍を賞し人馬を歇けり。已にして數日過しける處に、朱貴自ら山に上て、晁蓋宋公等に告て云けるは、徐州沛縣の芒碭山にこそ、新に一夥の强盜來り、總て三千有餘の人馬を集めて、山陣を守るとなり、頭たる一人の先生は、姓は樊、名は瑞、諢名は混世魔王と號し、能風を呼び、雨を喚で、兵を用ること神のごとし、手下に又兩人の副將あり、一人姓は項、名を充、諢名は八臂那吒と號す、又一人は姓は李、名を衮、諢名は飛天大聖と號す、此三人兄弟の盟を結んで、芒碭山に取籠り、專ら家を打舍を劫ひけるが、三人議定して我が梁山泊を奪んと欲するよし、速に是を平げ給はんや。宋江大に怒て云く、此賊なんぞ此のごとく過分の望を起すや、我又山を下つてこれを討んと、未だ云も終らざるに、九紋龍史進すゝみ出て云けるは、某等四人初て當陣に至り、未だ半點の功あらず、願くは手勢を引て、彼賊を生捕り、聊一戰の功を獻ずべし。晁蓋宋江これを聞て大に悅び、則其願を許しければ、史進卽日朱武、陳達、楊春と共に、手勢を催し、晁宋兩人幷に諸豪傑に辭し別れて山陣を離れ、直に徐州を望んで馳けるに、纔三日にしてはや芒碭山に近きぬ。此處は往昔漢の高祖、蛇を斬て義を起し給ひし古跡なり。史進が軍馬已に山の下に至りしかば、小賊等これを見て、早速山陣に上て注進す。

宋江已に金鈴吊掛を取らしめ、再び官船に乘て、華州城の邊に至りし處に、城中には、はや兩路に火起て諸將一度に砍て入り、先牢中に馳て、魯智深、史進兩人を救ひ出し、猶庫を打破て、金銀米錢盡く奪取り、都て車に載て岸邊に至り、衆皆船に取乘て漕回り、暫くの間に少華山に至て、宿太尉に見え、彼金鈴、吊掛、御香、祭物幷に、旛衣服等全く是を還して、太尉を謝し、則一盤の金銀を太尉に獻じ、其外の官軍共にも、又皆金銀を與へ、猶新めて酒宴を具へ、宿太尉を款待し多種奔走を盡してけるに、既に太尉は諸頭領を辭して山を下りしかば、宋江吳用幷に諸の豪傑直に送て河口に至り、深く太尉を拜謝して相別れ、再び少華山に回り、山陣を燒拂ひ、衆皆宋江に從つて、梁山泊へと急ぎけり。扨太尉は官軍等と共に船に乘り、遂に華州城に至て、岸に上りし處に、梁山泊の豪傑來て賀太守を殺し、大に華州城を鬧したると、風聞頻なりしかば、宿太尉早速表を修へて都に使者を遣し、梁山泊の賊首宋江等豫め道中に待て、金鈴吊掛を奪取り、擅に勅使に假て、華州城に進み入り、遂に賀太守を殺し、金銀米錢を掠取しこと、一々具に奏聞し、太尉は先西岳廟に至て、御香を焚き、金鈴吊掛の御賜を觀主へ與へ、急々東京に歸て、此度の一事備細に奏聞遂にけり。扨宋江は魯智深、史進兩人の英雄を救ひ、少華山の三頭領をも共に引て、梁山泊に回り、到る所の民を撫で、毛頭も犯さざりしかば、

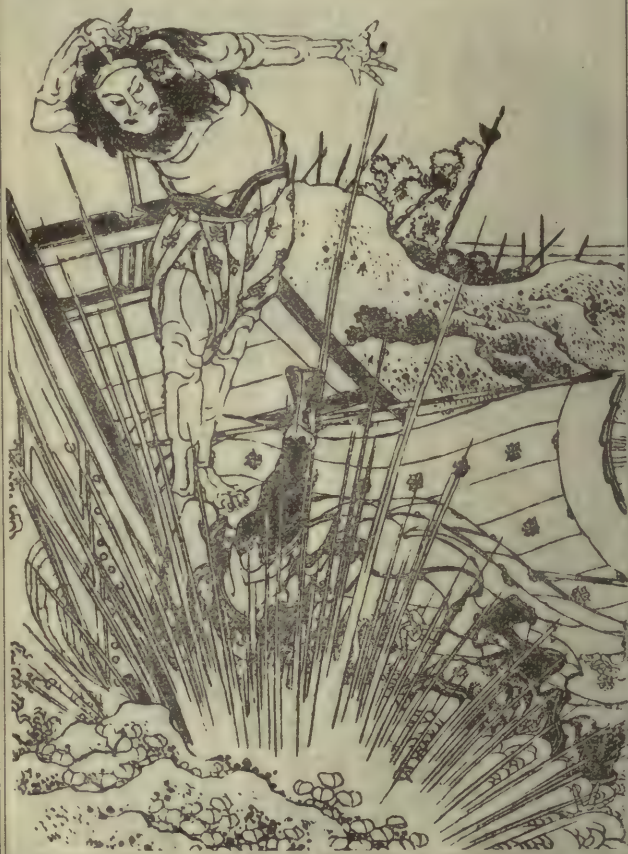
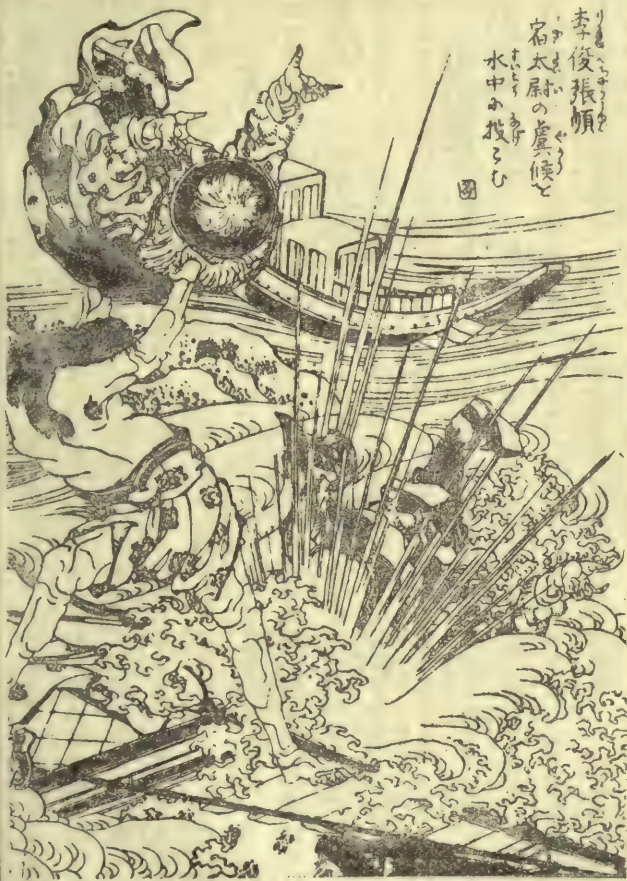
兩邊に立並ばせ、解珍、解寶、楊雄、戴宗等にも同じく、軍器を持しめ左右に立並ばせ、共に太守が至るを待にけり。扨賀太守は三百餘人を引て進み入けるに、客帳司に似たる宋江吳用太守が大勢を引て進み入るを見て、吳用大に呼つて云く、朝廷の大臣宿太尉爰に居給ふに、何ぞ妄に士卒を引て廟中に入候や、閑雜の者を帶すべからずと、制しければ、賀太守是を聞て、士卒を廟門の外に留め置き、已一人進み入て廳前に至り、則假太尉を望んで拜をなしける處に、吳學究が云く、太守汝に罪あるを知りぬるや。太守が云く、知らず某に何の罪ありや。吳學究云く、太尉勅命を奉つて此處に至り給ひぬるに、何ゆゑ遠く出て迎ざるや。太守が云く、昨今の內に飛脚到來せざりし故、今日の著駕を知らず、拜迎に及ばず、願くは無禮の罪を免し給へ。吳用此時左右を顧み呼りしかば、解珍、解寶屏風の背後より跳出で、各刀を揮て終に太守が首を刎にけり。宋江是を見て諸頭領に下知しけるに、彼太守に隨ひ來りし三百餘の軍士共、各是を見て大に驚き、都て慌て忙き騷動して、腰を拔さぬは少なりけり。花榮等劍戟を揮て馳向ひしかば、半は地上に拜伏して罪を謝し、半は廟門の外に走り出さんとせし處に、武行者、石秀刀を撚て砍散す。其外若干の小賊共勢に乘じ、押詰め／＼討取しかば、三百有餘の官軍共、一人も漏さず砍伏けり。追々に相續て來る官軍等は、李俊張順皆是を討取けり。

り、其細に巧なること盡く云べからず。これは則聖帝殿の中央に掛しめ給ふ所の、金鈴吊掛なり。もし是朝廷の賜にあらずんば、いかんぞよく民間に是あらんや。呉用が云く、推官は先州裡に回て、太守に斯と告候ひて、早々太守を參詣あらしめ給へ、我太守と共に商議して、日を擇で時を定め、供養のことを調ふべし。推官委細領掌し、遂に呉用に別れて再び州裡へ回りけり。宋江はひそかに金鈴吊掛を見て、大に讃美し想道く、彼推官最奸佞たりといへ共、已に此金鈴吊掛の飾りを見し上は、必定眼を花め心を亂して、我計に中んずるとて、暗に是を悅びけり。此時武行者ははや、廟門の邊に至て待しかば、呉用又石秀を遣して、武行者を助けしめ、共に力を合せて事を行はせり。觀主美々しく淸宴を設け諸人を饗應し、廟中廟外格門に熱鬧けり。

○宋江西岳華山を鬧す

宋江閑に廟中を遊覽するに、金門玉殿碧瓦朱甍日に映じ光を增し、偏に眼を驚しむる計なり。宋江直に殿上に登て香を拈り拜をなして、暗に神明を禱り、再び官廳の前に回りける處に、賀太守至りぬと告しかば、宋江急に花榮、徐寧、朱同、李應等に軍器を持しめて、

體に詐て、官廳の内に歇せ、呉學究これに替て推官と對談す。推官は暗に旗號等を見るに、紛もなき朝廷の御旗なりしかば、毛頭も是を疑ず、只慇懃に拜伏して禮物を獻じける。客帳司呉學究これを領して、故意一兩遍官廳に附て、太尉に報ずる體にもてなし、遂に推官を引て、堦の下に至りしかば、推官謹で地上に跪く。彼假太尉は遙間を隔て坐をなし、何言やらん只一兩句云しか共、殊更微音にして曾て聞えざりけり。呉用又推官を引て退き、乃ち語て云けるは、太尉は是帝の愛臣と云ひ、況や大官なるに因て、此度當廟に代參有ける處に、道中に於て病を得、甚だ不快にて入らせ給ひぬるに、當地の官人は何ゆゑこれを伺ざるや。推官が云く、此度太尉の代參し給ふことは、先達て知れ候へども、昨今兩日の内に飛脚到來せざりし故、今日の著駕を知らずして拜迎を失ひぬ、當州の太守早速伺公して、太尉を伺ひ奉るべき處に、今少華山の盜賊、梁山泊の强賊と勢を合せ、近々に城を攻んと欲す、このゆゑに太守は堅く城を守つて、妄に出ざる故、先某を遣して薄禮を獻上す、太守已に城中の防を備へなば、少刻跡より來て、太尉を伺ふべし。呉學究又いはく、太尉は飲食も進まざる體なれば、只宜しく太守を請て、諸事これを商議せんとて、則御賜の金鈴吊掛を取出して、先推官に見せしめければ、推官謹でこれを拜見するに、誠に帝の御賜と覺えて、全く金銀珠玉を用て飾

同、李應は衛兵の官に似せ、其外の者共は都て紫衫を著して、御香、祭物、金鈴、吊掛等を背奉る。朱武、珍達、楊春、太尉に陪侍して山陣に留る。秦明、呼延灼、同じく林冲、楊志、各一隊の人馬を引て、兩路より馳向ひ、其便に依て、城を乘取んとぞ圖りけり。武行者は豫め先西岳の邊に至て待候ふ。戴宗は急ぎ西岳廟に馳て、宿太尉の著駕を報ける。扨宋江等諸頭領は已に山を下り、官船に取乘り、遂に河口に至て岸に上り、當地の賀太守に報ずるに及ばず、直に西岳廟を望で來りける。戴宗ははや西岳廟に至て、觀主幷びに役人等に斯と報じければ、諸役人等これを聞て、香花、燈燭、幢旛、寶蓋等を當先に持しめ、恭しく途中に出て、御香を迎へ奉り、直に導いて西岳廟に至りし處に、太尉は不快のよしにて、西岳廟の觀主にも逢ず、直に官廳の內に入て歇みけり。此時吳用は客帳司の官に假て在けるが、先觀主に對して云けるは、此般宿太尉勅命を奉つて、御香、祭物、金鈴、吊掛等を捧げ奉り給ひて、此廟に供養あるに、當華州の太守は何ゆゑ上を輕んじ、未だ來らざるや。觀主答て云く、已に今人を馳て報ける間、定めて少刻來るべしと、未だ云も終らざるに、賀太守が使者として、先一人の推官幷に五七十人の軍卒、種々の禮物を携へて、西岳廟に伺候す。扨彼宿太尉に假たる者は、相貌賤しからずといへども、原小賊の事なれば、言語肆にして、若誤もやあらんを恐れ、故意不快の

李俊張順
宿太尉の虞候と
水中に投らむ

めしめ、遂に聚義廳に至りけるに、太尉を請て座の中央に坐せしめ、宋江則拜をなして云けるは、某はもと鄆城縣の押司なりしかども、官府より世を逼られ、已ことを得ずして、諸の義士と倶に梁山泊に上て各難を避け、專ら朝廷の御赦免を待て、國の爲に力を盡さんと欲す、今兩人の頭領賀太守に捉はれて死牢の内にあり、尤も此者入牢する根本は、皆本人の方に死すべき罪なく、賀太守の非道より發る、我輩、兩人を救はんと欲すれ共、計の行ひ難き所あつて、未だ手を下さず、此度かの御香、祭物、吊掛、金鈴等を拜借し奉つて、恐ながら太尉に似せ、賀太守を詐て華州に入んと欲す、事已に濟りなば、早速還し奉らんに、願はくは太尉これを許し給へ。宿太尉が云く、足下等もし御香等を借て計を行ひ、明日此事露はれなば、我必ず罪を蒙んに、何ぞ容易これを免さんや。宋江が云く、太尉歸京の節もし此沙汰あらん時は、罪を都て宋江が身の上に推干給へ。宿太尉暗に諸頭領を見るに。各萬夫不當の勇士と覺えて、風俗模樣他に異なりしかば、心中頗るこれを恐れ、遂に承引したりけり。宋江大に悦び、早速酒宴を設けて、太尉を款待奉り、宋江又官軍等が著したる衣裳を借て士卒に穿せ、其内一人相貌賤しからざる者を擇出し、乃ちこれに宿太尉の衣服を著せしめて勅使に假せ、宋江吳用は客帳司の官に粧ひ、解珍、解寶、楊雄、石秀は虞候の官に出立ち、花榮、徐寧、朱

太尉が云く、我此たび勅命を奉つて、西岳に赴く勅使なるに、豈輕々しく岸に上て、閑事に干んや。宋江が云く、太尉もし岸に上り給はずんば、恐らくは水陸の人馬、太尉を犯し奉らんと、僅に云罷りし處に、李應鎗を揮て招きしかば、李俊、張順、楊春、船を一度に漕で出來る。太尉此勢を見て、大に駭きけり。李俊、張順明晃々刀を抜て官船に跳乘り、まづ兩人の虞候を水中に踢落したり。宋江急に呼つて云く、汝等妄に朝廷の貴官を、驚しめまゐらすことなかれと、制しければ、李俊、張順齊しく水中に跳入り、彼兩人の虞候を助けて、再び船の上に投上けり。李俊、張順水面に在つて平地に登るが如く、又船の上に跳上りしかば、宿太尉これを見て甚だ恐懼し、魂體に附ざりけり。宋江又諸人に對して云く、汝等先此處を退け、我宜しく太尉を請て岸に上らせ進らすべし。宿太尉が云く、義士何等の事ありや、只此處にて語り候共、何の妨かあらん。宋江が云く、此處は說話する處にあらず、謹で太尉を少華山に請奉つて心事を訴へ申べし、誓て太尉を傷ん心なし、若異心を懐く事あらば、西岳の神の罰を蒙り誅戮を免るまじ、事已に此に至り何ぞ願を空うせんや、伏して望らくは速に登岸し給へ。宿太尉辭する事能ず、岸に上りしかば、衆人一疋の馬を牽て太尉を請ひ乘しめ、頓て少華山に伴ひけり。宋江諸豪傑に命じ、官船の諸官軍幷に金鈴、吊掛、御香、祭物盡く山陣に收

宿太尉が官船漸近づきければ、朱同李應各長鎗を持て宋江吳用が背後に立ち、擅に官船を攔りけるに、官船の內より二十餘人の虞候出て呼りけるは、汝等何者なれば、朝廷の大臣を攔るや。宋江是を聞て恭しく船傍に跪く。吳用が云く、梁山泊の義士宋江疾來て此船を待奉る。官船より答て云く、此船は朝廷の太尉勅命を奉て、西岳に降香ある官船なり、汝梁山泊の義士と稱し、何故妄に路を攔るや。吳用がいはく、某等唯宿太尉の尊顏を拜して、一事を告奉んと欲す。虞候等が云く、汝衆人何のこと有て太尉に見えんことを願ふや。宋江が云く、暫くの間太尉を請て岸に上り、共に一事を商議せんと欲するのみ、虞候等が云く、太尉は是朝廷の大官なるに、いかんぞ汝等が爲に岸に上り給ひて事を商議あらんや、必ず無禮をいふことなかれ。宋江が云く、太尉若出給はずんば、諸の豪傑太尉を驚しめ進すことあらんやと、いまだ云も終らざるに、朱同鎗を用て岸の上を招きけるに、花榮、秦明、徐寧、呼延灼、人馬を引て、河口に馳來り、盡く一連に立竝び、弓箭取て打搭ふ。官船の上には是を見て、衆皆大に驚き、我先にと船艙の內に走り入る。宿太尉此光景を見て、船傍に出ければ、宋江身を躬て云く、某等敢て太尉を犯す心底にあらず。宿太尉が云く、已に然らば何ゆゑ又義士等は官船を攔るや。宋江等が云く、某等は只太尉を請奉つて、岸に上り一つの事を告商議をなさんと欲す。宿

御賜の金鈴吊掛を附與し給ひて、西岳に燒香あらしめ給ふよしにて、黄河より渭水へ入て來るとなり。吳用これを聞て云けるは、宋君宜しく憂を休給へ、計此中にありとて、則李俊張順を呼で、かくのごとく〳〵と計を低言しかば、李俊が云く、我輩は、未だ路徑を知らざれば、一人の案内者を得て、同往致さば可ならん。時に白花蛇楊春が云く、某案内仕らばいかん。宋江悅び此日三人の頭領を先達て遣しけり。翌日宋江、吳用、李應、朱同、呼延灼、花榮、秦明、徐寧、八人の大將暗に五百餘人を引いて山を下り、直に渭河の渡口に至りし處に、李俊、張順、楊春以下已に十餘船の大船を奪取てこゝにあり。此時吳用は花榮、秦明、徐寧、呼延灼等四大將を呼岸の上に伏置き、宋江、吳用、朱同、李應等は、船に乘ければ、李俊、張順、楊春早くも船を灘の內に漕入て藏れあり。諸頭領衆皆其夜を待明しけるに、翌朝はたして鑼を鳴し、鼓を響せ、三艘の官船漕來る。船の上に一面の黄旗を建けるが、旗の上に文字あり。則、

欽奉聖旨西岳降香　太尉宿元景

と云十三字なり。宋江此文字を見て、心中に想道く、昔日九天玄女の言にも、宿に遇て重々喜ぶと社有ければ、今日宿氏の太尉に遇は、必然此言に應ずる者ならんとて、暗に是を欣びけり。

んや。朱武が云く、華州は原來城廣くして濠深く、要害尤も堅固なり、若裡應外合の計にあらずんば、必竟落しがたき所あらん。吳用が云く、先試に城邊に馳て、城郭の虛實を窺ひ、其後計を施すべし。宋江此言に同じ、明日早々馳行んと議しけるに、吳用が云く、今城中に兩人の豪傑を捉へしかば、必定備を堅く防ぐべし、白晝に行んこと不可ならん、今宵月色明らかなるべき間、申の刻前後に山を下て、一更の時分には至ん、暗に月に乘じて、城を伺ふべしとて、漸午の刻も過しかば、宋江、吳用、花榮、秦明、朱同總て五騎、遂に山を下て、華州城を望んで馳けるに、果して初更の時分に城外に至り、山坡の高き處に馬を跑上て、華州の城中を望み見るに、此時二月の中旬にて月色晝の如く、上天に一朶の雲もなし。華州城の四方には、數個の城門有て、城高く濠深く、要害究て堅固なり。又はるかに西岳華山を望み見るに、峨々として半空に聳え、勢尤も險阻なり。宋江是を伺ふに、計を施さんやうもなかりけり。吳用が云く、先少華山に歸て商議すべしとて、五騎の大將轡を竝べて再び山陣に囘りけり。宋江は城の要害嚴密にして、計の行れざるを窺ひ心中にこれを患ひ、顏色快らず見えしかば、吳用が云く、先物馴たる兵十四五人を遣して、城中の消息を聞せんとて、即日人を擇て山を下しけるに、纔に三日の間に一人の兵馳囘て告けるは、今朝廷より殿司太尉に

に至て、晁宋兩人に見えて、魯智深獨自ら史進を救はんとして、却て捉はれけることを報けるに、宋江大に驚て云く、旣にかくのごとくんば、兩人の豪傑を救ずんば有べからずとて、早速人馬を催し、三手にわかれて進發す。前軍の大將は花榮、秦明、林冲、楊志、呼延灼等の五頭領三千の人馬を引て先陣とす。中軍は大將宋公明、吳學究、朱同、徐寧、解珍、解寶等の六傑二千の人馬を引て發向す。後軍の大將は李應、楊雄、石秀、李俊、張順等の五頭領、同じく二千の軍馬を引て、專ら兵粮を兼掌る。宋江等已に晁天王に相別れ、卽日山陣を下つて、直に華州城へと急しかば、不日にはや半途を過けるに、先戴宗を馳て、少華山に斯と告しめければ、朱武等三人の頭領は、美々しく酒宴を設けて、宋江が人馬の至るを待にけり。

○吳用金鈴吊掛を賺す

扨も宋江が三軍已に少華山の下に至りしかば、武行者則三人の頭領を引て、宋江吳用幷に諸頭領に見えしむ。朱武恭しく諸大將を請て山陣に至り、種々饗應を盡しけり。宋江具しく城中の事を問ひけるに、朱武答て云く、魯智深、史大郎今已に牢中にあり、賀太守唯勅命を待て、罪を決斷せんと欲す。宋江是を聞て吳用と議して云けるは、いかなる計を用て彼兩人を救は

が云く、我曾て汝を犯さゞるに、汝何ぞ我を捉へ辜なき者を責るや。太守罵つて云く、汝が風俗模樣偏に出家の體にあらず、汝は必定山野に棲盜賊にてぞ有らん、但し史進が爲に、仇を報はんと欲するや、汝もし白狀せずんば、痛く拷問せんとて、すでに左右を看丢けるに、智深大いに呼つて云く、汝妄に我佛體を打傷ふこと勿れ、我は是梁山泊の豪傑魯智深と云知識なり、我は死すとも悔まじけれども、もし宋公明人馬を引て寄來らば、汝が眷屬、都て誅戮を免るまじ。賀太守これを聞て大いに怒り、先魯智深を數十鞭打しめ、牢中に入置けり。この沙汰華州城に專らなりしかば、彼小賊這消息を聞き、飛がごとく少華山に馳歸り、斯と訴へけるに、武松是を聞て大に驚き、我智深と兩人此處に至り、已に一人を失つて何の面目かあらん、此上は我も又死を致さんのみなりとて、只顧憂て居ける處に、一人の小賊來て云く、梁山泊の頭領神行太保戴宗と云ふ人、今麓に至り給ひぬと報じければ、武松急に山を下て相迎へ、直に聚義廳に延て、朱武等三人に逢はしめ、魯智深諫言を容ひずして、誤ありしことを具に語りければ、戴宗大に驚て云く、已にかくあらば、我は先一刻も早く歸て、晁宋兩頭領に報げ、速に軍兵を發し、魯智深史大郎兩人を救ふべし。武松が云く、我は猶此處に在て待申さん、公は早く歸りて急に來り給へ。戴宗郎時に山を下り、神行の法をなして馳ければ、纔三日の內に梁山泊

則智深に請て太守が旨を述けるに、智深是を聞て私に想道く、我今手を下して彼を打んと圖りしか共、恐くは大勢に攔られ、誤つこともあらんかと想ひ、暫く控へける處に、彼却て我を乞ふは、豈彼が運の盡るにあらずやとて、早速使に隨つて太守が館に至りけるに、太守は豫め家人等に仰せて計を調へしめ、則智深に禪杖戒刀を除せければ、智深初の間は承允せざりしか共、諸人都て云けるは、和尚何ぞ禪杖戒刀を帶して後堂に入給はんや、是出家の有べきことにあらず。智深心中に想ふやう、縱ひ禪杖戒刀あらずとも、我此拳を以て太守を打殺さんに、何の難きことかあらんとて、頓て禪杖戒刀を棄て、後堂に入ける處に、太守左右を招て、これを活捉れと、いまだ呼りも終らざるに、總て五六十人の軍士、一度に出て智深に跳かゝる。智深元來眼明かに、手早き達人なれば、左右に當て二十餘人まで踢倒しけれ共、遂に大勢に活捉れ、空しく牙を咬ばかりなり。やがて魯智深を絆て、堦の下に引出しければ、賀太守大に怒て、汝惡僧何れの所より來りたるや。智深が云く、我に何の罪あつて、斯綁給ふや。太守が云く、汝詐らずして、實情を申せ、何故擅に我を殺さんと圖りけるぞ。智深が云く、我は是出家なるに、汝いかんぞかくのごときことを我に問給ふや。太守益怒て、汝向に橋の上に在し時、禪杖を擧て我を打んとせしが、又躊躇して遂に止ぬ、汝實落に白狀せよ。魯智深

賀太守謀て花和尚をとらゆる図

づ宜しく怒りを息給へとて、再三再四頻に諫しかば、朱武等三人の頭領も同じく諫ける處に、智深大に焦燥ていはく、汝三人かくのごとく懦弱なるに依て、史大郎を白々と失ひぬ、我一人州裡に馳て史大郎を救ひ出さん、武行者も又梁山泊に歸ることなかれとて、其夜は各歇けり。翌日魯智深戒刀を帶し、禪杖を提て、華州城に馳ければ、武行者大に歎じて云く、智深我が諫言を用ひずして、州裡に馳しかば、必定誤あるべしとて、一向これを煩ひぬ。朱武暗に物なれたる小賊を、智深が跡より華州に馳て、消息を聞しめけり。扨又魯智深は、直に華州城に入り、賀太守が家を尋ねて一つの橋を過んとせし處に、街の人都て云けるは、和尚先傍に避給へ、太守相公の來り給ふなり。智深是を聞て想道く、我正に太守を尋ねんとせしに、彼却て此處に來て我に遇ば、自ら死を求むるに似たり、我早く彼に近寄り、頭を微塵に打碎んものをと、立住て望み見るに、轎の左右には虞候の官等十餘人、手ごとに軍器を提げ相隨ふ。魯智深これを見て、心中に想ひけるは、我もし賀太守を打得ずんば、却て彼等に笑はれん、卒爾に手を下すべからずとて、只顧躊躇して在しかば、賀太守轎の内より、智深が動靜を見て、心中に深く是を疑ひ、已に橋を過て館に至り、則家人に命じて云けるは、今橋の上にありし大和尚、齋を施さんと思へば、汝馳て誘引せよと、仰せければ、家人命を奉つて橋の上に至り、

九紋龍賀太守の下官を斬圖

太師が門人にして、貪欲無道の者なりけるが、不圖彼玉嬌枝が容儀好を見て、早速娶て妾にせんと欲し、再三王義にこれを議けれども、王義これに隨はざりしかば、賀太守大に怒り、强に奪取て妾とし、剰へ王義を無實の罪に陷し、遠國に流さんとしける時、兩人の下官王義を監押して、此山の下を過りし處に、想ず史大郎に遇しかば、王義大に悦び、事の次第一々詳に告けるに、史大郎これを聞き甚だ憤り、卽兩人の下官を殺して王義を救ひ、猶賀太守を殺さんとて、直に州裡に馳けるに、却て賀太守に曉られ、遂に擒となりて、牢中に在り、太守又人馬を發し、此山陣をも攻破らんと欲す、此ゆゑに某等殊に難儀なり。魯智深是を聞て怒り心頭より起り、忽ち牙を咬齒を切て、罵云けるは、彼賊官かくのごとく非道を行ふや、我誓て彼を殺さん。朱武が云く、和尙先山陣に上て、商議し給へとて、遂に魯智深武行者兩人を引て、山陣に上りければ、王義も同じく魯智深にまみえて、賀太守が非道をなせしこと、一々詳に語りけり。魯智深が云く、我明日州裡に馳て、賀太守を殺し一害を除くべし。武松が云く、我先和尙と急ぎ梁山泊に歸り、宋頭領に大軍を請て、華州を打破り、然して後史大郎を救ふべし。智深が云く、我が輩山陣に歸つて、再び來る日は、史進は早殺さるべし、後悔すとも何の益あらん。武松が云く、縱ひ今賀太守を殺したり共、史進を救ひ出さんことは難からん、ま

に告知らせて來るべし。武行者が云く、汝去て頭領に告んには、魯智深來て史進を訪ふと云べし。小賊是を聞て山陣に上りけるに、少刻神機軍師朱武ならびに跳澗虎陳達、白花蛇楊春、此三人は馬を下りて魯智深等兩人を迎へ、しかも獨史進は見えざりければ、魯智深問て云く、史大郎は何れにありや。朱武恭しく禮をなして云けるは、和尙は延安府の魯提轄にてはあらずや。智深が云く、我則魯提轄なり、又此行者は景陽岡にて、虎を殺したる武松と云ものなり。三人の頭領これを聞て、忽ち地上に跪て申けるは、某等兩位の大名を聞こと久し、此間は二龍山に居給ふと沙汰有つるに、今日は何故此處に至り給ひぬるや。智深が云く、我が輩今は二龍山を棄て梁山泊に登りぬ、我此囘史大郎に遇んが爲特々此處に至れり。朱武が云く、已にかくのごとくば先山陣に上り給へ、某詳に樣子を語り申さん。魯智深が云く、樣子あらば、此處にて語るとも、何の妨かあらん。武松も又三人の頭領に對して云けるは、和尙は原來急性の人なるに、樣子あらば早々語り候はんや。朱武が云く、某等三人此山陣を守り居たりし處に、史大郎加はり候て後は殊更繁昌しけれ共、此比史大郎は料らざる禍を被りて山陣にはあらず、其禍の來歷はいかんぞならば、史大郎の舊知北京大明の人、王義と申畫師、西岳華山の金聖帝廟に、宿願の事あつて玉嬌枝と云女を帶し參詣しける處に、當府の賀太守は原蔡

善悪吉凶を探聽しめ、天下の英雄を招かしむ。此より梁山泊日々に隆にして、諸頭領各嚴密に守りけり。已に數月過しける處に、花和尙魯智深宋江に語て云けるは、我等一人の朋友有けるが、其名を九紋龍史進と號して、今は則華州華陰縣少華山に住す、此山に原來三人の頭領あり、一人は神機軍師朱武、一人は跳澗虎陳達、一人は白花蛇楊春と申す、史進此三人の者ともに、人馬を集めて、少華山を守る、我先に瓦罐寺に於て頗る難儀致せし時、史進が助けに依て難を脫れぬ、これによつて我朝夕史進がことを渴想す、此節我少華山に馳て彼を訪ひ、宜しく四人の者を誘引して山陣に歸るべし、知らず尊君の尊意はいかん。宋江が云く、我も曾て九紋龍が雷名を聞り、若和尙彼地に馳て彼等四人を誘引し給はゞ、是十分の福ならん、武行者を伴うて行給へ。武行者是を聞て、我和尙に隨つて馳行べしと、領承したりければ、此日魯智深武行者とともに旅粧を調へ、諸頭領に別れて山を下り、直に華陰縣を望で急ぎけり。扨宋江は魯智深武行者兩人がことを、深く思うて心を安んぜず、則戴宗を馳て、兩人が消息を探聽しめけり。魯智深武行者は、不日に少華山の麓に至りけるに、小賊等路を攔て問けるは、汝兩人の僧は何ゆゑ此處に至りぬるや。武松が云く、此山陣に九紋龍史進と云人ありや。小賊が云く、汝兩人若史大王を訪給ふ人ならば、少く此處に在て待給へ、某山陣に上て頭領

火旗

湯隆 侯健 軍器旌旗を造る図

共に梁山泊に加はるべしと議定して、各山陣の人馬ならびに兵粮等を拾收め、同じく宋江に隨つて梁山泊へと急ぎけり。宋江三軍に命じて、終道民を犯すことなかりしかば、到る處の百姓共都て老を助け、幼きを抱て拜迎す。宋江是を見て、心中に悅び、一向三軍を催促して路を急しかば、不日に梁山泊の邊に至りけるに、水軍の頭領等船を具へて相迎ふ。晁蓋は自ら諸豪傑と共に金沙灘に至て宋江等を迎へ、直に聚義廳に至りて、各座を列ねし處に、呼延灼、魯智深、楊志、武松、施恩、曹正、張青、孫二娘、李忠、周通、孔明、孔亮、都て十二人の新參頭領は、晁蓋を始として、山陣の諸頭領に一々對面し、各悅ぶこと限りなし。林冲昔日魯智深に救はれたることを語て、深くこれを謝しけるに、魯智深が云く、我彼日滄州に於て、教頭に別れでより以來、久しく音耗をも通ぜざりけるに、今日再び相遇こと、緣深きゆゑんなりとて、相互に悅びけり。晁蓋又楊志に對して、當初黃泥岡にて生辰の禮物を奪ひ取しことを語り、吳用、公孫勝、劉唐、三阮兄弟、白勝迄、一笑を催しけり。扨宋江は這囘又十二人の豪傑を得て、心中益喜悅し、則湯隆に命じて若干の軍器を造らしめ、侯健には三才九曜、四斗五方二十八宿の旗を造らしめ、山陣の四方には高く臺を造らしめ、西南の兩路には又二間の酒店を造り添て、張青孫二娘に南路の酒店を守らせ、孫新顧大嫂に西路の酒店を守らせ、專ら世間の

慕容知府に斯と告けるに、知府は呼延灼を擒にせられて、憂居たる折節なりしかば、今此言を聞て大に悦び、慌て忙き城樓に上て城外を望み見るに、總て十餘騎轡を竝べて相勒へたり。知府いまだ其面をば見知らざりしか共、只呼延灼が聲を聞知り、則問て云けるは、將軍今般敵の謀に中て擒となり、いかゞして再び回りぬるや。呼延灼が云く、某向に陷坑に陷され、捉はれしか共、幸なるかな我が手下に在し兵、今宋江に降參して陣中にありけるが、我活捉れたるを見て、暗に此馬を盗で某に與へ、共に陣中を逃去て、同じくこゝに至れり。知府是を聞て、城樓を下り馬に乘り、自ら城門の邊に來て、軍士に城戸を開せければ、呼延灼遂に十人の豪傑を引て城中に跑入し處に、秦明早くも棒を擧て知府を馬より下に打落しぬ。解珍、解寶は火を放て城中を燒拂ふ。歐鵬、王英は官軍等を砍散す。此時宋江は城中に火の起りたるを見て、三軍を引て馳來り、一齊に喊と城内に亂れ入り、宋江急に號令を傳へて居民を撫しめ、先牢中より孔明叔姪を救ひ出し、庫の內なる金銀米錢こと／＼く奪取て、城外に運ばせ、慕容知府が眷屬、一々首を刎にけり。翌日宋江火難に遭たる百姓共には、金銀を分與へ、其燃眉ごとき難を救ひ、又得たる處の兵粮は、都て六百車、其外馬物の具を得たるは、其數を知べからず。宋江大に三軍を賞せしめ、即日歸陣と聞えしかば、魯智深、李忠、孔明等、三山の頭領も

五編　巻之四十九

○衆虎心を同して水泊に歸す

宋江は呼延灼を請て、諸頭領に遇しめ、又彼呼延灼が乘たる御賜の名馬は、李忠是を奪て魯智深に送りしか共、此度又乞取て、呼延灼に還しければ、大に是を悦び謝しけり。諸豪傑再び孔明を救ん計を商議しければ、軍師吳用が云く、もし呼延灼將軍をして城門を開かしめ、容易孔明を救はゞ、諸將の勞有まじ。宋江是を聞き、呼延灼に對して云けるは、我實に城を落さん事を貪るにはあらね共、今孔明孔賓青州の牢中に在て、縲紲の危に遇り、この故に我是を救はんと欲し、心痛こゝにあり、若將軍の計にて城門を開かしめ給はゞ、彼等を救はんこと尤も易からん。呼延灼が云く、我已に宋君の情に一命を饒されしかば、理まさに力を盡すべきことなるに、いかんぞ是を辭せんやとて、其夜秦明、花榮、孫立、燕順、呂方、郭盛、解珍、解寶、歐鵬、王英等十人を軍士の形に打立せて、呼延灼これを引共に二十一騎直に城の邊に至て、大に呼つて云く、早く城門を開け、呼延灼一命を脱れて逃回り候ぞ。城兵共呼延灼か聲を聞て、

將軍も曲て某等と共に梁山泊に馬を歇め給はんや、然らば我上座を將軍に讓て尊敬を盡すべし。呼延灼これを聞て、良久しく沈吟して在けるが、忽ち地上に跪いて云く、某國の恩を忘れぬるにはあらざれ共、實に宋君の義氣を慕ふ、今日より宋君に隨順して、駑鈍の力を盡すべし、彌深く憐を垂給へ。宋江吳用ならびに諸頭領、此言を聞て大に悅び、此日は先酒宴を設けて各呼延灼を慰めけり。頓て青州城を攻て孔賓孔明を救や否や、次卷に明かなり。

し處に、豈知らんや、陥坑の上を踏で、馬人ともに坑の内に陥入けり。此時兩邊より五六十の兵出て、遂に呼延灼を生捉しかば、彼百餘騎の馬軍共は花榮に散々に射られ、四方八方に逃散けり。宋江は已に本陣に歸りし處に、兵ども頓て呼延灼を高手小手に嚴しく縛り引出す。宋江忙しく座を立て、絆の索を解しめ、自ら呼延灼が手を携へて張中に入り、慇懃に禮を行うて、呼延灼を拜しければ、呼延灼慌て忙き拜を回して云けるは、宋將軍何故我を拜し給ふや。宋江が云く、某豈敢て朝廷に背んや、只官府より世を逼られ已ことを得ずして、梁山泊に籠城す、我輩都て心を一つにして、朝廷の御赦免を待のみなり、想はず這般將軍の威風を犯して、多く罪を蒙りぬ、願くはこれを免し給へ。呼延灼が云く、某は擒となりし者なれば、萬死するとも猶輕からんに、何ぞよく將軍の重禮に當らんや。宋江が云く、某何等の者なれば、妄に將軍の性命を害せんや、某は只心事を將軍に告て、議を求んと欲す。呼延灼が云く、宋君今更我に議を求んと云給ふは、我を東京に回して御赦免のことを、帝に奏聞あらしめんと欲し給ふならんか。宋江が云く、將軍いかんぞよく東京に回り給はんや、彼太尉高俅は原來氣量窄き鼠輩にして、人の大恩を忘れ人の小過を記ゆ、將軍今若干の軍馬錢粮を失ひ給ひぬるに、彼豈あへて將軍を罪せざらんや。今韓滔、彭玘、凌振等も已に山陣に止て大義に聚りし間、

も、花榮と一同に我に背て、梁山泊に入ぬ、彼亦輕々しく敵すべからず。呼延灼が云く、相公心を安んじ給へ、某必定彼反賊を捉ふべし、某今彼と戰ひし時、彼棒法少し亂れぬ、明日は立處に彼を生捉か、若くは打殺して、相公の尊覽に呈すべし。知府が云く、將軍果して、此のごとき豪傑なるに、明日は先一筋の道を切開いて三人の使者を出さしめ給へ、一人は東京に遣して、援兵を求めさせ、兩人は隣國へ馳て兵を借しめ、内外より挾で攻べし。呼延灼これを聞て、相公の高論尤も明なりと、同じければ、知府頓て救を求むるの文書を修へて、これを三人の使者に與へけり。翌日未明に一人の軍士來て呼延灼に告けるは、城の北門の外に三騎の敵在て私に城を望み見る、中なる敵は紅の袍を著し、白馬に乘ぬ、右に勒へし敵は正しく小李廣花榮なり、左に在敵は長衣を著し、羽の團扇を持ぬ。呼延灼が云く、紅の袍を著したるは賊首宋江ならん、長衣を穿たるは、軍師吳用にてぞ有べし、汝等先渠等を驚かしむることなかれ、我速に百餘騎の軍馬を引て彼等三人を生捉んとて、遂に軍馬を催し、暗に城の北門より打出る。宋江、吳用、花榮三人は一向頭を擡け、城を望み居ける處に、呼延灼勇を振て、近々追至りしかば、宋江等三人は等しく木陰に立倚て、馬を勒へて居たるに、呼延灼ははや宋江が面前に跑來りければ、俄に喊の聲大いに起る。呼延灼これを聞て急ぎ馳囘らんとせ

日又梁山泊の宋江自ら軍馬を引て至れり、何を以てこれを攔んや。呼延灼が云く、相公先心を安んじ給へ、彼此處に至て他の利を失ひ、畢竟何事をか做出さん、彼等は皆水泊の内にては、戰を能すといへども、陸上の軍には怕るゝに足ず、某一々これを活捕らん、相公城樓に上て、戰を一覽し給へとて、遂に衣甲を著し鐵棒を提げ、一千の人馬を引て城外に突出けるに、宋江が陣中より一人の大將進み出で、高聲に呼り罵つて云けるは、汝民を害する賊官、我一々頭を刎て街に示衆べし。知府此大將を見るに、乃ち霹靂火秦明なりしかば、忽然として大に罵つて云く、汝潑賊多年朝廷の高祿を食み、今日聖恩を背て朝敵となる事最も是重罪なり、我先汝を捉へて骨を拔んとて、呼延灼に下知しければ、呼延灼馬を躍せ鐵棒を揮て直に秦明に打てかゝる。秦明も同じく狼牙棒を輪して相迎へ、兩將精神を揮うて四五十合戰ひしか共、勝負いまだ分たざりしかば、知府是を見て、呼延灼もし誤もやあらんとて、急に金を鳴しけるに、呼延灼遂に秦明を捨て城中に引入けり。秦明敢て是を追ず、再び本陣に回りけり。宋江先十五里退て陣を列ねけり。呼延灼は知府に對して云けるは、某已に秦明を活捕んと圖りしに、何ゆゑ金を鳴して軍を收め給ひぬるや。知府が云く、將軍久しく戰ひ給ひし故、恐らくは疲もやあらんと思ひ、先金を鳴し暫く休しめ申たり、秦明は原我幕下の統制使の官にてありしかど

尊顏を拜せざりしに、今日幸に謁を下風に取て、喜望外に出ぬ。宋江答て云く、某何ぞ道に足んや、我かつて和尙の淸德を聞及び、常に渇想に逼りしに、今日法顏を拜し、奚ぞ雀躍のみならんや。楊志も又再拜して云けるは、某昔日梁山泊を過りし時、豪傑等某を山陣に留しか共、其刻は頗る所存あつて山陣に留り得ざりしが、今日天の憐を蒙りて宋君を拜し、誠に感悅極りなし。宋江答て云く、楊制使の威名は四海に流れ、人皆仰ぎ慕ふ、我今日却て相見の晩きを恨るのみ、向後彌心を同うし力を併せて、共に大義に聚るべしと、衆皆大に悅びけり。此時魯智深は美々しく酒宴を設け、宋江以下の諸豪傑を款待し、一々對面を遂にける。翌日宋江靑州の戰勝負いかんと問けるに、楊志答て云く、孔亮已に梁山泊に馳て後、約莫六七度戰ひしか共、各勝負いまだ決せず、今靑州城には、唯呼延灼が武勇を賴のみ、もし彼をだに生捉なば、城を破らんこと旦夕にあり。吳學究呵々と咲て云く、彼を活捕んには、力を用ずして計を用ひば可ならん。宋江問て云く、軍師何分の計あつて、彼を活捕給はんや。吳用が云く、今彼を活捕には、此の如く〳〵と低言しかば、宋江大に悅び、此策至て神妙なりとて、此日人馬手分を定め、翌朝遂に兵を起して城下に至り、四面を取圍で、鼓を擂旗を飜し、喊の聲は天に震ひ地に響く。慕容知府はこれを聞き、急ぎ呼延灼と商議して云けるは、今

れ共宋頭領は數度の戰に疲も有べければ、此度は先陣を守り休息有べし、我自ら足下に替つて出馬せん。宋江が云く、晁君は山陣の主なるに、豈輕々しく出陣し給はんや、殊に此度の事は某が身に干し上は、晁君もし某に替り給ふ時は、孔亮ならびに魯、楊、兩人が想はくも惡かりなん、願くは某馳向はん、數人の頭領同じく山を下て助け給はんや。諸頭領是を聞き、一度に答て云けるは、某等都て宋君に從ひ犬馬の勞を盡すべし。宋江大に悅び、此日は先酒宴を設て、孔亮を款待し、宋江又鐵面孔目裴宣に命じて人馬を催させ、則五軍に分つて、山を下らんと議定せり。花榮、秦明、燕順、王矮虎を先陣とし、穆弘、楊雄、解珍、解寶を第二陣とし、宋江、吳用、呂方、郭盛を中軍とし、朱同、柴進、李俊、張橫を第四陣とし、孫立、楊林、歐鵬、凌振を後陣とす。此五軍の頭領總て二十人なり。共に三千の人馬を領す。其餘の頭領は皆晁蓋と同じく山陣を守る。翌日五更の時分に宋江はや晁蓋に別れ、孔亮と共に山を下る。總て五軍三千の人馬終道秋毫も居民を犯さずして、已に青州に至りけり。孔亮は先魯智深が陣屋に來て、斯と告けるに、諸豪傑都て陣外に出て相迎ふ。宋江が中軍已に至りしかば、武行者遂に魯智深、楊志、李忠、周通、施恩、曹正等を引て、宋江に見えしむる。宋江先智深を讓て、坐せしめける處に、智深が云く、我久しく宋君の大名を聞しかども緣熟せずして、未だ

圖同村の富貴人と爭を惹引し、彼が一家盡く殺害し、白虎山に逃上り、已に六七百の兵を聚て山陣を守り居ける處に、叔父孔賓青州の慕容知府に捉はれ入牢しけるゆゑ、某兄弟これを救んと圖り、青州を攻けるに、彼呼延灼に孔明を生捉れ叔父をも救ひ得ず、剩へ兄を捉れ、某深くこれを恨て戰ひしか共、呼延灼に敵すること能ずして、大に敗北せり、翌日半途に於て武行者に遇ける處に、彼某を引て兩人の頭領、花和尙魯智深、靑面獸楊志にまみえしむ、彼兩人一たびまみえて、しかも舊友のごとく、懇情を垂れ、兄孔明を救はん計を商議して、魯、楊、兩頭領幷に、桃花山の李忠周通總て三山の人馬を以て青州を打んと欲し、猶宋君の救を冀ひ、城を夾で攻べしと、則某を遣しぬ、伏して望らくは、宋君先父の情を顧み給ひて、救ひを垂給へ、某齒を沒るまで、此洪恩を忘るまじ。宋江が云く、これ尤も難からず、足下先心を安んじて、晁天王にまみえ給へ、我宜しく晁天王に告て、共に商議を遂んと、則孔亮を引て、晁蓋、吳用、公孫勝、幷に諸頭領に見えしめ、呼延灼が遂に青州に落行て、慕容知府が幕下に屬し、今孔明を生捉し故、孔亮來て救を求る始終詳に語りしかば、晁蓋是を聞て云く、魯、楊、兩人は孔亮とは未だ親しからざるとなるに、尙且兵を起し、孔明を救はんと圖る、況や宋頭領は原來孔亮が家とは舊知なれば、いかんぞこれを救はざらん、然

孔亮梁山泊に到る圖

雪ぐべし。孔亮これを聞て大に悦び、手勢こと〴〵く魯智深に預け、己は一人の兵を引て遂に梁山泊へ進發す。魯智深等三人は、又施恩曹正并に二三百の兵を呼下し、軍中に加へけり。扨李忠周通は、魯智深が招に應じて山陣の兵を催し、只四五十人の小賊を留て山を守らせ、其餘の人馬はこと〴〵く引て山を下り、終に智深が兵と一處に會合せり。孔亮は此日青州を離れ急ぎしかば、不日に李立が店に至りて、梁山泊の道を問けるに、李立は此體を見て、必ず蹺蹊あらんと推察し、則孔亮に答て云けるは、足下梁山泊の路を問給ひて、何の事ありや、また何れの處より至れる人なるぞ。孔亮が云く、某は青州より來れり、山陣に識人有てこれを訪ふ。李立が云く、山陣には都て諸豪傑居住す、汝何ぞ能行んや。孔亮が云く、某則宋大王を尋んと欲す。李立が云く、足下已に宋頭領を訪ふ人ならば、先後堂に入て歇給へとて、種種款待ければ、孔亮深くこれを謝し、一刻も早く宋頭領にまみえんことを願ひけるに、李立則孔亮を請うて、共に小船に乘直に金沙灘に至て岸に上り、遂に關前を過て行處に、宋江は是を聞て自ら此邊に出て迎へしかば、孔亮已に宋江に見え、地上に跪て大に哭く。宋江問て云く、足下心中に何等の難儀有てかく哭給ふや、宜しく我に告給へ、我水火を避ずして、足下の難を救ふべし。孔亮が云く、某宋君に別れて後は老父も已に相果ぬ、然る處に兄孔明不

我一言に順ひ給へ。武行者問て云く、楊公何等の良計ありや、願くは是を承はらん。楊志が云く、青州城を打んには、須く大軍を催すべし、我聞く梁山泊の及時雨宋公明は智仁勇を兼たる良將なり、況や呼延灼とは仇ありければ、此節宋公明の人馬を借べし、我輩は先三山の人馬を一つに合せて、青州城を競はん間、孔亮は自ら梁山泊に上り、急ぎ宋公明の合力を請て、共に青州を攻さしめ給へ、宋公明は原來孔亮兄弟とは交睦じきことなれば、必ず救兵を出すことあらん、唯知らず列位の所存はいかんと、理論に及び、先孔亮共に陣取て居たりけり。

○三山義を聚て青州を打つ

二龍山の頭領共商議に及び魯智深が云く、今日も人あつて、宋公明の德を稱し、明日も人あつて、宋公明の德を稱す、誠に宋公明の大名を聞こと、恰も雷の耳に轟がごとし、此人必然當世の義士ならん、かるが故に天下の人其名を知らずと云ことなし、前番彼人花榮と共に清風山に居給ひし時、我已に尋行んとせし處に、はや清風山を棄て、行方知らずと聞しゆゑ、我終に止て未だ相まみえず、孔亮いよ〳〵叔兄兩人を救はんと欲ひ給はば、親自梁山泊に赴て、宋公明を請來り給へ、我輩は此處に在て專ら消息を待ち、共に青州を攻落し、足下兄弟が恨を

領は我より先に兵を引て馳來り、昨日呼延灼と鋒を交へて、終日戰ひしか共、いまだ勝負決せざりし處に、呼延灼は昨夜兵を引て、青州に回りぬ。李忠等是を悅で、我等三人を山陣に請て饗應し、則呼延灼が帝より拜領したる名馬を、桃花山に偸取て置けるを、今日我輩に送りしゆゑ、我先是を牽せて、二龍山に歸る、魯、楊、兩公は少刻後より回らんとなり、我足下のことを彼兩人に告げ、再び兵を起して、青州城を攻破り、速に足下の叔兄兩人を救ふべし。孔亮是を聞て大に悅び、再拜して感謝しぬ。武松此處に留て暫く待けるに、果して魯智深楊志轡を竝べて已に武松が前に至りしかば、武松則孔亮を引て兩人に見えしめ、詳に告て云けるは、我向に宋江とともに此孔亮が家に逗留して、多く懇情を蒙りぬ、今彼叔兄兩人を青州に捉れ、自ら是を救はん力なし、我が輩宜しく義を顧み、二龍山、桃花山、白虎山、此三山の勢を集て、再び青州城を攻め、終に慕容知府を殺して、呼延灼を活捉り、快く孔賓孔明を救て、猶城中の兵粮を奪ひ、各これを分て、山陣の用に供ふべし、知らず兩公の尊意はいかん。魯智深が云く、既に然らば急に人馬を催すべしとて、則桃花山に人を馳て此事を告にけり。當時楊志が云けるは、青州の城柵堅固にして、人馬強勇なるに、況や又大剛の呼延灼を添しかば、尋常の敵と同じからず、某自ら威風を滅すに似たれ共、愈青州を攻んとならば、

此三人かくのごとく強勇にして、二龍山に陣を設け、專ら賊威を振うて、官府を蔑如にす、向にも數度兵を發して攻させけれ共、彼三人に敵すること能はず、却て五七百の官軍を討取れぬ、此故にいまだ彼等を生捉ず。呼延灼が云く、某昨日彼等が武藝の精熟したるを見て、必定有名の豪傑ならんと思ひしに、果して魯達楊志にてありつるよな、誠に聞しに增る英雄なり、然れ共相公心を安んじ給へ、某已に彼等が武藝を看破せし處あり、近日一々生捉て尊覽に入奉らん。知府是を聞て大に悅び、種々珍物を累て、呼延灼を欵待し、又若干の酒食を以て三軍を賞しけり。翌日孔亮は敗軍を引て馳行ける處に、林の中より一彪の人馬進み出で、當先に一人の大將あり。孔亮これを見るに、頭陀武行者なりしかば、忽ち馬より飛下り拜を行て云けるは、分手以來恙なきや。武行者急に禮を回して云く、足下兄弟兩人は、白虎山に在て陣を守り給ふと聞しゆゑ、幾度か訪んことを欲すれ共、第一は山を下ることを得ず、第二は路次不順なるに依て、空しく疎遠に打過ぬ、今日は又何等の事有て、此邊に出馬し給ひぬるや。孔亮答て、叔父孔賓を救んとして、兄孔明が活捉れしことを、一々詳に語りけるに、武松が云く、足下先心を惱し給ふことなかれ、我今七人の豪傑と義を結んで、二龍山に在り、此度桃花山の李忠周通、官軍の緊しく襲ふが故に、救の兵を我輩に求めけるゆゑ、魯、楊、兩頭

容知府は城樓の上に在て、戰を一覽す。孔明鎗を撚つて呼延灼を迎へ、兩將勇を振て相戰ひ、漸々二十餘合に至りしかば、呼延灼暗に知府が前にて、武勇を現さんと思ひ、頓て孔明が搠鎗を打落して、左の手を伸し、遂に孔明を馬上にて活捉けり。孔亮これを見て突出しか共、呼延灼に敵すること能ず、急に馬を引回し逃走る。知府城樓に在てこれを見るに、呼延灼兵を引て追蒐小賊百十餘人を生捉て、其餘は四面八方へ打散せり。孔亮は這々の體にて命を脱れ、其夜は敗軍少しを收て、古廟の内に歇みけり。呼延灼は孔明を活捉て、城中に入しかば、知府大に悦び、先孔明を牢中に遣して、孔賓と一處に擱ぬ。知府又呼延灼が戰勞を慰め、今日すみやかに孔明を捉へたるを稱美し、且桃花山の消息を問ければ、呼延灼答て云く、桃花山の賊を捉んは、囊の内を探て物を取がごとくなりしか共、又一夥の賊兵來て戰を助けしゆゑ、未だ彼を生捉ず、彼賊兵の大將、一人は大和尙、一人は大漢子なりけるが、某彼兩人と兩度まで戰ひたれ共、各勝負を分たざりしなり、彼兩賊が武藝尋常ならず、定て緣故ある輩ならん。知府が云く、其和尙は延安府老种經略が幕下の提轄、魯達と云し者なり、今は髮を落して僧となり、其名を花和尙魯智深と號す、又彼大漢子は東京殿帥府の制使官、靑面獸楊志と云者なり、又一人の行者武松と云者あり、是は則景陽岡の上にて、猛虎を拳殺したる武都頭なり

明日再び勝負を決すべしとて、遂に兵を收めて山崗の下に屯しぬ。扨呼延灼は鬱々として心中に想ひけるは、我は只一攻に破て賊を生捉んと圖りしに、豈知らん、彼等兩人が如き敵に遇んとは、是都て我命の拙き所なりと、只顧歎息して居ける處に、慕容知府使者を馳て云けるは、將軍早々兵を引回し、且城を守り給へ、今白虎山の強賊孔明孔亮人馬を領し馳來り、擅に糧を借んと欲す、恐らくは誤あらん、急ぎ歸陣有べしと、催促したりしかば、呼延灼是を聞て幸此便機に乘じ、此夜三軍を引て青州に歸りけり。翌日魯智深、楊志、武行者は各兵を引て、喊き叫んで攻來りけるに、敵の陣屋には只一人の兵もなかりけり。魯智深是を見て大に愕し處に、李忠周通兵を領し山を下り、恭しく三人の英雄を請て山陣に上り、山海の珍物品々を設け、尤も豐に欵待けり。扨呼延灼は兵を引て城下に至りけるに、はや一彪の軍馬來る。此大將は白虎山の下なる孔太公が男、毛頭星孔明、獨火星孔亮なり。此兄弟向に、同村の富貴人と爭を惹出し、遂に富貴人が一家の人を斬殺して、白虎山に上り、今已に七八百人の衆を集めて、山陣を守る。青州城には彼が叔父、孔賓といふものありけるが、慕容知府に生捉れ、入牢しけるゆゑ、孔明兄弟これを救んがため、此度兵を起して、青州に推寄せ、遂に呼延灼が兵に行遇て、互に喊の聲を合せて戰を挑む。呼延灼これを見て、馬を躍せ棒を輪して陣前に馳出しに、慕

杖を揮て相迎へ、互に龍の勢虎の勇をなして、軍器を交へ、一往一來祕術を盡して戰ひけるに、精神ますく盛んにして、呼る聲は山谷に響せしかば、敵親方相共にこれを見て、當世の勇士誰かよく此兩將に如んやと、各舌を揮ひ汗を捏て、心を驚むるばかりなり。已にして戰八十餘合に至れども、兩將少しも疲ず、雌雄分たざりしかば、呼延灼心中に想ふやう、此和尚はもといかなる出生の者なれば、かくのごとき大勇ありや、是必ず凡人にあらじと、又十合計戰ひし處に、兩軍一度に一向金を鳴しければ、兩將先戰を休、本陣に馳回り暫く休息し、呼延灼又進み出て大に呼り罵りけるは、賊和尚早く出て勝負を決せよ。智深焦燥て跑出んとせし處に、青面獸楊志馬を飛せて馳出で、和尚先休み給へ、我これを活捉んと、刀を振て呼延灼に斬てかゝる。呼延灼これを迎へて馬を交へ、又兩將勇を奮ひ力を盡し、戰已に六十餘合に至れ共、勝負未だ決せず。呼延灼又密に想道く、此賊も同じく萬夫不當の勇あり、いかんぞ此出陣に、是等兩人のごとき豪傑ありや、是必定有名の剛の者ならんとて、又七八合戰ひけるに、楊志も私に呼延灼が武藝の、尋常ならざるを見て、深く心中に感じ、馬を勒て引回しければ、呼延灼も敢て追ず、共に兵を收め、本陣に引取けり。魯智深は楊志武行者と商議して云けるは、我輩初て此處に至り、敵陣と近く陣を對するに宜からず、且二十里引退て陣を取り、

共、第一は豪傑の名を腐さんことを忍ず、第二は官軍もし桃花山を破らば、我山陣をも輕く見ん、是所謂脣亡びて齒寒しと云ふ、虞虢二國の譬に等し、此度は張青、孫二娘、施恩、曹正四人を留て山陣を守らせ、我輩三人自ら五百の人數を引て、桃花山を援べしとて、已に人馬を催し、使には速に救兵を向べしとの返簡を渡し早々回らしめ、引續て三頭領人數を率し山を下り、桃花山へ向ひける。扨李忠は二龍山の消息を聞て大に悦び、自ら千百の人馬を率して馳下り、先呼延灼が陣に突かゝる。呼延灼これを見て牙を嚙齒を切り、彼鐵棒を輪して、陣前に進み出で、直に李忠を迎へ相戰ふ。李忠は祖父より武藝を業として名高き勇士なりしかども、呼延灼が武藝には大に劣り、纔十合ばかり戰ひしに、はや力衰へ急に逃走る。呼延灼これを見て、汝何國に逃さんやと、後に慕ひ追來り、漸山の腰に至りしに、小覇王周通木石を雨のごとく打下しければ、呼延灼進み上ること能ず、竟に馬を回し山を下りける處に、軍中大に騒しかば、呼延灼其故を問に、後軍答て云く、遙後より一彪の軍馬飛が如く馳來る。呼延灼是を聞き、後軍に繞り出て望み見るに、當先に一人の大和尚一疋の白馬に乘て跑來り、恰も猛虎の吼るが如く大音聲に呼りけるは、汝梁山泊に追散されたる敗軍、いかんぞ敢て我輩を犯さんと欲するや。呼延灼大に怒り、鐵棒を輪し馬を飛せて打てかゝる。魯智深も同じく、鐵禪

は菜園子張青、又一人は張青が妻母夜叉孫二娘なり。此夫婦兩人は原孟州道十字坡と云處に住し、專ら往來の旅人を害し、貨を劫ひけるが、其後家を捨て同じく山陣に上りぬ。此時諸頭領總て七人、寶珠寺の殿中に會集し在ける處に、桃花山より書簡を奉るよし告しかば、魯智深語て云く、我當初五臺山を初て下りし時、桃花村に一宿し、彼周通を痛く打ち、已に戰に及んとしける處に、彼打虎將李忠は、原來我を識認り、早速戰を休て我を山陣に請ひ、再三留て山陣の主を我に讓らんとせしか共、我熟々彼等兩人を見るに、專ら寶を慳み物を悋んで、其志爽ならざりし故、我遂に彼等が財寶を奪取て山を下りぬ、然るに今日援兵を求むるは、定て蹺蹊有べし、先使を呼で遇んとて、頓て使を殿の下に呼しかば、使者恭しく再拜して云けるは、靑州の慕容知府、頃日一人の大將を得たり、此將は前日梁山泊を攻て敗北したる、呼延灼と云英雄なり、知府今此將を以て、先桃花山、二龍山、白虎山を掃ひ淸めて、其後又梁山泊を攻んと圖り、數千の人馬を呼延灼に借て、某が山陣を攻さしむ、滅亡旦夕にあり、此故に三大王の救を乞奉る、若肯て出馬し給はゞ、無事の後は必ず大王の幕下に屬し、毎月進貢を獻ずべしと、李忠周通慇懃に啓上し奉る、願くは仁慈を垂給へとて、書簡を呈す。楊志が云く、各山陣を守て今專ら防ぎを設る時節なれば、稀にも人馬の力を勞し難く、本援兵を出すまじと思へ

云者加り、各萬夫不當の勇有て、千軍萬馬の内に突入こと、恰も人なき所を行ごとしと聞く、我今一封の書簡を送て、救を求むべし、若此度危急を脱れなば、彼が幕下に屬し、毎月進貢を送るべし。周通が云く、某も曾て彼陣には、豪傑ある事を聞及べり、只恐らくは彼和尚昔日の事を恨て、來り救ふこと有まじ。李忠打笑つて云く、昔日彼汝を打のみならず、我財寶を奪取て迯けるに、何ぞ却て我等を恨んや、殊更彼は直性の英雄なり、若我書簡を以て援兵を乞ば、彼必定自ら兵を引て救ふべし、汝これを疑ふことなかれとて、遂に一封の書簡を修へ、物馴たる聰明の小賊兩人を後山より下して、二龍山に遣しけり。兩人の小賊書簡を携て急しかば、第二日の午の上刻に二龍山寶珠寺に至りぬ。此山の頭領は大小都て七人あり。三人の大頭領第一は花和尚魯智深、第二は青面獸楊志、第三は行者二郎武松なり。又四人の小頭領は、先一人は金眼彪施恩なり。此人はもと猛州牢の施管營が息なりしが、昔武松張都監が一家の男女を殺せし時、官府より施恩が家に事を干らしめ、急に武松を捉へ出すべしと、再三責ける故、一家盡く連夜に猛州を走り出で、久しく異郷に落魄在し内、兩親已に相果けるにより、施恩は再び武松を問て、此山に上り遂に止て頭領となりぬ。又一人は操刀鬼曹正なり。此人は初魯智深楊志と共に、此寶珠寺を奪て登龍を殺し、其後久しからずして、山陣に來り加りぬ。又一人

ん。呼延灼是を聞て深く感謝す。知府頓て呼延灼を饗應し、則客廳に歇せけり。呼延灼ははや三日を過しけるに、彌早く馬を取回さん事を欲し、即日知府に告て、速に軍馬を催し給へと願ひしかば、知府竟に三千の軍馬を以て、呼延灼に借與ふ。呼延灼人馬を得て大に恩を謝し、翌日早々兵を引て打出で、直に桃花山へと寄來る。扨又桃花山には兩人の頭領打虎將李忠、小覇王周通、此度は想はず踢雪烏騅馬を得て大に悅び、毎日山陣に在て酒宴を催しける處に、青州より軍馬寄來ると聞しかば、小覇王周通が云く、李公は牢く山陣を守り給へ、某官軍を退んとて、一百有餘の兵を引て山を下りけり。呼延灼は已に人馬を引て、山前に至り當先に進みて、大に呼り罵つて云けるは、汝奸賊何ぞ馬を下りて絆を請ざるや。周通これを聞て、鎗を撚り馬を飛せて、陣前に跑出しかば、呼延灼鐵棒を舞して、周通に打て蒐る。周通これを迎へて、鋒さきを交へ、戰纔六七合に至て周通はや敵すること能ず、急に回して山陣に跑上る。呼延灼半里計も追けるが、伏兵もやあらんと恐れ、再び本陣に回り兵を屯す。周通は山陣に迯上て、呼延灼が武勇を李忠に告て云けるは、我彼に敵すること能ず、慌忙しく逃回りぬ、彼もし山陣に追上らば、何を以て是を防んや。李忠が云く、我聞く二龍山寶珠寺には、花和尚魯智深在て山陣を守り、又青面獸楊志とやらんいふ豪傑一處にあり、頃日また新に行者武松と

で何れの處に去や。小斷が云く、彼邊の路を行は、必然桃花山の賊ならん、只桃花山に引回しならん。呼延灼これを聞て大に驚き、急に鐵棒搶取て、小斷と共に二三里計追蒐けるに、火把の光忽ち見えずして其行方を知らず。呼延灼が云く、帝より賜つたる馬を無して、これをいかゞせんや。小斷が云く、明日青州府に訟給ひて、多く官軍を催し、共に馳て、賊等を捉へ給はゞ、彼馬再び得給ふべし。呼延灼心中甚だ愁へ、曉るを待けるに、はや五更過に至りしかば、衣甲を小斷に担せて、直に青州府に赴きけり。已に城中に入ければ、天色早晩て此日は官府に出ること能ず、先旅宿を借て、其夜を過し、翌日早々官府に至て、慕容知府にまみえしかば、知府大に驚て云く、將軍は此度梁山泊の賊を征伐あるとこそ聞ぬるに、何ゆゑ此處に至り給ひしぞ。呼延灼戰の次第一々詳に訴ふ。知府是を聞て云けるは、將軍已に若干の人馬を失ひ給ひて、殘悔千萬なれ共、是又功を慢るの罪にあらず、賊等が奸計に中りしは、いかん共することなし、將軍先心を安んじ給へとて、懇に慰めけり。呼延灼又馬を偸れたる事を告けるに、知府が云く、我が支配の地面に盗賊極て多し、先桃花山の賊を撃平げて、將軍の馬を取復し、次に又二龍山、白虎山の強賊等をも掃清んに、將軍宜しく力を盡し給へ、這等の強賊をだに打平げば、我必ず將軍の爲に帝へ奏聞し、再び人馬を將軍に與へて、梁山泊を撃しめ申さ

桃花山の賊名馬を竊去る圖

を慰め奉り、再び軍馬を引て梁山泊を攻破り、遂に此仇を報ひ、恥辱を雪んとて、これより直に青州を望で落行き、第三日の午の下刻に至て殊更疲れしかば、今日は先早く歇んと、頓て旅宿を求め、則小斷を呼で云けるは、我は是朝廷の軍官にして、這回梁山泊を攻けれ共、不幸にして利を失ひ、今又青州の慕容知府が方へ赴んとす、汝須らく我が爲に馬に喂養ふべし、彼馬は是天子より拜領せし良馬にして、名を踢雪烏騅馬と云ふ、必ず等閑に見ることなかれ、明日再び兵を起すことあらば、我重く汝を賞すべし。小斷が云く、此處の近邊に桃花山あり、山の上には強盜住す、總て兩人の頭領あり、第一人を打虎將李忠、第二人は小霸王周通と申す、山中に六七百の小賊を集め、專ら往來の人を惱し、貨を奪取る、相公今宵自ら用心を堅固にし給へ。呼延灼が云く、我は是萬夫不當の勇あり、彼縱幾千騎來る共、我彼馬に乘て働かば、何の恐るゝことあらん、汝只よく馬に喂養て得さすべしとて、良久しく酒食を用ひ、其夜はこゝに歇みけり。直に三更の前後に至て、屋の後に叫ぶ聲ありしかば、呼延灼急に起でこれを見るに、彼小斷此處に在て、只顧叫ぶ。呼延灼問て云く、汝何ゆゑに再三かく叫ぶや。小斷答て云く、某今籬の響くを聞て恠く思ひ、暗に起てこれを見るに、果して賊籬を推倒して進み入り、相公の馬を偸取ぬ、相公前面を見給へ、尙遙に火把の光あり。呼延灼が云く、彼我が馬を偸ん

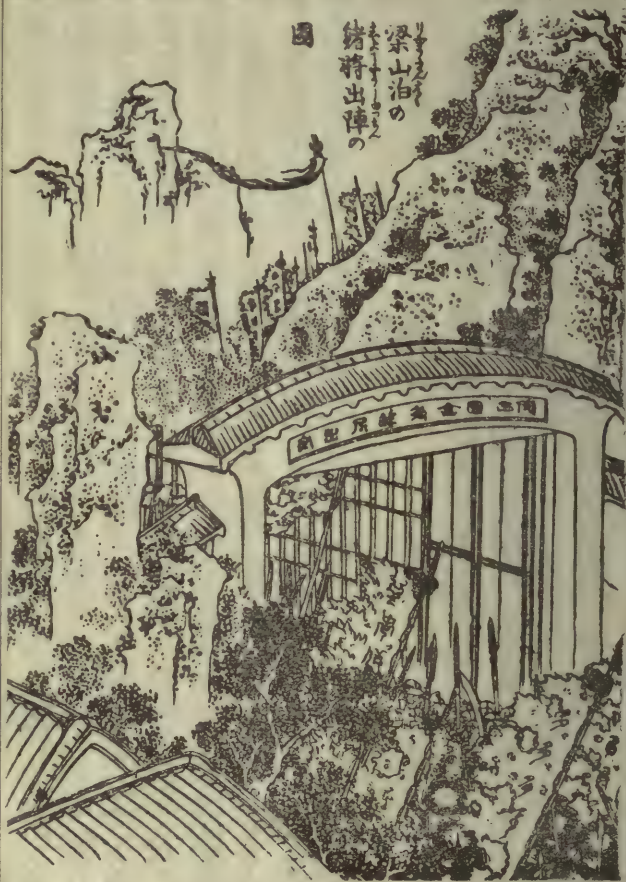
東北の方に馳走りけり。扨宋江は金を鳴し兵を收め、先山陣に上て三軍を賞せり。此度三千の馬軍過半鉤鎌鎗を用て鉤倒し、軍士等は盡く活捉て山陣に引せり。五千の歩軍等も三面より圍れ、急に躱れんとしたる士卒共は、都て又鉤鎌鎗に鉤住られ、終に擒になりけり。其外水邊に逃來りし軍兵共は、一々水軍の隊より生捉りける。初の戰に呼延灼に打崩されたる小陣、幷に酒肆等再び嚴に建て、又右の頭領共を遣し守らせけり。劉唐、杜遷は韓滔を活捕て、山陣に引せければ、宋江自ら絆を解て座上に請ひ、慇懃に禮を以て、親方に隨順のことを諫めけるに、彭玘凌振も、再三諫言を加へしかば、韓滔深く宋江等が義を感じ、遂に心を傾て頭領となりにけり。宋江又人を陳州に馳韓滔が妻子を山陣に邀へ取て、一處に在しめぬ。諸頭領は此一戰に連環馬軍を破り、若干の軍馬を得て衆皆大に悅び、每日酒宴を設け、諸將の功を賀しける。呼延灼は若干の官軍人馬を失ひしかば、敢て京に回らず、只一騎半途に走り出にける。され共盤纏の貯あらずして、盔甲鞍等に鏤たる金を取てこれを盤費とし、暗に心中に想ひけるは、今日戰に打負て身に罪を干り、家あれ共奔がたく、國あれ共投がたし、今更何れの所に落行ば可ならんやと、暫く沈吟して在けるが忽ち想ひ出し、青州の慕容知府は、昔日已に相見し我ごとを知れり、只宜しく彼を賴で難を避け、慕容貴妃の一言を借て、帝の御憤

るゝ勢にて、止んとすれども止らず、盡く蘆葦の内に跑入し處に、鉤鎌鎗の兵左右より並び起つて、一度に軍器を擧げ、先兩邊の馬足に鉤て引倒しければ、中に在馬軍共も、同じく自ら倒れ、盡く敵の手に生捉れたり。呼延灼は鉤鎌鎗の計に中りたるを見て、大に慌て急に馬を引回して、南の方へ逃行處に、背後に炮の聲大に發り、山に漫り野に遍く、都て歩軍ども追來る。呼延灼、韓滔、馬軍多く捉はれ、易からず思ひ、一向四面に繞て敗軍を納め、直に西北を望で五六里計馳けるに、此邊に又一隊の人馬突出で、當先に穆弘、穆春兩人の豪傑、路を攔當り、同じく刀を舞し大に呼つて云く、汝敗軍いかんぞ馬を下て、降參せざるや。呼延灼大に怒り、鐵棒を舞し、直に穆弘に打てかゝる。穆弘纔に二合戰つて遂に逃走る。呼延灼計あらんことを怕れ、敢て追戰ず、正北の大路を望で、山坡の下に至りける處に、又一彪の兵斬て出る。當先に兩人の豪傑路を攔當る。一人は解珍、又一人は解寶なり。各鎗を撚て、直に呼延灼を望で搠かゝる。呼延灼鐵棒を擧て兩人を迎へ、戰いまだ十合に至らざるに、兩人同じく身を回して逃走る。呼延灼半里計趕行ける處に、左右より二十四人の鉤鎌鎗の兵突出る。呼延灼敢て戰を好ず、馬を東北の方に進めて走り行く。此邊に又王矮虎一丈青兵を引て、呼延灼を追赶しかども、終に追著ずして山陣に馳回りけり。呼延灼は大に打破られ、

鼓を擂て戰ひを挑む。韓滔是を見て、再び兵を引て馳回り、則呼延灼に對して云けるは、南の方に三隊の賊兵進みけるが、都て梁山泊の旗號なり。呼延灼が云く、彼久しく出戰ずして、今日かく戰を挑むは、必ず計有べしと、未だ云も終らざるに、北邊に炮の聲大に響く。呼延灼これを聞て、忽ち罵つて云く、此炮必定從賊凌振が放つ處ならん、先南の方の敵を追拂はんと議しけるに、北邊に又三隊の步軍現れ出しかば、呼延灼が云く、是必然賊等が奸計なり、兵を兩路に分て擊べき間、韓先鋒は南の軍兵を攻給へ、我は北の軍兵を突べしとて、已に兵を分んとせし處に、西の方に又四隊の人馬出ければ、呼延灼是を見てやゝ驚きけるに、正北の方に又大小の炮頻に放て天地を響せしかば、官軍共戰ずして自ら亂れけり。

○宋江大に連環馬を破る

呼延灼此光景を見て甚だ焦燥ち、韓滔と共に兵を四面に分て嚴しく突出けるに、彼十隊の步軍は東に赶ば東に逃げ、西に追ば西に逃げ、一向奔走して敢て回し戰ふ事なければ、呼延灼大に怒り、三軍に下知して、正北の方に突入らんとしけるに、宋江が兵共都て蘆葦の內に迯入り、呼延灼是を見て大に連環馬を進め、地に捲て追來る。彼連環馬一度に馳出しかば、恰も山の崩

梁山泊の諸將出陣の圖

軍二十頭領に從て、先山を下て敵を誘引しむ。又李俊、張橫、張順、三阮、二童、孟康等九人、水軍の大將は兵船に取乘て救應をなす。花榮、秦明、李應、柴進、孫立、歐鵬等六將は各馬に乘て兵を引き、只山邊に在て戰を挑む。凌振、杜興は專ら相圖の炮を放つ。徐寧、湯隆兩人は共に鉤鎌鎗の兵を掌る。中軍には、宋江、吳用、公孫勝、戴宗、呂方、郭盛等、大軍を領し號令を下す。其餘の諸將は各陣柵を守る。宋江已に手分を定めしかば、此夜三更の時分に、先鉤鎌鎗の兵を下して、四方に埋伏せしめ、四更の前後十隊の步軍山を下る。凌振、杜興は高き處に炮架を設け、種々の炮を架置く。徐寧、湯隆は各軍器を拿て水を渡る。五更過に至て、宋江が中軍の人馬山を下り、則ち水を隔て鼓を撾ち、喊の聲を揚て戰を挑む。呼延灼は此聲を聞て大に怒り、先鋒韓滔を馳て、敵の動靜を探聞しめ、其次に呼延灼御賜の踢雪烏騅の名馬に打乘鐵棒を輪し、彼連環馬軍を引て陣勢を相對す。先鋒韓滔已に囘て、呼延灼と商議して云けるは、正南の方に一隊の步軍あり、只其何れより來りぬることを知らず。呼延灼が云く、縱ひいかやうの處より來りし軍兵たり共、唯宜しく連環馬軍を進めて突破り候へ。韓滔其言に服し、則五百の馬軍を引て馳出しけるに、又東南の方に一隊の步軍出來る。呼延灼是を見て、兵を分遣はさんとせし處に、又西南の方に一隊の軍兵進み出て、旗を翻し

敵を破る手段を催しけり。扨官軍の大將呼延灼は、彭玘凌振を捉れてより以來は、毎日水邊に寄て戰を挑みしか共、水軍の大將等牢く水邊の陣を守つて兵を屯しければ、呼延灼は西山北山の兩路に在て暗に道を尋ねしめけれ共、攻上るべき便機の路もあらずして、日を空しく打過せり。梁山泊には凌振に命じ品々の炮を造らしめ、諸事全く調りしかば、宋江諸將に對して、我不才たりといへども、頗る所存あり、知らず諸將の心に合ふべきや。吳用が云く、願くは高議を承らん。宋江がいはく、明日は一騎も馬軍を用ず、諸將も都て歩戰をなし、歩軍を引率し、即ち備を十手に分て山を下り、擅に敵を誘て水邊に至らせ、彼若急に馬軍を進めて追來らば、悉く蘆葦の內に逃入べし、蘆葦の內には豫め、鉤鎌鎗の兵を伏置き、敵の馬軍已に追至らば、鉤鎌鎗の伏兵、一度に竝び起らしめ、夾で攻さすべし、然らば敵を活捉こと多からん。吳用が云く、此計究て神妙なり。徐寧が云く、鉤鎌鎗の兵はかくのごとく用ふるときんば、其利彌多し、速に用意を調へ給へと催しければ、宋江此日歩軍を十隊に分て、諸將に與ふ。則ち劉唐、杜遷一隊を領し、穆弘、穆春一隊を領し、楊雄、陶宗旺一隊を領し、朱同、鄧飛一隊を領し、解珍、解寶一隊を領し、鄒淵、鄒潤一隊を領し、王英、一丈靑一隊を領し、薛永、馬麟一隊を領し、燕順、鄭天壽一隊を領し、楊林、李雲一隊を領す。此十隊の歩

徐寧衆兵に
鈎鎌鎗を教示る図

五編　巻之四十八

○徐寧教て鉤鎌鎗を使しむ

扨此徐寧と云人は身の材六尺有餘にして、面の色白く腮の髭長く、威風凛然として、あつぱれ一人の大將なり。時に一筋の鉤鎌鎗を取て自ら一場是を使しかば、諸の英雄一度に喝と喝采て、暫く鳴も休ざりけり。徐寧諸軍に教て云けるは、凡此のごとき軍器を使ふ時は、其變法を肝要とす、總て九變あり、初め八歩四撥と云法を遣ひ出して、十二歩に變ず、是又十六歩に變じ、此より裏の法を名けて大轉とす、鉤を東西南北に向て能變化利用をなし、其硬きを奪ひ、強きを鉤る、我委しくこれを使うて見すべし、諸人心を留て精く此法を記ゆべしとて、再び鉤鎌鎗を綽て躍り出で、秘密たる裏の手を、半時ばかり使うて見せければ、諸豪傑各これを見て、神妙の高藝かなと、感歎止ざりけり。この人東京にあつて教師たれば、諸人金鎗手と綽名せり。今日此奇藝を見て、諸頭領大に興を得、是を始として、大勢晝夜怠ず學びし所に、半月の内に先千人餘の兵共これを熟しければ、その餘は熟するに及ずとて、宋江諸頭領と共に

妻子已に山陣に至る上は我が心全く安んぜり、只惜むらくは、我甲は何れの處に失ひぬるや。湯隆笑つて云く、甲の事はさて置き、家内の財寶皆收拾て山陣に至りぬれば、心を安んじ給へとて、甲を皮匣に收め幷に家財等一品も紛失なく取揃へ、徐寧に還しければ、是を見て徐寧は再び東京に歸る念を斷けり。且彭玘凌振も各一族を身邊に在らしめ、各心を安じ、皆梁山泊に止りぬ。然れば宋江湯隆に命じ、多く鉤鎌鎗を造り出さしめ、晁、宋、呉用、公孫勝其外諸頭領聚義廳に集會し、卽徐寧を請て鉤鎌鎗を諸軍に敎へしめける。此鎗の利あること、次卷を見れば分明に知るべし。

旅客は樂和なりと有て車使は誰なりしを記さず。且又時遷姓名を隱し、我姓は張にて、排行第一なりと百回本にあれば、張一と云べし。通俗忠義水滸傳には張二と書く、是見誤なり。

けれ共、これを使ふ者は只徐公のみなり、故に此度計を用ひ、時遷に公の寶物たる甲を盜ましめ、漫に徐公を賺して山陣に誘引せり、伏して願くは我罪を免して、一臂の力を施し給へ、然らば山陣の諸豪傑皆々此恩を感激あるべし。徐寧これを聞て、只惘然と呆れける處に、宋江近く進んで告けるは、某晁天王と共に暫く當陣に居住し、專ら朝廷の御赦免を待奉る、我輩都て忠を盡し、國に報はんことを欲す、毛頭も財を貪り殺を好み、不仁不義のことを行ふにあらず、望らくは徐公明らかに是を察し給ひて、同じく天に替て道を行ひ給へ。林冲は原來舊友なりしかば、懇に諫て云く、某已に高太尉に世を逼られ、今此處に在て禍を脫る、徐公敢て山陣に留り給はゞ、我深く舊友の情を感ずべし。徐寧が云く、某今悔るにはあらねども、只恨らくは妻子等都て官府の擒となるべし。晁宋齊しく云けるは、徐公必ずこれを憂へ給ふ事勿れ、近々貴族を山陣に邀へ取て、一處に在しめ進すべし、先宜しく休息し給へとて、種々珍物を重ねて饗應を盡し、又戴宗湯隆を東京に馳て、徐寧が妻子一家を取來らしめ、已に十日を經ける處に、楊林は穎州より彭玘が妻子を取て回り、薛永は東京より凌振が妻子を取て回り、李雲も同じく東京より五車の火藥を買取回り、又數日過れば、戴宗湯隆も徐寧が妻子を取て回りければ、徐寧夫婦對面して、半は悅び半は驚きけり。徐寧又湯隆に對して云けるは、

は何と云しぞ。時遷が云く、郭大人と云て、名の知れたる者なり。徐寧又李榮に問て云く、泰安州に郭大人と云人ありや。李榮答て云く、是は泰安州第一の大商人にて、これを知らざる者なし、彼人常に官人軍官等と交を結び給ひ、勢ある大家なり。徐寧是を聞て心中に想ひけるは、賊の棟梁已に明かなるうへは、甲を取復さんこと易かるべしと、暗に悦で一向急ぎける程に、日あらず梁山泊の近邊に至りし處に、李榮車使に命じ、酒を沽しめければ、車使頓て一瓢の酒と、些の肉とを求め來る。李榮先此酒を徐寧に送りけるに、徐寧これを取て遂に飲乾ぬ。李榮又車使に命じ、再び一瓢の酒を沽しめんとせし處に、徐寧忽ち口中に涎を流し、車の上に倒れけり。扨此李榮と云し者は鐵叫子樂和なり。此時樂和、湯隆、時遷三人の頭領已に車を下り、徐寧を旱地忽律朱貴が店に携へしかば、朱貴遂に山陣に送る。晁宋兩人これを聞て、諸頭領とともに、關前に出て徐寧を迎へけるに、徐寧漸蒙汗藥の毒氣醒て眼を開き、想はず諸豪傑を見て大に駭き、則湯隆に問て云く、汝は何ゆゑ我を賺して此處に携へ來るや。湯隆が云く、徐公宜しく我が云ことを聞給へ、我此たび晁宋兩公豪傑を招き給ふことを聞及びし處に、幸武崗鎭にて黒旋風李逵に逢ひ、竟に引れて當山陣に加りぬ、今呼延灼に連環馬軍を用られて、親方大に利を失ひ、再び敵を破らん計なし、これによつて我鉤鎌鎗の法を獻じ

監押して、共に東を望で馳行き、其夜は旅宿を求て三人同く歇みけり。徐寧初は時遷を緊しく守りしか共、時遷は詐て脚を傷たる體にもてなし、路を行こと果敢取ざりしかば、徐寧漸く心を安んじ、頗る怠りぬ。

○湯隆徐寧を賺し山に上らしむ

斯て道を往こと三日に至りしに、傍の小徑より二三疋の驢馬一輛の虚車を挽來る。後に一人の商客あり。漸近くなりしに、彼商客湯隆を見て、忽ち地に跪て禮をなす。湯隆是に問て云く、足下は何故此處に至れりや。彼旅客が云く、鄭州にて商賣を完了ひ、今まさに泰安州に歸らんとす。湯隆又見れば、車を使ふ者傍に控へあり。湯隆商客に對し、我輩三人も同じく泰安州へ赴く、汝の車に駕して倶に行んこと可ならんや。旅客が云く、三人はおろか十人たり共駕給へ、聊も妨なし。湯隆大に悦び、彼旅客を徐寧に見えしむ。こゝに於て徐寧問て云く、此人は誰なるぞや。湯隆が云く、我去年泰安州を過りし時、幸此人と契を結ぬ、則姓は李、名は榮と云人なり。徐寧が云く、已にかくあらば、此張一をも車に乗べしと、四人同じく車に駕し、はや二三里ばかりも行し處に、徐寧再三時遷に問て、汝張一嚮に云し商人が姓名

しかば、漸黄昏に至て前面を望み見るに、時遷古廟の前の木蔭に、匣を卸して憩在ければ、湯隆徐寧に告ていはく、古廟の前に歇み居る漢子則彼賊なり。徐寧これを見るに、果して皮匣ありければ、恰も飛がごとく跑著け、終に時遷を揪へ、汝潑賊いかんぞ大膽に我甲を偸ぬるや。時遷が云く、汝叫ぶことなかれ、我此甲を偸しかども、今匣の内にはなし、汝等これを見給へとて、匣を披てこれを見するに、甲ははやあらざりしかば、徐寧大に怒て云く、汝死賊甲はいづれの處に遣しぬるや。時遷が云く、某は張一と申者にして、泰安州の民なるが、一人の商人我を頼で云けるは、老种經略相公、徐寧が家に所持したる金の甲を求たく思ひ候へども、徐寧肯て賣ず、汝もし是を盗取て來らば、一萬貫を與ふべしと云し故、某又李三といふ者を語うて、兩人同じく公の家に忍び入て、終に此甲を偸しかども、某其夜梁より落て脚を傷ひ、道を行こと叶ざるに依て、先甲を李三に持せて商客が宿に遣し、唯空匣計を留めぬ、若我を捉へて官府に訴へ給はば、我死すとても還すまじ、若又我を免して官府に訴へ給はずんば、我公共に行て再び甲を還し奉らん。徐寧これを聞て只顧躊躇決せざりし處に、湯隆が云く、徐公何ぞ躊躇し給ふや、我等兩人彼を監押して馳行き、宜しく甲を取復すべし、若甲なくんば、其處の官府に訟て決斷を乞んに、何の不可なることかあらん。徐寧其事に同じ、則時遷を

湯隆が云く、其甲は昔日某もこれを拜見せり、誠に天下に比類なき寶物なりしに、何れの處に置て偸まれ給ひしや。徐寧が云く、我常に失んことを恐れしゆゑ、皮匣の内に入れて、梁の上に懸置しに、何等の賊なるにや、能是を知て偸取ぬ。湯隆が云く、其皮匣は何皮を以て造らせ給ふや。徐寧が云く、紅羊皮を以て造れり。湯隆詐て大に驚て云く、我今朝城外の村に至て暫く憩居ける處に、一人の漢子皮匣を荷ひ來るを見て心中に恠み、則其者に問て此皮匣は何の用になすやと云ければ、彼答て、これは原甲を入しかども、今は只衣服を盛候と語りぬ、恐らくは此皮匣にもあらんか、我輩急に追蒐ば、まだ十分後れまじ。徐寧大に悅んでいはく、それは必ず我皮匣なるべし、若追著ば莫大の福尤も足下の賜なりとて、遂に湯隆と共に城外に馳出で、彼村中に至り、先一軒の客店に立寄り、湯隆主に問けるは、紅羊皮の匣を擔たる漢子を見給はずや。主答て、昨夜一人の男紅羊皮の匣を擔て、此村に來りぬ、定て此邊に旅宿を需て休つらん。湯隆これを聞て、徐寧に對して云けるは、徐公聞給へ、果して這人ありしを。徐寧、然る上は急に尋んとて、方々の客屋を尋し處に、一軒の客屋にて云けるは、其紅羊皮の匣荷ひたる旅人は、昨夜我が店に歇み、今朝こゝを打立ぬ、若用事あらば、跡を慕ひて尋給へ、未だ遠くは行まじ。湯隆これを聞て徐寧に催促し、ひたすら息をも繼ず追蒐

徐寧金甲と竊まるゝ
憂ろ図

這邊に旅宿をぞ求めけり。湯隆は城門の邊に宿を借りて、翌日早々城中に馳行ぬ。扨徐寧が家には盗人忍び入て、金の甲を偸去れりと騒動し、急に人を禁裏に馳て徐寧に告んとしけれ共、御門を入ること能ず、空しく黄昏まで待けるに、徐寧已に歸りしかば、妻甲を盗れたる次第、委しく語りける所に、徐寧未だ聞もあへずして、大に駭き、我此甲は、先祖相傳の寶物なり、我常に是を失んことを怕れ、乃ち梁の上に懸置て、他人に見せざりしに、知らず何等の賊來てこれを偸けるやとて、其夜は曾て眼をも合せず憂へけり。翌日妻徐寧に告て云けるは、此賊必定能甲のことを知りたる者ならん、宜しく人を傭て尋しめ給へ、若自ら騒動して人に知らるゝことあらば、却て不可ならんとて、夫婦ひそかに商議して居ける處に、湯隆來て徐公を訪ふと報じければ、徐寧自らこれを迎へて、客廳に至りけるに、湯隆先云けるは、某先父死去の後は、久しく他郷に流落て、這回も山東より來れり、徐公いよ〳〵恙なきや。徐寧が云く、我久しく消息をも通ぜざりしに、足下來て我を訪らひ給ふこと、誠にこれを感悦す、先路次の勞を休め給へとて、懇に饗應ぬ。湯隆故意徐寧に問て云けるは、徐公何故顔色に憂ありや。徐寧が云く、我心の憂最も大いなり。昨夜賊來て家傳の寶物を竊取ぬ。湯隆が云く、何等の寶物なるや。徐寧が云く、先祖代々相傳したる金の甲を竊れぬ、此故に我大にこれを憂ふ。

時遷金甲を竊去る図

跡に時遷急に樓上に登り、直に梁の上に伏して、暫く伺ひけるに、下女又燈を吹滅して歇みければ、時遷頓て梁の上に懸たる、甲匣を解取て、下りんとせし處に、妻此響を聞て下女を呼て云けるは、梁の上に響あるは何ぞや。時遷此時鼠の聲を假て叫びければ、下女これを聞て、同じく呼りて云けるは、夫人は何ぞ叫ぶ聲を聞給はずや、梁の上なるは鼠なり。此時妻心を安んじて已に睡りしかば、時遷竟に甲匣を盗取て梁を下り、再び後門の邊に至て暗に探聽けるに、内外靜にして人音さらにあらざりしかば、時遷後門を推開いて走り出で、城外の東路を過て馳けるに、天色猶五更の前後にて、人音さらに靜なり。已に四五十里馳ければ、東方漸曉なんとす。かゝる處に前面より一人の漢子來る。是則神行太保戴宗なり。時遷これを見て大に悅び、共に傍に立倚て、甲を盗取たることを語りしに、戴宗是を聞て云けるは、我其甲を拿て先に歸らん、汝は湯隆と共に跡より歸るべし。時遷此言に同じ、則甲を取出し、戴宗に與へしかば、戴宗これを取て時遷に別れ、遂に梁山泊へ歸りけり。時遷は只空匣を荷て、又東の路三十里ばかり行し處に、果して湯隆に行あひ、同じく人なき處に至て、盗の次第を具しく告ければ、湯隆が云く、汝今宵は此邊に旅宿を求て一宿し、則此甲匣を、故意主等が見る所に差置べし、明日は又二三里ばかり馳出て我が來るを待候へ。時遷是を聞て其議に同じ、則

を下して、道中に往來させ、專ら吉凶のことを探聽しめけり。扨又時遷は夜を日に繼で急しかば、日あらず東京に至て旅宿に歇み、翌日早々城中に入て、金鎗班の教師、徐寧が家を尋て前後の門を伺ひ見るに、後門の邊には一帶の高墻有て、兩間の樓屋あり。時遷良久しく脚路を相定め、傍の家に入て問けるは、徐教師は家に在べきや。主答て云く、定て朝廷に在て、未だ回らるまじ。時遷又問て云く、知らず何れの時回らるべきや。主が云く、黄昏に歸るべし。時遷是を聞て、且旅宿に回り、暗に時を窺て、再び徐寧が家の左右に至て、徘徊しける處に、はや晩て、此夜はしかも月光もなかりしかば、時遷高墻外の栢の樹に上て、內の動靜を窺ひ見るに、徐寧も已に歸れりと覺えて、前後の門はや闔しぬ。時遷又樹の枝より高墻の上に移て、後門の內に跳下直に厨の邊に忍び入て、遙に樓上を望見るに、徐寧妻に語て云けるは、明日は帝龍符宮に行幸あるゆゑに、我輩は五更の時分に、朝廷に伺候する間、下男下女は四更の時分に起して、用意をさせよとて、遂に床の上に打臥ければ、時遷是を聞て心中に想ひけるは、我宜しく五更の前後に手を下して、甲を盜取んとて、身を縮て藏居ぬ。扨彼下男下女等は各房間に入て歇みけり。漸四更の時に至りしかば、徐寧先起て下女を起し、用意已に調りし處に、徐寧は一人の僕を從へ、後門より出ければ、下女は燈を提て、門邊まで送りける。其

ければ、時遷領承して云く、果して此物あらば、某終に盗取て來るべし。湯隆が云く、汝もし彼甲を取て來りなば、我又彼を賺して山陣に上らしめん。晁蓋宋江同じく問て云く、汝何等の計を以て彼を賺し來らんや。湯隆近く進み寄てかくのごとしと低言しかば、晁宋これを聞て、大に喜悦なしける。此時呉用が云けるは、三人の頭領を同じく東京に馳せ、一人には火藥を買しめ、二人には凌將軍の家族を取しむべし。凌振是を聞て悅びける處に、彭玘座上に進み出で、宋江に告て云けるは、若又一人潁州に遣し、某が家族をも取しめ給はば、深く山陣の大恩を感ずべし。宋江が云く、賢弟心を安んじ給へ、我是を邀へ來し悅ばしめ申さん、兩賢弟速に書簡を修へ給へ。兩人の者これを聞て、頓て書簡を修ければ、宋江先楊林に彭玘が書簡を持しめ潁州に遣し、薛永を藥賣に打扮へ、東京の凌振が家に遣し、李雲を商人に打扮て、同じく東京に馳て、火藥を買しめ、又樂和と湯隆とを共に東京に馳て、薛永を助けしむ。既にして各支度調りしかば、時遷は先發て山を下りけり。

○呉用時遷をして甲を盜しむ

楊林、薛永、李雲、樂和、湯隆等五人の頭領は、遂に各山陣を離れて急ぎけり。翌日又戴宗

其表兄の姓名はいかん。湯隆が云く、某は先祖より軍器を打て營とす、此故に能連環馬軍を破る軍器を知れり、則鉤鎌鎗を用ひて破るときは、容易破るべし、某祖父より傳へたる畫圖あるゆゑ、鉤鎌鎗を造らんことは難からざれ共、只これを使ふこと能ず、これをよく使ふ者は某が表兄のみなり、今東京に在て金鎗班の教師をなす、這鉤鎌鎗の法は彼が家にのみ傳へ、先祖より誓て他人に敎ず、此故に數多の教師有といへ共、鉤鎌鎗の法を傳へたる人曾て一人もなし、是を使ふ時は或は馬上或は歩行、都て其法有て神妙奇特なり、もし彼を山陣に得ば、必定敵の馬軍を破るべしと、未だ言も終らざるに、林冲進み出て云く、金鎗班の教師と云は、徐寧がことにはあらずや。湯隆が云く、乃ち其徐寧なり。林冲大に嘆じて云く、誠に我これを忘れたり、彼徐寧が鉤鎌鎗の法は、天下無雙の奇藝なり、我東京に在し時、毎度彼と參會し互に武藝を較論して、交り極て睦じかりしなり。唯知らず今いかゞして彼を山陣に邀んや。湯隆が云く、徐寧が家には、先祖相傳たる金の甲あり、是世上に比類なき寶物なるゆゑ、常に皮匣の内に收め、居間の内の梁の上に懸置き、朝夕是を打守つて、己が生命と稱す、もしこれをだに盗出さば、彼必萬千里の路をも來るべし。吳用是を聞て、已にかくのごとくば、何の難きことかあらん、幸山陣に盗の高手あり、今次は此賢弟を用んとて、鼓上蚤時遷を呼で命じ

呉用が一計凌振を虜にする図

悦し、諸頭領とともに、第二の關に出て凌振を迎へ、宋江自ら凌振が絆を解て、諸人を責て云く、我先に汝等に命じけるは、恭しく禮を凌將軍に盡して、山陣に導き參せよと云しに、何故かく無禮をなすや。凌振この言を聞て心中に感じけり。宋江又自ら凌振が手を携て、聚義廳に至りしかば、彭玘も同じくこゝに出て、凌振に對面す。凌振は彭玘が頭領になりたるを見て、只口を閉て詞なし。彭玘再三凌振を諫て云く、晁宋兩頭領は天に替て道を行ひ、專ら豪傑を招き聚て、專ら只朝廷の御赦免を待給ふ、我輩已に當陣に至る上は、宜しく隨順して共に大義を結び給へ。宋江も又頻に諫言を加へければ、凌振、某山陣に留つて長兄等に從んは易けれ共、只恨らくは眷族都て東京にあり、若我山陣に隨順せしと、一旦都に洩聞えば、眷族悉く誅戮を蒙るべし。晁蓋が云く、將軍心を安んじ給へ、我日を限て貴族を山陣に邀へ取ん。凌振が云く、長兄果して此のごとくんば、身を終る迄此恩を忘るまじ、と感謝す。翌日晁蓋、宋江、吳用幷に諸頭領皆聚義廳に相聚りて、連環馬軍を破らん計を議しけれ共、更に良計較もなかりし處に、金錢豹子湯隆進み出て云けるは、某不才たりといへ共、一計を獻ぜん、彼連環馬軍を破んには一つの軍器あり、某が一人の表兄、極めて此軍器を使ふ、若彼を以て攻させなば、立地に破るべし。吳用問て云く、賢弟いかなる軍器を用んと欲ふや、又

踏壞しければ、軍卒共慌れて凌振に告ける。凌振大に怒り、忙しく鎗搶取て馬に乗り、一千餘人を引て急に追來りしかば、李俊張横兵を引て逃走る。凌振已に蘆葦深き水邊に追至て、水面を見るに、四十餘艘の小船一行に相連ね、一艘の船に凡四十餘人の水軍あり。李俊張横はや船の上に跳乗て、故意船を漕開ず、一向猶豫して在ければ、凌振兵に下知して、水中に赶入り、遂に多くの船を奪ひ取て官軍盡く船に取乗り、李俊張横が船を望で追來る。對岸の上には、山陣の大將朱同雷横、空しく喊の聲を發し、金鼓を打鳴す。凌振は三軍と共に船に乗り、漸江心に至りし處に、朱同雷横對岸の上に在て是を見、はや時分は好ぞとて、相圖の鑼を打鳴しければ、水底より三百餘の水軍潛り出で、彼官軍等が乗たる船底の屑を抜けるに、水忽ち滾入て、諸船悉く水中に沈入る。凌振此光景を見て大に恐れ、急に漕回さんとしけれ共、はや船中水滿々と滾入て、同じく水底に沈みしかば、阮小二これを待請て、終に凌振を水中にて捉へ、對岸の上に拖り上けるに、岸上の兵はやくも是を綁めけり。總て水中にて生捕し官兵二百有餘人なり。其外の官軍共は水に渰れ死し畢ぬ。尚幾何の官兵あつて這々命を脱れ、直に本陣に逃歸り、呼延灼に斯と告ければ、是を聞て大に悔い、急に兵を引て水邊に打出しかども、敵船は已に對岸に至りしかば、更に益ぞなかりける。晁蓋宋江は凌振を活捉たると聞て大に喜

手至て、三様の炮を設け、親方の陣柵を打破んと圖る、宜しく是を防ぎ給へ。呉用が云く、これ未だ怕るゝに足らず、我山陣の四方は都て水泊港汊甚だ多し、況や宛子城は、水離をるゝ事極て遠ければ、縦ひ飛天火炮を放つとも、奚ぞ能城邊に至らんや、且鴨嘴灘の陣を棄て彼が炮を試み、其後別に計を商議すべしとて、其日宋江、呉用、鴨嘴灘の陣を棄て諸將と共に山陣に上り、則晁蓋公孫勝等と、聚義廳に會聚して、猶計を議しける處に、忽ち山下に炮の聲大に響て、一連に三回放ちぬ。二つの炮は水中に打入れ、一つの炮は鴨嘴灘の陣を打破ぬと聞えしかば、宋江大に驚き、心中深くこれを憂へ、諸將も同じく色を失て驚懼せり。呉學究が云く、若誰にても凌振を誘引して、水邊に至らば、計を以てこれを生捕り、然後敵を破るの良計を議すべし。晁蓋が云く、李俊、張横、張順、阮小二、阮小五、阮小七等に船に漕しめて、かくの如くかくの如く行せば可ならんや。呉用が云く、此計最も當れりとて、李俊等六人に號令を傳へければ、六人の大將計を請て二手に分る。李俊、張横は先四五十人の水軍を引て、二艘の快船に乗り、蘆葦深き處を過て、對岸を望で漕行き、其次には張順と三兄弟の阮家、四十餘艘の小船を漕て、救應をなす。扨かの李俊張横は已に對岸に至て涯に上り、直に敵の炮を設けたる處に馳て、一度に咄と喊の聲を發げ、炮架等盡く

某聞く東京に炮の上手あり、則轟天雷凌振と云者なり、彼能大炮を放て、十四五里の間を飛しむ、炮子の至る所天崩れ地陷る、山倒れ石裂る、若此凌振を得て賊を攻ば、必ず勝を取事旦夕にあらん、況や此凌振は、深く武藝に通じ弓馬に熟練せり、若天使京に歸り給はゞ、高太尉に此事を訴へ給ひて、早々彼を遣し戰を助けしめ給へ。勅使これを領掌し、翌日遂に別れ、不日に京に歸て高俅に見え、呼延灼が凌振を索め、炮を打しめんと願ふことを、詳に語りければ、高俅則人を馳て凌振を招く。此者は原燕陵の人にて、宋朝に雙なき炮の上手なり。殊に武藝も亦名譽の達人なれば、人是を稱せずといふことなし。此とき凌振殿帥府に至て高太尉に見えしかば、高俅委細を語りて、急に發足すべきよし命じけるに、凌振謹んで領掌し、やがて諸色の炮を車に載て、百餘人を領し、翌日東京を打出で、遂に呼延灼が陣に至りしかば、呼延灼韓滔これを迎へて對面す。凌振先水陣の遠近路數を、一々詳に問ひ、險阻の地を撰て三樣の炮を設くべしとて、豫め其用意を催す。第一は風火炮、第二は金鞍炮、第三は子母炮とて、各利多き炮なり。已に用意調りしかば、是を以て敵の水陣を打んとぞ圖りける。扨宋江は鴨嘴灘の陣中に在て、軍師吳用と官軍を破ん計を議しけれ共、未だ施さん計もあらざりし處に、一人の探見來て報じけるは、東京よりまた新に凌振と云炮の上

て、養生なさしめけり。扨呼延灼は大に勝を全うして、本陣に歸りければ、三隊の諸將盡く來て各功を獻ず。活捕の軍士五百餘人、奪取し戰馬五百餘疋、其外得たる處の首は、數を知ずと記せり。呼延灼大に悦び、卽日飛脚を京に奉つて、捷軍を報じ、重く三軍を賞しけり。扨高太尉は呼延灼が表を得て、心中甚だ悦び、翌早朝帝へ表を奏しければ、皇帝御感斜ならず、御酒一百樽、錦袍十重、幷に賞錢十萬貫、これを三軍に賞すべきよし、高太尉に勅命有ければ、高太尉は殿帥府に回り、勅使を選で、呼延灼が陣に遣しけり。呼延灼は勅使到著と聞しかば、韓滔と共に諸將を引いて、二十里外に出で、恭しく勅使を迎へ陣中に至り、謹んで恩を謝し、賞を受て、勅使を豐に饗應けり。呼延灼又勅使に對して云けるは、頃日の戰に五百の賊を生捕しかども、賊首宋江を生捉て後、共に京に引んと欲し、尙陣中に籠置ぬ。勅使問て云く、彭玘先鋒は何故賊に捉はれしや。呼延灼が云く、彼頻に宋江を捉へんと欲して深入せし故、却て敵に捉れぬ、今群賊等鋭氣を減したれば、必定來り戰ふこと有まじ、某再び兵を分つて攻行き、終に賊首等を生捕て、梁山泊を拂ひ淸むべし、然れ共只恨らくは、山陣の四方都て水泊にして、進行ん路なし、遙に賊の寨柵を見るに、若大炮を以てこれを打ば、忽ち打破て全き勝を得べし、我軍馬尤も能戰ふといへども進ん道なき故、今更急に破らんこと頗る難し、

り伏勢を出して、敵の馬軍を攔當遂に宋江を救ひけり。宋江は這々水邊に至りけるに、李俊、張橫、張順、阮小二、阮小五、阮小七等六人水軍の大將、忙はしく兵船を揃へて、宋江を船に乘しめしかば、諸大將も同じく船に乘て漕出す。彼連環馬軍、直に水邊に趕至つて、散々に射けれ共、船の上に傍牌多かりしかば、傷ふ者もなかりけり。諸の兵船已に鴨嘴灘に至て、岸に上り、水陣の内に兵を屯して、討れたる者を算ふるに、半に過ると記しけり。然れ共幸に諸頭領の面々は戰死もなかりしかば、宋江是を悅びぬ。斯る處に、石秀、時遷、孫新、顧大嫂等慌しく逃來て、宋江に告けるは、敵の歩軍大勢攻寄て店を打毀て、某等も已に活捉れんとせしか共、倖に快船來て救ひしゆゑ、苦き命を脫れしなり。宋江一々これを撫慰して、諸大將の內、箭疵を受たる人を算ふるに、乃ち林冲、雷橫、李逵、石秀、孫新、黃信等六人なり。士卒の內矢に中りたる者は其數を知るべからず。晁蓋此よしを聞て大に駭き、吳用公孫勝等と共に山を下りて水陣に至り、則軍の次第を問けるに、宋江は只憂愁の顏色、不快なりしかば、吳用諫て云く、長兄何ぞ憂ひ給ふや、勝負は兵家の常事なり、宜しく心を慰め給へ、別に良計を以て連環馬を破るべし。晁蓋此時號令を水軍に傳へて、牢く水邊を守らせ、則宋公明を山陣に請て暫く休息あらしめんとせしか共、宋江敢て山陣に上らず、只帶傷の大將のみ先山陣に送

ときは、箭を放てこれを攻め、もし近き敵に遇ときは、鎗を入てこれを突べしと計を定め、一人一己の勝を用ず、一連一環の勝を取る。則三千の連環馬軍を分て一百隊とし、又五千の歩軍を後に備へて救とす。呼延灼と韓滔とは、後陣を押へて、兵を三面に分け、其便機に依て宜しく戰ふべしと、豫め用意をぞ催しけり。翌日宋江又五隊の軍馬を前に進ましめ、後軍の十將は兩路に備へ、又伏兵を分て左右に設く。此とき五隊の前軍は、都てはや陣勢を列ねり。中には秦明あり、左には林冲一丈青あり、右には花榮孫立あり。宋江も又十人の大將を引て、已に至り、重々に人馬を備へて敵陣を見るに、約莫一千計の歩軍ありて、只顧鼓を擂喊を發するのみにして、出戰ふ者一人もあらざりけり。宋江これを見て心中に疑ひ、暗に號令を傳て兵を先退けんとせし處に、敵陣の内に炮の聲大に響き、彼一千の歩軍忽ち兩路に分れて、三隊の連環馬軍出來る。左右には射手を揃へて散々に射さしめ、中には盡く長鎗の軍士を設たり。宋江是を見て大に驚き、急に三軍に下知して、箭を射しめしか共、三千騎の連環馬軍三十騎づつ一連になつて、四方八方より夾んで攻しかば、宋江が五隊の前軍、大に亂れて奔走す。中軍の人馬も又是を攔當こと能ず、同じく鋒を倒して逃走る。宋江は十人の大將を左右に隨へて、慌て忙き走り行處に、一隊の連環馬軍、はや近々と赶上て已に危く見えし時、李逵楊林左右よ

受る上は、早々頸を延て縲に就べきことなれ共、只一命を害せられんことを恐れ、自ら罪を負て鋒を交へ、敢て將軍の威風を犯しぬ、願くは罪を免し給へ。彭玘が云く、某もとより宋將軍の仁德を聞及けるに、果して其言虛しからず、若彌某が一命を助け給はゞ、歸京の刻宜しく帝に奏聞して、將軍の忠義を訴ふべし。宋江が云く、某等諸の兄弟共都て心を一つにして、朝廷の御赦免を待奉る、若萬一恩赦を蒙らば、生を忘れて國に報い、死を捨て忠を盡すべし、秋毫も謀叛の企あらざる間、將軍いよ〱吹噓を垂給へとて、即日彭玘を山陣に送て、晁天王に遇しめけり。扨も呼延灼は兵を收めて陣を取り、則韓滔と商議して云けるは、いかなる計を以て梁山泊を攻破らんや。韓滔が云く、明日總勢を一つに合せて、緊しく攻戰はゞ、必定勝を得べし。呼延灼が云く、足下の言我心に合へり、我宜しく計をなすべしと、大に領掌しけり。

○呼延灼連環馬を擺布す

呼延灼は先鋒の意に隨ひ、宜しく人馬を擺布べて、敵を破る計をなすべしとて、諸軍に號令を傳へ、三千疋の馬軍を一擺とし、但し三十匹ごとに一連として、鐵環をつけ、若遠き敵に遇

一丈青双刀と弄く
大小呼延灼と戦図

丈青終に敵すること能ず、馬を回して本陣に逃來る。呼延灼後に隨つて趕蒐しかば、孫立鎗を撚て相迎へ、兩將勇を奮て攻戰ふ。此時宋江も十人の大將を引て陣前に至り、諸頭領と倶に兩將の戰を遠見す。扨此兩人の大將は各有名の勇士なれば、互に祕術を盡して精神を揮ひ、戰已に三十餘合に至れども、勝負さらに分たず。宋江是を見て、只顧感歎止ざりけり。時に官軍の陣中より、韓滔大軍を引て、一度に咄と寄來る。宋江是を見て左右に下知しけるに、十人の大將幷に林冲等四陣の大將、兩路に分て緊しく夾で攻しかば、呼延灼も同じく、人馬を分て迎へ戰ふ。宋江が兵共勢に乘じて擊しか共、未だ全き勝を得ざるはいかんぞなれば、官軍共は都て馬に甲を著せ、能箭を防で進むゆゑ、宋江が人馬は、動もすれば跑立られて、討るる者多かりけり。宋江これを見て、且金を鳴し、三軍を收めければ、呼延灼も又兵を二十餘里退けて、陣を堅固に列ねける。宋江は兵を引て、西山の下に屯しぬ。此時軍卒等彭玘を綁て引出しければ、宋江自ら彭玘が絆の索を解て帳中に入れ、賓主席を分て、座すでに定りけるに、宋江先身を翻して、彭玘を拜しければ、彭玘急に拜を還して云く、某は擒となりし敗軍なれば、理まさに死につくべき處に、將軍却て大禮を施し給ふはいかん。宋江が云く、某等衆人は、身を容んずる所なき故、暫く梁山泊に籠城して、難を避禍を脱る、今已に天兵を

だ勝負を分たず。第三陣の大將小李廣花榮大に呼つて云く、林將軍暫く歇み給へ、我これを活捉んとて、馬を進めて馳出ければ、林冲は呼延灼を棄て引退く。呼延灼は林冲が強勇なるを見て、敢て追はず、同じく馬を勒へて本陣に引回しぬ。此時天目將軍彭玘、馬を陣前に乘出して、花榮を罵つて云く、汝反賊何ぞいふに足ん、我と三十合戰つて勝負を決せよ。花榮大に怒て、彭玘に搠蒐る。彭玘これを迎へて馬を交へ、戰已に三十餘合に至て、彭玘頗る疲れしかば、呼延灼又馬を馳て跑來り、遂に彭玘に替つて、花榮と鋒を交へ、戰未だ三四合にも及ばざるに、第四陣の女大將一丈青扈三娘、已に至て大に呼り云けるは、花將軍先歇み給へ、我一戰を助んと、馬を進めしかば、花榮は是に讓て引回しぬ。彭玘又跳來つて一丈青と戰ひける處に、第五陣の大將病尉遲孫立、已に至て兩人が戰を見るに、はや二十餘合に及べども、いまだ雌雄を分たざりしが、一丈青忽ち馬を回して迯ければ、彭玘急に追かけ、漸近くなりし所に、一丈青暗に鉤索を投て、彭玘を馬より下に鉤落しければ、孫立急に兵を馳てこれを生捉けり。呼延灼是を見て大に怒り、鐵棒を揮て一丈青に打て蒐る。一丈青是を迎へ、十合計戰しかば、呼延灼只一打と大に焦燥て打し處に、一丈青兩刀を交へて鐵棒を隔住ければ、響に應じて火光を撥と散しけり。呼延灼是を見て益怒り、又鐵棒を擧て打んとせし處に、一

ら十人の頭領を引て、後陣より進む。則左軍の五大將は、朱同、雷横、穆弘、黃信、呂方なり。右軍の五將は、楊雄、石秀、歐鵬、馬麟、郭盛等なり。水軍の大將は、李俊、張横、張順、阮小二、阮小五、阮小七等なり。李逵楊林兩將は步軍を引て兩路に埋伏す。既にして秦明はや、兵を引て山を下り、要害の地を擇で、陣勢を列ねたり。此時冬の天氣たりといへ共、幸に風和ぎ日暖にして、春の天氣と等しかりければ、三軍寒に苦むことなかりけり。翌日官軍の先鋒、百勝將軍韓滔、人馬を率し已に至り、秦明と其間近く陣を對す。此夜は先軍馬を休めて戰ず。次の日兩軍互に攻鼓を打て、喊の聲山谷を響せけり。宋江が陣中より、霹靂火秦明馬を躍せ棍を横へて、陣前に進み出しかば、寄手の陣中よりは、百勝將軍韓滔鎗を撚つて跑出で、大に秦明を罵つて云く、天兵已に至りぬるに、汝何ぞ馬を下りて、降參せざるや、若我兵を抗拒ば忽ち山陣を踏崩して、汝が首を街に示衆ん。秦明これを聞て大に怒り、棍を揮て韓滔に打て蒐る。韓滔鎗を擧てこれを迎へ、戰已に二十餘台に至り、韓滔漸疲れて逃しかば、中軍の總大將軍呼延灼已に至て此體を見、馬を飛せ棍を輪して、陣前に馳出る。此時又第二陣の大將豹子頭林冲これを見て、飛がごとくに跑出で、直に呼延灼を迎へて相戰ふ。此兩將もとより萬夫不當の勇士なれば、互に威を振ひ勇を闘んで、戰已に五十餘台に至れ共、未

五編　卷之四十七

○高太尉大に三路の兵を興す

斯て呼延灼并に先鋒の二將、各州に歸て軍馬を催し、半月の間に都て調りしかば、呼延灼より出陣の事を、太尉高俅へ候ひけるに、高俅又二人の軍官に酒肴を持しめ、呼延灼か陣中に遣し、用意調る上は心次第早く出陣有べし、且此御酒殽肴を以て、三軍を賞する微意を表す、と申送ければ、呼延灼使者に對面して厚誼を謝禮し、早速進發して、梁山泊へ攻來る。山陣にははや此事聞えしかば、晁蓋、宋江、吳用進み出て、諸頭領衆皆聚義廳に集會し、計を商議す。時に吳用進み出て云けるは、我聞く呼延灼は河東の名將、開國の功臣、呼延贊か嫡派の子孫にて、文武兩全の大將たれば、定て軍中にも勇士多かるべければ、等閑の敵にあらず、某愚意を以てこれを量るに、先に力を以て敵し、後に智を以て破らば可ならん。宋江是を聞て其議に服し、則霹靂火秦明に第一陣を討しめ、豹子頭林冲に第二陣を討しめ、小李廣花榮に第三陣を討しめ、一丈青扈三娘に第四陣を討しめ、病尉遲孫立に第五陣を討しめ、宋江は自

して、日限を延引することあらんか、太尉宜しく是を察し給へ。高俅が云く、若衣甲全からずんば、御藏の衣甲を取出して與ふべし、只急に日を擇んで出陣有べし。呼延灼命を奉りて大に悅び、則鐵甲三千領、并に馬甲五千領、其外鎗三千、刀一千、炮五百、及び弓矢若干を乞取て、已に高太尉を辭しければ、高俅又三千の戰馬を以て餞に送り、早々賊を打平げ、速に歸陣有べしと命じける故、三人の大將終に太尉高俅に別れ、各先本國に歸りて、軍馬を催しけり。

兼備の大將と見えけり。抑此人兩條の銅鞭を使うて、神妙を得たりとて、綽名して雙鞭將と呼とかや。高俅翌日早朝帝闕に召具して、徽宗天子の天顏を拜せしめければ、則兵馬指揮使の綸命下り、踢雪烏騅と云一日千里を行く名馬を賜ふ。此馬は渾身墨錠の如く黑く、四蹄白雪のごとく白きを以て名とす。呼延灼天恩を拜謝して、再び殿帥府に至れば、高俅軍事を談話し、呼延灼に向ひ、將軍此度誰を以て先鋒たらしめんや。答て云く、陣州の團練使、姓は韓、名は滔と云者あり、原東京の人にて、武擧の出身なり、一條の棗木の槊を使ひ得て、人百勝將軍と呼ぶ、是を正先鋒たらしめん、又外に潁州の團練使、姓は彭、名は玘、是も原東京の人にて累代將門の子なり、一口三尖兩刃刀を使うて、天目將軍と呼る、此人を副先鋒たらしめん、凡此兩人樊噲の勇力あつて、武藝衆人に秀でたれば、軍利眼前たらんと。高俅大に悦び、速に此兩人へ急使を馳て、殿帥府に呼寄ければ、不日に來て高太尉と呼延灼にまみえけり。高俅此度の軍務を申渡しけるに、兩將畏つて領掌す。高俅三將に問けるは、各三路の人馬總て幾何の勢有や。呼延灼答て、三路の人馬約莫一萬に足べし。高太尉が云く、既に然あらば、足下等自己に歸て、軍馬を催し、各速に出陣有べし。呼延灼が云く、某等三路の人馬は原來健にして、能物馴たる者共なれば、これを催すに易し、只恐らくは衣甲全からず

にも已に濟州の官軍を害し、其後又江州を鬧し、無爲軍を討ち、今又高唐州を乘取て、若干の軍民を殺し、城中の金銀米錢は悉く奪取て、山陣の用に供へ、近々大軍を催して、京を侵さんと圖るの聞えあり、若急にこれを滅し給はずんば、彌賊勢を養て大敵となるべし、伏して望らくは、陛下明かにこれを察し給へ。帝叡聞有て大いに驚せ給ひ、則高太尉に命じ軍馬を調へしめ給ふ。高太尉また奏して云く、彼尤も賊威を振ふといへども、いまだ大軍を差向るに足ず、臣今一人の勇士を薦めて賊を撃しむべし。帝又勅命有て宣ひけるは、卿眼力をもつて薦ん者は、定めて文武兩全の名將たらん、速に其名を報じて、兵を起さしめよ。高俅奏していはく、此者は則河東の名將たりし、呼延贊が玄孫にして、呼延灼と申者なり、原來萬夫不當の勇あり、彼汝寧郡の都統制となつて、手下に又精兵多し、若彼に兵馬指揮使の職を授け給ひて、梁山泊を攻させ給はゞ、暫時に山陣を掃ひ淸めて、叡慮を安んずべし。帝叡聞あつて大に悅び、頓て勅書を以て呼延灼を朝廷に宣給ふ。此日呼延灼は汝寧郡に在て公事を辨じ居ける處に、朝廷より勅書到來すと報じければ、呼延灼急に城外に出て勅使を迎へ奉り、直に統軍司に至て勅書を拜讀し、即日用意を調へて天使とともに京へと急しかば、日あらず東京の師殿府に至て、高太尉に見えける處に、高俅悅んで、呼延灼が人品を見るに、誠に一表の人物、文武

生を伺ふに、猶微し氣の絶ざる所有ければ、李逵心中にこれを喜び、遂に柴進を籃の内に扛載、己も倶に乘て、彼鈴索を動しける處に、諸人索を取て一度に拽上しかば、宋江是を見て大に悦び、先柴進を少しづつ溫め、尙漸々火氣を增て氣力を引立養育を加へ、終に車に載て梁山泊へ送りけり。諸頭領已に高廉が家に亂れ入り、眷族悉く砍殺し、叉金銀米錢を搜し取て、車に積、三軍都て高唐州を離れ、梁山泊へ馳回る。終路秋毫も民を犯さず、一度に咄と凱歌を唱て、不日に山陣に至りしかば、晁蓋を始として、衆皆出迎て大に賀し悅びけり。此時柴進は病を推て廳上に出で、深く諸頭領に謝しけり。此度山陣に柴進湯隆を得て、彌光を增し、則酒宴を設け飮酌を催し、各興に入けり。扨東昌寇州兩所の官府には、高廉已に殺されたると聞えしかば、急に表を具へて京に使者を馳せ、軍の次第一々詳に朝廷に奏聞す。且叉高唐州の敗軍共悉く京に上て、此事を訴へ奉る。此時太尉高俅は姪高廉が殺されたるを聞て大に怒り、翌日五更の時分朝廷に至りし處に、帝紫宸殿に出御ありしかば、文武百官袂を連ね左右に拜候す。時に殿頭官高らかに呼つて、事あらば列を出でて奏聞せよ、事なくんば簾を捲て退去せよと云ける時、太尉高俅百官の內より進み出て奏しけるは、今濟州梁山泊には、兩人の賊首晁蓋宋江妄に衆を聚て山陣を守り、專ら隣國を犯し兵粮を奪ひ、擅に賊威を振ふ、向

して、等閑の人にあらざるゆゑ、刑罰を行ふに忍びず、唯僞て病に托ける處に、次の日又知府より柴進を引出せと命ぜし故、某又詐て柴進ははや病死せりと申けるに、專ら合戰の事に間なく、知府又これを問ざりけり、某知府が搜さんことを恐れ、昨日柴進が頸枷を除き、井の内に藏し置り、只彼が今日の存亡いかゞぞや知らず。宋江是を聞て大に驚き、忙しく蘭仁とともに其所に至り見るに、牢後にある枯井にて、内を見るに、只暗々と黒くして、其深淺幾何たることを知べからず。蘭仁に命じ、索を枯井に落し入れて、其深さを探せけるに、約莫八九丈あまりなり。宋江これを見て云けるは、柴大官人は必定此内に死し給ひしならんとて、頻に愁涙を催しけるを、吳用諫めて、長兄先哭き給ふな、井の内に人を入て、其存亡を見せしめ然るべしとて、則左右を顧み、誰かある此枯井に入て、柴大官人の存亡を見んやと、未だ云も終らざるに、黒旋風李逵大に呼つて、我肯て井に入て柴大官人の死生を見屆くべし。吳用が云く、汝入ば尤も可ならんとて、大いなる竹籃の大丈夫なるに籤を著け、大いなる鈴二つを結附け、李逵を此上に座せしめ、頓て井の内に放ち入けるに、漸井の底に至りしかば、李逵竟に籃の内より扒出て、一向四方を探りける處に、果して一個の人に探り著りぬ。柴大官人柴大官人と呼ながら、推動しけれ共、更に答應なかりしかば、李逵手を以て柴進が口に著て、死

呪語を念ずれば、足下に一片の黒雲起り、冉々高廉を引包で空に騰り、直に山頂にあり。公孫勝急ぎ此處に乘切來て、則馬上に寶劍を揮り、口中に呪語を唱へ、大に一聲一喝せしかば、高廉雲中に在て神通を失ひ、倒に地に墜來て、山より足下迄轉び來る處を、揷翅虎雷横朴刀を横へ馳寄り、高廉を斬て兩段となし、頓て首を取けり。憐むべし高廉は半世の英雄にして、一時に南柯夢裡の人と化しぬ。宋江は高廉已に討れしと聞き、三軍を引て城中に進み入り、堅く諸軍に觸て民を撫しめ、秋毫も犯すことなかりける。宋江先大牢の邊に馬を進め、牢中の罪人を悉く出さしめ、其内を尋ねしかども、柴進はみえず。只柴進が眷屬共は、都て別牢の内に在しかば、先是を救ひ出して、再び柴進を方々搜しけれ共、曾て消息知れざれば、宋江大に憂へ、我かく人馬を起して、此城を攻たるは、まつたく柴進を救はんが爲なるに、柴進のみ牢中に在ざるは、必定殺されたると覺えたりとて、兩眼に涙を浮めしかば、吳用が云く、我猶これを尋みん、先悲み給ふことなかれとて、頓て牢中の節級等を此彼より引出し、柴進が死生を問ければ、其内一人が云けるは、某は當牢の節級藺仁と申者なり、前日知府が命を受て、柴進を預り、もし何等の事出來らん時は、早速柴進が命を害すべしとの事なり、三日以前にも知府又刑罰を加へんとて、柴進を引出せと命じけれ共、某熟柴進が動靜を看るに、相貌端嚴に

○黒旋風穴を探て柴進を救ふ

宋公明は此時花榮秦明兩人を引て、戰も交へず、小路を過て逃走る。高廉大に罵て云く、宋江賊首何國に逃さんやと、喊き叫んで進み來る處に、石炮の聲大に響しかば、高廉心を疑はしめ、遂に宋江を棄て引回さんとせし處に、兩邊に又金鼓の聲大に起て、左に呂方、右に郭盛雙方より突て出で、都て五百餘騎を引て攻しかば、高廉戰ん氣力なく、急に路を索て逃けるに、はや兵過半討せ、高廉大に駭き、遂に城下に至て城を見るに、城中には都て梁山泊の旗號を、風に飄して立ければ、高廉甚だ仰天し、援兵を尋ねて左右を顧るに、只一人の援兵もあらざれば、高廉限りなく後悔し、急に敗軍を收めて、徑路を馳行十里ばかりに至りし處に、山の後より一彪の兵突出で、當先に馬を進むるは病尉遲孫立、道を攔りて呼つて云く、我老早此に在て汝を待侘ぬ、早く馬より下て絆に就け。高廉是を見て益恐懼し、再び引回らんとせし處に、又一彪の兵馳出るは、美髯公朱同諸勢を引て、高廉速に縛を受よと呼り、前後より挾で攻ければ、高廉今は士卒皆討れ、馬鞭等く棄て、山の上に馳上らんとせし處に、雷横横合より突出で、步軍に命じて山に赴上らしむ。高廉必死の時に及で、慌忙き眼を閉ぢ、頻に口中に

日敵に破られ、今更迎へ戰はん計なし、只能急を告て援の兵を乞んとて、忙しく書簡を修へ、兩人の統制官に命じ、先東昌寇州兩所に馳けるに、兩人の統制は此日城門を開いて斬て出で、直に西を望で走り行く。梁山泊の兵これを見て、急に追討せんと進みし處に、軍師吳用三軍に下知して云けるは、必ず彼を追ことなかれ、我宜しく計を以て計に就ん。宋江問て云く、軍師はや良しき計ありや。吳用が云く、今城中には將寡く兵乏し、このゆゑに今人を馳て援兵を隣國に求む、我此便機に乘じて一つの計あり、親方の兵兩彪を僞りて隣國の援兵に假せ、終路再三是を戰はしめば、城中より此光景を見、必ず兵を出して戰を助くべし、此時暗に人馬を分て城を乘取しめ、又高廉を小路に引入れ、終にこれを生捉べし。宋江是を聞て大に悅び、卽日戴宗を梁山泊に囘して、兩彪の兵を取しめ、則是を假て、兩國の援兵となしにけり。扨高廉は每夜城中に烽火を揚させて、援兵の至るを待ける處に、ある日宋江が陣中、戰はずして自ら亂れしかば、城兵どもこれを見て、忙しく高廉に告けるに、高廉急に衣甲を著し、自ら城樓に上り、城外を臨み見るに、兩國の援兵攻鼓を鳴して左右より攻來りしかば、宋江が人馬大に亂れて奔走す。高廉これを見て、援兵はや到りしぞ、戰を助けて宋江を活捉よとて、頓て正手の門を押開き、主從突て出で、直驀に宋江が本陣に押懸けり。

に沈で、天色看々昏しかば、諸頭領先兵を領して、各四方に馳て埋伏す。扨宋江、呉用、公孫勝、花榮、秦明、呂方、郭盛等は、三軍を引て坂の上に登り、暗に敵の寄るを候ひけり。此夜高廉果して敵の疲を料り、宜しく夜討して陣を劫ふべしと、三軍を催し、彼神兵等には各器の内に硫黄焔焇等の火藥を藏さしめ、二更前後に至て城外に打出で、當先には三百の神兵を進ませ、高廉は自ら三千餘騎を引て後より進み、漸敵陣に近附しかば、高廉馬上にあり、妖法を行ひけるに、忽ち黑氣天に沖りて妖法大に起り、砂を飛せ石を走せ土を播塵を揚ぐ。三百の神兵各火藥に火を著て一向陣中に投入し處に、公孫勝高き處に上て寶劒を揮ひ、咒語を誦へ法をなしければ、空陣の内俄に刮刺々々と響て、霹靂大に起る。三百の神兵是を見て、急に退んとせし處に、空陣の内に又猛火起て光焔半天に飛び、四方明亮なること恰も白晝のごとし。此時四面の伏兵一度に竝び發し、引包で擊しかば、三百の神兵、一人も漏さず討取けり。高廉これを見て大に驚き、僅三十餘人を引て、城中に逃入んとしける時、豹子頭林沖馬を飛せて追來り、散々に擊しかば、高廉は只五六騎を領し、這々城中に逃入けり。此夜或は討れ、又は捉はれたる官軍、其數を知べからず。翌日又宋江兵を引て、城を重々に取圍み、水をも洩さず四面より攻ければ、高廉益駭き、暗に心中に想ひけるは、我多年學び得たる妖術、料ず今

これを見、早くも寶劍を拔て、呪語を誦へしかば、忽ち一道の金光生じ、敵陣の中に沖入し處に、彼獸共此光を見て卽時に神通を失ひ、盡く皆紛々として地に墜けり。諸軍是を見るに、都て白紙を以て造りたる豺狼虎豹なり。此時宋江勢に乘じて、三軍を進め緊しく散々に攻しかば、城兵數多討れて、右往左往に敗走し、遂に城中に逃入けり。梁山泊の兵共勝に乘て城下まで攻寄けれども、城中より矢石雨のごとく打出しければ、宋江急に鉦を鳴して兵を收め、且要害の地を擇んで陣を取り、則ち諸頭領を聚めて、其功を論ずるに、各大いなる勝を得たり。宋江呉用并に諸豪傑、都て公孫勝が神功道德を感歎せり。翌日又宋江兵を分て、城の四面を圍せ、緊しく一齊に攻さしむ。公孫勝則ち宋江呉用に對して云けるは、昨日敵の一陣を破りしか共、彼三百の神兵恙なく城中に引入しかば、高廉が人馬猶頗る尖し、今日此のごとく緊く城を攻ば、彼必定我軍馬の疲を料り、今宵夜討に來て陣を劫ふこと有べし、天色已に晩なば、豫め兵を分て四方に伏置き、此處には空陣を設け、三軍に號令を傳へ、霹靂響て陣中に火起るを相圖と定め、四方の伏兵一度に進せ、前後左右より取圍で擊しめば、只此一戰に全き勝を得べし。宋江呉用この計を聞て其義に同じ、いよ〳〵三軍を進めて、城を緊く攻させ、未の下刻に至て、遂に兵を陣中に收め、三軍に酒食を賞して、氣力を養せ、紅日漸西

宋江が陣中より、大將十騎進み出て、兩邊に相分る。左の方には花榮、秦明、朱同、歐鵬、呂方等、馬を竝べて相勒へたり。右の方には林冲、孫立、鄧飛、馬麟、郭盛等の五將、同じく鋒を竝て勒へたり。中軍には宋江、吳用、公孫勝馬を勒へて敵陣を望み見るに、門旗の下より二三十人の官軍共、知府高廉を圍んで、陣前に進みけるに、知府先大音聲に罵つて云く、汝水泊の盗賊等若戰んと欲ふ心あらば、唯一戰の內に勝負を決せよ、必ず走ることなかれ。宋江是を聞て大に怒り、誰かある彼活捉と呼りしかば、小李廣花英鎗を撚り、馬を躍せて突出る。高廉が陣中よりは一人の上將薛元輝と云者兩刀を揮て跑出で、直に花榮を望で斬てかゝる。花榮も又鎗を擧て相迎へ、兩將陣前に在て、各勇を奮ひ、戰已に二十餘合に至りし處に、花榮忽ち馬を回し迯しかば、薛元輝計とは知ずして、同じく馬を飛せ刀を舞して趕來る。花榮これを見て、暗に弓箭取て打搭へ、暫し挽滿て漂と放ちければ、其箭あやまたず、薛元輝が喉に中て馬より下に射落したり。こゝに於て兩軍喊き叫で入亂れ、功を爭ひ死を捨て攻戰ふ。高廉は馬上に在て、元輝が討れたるを見て大に怒り、即ち口中に咒語を念じ銅の牌を敲しかば、神兵隊裡より驟に恠き風起り、砂を走せ、石を飛せて天地を暗し、喊の聲起ると齊しく、豺狼虎豹等の恠獸毒虫、空中に現れ出で、直に宋江が陣を望んで飛來る。公孫勝馬上にあつて

しめ、兩人又彼酒店に回て、公孫勝に見ゆ。公孫勝深く李逵を埋怨て云く、汝何ゆゑかくのごとく遲滯せしや。李逵が云く、少しき緣故有しなりとて、則湯隆を引て、公孫勝に見えしめ、義兄弟の盟を結びし事共、委細に語りければ、公孫勝これを聞て奇特なる計ひと思ひけり。既にして三人の豪傑、酒店を出て、武岡鎭を離れ、直ちに高唐州を望て馳ける處に、戴宗はや此處に出て迎へしかば、公孫勝是を見て大に悅び、則戰の勝負を問けるに、戴宗答て、高廉今箭疵平復し、毎日出て戰を挑ども、宋長兄堅く陣を守りて出戰ず、只先生の至り給ふを待侘てなり。李逵又湯隆を引て、戴宗にまみえしめ、義を結びし次第を精しく告しかば、戴宗これを悅び、四人同じく路を急ぎける程に、已に高唐州の堺に至り、宋江が陣を望むこと、猶ト里計を隔ける處に、呂方、郭盛はや百餘騎を領して出迎へ、遂に延て陣中に至りしかば、宋江吳用これを接へて、各大に喜悅し、頓て酒宴を設けて、風霜の疲を慰めけり。此時李逵湯隆を引て宋江吳用幷に諸頭領にまみえしめ、其日は各飮酌を催しける。其翌日五更の時分已に軍の用意を相調へ、宋江、吳用、公孫勝轡を竝べて、陣前に馳出で、金鼓齊しく鳴させて、遂に城下に攻來る。高廉城中に在て、敵寄來ると聞き、急に衣甲を著して、城外に打て出で、三百の神兵を左右に從へて、早敵陣に對しければ、互に攻鼓を擂て、喊の聲を合せけり。時に

は、汝早く姓名を通じ我に知らせよ。彼漢子答て云く、某姓は湯、名は隆と號す、亡父はもと延安府に事へしかども、我は唯遊興を好で、家財を失ひしゆゑ、今落魄して此處に逗留し、かくの如く打鐵匠をなして、今日の過活とす、人皆某に諢名を施して、金錢豹子と稱ふ、知らず豪傑の貴姓大名はいかん。李逵が云く、我は是、梁山泊の頭領黒旋風李逵と云者なり。湯隆是を聞き大禮を行うて云けるは、長兄の大名を聞事雷の耳に轟がごとし、何の幸にや今日尊顔を拜し奉る。李逵が云く、賢弟此處に在とも、立身の期遠からん、しかじ我に從つて梁山泊に來らば、早速頭領となつて、福を保つべし。湯隆大に悅び云く、長兄もし某を山陣に携へ給はば、犬馬の勞を施すべしとて、則李逵と義を結んで、兄弟の盟を誓ひければ、李逵大に悅びけり。湯隆又いはく、我家には幸ひ眷屬あらざれば、早速長兄に隨ひて山陣に上るべけれども、暫く街に出でて三盃を傾け、今宵は曲て我家に一宿ありて、明日我を携へて山陣に回り給へ。李逵が云く、我一人の先生に同伴し、今前面の酒店にあつて待給ふなれば、今日急に回るべし。湯隆がいはく、長兄何ゆゑ斯く頻に急ぎ給ふや。李逵が云く、汝は未だこれを知まじ、宋公明今高唐州に發向して、高廉と戰ひ給ふ、此故に彼先生忙はしく馳て親方の陣に至り給ふ、汝いよ〳〵山陣に上らんとならば、早く家内を收拾て來れとて、頓て用意を調

のみ買うて、先生の用ひ給はん素食を賣ず、我今先生の爲に素食を求めて來らんとて、遂に酒店を立出で、街の上に馳來る。斯る處に一簇の人、街を取圍んで在けるが、只顧聲を揚て、無雙の勇力かな、と喝采ければ、李逵是を聞て、同じく立住り一覽するに、圍の内に一人の大漢子在て、三十餘斤の鐵鎚を使ひ、諸人に看せしむ。李逵片時是を見て、暗に冷笑ひ、忽ち圍の内に跳入り、大に呼り云けるは、汝いかんぞ傍若無人に鐵鎚を使うて、諸人に見せしむるや、我今不圖是を見て、想はず眼を汚しぬ、我慰の爲に使うて汝に見せしめん。彼大漢子打咲つて云く、汝は何者なれば、妄に我が鐵鎚を使んと云や、我肯て汝に鐵鎚を借ん、速に使うて見せしめよ、若これを使ふこと能ずんば、汝が面に三つの拳を與へんぞとて、則鐵鎚を取て李逵に借ければ、李逵これを取て、恰も筋を弄ぶが如く、輕々と一場使うて見せけるに、彼大漢子この體を見て大に驚き、忽ち地上に跪きて、李逵が姓名を問ひしかば、李逵答て云く、先汝が姓名はいかん、且汝が住所は何れに有や。彼漢子が云く、我が住所は則此前面にあり、先我家に來り給へとて、頓て李逵を引て回りける處に、李逵家内を見るに、多く鐵砧、鐵鎚、火爐、鉗、鑿等の道具ありしかば、李逵暗に想道く、此漢子は定めて打鎚匠なるべし、若彼を山陣に誘引せば、其用多からんに、我宜しく是を諫て同往せば可ならんとて、則問て云ける

つことあるべからずとて、頓て八つの字を授て云く、

逢レ幽而止 遇レ汴而還

と示し給ひければ、公孫勝これを拜誦し、則ち戴宗李逵と倶に三人、同じく羅眞人に拜し別れて麓に下り、又老母に巨細を語り聞け、別を告家を出で、三人齊しく高唐州を望て進發し、纔三四十里ばかり馳ける處、戴宗が云く、我は先に回り、宋長兄に斯と告知せんまゝ、公孫先生は李逵と共に大路を過て來り給へ、然らば我再び半途に出て相迎ふべし。公孫勝が云く、是尤も可なり。賢弟は彌速に馳歸つて、豫め宋長兄に斯と訴へ給へ、我が輩兩人は後より相續て來るべし。こゝに於て戴宗は遂に兩人に別れ、神行の法をなし、恰も飛がごとく急ぎけり。

○入雲龍法を闘はしめて高廉を破る

斯て公孫勝李逵は路を行こと已に三日にして、地名を武岡鎮と云處に至りぬるに、此街極て繁華にして、人煙しげく起のぼり、賣買又混雜せり。公孫勝これを見て、李逵とともに一軒の酒店の内に入て、酒を酌て歇みける處に、李逵公孫勝に對して云けるは、此店には都て牛肉猪肉

り。公孫勝が云く、我老師は常に黄巾の力士神一千餘人を使ひ給ふ、汝等閑に看ることなかれ。李逵これを聞て益感歎し、只顧眞人を拜しけり。戴宗又問ふ、汝羅眞人と童子を砍たる由、いつの間にかゝる働せしや、我一所に在てさらに知らず。李逵恐れ入て答けるは、前夜長兄熟睡の間に忍び出で、觀門に竊入り、羅眞人を砍殺したる實情を語て誤入ければ、公孫勝戴宗一つには其大膽を驚き、眞人の神通を恐懼しけるに、李逵も今更一圖に羅眞人の尊きこと肺腑に染て覺えけり。戴宗又眞人に告て云く、我が輩高唐州を出て已に久し、定めて宋公明危急ならん、老師速に公孫先生を放ち、某等と共に宋公明を救はしめ給へ、もし高唐州を破なば、早速公孫先生を當山に還し奉らん。羅眞人が云く、我もと公孫勝を許すまじけれ共、汝等が大義を感じ、我まげてこれを許すなり、彌義を全うし忠を成すべし。又公孫勝に對して、汝常に學びたる所の法術は、只高廉と等うして、彼に勝れたる所なし、我今汝に五雷天罡の正法を授けんとて、則これを傳受せしめ、又云く、汝此法に依て宜しく行ひ、宋公明が急難を救うて、國を保ち民を安んじ、天に替て道を行ふべし、必ず人の爲に惑されて本心を昧ましむることなかれ、汝が老母は我朝夕介抱せん上は、汝一點も憂ず、唯心を同じうし力を併せ、宋公明を助けよ、我又八つの字を儞に示さん、汝是を始終心中に記して忘れず、期に臨で自ら誤

眞人に告けるは、我師何の事有て愚弟を呼給ふや。羅眞人が云く、我前日汝等に命じ蘇州に撤しめたる彼李逵、今已に罪業滿ぬる間、汝再び蘇州に馳て彼を牢中より奪取て速に回るべし。力士神命を奉つて忽ち空中に飛上り、已に形を雲中に隱し、未だ半刻も過ざるに、又空中に現れて、李逵を鶴軒の前に墜しければ、戴宗忙しく李逵を扶起して羅眞人の前に出けるに、李逵は眞人を見て再三禮拜し、恭しく罪を謝し悔にけり。眞人が云く、汝自今以後宜しく性を戒め、力を竭し宋公明を扶よ、必ず惡心を起すことなかれ。李逵再拜して眞人の敎化を蒙りぬ。戴宗又李逵に問て云く、汝此數日はいづれの處にありしや。李逵答て云く、前日白雲に駕し、飄然として空中に在しが、忽ち兩人の力士神現れて左右に從ひ、猶一陣の猛風に吹放たれ、蘇州城の知府が家に落ぬるに、知府我を捕へて妖人ならんと拷問し、醒醍たる穢水を灌で、我が面上に澆ぎ、剰へ痛く數十杖策て、牢中へ入置ぬ、諸の牢子共我に問て、いかなる神ぞと云けるゆゑ、我答て、我は是羅眞人の弟子直日神將なり、少し過あるに依て、老師故意此地に撤て、苦しみを受しめ給ふ、二三日の内には又來て我を取復し給ふべし、汝等若我を饗應ずんば、我去牢の後仇をなすべきぞと赫しければ、牢子共大に恐れ、每日美酒佳肴を具て欵待けるに、先刻一人の力士神來て牢門を開き、我に命じ眼を閉さしめ、暫時の間に此處に携來れ

節婦等を害するの心なし、今梁山泊に上て、權らく朝廷に反くは、已ことを得ざるが故なり。羅眞人これを聞て大に悅び、戴宗を留むること已に五六日に至りし處に、戴宗は公孫勝にも語り合て、眞人と童子とを李逵が砍しとの事、并に其故に李逵を罰するとの詞さらに心得ず、李逵いつの間にかゝる大膽の働をなしたるを知らず。眞人に再應尋ね問て始て驚き入り、彼何の談合にも及ず、己が私の主意に任せて、かゝる事ありしやと恐れ入て、再三拜謝し、何とぞ李逵が一命を助け給へ、と哭しかば、羅眞人これを聞て、此事汝も公孫勝も知らざる所以は、我元來察知せり。但し彼ごとき狂徒を山陣に携て何の益ありや。戴宗が云く、彼尤も愚蠢にして禮法を曉さずといへ共、頗る取る所あり、第一直實にして人を掠ず、第二には人に諂はず、死すとも其忠を改めず、第三は淫慾邪心なく、財を貪り義を背くことなく、若事に遇ふときは、敢て勇て當先に進む、是によつて宋公明甚だ彼を愛す、若我李逵を救はずんば、再び宋長兄にまみえがたし。羅眞人笑て云く、我も已に彼は天罡星の數にして、今下界に降し所以を曉し在なり、我豈天に逆て此人を傷はんや、唯暫く彼に難を受しめ性を改めさせん爲なり、我少刻彼を取寄汝に還すべきぞ。戴宗是を聞て、深く眞人を拜謝す。眞人又聲を揚て、力士何れに在や、と呼りしかば、忽ち松鶴軒の前に一陣の風起り、其風過る處に一尊の力士神現れ出て

るよし白狀したりしかば、知府先節級に命じて、李逵を牢中に遣しけるに、李逵は此日より牢中に在て、小牢子等を赫して、我は實に羅眞人の弟子直日神將なり、汝等斯我を辱むるといへども、凡夫なれば後の災を知らず、我決して蘇州城の人民を害せんこと日久しかるまじ、其時必ず後悔する事あらん。小牢子等これを聞て、暗に想ひけるは、羅眞人は原來道德淸高たる活神仙なり、もし其弟子に詐なくば、是又神通廣大ならん、萬一術を以て牢中を脫れ出ることあらば、仇をなすも又大いならん、只宜しくこれを尊敬すべしとて、衆皆李逵に向て慇懃に問けるは、長兄はいよ〱羅眞人の弟子に僞なきや。李逵が云く、我何ぞ僞る處あらん、我不圖師命に違きしゆゑ、老師故意我を此處に撇て難苦を受しめ給ふ、若二三日を經なば、必ず來て我を取復し給ふべし、汝等多く酒食を與へて我に用ひしめば、我肯て汝等を免すべし、もし又輕く見て侮ることあらば、我去牢の後汝等が家に仇をなさん。小牢子共是を聞て大に怕れ、淨水の湯を浴せ、新衣を著せ、酒食を欵待こと豐かなり。扨羅眞人は李逵を蘇州に捨て難を蒙らしめたることを戴宗に語りければ、戴宗大に驚き、只顧哀み告げ、李逵を救ひ給はるべしと詫にけり。羅眞人其日より、戴宗を觀裡に留めて、山陣のことを問しかば、戴宗告て云く、晁宋兩頭領は原來義を重んじ、財を輕んじ、專ら只天に替て道を行ひ、毫髪も忠臣烈士義夫

一句の咒語を念ずれば、忽ち一陣の悪風起て、黒旋風を雲中に吹入し處に、忽然として兩人の黄巾力士神現れ出で、李逵が左右に隨つて空中を飛行す。李逵は只耳の裡に風雨の聲のみ聞て、直に蘇州の城中に至て、知府が家の瓦の上に落ければ、知府を始として、一家中の者これを見て、衆皆大に駭き稀有のことに思ひけり。下官共遂に李逵を捉へ、堦の下に引出しければ、知府馬士弘大に怒て云く、汝はいかなる妖人なれば、半天の裡より降けるや。李逵は此時瓦に撞て面を衝破りしかば、渾身血に染み只昏々と呆れたる計にて、更に聲をも做ざりけり。知府又云く、此者妖人に疑なし、妖法を破るには醒酲たる泥水を以て面上に澆ぐと聞及ぶ、速に是を行ふべしとて、左右に命じければ、下官共頓て二便の糞水などを汲で、李逵が面に澆し處に、李逵大に苦んで呼り云けるは、我は是妖人にあらず、乃羅眞人の弟子なり、必ず率爾のことをなし給ふな。時に一人の下官進み出て、知府に告て云く、羅眞人は是天下に有名の活神仙なり、若彼が弟子にてあるならば、刑罰を加へ給ふことなかれ。知府笑ていはく、我千卷の書を讀で、毎に古今のことを聞ぬれ共、神仙の弟子にかくのごとく兇相の者あることを見ず、彼必定妖人に紛あらずとて、早速下官等に命じて策けれは、下官共遂に李逵を扯倒して、散々に打けるに、忽ち皮開肉破れて、鮮血滾々と流れけり。李逵これに堪ずして、妖人な

羅真人が神通
李逵を空中へ曳上る図

人宜しく我に随て來れ、試に法を行うて見せしめんとて、則三人を延て觀外の大石の邊に至り、先紅き手帕を石の上に敷て公孫勝を坐せしめ、眞人自ら一句の咒語を念じけるに、手帕忽ち一片の紅雲と變じ、公孫勝を戴直に半空の裡に飛行ぬ。眞人又青き手帕を石の上に鋪て、戴宗を坐せしめ、再び一句の咒語を念じければ、又一片の青雲と變じ、戴宗を載半天に飛去ぬ。眞人又白き手帕を石の上に敷て、李逵を坐せしめ、再び一句の咒語を念じければ、忽ち一片の白雲と變じ、李逵を載同じく半空の裡に飛起りぬ。總て三片の雲、三個の人を載て空中に飛しかば、三人の者は夢中に在心地して、奇異の思ひをなす。良久しうして後、眞人右の手を擧げて招きしかば、先青紅の兩雲平々として穩に落けるに、戴宗は就中これを感歎し、深く眞人を拜謝しけり。李逵は尙空中に在て大に呼りけるは、いかんぞ我一人を空中に留め給ふや、同じく速に下し給へ。眞人天を仰で云けるは、我が輩は本出家の身なれば、曾て汝を犯したることなきに、汝は何ゆゑ昨夜暗に忍び入て我を砍けるや、我若道德なくば遂に汝に殺されん、況や我が一人の童子をも砍殺せり。李逵呼つて云く、某豈あへて斯る無禮をなさんや、恐らくは眞人自ら人差ひ有べし。眞人又笑うて云く、汝已に兩人を砍ぬるといへ共、實は我が二つの葫蘆を砍り、汝が心極て不善なる所あるゆゑ、我今汝に禍を蒙らしむとて、再び

ともに砍殺し、飛がごとく觀門の外に走り出で、二仙山を下り、再び公孫勝が後堂に入て歇けり。翌日公孫勝酒食を設けて、兩人を饗應し、今日又山に上て老師に哀み告げ、いかんともして許容を蒙らんとて、二人又山を望て上りしかば、李逵心中に冷笑ふといへども、只何も知らぬ體にもてなし、はや松鶴軒の内に入し處に、兩人の童子出て公孫勝を迎へしかば、公孫勝問て云く、老師は何れにましますや。兩童子答て、眞人は今雲床に坐し、清氣を養ひ居給ふ。李逵此言を聞て大に恠み、暗に舌を伸し覺ず、襲れ慄きけり。三人遂に雲床の前に至り跪きしかば、羅眞人問て云く、汝三人又來るは何の事ありや。戴宗謹で云く、願くは眞人一點の慈悲を垂給ひて、諸人の急難を救ひ給へ。羅眞人が云く、我先汝に問ん、彼大漢は誰なるぞ。戴宗答ていはく、是は某が義弟姓は李、名は逵と申者なり。羅眞人打笑て云く、我もと公孫勝を遣すまじと思ひしか共、其李逵とやらんが一片の善心を感じて、公孫勝を許すなり。李逵是を聞て、想道く、我が心汝を害せんと欲するを知て、かくは云ならんと察しけり。羅眞人又云く、我今汝三人を片時の間に、高唐州に至らしめば可ならんや。三人の者是を謝して云く、もしかくのごときことを得ば、莫大の幸ならん。戴宗又暗に想ふやう、羅眞人の法は定めて我が神行の法よりも大に勝りつらんと感じけり。羅眞人三つの手帕を取出して云けるは、汝三

新編水滸畫傳

東武　高井蘭山翁譯編

五編巻之四十六

○李逵斧をもつて羅眞人を劈る

黒旋風李逵は一己に主意して、羅眞人を殺さんがため、三更に忍び出で、眞人の居に近づき窺見るに、獨自ら雲床の上に坐し、卓に向ひ兩枝の燈燭を點じ、一爐の名香を炷て經を讀誦し、其他は專ら寂寥物音もなし。李逵心中に罵り、這賊眞人今宵絶命なりと冷笑ひ、遂に戸を推明て走り入り、二つの斧を揮て羅眞人を砍しかば、眞人は雲床の上より滾び落ち、白血流れて座上に滿々たり。李逵これを見て大に悦び、再び外面に跳出けり。眞人只白血のみ流れて、紅血聊も出ざるは、元陽の眞氣を養ひ得たる驗なり。かゝる處に又一人の童子出來て大に罵りけるは、汝兇賊いかんぞ我が師を殺せしぞや。李逵是を見て只一言も答ず、急に斧を揮て是をも

新編水滸畫傳 三 目錄

五 編

六 編

水滸畫傳

三